九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

フォンターネ著『嵐の前』翻訳

フォンターネ，テーオドール

恒吉，法海
九州大学大学院言語文化研究院 ： 名誉教授 ： ドイツ文学

https://hdl.handle.net/2324/4067383

出版情報：ジャン・パウル　研究書・翻訳書，pp.1-465，2020-09-18
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

嵐の前

一八一二年から一三年にかけての冬の長編小説

テーオドール・フォンターネ著

恒吉法海訳

目次

第一巻　ホーエン・フィーツ 5
第一章 聖夜 5
第二章　ホーエン・フィーツ 9
第三章　クリスマスの朝 15
第四章　ベルント・フォン・フィッツェヴィッツ 18
第五章　教会の中 23
第六章　暖炉で 28
第七章　居酒屋で 34
第八章　ホッペンマリーケン 39
第九章　村長クニーハーゼ 44
第十章　マリー 49
第十一章　ザイデントプフ牧師 53
第十二章　牧師館の訪問 56
第十三章　オーディンの馬車 60
第十四章　「飛ぶことが出来るものは、皆、高く飛べ」 64
第十五章　シュミット・フォン・ヴェルノイヒェン 68
第十六章　二人の会話 73
第十七章　レーヴィーン宛のトゥーバル 76

第二巻　グーゼ城 84
第一章　グーゼ城[推定 Gusow] 84
第二章　アメリー伯母 86
第三章　どんなでもいい友 91
第四章　正餐の前 99
第五章　正餐 103
第六章　ハンガリー・ワインの他にワインなし 108
第七章　正餐の後 110
第八章　自宅で 115
第九章　不実な寵児 119
第十章　キルヒ・ゲーリッツ 122
第十一章　ファウルシュティッヒ博士 126
第十二章　助けて 131
第十三章　執務室兼審理室 134
第十四章　何かが起こる 141
第十五章　捜査 147
第十六章　グリーンランド人カヤルナクについて 155
第十七章　大鴉の巣 166
第十八章　オテグラーヴェン 173

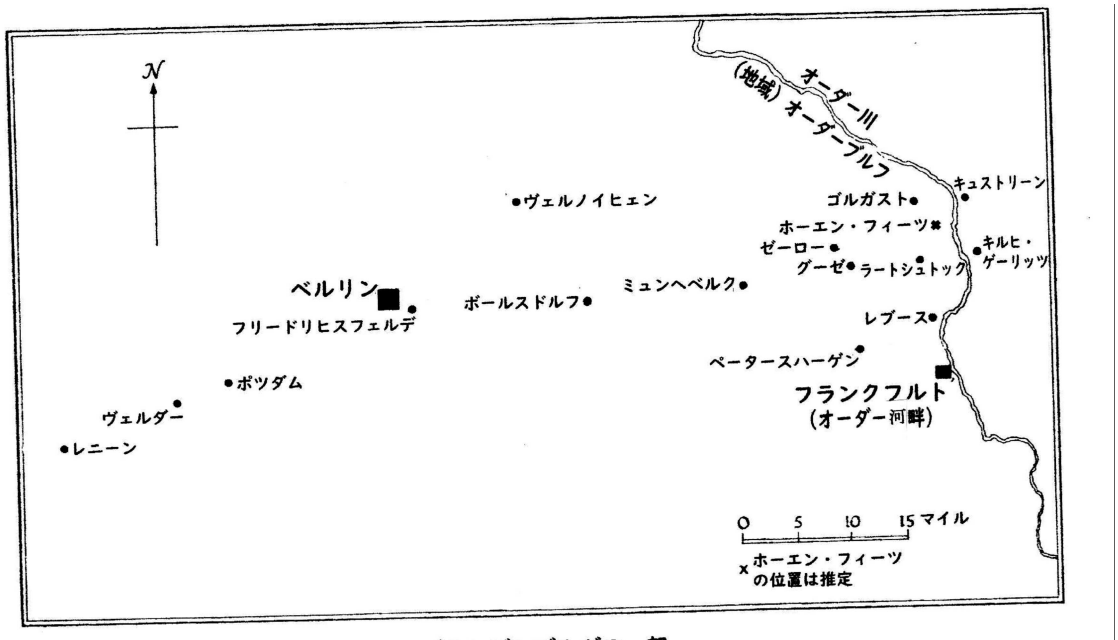
第十九章　グーゼの大晦日 177

第三巻　アルト・ベルリン 193
第一章　ヨハネ騎士修道会宮殿 193
第二章　ヴィントミューレンベルク［風車丘］で 198
第三章　フォン・ラダリンスキー枢密顧問官 206
第四章　フーレン夫人の許で 212
第五章　夜会と舞踏会 215
第六章　大学の講義 233
第七章　カスタリア誌 238
第八章　軽い曇 252
第九章　レーヴィーン宛のレナーテ 255
第十章　ユルガスの許での小昼 260
第十一章　ボロジノ 267
第十二章　二つの市門を通って 272
第十三章　一通の文と一通の手紙 278
第十四章　小さなサークル 283
第十五章　レニーン 289
第十六章　カティンカ 298
第十七章　ハンゼン・グレルの許で 302
第十八章　さらば 308

第四巻　再びホーエン・フィーツにて 313
第一章　ボールスドルフ［Bollersdorf より］ 313
第二章　ある出会い 318
第三章　「声を上げているのは、自然の声」 324
第四章　回復 328
第五章　遺言の規定 332
第六章　一人の逃亡兵 338
第七章　フーレン夫人の手紙 343
第八章　司令部ホーエン・フィーツ 346
第九章　高級副官 352
第十章　ヴェルメリンにて 359
第十一章　ホーエン・ツィエーザル 364
第十二章　白い女性 368
第十三章　フランクフルトへの計画 371
第十四章　幽閉 375
第十五章　偵察行 381
第十六章　誰に的中するか 389
第十七章　観兵式 393

第十八章　出発　399
第十九章　襲撃　402
第二十章　翌朝　411
第二十一章「それはしなくちゃならねえがね」　418
第二十二章　白頭台にて　421
第二十三章　救出　427
第二十四章　御頭ヨ、ヨウコソ　431
第二十五章　プラー近郊の時のように　436
第二十六章　二つの葬儀　442
第二十七章　「すると一人の王女が家にやって来て」　446
第二十八章　レナーテの日記から　451

解説　454
あとがき　465



ブランデンブルグの一部

図版は以下の図書の目次裏参照。恒吉泰行作成、法海が少し斜めにした。
Translated by R.J.Hollingdale:Theodor Fontane:Befor the Storm
A Novel of the Winter of 1812-13. Oxford Unversity Press. 1985

第一巻
ホーエン・フィーツ
第一章
聖夜

一八一二年のクリスマス、聖夜の時であった。個々の雪片が落ちて、白い雪景色に積もっていた。すでに首都の通りでは数日前から白くなっていた。長く張られた鎖に吊り下がっていたランタンはただ乏しい明かりを放っていた。しかし家々では刻々とより明るくなっていった。すでにここかしこで侵入し始めた「聖なるイエス」がその光輝を外の薄暗がりにも投げかけていた。

クロスター[修道院]通りでもそうであった。聖堂区教会の「歌時計」[パパゲーノ、恋人か女房がいればのメロディー]が始まって、丁度その歌の最初の拍子を演奏し始めたとき、一台の橇が旅館、緑樹亭から出て来て、すぐその後三階立ての家の斜め向かいに止まった。その家の高い屋根は更にマンサード[二重勾配]の住まいを有していた。橇の御者は、草臥れた、三つの襟の付いた外套を着ていたが、身を乗り出して、最上階の窓を見上げた。しかし何の物音もしないのに気付くと、御者席から降りて、馬を外して、家の方へ歩んで行き、半ば開いたままになったドアから家の小暗い廊下の中へ消えて行った。その後を付いて行った人がいたら、きっと階段を一段ずつ登る物音を耳にしたに相違なかった。彼は用心深く、また無器用に、三つの階段を登って、その物音を確かめていた。

橇は単純な造りで、所謂「幌」を張られた駕籠馬車が固定されていたが、その間ずっと静かに車道にあって、そこに積まれた雪の壁の開口部間近にあった。駕籠馬車そのものは多分もっと暖かさと快適さとを準備するために、背後の方にかけて、幌の天井に至るまで藁が詰められていた。前方に切り藁袋があって、丁度二人分の席の広さが十分にあった。すべては可能な限り原始的であった。馬どもも十分にさえないもので、小さなポニーで、今まさにその冬場の粗い毛並みで艶がなく、そのせいでかなり手入れされていないように見えた。しかしともかく、ロシア製の首革と、それに鈴の音、これは馬の背の赤く包まれた幅広の革のベルトの上に懸かっていて、この乗り物が立派な家のものであることに疑念を抱かせるものではなかった。

かくて五分か、それ以上過ぎたとき、廊下が明るくなった。白い夜の頭巾を被った一人の老夫人が明かりを手で守りながら、頭を通りに物珍しげに突き出した。それから旅行バッグと紙箱を持った御者が出て来た。その後を、掉尾を飾って、背の高い、若い男が、軽快な、上品な挙措で続いた。彼は鳥打ち帽を被って、短い上着を着て、その上半身全体冬らしくない服装であった。ただ両足だけは丈の高いフェルトの長靴の中にあった。「クリスマス、おめでとう、フーレン夫人」と言って、老夫人に手を差し出して、轅に乗って、御者の隣に腰掛けた。「クリスト、出発だ。真夜中にはホーエン・フィーツ[虚構、略図参照]に着くな。父上がポニーを送ったのは、結構なことだ」。

馬は引っ張って、その性情に従って、軽い跑歩で進もうとした。しかしようやくクリスマスの雑踏とがらがらの玩具の音をケーニヒ通りで背にしたとき、次第により早いテンポとなって、ランツベルク通り添って進み、そしてとうとうますます陽気になる鈴の音の下、フランクフルト門から出て行くことになった。

外では夜と静寂とに包まれた。天は澄んでいて、最初の星々が間近に見えた。微かな、しかし鋭い東風が雪原を渡って来た。我らの物語の主人公たるレーヴィーン・フォン・フィッツェヴィッツは、その父親の荘園ホーエン・フィーツに、そこでクリスマスの祭日を過ごすために向かっていたが、今やマルク地方の訛りを微かに交えて、隣に座っている同行者の方を向いた。「クリスト、どうかね。一緒に暖を取ろうか」。そう言いながら、彼は親指と人差し指とを顎に置いて、唇で[煙草の煙を]吹きだした。「一緒に」というのは単に親しげな言い回しであった。レーヴィーン自身は煙草を吸わなかった。しかしクリストは、彼らが町を背にした瞬間からこの要求を待っていたと見えて、遠慮なく綱を若い主人の手に置いて、外套のポケットの中を、まず、鉛の鋳造の短いパイプを探し出し、それから新しい包みの煙草を取り出した。彼はこの二つを膝の間に置いて、褐色のワニスで封印された包みを開けて、詰め、それから同じゆっくりとした丁寧さで鋼と火口用海綿とを探し始めた。ようやく火が点いた。彼は再び綱を取りながら、最初の喫煙を行い、今や小さな火花が蓋から飛び跳ねている間に、フリードリヒスフェルデ[平原]に進んで行った。そこの明かりが白い平野を越えて向かって来るように見えた。

村はやがて彼らの背後となった。その間に楽な姿勢を取って、若干の麦藁の束をよりしっかりと据えることで背もたれを作り出したレーヴィーンは、今や談話する気分になっているように見えた。御者のパイプに火が点かないうちは、いずれにせよ談話はふさわしくなかったことであろう。

「変わったことはないかい、クリスト」とレーヴィーンは始めた。そして一層しっかりと麦藁のクッションに押しかかった。「私が名親のヴィレムはどうしている」。

「有り難うございます、若旦那。また快方に向かっておりやす」。

「どうしたのかい」。

「魂消て倒れたんです。それも誕生日のことです。今から三週間前。今日で三週間になりやす。レブースのライスト先生[ドクトル]がまた元気にしてくだされた」。

「魂消て倒れたのか」。

「そうなんです、若旦那。皆そう信じておりやす。五時頃あっしの女房がこう言ったんです。ヴィレム、二，三個林檎を取って来て、豆の茎のすぐ近くの麦藁の中のレネット林檎よ。するとヴィレムが行って、口笛吹きながら、歌って、廊下の上を奴の木靴がカタカタするのを耳にしやした。しかしそれから何も聞こえねえ。そして奴が古いぐらぐらするドアを開けて、林檎の置かれている広い部屋に入って行ったとき、そこは老マティアスの幽霊が出ると皆に言われている所なんだが、そこで何かが起こったに違えねえ。戻って来やしねえ。奴が行った所にあっしが行って見ると、丁度敷居の所で伸びていた。舗石のように虫の息で」。

「可哀想に、それで女房殿は、..」。

「女房も来て、あっしらは奴をまた部屋の中へ運んで行き、さすりやした。あっしの女房はいつも小さなリューマチの気付け薬を家に用意しているんで。奴が気を取り戻すと、小さな全身が震えていて、何度もこう申すのです、あれが見えたのだ、と」。

レーヴィーンは背を伸ばした。「それではまた元気になったのだな」と言葉を投げかけて、御者の語りが彼の中に引き起こしたすべてのイメージや想念を振り解くかのようにあれこれ詮索して尋ねた。これに対して矢継ぎ早の問いかけであったが、クリストは十分丁

寧に答えた。村長のクニーハーゼの一頭の鹿毛の馬が亡くなったのであった。ホッペンマリーケンの家では煙突が燃えた。グレープシェン未亡人家では夜警人のパハリーが、ミルテの花冠[婚礼用]が置かれた中等大の棺が玄関の前に置かれているのを目撃していた。「中等大の棺だから、末の娘、ハンナ・グレープシェン用だと思われやした。まだ小さくて、ずっと嘆いています」。

星々はますます数多く浮かび上がって来た。レーヴィーンは鳥打ち帽を浮かせて、額に新鮮な冬の風を当てて、びっくりしながら敬虔に、瞬く空を見上げた。あたかも彼の家のすべての薄暗い運命、世襲のものが自分から抜け落ちるかのように、上方から彼の魂の中により澄んで明るく入り込むかのように思われた。彼は深呼吸をした。二，三台の橇が飛び過ぎて、挨拶を寄越し、歌いかけた。明らかに隣村でのプレゼントを蔑ろにしないようにしている客人であった。それから五分もしないうちに、我らの二人の友の乗り物はボールスドルフの居酒屋の表の切妻の下に滑って行った。

ボールスドルフは道のりの三分の一程の所であった。誰も出て来なかった。窓辺には明かりはなかった。居酒屋の人々は奥の部屋にいて、鈴の音がするにもかかわらず、橇の進入に気付かなかったのに相違なかった。クリストはそれをほとんど気にかけなかった。彼は降りて、刻んで中庭の柵の所に置いてある常備飼い葉桶の一つを取って来て、馬にその燕麦を与えた。

レーヴィーンも降りた。彼は数回雪の中を、また血を循環させるかのように踏み固めた。それから暖を取り、軽食を摂るために、居酒屋の中へ入って行った。中は一切空で、薄暗かった。カウンターの奥では、そこはもっと高いアルコーヴ[小室]に三段で通じていたが、明かりと金の鎖のクリスマス・ツリーが輝いていた。狭いドアの枠に収まっているこのクリスマスの絵の中では、居酒屋の女将が胴衣と赤いフリーズ[起毛した毛織物]のスカートを着て立っていて、木の明かりの方へ差し出した腕の上にブロンドの[赤ん坊の]頭があった。亭主本人は彼女の横に立っていて、人生とこの日が贈ってくれた幸せを見つめていた。

レーヴィーンはこの絵に感動した。この絵はほとんど一つの[幽]霊のように彼に作用した。入って来たときよりもこっそりと、彼はまた出て行き、村の通りへ出た。居酒屋の向かい側には、荒石壁に包まれて、ボールスドルフの教会が見えたが、最初の植民の日々からの古いシトー修道会[1098 年フランスで設立]の建物であった。オルガンが演奏されているかのような明瞭な音が向こうから響いて来た。レーヴィーンは、更に聞き耳を立てていると、同時に、小さな、半ば壁の高さに達する半円の窓の一つがぼんやりと照らし出されていることに気付いた。錯覚なのか否か、好奇心を抱いて、彼は低い石の壁を越えて行き、墓の間を教会の縦壁の方へ歩んで行った。かなりこの壁の中ほどで、彼は入口に気付いたが、それは単に掛けがねで止められていて、閉ざされていなかった。彼はこっそり開けて入った。彼が推測した通りであった。ビロードの帽子と乏しい白髪の老人がオルガンの前に座っていた、その横の明かりの残りがささやかな照明をなしていた。老人はオルガン演奏に没頭して、誰かが入って来たことに気付いていなかった。そして厳かな、しかし鈍い音色でクリスマスのメロディーが教会の中を変わらず響いていた。

この老人は明日の日のために練習しているのか、あるいはそれともここで自分のクリスマスの祝いをただ自分のために賛美歌とコラールで祝っているのか。レーヴィーンがこの疑念を抱いたか、抱かないうちに、彼はオルガンの向かい側に二番目の明かりの微光に気

付いた。祭壇の最下段の上に小さな家庭用ランタンがあった。彼がもっと近寄って見ると、女性の手がたった今まで働いていたに相違ないことが分かった。小箒があって、その隣に短い脚立があって、その上の両側の支柱は布で覆われていた。ランタンの明かりは、祭壇の前にタイルに嵌め込まれている二つの墓石に落ちていた。左手の墓石は単に名前と日付が記されていた。右手の墓石は像と銘文を示していた。二本の菩提樹[リンデン]がその枝を互いに寄せ合っていて、その下に詩が、十行あるいは十二行記されていた。ただ二節目の行のみがまだはっきりと分かり、次のようなものであった。

彼女は今や千もの明かりを目にする。
天使達の顔が
彼女に忠誠を誓っている。
彼女は黄金の天で、
勝利の旗を振る。
そして星空を歩いて行ける。[ベルリンのニコライ教会の墓石にある]。

レーヴィーンは二，三回読んで、その詩節を暗記してしまった。つまり最後の行が彼に深い印象を与えたのであった。何故かは分からなかったのであるが。それから今一度奇妙に照明された教会を見回した。教会の支柱や内陣席が彼に影を投げかけていた。そしてドアをまたこっそりと閉めかけて、まず墓地に戻り、それからすばやく壁を越えて、村の通りへ戻って来た。

居酒屋は、その間に変わった相貌を呈していた。客室には明かりがあった。クリストはカウンターに立っていて、亭主と熱心に会話していた。女将が台所から来ながら、一杯のチェリー酒のポンスをテーブルに置いた。彼らは更にしばらく向こうの寺男についておしゃべりした。この老人は男やもめになって以来、聖夜をオルガン演奏して過ごす習慣になっていた。それからクリスマスを祝い、握手と賀詞を述べながら、別れがなされた。そして静かな村の小屋を過ぎ行きながら、更に夜、向かって行った。

レーヴィーンは居酒屋の人々について話した。クリストは彼らを大いに称えた。ボールスドルフの行政官については余り語ろうとせず、ペータスハーゲンの粉屋については最も語りたがらなかった。その燃え落ちた台付き風車の側をたった今通り過ぎたのであった。明らかなことは、毎週この道を通るクリストは、ベルリンとホーエン・フィーツ間のビールの席でのおしゃべりを忠実に記憶していることであった。彼は何でも知っていて、レーヴィーンが静かになり始めて、ようやく黙った。ただポニーに短く語りかけて、更に進む間、活気があった。この呼びかけの規則的な繰り返しと、直に遠くから響いて来るように見える単調な鈴の音が、次第に眠りを誘う力となって我々の主人公の感覚の周りに積み重なった。勿論様々な形姿が彼の半ば閉ざされた目の傍らを過って行った。しかしこうした形姿の一つ、最も輝かしい形姿を、彼は自分の夢の中に引き連れて行った。彼は彼女の前、低い床几の上に座っていた。彼女は彼に笑いかけ、彼が接吻しようと彼女の手を取ろうとすると、微かに扇子で彼を叩いた。小さな鏡の中で互いに反映する百もの明かりが彼女の周りで燃えて、それらの前には大きな絨毯があって、その上ではヴィーナスの女神が鳩馬車に引かれて[ヴィーナスの象徴]、大気中を進んでいた。それから突然、あたかもこうし

た明かりはすべて消え失せたかのようになった。ただ二つの残りの明かりが燃えていた。あたかも影のうごめく教会のようであった。絨毯の置かれていた箇所には一つの墓石があって、こう書かれていた。

彼女は黄金の天で、
勝利の旗を振る。
そして星空を歩いて行ける。

すぐその前、目覚めた意識のとき、この言葉で感じたように甘美に痛々しく、今や夢の中でこの言葉が感じられた。彼は目覚めた。

「まだ半マイルほどです、若旦那」とクリストは言った。

「するとドルゲリーンに着くのか」。

「いえ、ホーエン・フィーツです」。

「それでは深く眠っていたな」。

「二時間半ほど」。

レーヴィーンが気付いた最初のことは、老御者がその間彼に示した配慮のことであった。餌袋が彼の両足の下に押し込まれていて、二人分の毛布が広げられて彼の膝の上にあった。

ほどなくして、ホーエン・フィーツの教会の塔が見えて来た。東の方へかけて風景を閉ざす高台の最上部に、灰色の塊が影のように瞬く夜空の中に立っていた。

この家の息子の心は、自分の故郷のこの目印を目にするたびに、ますます高く鼓動した。しかし今日は、この像の独自性を喜ぶ長い時間はなかった。雪の積もった公園の木々が彼と教会の間に見え、数分後には犬どもが吠えかかって、二本の門柱の間を橇はカーブを描いて進み、玄関らしいガラスのドアの前で止まった。そのドアまでは二段の広い砂岩を登るのであった。

すでに前もって身を起こしていたレーヴィーンは、外に飛び出て、階段の上を進んだ。「今晩は、若旦那」とゲートルと燕尾服の老従者が彼を出迎えた。単にその大きな輝かしいボタンのせいで、それがお仕着せと分かるものであった。

「今晩は、イエーツェ、元気かい」。

しかしこの挨拶からレーヴィーンは出られなかった。というのはその瞬間彼の前に堂々たるニューファウンドランド犬が起き上がって、前足を彼の肩にかけながら、嵐のような愛撫をして襲って来たからである。

「ヘクトー、おとなしくしろ。殺されてしまう」。そう言って我らの主人公は父の家のホールへ足を踏み入れた。暖炉で燃えている二，三の薪が向かいの壁の古い絵に明かりを投げかけていた。レーヴィーンは見回した。自分の父祖の土地に立っていることに、一片の喜ばしい誇りがないわけではなかった。

それから老従僕が重々しい二重脇道[中央階段と左右の階段]の階段を照らして案内し、ヘクトーが続いた。

第二章
ホーエン・フィーツ

ホールではまだ若干の火がくすぶっている。樅の球果を投げ入れて、暖炉に二，三の椅子を近寄せて、ホーエン・フィーツについて語ることにしよう。

ホーエン・フィーツは元来、古い、最後のアスカニア家[十二世紀に興り、マルク・ブランデンブルクの領主、1319 年まで続いた]の昔から由来する館で、塁壁と溝を備え、東のオーダー川への自由な眺望を有する。教会と同じ高台にあって、教会の影絵は先の章の末尾で我々が触れたものであり、館はその広い本流、並びにそれに劣らず、左岸のフランクフルトからキュストリーン[現ポーランド領、コストシン]へ至る通りを支配していた。館は頑強なものと見なされ､何世紀にもわたってレブース地区で次のように歌われていた。

その在所に頑強に座している、
ホーエン・フィーツの上のフィッツェヴィッツェとして。

ポンメルン人が二回攻めて来た。フス[Hus （1370 頃-1415)]教徒が迫って来て、焼き払い、燃やしながらレブースとバルニムに押し寄せて来たときは、教会の軍旗の聖なる乙女が城を守った。そして当時のフィッツェヴィッツが、その[洗礼]名については古文書が様々な説を述べているが、ギリシアの火の玉をフス教徒の陣営に投げ込むと、フス教徒は周りのすべての村々を荒らした後、退却した。ギリシアの火の玉の技法は、城主がロードス島から持参して来ていたもので、そこで城主は騎士達に混じって、トルコに対する二回の野戦[1522]に参加していたのであった。

それは一四三二年のことであった。より平穏な時代がやって来た。ホーエン・フィーツの名声は続き、それを新たに証する機会はなかった。ようやく三十年戦争[1618-48]が新たな、より厳しい試練をもたらした。

一六三一年三月二十九日、フス教徒の襲来以降ほぼ丁度二百年後に、ホーエン・フィーツの前にフランクフルトから皇帝軍の六個中隊が出現した。ホーエン・フィーツはその前日、城主のロッフス・フォン・フィッツェヴィッツの抗議にもかかわらず、シュテッティーンとガルツから押し寄せて来るスウェーデン人に占拠されていた。皇帝軍を率いていたマーラダス大佐は城の明け渡しを要求した。これが拒否されると、ブトラー[1634 年、ヴァレンシュタインを暗殺]、リヒテンシュタイン、マーラダスの各連隊の二個中隊から合成されていた皇帝軍は梯子を掛けて、城を襲い、剥き出しの壁を除いて城を焼き払い、スウェーデン人の占拠を潰滅させた。

一瞬ロッフス・フォン・フィッツェヴィッツは占領軍と運命を共にする危機に陥った。しかし彼の二人の半ば生長した息子達が、十七歳と十六歳であったろうが、その間に割り込み、機敏に働いて彼を助けた。マーラダス大佐はこの若者達が気に入って、皇帝軍に仕えるよう提案した。この提案は、より若いマティアスの側から、左程躊躇うことなく、また父親の異存もなく、受け入れられた。経験した災難について、これは戦争の経過と共に味方にも敵にも同様にもたらされるものであるが、長く詮索する時間はなかった。マティアスは騎兵旗手としてリヒテンシュタインの連隊に入った。一方年上のアンゼルムは、父親も許に留まり、城の再建の際、父親の手伝いをしたいと述べた。

しかしこの再建は遅延した。再建がようやく、敵軍が今や戦場を南ドイツに移して、軍

の退却後に始まることになったとき、打ち続く戦争の犠牲のために諸事情が劣化してしまい、城の建設に必要な資産の欠如に陥った。そこでロッフスは、ホーエン・フィーツの高台から、そこから彼の一族は三百年以上国を睥睨していたのであるが、下って、高台の麓に、こちらに延びてきているヴェンド族[スラブ系民族]の村の北端に簡素な領主の館を建てる決心をした。それは一六三四年のことであった。

アンゼルムはその際あらゆる方策で彼を助けた。そしてすでに復活祭後の第六日曜日に、建設を始めて十一ヵ月後、フィッツェヴィッツ家は新居住地に移ることができた。

それは長く、低く、高い屋根の木骨家屋であった。ドアの上に掛かっているバルコニーには次の銘が刻まれていた。

ここはフィッツェヴィッツ家、
古い館から転居、
神の祝福の下、
良く守られんことを。

そしてこの銘文は実現し、国中を覆ったあらゆる戦禍の中、この新たに築かれた居住地で新たな幸せが花咲くことはほぼ確かなことと思われていた。マティアスからは、リヒテンシュタインの連隊からティーフェンバッハの連隊へ移り、ネルトリンゲン近郊で傷を負い[1634 年、スウェーデン軍を破る]、半年後に、ようやく二十歳になって、皇帝軍の大尉へと昇進した旨知らせが届いた。この知らせは老ロッフスの心を、彼はスウェーデンを贔屓にしていたけれども、誇りと喜びとで満たした。アンゼルムは、根回しすることなく、宮廷へと惹かれていて、すでに百年以上前からすべてのフィッツェヴィッツ家の人々がその領主、選帝侯に奉仕している関係で、同じ親衛隊に入った。しかしとりわけ感謝と希望となったものは、二年の恵み多い収穫の年で、これは天がホーエン・フィーツの田畑に贈ったもので、真の立派な収穫と言えて、今やその実入りが基で、堂々たる、自らの住まいにまことに頼りとなる増築遂行のための資産となり得たのであった。この増築、唯一の二階席、紋章、鹿の角を備えたホールは、老ロッフスの心を再び奮い立たせた。彼は自分の家の代表義務という気高い観念を有していた。そして彼は昔の客人を招いていた時代を思い出した。彼が初めて近隣の貴族を、好んでそう名付けさせていた「饗宴のホール」でもてなしたとき、彼はこう確信して聴衆に語りかけたのであった。フィッツェヴィッツ家もまた「上がり調子」に移って、必ずしも「風圧にさらされて」終わりはしないであろう、と。「あらゆることを」とおおよそこのように結んだ、「自分の時代は経験した。戦争も戦禍も、しかしいつか、自分の愛しい友や近隣の人々がまた高台で自分の客人となって、自由に東の方を自分と共に眺める日がやって来ることだろう」。

皆が同意した。しかしかつて的中しない予言が発せられたとすれば、この言葉がそうであった。戦争がまたやって来た。戦争と共に饑餓とペストがやって来て、村々の富を破壊するか、村々そのものを破壊した。すべての共同所有地が砂漠と化した。ホーエン・フィーツの荘園職の半ばが空になった。その就任者が逃亡するか、死亡したからである。この悲惨の最中、より良き時代の微光が兆しもしないうちに、ロッフスは疲れた目を閉ざした。人々は彼を山上の祭壇の下の墓所に運んで、銅板の棺を、金箍と紋章の銘板を付け、銀製

の十字架を付着させて、先祖の並ぶ長い列の中に置いた。欠けるものは何もなかった。というのは、艱難の時代といえども、父親に埋葬の栄誉を簡素化するわけに行かなかったからである。長男はそう欲した。弟の方は、連隊と共にフランケン地方のザーレ河畔にあって、葬儀に参列できなかった。

今やアンゼルムがホーエン・フィーツの領主となった。

彼が最初の穀粒を単に劣等に耕された土地に蒔いたとき、楽しい心持ちではなかった。しかし見よ、苗は育って行く。味方や敵が、　ー　というのはその両者の間には長いこともはや違いはなかったのであるが、　ー　若い茎を潰してしまうことはない。戦争は、もはや燃やすものを見いだせない火のように、焼け尽くしたかのように見えた。十年経たないうちに、噂が口から口へと、つまり平和になったという噂が伝えられた。

実際平和になった。誰ももはや目で見ることを期待していなかった平和がやって来た。しかし、　ー　スウェーデン人や皇帝軍がレブース地区に野営して略奪することなく、二年が過ぎたとき、そして最も信じない者でさえ、自分の疑念を撤回せざるを得なくなったとき、一通の手紙がホーエン・フィーツの領主の館に届いた。その宛先はこうであった。「フィッツェヴィッツ家の高貴で厳格、頑強なアンゼルム宛、レブース地区のホーエン・フィーツの世襲領主殿」。しかし手紙そのものは次のようなものである。「我が格別に親愛なる兄上。今日より二週間後に、神の祝福が我が計画に与えられれば、私はホーエン・フィーツの兄上の許にいることだろう。ただ後、ウィーンからの許可を待っている。皇帝陛下はこのことを拒絶なさらぬことだろう。ひょっとしたら未来の時が我々をまた導いたら、幼年時代と青春時代のように一緒になるかもしれない。我々ルター教徒は、　ー　ミュンスターとオスナブルックでは人々が声高に宗教の和平を布告したけれども[1648 年 10 月 24 日、宗教和議]、　ー　皇帝軍の中ではほとんど好かれていない。我々はもはや必要ないという仄めかしの見られない日はない。我々の恵み深い選帝侯[Friedrich　Wilhelm (1620-88)、大選帝侯]殿は、この殿を我が封建領主、主人と見なすことを私は怠ったことはないけれども、ブランデンブルク軍を募集していると仄聞している。そのためにスウェーデン軍と皇帝軍からかなりの将校や将軍を募集しているそうだ。私もその列に並び、採用されれば、まことに嬉しい。自分の愛しい土地レブースにまた心引かれるものがあるのだ。我らの従兄弟にして隣人のブルクドルフ家は、シュヴァルツェンベルク伯爵[Graf von Schwarzenberg　(1584-1641)]亡き後は、宮廷ではアルファにしてオメガであり、ルターの教理問答同様によく軍務のことを承知しているこの老兵使用のために一役買おうとしている。しばらくさようなら。弟のマティアス・フォン・フィッツェヴィッツ、皇帝軍の大佐より」。

そしてマティアスは実際予定通りに来た。祝宴を催して、彼の滞在を祝うことになった。大きなホールでは三つのテーブルが用意された。二つは下の階で、ホールの縦の長さに平行して置かれた。三番目のテーブルは、紋章と軍旗で飾られた二階席に横に置かれていて、三段登る必要があった。バルニムとレブースからすべての友人が招待された。兄弟は互いに向かい合って座った。彼らの隣では、横のテーブルに、アーダムとベーテケ・プフーエル・フォン・ヤーンスフェルデ、ペーター・イーロー・フォン・リンゲンヴァルデ、バルタザル・ヴルフェン・フォン・テンペルベルク、ハンスとニコラウス・バルフス・フォン・ホーエン兼ニーダー・プレディコー、更に、タンメ・シュトランツ、アヒム・フォン・

クラハト、二人のシャペロー、二人のベールフェルデ、五人のフォン・ブルクスドルフが座った。彼らは皆、すべて信仰の点で、皇帝側[カトリック]というよりスウェーデン側[新教]であり、　ー　殊にペーター・イーローは、彼は、　ー　イーロー元帥の甥で、　ー

ウィーンの宮廷にある恨みを抱いていて、自分の叔父をエーガー城[ヴァレンシュタインと共に暗殺]で闇討ちで殺害したと、この[皇帝の]宮廷を告訴していた。彼は今日もその告訴を繰り返して、彼が客人のことを一時忘れていたのか、それとも忘れようと思っていたのか、それは分からない。

マティアス・フォン・フィッツェヴィッツは、自分の戦争の首領たる皇帝が、かくも挑発的に侮辱されるのを耳にすると、立ち上がって叫んだ。

「ペーター・イーロー、舌を慎め。私は皇帝軍の将校だ」。

「お主はそうだ」と今やアンゼルムがテーブル越しに叫んだ。彼の口からは酒[ワイン]が、もっとそれ以上にプロテスタントの心が話していた。「お主はそうだ。しかしそうでなかったらもっと結構なことであろうに」。

「結構であろうが、なかろうが、私はそうなのだ。皇帝の名誉は私の名誉だ」。

「名誉をたんと有するのは幸いなことだ。我々異国人は皇帝軍ではほとんど歓迎されない」。

マティアスは、自分自身の不満な手紙の言葉によって、かくも狭小なやり方で自分が打ち負かされ、捕らえられているのを知ると、これまで我慢してきた堪忍袋の緒が切れた。目が彼の額から突き出て、顎を剣の柄に乗せて、叫んだ。「そういうことを言う奴は、嘘つきだ」。

「それを否認する奴は、嘘つきだ」。

この瞬間両者は剣を抜いた。すぐ近くに座っている者達が飛び起きた。しかしそこに割り込むことができないうちに、弟の剣は兄の胸を突き刺した。アンゼルムは致命傷を負った。

マティアスは、起きたことに我を忘れて、選帝侯に出頭しようと欲した。しかし逃亡を勧める者達の意思に渋々従った。自分の駐屯の町、ボヘミアのグレーツに戻って、ウィーンへ出来事を報告した。それで打ち切りであった。軍事当局はその出来事をほとんど遺憾に思っていないことを彼に示すために、それは実際皇帝軍の名誉を守ることがその最初のきっかけであったのであるから、彼を将軍に昇進させて、彼にハンガリーの指揮権を与えた。しかしこの特赦を、彼は感謝して受けたけれども、しかし自分が渇望していた心の安寧は得られずに、彼は自分が野営していたペーターヴァルダイン[1687 年トルコから奪回]から選帝侯に手紙を書き、特赦を求めた。「すべての人間の救済と恩顧であらせられる」侯に対して。

選帝侯は揺れた。しかしペーター・イーローとベーテケ・プフーエル、エーレンライヒ・フォン・ブルクスドルフが、両兄弟は同時に抜いたと誓って証明を陳述したので、「あたかも事件はなかったかのような」一般的特赦となり、マティアスはホーエン・フィーツに戻って来た。そこはマーラダスが城を攻撃した日以来、ただ一度だけ、かの厄災に満ちた祝宴のとき帰った所であった。

彼は帰って来て、ホーエン・フィーツの人々が長く語り草にした「一大樽の黄金」を携えて来た。とういのは当時の慣習では褒賞と領地獲得は彼を豊かにしたからである。選帝

侯は彼を格別に受け入れ、慣習の形式を守りながら、没落した荘園の完全な所有を彼に認めた。その後直接新領主は城状の、幅広の階段と高い階の部屋を豊かに有するルネンサンス様式の建築に取りかかった。この建築物は、貧しい木骨家屋と平行に並んで、馬蹄形の建築群を形成した。そこでは「饗宴のホール」、つまり老ロッフスの度々言及された広間が結合して並んでいた。しかしこのホールそのものを、マティアス・フォン・フィッツェヴィッツは、ここで生じた出来事を考えて、一つの礼拝堂に変えた。祭壇の上には、内容が放蕩息子の物語[ルカ、15]から取られた一つの絵を掲げた。その隣には、兄を刺し殺した剣が掛けられた。彼は黄昏時にしかこの礼拝堂に入らなかった。彼は人々がそのことを知っていたり、それどころかそれを話題にすることを好まなかった。しかし古い木骨家屋の増築のタイルの廊下で仕事する者や、暇な折り聞き耳を立てる者は、彼の声高な祈りを耳にした。

彼の贖罪は生涯続いた。彼の生涯は高齢となった。晩年彼は結婚した。彼の領主の選帝侯が身罷った同じ年[1688]、彼もこの儚き世を去った。ホーエン・フィーツ家の人々は、家の十八歳の息子を先頭に、彼を昔の丘の教会にまで運んで、彼を墓所の父親の銅板の棺の隣に置いたが、アンゼルムが右側に、マティアスが左側に並ぶようにした。

彼は神が彼の贖罪を受け入れたと確信して亡くなった。彼の後を継いだ人々も、この信仰を一杯に抱いていた。しかしこの信仰は、確固とした人生の基盤を与えたけれども、しかし人生の陽気さをこの人々に二度と与えることはなかった。彼らは真面目に自分達の周りを見渡した。この特徴は伝播し始めた。昔は陽気に騒いだ家系の性格は、瞑想と熟慮に移り、祝典や酒宴への彼らの傾向は、自己修練と禁欲へと転換した。幾多の経過によって、幽霊や現実によって、彼らのこの傾向は助長され堅固なものとなった。礼拝堂へと造り直されたホールは、埃がたまり、朽ちて、夙にまた礼拝堂の性格を失い、家の奉公人達のための貯蔵室となっていたが、老マティアスがまた存命中と同様に動いて、自分が造った祭壇の前で跪いた。家の中でそのことを疑う者はいなかった。しかしたとえ個々人が幽霊を否認して、信仰故か不信仰故か、その出現を迷信によるものとして非難したとしても、しかし別の兆候がそれを承認していたろう。百五十年間この家系の跡継ぎは一人しかいなかった。この家系はそこに神の指を見ていた。二人の息子が再び武器を持って対峙してはならないのであった。

村の人々は、ほとんど断言する必要もないだろうが、こうしたこと一切を宝物のように大事にして、糸紡ぎ部屋では、老マティアスが見られたか否かという問ほど熱心に交わされるものはなかった。彼を目にしたというのは名誉にかかわることであった。人々は彼について冗談を言い、恐れた。百姓自身も彼らの小間使い達と変わらなかった。高台では、教会のすぐ隣に、古いぶなの木があったが、大人の半分ほどの丈の時、根が分割して、左右二本の幹となって生長した。これはホーエン・フィーツの人々に合っていて、両兄弟がまだ子供のとき、この木を一緒に植えたという伝説が広まった。しかしアンゼルムが弟の手で倒れたとき、この幹は分割したとされた。更に他の者達はこう言った。マティウスが下の礼拝堂で祈っていると、その後大きな胡桃の木の並木道を教会まで上がって来て、分割されたぶなの木の幹を取り囲み、一つにしようとしている。しかし無駄である。マティアスは木の幹の下で座っており、大声で悲嘆している、と。

しかしこの幽霊的なもの、戦慄的なものに迫ろうとするロマンチックな欲求がこの悲し

い絵物語で好んで語られたとしても、ホーエン・フィーツ家の人々の心の中では別の特徴もやはり決定的に、最終的和解を目指していて、老いも若きも、この和解の希望を語っている一つの韻の銘文を知っていた。領主の館でも十分に知られていて、その韻の銘文はこう言うものであった。

すると一人の王女が家にやって来て、
血痕は火事で消えてしまう、
二つに分かれた幹は、
また一つとなり、また一緒に育つ、
そして再び古い居住地から、
東[朝]をフィッツェヴィッツ家は望む。

第三章
クリスマスの朝

その間レーヴィーンの魂は、不穏な夢に見舞われていた。東風の中での進行が彼を高熱に追いやっていた。そして朝方ようやく彼は深い眠りに陥った。一時間後すでに家の中は活気付き始めた。レーヴィーンの部屋は北東の隅にあったが、そこの長い廊下では足音があちこち反響して、重い材木の籠が火の箇所に置かれ、大きな破片が外から暖炉の中へ押し込まれた。その後すぐにドアが開いて、昨夕自分の若君を迎え入れた老従僕が入って来た。手には壁ランプを有していた。ヘクトーは伏せたままで、獐鹿の毛皮の上に体を伸ばしていて、万事異常なしと、ただ報告したいかのように、尾を振った。イエーツェは、それまで自分の右手で炎を丁寧に守っていた明かりを笠の背後に置いて、散らばった衣装類をすべて自分の左腕にまとめ始めた。彼自身はまだ朝方の服であった。ビロードのズボンに、それなしには考えられないゲートルに加え、二重のドリル織りの作業上着を着ていた。彼はすべてをまとめると、入って来たときと同じようにこっそりと退出し始めたが、その際老人の癖で、聞き取れない言葉を思わずつぶやいていた。彼の頭部の同意するような会釈には、彼が満足して上機嫌であることが見てとれた。

ドアは半ば開いたままであった。家の目覚めて行く生活がますます警告を強めるような、しかしまたますます制御するかのような響きとなって、再び静かになった部屋の中へ侵入して来た。大きな破片の唐檜の材木がぱりっと言う音を立てて、飛び散り、時々湿った破片から小さく流れ出て火の中へ落ちる水がしゅっと言った。廊下の壁龕からは、イエーツェのブラシが離れようとしない芒[ノギ]や繊毛を始末しようとするときの規則正しい確実な擦り音が聞こえて来た。

こうしたものはすべて十分に聞こえていた。ただレーヴィーンはそれを耳にしなかった。ようやくヘクトーが、イエーツェと自分自身の我慢に終止符を打とうとして、起き上がって、両前脚を、ベッドの掛け布団に置いて睡眠者の額を舌で舐めて、自分の愛撫が歓迎されるか否かに頓着していなかった。レーヴィーンは目覚めた。最初の満足はより快活な高笑いとなった。「おとなしく、ヘクトー」、そう言って、彼はベッドから飛び降りた。朝の眠りで彼は新鮮な気分になった。数分で彼は着替えた。半ば兵士の教育を受けた長所で

ある。彼は二，三回部屋を横切って、四本の針でテーブルクロスに留められた一枚の紙を微笑して眺めた。そこには大きな文字でこう書かれていた。「ようこそホーエン・フィーツに」、そして目を、若い頃から知っている二，三の影絵の像に滑らせて、いつもと同じ喜びを感じて歓迎し、それから凍った隅の窓の一つに近寄った。彼の息で氷の花々が溶けて行った。一枚のレンズよりも大きくない小さな斑点が消えて、今や彼の最初の視線が丁度昇って来るクリスマスの太陽に止まった。太陽の赤い球はホーエン・フィーツの教会の塔の擬宝珠の背後にあった。彼とこの教会の間には、丘を登って行く公園の木々が聳えていて、幻想的に霜を帯び、個々の木に二，三羽の烏がいて、太陽の方を見て、鳴き声で一日を歓迎していた。

ドアがノックされたとき、まだその像を楽しんでいた。

「お入り」。

細身の娘の形姿が入って来た。そして衷心からの接吻で兄妹は両腕で抱き合った。兄妹であることは、一瞥して分かった。同じ体形と姿勢、同じ卵形の頭部、とりわけ同じ目、その目からは空想と分別と誠実さが語られていた。

「あなたとまたここで会えて嬉しい。クリスマスの間いるのでしょう。レーヴィーン、恰好良いわ。皆が私どもは似ていると言っている。得意になるわね」。

これまで観察するように兄の前に立っていた妹は、今や自分の腕を彼の腕の中へ入れ、両人が部屋の幅広い藁のござの上をあちこち動く間に、おしゃべりを続けた。

「レーヴィーン、今どんなに退屈か分からないでしょう。一週間前から家の中へは雪片しか飛んで来ないわ」。

「でも父上がいるだろう。...」

「いるのか、いないのか。いるともいないとも言えない。いずれにせよ、元の父ではないわ。些細な注意力がなくなっているの。父は私にもはや耳を傾けない。そうするときは、無理をして、微笑んでいるの。こうしたことすべては新聞のせいよ。勿論私も新聞を欠かしたくないけれども。ホッペンマリーケンが廊下に来て、郵便包みを彼女のキャラコの布から解くと、もう父の休息は消えてしまう。父は私を見ずに、通り過ぎて行くの。手紙が書かれて、馬はほとんどもう馬具から外されない。馬車や橇があちこち向かって。しばしば私どもは一日中置いてきぼり。ショルレンマー叔母さんがいるのは幸いだわ。そうでないと死ぬほど不安よ」。

「ショルレンマー叔母さんか。皆時分がある」。

「叔母さんは自分の時を見いだす必要はないの。いつも自分の時なのだから。あなたと私ほど良くこのことを承知している者はいない。でも勿論一つのことがこの良きショルレンマー叔母さんには欠けている。退屈な日をより退屈にしないということが。雪が降っていて、一冬の間、叔母さんと、叔母さんの格言を糸車の許で聞いていたいかどうか」。

「御免だね。しかし牧師はどこだ。マリーはどこにいる。すべては吹雪いて散ったのかい」。

「そうじゃない。皆いるわ。あの人達もやって来て、昔と変わらない。いつも通り、好ましい良い人達よ。でも私どものホーエン・フィーツの日々は、暦で最短の時が、長くて、最も長いわ。ちなみにマリーは今晩やって来る。そうしていいか問い合わせがあったの」。

「で我らの可愛い子はどうしている」。

「あなたがここにいない三ヵ月の間に立派に育ったわ。童話のようよ。明日黄金の馬車がクニーハーゼ家を通り掛かって、彼女を村長の家から二人の裾持ちの小姓と一緒に迎えに来るとしても、私は驚かない。でも彼女には不安になる。でも心配すればするほど、一層好きになるの」。

そんな風に兄妹がおしゃべりしている時、　ー　イエーツェが　ー　今や完全ならお仕着せを着て、　ー　ドアの所に現れて、二人の若い主君に時間であると知らせた。

「父上はどこだ」。

「プレゼントを組み立てています。クリストと私が運ばなければならなかったのです」。

「そしてショルレンマー叔母は」。

「玄関です。合唱の子供達が丁度やって来たところです」。

レーヴィーンとレナーテは互いに頷いて､それからより陽気な顔つきと軽快な足どりで、廊下へ、それぞれが相手を誇りに思って、出て行った。彼らが階段の踊り場に達した同じ瞬間に、クリスマスらしい明るい子供の声が上の彼らの許へ響いて来た。しかしそれは本来のクリスマスの歌ではなかった。それは昔からの「さて皆神に感謝し給え」［Martin Rinckart （1586-1649）］であって、マルク地方の喉には最も馴染みのものであり、その魂から最も自由に発せられるものである。「素敵だな」とレーヴィーンは言って、最初の節が終わるまで聞き入っていた。

兄妹が降りながら階段の最下段に達した時、彼らは今一度立ち止まって、足許の絵を眺めた。アーチ状の玄関のホールは、大きく広いもので、周囲にある樫の戸棚にもかかわらず、老いも若きも人々で一杯であった。数人の母親達が階段に蹲っていた。階段の最下段は広く廊下まで伸びていた。左手の公園のドア、庭園のドアの方に、子供達が、数人は晴着を着て、別な者達は間に合わせの服で立っていて、その背後には村の貧民が、病人や不具者も含めていた。しかし右手にはこの家に属する者達が皆配置されていた。猟師や、検査官、職長、クリストそれにイエーツェが、それに小間使い達が、大方は若く、可愛く、皆この地方の絵画的装いで、赤いフリーズのスカート、黒い絹のスカーフ、花柄のベルベットのジャケットを着用していた。この多彩な少女達の前線には一人の五十歳を超えた年輩のレディーが、白いスカーフと小さなチュールの帽子とグレーの服を纏って、両手を組み合わせ、頭を前に傾げて、子供の歌声に更に敬虔さを示して従っていた。ショルレンマー叔母であった。ただ兄妹が階段の下の段に現れると、彼女はその姿勢を崩し、レーヴィーンの挨拶に好意的会釈で答えた。

さて二番目の詩節も歌われ、村の貧民や子供達に対するクリスマスのプレゼントが、この家では古い昔から慣習であったように、始まった。誰も前に押し寄せなかった。誰もが自分の分が用意されていることを知っていた。病人達はスープを受け取って、不具者は喜捨を、皆が祝祭のケーキを受け取り、子供達には小間使い達が近寄って、林檎や胡桃を持参した袋やバッグに降り注いだ。

贈り物の振る舞いが終わると、大きな、玄関からホールに通ずる両開き戸が内側から開いて、明るい灯明の光が、それまではただ半分だけ照らされていた玄関に迫って来た。それが合図となって今や家の者達本人に贈り物がなされることになった。老フィッツェヴィッツがドアとクリスマス・ツリーの間から現れた。妹の腕を取って祭典の行列の先頭を歩むレーヴィーンを認めて、彼は呼びかけた。「ようこそ、レーヴィーン、ホーエン・フィ

ーツに」。父親と息子は懇ろに挨拶を交わした。それから兄妹はテーブルの周りの行進を続けた。一方の外の玄関では子供達がまた和していた。

神は、称えられ、名誉と称賛を受け給え。
父なる神とみ子と
それに聖なる精霊も、
高い天の王座で受け給え。[Rinckart による]。

行列は今や止み、各人が自分の場と自分のプレゼントに進み出た。すべてが気に入り、喜ばれた。ショールにチョッキに絹製の布であった。不満は見られなかった。額に失望は浮かんでいなかった。誰もが知っていた、困難な時代であったし、ホーエン・フィーツの殿方は、家の立派な慣習を艱難の時にも維持して行くためには、幾多の欠乏にも耐えなければならなかった、と。

暖炉の両側には、その暖炉の広い大理石のブラケットの上には老マティアスの等身大以上の像が聳えていたが、小さなテーブルの上に父親がレーヴィーンとレナーテのために選んだ贈り物が広がっていた。寵児の願いは叶えられていた。そもそも高望みしたものではなかった。レーヴィーンの場にはズール社の細工による旋条入りの二連銃があった。清潔で、軽快、堅牢なもので、通の者には喜ばしい物であった。

「それはおまえ用だ、レーヴィーン。我々は不思議な時代に生きている。さあ、一緒に、話すことにしよう」。

両人は隣にある部屋へ入った。ホールではクリスマスの明かりが燃え尽きていた。

第四章
ベルント・フォン・フィッツェヴィッツ

レーヴィーンの父親はベルント・フォン・フィッツェヴィッツで､五十代の末であった。十三歳のとき、ランツベルクに駐屯していたクノーベルスドルフ軽騎兵隊に入り、ほぼ三十年の勤務の後、この有名な連隊の指揮権を得ていたが、一七九五年春バーゼルの和平の締結で、退職する決意を固めることになった。パリの[ロベスピエールの]恐怖政治家達に対する嫌悪を大いに抱いて､「王弑逆者達との協約」にプロイセンの敗北同様の危険を見ていた。彼は不機嫌になってホーエン・フィーツに戻って来た。彼が少なくとも社交の場では、自分の軍事上の地位を無視して、単にフォン・フィッツェヴィッツの領主として語りかけられるのを好んだのは、ひょっとしたらこの不機嫌の表明であったかもしれない。荘園そのものはすでに七年早く彼のものとなっていた。ほぼマドレーヌ・フォン・デュムランとの結婚の直後で、彼女はデュムラン陸軍中将の長女で、この中将はツォルンドルフ近郊[1758]で、騎兵大尉フォン・ヴァーケニッツの中隊の最も若い将校として、奇蹟の勇敢さを見せ、ロシアの方陣を二回破った後、戦場で功労勲章[Pour le mérite]を得ていた。

マドレーヌ・フォン・デュムランは、古いフランス貴族の娘達がしばしばそうであるように、背の高い、細身の、ブロンド髪の典型的なドイツ美人で、彼女は夫の偶像であった。それでも彼女は彼を見上げていた。要求がましくなく、ほとんど気まぐれを見せずに、彼

女は彼の性格の卓越さの前にへりくだっていた。一人息子の誕生は、まだ連隊の駐屯の町でのことであったが、幸せを高めて、両者の目からは、ホーエン・フィーツを引き継いだすぐ後に娘が生まれた時よりも、更に大きな幸せが語られていた。それは一七九五年の五月で、春の雨が降っていて、神と人間との同盟の印である一つの虹が、約束一杯に古い家の上に懸かっていた。しかしこの約束は子供には妥当したかもしれないが、父親には妥当しなかった。彼の先祖の多くの者同様に、彼にも一つのこの上ない悲痛がもたらされた。彼には別様であったが、しかし劣らず手ひどく作用した。

イエナの戦い[一八〇六年十月十四日、ナポレオンの勝利]はプロイセンの運命を決定した。十一日後にはすでに知らせのあったフランス軍の将校達がホーエン・フィーツの領主の館の前に着いて、不穏なことにならぬよう、彼らの歓迎のために、高熱から治ったばかりの、まだ病気の青白さの残る家のレディーも姿を見せることになった。ホールで食事がなされた。フォン・フィッツェヴィッツ夫人は残って、ホストと客人達の間にほどほどの了解を作り出す自分の目的を達成するかに見えたとき、そのときすでにデザートが運ばれる間に、彼女の向かい側に座っているスペイン国境の中隊長が、オリーブ色の、薄い尖った髭の男であるが、起き上がって、とても不埒な忠誠の言葉を口走って、美しい夫人の血が両頬を染めることになった。ベルント・フォン・フィッツェヴィッツは、この詰まらぬ男に突進した。他の将校達が、その間に飛び込んで、互いに闘っている二人の男を引き離した。そして彼らは、侮辱された夫の味方をして、外の公園で場を設けて、取引が即刻なされることになった。ベルントは、剣の名手で、彼の敵の頭部にひどい傷を負わせた。フランス人達は、彼らに特有の騎士道精神を発揮して、彼を祝福し、少しの不機嫌も見せずに、彼の勝利とした。しかしそれは短い勝利であった。少なくとも高く購われることになる勝利であった。激しい、このような経過の場合、尾を引くことになる興奮のため、美しい夫人はまた病床に就くことになって、三日目に手の施しようがなくなり、九日目には人々は彼女を古い胡桃の木の並木道を、ホーエン・フィーツの教会まで運び上がることになって、彼女によって定められた規定をすべて守って、彼女を埋葬した。墓所ではなく、彼女がしばしば頼んでいた「神のマルク地方の大地」の中へ埋葬した。国では一日中鐘が鳴った。しかし春が来ると、一つの石が墓に注文された。それには名前も、日付もなく、ただ深くこう刻まれていた。「ここに私の幸せが眠る」。

ベルントの性格は、この打撃の下、真面目なものから完全に陰鬱なものに変わった。ぼろぼろになって、ほとんど諸国家の列から消された祖国の状況は彼を起き上がらせる力がなかった。彼自身の所有地は値が下がり、収穫は奪われ、農夫の畑は盗賊の手によって半ば焼け落ちた。　一　かくて年々日々、彼は深い憂愁の念を抱きながら、ほとんど絶え間なく襲って来る不安と不幸とが、彼の中で大きな憎悪を成熟させたとき、彼はようやくまた元気になった。彼は感動しやすくなり、活動的になった。彼には目標があった。彼はまた生き生きとしてきた。

この元気の源である憎悪は、ライン川の向こう側から来る一切のものに向けられた。しかし彼が権力者とフランス人国民とに対して感じたものには、一つの違いがあった。この後の方の国民に対しては、彼らの勇気と熱狂、犠牲精神とをしばしば大いに称えて、しばしばお手本と見なしていて、ほとんどすべてのマルク地方人同様に、衷心から、抑えきれない偏愛を抱いていた。こうした愛にもかかわらず、彼が強く、廉直に呈示した憎悪は、

直接的な感情というよりもむしろ意図的なもの、計算ずくのもので、次のような間断なく、勤勉に育てられた考察から生じていた、つまり、　ー　彼本人の言葉を借りると、　ー「すべての諸民族の中で最も忘恩の民族が立派な国王を殺して、自由を殺害した暴君の凱旋車の前につながれている」と。ボナパルト本人に対する彼の憎悪は全く別様であった。その憎悪は率直に無造作に彼の心から熱い源泉のように飛んで来た。すでに名前だけで彼は嫌がった。彼はフランス人ではない、イタリア人だ、コルシカ人だ、まだ血の復讐が慣習であり掟であるヨーロッパのかの唯一の地で育っている。彼が認めざるを得ないその偉大さでさえも、彼には驚くに値するものであっても、称賛するに値するものではなかった。一切の天上的光輝が欠けていたからである。彼は彼の中に悪霊を見た。それ以上ではなかった。一人のアッティラ、殺害者、西からやって来るジンギスカンであった。皇帝がキュストリーンを通過して、[ポーランドの]ヴィスワ川まで行くことが十一月半ば知らされると、ベルントは二人の半人前の子供達、　ー　レナーテは十一歳で、レーヴィーンは丁度十六歳であったが、　ー　古いオーダー要塞まで連れて行って、ミュンヘベルク門の側に立って、「神が嘉された者」を彼らに見せた。さてこの者がアーチ状の門の下を通って、静かな町へ入場し、その黄色の蠟の顔を不気味な光点のように馬の肩と深く額へ押し込んだ帽子の間に出現させたとき、彼は子供達を最前列に押し出して、子供達に分かるように呼びかけた。「よく見るのだ、これがこの世で最も邪悪な男だ」。

しかし憎むことを知っている者は、それが正当な憎しみでありさえすれば、この者は愛することも知っている。ベルントが何年間も早世した女性に対して彼の最高の現世の幸せとして心の中に抱いていた情熱的愛情、これを彼は今や子供達に向けた。子供達は母親の似姿として生長していた。ほっそりと伸びて、ブロンド髪で、透き通った肌で、どの点でも父親の外的姿から離れていた。父親のずんぐりした形姿は、黒ずんだ顔色と黒い、短く刈り込まれた、わずかな灰色の髪がようやく混じった髪でできていた。姿、形が異なるように、性格も異なっていた。軽快な動きで、信じやすく、いつも称賛し容赦する性向にあって、子供達は魂の快活な明かりを有していた。一方父親は陰鬱な炎を有していた。謙虚で、慰め多く、幸せにし、幸せである素質を有し、すべてを神々しくする空想が彼らの道を照らしていた。父親はこのことを喜んだ。彼は、子供達と共にこの家に生ずるであろう一つの変化を夢見ていた。

ベルント・フォン・フィッツェヴィッツは、何かに愛着する心を持つ者すべてがそうであるように、その素振りを見せなかった。彼は愛を羞恥していた。しかし粗野な外面を呈示することも、気に入らなかった。彼は権威を有していたので、その権威をいつでも主張することを断念して良かった。彼は会話の中で、年齢の差を飛び越えることを好んだ。禍を転じて福となし、自分達の感情世界、思考世界を二つの見出し、「親しい者達用」と子供達用とに分割する習慣のあるかの父親達、母親達を馬鹿にしていた。彼は、レーヴィーンに対し、率直で、好意的であったし、レナーテに対して面倒見が良かった。ただ最近の週は、妹が兄にすでにこぼしたように、一つの変化が生じていた。彼はすべての面会を避けた。ほとんど語らず、夜の半ば、近隣への訪問がないときには、自分の書斎机に座っているか、自らつぶやきながら、自分の仕事部屋である一つ窓の小部屋で歩き回っていた。

この仕事部屋は奥行きがあって、狭く、黄色の、煙草とランプの煙で夙に灰色になっていた壁は、そこに差し込むわずかな明かりの許では、実際よりも更に薄暗く見えた。贅沢

の痕跡はなかった。ただ快適さのみが求められていて、精神的に精力的な男性達の、かの一切を一掴みのために配慮されていた。この男達にとってはまず取り寄せたり、探したり、それどころか待つ必要のあるものほど耐え難いものはないのである。小部屋の両ドアは、その一つはホールへ、もう一つは夫人の部屋へ通じているものであるが、窓と隣り合わせにあって、そのため二面の広い壁の平面が、書斎机と革のソファーの配置に役立つことになった。その両方ともかなり大きいものであった。その間に置かれている庭椅子用の木の床几は、テーブル面が適度に湾曲していなかったならば、通行の妨げとなったかもしれない。書斎机の上には美しい女性の肖像画、胸像が、暗い色調で掛かっていた。ソファーの上には細く長い鏡があったが、その完全に煙で曇ったガラスはこの場での鏡の不要さを如実に示していた。鍵板、それに二，三の鹿の角、そこに掛けられたあらゆる帽子、縁なし帽が設備を満たしていた。隅には杖が色々あって、鴨猟銃、騎兵隊用剣が見られ、家の壁龕の羽目にはロシアの幾つかの特別地図があって、最も快適な具合になるように、封印紙と小さな釘とで打ち付けられていた。無数の赤い点や線は、手にしている新聞で、すでにスモレンスクとモスクワの間で何度も往復されたことが明瞭に示されていた。

これが、先の章の末尾で語られたように、父親と息子とが入って行った部屋であった。両人はソファーに腰掛けた。今や彼らを見下ろしている女性の肖像画と向かい合っていた。ベルントはいつもの家庭着を着ていた。広い、スコットランドの布地のズボン、濃いビロードの上着、それに首には軽く赤い絹のスカーフを巻いて、右足を高い床几風のクッションに置いていた。レーヴィーンは、尊敬の念と習慣から、背筋を伸ばして、彼の横に座っていた。

「さて、何があったか、レーヴィーン、ニュースは何か」。

「ひょっとしたら新しい知らせかもしれません。明日我々の新聞は、軍の敗北を認める知らせを載せましょう。ラダリンスキー家の人々はフランス語の知らせを持っていました。カティンカが主要な箇所を読んで聞かせました。私はびっくりしました」。

「私もそうだ。しかし私の志気はもっと高められた」。

「それではもう内容を知っているのですか。またしても先を越された」。

「アメリー伯母はもう新聞の切り抜きを昨日得ている。古い彼女の縁故を知っているだろう。昨日伯母の許に来たドロッセルシュタイン伯爵が私に直接知らせをもたらそうと申し出たのだ。一時間ばかり話したかな。ニュース[報知紙 29 号 1812 年 12 月 3 日付け、ナポレオンの敗北を認めた、パリで 12 月 16 日公表]の方は半分も知らせないと思うぞ。ミンスクとビアリストックからの手紙もある。彼らは全面敗北だ」。

「何という裁きでしょう」。

「そう、レーヴィーン、おまえの言う通りだ。ベルシャツァル[ダニエル書、5]の饗宴での偉大な手は、またその印を書かれたのだ。今回は謎の字ではない。誰でも読める。『数えられ、量られ、棄てられた』と。神の裁きが彼に劫罰を下したのだ。しかし案ずるに、我々の指導者は利口ぶって、怒れる神の腕の邪魔をしようとしているのではないか。そうしてはならない。そうしたら負けだ。指導者も我々も。　ー　雰囲気はどうだい」。

「いいです。あたかも皆の心に一つの変化が現れたかのようです。全体の感じが昂揚しています。まだ志操が低いところでは、その志操はまだ勇気がありません。欠けているのは一つだけです。指導する一つの意志、強い決意の言葉です」。

「その言葉は語られなければならない、かくかくしかじかと。人間が黙っていたら、石どもが叫び出す。神は、我々が神の印を理解することを欲している。レーヴィーンよ、我々は皆こちらでは決心している。こちらでは皆その言葉を待っている。その言葉が語られないときは、我々の中で響く甲高い言葉に従うのだ。雪の中では埋葬は易しい。ただ臆病な同情を抱かないことだ。多くがニエメン川を越えて来られまい。オーダー川は誰一人渡ってはならない」。

レーヴィーンはしばらく黙っていた。彼は父親の視線に合わせることを避けた。それから彼は半ば不意に語った。「私どもは皇帝の同盟者です[1812 年 2 月 24 日、プロイセンは二万の兵を約束した]。私どもは同盟を解こうとしています。神は認めましょうが、しかし、　ー」。

「それではおまえは我々の計画に反対か」。

「仕方ないのです。父上の計画していること、それに最良の千人もの者達が欲していることは、私の性分に反します。私は人々が今自負と称賛を持ってスペイン的戦争[ゲリラ戦]と呼んでいるものに対して賛同できません。背後から犠牲者を襲うことすべてが嫌いです。私は公然たる戦闘、明るい陽光の許、トランペットを吹きながらに賛成します。私が花の隣のベンチに座っていて、母が自分の父について語るとき、何度感動して泣いたか分かりません。その父は十八になるかならないうちに、ロシアの方陣に攻め入って、それからフォン・ヴァーケニッツ騎兵隊長が騎兵中隊の前で父に接吻し、こう呼びかけたのです。『フォン・デュムラン貴公子、剣を互いに交換しようではないか』と。そうです。私は戦争をしたい、しかしドイツ風に、スペイン風ではなく、スラブ風でもなく。父上、私は私の母の息子なのです」。

「そうだな。おまえがそうなのは幸いなことだ。おまえの母親の子供時代には明るい星々が見られた。私は、おまえの母の家の祝福がおまえとレナーテの上にあれかしと神に祈っている」。

レーヴィーンはまた黙った。しかしベルント・フォン・フィッツェヴィッツは続けた。「私は性情というものが何か承知している。神の掟に逆らわないすべての生まれつきのもの、生来のものは、私にとって神聖なものだ。レーヴィーン、おまえの道を行くがいい。何もおまえに強制しない。しかし私は、静かな夜、こう誓ったのだ。自分の道を行く、と」。

しばらく沈黙が続き、その間ベルントは狭い部屋の中をあちこち歩いた。それからレーヴィーンの守っている沈黙を気にかけず、彼は更に語った。

「おまえら町育ちは、　ー　レーヴィーン、おまえは町の子となった、　ー　おまえらは知らない。おまえらは本当に体験したことがないのだ。権力者達の目の下では、抑圧が節度の形を取り、不法が法的形式を取るものだ。それどころか権力者達はそれを自慢し、ほとんど自ら、我々の鎖を破ってやったと信じている。しかし我々田舎の者は、我々はもっと良く知っている。レーヴィーンよ、言っておくが、納屋に火を着けた赤い手、我々の死者の指から黄金の指輪を抜き取った赤い手[略奪兵]、それがここら辺りに忘れ難く実在する。その手にもっと赤い手が答えを与えることだろう」。

レーヴィーンは父親に答えようとした。しかし父親は、自分の演説の激しさを突然変えながら、感動を求めて続けた。「邪悪な敵が国に来たとき、おまえはまだ少年であった。奴の好意の光輝が漂っていた。奴が当時自分の幸運に思い上がって、我らの王妃[Königin

Luise（1776-1810）、1807 年 7 月 6 日ティルジットにて]に敢えて問うた言葉はこうだ。『どうして貴方らは、私に対して戦争を開始する勇気があったのです』。この問いかけはそれ以来国の千もの弱虫や情けない者達によって自らロまねされることになった。あたかもすべての英知のアルファでありオメガであるかのようにな。こうした我々の無気力の思いの中でおまえは生長した、おまえとレナーテは。おまえらは我々の卑小さしか見なかったし、我々に対する勝利者の偉大さしか耳にしなかった。しかしレーヴィーンよ、かつては別だったのだ。我々年寄りは、まだ偉大な王の目を見たことがあったし、今日我々が唇にしている屈辱の杯は苦い味がする」。

「きっとその杯は」と今やレーヴィーンは口を挿んだ、「我々から取り除かれましょう。私どもは喜ばしい、神聖な戦いをしましょう。しかしまず我々は我々の敵の味方なのです。彼と一緒に、彼の横で武器を取ったのです。彼は我々を当てにしていて、我々のドアの所によろよろとやって来ます。自分自身の家の敷居のように希望を抱いて。仄かに輝いているのが見える明かりは彼にとって救いであり、命です。まさにこの家の敷居の所で、彼を我々の手が掴み、無防備の者を絞め殺します」。

この瞬間、鐘が鳴り始めた。古いホーエン・フィーツの塔から教会へと呼びかけるものであった。鐘は澄んだ天候の中、音高く、一杯に響いた。ベルントは聞き入った。それから手でその音色が反響して来る東側を指して、自らこう続けた。「聖書にこう書かれていることは承知している。『復讐するは我[神]にあり』[申命記、32.35]と。人間的弱さの中で、この弱さは心の中を覗く者は承知しているが、いつも私はその言葉に従って来た。神聖な復讐があると私が発しても、邪悪なことを言っているとは案じない。サムソンが神殿の門柱を掴んで、自らとその敵とを瓦礫の下に埋めたときも[士師記、16,29]、そうだったのだ。ひょっとしたら我々の復讐も、敵味方共同埋葬に他ならないかもしれない。構わない。私は決めたのだ。私は自分の人生をそれに賭ける。それが許されるのはやれやれ有り難いことだ。この手は、私がこの手を上げるとき、個人的恨みを晴らすために上げるのではない。違う。私はすべての人類の邪悪な敵に上げるのだ。彼本人に出会えないから、私は彼の武器を見つけた所で打ち砕く。大いなる罪人は、多くの無実の者達を自らの厄災の中に引き入れるものだ。我々は篩いにかけ、選別できない。網は張られた。それに多く引っ掛かるだけ、一層結構なことだ。更にこれについては話すことにしよう、レーヴィーン。今は教会の時だ。神の言葉を逃してはならない。その言葉が必要だ」。

鐘が二度目の音を鳴らし始めたとき、二人は別れた。

第五章
教会の中

ベルント・フォン・フィッツェヴィッツがレナーテを腕に取って、雪の中掃き清められた歩道を大きな胡桃の木の並木道に曲がったとき、鐘の反響はまだ大気中にあった。並木道は微かな登りとなっていて、領主の館の入口から真っ直ぐな線となって丘の教会へ通じていた。先を歩んで行く二人に、レーヴィーンとショルレンマー叔母が続いた。皆が冬の服装をしていた。レディー達の手は雪のように白いグリーンランドのマフの中にあった。ただレーヴィーンはすべての毛皮製品を嫌っていて、大きな襟の付いた明るいグレーの外

套を着ていた。

彼らが歩んで行くと、何度か言及された丘の教会は、最初期のキリスト教徒の時代、シトー修道会士達の植民の日々からの古い荒石建築のものであった。それを物語っているのは清潔に切り取られた石や、内陣の壁龕、とりわけ小さな高い所にある半円アーチの窓であった、これらがこの教会に、マルク地方のすべてのゴシック以前の様式の教会がそうであるように城の性格を与えていた。数世紀経ってもその変化は余りなかった。若干の窓が拡大され、二，三の傍らの通路が聖職者と領主のために造られた。その他は、塔と新しい、北側の縦壁の墓所建造を除いて、一切が修道会士の時建てられたままであった。

教会の外面は不変化同様であったが、教会の内部では五百年のすべての変遷を経験していた。アスカニア家の人々がこちらでポンメルンの公爵達と規則的に繰り返し行った戦いの日々から、今日、つまり偉大な国王がまさにこの地、ツォルンドルフ[1758]とクーナスドルフ[1759]近郊でその殺戮の戦闘を行った今日に至るまで、ホーエン・フィーツの教会では、その内的現象で解体とか後押しがなされないような、あれこれのものが教会に与えられたり、教会から奪われたりすることがないような世紀は見られなかった。

同様なこと、ここに挿入されるようなことは、すべての古くからのマルク地方の村の教会の過半に妥当するもので、これらの教会はそのことで魅力と独自性とを得ている。これは殊に我々の国の世俗的建築物、月並みな建築物と対照をなしている。これらを眺めて見ると、すぐに気付くことだが、ある一群は確かに年月を経ているが、歴史を有さないし、別の一群は確かに歴史を有するが、年月を経ていない。ザルツヴェーデル城[Salzwedel、1134 年ブランデンブルク成立]は超古い、しかし語るものはない。サンスーシ宮殿「1747 年完成]は語るものはあるが、しかし成り上がり者のように若い。ただ我々の村の教会のみが我々に幾重にも我々の全歴史の担い手として語っている。そして諸世紀との接触をそれぞれ出現させながら、村の教会は歴史的持続性の魅力を有し、表明している。

ホーエン・フィーツの教会は三つの入口があった。最初の入口は西からの教区民のためのものであった。この入口が通じている塔は荒石から粗くモルタル合成されていた。古めかしい建築物に特徴の清潔さが欠けていた。屋根からは一本の網が降りていて、それで祈りの鐘が鳴らされた。壁の右手にはシャベルと一つの棺台があった。棺台にはリンネルの布が収まっていて、棺を下に降ろすものであった。向かいの壁には虫食いの木製人形が寄せ集められていた。カトリックの時代からの[1555 年には新教普及]彫刻祭壇の名残であった。その横には瘤の木が積まれていて、多分祭具室の暖房用であった。この控えの間の本来の見世物は、「トルコ鐘」で、その音色とサイズで有名なもので、これは、長いこと上の塔に吊されていて、オーダー川の上方、下方に響いて来たもので、今は割れて、その高みから降ろされていた。その鐘は、　一　少なくとも伝説によれば、　一　大砲から鋳造されたもので、この大砲はイーザシャール・フォン・フィッツェヴィッツ（老マティアスの息子）がトルコの戦いから故郷に持ち帰ったものであった。銘は縁にあった。その一つはこうである。

鳴ったら、耳を開け、
神に仕えるは慶事。

重い鉄の鐘の舌は隣の隅にあった。塔からは教会の中央通路に入った。敷居のすぐ傍らに花崗岩の洗礼盤があったが、台とか架を欠いていて、中が割れており、更にシトー修道会の時代からのものであった。更に左手の、塔と内陣とが出会う隅の方には、北側の縦壁に一つの壁龕が彫られていた。一本の鉄の棒にマリア像が掛かっていて（幼児イエスは腕から抜けていた)、その頭部にただ年号一四三一が記されていた。これはフス教徒達の年であった。疑いもなく、フィッツェヴィッツ家はこの奉納の祭壇を敵の退却後に創ったものであった。中央通路の左右には、教会の過半を越えて、教会席が並んでいた。すべて清潔で、閉ざされていた。最前列の扉のみが半ば開いていて、蝶番に掛かっていた。これは「少佐の椅子」と呼ばれていたが、クーナスドルフの会戦に直接続く日々以来そう呼ばれていた。この席まで、逃走と恐怖の中、イッツェンプリッツ連隊の歩兵達が彼らの傷付いた少佐を運んで来て、このベンチに降ろしたのであった。ここで少佐は起き上がって、包帯を解いた。「皆聞け、私は死ぬつもりだ」。ベンチはそれ以来血の斑点が付いていて、誰もがそこを避けた。

ホーエン・フィーツの教会の主要な飾りは墓石が形成していた。かつて墓石は祭壇から内陣の半ばまで置かれていた。しかし古いドームが埋まって、我々がすでに言及した新しい墓所が建造されると、墓石は垂直に教会の北の壁際に置かれた。大方は単純な石で、時代の慣習に合わせて、長い名や短い名が彫られていて、マルプラケ[の戦い 1709]やモルヴィッツ[の戦い 1741]について語っていたり、あるいは更にホーエン・フィーツで始まり、終わった、より静かな日々について語っていた。

これらの墓石の中の二つの墓石に伝説が絡んでいた。マリア像の壁龕の隣に一つあって、他の墓石より大きく、密に記されていた。その銘を読む者は、カタリーナ・フォン・ゴルミッツ、この家の女性の友で、かつてこの墓石の下に埋葬されていたことが分かった。この故人に格別の愛情を抱いていたグレーテ・フォン・フィッツェヴィッツは、彼女がホーエン・フィーツを訪問して病に倒れ、亡くなったとき、彼女に教会での名誉席を設けた。しかし墓の中のこの女性の友は、この顕彰を有り難いと思わず、家に憧れた。グレーテ・フィッツェヴィッツは墓石を越えて歩くたびに、一つの声を聞いた。「グレーテ、開けて」。とうとう彼女は開けて、棺をカタリーナ・フォン・ゴルミッツがその故郷とするヤルゲリーンへ運んだ。そこで静かになった。しかし人々は墓石を壁の中に埋め込んだ。

別な石は、その銘はとうに擦り切れていたが、まだ祭壇のすぐ近くにあった。その墓石は古い箇所に置いたままにしてある唯一のものであった。ひょっとしたら砕けていたからかもしれない。その墓石は隣にあるタイルと同じ高さになることを頑強に拒んだ。次第に盆の窪みを作った。二つ目の半分が取り上げられて、砂や岩屑がその窪みに投入され固められても、石はいつもまた沈んだ。人々は言った。「老マティアスがいるのだ。彼がますます深く沈む」と。

さて勿論これは間違いで、老マティアスは別の箇所に横たわっていた。しかし多分大きな墓石のモニュメントが彼にはふさわしくて、これは技法的面から見て、ホーエン・フィーツの教会の主要な飾りとなっていた。それは大理石の記念碑で、装飾過多、ロココ調で、それでも偉大な細工の巨匠性を見せていた。対象に従って、それはホールの建物の祭壇画とのある種の親近性を示していた。マティアス・フォン・フィッツェヴィッツとその妻が跪いて、深い敬神の許、十字架のキリストを見上げていた。すべては薄肉浮彫であったが、

ただ跪いている二人だけがほとんど独立した像となっていた。その下に二人の名前とその生誕と命日の日付があった。一人のネーデルランドの大家がその作品を仕上げて、自ら船でオーダー川まで運び上げたものであった。

領主の家族が教会に入ったとき、まさに教区民の歌が始まった。小さな脇の入口の一つに通じている狭い階段が、領主家の席に導いていた。この、支柱の上にある、とても簡素の木造の席は、元来高い上げ下げ窓で閉じられていたものであったが、夙にこれらは取り除かれていた。そしてただわずか二枚の細い板が、手すりから上の天井の高さに至るまで張られて、席を大きな三つの枠に分割していた。前方の仕切りはフィッツェヴィッツ家の紋章が付けられていた。赤い地に白い聖アンドレアスの十字架[X形]であった。

この領主席の前面に、手すりのすぐ側、入場して来た者達は物音を立てずに、着席した。まずベルント・フォン・フィッツェヴィッツ、彼の左手にレナーテ、　それからショルレンマー叔母。レーヴィーンは二番目の列に椅子を置いた。一切はとても等閑にされた風であったが、それでもある種の魅力が見られた。すぐ右手に祭壇と説教壇があった。祭壇の前面には洗礼盤があって、銀製の、アレゴリー風の像と、読みがたい銘文が豊かに飾られてある盤で、ただ大いに難儀して敵の手から救い出されたものであった。向かいの壁には老マティアスと彼の妻の、先に言及された大理石の記念碑があった。しかしこのさえない箇所で特有の最良のものは、大きな、ほとんど半円を形成する窓であって、これは墓地と、更に丘を下って個々に点在する、前哨のように配置された村の小屋や家々を一望できるものであった。この窓の隣、教会の壁のすぐ側に、水松[いちい]の木があって、これは側面からその小枝の最も長い枝を伸ばしており、牧師のザイデントプフがその三段に分かれた説教をホーエン・フィーツの者達の心に届ける時、規則的に窓に当たっていた。レーヴィーンはいつも、窓を自由に眺められるように腰掛けた。彼は多分ルターの教理問答を固く信じていた、この純化された教義が国中に広まって以来[一六世紀半ば]、すべてのフィッツェヴィッツ家の者達がそうであったように。しかしそれでも彼の中にはある別のものが見られ、このため彼は時々、説教壇からの声よりももっと外の水松に注意を向けるようになっていた。たとえこの声が、日曜日ごとの教化を義務とする彼の昔からの師にして友の牧師よりも力強いものであったとしても。

太陽は明るく輝いていた。さっと差し込む斜光線が突然明るくなって北の壁を半ば、とりわけ領主の内陣席の向かい側の大きな墓の記念碑を照らし出した。等身大の像に薔薇色の生命が吹き込まれたかのようになった。レーヴィーンはこの彫像作品の美しさをこれまでこれほど完全に感じたことはなかった。彼の告白によれば、彼はこの長い銘文を初めて読んだ。

歌声は止んだ。すでに最後の詩行の間に説教師のザイデントプフは説教壇に歩み寄っていた。六十代の男で、乏しい白髪、威厳のある姿勢とその面影の表情の穏やかさを有していた。レーヴィーンはその慈悲深い姿に目を注ぎ、それから視線を落として、敬虔な思いの中、静かな祈りに従った。教区民も同じことをした。姿勢を傾け、この聖職者が祈りを終え、また自ら頭を上げたとき、衷心からの思いを込めて、彼らの聖職者を見上げた。というのは当時人々の心は説教壇からの慰謝や要求に率直であったからで、それらの言葉が単にプロイセンの心から生ずる限り、ルター主義的に響こうが、カルヴィン主義的に響こうが頓着しなかったからである。これはザイデントプフが承知していた。彼は通常の時代、

自分の村の頑固な教会外信仰者達の幾多の敵対者達を克服して行かなければならなかったのであり、彼にその内的喜びを与えていた明るい光輝が、福音書を読み上げた後、そのテキストの言葉を説明し始めたとき、彼の額を照らし出した。彼は羊飼い達に新しい癒しの生誕を告げるために羊飼い達の許に出現する主の天使[ルカ、2,8-14]について語った。彼は続けた、このような天使達を神はいつでも、とりわけ悲哀の夜が民の上に降りかかるとき、遣わされる、と。しかしそのことを考えないうちにも、我々の不安の最中、天使は出現して、こう我々に呼びかけることだろう、「案ずるなかれ、見よ、私は汝らに大きな喜びを告げる」と。というのは主の裁きは我々の敵に当たったからであり、かつて洪水が合流して、「馬車や騎乗者やファラオのすべての威力を制圧して、彼らの中の誰一人残らなかった」[出エジプト記、14,28]ようなものである、今度もそのようなことになろう、と。

この箇所で、クリスマスの福音に手短に戻りながら、牧師ザイデントプフは結ぶべきであったろう。しかし正しい説教は正しい長さでもなければならないという考えの重圧の下、今や彼は昔のファラオと新しいファラオの比較を微細な特徴に至るまで敢行し始めた。そしてこの課題が彼には難しかった。そのためには彼には空想の飛躍、表現と性格の力強さが欠けていた。エジプトの部隊が図式的に過ぎ去った。教区民の注意は空の傾聴となった。それまで一言も聞き漏らさなかったレーヴィーンは、説教壇から視線を外して、注意を窓に向け始めた。窓の前では今やヨーロッパコマドリが雪の積もった水松の上に止まっていて、軽く揺すって、木の枝を動かせた。

ただベルントだけが新鮮に喜んで、自分の牧師の演説に従っていた。彼自身のエネルギーが補って手助けした。輪郭が十分でないところでは、不確かに揺れる線に自らの鋭い線を引いた。影のように見えたものが、生命となり形姿となった。彼はエジプト人を見た。黄金の鷲の大隊、騎兵中隊、その中隊の白い外套には黒いふさふさした馬の尾が垂れていた。かくて彼らは果てもなく長い列となって彼の前を昇って行き、すべての荘厳さを締め括って海の波があった。ただ一人の者を波は呑み込めず、この者は岸辺に達した。北方の氷の岸であった。すると見よ、きらきらする平原の上を今や一台の橇が飛んで来た、二つの暗い、深く窪んだ目が、飛沫を上げる雪の中を見入った[ナポレオン]。ザイデントプフ牧師は彼の教会のパトロンよりも立派な聞き手を有していなかった。パトロンは、　ー　単に今日のことだけではなく、　ー　補完という好意的技法を発揮する術を心得ていた。スケッチから彼は一つの像を造り、それでもこの像は外部から、彼の友人の手から受け取ったと彼は信じていた。

さて砂は時計の中を経過して行き、説教は自ら終わった。そこで牧師は今一度説教壇の端に歩み寄って、皆の心が早速また聞き入った、切迫した声で始めた。「我々が今日祝うキリストの誕生と共に、キリスト教の新しい年が始まります。新しい年です。この年は何をもたらすことでしょう。それを知ろうとすることは愚かなことでしょう。しかし希望することは我々の心に許されています。神は一つの印を与えられました。神は我々をまた起き上がらせようと欲しておられるとそれを解釈して、正しく解釈するならば、我々の贖罪は受け入れられたことになりましょう。我々の祈りは聞き入れられたのです。神の意志で六年間我々の上にあった鞭、神はそれを破棄された。神は我々の隷属を憐れまれた。そして我々を照らしてくれるクリスマスの太陽、それが我々に、また明るい日々が我々を待っていると告げようとしています。棕櫚の葉[勝利・平和の象徴]と共にそれらの日々が来る

か、それとも剣の響きと共に来るか、誰がそれを言えましょう。勝利は財産と血の最後の犠牲なしにはもたらされないという一つの不安が我々の希望には混じっているかもしれません。それで、友の方々、祈ることにしましょう。そして神が我々に決意の時、正しい力を与えて下さるように、今一度主の恵みを呼びかけることにしましょう。マカベアのユダ[紀元前一六七年以降反乱]の言葉を我々の言葉としましょう。つまり『断じて敵に後ろを見せてはならない。死ぬべき時が来たなら、同胞のために潔く死のうではないか。我々の栄光に汚点を残すようなことはしたくない』[マカバイ記一、9,10]と。神は世界支配の民を欲していません。神は天に聳えるバベルの塔を望みません。我々は我々自身のために味方するとき、神の永遠の秩序に味方します。我々の竈、我々の国は、神の意志に従って、聖なるものです。我々が死に至るまで忠実であれば、神の忠実さに見放されることはないでしょう。その時が至れば、行動しましょう。しかしそれまでは辛抱です」。

彼は今や、静かに主の祈りを捧げるために、背を屈めた。オルガンが荘重な音を始めた。教区民は、結びの言葉で明らかに啓発されて、ゆっくりと教会を去った。教会から村へ下って行く様々な九十九折りの道で、百姓や半百姓は、半ば雪で覆われた農家に向かって行った。女達や娘達が続いた。村の通りからこの下って行く様を見守っていた者には一つの優美な像が見られたことだろう。雪とヴェント族の衣装とその上のきらきらとした太陽である。

領主の一家は再び胡桃の木の並木道を通って行った。彼らが、曲がって、屋敷の門に来たとき、クリストが最下段の石段に立っていて、帽子を取った。その銀製の縁は夙に黒ずんでいた。記章は曲がっていた。ベルントはこの御者に気付くと、御者に歩み寄って手短に言った。

「五時出発。小さな馬車だ」。

「栗毛の馬ですか、旦那様」。

「いや、ポニーだ」。

「畏まりました」。こう言って我々の友の者達は家の中へ戻った。

第六章
暖炉で

丁度五時にクリストは馬車を寄せて来た。ベルントは待つのが嫌いであった。子供達から彼は手短な別れを取って、グーゼ城の彼の姉、あるいはホーエン・フィーツの家で呼ばれているように「アメリー伯母」に近隣の者の訪問をした。彼が今晩にも戻って来るかどうかは想定されていなかった。彼はむしろ、この短い外出から首都への旅をするかもしれないと仄めかしていた。彼の情緒が落ち着かず、外への衝動があった。数年前からクリスマスの[プレゼントの]組立を、彼は今日も放棄しようとはしなかったが、しかし暇になると、義務を終えた気分になって、彼の思考は昔からの方向を取った。行動への衝動、あるいは世の営みへの一瞥の気持ちであった。家の狭小さの中では飽き足らない欲求であった。会話の時には、このことをレーヴィーンはテーブルの許で感じ取っていたが、彼は取り繕っていた。そしてこのことを感じ取って、子供達の会話からは、すべての自由な動きが欠けてしまった。ある種の囚われが席を占めていた。そんなわけで、父親が不在となると、

父親に対するごく率直な愛情にもかかわらず、ほとんど解放のような感情に襲われた。心と舌とが、思いのままに発露された。ちなみに我々のホーエン・フィーツの兄妹が、国の他の兄妹よりも卑小な風に、あるいは自己中心的に感じてはいなかったということは、まず保証する必要もほとんどないことであろう。ただ彼らは「人間の中の最も邪悪な者」について再三話すよう強制されたくなかった。あたかもこの人物よりも世に語るに値するものはないかのように。

彼らはショルレンマー叔母と一緒に居間にいて、今や七時になったろうか、高い古風な暖炉の周りに座っていた。彼らと一緒にマリーがいた。レナーテの友の女性で、豊かなクニーハーゼ家の黒目の娘で、今晩の訪問は予告されていた。三人のレディーの各人はそれぞれに仕事をしていた。レナーテは、暖炉に最も間近に座って、棕櫚の扇を右手に持って、火を扇いだり、それで火から守ろうとしたりしていた。ショルレンマー叔母は四本の大きな木製の針でショールを編んでいた。それは羊の原毛のように彼女の安楽椅子の横に下がっていた。マリーは、ショルレンマー叔母がクリスマスの聖夜に彼女にプレゼントしたグリーンランドの旅行記を興味深げにめくっていた。その旅行記はツィンツェンドルフ[Graf von Zinzendorf（1700-60）、ヘルンフート派の宗祖]からの献呈の詩が飾られていた。マリーとレーヴィーンの間には、隔壁というわけでは勿論なかったが、クリスマス・ツリーがあって、これはイエーツェがホールから運んで来たものであった。もぎ取ること、これはレーヴィーンの役目で、これが始まったばかりであった。彼がもぎ取る黄金の胡桃の一つ一つを大きな弧を描いて、木の先端を越えて投げ、その向かい側にマリーがいて上手に手を動かしてそれを掴んでいた。投げる方も掴まえる方もどちらも同じように巧みであった。

レーヴィーンはこの遊びを楽しんでいた。その上彼は昔から、クリスマス・ツリーの甘いものに面と向かい合うと、この上なく上機嫌になるのであった。普通彼は甘いものに手を出さなかった。しかし[胡椒入り菓子の]騎士、尼僧、魚となると目がなくなって、繰り返しこう誓って言うのであった。「平たく押し潰された胡椒入り菓子の像には天上的マナ[神与の食物]の滴りが相変わらず感じられる」と。

レーヴィーンの上機嫌はやがて巫山戯にまで高まって、殊の外ショルレンマー叔母の気に入らなくなった。「安息日を心に努め、これを聖別せよ」[十戒]と彼は彼女に呼びかけて、その際、四本の木製の編み針を指し示した。編み針は当然のように、こうした冗談の非難の後、一層熱心に音立てて動き始めた。とうとう彼女は我慢ならなくなった。彼女は顔色を変えて、手短にこう言って止めた。「グリーンランドの人々が待ち兼ねているのよ」。

さて我々は我々の物語の長い経過の中で、「ショルレンマー叔母」というタイトルの下での伝記的スケッチを供する隙間を有する終止符を見いだすことができなかったので、ここでこの立派なレディーのために我々の義務を果たす瞬間が来たと見なすことにしよう。ショルレンマー叔母はこの本の中で副次的人物ではないからで、我々は彼女に、玄関や教会でちらと目にした後、すでにこの箇所で三回目に出会っているわけであるから、一体ショルレンマー叔母とは誰か、読者はこの件についての解明を要求する十分な権利を有している。

ショルレンマー叔母は一人のヘルンフート派の女性であった。ある日、すでに三十年前の昔であるが、彼女、つまり当時のシスターであるブリギッテに、目下グリーンランドに

いる同志ヨーナタン・ショルレンマーが結婚の同伴者を、つまりその困難な仕事の加勢をする覚悟のある方を求めているという知らせが告げられた。彼女はこの呼びかけに応じて、自分の下着をまとめて名前を記し、次のデンマークの船でハンブルクから北の方へ出航した。ある日、白夜となる日中、彼女はグリーンランドに着いて、同志ショルレンマーは彼女を迎え入れ、自分達の絆を個人的に祝福した。結婚生活は子供がないままであった。しかし両人はこのことをキリスト教徒らしい恭順さで受け入れていた。かくて十年の幸せな年月が過ぎ去った。十一年目が始まるとき、ヨーナタン・ショルレンマーは肺のカタルが原因で亡くなった。そしてアザラシの皮を打ち付けられた棺で埋葬された。しかし彼の未亡人は、人々に自分が有するものをすべて贈った後、そして各人にその人のことを決して忘れないと誓った後、グリーンランドの船でまずコペンハーゲンに戻り、そこからドイツの故郷へ戻った。

ドイツの故郷へ戻ったのであって、ヘルンフートへ戻ったのではなかった。遠い戻りの旅の途中、何人かの親族の住むベルリンに寄りながら、彼女はこの縁者の圏内に留まることを決めて、五十年前に移住者のボヘミア同胞団[1620 年白山の戦いの後]やヘルンフート派の人々に居住地として示されて来たかの町の一角につましい住まいを構えた。ヴィルヘルム通りのこれらの小さな家々の中で、彼女は自らの静かな誠実な人生を終えることがほぼ確実であったろうが、しかしある日のこと一枚の紙片が家に舞い込んできた。それにはこう書かれていた。「中年の女性、最も好ましいのは未亡人であるが、田舎での家政の指揮のために、求められている。十二歳になる娘がその格別の後見に委ねられる予定である。条件は、折合が良く、キリスト教精神を有すること。問い合わせは以下に寄せられたい。B.[ベルント]ｖ.[フォン]V.[フィッツェヴィッツ]キュストリーン局留め」。ショルレンマー叔母は書き送った。すべての交渉が素早く片付けられた。一八〇六年のクリスマスに彼女はホーエン・フィーツに入った。そこの領主の館では当時まさに悲しいクリスマスのお祝いとなっていた。人々は互いに打ち解けて向かい合った。そして数週間後には我々の女性の友[叔母]の影響は支配的になり始めた。幸福ではなく、平静と平和が彼女の方針であった。レナーテは彼女に懐き、レーヴィーンは彼女の配慮を尊重した。ベルント・フォン・フィッツェヴィッツは彼女のヘルンフート宗に深い敬意を払った。

そして彼はこの点で勿論彼の子供達と異なっていた。子供達は確かに彼女の率直さには頭を下げた。しかしショルレンマー叔母のキリスト教の感情の深さには頭を下げなかった。父親にはとても快適であった彼女の情熱の欠如は、兄妹には単に弱さに見えた。両人の見解によれば、彼女は彼女のキリスト教を家庭常備薬のように使っていた。ここには何か言い得ているものがあった。すべての、むしろ普通の場合、彼女は敬虔な日常の考察による鎮静剤を有していた。例えば「真の誠実さは臆することがない」とか、「神の目が曇って見えないほど、暗い夜はない」であった。しかしより真剣な場合、彼女は強力な神経を刺激する何らかの力強い格言の興奮剤を用いた。「我が主イエスが我と共にあるとき、悪魔とその奸計も何ぼのもの」。弱い薬と強い薬を区別する特徴は、本質的に次の点にあった、つまり強い薬の場合、いつでも悪人が挑戦の相手となって、悪人に対してその営為の無益さが対置されるのであった。しかしこうした格言はすべて、弱いのであれ、強いのであれ、まさに自分の内部にある力への確固たる信仰の中で、極端な魂の平静さで述べられた。そこに科、あるいは兄妹にとって科と見えるものがあった。この魂の平静さは、これに必要

な関与の節度と共に、しばしば関与の欠如に見えるものであって、若者達の情緒を刺激し、彼らの辛抱を幾多の厳しい試練にかけることになった。ベルントはこの静かなキリスト教をより良く理解して、自分自身の許でこう知っていた。神の言葉からの慰めは、人間達の言葉の慰めよりも有効である、と。

ショルレンマー叔母は以上のような者であった。　ー　第三の戒律[安息日を敬え]に対する彼女のいわば自由に見える姿勢に対する先の冗談は一瞬本当に彼女の気に障った。しかしレーヴィーンは、それに構わず、自らの巫山戯を続けた。「我らの女性の友[叔母]は、ちなみに、この間何という高貴な訪問がヘルンフート派の教区民の家の前でなされたか御存じないように見えます」。

「誰のこと」と二人の娘達は叫んだ。

「他ならぬナポレオン本人さ。[一八一二年十二月]十一日から十二日にかけての夜だ。ヘルンフート派の人々はまたしても英雄的に世界史に参入することを怠ってしまった。彼らは皇帝を口をぽかんと開けて見ていたのだ、夜で雪が降っている間のことだ。そして去って行くにまかせた。こうなるのは、ヘルンフートの勇気が外国にあるからで、中国とか、グリーンランド、ホーエン・フィーツにあるからだ。勇気はどこにでもある、ただ本家にはない。ショルレンマー叔母なら、私は確信しているが、彼を逮捕して、世の平和を乱す者として裁判に突き出していたことだろう」。

話しかけられた女性は大きな針の一つでレーヴィーンに脅しかけようとして、レーヴィーンはいずれにせよ攻撃から防御へと転換を迫られることになった。「皇帝」という言葉が引用されたのは無駄なことではなかった。本気にせよ、冗談にせよ、一度会話に引き込まれて、彼は自分の力を使い始めた。そしてレーヴィーンは、少なくともこのときは巫山戯た調子を忘れて、初めて自分の幸運から見放された皇帝がスモレンスクから自分の首都まで二週間かけて戻ったときのかの逃亡に類する旅のイメージを描き始めた。彼は新旧のことを交えて、個別の点に、必要以上かもしれないほどに長く留まりながら話した。

ショルレンマー叔母とマリーは語りに注意深く耳を傾けた。しかしレナーテは非難した。「ご立派、教科書的ね。ロシア・ドイツ間の前哨についての本当の総報告。あなた方大都会の殿方は、何と物語が下手なのでしょう。利口なほど、一層下手だわ。いつだって報告で、会話がないのだから」。

「そうかもしれない、レナーテ。反論しないよ。しかし我々男が下手な語り手であるとしたら、おまえ達女は下手な聞き手だ。おまえ達には辛抱がない。そんなことを聞かされると我々は混乱し、話しの糸が途切れて、左右に振り回されて、とんでもない所に飛んでしまう。おまえ達は覗きからくりの絵を見たがる。モスクワの火災[一八一二年九月十四日から十六日]に、ロストプチン[Graf　Rostopschin　(1763-1826)]将軍、クレムリン、ベレジナ川通過[会戦、十一月二十六日から二十八日]、一切を三分でだ。おまえ達やおまえ達の関心に叶うお話しはクッション付きの国の小舟のように快適なものであるべきで、その上胡桃の殻のように扱いやすくなければならない。どこに厄災の根源があるか、私には分かっている。おまえ達には関連はどうでもいいのだ。おまえ達はナイト[桂馬]だ」。

レナーテは笑った。「そう、私どもはそうでしょう。でも私どもが余りに飛びすぎるとしたら、あなた方は余りに飛ぶことが少なすぎる。あなた方の徹底性はうんざりよ。あなた方はいつも、私ども女は世界史ではとても遅れていると思っている。でも私どもは皇帝

がパリに着いたと知っています。私はホーエン・フィーツから公報を出せたらと思うわ。でも、レーヴィーン、喧嘩はやめましょう。ベルリンの宮殿の中庭の赤い窓はどういうこと。新聞には仄めかしがあった。カティンカがそのことについてもっと詳しく書いてきたわ」。

「何と書いてきたのだい」。

「またとぼけて。カティンカが書いてきたことが気になるのでしょう。名前を出してまずかったわ」。

レーヴィーンはちょっとした狼狽を隠そうとした。「おまえの勘違いだ。私は脱線していない。その現象にはとても興味引かれる。三回あったのだ。三日目には私がそれを見た」。

「何だったの」。

「三日ともすべて、日没後三十分ほどしてから、突然古い宮殿の中庭の上の窓が輝いたのだ。歩哨がそれを知らせた。太陽は夙に沈んでいたから、人々は火事と思った。しかし何も見つからなかった。新しい宮殿の中庭では窓は暗いままであった。人々は戦争の印だと言っている」。

「簡単の予言ね。とショルレンマー叔母は平静に述べた。「今年も戦争はあったし、来年もまた戦争があることでしょう」。

「思うに」とレーヴィーンは続けた、「この出来事はすべてすぐに忘れられていたことだろう、我々の新聞の一つが、おまえ達は手にしていないが、次の二日目に、宮殿の現象により深い意味、例えば予兆とか奇蹟といった意味を付与することを明らかに目指している話しを、すべてがぼんやりしているにもかかわらず、告げていなかったならばね」。

「あら、話して」。

「そうなのだ。しかし辛抱して聞いて貰わなければならない」。

「気に障ったの」。

「まあな。スウェーデンからの話しなのだ。新聞が与えた題はこうだ。『カール十一世［1655-97］とストックホルムでの帝国広間での霊現象』。すべてを正確に、新聞通りに再現するか保証の限りではない。しかし肝要な点は押さえていると思う。好きなことは、忘れないものだ。『記憶は愛である』とトゥーバルは昨日もなお言ったし、カティンカ本人も賛同した」。

トゥーバルの名前のとき、レナーテの顔が赤くなった。しかしレーヴィーンはそれに気付かなかったかのように、続けた。「カール十一世は病気だった。彼は眠れず、夜遅くまで自分の部屋に臥せっていて、城の中庭の別な側の方、帝国広間の窓を見やっていた。彼の許には帝国代官のビエルケ［Bjelke （1624-84）］しかいなかった。そのとき帝国広間の窓が赤く輝き始めるように国王には見えた。そしてそれを指しながら帝国代官に尋ねた。『一体何の輝きだ』。帝国代官は答えた。『月の明かりです。月が窓で輝いているのです』。丁度同じ時帝国顧問官のオクセンシェルナ［Oxenstierna （1623-1707）］が入って来て、国王の状態を問い質した。国王は、再び、輝く窓を指しながら、帝国顧問官に尋ねた。『一体何の輝きだ、私は火事と思う』。帝国顧問官も答えた。『いえ、まさか、そうではありません。月の輝きで、月が窓で輝いているのです』。しかし国王の不穏な気持ちは増して行った。彼は最後に言った。『諸君、どこか普通でない。私はどういう次第か行って、見てみることにしよう』。その後彼らはグスタフ・エーリクソン［Erichson （1496-1560）］の部屋を

通り過ぎる廊下に沿って行った。遂に帝国広間の大きなドアの前に来た。国王は帝国代官にドアを開けるように命じた。すると帝国代官が、この夜中ではドアは閉ざしたままにしておくよう頼んだので、国王は自ら鍵を取って開けた。国王が足を敷居に置いたとき、素早く後戻って、言った。『諸君、諸君が私の後に従うなら、どういうことになっているか、覗くことにしよう。ひょっとしたら恵み深い神が我々に何かを啓示されるかもしれない』。彼らは答えた。『異存ありません』」。

ここでレーヴィーンは中断された。イエーツェが入って来た。果物皿をテーブルに置くためで、赤林檎とグラーヴェンシュタイン林檎で、ホーエン・フィーツで立派に実るものである。ショルレンマー叔母はこの中断を利用して、若干の家政上の指示を出した。しかしレナーテは述べた。「関連が分からないわ。でも勿論、神秘的なほど、一層空想には刺激的」。

レーヴィーンは同意して頷いた。「この印象がますます募ることになるぞ」。それから彼は続けた。「国王カールと両顧問官が入ったとき、彼らは長いテーブルに気付いた。そこにはかなりの数の高位の男達が座っていて、彼らの中央には若い侯爵がいた。侯爵というのは王座で分かった。王座は紋章と赤い絨毯が掛かっていて、直接その背中に設置されていた。人々は裁判のために座っていることが分かった。テーブルの下の端には、断首台があって、断首台の周りには、広大な半円形となって、被告人達が立っていた。立派な服であったが、しかし当時スウェーデンで着用されている服ではなかった。裁判の為に着席している男達は、手にしている本を示していた。彼らは若い侯爵の意に逆らおうとしていた。しかし侯爵は高慢に頭を振って、テーブルの下の端を示し、そこでは今や首が次々に刎ねられ、遂に血が床に沿って流れ出始めた。国王カールとその同行者は仰天して、この光景から顔をそむけた。彼らが再び目を向けると、王座が瓦解した。しかし国王は、帝国代官ビエルケの手を握って、大声で頼むように叫んだ。『私が聞くべき主の声は何だ。神よ、いつこのことすべては生ずるのです』と。

彼が神に三度呼びかけたとき、彼に返事があった。『これは汝の時に生ずるのではない。しかし恐らく汝の後、六代目の支配者の時に生ずるであろう。スウェーデンの国では見たことのないような血の海となろう。しかしそれから一人の偉大な国王[カール十三世、1748-1818]がやって来て、彼と共に平和と新しい時代が生じよう』と。このことが話されると、霊現象は消えた。国王カールは堪えていた。それから同じ廊下を通って、彼は寝室へ戻った。両顧問官が従った」。

レーヴィーンは黙った。居間は静かになった。扇は止んだ。編み針さえも止まっていた。誰もが呆然と見ていた。休止の後、レナーテが尋ねた。「スウェーデンの六代目の支配者は誰だったの」。

「グスタフ四世[アドルフ、一七九二年即位、一八〇九年退位させられた（1778-1837）]。彼の王座は瓦解した」。

「それではあなたは全体を本当の名誉正しいことと思っているの。本当の幻覚と思っているの」。

「そうだとも、そうでないとも言えない。この経過について報告してある文書は、ストックホルムの古文書館にある。国王の手で同じ夜に記されている。彼の二人の同行者も共に署名している。手書き文書は信頼の置けるものだ。このような現象に対しその加工性を

否認する権利も勇気も私は有しない。レナーテ、言わせておくれ。我々にはその権利はない」。

レーヴィーンは「我々」と強調した。しかしそれから、再び巫山戯た調子を取りながら、ショルレンマー叔母とマリーの方を向いて、こうした現象に対する彼らの信仰あるいは不信仰を語るように迫った。

マリーは立ち上がった。何という深い印象をこの語りが彼女に与えたか、誰もが今ようやく気付いた。彼女はその間に、何故とはなしに、折り取っていた樅の小枝を一つの束にまとめて、すべてを半ば焼け落ちた炎の中へ投げ入れた。さっと炎が舞い上がったかと思うと、煙の柱となったが、今や彼女はその中で、一瞬間自ら霊のように立っていた。ただ輪郭だけが見えて、赤いリボンが見えた。リボンは彼女の髪と首筋に垂れていた。彼女の方としてはそれ以上告白する必要はなかった。彼女自身がレーヴィーンの問に対する答えであった。

しかしショルレンマー叔母は、編み針を再び手にしながら、不機嫌に頭を振って、それからあたかも幽霊を追い払う主の祈りを自ら捧げるかのように、素早い明確な声でこう引用した。

神の庇護の下、
すべての災いの嵐から
我は免れる。
悪魔が騒ぎ、
敵が怒ろうとも
イエスが守り給う。［Johann Franc（1618-77)］

第七章
居酒屋で

ホーエン・フィーツの村は（村は「飛び荘園」も有していた）その本体が唯一の長く延びた道路上に限定されていて、道路は、丘の麓に沿って、北の方へフィッツェヴィッツの騎士領と、南の方へ大きな水車小屋荘園とを境としていた。

騎士領は、建築物を考慮に入れるとなると、二つの馬蹄形の片方から成り立っていて、それらの一方は領主の館の三つの翼から、別の片方は領主荘園の馬小屋と納屋から合成されていた。両馬蹄形の開いた側は互いに向かい合っていて、その間に同時に出発口となる車道[石堤]が走っていて、これが延びて、丘を登りながら、何度か呼ばれた胡桃の並木道に繋がっていた。

領主領よりももっと気持ちよく水車小屋はあって、これは搾油所兼製材所となっていた。強い落差となって村に流れて来る水が両工場を稼働させていた。今は小川は凍っていた。空想的形となって大きな主輪に掛かっている雪や氷は、牧歌的魅力とは言えなくても、多層で、家々や小屋、物置から多彩に混成されてある荘園の絵画的魅力を高めていた。

騎士領と水車小屋とが翼の部分であった。その間に道路があって、その三十の家々やあるいはそれ以上を、かなり不規則に両側に分割していた。左側は、東側で、優先されてい

た。こちらに牧師館、学校、村長屋敷があって、右側はほぼ専ら小百姓や日雇いが住んでいて、単に唯一の立派な建物が見られた。居酒屋であった。

我々は今やこの居酒屋に入ることにする。これは普通村の居酒屋に見られるような外見を有していなかった。この為には、木の支柱の上にある、どの車道を行く馬車にも庇となるような切妻建築を欠いていた。むしろ左右に脇階段を有するレンガ造りの階段が突き出ていて、これが下の家の前面のほぼ三分の一を形成していた。手すりも石造りであった。村的なものというよりもむしろ町的なものであるこの外観に､内側の施設も似合っていた。タイル張りの玄関で隔てられた二つの客室のうち、一方の部屋はまぶしく磨かれたテーブルと高い背もたれの床几椅子があり、それには一つのハートが彫られていて、まだ居酒屋風であったが、しかしもう一方の部屋はモスリンのカーテンと額縁付き銅版画、その中にはシル[Baptista von Schill（1776-1809)]とカール大公[1771-1847]があって、すべての点で市民の娯楽室に似ていて、それどころか書架付きテーブルもあり、そこには『レブース広報』の他に『シュプレー河畔観察者』や『ベルリンの国家兼学術情報』も広げられていた。すべてが快適さと裕福さとを告げていた。実際存分にそれらを享受できた。というのはここでそのカルタ遊びをするホーエン・フィーツの百姓達はその両者の資格があったからである。彼らの隷属性は、かつてそれが存在したとしても、この地方では、領主不在の湿地や沼地で、いつも新たな実り豊かな耕作地が獲得できて、昔から良好な関係に席を譲って来ていた。そしてベルント・フォン・フィッツェヴィッツは､自ら自由に感じていたので、この増大する自律性を喜んだばかりでなく、いつでもその自律性を歓迎した。彼の若い頃の一つの出来事がこれに寄与していた。一七九二年の[フランスとの]戦役の直前、　ー　彼がまだ自分の駐屯軍から　ー　ザルツヴェーデル一帯を訪ねたとき、ティルゼン城のクネーゼベックが、かつての連隊仲間であるが、彼を城から村へ案内して、その際こう言ったのであった。「いいかい、フィッツェヴィッツ、ここでそなたは、まだそなたの生涯で目にしていなかったものと知り合いになることになる。自由な百姓達だ」。この言葉と、それに百姓達本人が彼に深い印象を与えたのは間違いなかった。これは今や二十年も前のことであった。しかし忘れられずに残り、ホーエン・フィーツの者達には一度ならず役立った。

今日も、一八一二年のクリスマス、何人かの百姓の名士達が、皆五十代半ば、あるいはそれ以上の男達であったが、[居酒屋の]客室に集まっていた。四人であった。一フーフェ百姓[七から十五ヘクタール所有]のキュメリッツ、一・五フーフェ百姓のカリース、一フーフェ百姓のレーツケ、一フーフェ百姓のクルルで、皆真のホーエン・フィーツ人で、思い描けないような古い時代からこの地に居住していて、フィッツェヴィッツ家の人々と共に昔のヘーエンドルフ[高台村]に住んでいて、そこを去り、その上また彼らと一緒に良き時代、悪しき時代を過ごして来たのであった。皆晴着を着ていて、長く、濃い色の上着を着用し、彼らの一人を例外に、真っ直ぐに、広い、庭園風木製椅子に座っていた。これらは八脚か十脚、大きな赤褐色に塗られた円卓の周りにあった。

五番目の者として、彼らに亭主自身が、居酒屋のシャルヴェンカが加わった。彼は女系遺産によって、二フーフェ百姓となり、そもそも村で最も豊かな男であった。彼は、にもかかわらず､六百モルゲン[一モルゲン､二十五から三十六アール]の湿地を耕していたが、しかし完全に同等なものとは見なされていなかった。これには二つの立派な百姓達の理由

があった。一つの理由は、まず彼の祖父が、オーダーブルフの開墾の際、他のボヘミアの植民者達と村にやって来たという事情があった。もう一つの理由はもっと難しく、彼がどんなに警告されても、「居酒屋業」の見栄えのしない仕事をやめようとしない点に尽きていた。シャルヴェンカはこの面倒な点に話しが及ぶたびに、亡き祖父の言葉を引く習慣であった。祖父は彼が幼少の頃からこう教えたのだ、と。ドゥカーテン金貨は恥ずかしいものではない、と。しかし彼が何故「ビール注ぎ」と「卑しい仕事」をやめようとしないのか、その本当の理由はドゥカーテン金貨にありはしなかった。豊かな二フーフェ百姓にとって素敵な居酒屋の稼ぎは大した問題ではなく、いつも新しい人々との日々の接触が肝心なのであった。お喋り、とりわけ傾聴、他の人々の懐具合を知ること、これが彼を客商売に結び付けていた理由であった。彼は、ある百姓の、諸関係により必然的に生じた不釣り合いな結婚についての情報を他の誰よりも二十四時間先に仕入れることに誇りを抱いていた。暦製作者が天候を先に読めるように、彼は競売を先に読むことができた。しかし彼の本来の専門は、火付けが疑われる風車屋というところであった。その際彼が仕切る策謀は一帯全体を占めていた。

以上が居酒屋シャルヴェンカである。

彼は丁度ドアの向かい側に座って、誰が入って来ても、その姿を見、挨拶できるようにした。彼のすぐ隣にはレーツケとクルルが座っていて、彼らはすでに一時間前から煙草を吸って黙っていた。キュメリッツとカリースとは全く対照的で、この両人はお喋り屋であった。彼らについても一言。

一フーフェ百姓のキュメリッツは、五十代であるが、古い兵士の姿勢と声望とをいつでも得ていた。その双方が彼にふさわしかった。彼はまずメレンドルフ[Graf von Möllendorf (1724-1816)]連隊の歩兵で、それから上等兵となった。ライン戦役に参加し、二回ヴァイセンブルクの前線[堡塁構築]に共に登った[1793 激戦]。それからカイザースラウテルン近郊で負傷し、連隊を去った。彼はこの圏内では、今日偶々姿を見せない村長のクニーハーゼと共にプロイセン軍の伝統を踏まえ、皇帝ナポレオンに対抗し、机上で戦闘を練って、次の見解を曲げなかった、つまり「我々が勝利を手中にしていた」イエナでは、単に悪い冗談で負けたのである、と。

キュメリッツの正反対が一・５フーフェ百姓のカリースで、細い肩の、背の高い男であった。精神的に活気があるが、しかし性格が弱く、無抵抗で、からかわれ、愚弄されることに甘んじなければならず、これにはすでに、言い得て妙であるが、彼の綽名が誘っているように見えた。つまり彼はやっと歩けるようになった頃、大きなクリーム桶、あるいは乳脂鉢に落ちてしまって、それ以来ぴったりした言い方で、「クリームポット」と呼ばれるようになったのである。彼には生涯何かミルク的なものが残っていた。

今や五人が皆長いオランダ製パイプから煙を出した。各人の隣に点火芯があった。カリースが語っていた。彼が言っていたことは、たった今別な客人、一人の旅行者、商人に見えたが、部屋を去って行ったぞということであった。

「いつも、彼が立っているのを見ると」とカリースは強調して言った、「彼の父親、昔の坩堝のシュルツェを思い出す。彼もいつもそう立っていた。ズボンに両手を入れて、とてもおかしな奴で、カルタで悪太郎を騙してやったみたいな顔をしていた。シャルヴェンカよ、昔の坩堝のシュルツェをまだ覚えているだろう」。

シャルヴェンカは頷いた。しかしキュメリッツは丁度新たに詰めたパイプを吹かしていて、しばらく休んだ後、思わず語った。「坩堝のシュルツェ。俺はそんな名は生涯聞いたことないぞ。しかし俺は生粋のホーエン・フィーツ育ちだ」。

「あんたが兵士だった時のことだよ、キュメリッツ。八十年代の頃だったかな。その後坩堝のシュルツェは亡くなった、そもそも死んだという話であれば」。

キュメリッツは、少なくとも兵士達の間でのヴェンド族の迷信の一部を残していて、思わずにやりと笑って、それから言った。「クリームポットよ、詰まらぬことを言うな。分別正しく言え。死んだ者は死んでいる。幽霊にはなろうが。しかし死んでいなければならない。何故坩堝のシュルツェと呼ばれたのだ」。

「彼はシュルツェと言った。しかし世間の人は皆坩堝のシュルツェと呼んだ。彼にアブラナを持って行ったとき、よく一緒になったものだ。いつも現金払いだ。シュヴェートの人々は言っていた、『彼は払いが良い』と。それから彼はテーブルの後ろに立っていた、いつもズボンに両手を入れて、そして人をまじまじと見つめるものだから、全く当惑してしまう。しかし決して値に注文は付けなかった。シャルヴェンカ、そうだろう」。

シャルヴェンカは再び頷いた。クリームポットは続けた。「事務室は牢獄のように見えたものだ。高くて、白く、鉄格子が窓にあった。そこには三枚の壁板しかなかった。それらの板の上には何百もの坩堝が、大小様々、粘土製、陶器の坩堝があった。だから坩堝のシュルツェと呼ばれたのだ。二，三のものは黒く見え、石炭から彫られていた」。

「奴は精錬者、錬金術師か」。

「そうだったのだ。シュヴェートの辺境伯[大選帝侯の三男の家系、1788 年まで]のために彼は多くのぴかぴかの塊を精製していた。しかし辺境伯が、自分は自らできるし、シュルツェから全部学んだと思って、彼を除けようと思い、城に彼を招待して、彼と喧嘩しようとし、ズール社製の二連銃の両銃身を彼に発射したのだ、二枚の黄金の襠布を込めてな。ポーランドの貴族が上着に着るような布のものだ。しかし坩堝のシュルツェは笑って、左手でその両襠布を掴んだ。左利きだったからな。そして辺境伯に見せて、言った。『恵み深い殿の思い出に身に着けることにしよう』」。

カリースは明らかに、今や下顎に一杯唾液を感じて、坩堝のシュルツェの家系について、アブラナ、錬金術、シュヴェートの辺境伯の忘恩について更に話しを進める良い時がやって来たと思っていた。しかしそれが始まる前に、新たな客人がやって来て、今や話題が別の方向へ向かった。

新しく入って来たのは水車屋のミークライで、村の南の端にある搾油所兼製材所を所有する男であった。彼は中肉中背に及ばないくらいで、明るいグレーの上着を着ていて、彼の顔にはかの独特の表情があった。それは宗教的議論に陥っていて、分派主義者であり、あるいはそうであろうと欲するほとんどすべての田舎の人々に見られるものである。精神的仕事が若い頃から顔にその特徴を書き込む場合には、分派主義は他の諸特徴の中の一つの特徴に過ぎない。多くの特徴の中の一つで、特徴の総体の中、その特徴は消えてしまうか、見過ごされてしまう。しかし田舎の人々の場合、それは全く見紛うことなく生じて来る。その特徴がその支配を分割しようとしないだけに、一層顕著である。この分派主義者の特徴、つまり官能性と諦念、高慢と謙虚との混合したこの特徴が、水車屋ミークライにも明白であった。彼はちなみに良心的男で、家の名誉を重んじ、ショルレンマー叔母の格

別の引き立てを喜んでいた。これは何らかの方面へ問題を引き起こさずに、済んでいたかもしれない。ミークライは本来領邦教会から脱退したわけではなく、むしろ規則的にザイデントプフの説教を聴講しており、ただ三ヵ月ごとに一度、聖職候補生のウーレンホルストが、オーダーブルフとノイ・マルクを旅しながら、オーダー川のこちら側とあちら側でのすべての教会外信徒をホーエン・ザーテンで自らの周りに集めたとき、ウーレンホルストの「より深い源泉」から汲みだしていたからである。これは勿論一つの祭日、名誉の日となった。皆が休んで、最良の一組の車馬が馬小屋から出された。そして道が泥濘んで通りがたければ、我らの昔からのルター教徒の水車屋は、このマナ[神与の食物]に遅れたことを永遠の罪に数えたことであろう。

ミークライはキュメリッツの左側に腰を下ろした。キュメリッツは、今や宗教上の議論が不可避になったと良く承知していて、先手を打って、尋ねた。「ミークライ、どうかね。今日の説教は気に入ったかい」。

「結構なものだ、キュメリッツ、衷心から結構と思う。今日の日、ユダヤの国のベツレヘムで聖なる者が生まれたことについては何も言わなかったけれども。『神の生来の息子』については更に話されなかった。ウーレンホルストなら頭を振っていたことだろう。しかし健気な男のように話しておった。彼のことは良く分かっている。プロイセンの心を持っているよ」。

「それにキリスト教徒の心もな」と他の皆が異口同音に叫んだ。

「彼は叫ばない」とカリースは述べた、「彼は弾劾しない。パリサイ人ではない。謙虚な人だ、ミークライ、そしてこれが大事なことだ」。

「クリームポットの言う通りだ」とキュメリッツが裏付けた、「我らのザイデントプフと比べられるような者はこの辺りではいない。ただ一つ欠点がある。余りに善良で、余りに信じやすい。そしてすべてを自分の望むように見ている。エジプト軍は洪水に襲われたと彼は言った。しかし王のファラオは首都に居座っていて、昔の糸を紡いでいる。我々はまだ同盟を結んでいて、我々が幸い王から離れられるか、天の知るところだ。神の恵みで、名誉ある戦争となればいいが」。

「キュメリッツ、戦争にはなるだろう」とミークライがここで口を挿んだ。彼はルター教徒であったが、幽霊話、霊現象に強い信仰を保持していた、「戦争にはなろう。皆おまえさんと一緒に闘うぞ。アルト・ランツベルクの草刈り人がまた刈っていた、おまえさんらの誰もがこれはどういうことか承知している。彼らは老フリッツ[フリードリッヒ大王]が戦争へ行く前に、七日間草刈りをした。すると切り株は、血の雨が降ったように、赤くなったのだ。彼らはこの十一月また枯れた野原で刈っていた」。

「日没の方向から見ると」とシャルヴェンカが割り込んで叫んだ、「これは敵が西から来るということを言っているのであろう。また国にフランス人が現れる。新しい、元気な国民だ。皆古い権謀術数を弄して、家に娘がいる者は、十分用心することだ。厚かましい手管を使って、女達は奴らの後を追いかけることになる」。

「そうさせてはならねえ」とミークライは請け合った、「そんなことをさせたら、我々の恥だ。邪悪な欲望が一晩で茎となって伸びたら、それは最初から劣等な芽が心の中にあったからだ。しかし訓戒と躾け、祈りのあるところでは、悪人は力が及ばない、たとえ悪人が劣等なフランス人に姿を変えても」。

皆が同意して頷いた。「しかし」と水車屋のミークライが続けた。「奴らは恐ろしい、軽佻な輩だからではなく、災いの多い輩だからだ。奴らは大胆にも、天と地の永遠の神を支配の王座から引きずり下ろした。それにそれ以上にひどいことに、奴らはまた大胆に、引きずり入れた。そこで奴らはまた一人の神を得ていて、これがまた神を目指している。これは正しいキリストの神ではない、単なるフランス人の神で、引きずり下ろされたり、引きずり入れられたりの神だ。奴らが知っているのは、単に皇帝の偶像崇拝で、神の礼拝ではない。ここ毎年我々の教会でフランス人を見かけてきたが、いつも単に災いを引き起こしたものだ」。

「奴らは祭壇の覆いから総飾りを引き剥がした。黄金の刺繍を切り取ったぞ。燭台を溶かしやがった」と何人かがそこで叫んだ。

「もっとひどいことをした。ここではないが、近隣でな。教会の財産を隠していたゲルスドルフの牧師を、奴らは腋窩の所まで埋めてしまって、牧師が拷問する代わりに、打ち殺してくれと頼んでようやく奴らは反省したのだ。ホーエン・フィーノーでは聖餐のワインを飲んでしまい、ひどい歌を歌いやがった。それから祭壇のテーブルを教会から墓地に運んで、聖餐の杯になんと賽子を入れて、賭博をしたのだ。墓所で奴らは降りて行った、若くして亡くなった女性の絹の服を引き裂いた」。

「奴らがしたのはそんなことだ」と今やクリームポットが力を込めて口を挿んだ。彼はすべての弱い性格の者同様に嵩にかかる傾向があった、「しかしハーゼルベルクでは償いをする羽目になった。少なくとも一人はな。ハーゼルベルクの墓所は、ミイラの墓所と呼ばれていて、ホーエン・バルニムではこの種のものが幾つかあるそうだ。そこでフランス人達が、棺を開けて見ると、死者が腐敗していないままだと分かった。それで笑ってしまって、奴らは一つの棺を墓所から教会へ運んで、その死人を取りだした。その両腕が動くものだから、死人を十字架に架けることに決めた。死人を祭壇の壁に立てかけて、両手に二本の釘を打ち込んだ。しかし一方の手がまた離れてしまって、落ちるとき、このならず者達の一人の横面を殴ることになった。するとびっくりして、此奴は床に倒れて亡くなったのだとか」。

「神の裁きだ」とミークライは叫んだ、「こんな打撃に皆見舞われるがいい、死人が目覚めることになってもな」。

「しかし神が奇蹟を起こす前に」とキュメリッツが会話を結んだ、「我々がその奇蹟に負けないことをすべきであろう。そうではないか、ミークライ。懐手のままではよくあるまい。国王が叫ばれたら、アルト・ランツベルクの草刈り人達は草刈りをしたのだ。我々の中でまだ草刈る力のある者は、一緒に草を刈るべきだ。俺は決めたぞ。プロイセンと国王のために最後の御奉公だ」。

百姓達は立ち上がって、村の露地に沿って、別々の方向へ行った。天の北の方に赤い輝きが燃え上がっていた。

「火事か」とクルルが尋ねた。

「いや」とミークライが言った、「極光だ。天が一つの印を与えている」。

第八章
ホッペンマリーケン

ホッペンマリーケンは森耕地[フォルストアッカー]に住んでいた。そこの端には百年かそれ以上前から一本の道、単なる粘土小屋からできた通りが形成されていた。この通りは、ホーエン・フィーツの人々からはいつも何か余所のものと見なされていて、本来の村に垂直に立っていて、水車小屋荘園の背後を百歩行ったところにその端緒があって、丘に沿って登り、何度か言及された領主の館の車寄せに続く胡桃並木道と平行に走っていた。そこはホーエン・フィーツの貧民の一角で、同時にすべての零落した者達、排除された者達の宿泊所で、一種の安定化したジプシーの居場所であり、退去と入居がなされ、だからといって村の当局が個別的に構っているわけではなかった。「森耕地[フォルストアッカー]は昔からそうだった」のである。そんな自然な慣行で、粗野な狼藉があって処分が必要になったときにのみ、介入がなされた。

森耕地[フォルストアッカー]の倫理的水準同様、その外見もそうであった。その住民達の小屋は、その小屋の前面と背後に並んでいる豚小屋とは単に竈の煙で異なるだけで、この煙がそれぞれの屋根に見られた。今すべてを覆っている雪が全く一つの同等性を形成していた。

この最後の、すでに丘の半ばの高さにある粘土小屋に、我々の章題に記されているホッペンマリーケンは住んでいた。豚小屋はなかった。その代わりに生垣が小さな家を囲んでいた。この小さな家は前方に一つのドアと一つの窓があって、その他にはどこにも入口とか光の差し込み口はなかった。単なる二つの目の賽子であった。内部はわずかな部屋しかなかった。奥の方にかけて同時に台所となっていた玄関は、狭くかつ奥行きがあった。その上全く暗かった。しかし夏季にはこの玄関は開けっ放しのドアから光が得られたし、冬には竈で燃える火が助けとなったに違いなかった。玄関の隣に部屋があった、その背後にアルコーヴ[付属室]があった。

ホッペンマリーケンの家はそんな具合であった。しかしホッペンマリーケンとは誰か。

ホッペンマリーケンは一人の小人女であった。彼女が本来どこから来たのか、誰も正確に答えられなかった。中年のホーエン・フィーツの人々は語っていた。彼女はおよそ三十年前に村にやって来て、彼女の前や後の幾多の他の者同様、半ば浮浪者の女で、余り好意的目では見られて来なかった、と。しかし当時の存命の領主、ベルント・フォン・フィッツェヴィッツの父親が、彼女に同情して、憂慮する声に対して半ば冗談の意見で押さえ込んだのだ、と。「そのために森耕地[フォルストアッカー]があるのだ」と。すでにその当時、彼女は今と同じ様相をしていて、同じような年で、同じように醜く、同じ丈長の雨靴を履き、同じスカーフを着け、当時も今も、すでに遠くからその赤いフリーズのスカート、その背中の背負籠、手にしている人の背丈大の曲柄杖とでそれと分かったと言われていた。

ホッペンマリーケンは、はっきりしていることは、それ以来森耕地に住みついて、オーダーブルフの南半分全体で知らぬ人はいない人物となったということであった。その加勢をしたのは、彼女の姿恰好ばかりでなく、彼女の仕事であった。彼女は仕事を幾つか有していた。まず彼女は郵便婦であった。週に三回、道のりや天候がどんなであろうと、彼女は郵便の段取りに従って、朝早くから夕方遅くに出発して、郵便や新聞、小包を受け取って、十二時間後に[オーダー河畔の]フランクフルトからであれ、キュストリーンからであれ、ホーエン・フィーツに戻って来た。そしてこの郵便の仕事が彼女をどこでも馴染みの

女性としたように、結局、あれこれのとき彼女に対し声高になった反対の声にもかかわらず、彼女を受け入れるようにさせることになった。ホッペンマリーケンが庭にやって来て、彼女の杖の、何か楽長を思わせる、独自の動作で、「ニュースを持って来た」と仄めかすのを見ると、誰もが喜んだ。すべての領邦郵便は受け入れられているのである。

しかしこの郵便の仕事は単に彼女の生活の基盤にすぎなかった。彼女にとってもっと大事なもの、あるいは少なくとも実入りの良いものは、彼女がついでに行う仲介の仕事であった。ホーエン・フィーツ周辺、一・五マイルのすべての村々の卵取引は本来彼女の手中にあって、その際彼女は二重の手数料を確保する術を心得ていた。これが可能となったのは、この仕事全体が交換に基づいていたからである。ツェヒーン村とかヴッシェヴィーア村の百姓の女将が新しいスカーフを欲する場合、ホッペンマリーケンが道をやって来ると、彼女を呼び止め、一羽のすでに用意してある雄鶏を数シュティーゲ[二十個単位]の卵と共に彼女の背負籠に入れて、スカーフを手配する彼女の天分とその裁量とに任せるのである。あれこれの品でホッペンマリーケンは全市場を握っているように見えた。人々は彼女に与えられるこのような利益に正直な稼ぎを見ていたし、その点正しかった。しかし彼女の稼ぎのすべてが必ずしも正直な性質のものではなかった。森耕地には、自らあらぬ噂が立っていながら、彼女に邪悪な陰口をたたく者達が住んでいた。しかし村そのものの中でもそのことが語られた。だらしない売春婦達が夕方彼女の家に忍び込んだ。彼女は予言し、カルタ占いをした。日曜日彼女はいつも教会に行って、彼女の粗い声で賛美歌を一緒に歌った。それらの最も有名な歌は諳んじていた。しかし誰も彼女が正直なキリスト教徒であるとは信じていなかった。人々は彼女を小人と魔女の混合物と見なしていた。領主の家でさえ、彼女を村の珍しいものとして、しかし一部はやはり彼女の有用性故に多くのことを大目に見ていたが、全体としてはより好意的には余り考えていなかった。ただレーヴィーンだけは、ある種の詩的愛着を感じて、味方していた。彼は彼女について冗談で空想化することを好んだ。彼女の年齢は分からないぞ、とか、彼女は昔のヴェンド族の世界の神秘的遺物ではないか、とか、この一帯の大地の産物、不具の赤松のようなもの、その何本かはまだ連山に見られるぞ、と。ヴェンド族は多分美しい人々であったと彼が反論された別な機会では、彼はまた彼女を一つの偶像と見なすことで満足した、これは、最後の[ヴェンド族の]暗黒神[ツェルネボーク]の神殿が倒れたとき、突然生気を得て、今や以前支配していた一帯を歩き回る偶像なのである。彼は多分こうも付け加えたことであろう。ホッペンマリーケンは決して死なないであろう、彼女は生きているのではないから。彼女は幽霊にすぎないのだ、と。しかしこの点彼は全く見誤っていた。彼女は生きていたばかりでなく、好んでまた立派に生きていたし、その際全くかの感覚的悦びと共に生きていた。いつも小人に特有な、普通けちな者達に見られる悦びである。そして彼女はその両者、小人にして吝嗇家であった。

百姓達がシャルヴェンカの居酒屋での議論の後、別れたとき、ホッペンマリーケンがその雨靴で重たい足どりで、村の露地を登って来た。彼女はいつものように素早く歩いた。鼻をくんくん言わせ、ふと訳の分からない言葉を話していた。彼女の長い鉤状杖はその際拍子を取るように上下に動き、赤いフリーズのスカートは輝いていた。

彼女は水車小屋荘園を通ると、左手に転じて、今や雪の積もった粘土小屋と豚小屋の通りを上へ、自分の小さな家へと向かった。その家のドアはただ掛け金で留められていた。

もっともなことで、その中にあるすべてのものがその独自な不気味なものを守っていたからである。完全な暗闇に彼女は迎え入れられた。彼女は、杖で導かれて、玄関の中程まで手探りで行き、ここで杖と背負籠を置き、それから胼胝のある手で竈の灰をかき回し、二，三の赤く燃える石炭を取りだした。彼女は吹き付けて、硫黄液の糸を取って、その助けを借りて、ブリキのランプを点火した。ちなみにまずこのランプのもたらすつましい明かりを利用するのではなかった。彼女はむしろ大きな、竈の隣にある暖炉の穴に直接這い入った。そしてここで長い、半ば炭化した木片で、深く奥の方にある熾火をかき回して、柴の束や樅の毬果や、二，三個の石状の泥炭を投げ込んで、それからようやく部屋に踏み込んだ。

この部屋は大きかった。ホッペンマリーケンは部屋の中で、あちこち照らしだし、すべての隅を見、奥の方へ置かれているアルコーヴ[付属室]に視線をやって、最後に、絶えず自ら話しかけながら、事物の状態への自分の満足を表明した。ランプの明かりは十分に届いて、部屋にあるすべてのものが識別できた。窓の隣には、隅に密に押しやられて、カップや皿の壁戸棚があった。樫の木のテーブルはぴかぴかに磨かれていた。アルコーヴのドアには、大きな、中がひび割れた丸鏡が掛かっていたが、この鏡がこの箇所に掛かっているのは、飾り故か、仕事故か判然としなかったかもしれない。というのはあたかも予言とカルタ占いの際に必ずや役目を果たしているに違いないかのように見えたからである。ちなみにある種のクリスマスのお祝いの準備が明らかに見てとれた。それにはホッペンマリーケン本人が前日手配したように見えた。天蓋付きベッドは新しいカーテンがあった。床板には樅の小枝がまかれていた。天井の鉤にはナナカマドの小枝が掛かっていて、その実は、冬の時期が進んでいたのに、まだその美しい赤い色合いを見せていた。こうしたこと一切はほとんど心地良い印象を与えたに違いなかったが、しかし三つのものがその邪魔をした。まずホッペンマリーケン本人であり、それから鳥籠であり、第三にそして最後にアルコーヴである。ホッペンマリーケン本人について我々は承知している。しかし残りの両方について更に一言述べよう。

すべての四つの壁には、すぐ天井の下に、鳥籠が一列に並んでいた。恐らくその数二十。ただベッドと暖炉のあるところで、列が中断していた。この鳥籠の中に何が本来隠されているか、ホッペンマリーケンがランプでそれを照らし出したとき、はっきりと見分けが付かなかった。ただ無論暗い鳥の目が、大きく、鋭く明かりを見つめていた。これが多分、女主人が不在の折、番をしていた目であろうと人々は思わずにはおれなかったことであろう。

この鳥籠の奇妙な帯状装飾は、その中には単に口数の少ない民のみが巣くっているように見えたもので、十分に不気味であった。しかしもっとアルコーヴは不気味であった。すでにドアに掛かっていた丸鏡が何も良きものを意味していなかった。その中は全体空であった。ただ薬草の束がここでは同じように壁の周りにあって、隣の鳥籠のような具合であった。立派な薬草や劣等な薬草であった。メリッサに、ノコギリソウ、アルニカ、それにグラジオラス、野生ローズマリー、セイヨウビャクシン。その中にはライ麦の束もあって、その立派な穀粒は夙に落ちていたが、有毒な青い麦角はまだ穂先にあった。全体の匂いは麻痺するようであった。より鋭い観察者の目に、他の何にもまして、止まるかもしれなかったものは、全体の薬草品が、単純な釘ではなく、太い木釘に掛かっていたことで、それ

らの数ツォルに達する直径はわずかな、その木釘が担われる荷とは比べものにならないものであった。

ホッペンマリーケンは、その間にくつろいでいて、高い雨靴を一足のフェルトの布で縫われた靴と取り替えていたが、今や玄関から背負籠を取り寄せて、その仕草全体から判断するに、自分のために何か美味しいものを準備する気であるように見えた。彼女は気持ちよく背負籠をかき回して、求めている獲物を見つけ出そうとした。まず深い底から出て来たものは、青い尖った袋で、それから二個の卵。彼女はこれを吟味して明かりにかざした。最後に古い印刷された麻の粗布で、その中には何かもっと大事なものが包まれていた。少なくとも彼女はこの小包を両手で耳に当て、揺すった。それがもたらした音で彼女は落ち着いた。さて彼女はすべてをテーブルに、それぞれ一つずつ、置いた。そして戸棚から折れた柄の古いファエンツァ焼きの鍋と、それにすりこぎ、金属スプーンを取って来た。今やすべてが一箇所に集まった。彼女は青い袋から一スプーンの砂糖を鍋に入れ、両卵を割って加え、麻の粗布からラム[酒]の瓶を解きだし、秋波を送って、注ぎ、かき混ぜた。ただまだ何かが欠けていた。沸騰したお湯であった。これも用意された。彼女は玄関に出て、もう一度暖炉の穴に這い込んで、ロシア製のやかんを持って戻って来た。その中身はしゅっと音立てて、泡立ちながら大きなファエンツァ焼きの鍋に消えた。

ここで準備完了と見なされて良かった。本来の祝宴が始まることになった。彼女はテーブルをまた綺麗にして、一個の大きな褐色の鉢形ケーキを組み立て、両腕で頭を支えながら、感覚的満足感を抱いて用意された食事を見つめた。この時になっても、彼女は急ぎすぎないように努めていた。享楽を引き延ばすことで高まりを目指していたのであれ、あるいは、ともかくどのように最初のクリスマスの日は祝われなければならないか、独自のホッペンマリーケン風イメージを有していたのであれ、いずれにせよ、彼女は差し当たり、立ち上る蒸気を側面から吸い込むことで満足して、そこでテーブルの引き出しを大きく開けた。その中には仕切りで区別されて、左側に賛美歌の本と右側にカルタがあった。彼女は賛美歌の本を取り出して、クリスマスの歌を広げた。「いと高き天より我は来たり」で、彼女自身が歌と思ったかもしれないレチタティーヴォ風[叙唱風]に最初の三つの節、それから最後の節を読み、また閉じて、それから最初の立派な一気飲みをした。その後すぐに鉢形ケーキにはなはだ精力的に取りかかることになって、そしてそれは今や十分もしないうちにテーブルの平面から消えてしまった。彼女は左の手の平に残り屑をまとめて、すべてを丁寧に口の中へ注ぎ込んだ。

今やファエンツァ焼きの鍋にとってもはやライヴァルがなくなったが、彼女はようやくその鍋が彼女にとって意味するものをその鍋に分からせる状況となった。彼女は撫でながら、ぱちんと叩きながら、両手を鍋の周りに置いて、指の節でちょっとした突起のある箇所をすべて調べ、鍋の上に覗き込み、ちょっと飲み、啜り、そしてまた何度か大いに飲んだ。そして快適な全コースを寄食し尽くした後[durchschmarutzen、『ファウスト』2054 より]で、引き出しを二度目に開けて、今度は賛美歌の本の代わりに、カルタを取り出した。それはドイツカルタであった。スペード、ハート、クラブ。それらは一つの盆の中にしっかりと重なって並んでいたが、しかしホッペンマリーケンの両手とっては造作もないことであった。彼女が半時間後、並べ、切り、また並べたとき、カードが然るべきようには出現しそうになくて、彼女の血が頭に昇った。

スペードのジャック[不用心]が消えなかった。彼女の気に入らなかった。彼女はスペードのジャックが誰であるか、正確に知っていた。どうしたこと。ジャックがまた彼女の横に来た。彼女は落ち着かず立ち上がって、ランプを取り、暖炉の奥を照らして、二度、三度、アルコーヴの中を覗き、それからまた腰を下ろした。しかし胸苦しさが去ろうとしなかった。それ故彼女は着ていた大きな花柄のキャラコのコルセットの紐を緩め、いじり、引っ張り、つまんで、小袋を探した。それは胸の上、革紐に結んで収めていたのであった。そこにあった。彼女はそれを取りだし、中身を数え、すべて異常ないことを確かめた。

これで彼女はまた落ち着きを取り戻した。彼女は今一度試そうとして、もう一回カルタを並べ始めた。今度は上手く行った。スペードのジャックは遠く去った。醜い高笑いが彼女の顔に見られた。それから最後の一飲みをして、ドアの前に大きな木製の閂を置き、明かりを消した。

一時間後、月が窓の中を照らしたとき、月はこの小人女の風雪に耐えて深い皺の顔を照らした。この顔は今や、黒いスカーフがずれて、白い髪の束が剥き出しになっていて、先よりも更に醜くなっていた。月は移って行った。その絵柄は月の気に入らなかった。しかしホッペンマリーケン本人は、夢を見ていた。つまりスペードのジャックが彼女の首を掴んで、革紐を引っ張って、彼女の小袋を取ろうとする夢であった。彼女はジャックと戦った。不安の汗が彼女の額に生じた。その際彼女は叫んだ。「待ってよ。泥棒、泥棒」。

荒涼たる家の中をこの叫び声が響いた。小鳥達がゆっくりと横木から登って来て、格子越しに、その叫び声が聞こえて来るベッドの方を見つめていた。

第九章
村長クニーハーゼ

居酒屋の向かい側に村長屋敷はあった。それは瓦屋根の家で出来ていて、奥の方へ二つの長くて細い馬小屋が付属していて、これらは一つの納屋で結合されていた。この納屋の奥にある、果樹と木苺の灌木で占められていた耕作地はまた二条の細い花壇を村の道路際まで延ばしていて、それで夏季には、教会丘から村長荘園を覗き見ると、一切が大きな庭園を思わせて、この庭園が家屋敷を二本の広げられた腕の中に抱いているかのように見えるのであった。ミークライの水車小屋でさえこれほどは優しい風情には見えなかった。屋根の下までゼニアオイが花咲いていて、蜂が巣箱の周りでぶんぶん言い、格子垣には葡萄が掛かっていて、一方昔から、庭の戸口の右手にある梨の木からは、時々重たい果実が離れて、敷居の石に音立てて落ちるのであった。家の住人は誰もこの物音に注意を払わなかった。ただ家の前面の石の階段上で、ニワトコとスイカズラの蔓の下に座っていた一人の娘は、一瞬聞き入って目を留めた。それから糸を巻いたり、飾縁を付ける仕事を続けた。

これは晩夏のことであった。しかし冬にも村長屋敷は優しい風情で、今日の二日目のクリスマスの日もそうであった。庭では雪がシャベルですくわれていて、一つの壁を作っていた。馬小屋の扉は開いていて、そこから温かい空気が霧のように野外に出て来た。敷居には雀がいて、個々の穀粒を啄んでいた。その他は一切静かであった。番犬も祝日であった。馬小屋と納屋の間の隅の一つにその小屋はあった。犬はその臥所の藁の若干を入口に押しやっていた。このクッションの上に今やその先の尖った狼頭が横たわっていて、心地

良く朝を見入っていた。

外の庭でも静かで祭日風であったように、家もそうであった。すでに階段には砂がまかれていた。玄関前の角には若い赤松が立っていて、空気を松脂の匂いで満たしていた。玄関の中ほどにある鉤には宿り木の茂みが掛かっていた。居間はすでに暖房されていて、暖炉の扉は閉ざされていた。ただ右手の、大きな客室のある所では、まだ火の燃える音がし、火照りがした。一匹の猫が横腹を温かい角に当てて、背を曲げて唸り、格別に快適であることを示していた。

最前面の居間には、重々しい樫のテーブルの周りに三人の人物が見られた。一番窓際に、窓に背を向けて、肩幅の広い男が座っていた。五十代と見えた。彼の顔は、力と堅牢さ、好意を表現していた。まばらのブロンドの髪が頭の天辺にあった。晴着姿で、長くて黒褐色の上着を着ていた。左手の夫人は、四十代であるが、まだ可愛く、黒ずんだ肌で、ヴェンド族風な衣装であった。幅広い襟が黒い布のコルセットの上に掛かっていた。そして短いフリーズのスカートは百もの襞の中に収まっていた。窮屈なチュールの帽子がただ半分だけ輝かしい黒髪を覆っていた。すべての装飾品は銀製であった。首には強い、胸の前面でスライド式蓋で結合されたネックレスが巻き付けられていた。イヤリングは大きな銀の滴りに似ていた。

これが村長のクニーハーゼ夫妻であった。老父に向かい合って、窓の明かりを一杯に受けて、家の娘マリー[マリア]が座っていた。昨日領主の館での暖炉の許同様に、背筋を伸ばしていた。彼女は同じタフタのドレスを着ていて、髪に同じ赤いリボンを付けていた。昨日レーヴィーンの物語を追っていたときと同じ注意深さで、今日彼女は父親の朗読を追っていた。父親はまずクリスマスの福音を読み、それから預言者ダニエルの第八章を読んだ。老クニーゼはこの章を立派に熟慮して選んでいた。マリアの両手は静かに膝の上にあった。そして次の箇所に来たとき、つまり「そしてこの後に一人の厚顔の、奸計の王が起こる。この王は強大になるが、しかし自らの力によらずして、ただ悪巧みによってのみ欺瞞を行い、遂には王の中の王たる者に刃向かうようになる。しかし人の手によらずに滅ぼされる」。　ー　ここで彼女の目は一層大きくなった。ストックホルムの城での炎の輝きの物語の際にそうなったのと同じであった。というのは、刺激を受けやすくて、彼女には、耳にしたどんなことも、生き生きとした姿が生じたからである。その他は一切が同じ鼓動であった。ヨーロッパコマドリは、小さな声で、リングの中から横木へ跳ねて、また横木からリングの中へ跳ねた。同じ拍子で大型箱時計の振子が進んだ。そのように村長クニーハーゼの心臓も動いた。

クニーハーゼは「プファルツ人」であった。どうして彼はこのヴェンド族の村にやって来たのか。どうして彼はこの村の村長になったのか。

シャルヴェンカ達が他のチェコの家族と共にボヘミアから移住して来た同じ時期、クニーハーゼ家はライン地方の家族と共に移って来た。一七五〇年頃で、フリードリヒ大王がオーダーブルフの沼地を乾燥させて、その植民地化に踏み込んだ頃であった。チェコの家族は、数が限られていたので、古代ヴェンド族の村々で宿を見いだした。そのようにしてシャルヴェンカ達はホーエン・フィーツにやって来た。しかしライン地方の植民の家族は、彼らがクレーヴェ、あるいはジーゲン出身であろうが、ナッサウ、あるいはプファルツ出身であろうが、構わず、全員プファルツ人と呼ばれていて（丁度例えばアイルランドです

べての渡って来た者達が「ザクセン人」と呼ばれるように)、自分達自身の村々を築いた。それらの中ではノイ・バルニムが最大の村であった。この村でクニーハーゼは生まれた。それもフベルトゥスブルクの和平の日[一七六三年二月十五日]であった。父親はそれ故息子は説教者とならなければならないと決めて、手にし得るつましい資産を使って、彼にかなり有為に勉強させた。しかし若いクニーハーゼは、和平の男になろうとは端から欲しなかった。彼にとってはただ兵士的なことが魅力で、すでに二十歳になると、父親の反対を軽々と押しのけて、メレンドルフ連隊の歩兵中隊に入った。それは当時ベルリンに駐屯していた。軍務は、とても厳しいものであったが、彼の気に入って、すでに一七九二年、ライン戦役が勃発すると、連隊の中隊下士官の一人となった。ヴァルミーで彼は功労章を受け、カイザースラウテルンで二度目の功労章を得た。以下のような具合であった。タッデンの中隊は、戦闘の最初から守っていたある丘の陣営を引き上げるよう強いられてしまった。敵の大砲が放たれて、今や斜面の、およそ千五百歩幅の台地を支配していて、その台地では引き上げの中隊が、部分的に単なる小部隊に分散して、退却を行っていた。山腹の中程で、大股を撃たれて傷付いた上等兵がいて、仲間達に置き去りにするなと頼んでいた。何人かは死守していた。しかし霰弾射撃がまた戦闘意欲を殺いでしまった。勇猛果敢な者でさえ気持ちが折れた。そのとき下士官のクニーハーゼが飛びだして、ある距離戻って、この負傷兵を肩に担いで、戦火から運び出した。ダンデンの司令部隊長は、中隊がまた集まったとき、クニーハーゼに近寄って、彼と握手した。歩兵達は歓声に弾けて、三十分後には敗北していた高台の陣地を取り戻した。

この日が我らのクニーハーゼを、すぐにではなかったが、しかし出来事の自然な経過の中で、今や彼が当局の長となっている昔のヴェンド族の村へ導くことになった。というのは彼がとても勇敢に敵の戦火の中から運び出した上等兵は他ならぬ、ホーエン・フィーツの居酒屋からの我らの友、ペーター・キュメリッツに他ならなかったからである。傷病兵となって、彼は退役した。しかし二年後に和平となり、ラインの軍はすべてその駐屯地に戻った。メレンドルフの連隊も一緒であった。

それは一七九五年の収穫の後であった。夏の浮遊する蜘蛛の糸がすでに空中に飛んでいたとき、九月によく見られる澄んだある日、ミークライの水車小屋の側を一人の肩幅の広い男が、その国王の制服を着て、ホーエン・フィーツの村の通りを曲がった。彼の胸には二，三のメダルが輝いていた。笹縁と折り返しで判断出来る人なら、それはメレンドルフ連隊の役員であることが分かった。しかしそれは他ならぬ我らの下士官クニーハーゼであった。彼は、彼の質問に臆しながらも熱心に答える村の半ばの少年達を後に従えて、彼のかつての上等兵の荘園に足を踏み入れようとしていたが、家の敷居で出迎えたのは、ペーター・キュメリッツ本人ではなくて、多分にトゥルーデ・キュメリッツ、彼の妹であった。その後に生じたことすべてに従って考えると、この代理は我らのクニーハーゼの願望に反するものではなかったと仮定されよう。というのはキュメリッツ荘園の客という一週間の休みの後、去って、連隊に戻る前に、彼はペーターと戦争仲間の絆を新たにしたばかりでなく、トゥルーデとも夫婦仲間の絆を結んだからである。そもそも彼は単に自分の駐屯地に戻って、休暇から離隊を申し出、次にノイ・バルニムの荘園を買い、彼のトゥルーデをヴェンド族の村からプファルツ人の村へ移すことにしたのである。しかしその逆となった。ホーエン・フィーツのある場所が思いがけず空いて、キュメリッツ家とクニーハーゼの長

持が一緒に合わさって、一七九六年夏アブラナが花咲いて、その香りが畑一面に広がっていたとき、結婚の行列が教会の丘を登って、鐘が鳴り、楽手達が吹奏して、新郎新婦が敷居を超えた。クニーハーゼは制服を着ていて、トゥルーデは豊かなヴェンド族の衣装を着ていた。老いも若きもこう言った、ホーエン・フィーツではこのような新婚のカップルは人々の記憶の限り見たことがない、と。人々の記憶の限り、これよりも豪華な、これよりも幸せなカップルはなかった。とりわけこれよりも立派なカップルはなかった。嫉妬も、悪しき陰口も見られなかった。最初あれこれの者が、「一人のプファルツ人が村へやって来たではないか」と不平を言っても、この不平はこのプファルツ人を知るにつれ、直に止むことになった。一つの助言が必要となると、彼がいた。一つの行動が必要となると、彼が二度いた。彼は筆記、請願書提出、計算、分類を弁えていた。そして一八〇〇年老村長、ヴェンデリーン・ピュテルケが亡くなると、この村長は七年戦争以来丸二十四年その職にあって、ロシア人が来たときのクーナスドルフの会戦の後では村を救出してくれたのであったが、人々はこのクニーハーゼをその村長に選んだ。出自については心配されなかった。ただ二，三の者が念を押しただけであった。ベルント・フォン・フィッツェヴィッツは言った、「私の百姓どもはいつも賢い。しかしこれほど賢いとは私の生涯で思ってもみなかった」と。

クニーハーゼには敵がいなかった。森耕地の人々でさえ彼については良く言った。領主の館ではこう言われた。「彼は有能な男だ」。水車小屋ではこう言われた、「彼は敬虔な男だ」。ペーター・キュメリッツはいつも募る尊敬の念と共に彼の義弟を見上げていた、あたかも彼がカイザースラウテルンの一日を若干の介入で決定付けたかのようであった。それから彼は多分こう結んでいたことだろう、「私の人生は彼のお蔭だ、私の妹の幸せは彼のお蔭だ」と。

クニーハーゼ家は幸せなカップルであった。しかしどの幸福も完全なものはない。彼らには子供がなかった。そのとき、娘も家にやって来る、自らの子供ではないが、自らの子供同様に愛しい子供がやって来る、という次第になった。

それは一八〇四年のクリスマスで、フォン・フィッツェヴィッツ夫人が亡くなったときよりも二年前のときであった。一人の「強壮な男」が村へやって来た。馬車遍歴の芸人の一人で、これらの芸人はまず赤いトリコットを着て、五個の大きな球で遊び、その後で前もって時計とか布を置いていた引き出しから対の鳩を飛び立たせるものである。この強壮な男は、かつてより良い日々を経験していた者に見えた。彼の姿勢全体が、必ずしもいつも幌馬車で村から村に回っていたわけではないと暗示していた。彼は今やシャルヴェンカの居酒屋の前に止まって、痩せた馬を馬小屋に連れて行った。夕方上演であった。十歳ほどと思われる小さな少女が彼と入れ替わって、歌を歌い、暗誦した。最後に彼女は短い紗の服で現れた。それには金の紙の小さな星が付けられていた。そしてショール・ダンスを踊った。ホーエン・フィーツの百姓達は、殊に老人達は、魅入られたかのようで、その子供を粗い手で撫でた。彼らはやがて彼らの優しい心を更に披露する機会を得ることになった。

「強壮な男」は夙にもはや強壮な男ではなくなっていた。彼は患っていて、病気であった。彼は横になって、急速に悪化した。牧師のザイデントプフが彼のベッドの側に座って、彼に慰めの言葉をかけた。瀕死の者は、自分の具合をよく承知していて、頭を振って、牧

師を間近に引き寄せて、固く言った。「果てることを喜んでおります」。それから彼は頭をそっと横に動かして、窓際に座っている少女を見て、両手を心臓に当て、半ば詰まった声で言い添えた。「あの子だけが心配だ」。それから自らを律する力をすべて失いながら、痙攣した嗚咽に崩れた。その泣き声を聞いて、少女は飛び込んで来て、情熱的愛を込めて、瀕死の者の手を接吻した。この瀕死の者は彼女の髪を撫で、彼女を見つめ、微笑んだ。あたかも明るい未来を覗き込んだかのようであった。かくて彼は亡くなった。彼の横のテーブルには、いつも鳩が飛び出て来る、小さな魔法の簞笥があった。ザイデントプフ牧師は深く感動していた。

しかしホーエン・フィーツの人々には、今や二つの問いが迫って来た。そのどちらがもっと心を煩わせたか述べることは難しい問いであった。最初の問いは、「この死者をどう扱うか」というものであった。

老いたヴェンド族の百姓達は好意的であった。しかしこのような事柄は真面目に考えた。この強壮な男を単に地面に埋めることは、なし難い苛酷なことに思えた。しかし彼をキリスト教徒の墓地に埋葬することは、さらになし難い不浄に思えた。彼はそもそもキリスト教徒なのか。大多数が疑問に思った。そのときザイデントプフ牧師は死者の枕の下に色々な書類を、洗礼証、結婚証明書を見いだした。手紙が更に解明を与えた。彼が俳優であったこと、彼が良家の娘と両親の意志に反して結婚したこと、その妻は結局、悲嘆と悲惨の中、しかし非難も後悔もせずに、亡くなったことが分かった。最後の手紙は、何度も読まれていて、シュレージエンの修道院救貧院からの日付であった。すべてが挫折した人生を物語っていた。しかし不幸な人生ではなかった。二人を導いてきたものが、困窮と死を越えて残っていたからである。

ザイデントプフ牧師は、手紙を読むと、下の居酒屋で彼を待っていた百姓達の間に再び入って、三日目にはこの強壮な男はキリスト教徒として埋葬された。あたかも一人のキュメリッツ、あるいは一人のミークライであったかのようであった。学童が、大変な雪の中、丘に沿って彼に歌を歌い、フィッツェヴィッツ夫人は、いつものように好意的で、一緒に墓地に立って、死者に最初の、手に一杯の土をかけてやった。一方ベルント・フォン・フィッツェヴィッツは十字架を建てさせて、次のような老寺男のイエーゼリヒ・クーバルケによって作られた銘を記させた。

強壮な男はより強壮な者に召された。
神よ恵み深く嘉納し給え。

かくて最初の問いは片付いた。二番目の問いは、「子供をどうするか」であった。ザイデントプフ牧師はこの問いをあれこれ思案した。百もの考えが頭を過った。しかしどれも合いそうになかった。百姓達は臆して黙っていた。そのとき村長のクニーハーゼが割り込んで来て、泣いている子供を居酒屋から自分の家へ連れて行き、言った。「お母さん、神が遣わされた娘だ」。

翌日、クリスマスが間近であったので、彼は彼女のために一本の木を飾り始め、彼女をクリスマスの人形、自分の魔法の子と呼んだ。

百姓達は最初不安げに見守っていた。「彼の許から飛んで逃げるかもしれない」とある

者達が言うと、「それが一番良いことかもしれない」と別の者達が請け合った。しかし彼女は逃げ去ることをしなかった。ザイデントプフ牧師は言った。「彼女は蛇腹の燕のように、彼に幸せをもたらすことだろう」。

第十章
マリー

「彼女は蛇腹の燕のように、彼に幸せをもたらすことだろう」とザイデントプフ牧師は話していた。そしてその言葉は実現することになった。百姓達は頭を振っていたが、直にそれは止んだ。同じ境遇にあるとき、いつも生ずることが起きた。定かでない出生、邪推を生むような奇妙な人生行路、これらは同情も呼んだ。そして美しい衝動が人々に、ある罪のない運命を調整すべく生じた。秘密に満ちたものの魔法が目覚めた関心を支えた。

このことはマリーも経験した。最初の冬が終わる前に、彼女は村の寵児となった。誰ももはや、彼女が最初に彼らの前に登場したときの、金の紙の星を付けた紗のドレスのことで嘲笑しなくなった。むしろ彼らにとって今や衣装のこの単なる息吹というものが彼女の生来のコスチュームに思えてきた。そしてこの子供を最初から度外れて愛していた村長のクニーハーゼが、向こうの居酒屋に座っていて、半ば真剣に、半ば冗談に、「彼女は妖精だ」と請け合うたびに、誰も反論しなかった。皆が夙に自らの許で経験していたことを、彼は単に話しただけであったからである。彼女が逃げ去るかもしれないということを勿論もはや誰も信じていなかった。ただ糸紡ぎ部屋の少女達は例外で、彼女達は幽霊話しや精霊話しが好きで、いつも彼女について飽きもせず新奇なこと不思議なことを語っていた。必ずしもすべてが作り話であったわけではない。彼女は実際雪に対して抑えがたい偏愛を抱いていた。雪片が静かに天から落ちて来たり、あるいはあたかも羽根布団を撒いたかのように舞ったり、吹雪いたりしたら、彼女は通りに面した家から離れて、長い斜めの梯子を登って、納屋の棟木まで至り、そこの上で雪に包まって立っているのであった。少女達は、彼女が歌っているのを聞いたとも請け合った。このことから何という空想的に飛躍した推論が導き出されたか詳述する必要はないだろう。

冬はそんな具合であった。もっと自由な動きに恵まれる夏がやって来ると、彼女はすっかり皆の心を捉えた。彼女は個別の百姓の荘園を訪ねたばかりでなく、広大な沼地に広がっている飛び荘園にも行って、子供達と遊び、物語を話した。彼女が最初から有していた見知らぬもの、神秘的なものが、彼女には残っていた。しかしもはや誰もそれを奇異としなかった。村の少女達もそうしなかった。あるとき彼女は道に迷った。クニーハーゼの家では大騒ぎになった。皆が走り回り、オーダー川にまで探しに行った。ようやく村から千歩も離れていない所で彼女を見つけだした。彼女は穀草の中で眠っていた、手には二，三の白芥子を握っていた。彼女の足許に一羽の小さな鳥がいた。誰もその鳥を知らなかった。その鳥が飛び立ち、皆の目がその鳥を追ったとき、ホーエン・フィーツの人々は「あの鳥が彼女を守ったのだ」と言った。

普通彼女は教会と村の間の山腹で遊んだ。最も墓地そのものを好んでいた。彼女は銘文を読んで、自分の父親の墓の芝を抱擁して、高い、荒石壁によじ登り、没して行く陽光を受けて、下の奔流を過ぎて行くオーダー川の小舟の帆を見下ろした。それから老寺男のク

ールバルケの女中が、夕方の鐘を突きに来ると、彼女はこの女中の後を付けて、数回一緒に鐘の綱を引いて、その後すでに半ば小暗くなった教会へ入って行った。ここで彼女は半身を起こして、前のベンチの最も端に座った。クーナスドルフの会戦後の日中、イッツェンプリッツ連隊の少佐が血を流した席である。そしてどんなに磨いても取り除けなかった黒ずんだ斑点をおずおずと覗き見て、自ら欲した戦慄を再び祓い除けるために、大きなフィッツェヴィッツ家の大理石像を見上げた。そこには次の銘があった。「御身は私の許なれば、誰が私に逆らおう」。そのように彼女は鐘の音が鳴り止むまで、留まっていた。それから彼女はまた墓地に出て来て､九十九折りの小道を村まで下って行く女中を見送って、不安げに、しかしますます小さな輪を描いて古いブナの木の周りを回った。そのブナの木の二つに分かれた幹は、伝説によれば、フィッツェヴィッツ家の兄弟喧嘩を想い起こさせるものであった。それから一葉落ちるか、一羽の鳥が飛び立つと、彼女は竦み上がった。

ホーエン・フィーツのこの最初の夏は、素敵な日々であった。しかしこの素敵な日々は続くことができなかった。村長家の人々は、夫も妻も、夙にその心配をしていた。こうした徘徊は余りに長く続いていた。仕事、規律、学校がその代わりにならなければならなかった。しかしどのようにするか。クニーハーゼ夫妻は、養女をお姫様に育てるつもりはさらさらなかった。しかし村の学校が彼女にふさわしくないということも同様に確かなことに感じていた。彼女は木靴の子供達の許では合わなかった。彼女は、授業を一度も受けずとも､かなり上手にイエーゼリヒ・クーバルケよりも上手に読むことができたということ、殊に彼がその角縁眼鏡を忘れたときにはそう出来たということを度外視したとしても。

この窮状を助けたのは、フォン・フィッツェヴィッツの立派な夫人であった。彼女は夙に、この空想的性向について幾多のことを耳にしてきたこの奇妙な子供をレナーテの遊び友達、学友として自分の家に入れることを考えていた。しかし無論このことに反対する考えが色々あって、当時実現するに至らずにいた。クニーハーゼの養女は、とても儲けものとは言え、所詮は手品師の、せいぜい好意的に見て、貧しい俳優の子供であって、夫人自身はその点に反撥しないとしても、それでも夫人は教育問題となると、自分自身の全く自由な、高尚な感受性よりも、むしろ一般的な、義務と経験に由来する考え方を参考にしなければならないと思っていた。かくてこの案はまた砕けた。勿論ザイデントプフ牧師ならすでに当時、別な解決策を導き出す案を手にしていたかもしれない。しかしながら、かくも責任を伴う案件については、依頼もされないのに介入するつもりはなくて、この件を成るがままに任せることにしていた。

そしてやはりそうなった。それもかなり独自な風に実った。フィッツェヴィッツ家の公園の縁に、すでに若干高くなっていたが、一つの花の女神の像があって、領主の館の庭園前面の広い砂利道を見下ろしていた｡像の足許には五つの三角形の花壇が設置されていて、全体で囲み込む半円形を形成していた。この箇所でマリーは、毎日の徘徊のとき、しばしば二，三の花を、ホウセンカやモクセイソウを摘んでいて、その際決して禁止されることはなかった。逆であった。庭師は、可愛い、見慣れぬ風体の子供に喜びながら、彼女に会釈して、あるときはそれどころか彼女の左耳に、二，三のフクシアの蕾を付けてやった。さて九月となっていた。赤いクマツヅラが花咲いて、その間に、埋めた植木鉢から二，三のぱっとしない花が育って来た。それらは遊んでいる子供には濃い勿忘草に見えた。彼女はそれを摘み取った。しかしそれは木立瑠璃草で、当時まだ珍しいもので、フォン・フィ

ッツェヴィッツ夫人は、誰がそんなことをしたのか、自分の好きな花を眺められなくしたのは誰か知ろうと欲した。マリーはそのことを耳にすると、素早く決心をした。彼女は像のすぐ間近のベンチに座っていた。そしてフォン・フィッツェヴィッツ夫人がその散歩で広い砂利道を登って来ると、彼女は飛び上がって、近寄って来る夫人に向かって急ぎ、夫人の手に接吻して言った。「私がしたのです」。彼女はその際真っ赤になって、震えた、しかし泣かなかった。この瞬間から友情が結ばれた。フォン・フィッツェヴィッツ夫人は彼女の髪を撫でて、彼女をしっかりと好意的に見つめた。それから少女を、元の立ち上がったベンチに連れ戻して、質問をして、彼女に語らせた。すべてが彼女に最初の印象を保証していた。かくて二人は別れた。その日の午後のうちにもフォン・フィッツェヴィッツ夫人はザイデントプフに言った。「珍しい子供です」。そして一週間しないうちに、彼女はレナーテの遊び友達、学友となった。

彼女は最初遅れていた。彼女にできるすべてのことは、ただ読むことと朗読であった。しかし彼女の素早い理解力は、記憶と燃えるような熱意に支えられて、遅れをほぼ一気に取り戻してくれた。そして半年もしないうちに、彼女は大方の学科でレナーテと対等になった。そして彼女は、フォン・フィッツェヴィッツ夫人によって買われた能力の期待に応えたように、性格に関する期待にも応えた。彼女は気まぐれやわがままがなかった。彼女が有していた若干の性急なものは、すべての優しい言葉に譲って行った。両少女は姉妹のように愛し合った。

何も失敗はなかった。フォン・フィッツェヴィッツ夫人の願いは期待を越えて実現した。それでも夫人は再三憂慮を抱いた。これは今勿論レナーテの幸せに関するものではなく、逆にマリーの幸せに関するものであった。今この時のことばかりでなく、未来のことを考えるものであった。未来はどのようなものになるのか。村長の子供に貴族の家の教育を施すことは良いことであろうか。マリーは自分の生涯を駄目にするような矛盾に陥るのではないか。彼女はこの憂慮を夫に伝えた。夫は、最初からこの疑念を案じていて、早速村長のクニーハーゼとこの件について突っ込んだ話しをする決心をした。彼は村長の分別に大きな信頼を置いていた。

ベルントは村長の屋敷へ行った。クニーハーゼは、キュストリーンへ供給された麦藁と燕麦の量に関して計算の取り決めの最中であったが、ベルントは一緒に窓の壁龕[ニッチ]に行って、フォン・フィッツェヴィッツ夫人と話し合ったすべてのことを彼に述べた。

村長のクニーハーゼは注意深く聞いていて、それから領主が黙ったとき、言った。自分も、その件が最初話されたとき、自分は子供から平穏さを奪うのではないか、学習や知識よりも大事な平穏さを奪うのではないかと考えた。しかしどんなに考えても、結局また落ち着いた。好意で仰有る恵み深い奥方様の言われるがままにすることが最良であろう、と。そんな風に半年が過ぎたわけです。さて今度は逆の方向へ変えるとなれば、それはそのことが恵み深い奥方様の明白な御意志であれば、そのときにのみ結構なことでしょう。自分自身の願望や意志は、すでに数ヵ月前からもはやそうではなくなっています。自分が最初に抱いた憂慮は段々と落ちて行きました。何故かも分かっています。ほぼ神様の手が自分の家の敷居に置かれたあの子供は、百姓の子供ではありません。生まれから百姓風ではなく、見た目も百姓風ではありません。自分は黄昏時に座っていて、他の人々もするように想像してみることがあります。しかし色々なイメージが自分の許を過っても、自分のマリ

ーが前掛けをしたスカートを着て、笑っている下僕達の掛け声の許、二つの牛乳桶を持って中庭を行くイメージは描けません。自分は自分自身の子供のようにあの子供を愛している。しかしそれでも自分はある日また自分から取られて行くであろう余所の子供として見ている。人間から奪われなくても、多分自然の力で。鶏小屋の鴨のようなものでしょう。雌鶏は岸辺に残っているが、鴨はある日泳ぎ去って行くものです。

このようにクニーハーゼが話すと、ベルント・フォン・フィッツェヴィッツは手を差し出した。そして領主の館ではかの日からすべての憂慮が黙することになった。

フォン・フィッツェヴィッツ夫人の死も、マリーにとっては悲痛に思われたが、残された人々との関係を何も変えるものではなかった。ショルレンマー叔母が家にやって来た。レナーテに優先して注がれることになっていたかの愛の奉仕に構わず、叔母はむしろ二人の少女を姉妹のように見ていて、二人に同じ愛情を注いだ。

堅信礼の後、授業レッスンは終わった。しかし両少女は余りに情愛深く互いに結ばれていて、こうした外的絆の欠如で自分達の交際や生き方が変わることは少しもなかった。

生まれの違い、身分の違いをレナーテは大事なものと見なさず、マリーは感受しなかった。彼女は世界を夢の中のように見ていて、自ら夢のようにその中を徘徊した。彼女は何も計算することなく、高い社会的身分と低い社会的身分とを単に役割と思い描いていた。それらは名前は違うが、その本質は同等なものなのであった。フィッツェヴィッツ家の中にあったすべての美術品の中で、『リューベックの骸骨踊り』の模写が、どのように震撼されようとも、同時に最も崇高な印象を彼女に残したことはこれと関連することであったろう。すべての現世の事物の究極の同等性についての説教が、彼女自身おぼろげに感じていたことを語っていた。すべての美しいものに彼女は引かれた。しかしそれに関与するという衝迫であって、それらを所有するという衝迫ではなかった。それは彼女にとって夜空の星々であった。彼女はその輝きを喜んだが、しかしそれを求めて両手を伸ばさなかった。

この無執着は彼女の十六歳の誕生日にも見られた。この際彼女はこの日の大きな贈り物として自分自身の部屋を得た。両クニーハーゼ夫妻は彼女を、ある種厳かな気分で、北側の屋根裏部屋へ案内した。正面は公園を望み、右手には教会を望む部屋であった。そして二人は言った。「マリー、これからはここが部屋だ。ここを管理し、整理しなさい。どんな些細な願いも望みのままだ。私どもにも嬉しいことだ」。

マリーは、最初幸福の嵐の中で、戸棚と裁縫台を、本箱と衣装長持をあちこち動かし始めた。しかしその後はそのままであった。自分の古い、愛しくなった所有物に何か新しいものを付け加える考えは彼女にはなかった。自分の持っているものを喜んでいて、自分の持たないものは、欲しがらなかった。

「彼女には勇気がある、そして彼女は謙虚だ」と公園でのかの最初の出会いの後、フォン・フィッツェヴィッツ夫人はザイデントプフ牧師に言った。彼女はこう付け加えて良かったであろう。「とりわけ彼女は嘘を言わない」と。神がしばしば恩寵の中で行うかの奇蹟、それがここでも完遂されていた。仮象の世界の内部で、一人の人間の心が、つまり嘘が決して力を及ぼしたことのない心が、花咲いていた。更に不浄なものはもっと少なかった。ショルレンマー叔母は言った、「私どものマリーは、ただ心を浄化するものだけを見る。害するものは見ない」と。そうであった。空想と情熱も、彼女はそれですっかり満たされたので、彼女を守った。彼女は強く感じたので、純粋に感じた。

ホーエン・フィーツの領主の館では、　ー　我々の物語の始まる前の冬であったが、ー　レナーテは歌を歌った。そのリフレインはこうであった。

あの娘は道端で生まれた、
薔薇の花咲く道端で、...

彼女はこの歌詞をピアノで伴奏した。
「この節を歌うたびに、私が誰のことを思わざるを得ないか分かる」とレナーテは、自分の椅子の後ろに立っているレーヴィーンに尋ねた。
「分かるよ」とレーヴィーンは答えた、「難しい謎々ではない」。
「誰」。
「マリーだよ」。
レナーテは頷いて、ピアノの蓋を閉ざした。

第十一章
ザイデントプフ牧師

村の中央に、村長屋敷の隣に、牧師館があった。百年以上経った、若干通りから下がって建てられた切妻屋根の家屋で、立派さでははなはだ大方の百姓屋敷に遅れを取っていた。それはまだ藁葺き屋根を有する唯一の大きな家であった。この村の教区民にとって、牧師のためにも、教区民自身のためにも不名誉な藁葺き屋根を瓦屋根と取り替えようという話題は度々上っていた。しかし我らの友のザイデントプフは、この点に関し、少なくともある種の様式感覚を有していて、絶えずこのような近代化に反対していた。「このままで結構」。この点彼は完全に正しかった。これはまさに一つの村の牧歌で、変えるたびにただ失われて行くものであった。家の切妻は通りに面していた。藁葺き屋根のすぐ下の方を並んだ、小さな、四方を優しげに見つめる窓があって、一方木骨建築の壁は上の方まで板を纏っていて、夏の間ずっと葡萄や杓、垣根仕立ての果樹で覆われていた。玄関の隣には薔薇の木があった。これは棟木まで生長して伸びていて、その古さと美しさの点で、オーダーブルフ全体で有名であった。牧師館の供する冬のイメージも魅力に欠けていなかった。その屋根には強力な雪の塊の帽子が乗っていて、一方下に下ろされた葡萄の蔓は、麦藁で巻かれて、それに庇護するような垣根仕立ての果樹の上に広げられた筵が、全体に丁寧さと、この丁寧さを育んでいる懐かしさの外観を与えていた。
このことに内部も合致していた。玄関のドアには、マルク地方の牧師館によく見られるように、呼び鈴があった。大きな、うるさい、住人に「ご用心、誰かが来るぞ」と叫びかけるものではなく、小さく、静かな音のもので、入って来る者にこう言っているように見えるものであった。「いらっしゃい。お入り下さい」。ドアの向かい側に、長いほとんど家全体に通じている廊下の一方の側に、台所があって、その開け放たれたドアからはいつもぴかぴかしたやかんとゆらゆら燃える竈の火が見えていた。部屋は右手の方にあった。左手の廊下の壁は、これらは同時に家の風雨用壁であったが、色々な種類の戸棚が、広いのや狭いの、古いのや新しいのが並んでいて、壁の蛇腹は砕けた甕で装飾がなされていた。

その間の多くの隅には、炭化した材木の発掘された杭、鯨の骨、半ば風化した墓石がその場を占めていて、他方廊下の大梁には様々な剥製の動物が掛かっていた。その中には若いアリゲーター[鰐]が珍しい歯と共にあって、これは風が玄関から来るたびに、あたかも空中を飛ぶかのようにいつも不気味に揺れ始めた。一体全体一つの儀装で、ホーエン・フィーツの牧師館は同時に情熱的な収集家の家でもあるということに疑いの余地はなかった。

すでに廊下がこの印象を与えたとすれば、この印象は隣接する部屋に入ると更に高まった。この部屋はキリスト教の牧師の部屋というよりもはるかに古代品の陳列室に似ていた。確かにこの部屋の住人は明らかに、職務と趣味とを一定の均衡の下に置こうと努めていた。しかしこれに失敗していた。しばらくこの点について述べることを許されたい。

書斎は庭園を望む二つの窓を有していて、その間に我らの友は部屋の中ほどまで出て来る隔壁を作っていた。かくて二つの大きな、ほぼ陳列室風の窓壁龕が出来ていて、そのうちの一方は牧師ザイデントプフ用に、別の一方は同名の収集家、古代研究家用になっていた。この壁龕の内部では、すでにその外的設計から分かるバランス体系が同様にしっかり守られていて、考古学室の仕事机では『ベックマンによる選帝マルク・ブランデンブルク侯国の歴史的記述』（ベルリン、一七五一年から五三年）が、神学室の仕事机では『マルティン・ルター博士による聖書翻訳』（アウクスブルク、一六一三年）が広げられていた。ただ収集家のもが有するようなその両豪華本は、大きく、厚く、しっかりした革製で、数百の絵が付いていた。聖職候補生ウーレンホルストの言葉、「ザイデントプフ牧師は時に間違って、聖書ではなく、ベックマンを参照しています」、これはここでは公正に避けておこう。

これは勿論、教会外信徒達がよく口にしていた真にウーレンホルスト的辛辣な嘲りであった。しかし考古学的部門にある肘掛け椅子がはるかに深くへこんでいたばかりでなく、部屋全体の、窓壁龕のこちら側に残っている部分も異教徒的な博物館、つまりすでに廊下に見られたものの単なる続きになっているという点で彼らは正しかった。ただ鯨の骨とアリゲーターが欠けていただけである。二つの強大な、左右に、ドアの隣にあって、蛇腹越しに中央建築物で結合されているガラス戸棚は、一種の凱旋門となっていて、そこを通って書斎に入ることになっていた。石刀や骨壺から始まって、マルク地方の大地からかつて古代の遺物として掘り出されたものの一切が、ここに集合していた。勿論これと比べたら部屋の神学的図書は問題にならなかった。それらは、極端に埃を被っていることは言うまでもなく、突き出た壁と暖炉の間の狭い、二枚の板の書架にその住処を見いだしていた。

我らのザイデントプフは誰にも劣らぬ考古学的熱狂徒であり、この熱狂主義とは分かち難いすべての弱点も備えていた。嫉妬が愛とは分かち難いようなものである。彼は空想し、彼は欺かれた。しかし一つの点で彼はその同好の士の大軍とは異なっていた。彼は収集するために収集していなかった。ある理念のためであった。彼は傾向的収集家であった。

教会内部では、ウーレンホルストが評したように、中途半端な者、煮え切らない者であったが、こと骨壺や頭骸骨になると、異端審問の厳しい教条主義者であった。彼は妥協を嫌い、すべての自分の探求の最初にして最後の結論として、断固としてこう確信していた。つまりマルク・ブランデンブルクは根源の原初からドイツ国であったばかりでなく、すべての世紀を通じて、続いて来たのである、と。ヴェンド族の侵入は単に大波の性格を有していただけで、その大波で表面的にあれこれが変化し、あれこれの名前がスラブ化したに

すぎない。しかしそれ以上ではないのであった。住民の間では、フリッケ[ヴォータンの妻]やヴォータンの伝説が証しているように、ドイツの風習と伝説は生き続けたのである。ヴェンド族が、よく主張しているように、大地の最深部まで浸透したわけでは決してない。彼らの所謂「ヴェンド族の教会墓地」、低次元の埋葬鉢を認めはするが、しかしその他の一切、表面的なものを本能的に避けて、貫通し、潜り込んで来たもの、つまり文化とカルトを同時に意味するものの一切は、確かにゲルマン的なものなのである。トイト[一八世紀に発案されたドイツ人の神]そのものがドイツ人であったようなものである、とそう彼は考えていた。以上の命題に関しては彼にとってどの議論も重要であった。彼は自分の考古学的博物館に自分の説に対する全く疑う余地のない証拠を有していると自覚していた。しかし小さな証拠と大きな証拠の区別を付けていた。小さな証拠の方が彼個人としてはより好ましい証拠であった。自分がより繊細な者であったからである。しかし大衆の愚かなセンスに対しては大きな証拠以外のものは提供しないという世間知も十分に弁えていた。この大きな証拠を形成する品はすべて凱旋門の大きな二つの、ガラス箱の中に見られた。しかしそれ自体また反駁し難い証拠と、全く反駁し難い証拠の二つに分割されていて、そのうちの全く反駁し難い証拠は「セムノネス族の最終手段」の銘があった。それらは十から十二の品で、すべて番号が付けられ、同時にメモが貼り付けられ、タキトゥスからの引用が含まれていた。まず第一番が主要な品で、青銅製の猪の像、そのメモにはこう記されていた。「彼らは（古代ゲルマン人）は彼らの偶像に猪の像を与えていた」。他の番号は留め金や、指輪、胸の止め針、剣に割り振られていて、収集の比類ないもの、本来は装飾品として、最後に皇帝時代からの三個の貨幣が見られ、それぞれネロやティトゥス、トラヤヌスの像が刻まれていて。トラヤヌス帝の貨幣には頭部の月桂冠の周りに銘があって、「皇帝にして支配者トラヤヌス最良王に」とあり、しかしその側にあるメモにはこう記されていた。「レブース地区のライトヴァインで発見、一つの埋葬鉢の中」。この「埋葬鉢の中」は太い下線が引かれていた。我らの友の視点からでは全く正当なことである。というのは必ずしもすべての埋葬鉢がヴェンド族のものではなく、むしろ、いずれにせよドイツのセムノネス族に由来する「上等な部類の埋葬鉢」であることの証明であったからであり、少なくとも証明する筈のものであったからである。

かくも雄弁な証拠に対する反撃は我らの友には不可能に見えた。それでも彼はその反撃を恐れる必要があって、その際幸いなことに、あるいは不幸なことに、彼の最も激しい攻撃者は彼の最も古い友であり、友にして敵の同一人物であるという事態が生じていた。彼らの友情がこの戦いによって傷付けられなかったばかりでなく、ますます深まって行ったのは両人にとって結構なことであった。これは勿論我らの牧師の貢献というよりは、彼の気の良い好敵手の貢献であって、この好敵手は、この件に対し世慣れた紳士として振る舞っていて、セムノネス族の問題、ルーティツェン族の問題を何年も続いた衷心からの関係を犠牲にしてまで戦う意志はなかったからである。実際彼にとって骨壺が興味を引いたのは、その骨壺がパンチボールの近代的な形姿を取りだしてからのことであった。

この昔からの友にして敵は、法律顧問官、オーダー河畔フランクフルト出身のトゥルガニーであった。彼は素面の口でのすべての訴訟手続きの敵であり、幾多の好きな瓶を飲み干していた。時にはホーエン・フィーツの牧師館で、しかし最も好んでは自分の家で飲むのであった。これは自分自身の酒蔵には自分が最も詳しいという原則に従ってのことであ

った。すでに学生時代、この両友人は、一七七〇年代の半ばに、ゲッティンゲンで一緒になっていて、「ドイツの樫の木」の下で、同盟を交わして、クロプシュトックの吟唱詩人の歌を朗唱しながら、ヘルマン[Hermann der Cherusker（紀元前 17-紀元後 21)]と[その妻]トゥスネルダの祖国に対し、永遠の禊ぎをしたのであった。ザイデントプフは自分の誓いに忠実であった。当時の若い熱狂の日々と同様に、彼にとっては今日もなお世界の残余はゲルマン的風習の伝導を完遂するための単なる素材にすぎないように見えていた。しかしトゥルガニーはポンスとクロプシュトックによってなされた誓いをとうに忘れていた。すべてポンスに重きを置いて、少なくとも見せかけは、汎スラブ主義の福音をなすことに満足していた。ヨーロッパ的再生の可能性はドン川とドニエプル川、それに更に東部の間にあった。「常に」と彼はこの前ホーエン・フィーツに滞在していたとき請け合った、「若返りはヴォルガ川の岸辺からやって来る、再び我々はこのような目覚めの過程を目前にしている」。半ば冗談で、半ば本気でなされた矛盾の言動で、ザイデントプフにとっては単に彼の友の政治的異端を印付けるものであった。

しかしこの友は、その半分も、彼自身が描くほど、黒い[陰険な]ものではなかった。彼は鋼と石の原理に従って議論していたにすぎない。苛烈なものに対して苛烈にである。すると火花が生ずる。この火花が彼にとってはその件自身よりも大事であった。その上この汎スラブ主義の法律顧問官は、論争と、再三疑問視される勝利とが、夙にザイデントプフの生涯の欲求になっていることに気付いた。それ故、論争相手の役割が、自分自身に対する配慮よりも、ザイデントプフに対する配慮からもっと気に入っていた。

第十二章
牧師館の訪問

今日、一八一二年のクリスマスの祝日の二日目に、ホーエン・フィーツの牧師館で予期されていたのは、法律顧問官のトゥルガニーであった。レーヴィーンもレナーテも同意しており、彼らと共にショルレンマー叔母とマリーも一緒であった。

四時が過ぎていた。すでに薄暗くなっていた。訪問はいつあってもおかしくなかった。部屋は一切が祝日らしく準備されていた。更に一つでも埃が見られると、我らの友は羽箒を持ってそれを払った。それから彼はハンカチを取りだして、自分の好きな戸棚のガラスを磨いた。武器を有する者は、錆び付かないように気を配る。埃が余りに厚く積まれた神学上の書架に近付くことを彼は避けた。その間ある出来事があり、一瞬彼は自分の仕事から目を離した。彼の側を、あたかも世界が等閑にされているかのように、かなり強引なやり方で、赤い顔をした白い頭巾の一人の婦人が書斎に侵入して来て、置かれている塵取りに薫香精を、当時の流行に倣って、降り注ぎ、数回空中を過って、それから更に隣室へ飛んで行った。そして撃剣術と乳香瓶撒布の丁度中間にある彼女の動作を、その奥まった各部屋で続けた。ザイデントプフ牧師は、見送りながら、微笑した。丁度冗談の言葉が唇に浮かんだように見えたが、その言葉を発する前に、玄関の呼び鈴が鳴った。雪と冷気を振り落とす為の玄関と麦藁マットの上での足踏みの音で、訪問のあったことが明らかに察せられた。

しかしフランクフルト[オーダー河畔]からの法律顧問官ではなかった。まずは領主の館

からの友人達であった。レーヴィーンがショルレンマー叔母を案内して、レナーテとマリーが続いていた。互いに愛想良く挨拶がなされた。レナーテは温かく感じて、ショールを取って、一瞬、ブローチの針を手に取って、どこに置いたものか迷っていた。それからガラスの戸棚を開けて、針を砕けた骨壺の一つの中に置いた。彼女はその家の子のようであった。皆が笑った。ザイデントプフも一緒であった。

「牧師さん」(とレナーテは始めた)、「今天から雪片となって降っているものが死者の灰の雨なのであれば、将来のザイデントプフ家では、ヴェンド族の一つの埋葬鉢へのこの浮彫ブローチは何になると仮定するでしょうか」。

「ヴェンド族ではありません、全くありません。レナーテさんの話しには引き込まれますが」と上機嫌でザイデントプフは答えた。「まだトゥルガニーを待っています。それで前哨戦に力を傾注できません。最も好きな話しですがね。しかしコーヒーはどこで飲みましょうか」。

「ここ、ここ。書斎、喫煙室がいい」と皆が異口同音に叫んだ。殊に喫煙室の言葉が強調された。レナーテはこう主張した。

「吸えない犠牲はいやです」。

「そういう次第ならば、犠牲は多いほど、幸せですな」。

「ご親切に。全く古き良き時代のままですね。首都にいる方々は」(と悪戯っぽくレナーテはレーヴィーンをちらっと見た)「私どもに上品な作法を教えようと自惚れるものです。ここがその作法の勉強椅子になります。ここホーエン・フィーツの牧師館が」。

椅子が置かれた。円卓の周りに皆が腰掛けた。円卓は考古学室に押し込まれていて、このコーヒー卓に、先に言及した女性が現れた。彼女は早速、ホーエン・フィーツの牧師館での彼女の重要性について疑念を抱かせないやり方で、すべての出席者から挨拶された。彼女の出自と作法に従えば、勿論彼女はフリーズのスカートと黒い絹のスカーフを身に着けなければならなかったであろう。しかしすべての家政婦は結局自らの上を行くもので、ホーエン・フィーツの家政婦も例外ではなかった。

勿論彼女はちょっとしたお世辞を要求していて、例えば客人の側からの立派な対応を期待していて、後に牧師の側から、祝日に食卓に加わるようにとの要求を待っていた。しかしそれで彼女の自尊心は満足した。彼女は次々に要請を拒んで、そもそも案内がなされたことで満足していた。

彼女は今やコーヒー・ナプキンを置き、二個の二重支柱の燭台を据え、同時に食卓の中に小さなライオンの足の砂糖入れを据え、この立派な中央配置を二個の銀製の籠で包囲した。その籠の一つは色々な種類の小さな焼き菓子を含み、もう一つの籠はピラミッド状のコーヒー用菓子を含んでいた。最後にマイセン焼きのポットそのものが来た。ポットの蓋にはアモールの神が悪戯っぽくその弓に寄りかかっていた。牧師はこれに反撥を覚えたことはなかった。ひょっとしたら一度も気付いていなかったかもしれない。

レナーテは女将役を行って、砂糖を早速カップに分けて、(大きな砂糖塊は当時の流行ではなかった)、その際砂糖鋏を、この使いにくい道具を使うときにのみ許されるようなかの優美さで取り扱った。最初の大胆な前哨戦の後の会話は、すぐにまた規則的なものへ移って、天候のことで始まった。これは一八一二年にはまだ全く格別な意味を有していた。天候について話すことは当時愛国的であったと言えよう。雪と冷気は大きなロシア側の同

盟仲間であった。

最初小さな羽毛となって舞っていた雪は、次第により密に窓辺で渦巻くようになって、牧師ザイデントプフの書斎の部屋の心地良さの中から、　一　書斎がコーヒー部屋となってからは二重に気持ち良くなって､今やホストと客人達は雪の渦巻きダンスを眺めていた。

休止が生じていた。「雪が募って来る」とレーヴィーンは始めた。彼は一番窓辺に座っていた､「あたかも神自身が彼らすべてを埋葬したかのようだ。彼らの上に破滅が襲う。破滅がかすかな雪片となって天から落ちて来る。その間に私は我々に呼びかける声を耳にする。『汝らは介入するな。私自身が行う以上のことをしようと欲するな。私が一人でやってのけよう』と。牧師様、私にはよく分かっています。私が耳にしている声は、単に私の同情の声にすぎません。その声に耳を閉ざす必要がありましょうか。この同情は弱さでしょうか。同情をやめなければなりませんか」。

「いや、レーヴィーン、そなたの心はいつも正しい道を進んでいる。従って後悔をする理由のない何ものかがあるとしたら､それは同情だ。それに我々の敵は､我々の同盟者だ。かくて我々にこれらの日々には誠実であるよう教えている。敵に対してもな。謙虚であるよう、これまでの年月が我々に教えたようなものだ。あたかも神自らがその剣を我々の手に渡すかのように思われる時が来るであろう。しかしこの日は、ひょっとしたら間近かもしれないが､まだ来ていない。しかし一つのことだけは今日も､未来永劫も大事なことだ。我々の行動は率直なものでなければならない。これがドイツ流だ」。

レーヴィーンは答えようと思った。しかし鞭の音と鈴の音が、まさに村の露地を登って来て、会話を中断させた。ザイデントプフは叫んだ。「着いたな」。

三人の紳士達であった。彼らのうち二人は、グレーのコートに、黒い布の帽子で、樺のクッションの椅子に座っていた。一方三人目の男は、毛皮の上着にフェルトの帽子で、御者台に座っていた。この三番目の男がまず木の席から降りて来て、寄って来る牧師館の下僕に手綱を渡して、それから他の二人の、はるかに若い、しかしもっと無器用な紳士達に手助けをして、その座席から抜け出して、無事大地に着けるようにした。

こうしたことすべてを我々の友の人々は、降りしきる雪片から見える限り、窓から興味津々の目で追っていた。これは単に村の冬の静かさそのものを経験した者のみが知っている目つきである。

「トゥルガニーが乗せて来た二人の見知らぬ方は何方です」とレーヴィーンは尋ねた、「あの優雅なミンクの毛皮で、我らの友法律顧問官殿が、こんなグレーのコートの者達の御者とは似合いませんな」。

「私の同僚達よ」とザイデントプフは、赤面しているレーヴィーンにちょっとした当惑を許しながら答えた､「半同僚と全くの同僚だ。全くの同僚というのは、そなたも知っておいて欲しいが、我らの隣人、ドルゲリーンの牧師だ。半同僚は差し当たりまだ教頭職だが、間もなく神聖な牧師館に入ることになっている。教頭のオテグラーヴェンで、トゥルガニーの特別な友だ」。

新しい客人達は、その間毛皮とコートを脱いで、玄関で法律顧問官の声が、いつも半ば馴染みの感じを示すかの明瞭さで響いた。それからドアが開かれ、三人が皆入って来た。挨拶が済むとより間近に一緒になって、二番目のテーブルが直角に押し込まれて、早速活発な会話の流れとなった。トゥルガニーは本人が自慢して好んで請け合ったように、中断

を好まなかった。

彼は、このような事柄では優れたかの将軍の眼差しで、最良の席を選んで、単に彼の友の骨壺の下に座るばかりでなく、(ここは結局諦めることになるはずで)、レナーテとマリーの間にも座って、ここはショルレンマー叔母を巧みに片付けて、　ー　叔母に、彼の友のオテグラーヴェンが、彼女と一緒にグリーンランドの伝導について会話できれば、幸いなことになるであろうと、囁いて、　ー　完遂したのであった。「オテグラーヴェンは自ら伝導師となるつもりだったのですよ」と。この戦略で得た席に彼は早速割り込んで、今や両レディーにたった今乗り越えて来た冒険について語った。彼はその際格別慎み深くなく、これはそもそも彼の得意分野ではなく、遠慮会釈なく、その形姿全体で勿論それを誘発しているドルゲリーンの牧師を自分の物語の滑稽な英雄に仕立て上げた。一陣の突風が、野原を斜めに、この旅の同行者の頭の覆いに吹き付けて、一種の帽子追っかけが始まることになったのです。この光景は忘れがたいものです。風が高く閉ざされた二重襟の中に吹き込んで、あたかもファウスト博士の直系であるかのように[悪魔との契約の後、空中を飛ぶマントを得た]、この帆掛けて進む牧師はますます遠くへと運ばれて、遂にこの面白い光景はオーダーブルフの溝の深みへと消えてしまいました。この溝へ、つまり牧師は、落ちてしまったのです。しかし選ばれし者が落ちるのはいつも、単にその幸運を見いだすためです。ここでもそうだったのです。まさにこの溝に帽子はあったのです。

その間ドルゲリーンの牧師は、レーヴィーンと穀物の値段について会話していた。ショルレンマー叔母と教頭は、南極と北極の伝導の比較を行っていた。一方トゥルガニーはまさに、クリスマス・イヴに行った即興子供舞踏会について話しだし始めていた。彼は幼い娘達の言葉遣いで話し、自分の有するある種の描写才能を発揮して、少女達の顔つきや姿勢の勿体振りを模倣していた。法律顧問官の理想が達成されていた。中断しないことである。

トゥルガニーは、その肖像に、二，三更に筆跡を加えるとすれば、五十代の壮年で、その形姿に何か若々しさを保っていた。すべて世辞を嫌っていたが、七年戦争[1756-1763]後の生まれという世辞は甘んじて受けていた。それで丸十年の儲けが許された。彼は姿勢が真っ直ぐで、金縁の眼鏡を付け、亜麻色の巻き毛のトゥーペー[ヘアピース]を付けていた。この巻き毛はかつては別人のこめかみにあったもので、我らの友は、気分次第では自らこの豊満なブロンド髪を嘲っていた。自分の青春時の真の亜麻ははるかに野に散っていたのである。彼はその冗談は言ったが、他人が自分の例を述べることは少しも好まなかった。彼の新鮮に保たれた顔は規則的なものと名付けて良かったろうが、ただ左の鼻翼は、欠けていて、決闘立ち会いの医師から下手に縫合されていた。一種の玄関となっていて、まさに通常の鼻翼と言うには大きすぎるものであった。彼の本性となっている大胆さはこれで増大し、彼の口許に漂っている豪胆な気分の特徴に合っていた。

両聖職者は別種の類で、我らの友法律顧問官とも同様にお互い異なっていた。彼らに共通しているのは、黒い上着と白いスカーフであった。教頭は当時マルク地方では稀にしか見られないような方向の者であった。信仰の喜びと共に、厳格に信心深い者であった。ホルシュタイン地区に何年か滞在して、そこで彼は「ヴァンツベックの使者」[Matthias Claudius(1740-1815)発刊]と後には、ディトマルシェンでやはりクラウス・ハルムス[Claus Harms(1778-1855)]と知り合いになったのであるが、その影響が残っていた。彼はキリス

ト教のことや信仰問題については余り話さなかったが、しかし世俗のことにもその取り扱い方で一つの清祓を与えていた。彼はすべての事を神との関連で見ていた。これが彼に明瞭さと静謐さとを与えていた。彼が話すと、何か周りに明るいものが生じた。これが彼の普通は強張った衒学的な外見を和らげていた。

ドルゲリーンの牧師は多くの才能が欠けていた。しかし最も確実に欠けていたものは、信仰の照明であった。彼は百姓達にその訴訟の手続きをするという意味で理解した実践的牧師の先導に尽力し、トゥルガニーから「同僚」とか「ドルゲリーンの神託」とか「レブースの市場表、相場表」と交互に呼ばれることに甘んじなければならなかった。彼は正統派信仰者でも合理主義者でもなくて、単に三人のカルタの[荘園主と村の教師との]昔からの地方牧師の方向性に帰依していた。あるときと、少なくともトゥルガニーは語っていたが、彼は中年の未婚のレディーに、自分はドルゲリーンで「パートナー」を見いだせないと嘆いて、夢見心地の誤解を与えることになったそうである。ちなみに彼は健気であると共に視野が狭く、好かれていた。ただ敬意が欠けていた。

新参者はこのような人々であった。法律顧問官は丁度、レナーテとマリーの前で、かのフランクフルトでの子供舞踏会の夕べに三時間チェロを演奏した小さな不具の素人音楽家の物真似を始めていた。そのときショルレンマー叔母が、二重支柱の明かりの一つを手に取って、社交的儀礼義務を終えて、書斎を去るという合図をした。老レディーは自ら隣の部屋、それから次の奥まった部屋へ歩んで行った。社交のすべての若い人々も従った。オテグラーヴェン、それに牧師ツァーベルさえも例外ではなかった。

ただトゥルガニーとザイデントプフの旧来の友にして敵が書斎に残った。

第十三章
オーディンの馬車

正餐前の時間、　一　旧来の慣習に従えば、ちなみにトゥルガニーは今日これを外したくなかったのであるが、これは学的交易の一つで、いわば戦闘であった。この短い時間の間に、法律顧問官は快活に決然として、牧師はそれをとても望みながらも、同時にいつも新たな不安の念を抱いて、かの戦闘を迎えるのであった。というのは彼は声高に自分の体系の揺るぎなさを宣言しようと思ったけれども、まさに自分の最も確かな確信の裏に懊悩の疑念が隠されていたからである。すべての体系は崩壊する、と彼は自身に言っていた。新たな議論の前に、このイメージが忍び込んで来た。つまり、今おまえの建築が崩れる、と。

このイメージが今日もやって来た。トゥルガニーが、その間廊下から小さな箱を取り寄せて、この箱を一種厳かな調子でテーブルに置き、ただこう言ったとき、一瞬その不安のイメージが増大した。「これは、ザイデントプフ、君のためのものだ。その中身は非キリスト教徒的なものだが、私のクリスマスの贈り物として受け取り給え。君がそれにふさわしい場を、君の中か、それとも君の外かに見いだすかは、勿論分からない。それが君の体系に合うのであれば、私に対する武器をそれから仕上げるがいい。そうなったら、君自身が勝利する手助けをしたことは私の誇りになろう。その逆の場合は、率直に認める勇気を持つことだ。まあ開け給え」。

ザイデントプフが蓋を取って、箱から小さな青銅の馬車を取りだした。それは三輪で走っていて、一対の短い轅を持ち、その上には、軸に密接して、六羽の同様に青銅の小鳥が止まっていた。すべてまさに飛び立とうとする姿勢であった。全体は、立方体として見て、人の手より余り大きくなく、技術的巧緻さと同時に造型の美しさへのセンスを物語っていた。

牧師は眩惑された。一瞬、彼の中、彼の許の批判的なもの、あるいは体系的なもののすべてが、収集家の素直な喜びの中に沈み、法律顧問官の手を握って、こう言った。「これは珍品だ。私の収集品の宝となろう」。

それから彼はその馬車を、あたかも五十歳若返ったかのような感情と顔の表情を浮かべて、テーブルの上に転がした。

トゥルガニーは、自分がもたらした幸福を喜んだ。しかし素早くまた昔からの好敵手精神に捉えられて、我らのザイデントプフの屈託のなさを、短く「さてそれでだ」と言って破った。

牧師は、まずはまだ喜び、感謝の念で生じたかの優しい気分の中で、大審問官風な「さてそれでだ」に対し、獲物と収得馬車についての色々な質問を交えて、勝負を避けようとした。しかし無駄であった。収得場所についての質問で、すでに批判的領域に侵入しており、それ故トゥルガニーは個々の言葉を特に強調して述べた。「それはオーダー川の向こう側なのだ。道路人夫がレッペンとドロッセンの間で見つけた。泥灰土の中に隠れていた。ドロッセンはヴェンド語で、『道端の町』という意味だ。オーダー川がいつでも境の川だったのだ」。

「それは関係ない」とザイデントプフは冷静に述べた、「川のこちら側と向こう側とにドイツ人が住んでいた時代があったのだからね。ただ部族は違っていた。どの部族がこちら側、あちら側か、この点は論争されるかもしれない。私はどちらも単にゲルマン族と強調したい」。

トゥルガニーは微笑した。「それでは君は本当に思うのかい、君のセムノネス族とかそんな族が、証拠によれば唐檜と樫の木の下に住んでいて、動物毛皮を纏っていたそうだが、このような工芸品を創る能力があった、と」。彼はそう言って馬車を示した。「私が君によく言っていたように、彼らは消えてしまった、木々の許の葉のように、一緒に森に住んでいた野牛のように消えてしまった。世界に珍しいことがあることは、つまりここかしこで、沼地とか泥灰土の中で、岩塩で石化したセムノネス族にあるとき出会うということは有り得る。そのような掘り出し物にまた出会ったら嬉しいことだろう。しかしその掘り出し物はここで問題になっている面から見ると、何の証明にもならないだろう。セムノネス族は存在した。確かに、しかし彼らは何も創造しなかった。彼らは伝播した、それがすべてだ。芸術、発明という意味での一つの創造を彼らは知らなかった。この馬車は高度な文化の産物だ。誰がこの文化をこの地域にもたらしたのか。そういう疑問が生ずる。君は私の答えを知っていよう」。

ザイデントプフは黙っていた。

「私は君によく話して来た」とトゥルガニーは続けた、「繰り返さなければならないが、君のように本気が学問している男が、百もの他の面では特に偏見は見せていないのに、スラブ族の先住地の文化を論駁できるというのは、私には理解できないことだ。君の体系は

ソフィスト派の集積だ。我々が生まれた古いプリーグニッツから始まって、我々が二人とも住んでいるこのレブース地方まで、国の部分そのものも、それに町や村も、ヴェンド族の手で生じたことの永遠の印に、立派なスラブ語の名前を有している。第一にこの古き、ホーエン・フィーツだ。その住人は、他の多くの徳操と並んで、部族の問題とか種族の問題についての寛大さという徳操を有している。私自身、彼らにこの点で真似ることができない。あるがままであろう。この一帯のドイツ人ときたら野蛮人だ。彼らは人間を犠牲にし、敵の腹を火打ち石で切り裂いた。しかし立派な習俗のヴェンド族、君の否認するヴェンド族は、神殿を有し、上品な織物を身に着け、化粧し、神々を黄金の帯金で飾った。君のセムノネス族世界は、伝説的な華美ヴィネタ[ヴェンド族の町]、空想的な大きな神殿レートラとオレグンガ[ヴェンド族の神殿の地]に比肩するような何を提示できるかね」。

「伝説的な華美」とザイデントプフは繰り返した、「この形容に含まれる告白で私には十分でしょう。しかし私は、失礼、私の敵が不用意に私の手に渡してくれている武器の使用を断念しましょう。だからレートラやユリーン[ヴィネタ]の文化についてあれこれ憶測するつもりはありません。しかしこの後の世の、我らのゲルマン世界の刺激の下で自ら勃興しているヴェンド族の世界はたかだか一千年のヴェンド族世界であって、見たところこの青銅の馬車は、我らの時代計算では最初の頃の世紀に遡るものです。三世紀、ひょっとしたらもっと先かもしれない」。

「よろしい。君はこれを何と思うかい。これは何だ。何を意味している」。

「今日に限ってはこの論争を、君にはとても恩義を感じているから、避けたいと思っていた。しかしそうは行かないとなると、遠慮しない。これは考えられる限り明瞭に、古代ゲルマン文化の一つの象徴と見なしたい。これは他ならぬ、オーディンの馬車を象徴している」

「少し無理だな」と今やトゥルガニーは更に鋭くなって行く声で答えた。「森の中へ木霊するように、また森の外へ木霊するものだ。それで遠慮なく、私の側としても考えられる限り明瞭にこう主張することにする。このオーディンの馬車というものは同様の権利で例えばこう言える。どこかの泥灰土層で見つかった幼児用馬は、ヴェンド族の太陽神の馬の象徴的描写であろう、と。君は度を過ぎている。この馬車は単にルーティツェン族、あるいはオボトリート族の侯爵の息子の玩具に過ぎない。どこかの若々しいプリービスラフ[九八二年頃。キリスト教徒となった]あるいはミスティヴォイ[オボトリート族の侯爵、すでにキリスト教徒となっていた]の息子のな」。

ザイデントプフは答えようとした。しかしトゥルガニーは続けた。「快活な家庭生活のあるイメージが私の眼前に広がってくる。豊かに彫刻された柱頭の木製の柱が立派に飾られた天蓋を支えている。テーブルに沿って、賽子やワインを楽しみながら、ヴェンド族の剣を持った男達が座っている。最上席は侯爵。侯爵が唯一の息子の健康を祝して飲む、今日は息子の誕生日のお祝いで客人達が多く集まっているのだ。ホールを通って、左右にお辞儀しながら侯爵夫人のプリービスラヴァが歩んで行き、挨拶の動きのたびに、彼女の白い服の黄金の総飾りが輝く。彼女の右手側に彼女は少年を連れている。少年の巻き毛はカワウソの皮の帽子からこぼれていて、その背後では立派な玩具が転がって来る。この誕生日に贈られたものだ。そしてその玩具がここにある」。

こう言って、トゥルガニーは所謂オーディンの馬車を持ち上げて、またテーブルに置い

た。

牧師は微笑んだ。トゥルガニーも、自分自身が喚起したイメージの観照で心がより快活になって、また更に平静に見つめて、和やかな調子で言った。

「ザイデントプフ、私は切り札に切り札を対置したのだ。君は挑発した。君に従って、考えられる限り明瞭に語ったからには、私がどういう意味で言ったか、君は分かるだろう。我々両人にはただ一つの些細なもの、『証拠』が欠けている」。

「証拠は出せるよ」。

「よろしい、出し給え」。

「君はまず青銅ということは認めるだろう」。

法律顧問官は頷いた。

「君はこのゲルマン時代の青銅は、鉄が専らヴェンド族のものであるように、専らゲルマン族のものであることを、更に認めるだろう」。

トゥルガニーは再び頷いた。しかし募ってくる苛立ちを見せていた。

「結構。このことが君の側で了承されるならば」とザイデントプフは続けた、「君の応酬で我々の戦いは調整されることになる。党派性がなく、自己抑制の君の行為に感謝する。この馬車は青銅だ。これは青銅だから、ゲルマン的なものだ。これが肝心な点だ。これがゲルマン世界の内部にあったことは、これはまず二次的な意味のものになる。しかしこの点についても恐らく疑念はないだろうと私は主張しなければならない。車軸と轅の上のここのこの小鳥がその証明だ。これらはオーディンの烏だ。これらがオーディンの前に跳んで来ている。表現して良ければ、烏が謎めいた走行を先導しているのだ」。

「それでは君はこれを烏と見なすのか」。

「見るだけでもう詳述する必要はないね」と牧師は答えた。

「それでは言わせて貰うが、私の鳥類学的知識によれば、これは少なくとも、君の知識の雉と田鷸の間にある全領域より勝るもので、この所謂オーディンの烏は、すべて翼で飛ぶもの、それ以上でもなければ、それ以下でもないね。コウノトリと白鳥から始まって、鵠とイスカに至るものだ。それで私は君に向かって叫ぶね。轅に止まっているのは六羽のトキだから、このイシスとオシリスの馬車万歳と。そして六羽の鷲が飛んで来ているから、このジュピターの馬車万歳、と」。

この論争の間、隣で家政婦は皿やカップをがちゃがちゃ言わせ、無頓着に甲高く拡張テーブルの脚をねじ込んでいた。この無頓着さは昔から自分の重要性を確信している台所部門の特権を形成しているものである。しかしこの物音にもかかわらず、トゥルガニーの鋭い声は奥の客室にまで響いて来て、それだけ一層早く皆が集まるよう仕向けていて、いずれにせよ、いつでも好ましい「食事です」の声が今にも呼ばれかねなかった。行列を先導していたレナーテとマリーが、書斎の敷居に現れたとき、法律顧問官は最後の嘲笑的切り札を切った。

「ようこそ」とトゥルガニーは叫んだ、「我々の若い女性の友、この圏内での快活な捕らわれない人々の代表に、裁判官となって貰い、私と君との間の決着を付けよう。愛の宮廷裁判、歌合戦だ。試合場にいるのは、ザイデントプフとトゥルガニー」。

ザイデントプフは満足していた。皆がテーブルに着いた。レナーテは議長となり、論争している当事者に、その件を述べるよう要求した。トゥルガニーがまず話した。それから

ザイデントプフが締めた。「問題は単純化して言えばこうです。この馬車はカルトの対象か、それとも単なるがらくたか。敬虔に眺められたものか、それとも遊ばれたものか。そこで諸君、オーディンの烏よ、円を描いて、正しい裁きを告げ給え」。

レナーテは論争している二人をちらと見て、それから言った。「何と盲目なのでしょう。友の方々。あなた方は木を見て森を見ていません。これ以上簡単な問題があったでしょうか。薄暗い遠方の中、探し求める必要がありましょうか。この馬車は、勿論象徴的意味でですが、戦車[論争の馬車]に他なりません。あなた方に独自の永遠の不和の、ドロッセンとレッペンの間に見つかった像に他なりません」。

皆が快活に同意した。一緒に判決を受けた二人は手を差し出した。しかしレナーテは、奥で仕事している老家政婦の合図にようやく然るべき注意を向けて、今やザイデントプフの腕を取って、隣室へ歩んで行った。そこでは饗宴用に準備された食卓に亜麻布が輝いていて、明かりが燃えていた。

第十四章
「飛ぶことが出来るものは、皆、高く飛べ」

隣室は食堂で、そこはあっさりと飾り気がなくていいというすべての食堂の特権を贅沢に使用していた。ただ支配的な素っ気のなさを二つのものが中断していた。廊下へ通ずるドアには、大きな、はなはだ黒ずんだ、ルーベンス[Rubens （1577-1640）]派のいずれかのオランダ人の手に由来する熊狩の絵が掛かっていて、向かい側の狭い壁の窓間壁には高い胡桃の木の段棚があって、その最上段の板には浮彫の籠が、描かれた雪花石膏の果物、梨やオレンジ、葡萄と共に飾られていた。「熊狩の絵」は五十年以上前に、フィッツェヴィッツ家の食堂の改築の際に、領主の館から牧師の館へ迷い込んだもので、当時ザイデントプフの陽気な前任者が、狐猟や兎猟とは関係ない範囲で、ホーエン・フィーツ家の魂の司牧の責務を果たしていたのであった。

部屋はとても簡素で素っ気ないものであったが、ザイデントプフ家の客人達が食堂を占め、活気付け始めると、その瞬間からとても対照的な印象を与え出した。腕木燭台、緑色と白色のグラス、とりわけ食卓の中央を占めて、長くて褐色の角が一杯で、ホーエン・フィーツの牧師家の名産をなしているバウムクーヘンが全くより快活なイメージを作り出して、このイメージはその奇妙に構成されている枠縁、つまり素っ気ない壁や黒ずんだルーベンス、雪花石膏の果物から、欠点よりもむしろ利点を引き出していた。

トゥルガニーは、またもや若い両レディーの間に席を確保していたが、一杯の紅茶が幸い彼の側を通りかかったとき、自ら給仕している老婦人の耳許に若干の言葉を囁いた。その言葉は、老婦人に十分了解された風に見えて、婦人は頭を振って答えていた。

「新しい企みですか」とレナーテは尋ねた。

「ひょっとしたらね」とトゥルガニーは述べた、「でも、美しい隣の女性の好奇心を試すのに時間をかけようというものではありません。いずれにせよ、『オーディンの馬車』よりもっと普通に関心を引く珍しいものです」。

この会話がまだ続いている間に、家政婦の女性がまた食卓の先端に現れ、平たい鉢を差し出した。その黒い粒の、レモンのスライスで豊かに飾られた中身は、珍しい性質のもの

であることに長く疑念を抱かせるものではなかった。

「おやおやトゥルガニー」と愛想のいい非難を込めてザイデントプフが口ごもった。

「早まって感謝するに及ばない」と愛想のいい法律顧問官は言葉を続けた、「友よ、君はこの黒い粒[キャビア]の裏にある秘密の企みに気付いていない。すべての食事条項に反して、これはすでにすべての活発な議論を食事の喜びから排除しようとしているものだが、旧来からのトゥルガニー・ザイデントプフ論争をこの君の饗宴のテーブルに運んで来て、この珍しい料理を君に対する新たな武器として借用しているのだ。これは君が大目に見ると信頼して敢えて私がここに持ち込んだものである。いや、友よ、ここに地の塩[マタイ、5,13]がある。まだ風味を失っていない唯一のものだ。この黒い粒は東方からの前衛に、偉大なスラブ世界のアヴァンギャルドに他ならないのではないか。ヴォルガ川からの使者だ。アストラカンがこの古い国レブースに迫って来る。こうしたことすべての意味深な象徴だ。ここを故郷とする草原の騎士達がもう追って来ている。我々は彼らを待とう。我々の心を準備しよう。新しい時代の塩万歳。偉大な母なるスラブ、我らのヴェンド族世界の根源の母万歳、ロシア万歳」。

ザイデントプフは、はるかに愛敬があって、こうした悪戯には理解を示す用意があって、早速立ち上がった。「どうぞ、グラスに注いで下さい」と彼は始めた、「勿論緑色のグラスです。我らの友は、我らの時代の塩、ロシア、アストラカンの大草原に万歳を捧げられた。私はこう強調できましょう。視覚的錯覚、巨大な拡大というのはかの大草原地帯の性格的特徴の一つであって、その例の一つとして旅人はただのヒースの藪が立派な木々に見えると報告している、と。しかし私は我らの論争をただ焚き付けることになる意見表明を断念致します。私は諍いを渇望していません、和解を望んでいます。それではよろしい。元気付けるヴォルガの塩万歳、しかし同時にこのドイツワインも快活にし、昂揚させてくれるもので、天晴れ万歳です。渋いものに火が集まるよう、力に熱狂が集まるよう祈念致しましょう。かくてスラブ世界とゲルマン世界が結婚して欲しいものであります。私どものグラスの中の真珠たるものは尚古い葡萄で、この葡萄を実らせ熟させた土地は我らのものでした。またそうなるべきでしょう。来年の葡萄液もドイツの圧搾場でなされて欲しいものです」。

グラスが打ち合わされ、トゥルガニーとザイデントプフも打ち合わせた。両敵同士抱擁し、皆が握手した。そして第二十九号の知らせ[報知紙]を基に、食卓の会話が推定上の政治領域に移って行き、愛国的感情が昂揚し、募った。

食事が終わるとようやく会話も終わりとなった。会話にはレディー達も、本来信頼の置ける素材が欠けていて、「だそうだ」がふんだんに遣われ、少なからず想像の飛翔が許されて、すべての欠乏を自らの話しで補うことになると、一層参入して来ていた。このような脆弱な基盤の上でなされる談話は、しばしば不快な事実でその進行が規定されてしまう談話よりも大抵一層満足感を与えるものである。

今や一行は食堂から、部屋の並びの最後となっている化粧室へ移って行った。そこは本来的に、十年前銀婚式の祝いのほとんど直後に現世から身罷ったザイデントプフ牧師夫人が残した調度をまだ有していた。一方の長い壁の側にソファーと白樺木目のピアノがあって、ソファーは背もたれが高く、五つの固い、大きな花柄で飾られた甘藻のクッションがあって、ピアノは細い、尺骨状の脚で、その華奢さは単にその音色でのみ凌駕されるもの

であった。ソファーの向かい側に「記念簞笥」があった。ここには銀婚式のとき一緒に行われた就任第二十五年牧師職の際に我らのザイデントプフに贈り物や捧げ物として贈呈された一切の品が集められ、収められていた。花輪と栄誉の杯の他にここには小判草の付いた二本の花瓶、煙草の付け木のコップ、アルバム、二冊の大きなビーズの絵の飾りの書類挟みがあり、そのうちの一つはホーエン・フィーツの教会を、もう一方はライツベルクの感化院を写していた。この感化院に我らのザイデントプフは数年間在職したのであった。まさにこの時代から小さな、パンの中身から作られた十字架があって、それ自体見栄えのしないものであるが、同時に見栄えのしない枠を付けられて、丁度ソファーの背の上に掛かっていた。それは鎖に繋がれて、終身懲役の判決を受けた罪人の作ったもので、この罪人は、単に仕事のために始めながら、自分の手仕事の間に信心深いキリスト教徒に生長したのであった。トゥルガニーはこれについて、こう述べる習慣であった。これは誰もが自らの神、自らの信仰を創造する新しい証拠の例である、と。しかしザイデントプフは、ここには自分の内奥が関与していたので、その対立する観照には惑わされず、むしろこう確信していた。この殺人者にも「今日にも汝は我と共に楽園にいることだろう」[ルカ、23,43]という言葉が響いて来たのだ、と。そしてこのパンの中身の十字架を信心深い臨終の者の手から受け取ったことを幸せなことと自ら称えていた。彼はそれをタリスマン[護符]に劣らぬもの、よりキリスト教的に言って、自分の家に祝福をもたらす宝と見なしていた。

部屋はそのようなものであった。ショルレンマー叔母はソファーに座った。彼女の隣に両レディーも座ったが、紳士達はテーブルの周りを丸く囲った。

「何の遊びをします」とレナーテは尋ねた、「皿回しか、ターラー遍歴、ハンカチ投げのいずれか」。

「それではいずれも抵当遊び[負けると余興披露]」と若干不安げになった牧師ツァーベルは尋ねた。

「確かに」とトゥルガニーは答えた。

「それでは」とレナーテが決めた、「すべてを勘案して、レーヴィーンの好きな遊びにしましょう。飛ぶことの出来るものは、皆、高く飛べ。つまり彼はこれを遊びの中の遊びと考えています」。

「それは面白そうだな」とトゥルガニーは述べた。

「勿論私は」と今やレーヴィーンが語った、「レナーテが決めつけた趣味の持ち主です。どんな遊びも、正しく見てみれば、結構なものです。しかし私の好きな遊びが最高と思われます。勿論これはちょっとした空想力とジェスチャーのセンスを有する者にのみ、まずは滑稽な味が出て来るものです。名付けられた動物が、大きいのにしろ小さいのにしろ、単に言葉として、単に博物史的コラムとしてしかイメージされない人、豹は飛ばないと自分の知識と考えの結果として、いわばまず補遺的にしかイメージされない人には、この遊びの魅力は閉ざされています。でも思いがけぬ時に指が上がった瞬間に、蜂鳥やカナリアに混じってタイの象が本当に飛んでしまう人にとっては、この遊びは、そのグロテスクなイメージ故に、いつまでも続く陽気さの源泉となります」。

「結構、結構」とトゥルガニーは言った、明らかにこの考察で刺激を受けていた。

「しかしこの遊びのこの面は」とレーヴィーンは続けた、「副次的な面に過ぎません。はるかに大事なのは別の面です。つまりこれは我々の精神を躾けます。迅速で緊張した手

綱捌きを教えてくれます。肉体的事柄でも、精神的事柄でも慣性という同じ法則が支配しています。慣性で球は回転して行きます。ここでもそれは正確に同じです。ますます迅速になりながら、指を七回上げます。指は回転する動きに陥って、指自体がほとんど飛びます。すると無器用で最も密なものが、我々の周りに軽快に可愛く舞っている鳥達の仲間になってしまいます。するとこれは、指がすべきでないことを、指はしてしまっているのです。そして飛び続けます。これが大事です。この慣性の法則に由来する動きを、速やかに生起するイメージの印象の許、同じ迅速な意志の力で阻止すること、これが私どもがこの遊びから獲得する精神的修練です。私どもはこのような練習を通じて、私どもの性格形成に一役買えるとこう思う次第であります」。

教頭は微笑した。彼はこの遊びの教育学的面を若干軽んじているように見えた。ただトゥルガニーは賛同を繰り返した。遊びは始まり、進行して、その引力は衰えなかった。竜は飛ぶか否かという古い論争は共演者達には質問されなかった。終わったとき、抵当の一連の数が、マリーが取り寄せた平たい作業籠の中に溜まっていた。

「我らの友レーヴァインは」と今やトゥルガニーが述べた、「遊びの中の遊びについて述べ、その際牧師の館にふさわしく、芸術家的観点、教育学的観点、それに倫理的観点、つまり三つの面から、この対象について明らかにした。類似のテーマに同じように詳しいやり方で切り込んで行きたいという思いに駆られます。抵当を出す際に、事の性質の最も内奥の秘密が明らかにされると、レディーの方々、お思いになりますか」。

「おやまあ」とドルゲリーンの牧師は述べた。彼はこの面にかけては無欠の良心を有していなかったのかもしれない。

「何か上品な当たり障りのないものを選ぶこと」とトゥルガニーは続けた、「そして同時に詰まらないものを避けること、これには技法が必要です。上等麻布のハンカチ、メモ帳、香水瓶、ブローチは真の模範的品と言えます。これらに勝るものはほとんどありません。私は勿論、異国人の、南国から私どものオーダー河畔へ漂流して来たレディーを知っていますが、彼女は微笑しながらその黒髪から大きな真珠のピンを取りだして、このピンを渡しました。私はこの手に接吻をしたくなった。これは輝かしい面への一つの例外です。それだけに、香水瓶やブローチの黄金の中庸の背後に留まることは一層容易です。肥満の年齢にある教授夫人を思い出しますが、何度も何度もその結婚指輪を抵当として指から抜いたものです。家庭での結婚生活の幸せについての言及は御免下さい。同じ社交で、コルク抜きと火打ち鎌の付いた十枚の刃のイギリス製懐中ナイフを、レディーの膝に保管させる紳士がいました。幾つかの絹の服を切り裂いた後、このナイフの怪物は、とうとう皆が憤激して叫び、消えてしまいました」。

法律顧問官は、反撥を買うと案ずることなく、この演説を行うことが許されていた。つまり彼は抵当の提出を格別に注意深く追っていて、正確にその結果を知っていたのである。ツァーベル牧師でさえ、紅玉髄の時計鎖程度のものを出していた。これは彼が時計にではなく、独自に一種のポケット・ピストルとして大きな両サイドのポケットの一つに入れていたものであった。

さて請け出しにかかった。

レーヴィーンは一番負債が多く、「岩石を運んだり」、「橋を架けたり」、「鎖を付けたり」しなければならず、ドルゲリーンの牧師は「ポーランドの乞食」として自分の運を試さな

ければならなかった。
とうとうこう言われた、「この抵当には何をしたらいいのだ」。「ハムを切る」。
それはマリーのネッカチーフであった。マリーは立ち上がって、部屋の真ん中へ歩み寄って、言った。「ハムを切る、ハムを切る。好きな人に目配せしましょう」。
その際彼女はフランクフルトの教頭に目配せして、全く屈託なく自分の口を差し出した。オテグラーヴェンは、いつもは自制心があるのだが、その血がこめかみまで上がって行った。彼は彼女の額に接吻した。それから両人はその席に戻った。
レナーテの他に、ただトゥルガニーだけがオテグラーヴェンの須臾の狼狽に気付いていた。

第十五章
シュミット・フォン・ヴェルノイヒェン

最後に請け出されるべき抵当は、メモ帳で、レナーテのものだった。彼女は歌を歌うよう要求された。彼女はその用意はあったが、いつも何を歌うかという疑問が生じた。幸い小さな白樺木目のピアノの上には色々な楽譜が積み重なっていて、レナーテはそれらの中から探し始めた。それは歌曲集で、歌詞に関する限り、両詩人派の一種の社交的外交によって採用されていた。この両派は当時ホーエン・フィーツのほぼ間近の地に、いずれにせよその養育場を得ていた。一方の派は地域の観点から見て、ニーダー・バルニム派で、他方はレブース派、先のニーダー・バルニム派は、粗野に写実的なもので、牧師のシュミット・フォン・ヴェルノイヒェン[August Schmidt(1764-1838)のこと、貴族ではない]によって、レブース派は、貴族的ロマン主義的なもので、ルートヴィヒ・ティークと、ブルクスドルフ家とその友人達のツィービンゲンに在住するパトロン圏によって代表されるものである。両派の間で、ホーエン・フィーツの牧師は、そもそもセムノネス族を例外に、何ら決定的な党派性を形成出来ずに、仲介の可能性を探っていて、交互にヴェルノイヒェンを承認する言葉とツィービンゲンを賛嘆する言葉を贈っていて、この自らの中途半端さを、これは教会上の問題となると、ミークライやウーレンホルストの嘲笑を受けるものであったが、文学上の領域でも今日はシュミットの『ミューズと優美女神のカレンダー』の購入を通じて、明日はティークの『ツェルビーノ』や『ファンタズス』の購入を通じて露呈していた。ちなみにピアノの楽譜は大方亡き夫人の時代からのもので、婦人は自らバルニムの生まれで、同時に夫より余り躊躇せずに、詩人ヴェルノイヒェンを少しばかり贔屓にしていた。
レナーテはあちこちめくった後、結局探すことに終止符を打って、すべての報われぬ恋の友へ宛てた牧師シュミットの数節『月に寄せる』を選んだ。タイトルには括弧で添えられていた「夜の十一時に、窓辺にて」。

幾夜も私はここで
秘められた恋に苦しむ。
御身は私の愁いを優しく
牧場を通じて眺め、

私の心は軽くなる。

しかし御身のように、あの娘が
優しく親しくしてくれたらと願う。
だから月光よ、あの娘を求め、
まじまじとあの娘の目を見つめ
あの娘の心を重くして欲しい。

レナーテはこの歌の歌詞と曲を知っているように見えて、堂々と歌ったが、しかし同時に声と感情とをかの誇張したやり方で歌っていて、これは表現の対象を左程評価していないときの表現者のやり方であった。

これは聞き手も聞き逃さず、聞き手も多くは歌のこの皮肉な処遇に同意しているように見えた。ただザイデントプフはピアノに近寄って来て、言った。「我らのバルニムの友は、我らのレブースの令嬢のお気に召していないようですな」。

「この人がどんなに」とレナーテは述べた、「どんなに謙虚な振りをしようとも、この人は詩人であるかのような気取りがあるのです。この人は詩人ではありません。翼のある馬に乗っている詩人をイメージすることは大事です。すべての詩の第一の任務は、平板な日常を後にすることですから。それでは牧師様、お尋ねしますが、翼があるにしろ、ないにしろ、どの馬に私どものシュミット・フォン・ヴェルノイヒェンは乗っていると貴方はイメージされますか。ひょっとしたらこうですか。

王侯の［令嬢用］白馬、
多彩に羽根飾りを風になびかせながら
青いヴェールで、白雪の胸を飾りながら」［Tieck: Kaiser Octavianus,1804 より］。

「いやレナーテよ」とザイデントプフは答えた、「この王侯の白馬はきっと違う。向こうのツィービンゲンの友人達の許ではまだほとんどかろうじて大事にされている十字軍の世紀は、我らの単純な、疑いようもなく家屋敷に縛られたシュミットの時代ではない。彼は全く時代そのもの、ジャンル全体、マルク地方全体だ。彼は可能な限り非ロマン主義的だ。しかしそれでも彼は詩人だ」。

「詩人ですよ」と今やドルゲリーンの牧師が口を挿んだ。同僚ヴェルノイヒェンと知己であることを正しく知らせることは、彼のささやかな虚栄心の一つであった。その上自分としても会話の流れに介入したいという願いを有していて、丁度その瞬間が来たと思われた。「我々の大いに叩かれて来た友は」と彼は続けた、「それでも一廉の詩人です。でも我らのレナーテ嬢は余りに多く向こうのフランクフルトへ交際されていて、本来的ブランデンブルク派と見られるバルニムの流派から新しいレブースの流派へ移っておられる。ここでは単にスペインの作品が読まれるだけで､ティーク殿と共に偶像崇拝をなさっている。あたかも彼の『月光を受けた魔法の夜』以前にはまだ、詩作も、正しい月も存在しなかったような按配です。この高慢さには立腹します。ドルゲリーンは確かに古いレブースの村ではありますが、この果たし合いでは全くニーダー・バルニムに応援します。例えばこれ

ほど素敵なものは詩作されたことはないと彼らが言おうとしましても、つまり

御身ら小さな黄金の星々よ、
御身らは私には永遠に遠い、［Tieck の詩、Nacht 夜より］

今すべてのリラで演奏されていますが、私はこう申します。いや、諸君、諸君の趣味は私の趣味ではない。我らの友ヴェルノイヒェンがその頑健な詩法でこう始めるとき、私は全く別様に思っています。

村の猟師達の号角が鳴る。
カップルが入って来て、目が一層輝く。
役人の書記がやって来て、百姓達が叫ぶ、始まりだ。
テーブルは片付けよう。これから百姓踊りの始まりだ。

これこそ言葉と私は言います。私には新郎が赤い毛織りのチョッキで入って来て、彼らが踊るとき、踵を打ち合わせる音を耳にします。ここには真の黄金があって、これに比すれば、『小さな黄金の星々』は消えてしまいます」。

トゥルガニーは心底笑った。ちなみにちょっとした当惑の休止が生じて、それでザイデントプフは、間奏曲全体を、ドルゲリーン式擁護演説はそう見なされるべきもので、巧みに取り繕って中断させ、自分の美しい好敵手の女性に向けて発した。「レナーテさん、貴女は、多くの方と同様に彼を低く評価しています。ひょっとしたら、私の方で反対の間違いを犯しているかもしれません。彼の心の長所をやはり彼の詩にも再び見いだすものですから。彼の人柄を知る必要があります」。

「それでは貴方の知見をご披露下さい。彼について語って下さい」。

「それはトゥルガニーの役です」と牧師は続けた、「彼は真に迫った描写の才があり、彼と昵懇で、彼も彼を同じく、以前の会話をしっかりと思い出す限り、評価しています」。

トゥルガニーは最初拒絶する手の素振りを見せた。それから説明して付け加えた。「ザイデントプフよ。取り違えがあるに違いない。ひょっとしたら君の同僚のツァーベル牧師との混同だ。たった今赤い毛織りのチョッキを感謝して思い出して、おだを上げているのを目にしたのだから。奴さんに頼んだら上手く行くと思うよ」。

しかしこの拒絶は、予見されたように、無駄であった。皆がトゥルガニーに迫った。彼はとうとう、渋々か上機嫌でか、皆の願いに屈しなければならなかった。ひょっとしたら嫌ではなかったのかもしれない。というのは彼は何より毒舌を好んだからである。「それでは」と彼は始めた、「皆が御存じのように我らの友、ヴェルノイヒェンは、説教家にして牧師であるが、しかしひょっとしたら貴方らが御存じなくて、そしてまことに本来彼の詩作の理解のために鍵となるのもがある。これがつまり、彼は夫にして父であるということだ。説教壇は彼の間近にある。しかし彼の揺り籠がもっと彼の間近にある。彼の家は子供部屋で、あるいはこの地方で言うように、行者というよりもむしろぎゃあぎゃあだ。勿論彼は真っ正直だ。彼は蜂を飼い、花を育て、客人達を散文ではなく、韻文で、大方はソネットで招待する。彼は謙虚で、自負心があり、寛大で、頑固で、無邪気で、抜け目がな

く、全体立派なマルク地方人だ。本来の部分が牧師のシュミット・フォン・ヴェルノイヒェンであることに満足できずに、彼の最良の友もやはり牧師のシュルツェ・フォン・デーブリッツだ[Christian Heinrich Schultze のこと、貴族ではない]。名前ト予兆。彼は長いパイプから吸い、房付き帽とナイトガウンを身に着け、この二つを例外的に着用していないときでも、この二つを着用しているように見えるものだ。彼の詩作の中で、『田舎娘のための歌、夕方乳搾りのとき歌う』という題のささやかな一群がいつも最大の印象を私に残して来た。それに添えられたメモに、つまり、眠り過ごす乳搾りの娘が搾る際目を覚ましておれるように詩作したと注釈があるものだ。この目的を達成できたかは疑わしい」。

ザイデントプフは、ささやかな不機嫌を呈示しようと努めた。「それでは詳しくは分からない。トゥルガニー。君自身、その描写でせめて若干公正であったと主張するつもりはなかろう」。

「私には分かりません」とレーヴィーンは口を挿んだ、「私どもは皆法律顧問官殿の活気ある色彩描写を心得ています。しかしある種の思い切った描写方法を取り除きますと、彼は私が衷心から署名したくないことは何も述べていません。ヴェルノイヒェンの詩は、実際、房で包まれた家庭の父の理想しか有していません。ヴァイマルからその詩に認定された拒絶は、然るべきものでした。幾多のものは確かに成功しています。これは可愛いものです。

誠実に愛を有する者は
ひっそりとした場を好む。
騒がしいものを離れて、
そこでこっそり喜ぶ。

静かな場を求めて、
かくも内密に、かくも愛想良く、
自らの意志にかない、
自らの本性のままである。

これは奥ゆかしいものです。しかしその側に深淵があります。彼は韻に対する好ましい才能と自然に対する目を有しています。これがすべてです。彼の描写は時にオアシスと見なされましょうが、彼の思考は砂漠です。砂また砂です。しかし一体マリーは彼についてどう思うかな。彼女は彼の歌を一度ならず読んだことがあり、レナーテにもそのことを話したと覚えているのだが」。

話しかけられたマリーは、こめかみまで赤くなった。仕方なかったのであろう。幾晩か一緒におしゃべりをして、彼女の判断の鋭さを知っていたレーヴィーンは、自分が当然話すように強いたそのサークルはかなり大きめのサークルであることを見過ごしていた。しかし彼女は素早く集中して、それから確固として、同時に羞じらいながら言った。「私はレナーテと全く同じです。彼は詩人ではありません、現実しか知らないから」。

「その描写の才能についてはどうです」とザイデントプフは中断した。

「その描写も感心しません。確かに描写は彼の一番のものでしょう。でも私が、『天の

果てしない穹窿を黄金の星々は移った』[Bürger(1747-94),Lenore]を読んだら、突然、これらの星々と我らのシュミットの日常の星々との間に無限の違いを感じます。この違いを上手く言い当てられるか、勿論自信ありませんが」。

「できるよ、続けて御覧」と彼女にレーヴィーンとレナーテが呼びかけた。

「やってみましょう。詩人というものは万物の鏡であるべきです。でもシュミットは何も写していません。彼はただ自然そのものを差し出します」。

「結構、結構」とトゥルガニーが口を挿んだ。「この批評的デビューに遅れを取っている論評を一つ以上読まされたことがある。シュミット的鏡は、私の理解が正しければ、全く鏡なんかではなくて、単に鏡の枠に過ぎない。そして彼が差し出す絵は、実物の自然の縁取りされた作品に過ぎないわけだ。我々が眼前にしているような自然だ、我々が、下がりながら、開け放たれた窓から三歩離れて見るときのな。とても結構」。

ザイデントプフはますます落ち着かなくなり、答えようとした。しかしトゥルガニーは、あたかも彼の友の不機嫌に何も気付かないかのように、今や彼独自のやり方で続けて、言った。「我々は今や我々の評決を下した。そして被告人は、好意的な、しかし全く党派的と見なされるべき彼の同僚、ホーエン・フィーツとドルゲリーンの諸兄の陳述にもかかわらず、有罪となった。ビュルガーのレノーレの『黄金の星々』が引用されたときのオテグラーヴェンの賛同の頷きを、不当なことではないと思うが、私は反シュミット派の意味に解した。ただ後重要な票が一票欠けている。ここで明確な質問をしたい。『ヘルンフート派はヴェルノイヒェンに如何なる立場であるか』と」。

ショルレンマー叔母は頭を左右に振って、以前よりも更に活発に手編み道具に取りかかった。道具は抵当から請け出した後、また手にしていたものであった。彼女は今やどんな返事も拒む意向に見えた。

しかしトゥルガニーは臆せず、裁判官風な威風を真似て、続けた。「それでは最強の手段に訴えなければならない[『ファウスト』、1321 より]。ツィンツェンドルフの名において、...」。

かくも厳かに宣誓された女性は、丁度編んだ針の一つを持ち上げて、法律顧問官に冗談の文句で脅しながら、それから言った。「レナーテとマリーの言う通り。彼は厭わしい」。

「彼は厭わしい」とトゥルガニーは繰り返した。「この遅れた証言の助けを借りると、ちなみにこの証言にはザクセン言語主義が窺われるが、我らの審議は新たな局面を迎える。美学的告訴に対して、わずかとは言え、倫理的要素が加えられるべく見える」。

「そうではありません」と今やショルレンマー叔母は決然と言葉を続けた、「でも彼は全く私の気に入りません。気に入らないのは、彼が聖職者の尊厳なしに、聖職者の服を着ているからです。法律顧問官殿は言い当てられました。揺り籠が説教壇よりも彼の間近にある、と。聖なるクリスマスのお祝いも、彼にとっては神の子のお祝いではありません。単に自分の子供達のお祝いなのです。彼自身反撥を恐れていません。私は彼の牧師としての心が恥ずかしくなります。駄目です。それはヘルンフート派の心にとって訴えるものではありません。この派の心にはまだ自分の子供時代のクリスマスの歌が響いて来ます」。

トゥルガニーは黙った。レナーテはショルレンマー叔母に近寄って、言った。「あなたが私どもの所にいらした最初のクリスマスに歌った歌をお願いします。私はそれが好きです。どうぞ、私も一緒に歌いましょう」。

ショルレンマー叔母は更に熱心に編んでいた。それから彼女は言った。「分かりました。そうしましょう。ここはクリスマスの牧師の家ですから」。そう言って彼女は立ち上がって、ピアノの許に腰掛けた。震える声で彼女は始め、レナーテの美しいアルトの声が鐘のように加わった。小さな音でピアノは伴奏していた。かくて両人は歌った。

優しい少年のイエス様、
ライオンをも躾ける
司牧の棒で、
哀れな民の小羊を守り給え、
若者となり大人ともなったイエス様。

幼き日々の
喜びの中へ
導き給え
いかなる時にも
かつての御身のように、
誠実で、子供らしくあるように、と。［Zinzendorf, Lied. Nr.1188］

そしてこのようにしてホーエン・フィーツの牧師館での二日目のクリスマスは終わった。

第十六章
二人の会話

十時半であったろうか、半ば抑えられた鞭の音と、その度に突然鳴り響く鈴の音が、二頭の栗毛の馬はその首を苛立たしげに脇へ向けて、牧師館のフランクフルトの客人に、橇が近付いて来たことを知らせていた。

ほどなくして、玄関が活気付いて、トゥルガニーの笑い声が、　ー　彼は、二番目の部屋から出て来て、まさにアリゲーターにぶつかって、この怪物を不気味に揺れさせていたが、　ー　外の通りまで響いて来た。そこでは牧師館の下僕が、手綱を持って、息を熱く吹きかけながら、あちこち足踏みしつつ、自分の半ば凍えた指を完全に硬直しないようにと守ろうとしていた。すぐその後ドアが開いて、その呼び鈴の弱い音を外で待っている橇の鈴の音と混ぜながら、橇の低いクッションの席にトゥルガニーと教頭とが今や素早く真っ直ぐに乗り込んだ。更に玄関へ挨拶して、手綱で馬の背に一打お見舞いして、雪の積もった通りを村の出口の方へ橇は進んで行った。ザイデントプフと一緒にまだ仕事を片付けなければならなかったドルゲリーンの牧師は、この同僚の許に残ることになった。

ホーエン・フィーツはすでに寝静まっていた。すでに荘園は暗闇の中にあった。ただ水車屋のミークライの所にはまだ明かりがあって、明るい微光が賽子状の、恐らく百年以上前からこの場にある石に注がれていた。この石から歩道が森耕地へと分岐するのであった。

「水車屋はまだ明かりがある」とトゥルガニーは言った、「多分教会外集会だな。ウー

レンホルスト本人だろう」。

しかしこの瞬間馬が怖じ気づいて、鼻息荒く石の方を避けて、それでこの場を切り抜けるのに若干緊張を強いられた。馬が上手く通り抜けたとき、法律顧問官は好奇心を起こして見回して、ようやくホッペンマリーケンに気付いた。彼女は石の上に座っていて、橇が見えてくると、不都合な時に、その鉤状の杖で敬礼したのであった。

「この小人は誰ですか」とオテグラーヴェンは尋ねた。

「ホッペンマリーケン」とトゥルガニーは答えた、「ホーエン・フィーツの郵便女として知られているが、他にも色々なことをしている。あれこれのことが囁かれているが、しかし証拠はない。彼女は夜よく出歩き、翌朝また戻って来る」。

「不気味な者ですね」。

「そうなのだ。でも、独特な奴で、それが役に立っている。フィッツェヴィッツの老父は彼女の多くを大目に見ている。しかし彼女の本来の弁護人はレーヴィーンだ」。

トゥルガニーの橇は素早く飛んで行き、側面へと動くたびに、雪を一フィート分高く押しのけた。枝垂れ柳と交互に高いポプラの木があって、左右から道を囲んでいて、方向付けとなっていて、その中を橇は、多分に運任せで、進行して行った。時折一羽の烏が飛んで、黙って、寝惚けていて、それからまた次の木の梢に止まった。その上には星空があって、一面の冬の煌びやかさの中で瞬いていた。夢見がちの状態に二人の旅人は襲われた。弱い反響が遠くから、ますます声高に、ますます騒がしく見える一方、橇の鈴の音は已んでしまうかのように二人には思われた。近くのものは、耳へのその威力を失った。ただ遠くのものが、ほとんど聞き取れないものが、鐘のように響いて来た。

トゥルガニーがまず自制心を発揮して、この麻痺性の半微睡みを振り落とした。

「素晴らしい夜だ」と彼は始めた。

「素敵な一日の素敵な結末です」とオテグラーヴェンは答えた。彼も、あたかも解放の言葉が話されたかのように、呪縛から解かれていた。「何と親切な方でしょう。貴方の友のザイデントプフは。何とも生き生きとして、どんな些細なこと、どんな卑小なことにも、関心を寄せて下さいます。抵当遊びのような卑小なものにも」。

法律顧問官にとっては、会話のこの展開ほど好ましいものはなかった。「ザイデントプフは」と彼は今や言葉を繋いだ、「子供のような大人だ。生涯変わっていないように思うぞ。四十年間いつも同じだ。同じ誠実さだ。しかし貴方は何故抵当遊びを『卑小なもの』に数えるのです。それは正しくない。抵当遊びは偉大な代物だ」。

オテグラーヴェンは、外套で身動きが自由にならなかったが、それでも問い質すように法律顧問官を見つめた。

法律顧問官は自分の毛皮の左腕を教頭の肩に置いて、普段は見せない気安い調子で続けた。「質問をすべきではなかっただろうが、ともかくこの形ではすべきではなかったろうが。事の性質上できないし、貴方が許さないだろう。しかし白状し給え、オテグラーヴェン、貴方はマリーを愛している」。

オテグラーヴェンは一瞬黙した。それから確固とした声で言った。「その通りです、心から」。

そこまで質問と返答の花が咲いたとき、両友人の会話の進行は間近の村への侵入で中断された。すでに家々が最初見えたとき、居酒屋からバスやクラリネットの音が聞こえてき

て、居酒屋の前面の出窓の下や、いや車道にまで、個々のカップルがひどい寒さにもかかわらず、立っていた。娘達は短い袖であった。仕方ない軽率さで、窓が開けられていたダンスの部屋からは、煙や濛気の厚い雲が溢れ出ていたからである。「中では『百姓踊り』だな」とトゥルガニーが言った、「ドルゲリーンの牧師が一緒でないのは残念だ」。

そのうち橇は居酒屋を通り過ぎた。喧騒が反響していた。そしてまた広い雪原が眼前にあった。トゥルガニーは、オテグラーヴェンも先の考えを続けているものと仮定して、あたかも中断などなかったかのように、躊躇わず続けた。「彼女は話しが上手だ。どの言葉も的確だ」。

「彼女はいつも的確なことを言うことでしょう」。

「おや、教頭殿、もう大いに賛嘆している。しかしこの娘の前史を御存じかな。御承知のように、孤児なのだ」。

「すべて知っております」と教頭は答えた、「三週間前に村長の屋敷へ行きました。クニーハーゼ夫妻は遠慮せずに養女のことを話しました。彼女がダンスをし、暗誦したこと、小さな皿を持って回って、貨幣を集めたことを知っています。それには何の抵抗感も受けないと私は言えます。ただ関心が高まるだけです」。

「私の関心もそうだ」とトゥルガニーは言った、「しかしオテグラーヴェンよ、我々は互いにとても違う。私は遊び人で、異教徒と余り変わらない。貴方は聖職者で、差し当たりまだ教頭の蛹だが、しかし今にも蝶となって舞い飛びそうだ」。

オテグラーヴェンは一瞬黙した。それから彼は言葉を続けた、「率直に言わせて下さい。親愛なる友の方。衝動があります。この星空の下、話すのにふさわしいと思います。貴方は自分を異教徒と称されています。私はそれには疑念を抱いています。しかしいずれにせよ、キリスト教界を、殊にこの面に関して、窮屈なもの、捕らわれたものとお考えならば、間違っています。逆です。自由に考えます。この自由を行使出来る点が、我々の信仰の最も奥深い点と関連しています」。

法律顧問官は答えたがっているように見えた。しかしオテグラーヴェンは更に続けた。「私どもは皆罪によって生まれてきます。私どもを支えているのは、自らの力ではなく、私どもの外部の力です。周囲にあるのは神の慈悲です。私どもの美しいシルトホルン地方の伝説を御存じでしょう。ヴェンド族の侯爵ヤツコー[Jakob von Köpenick、1155年、キリストの神に楯シルトを掲げて祈り、川から助かり、改宗]の場合と同様に、私ども皆がそうです。私どもは徒な自我の、つまり自己中心の反抗心の、重々しい武具と共に下に沈んで行きます、神の指が私どもを上に引き上げてくれなければ」。

トゥルガニーは頷いた。「オテグラーヴェンよ、貴方は、私が人間達の自己正義のために、それから芽生えて来る偏見の諸雑草のために、一勝負しようと思っていると判断してはいけない。夙にこれは我々の自負する徳操とはほとんど関係ないと承知している。私が聖書の言葉で思い出すのは、これだ。『[罪を犯したことのない]その人がまずこの女に石を投げよ』[ヨハネ、8,7]だ。仲間の人々の人生行路に厳しい試験を課そうとするのは、まさに私には似合わぬものだ。そこでだが、この愛嬌ある娘の過去ときたら。私が質問して言おうと思っているすべては、例えばこれだ。『立派な家の子は幸いである』。この文の単純な真理は揺り動かせない。クニーハーゼ家は立派な家だ。しかし『強壮な男』の家は、この男は高台のホーエン・フィーツの教会墓地に、木の十字架の下、眠っているが、この

ような家とは言えそうになかった」。

「それは疑問です」とオテグラーヴェンは述べた、「私はほとんどその逆を信じたいです。それは難しい試練の、募る謙譲心の家でした。しかしかくも愛が溢れ、若い生命に出自の危険な汚点を、無法なもののすべての嫌疑を遠ざけようとする立派な努力の見られる所、ここは汚れた家とは呼ばれなかったことでしょう。私は『強壮な男』についての話しを、感動を覚えずには聞いておれなかった。不幸ではあったが、祝福がないのではなかった。試練はあったが、呪詛はなかったのです」。

「貴方には驚かされる」と法律顧問官は言葉を継いだ、「貴方には教義の面では及ばない。しかし貴方は、マリーへの愛着がなくても、いつでもそう鋭く不幸と祝福の欠如との区別を今この瞬間のようになさるかな。貴方は、試練を科の結果として、処罰として、排斥として見なす傾向はありませんか。まさに貴方のような志向の男達は家系に重きを置くと仮定して間違っていますかな」。

「そうですね。間違っていません」とオテグラーヴァンは答えた、「確かにロトの家とソドムの家との間に違いはあります。明確に宣言する印付けなしに、この違いを無視しようとすることは、習俗や戒律に対する拒否となりましょう。しかし決定的なものは常に神の恩寵です。神のこの恩寵は、これは独自の道を行きます。恩寵を縛る規則はありません。恩寵はそのものが法です。恩寵は燕のようにあらゆる家に、良き家、悪しき家に巣を作ります。そして恩寵が劣等な家に巣を作ったら、それはもはや劣等な家ではありません。新しい人生が到来したのです。家系は大事です。しかし選ばれることが一切です」。

「この選ばれてあることを貴方はマリーに見ているのか」。

「この問いはまさに貴方に対して、いとも尊き友に対して、まず答える必要はありますまい。私どもは同じように感じていますから。それぞれがそれぞれのやり方で。この娘の過去が、実際よりももっと暗く、もっと混乱したものであっても、私はこの混乱を気にしません。より不純なものが、力を及ぼせない性質がまさに存在します。これは内部で燃える純な炎がそうします。私は、彼女は幸せにし、幸せになるであろうという感情を、一種の喜ばしい確信と共に抱かずには、マリーを見ておれなかったのです」。

トゥルガニーは友人の手を握った。「オテグラーヴェン、私はいつも貴方を評価していた。今日からは貴方を再び手放すことはない」。

このように会話は進んだ。橇の音が雪原に響いた。村々はすべて静かであった。煌めく星々より他に明かりはなかった。

同じ星々が村長クニーハーゼの家の切妻の窓の中にも輝いていた。マリーは眠っていた。生活と詩作とが提供したこの晩の様々なイメージが、空想的行列となって彼女の許を過って行った。まずはドルゲリーンの牧師がシュミット・フォン・ヴェルノイヒェン風な猟師と共に登場した。この猟師は今や号角を吹く代わりに、肩に担いでいた。それから「オーディンの馬車」、巨大に拡大されて、その車軸には説教家のザイデントプフが立っていた。しかし最後に「杖を持った少年イエス様」が登場し、ショルレンマー叔母とレナーテが歌ったクリスマスの歌が夢の中で余韻を残した。

第十七章
レーヴィーン宛のトゥーバル

三日目の祭日は日曜日となった。澄んだ朝であった。公園の方に面している窓には、丁度教会の丘を越えて昇って来る太陽の黄金の光があった。しかし至る所、他に影となっている所にさえ、前日の夕方新たに降った雪が輝いていた。

九時であったろうか。我々の読者がすでに先の章で案内された大きな居間にレーヴィーンとレナーテは座っていた。しかし最初のクリスマスの日の夕方のように暖炉の周りではなく、奥行きのある壁龕となっている隅の窓の近くにいた。彼らはここで最良の明かりばかりでなく、何度も言及された広い車寄せの助けを借りて村の通りを一望できた。この通りでの営みは、田舎生活の孤独の中では、いつも一つの気晴らしとなって、しばしば娯楽の唯一の素材を供するものである。

朝食は終わったように見えた。カップは下げられた。丁度レーヴィーンは品良く装丁された本を手から置いた。「レナーテ、彼に悪いことをしたかな。しかしドルゲリーンの牧師は妙に夢中になっていた。辛抱できなくなってしまった。しかしあれには大いに意味深いものもある。まあ釈明で混乱しているけれども。『遅レタ弁明』だ。あるいは『食後ノ辛子』。よくアメリー伯母が遣うけれども」。

レナーテが頷いた。

「ところで伯母さんだが」とレーヴィーンは続けた、「私は小さな橇を予約した、二時だ。一時間で着くだろう、私は自ら行く。　ー　それでマリーは相変わらずグーゼには行っていないのか」とちょっと間を置いて付け加えた。

「そうよ」とレナーテが答えた。

「しかし彼女は伯母さんに良い印象を与えたとおまえは書いてきた。『プダグラ伯爵夫人』がこの部屋で我らの愛しい娘に躊躇わず会ったのであれば、先鞭は付けられたに違いないと思わざるを得ないが」。

「出会いは偶然だったの。ザイデントプフの本を私に持って来たマリーが、思いがけず部屋に入って来たの。でも伯母さんは高齢で、私どもの時代とは別な時代の方ということを忘れてはいけないわ。身分による思い込みはあっても仕方ないじゃない」。

「それは仕方ないと思う、ひょっとしたら正当以上に許すかもしれない。しかし私が許せないのは中途半端だからだ。アメリー伯母は、　ー　フィッツェヴィッツ家の人々はこの意見を許して欲しいが、　ー　そのプダグラ家への結婚入籍で、ある意味我々自身以上のものになった。彼女は高貴なレディーだ。そして彼女の伯爵夫人としての生活習慣が、扇ぎながら、ボローニャ犬を抱いて、二人の人間の身分関係について難しい会話をするというものであれば、私は彼女に敬意を抱いて、手に接吻して、論駁しようとは一切思わないだろう。繰り返すが、私は自分の情感が別な道を行こうとも、こうしたことすべてを認めるだろう。しかしアメリー伯母はこうした旧来型の伯爵夫人の一人ではない。彼女は自分を啓蒙思想家、自由思想家と見なしている。モンテスキューやルソーから引用がなされない一日や一時間はない。自由に崇高に、『虚シイ蒸気、ソレハ普通、名声トカ偉大ト呼バレルケレドモ、賢人ナラソノ虚シサは承知シテイル』と話され、さてこうした哲学的崇高さが実例として試されることになると、すべては空虚な大言壮語と化して、単なる仮面となり、その背後には古い思い上がりが隠されている」。

妹は返事をしようとした。しかしレーヴィーンは続けた。「いや、レナーテ。結構。彼

女のために弁明する必要はない。私にはよく分かっている。これらのラインスベルク伯爵夫人達は一切合切承知だ。フランスの本とアンリ王子[プロイセンのハンリヒ王子(1726-1802)、ラインスベルクに宮廷]が彼女達の頭をおかしくしたのだ。人文主義の長広舌とその裏の昔からの生来の性質。この人らは、大袈裟なイメージを許して貰えば、我らの図書館の再生羊皮紙のようなもので、古い羊皮紙、それには元来異教徒の詩が書かれていたのだが、その上に敬虔な僧侶が箴言を記したものだ。しかしクロエ[ダフニスの相手]やラーラゲ[おしゃべりの子]への愛の嘆息が再三表面に出て来る。有り体に言って、偏見三昧は大目に見る、ただ不正は我慢ならない」。

「白状すると」と今やレナーテが言葉を続けた、「まさにこのことについて伯母さんとお話ししたの。彼女は自分の態度が矛盾に満ちていることは認めたわ。そしてとても愛らしい仕草でそれを認めたから、あなたも結局降参することになると思うわ。きっとそうなる筈よ」。

レーヴィーンは微笑した。「それはどこでのこと。ここかいそれとも向こうのグーゼかい」。

「ここよ。あなたが私からの手紙で知っているあの出会いの折と同じ機会よ。ただその後の会話を短く省いたから。私どもは三人でした。父上に伯母、それに私。ショルレンマー叔母はいつものように欠席。『両叔母さん』は御承知のように、合わないから。マリーが入って来て、一瞬戸惑っていた。彼女は利口すぎるから、伯母が自分をどう見ているかすぐに勘付いていたはずよ。でも素早く気を取り直して、お辞儀をして、牧師の用件を私に述べて、また、御一緒の所をお邪魔しましたと率直に詫びて、離れて行ったの」。

「で伯母さんは」。

「彼女は黙っていた。鋭い目で動作のすべてを観察していたけれども。父上が出て行って、ようやく彼女は言ったわ。私は質問をする勇気はなかったけれど、『魅力的な娘ね、御伽噺の美女のよう。何という睫毛でしょう』。　ー　『私どもは彼女をとても愛しています』とおずおず敢えて述べたら、これに対して伯母さんは心易く、同時に全くフランス語の文体で、ここでは省略するけど、続けたわ。『そうだ、そうだ。今あの娘を見て、これまで気まぐれと思っていたものが分かった。レーヴィーンはもっと気まぐれと思っていたけど。間違っているかもしれないけど』と私が頭を振っているのに気付くと、付け加えていた。しばらく間があって、その間煙草缶が二，三回開けられたり、閉められたりした。それから元気よくこう話された。『今この瞬間思ったけど、あの娘を一緒にグーゼに連れて来るようあなた達に要請しようかな。あんな娘が欠けているの。年寄りのレディー達にはうんざり。若い人達が好きよ。しかしレナーテ。ねえ、そうは行かない。私の原則よりも、ある種の表象や趣味の方向が、私の中ではより強いと気付いているから。その通りなのよ。自分ノ趣味ヲ断念スルヨリハ、原則ヲ断念スルガ易シイ』[ラ・ロシュフコー]。私どもにアンリ王子が同じようなことを告白なさって驚いた日のことを思い出したりもするわね。王子と哲学者はいつも反目し合っていたわ。それでね。この娘は魅力がある。でもこう感ずる。あの娘自身最も長いドレスで来ても、こう思うのを拭えないのよね。今にも夜会服は短くなって、ショール・ダンスを踊りかねないと。あの娘にこのように考えて気の毒な思いをさせたくないけど、だからやはり今までの通りにして置きましょう」。

注意深く聞いていたレーヴィーンは、丁度事を最も丸く収める意味で答えようとしてい

た矢先、村の通りから屋敷へ曲がって入って来るホッペンマリーケンに気付いて、会話を中断した。従来通りの彼女の恰好であった。短いフリーズのスカートに、丈長の靴、背負籠、鉤状杖で真っ直ぐな道を領主の館へ向かって来て、すぐ隅に見つけた若い二人に挨拶して、次の瞬間には手紙や新聞がテーブルの上に広げられていた。

新聞は、内容は大事なものであったが、レーヴィーンがすでに承知していないものは何も含まれていなかった。手紙の一つは父からのもので、とても簡潔に夕方にはグーゼ城に着くと思われると記されていた。もう一つの手紙は従兄弟のラダリンスキーからのもので、レーヴィーンの学友、昵懇の友からのものであった。レーヴィーンの目がびっしり書かれた二枚の紙片に止まったとき、その顔が輝いた。レナーテは少し赤くなって、言った。「それでは読んで」。

レーヴィーンは読んだ。

「親愛なるレーヴィーン。貴兄は大いに甘やかされているので、すでにそれ自体一つの称賛を含むこの行が貴兄の虚栄心を少しも刺激しないことはないであろう。私は大いに喋りたい気分だ。そして貴兄がいないことを毎時間感じている。貴兄は聞き手の才能を有する数少ない一人であるが、そういう人は、自ら語る術を心得ている者達の許では二重に稀である。

我々は立派なクリスマス・イヴを有した。このイヴのために私は書いている。クリスマス・ツリーはいかなるものであるべきか、我々の心の中に明確にイメージされていたと貴兄はまず思うことだろう。しかしそうではなかった。子供達のいない家では、幼児イエスは、子供の感覚が大人達に残っていなければならず、いつも難しい目に遭うことだろう。カティンカは、多才で、（ひょっとしたらこの多才のせいで）この感覚を有していない。私に関しては、この才を付与する祝福の手によって、少なくともこっそりと触れられていた。それへの憧れを感ずるに、まさに十分な程度に。

とても少ない集まりだった。父上に、カティンカ、彼女の新しい友の女性、貴兄がまだ知らない女性だ、それに私。ドアが丁度開かれて、ブニンスキー伯爵がやって来た。彼は我々皆にプレゼントを持って来た。私の思いでは行き届き過ぎるものであったが、しかしカティンカは感じていないように見えた。照明の付いた広間、微光を発する木が私の目に笑いかけた。しかし繰り返さなければならないが、それ以上目に入らなかった。すべては豊かに飾られた性格のものであった。父上がパリから取り寄せたオルタンス王妃[Hortense de Beauharnais（1783-1837）、ルイ・ボナパルトと結婚]風のレースのカバー（レナーテへの注記）でさえ、この印象を変えることができなかった。互いの感謝の最初の交換の後の会話は、スムーズなものではなかった。伯爵は知らせ[報知紙]の内容を知っていた。彼を傷付けないよう、それについての会話は避けた。

こうした状況のとき、緩く結ばれたメモが私に手渡されて、これはほとんど救いのようなものであった。それは我らのユルガスの簡潔な文章で、こう記されている。『今日、木曜日、二十四日、クリスマスのポンス。ムントの地下酒場。ケーニヒスブリュッケ[王橋]三。九時。来ないよりは遅れた方がいい。客人は歓迎。Ｊより』。丁度、前日に我らのクラブへ行きたいという願いを述べていた伯爵にそのメモを渡して、二つの結びの言葉を示し、一緒に行っても不都合はないかと彼に尋ねた。彼は了承した。彼の気分は余り集会向きには見えなかったので、私はほとんど驚いてしまった。ちなみに後になって、彼の了承

を遺憾に思う理由は生じなかった。

やがて九時になって会うことになって、これ以上都合の良い時はなかった。このような件にかけてはユルガスは信頼が置ける。ケーニヒスブリュッケの岸辺は、両側に大きな埠頭があって、そこに個々の古い建物の切妻や側翼が建てられているのを貴方は御存じだろう。ムント家もそうだった。我々は通りから、地下酒場へ降りて行き、暗い通路をおぼつかなく先に進み、ようやく大きな、しかし低く、木の張られたサロンに入って行った。そこは私の中で古いイメージを喚起しながら、イギリスの戦艦の客室を鮮やかに思い出させるものであった。何人かの友がすでに集まっていた。フォン・シャッハ、ブムケ、ザスニッツ博士、書籍商のラバツキー。ユルガスはまだいなかった。私はブニンスキーを紹介した。それから席に着いた。私はまずこの酒場の懐かしさの印象を全面的に感じた。立派な照明や、暖炉の火、長い、白いクロスの食卓で、そこの席からは、客人がシュプレー川を自由に眺められるよう配置されていた。

ほぼ部屋の高さ全体と等しく、床にまで達しているその窓辺では多彩なクリスマスの往来が見られた。一種のネヴァ川の市で、棒付きランタンを持ったスケート靴の者達、がらがらを持った少年、蠟人形の天使を持った幼い少女、皆が幽霊のように明るく、また暗く、我らの窓辺を過ぎって行った。ケーニヒスブリュッケからは橇の鈴の音や町の鈍い騒音が響いて来た。

ようやくユルガスがやって来た。手に大きな青い袋を持っていた。『ここにクリスマスを持って来ている。しかし私の客人に持参する肝要なものは、　ー　貴方らを客人と見なすことを許して欲しいからで、　ー　客人そのものだ。言わずと知れた、一人の詩人なのだ』。こう言って彼は一緒に入って来た一人の紳士を示した。私がブニンスキーとユルガスを一緒に紹介する間もないうちに、ユルガスは言葉を続けた。『光栄なことに、ここにグレル氏、あるいは全称号と名称を述べると、神学聖職候補生のデトレフ・ハンゼン・グレル氏を紹介させて頂きます。私の一種の荘民で、ガンツァーのフォン・ユルガス家の隷属民に当ります。グレル家あるいはハンゼン・グレル家についての系図的なことは留保致します』。皆が笑って、若干唐突なことであったが、ユルガスを見た。彼は答えを待たずに、同じ調子で続けた。『我々のカスタリア[パルナッソス山の泉]誌は干涸らびていて、新鮮な血が欠けています。我々のサークルの詩人諸氏は、新しく参入してくるライヴァルの力を恐れているのではないかという疑念が抱かれましょう。私がいなければ、それにブムケやここに我らの友、ラバツキーがいなければ、ラバツキーはその日曜新聞の最後のスペースを埋めるために、時折若い抒情詩人を捕まえていますが、我らのミューズの源泉の湧出は、その轟く名声にもかかわらず、やがて枯れてしまいましょう。私が喫緊の危機を避けるために、私の父の荘園から一人の抒情詩人の援軍を指定しなければならないというのはやむを得ないことなのです』。

一人の酒蔵管理人が、規定の革の前掛けをして、入って来て、話しが中断された。彼は一個のポンス・ボウルを置いた。そして大きなクリスマスの袋が流通し始めた。その袋にはライン地方の胡桃の他に、フランス製の胡椒入り菓子の若干の包みが含まれていた。ユルガスが議長となった。『貴兄らを歓迎します』と再度彼は述べた、『袋に関しては賢明な倹約を推奨します。その中身の替えは今の所ありません。しかしポンス・ボウルは追加が可能です。何なら何回も』。

グラスが乾杯で打ち合わされた。私はすぐ入口近く、食卓の狭い側の一方に腰を下ろした。ブニンスキーは私の向かい側であった、この席にいると、我らのカスタリア誌をまた助けることになるこの＜抒情詩人の援軍＞を落ち着いて観察することができた。彼は立派な体形にもかかわらず、愛らしいというよりは醜かった。髪は藁のようで、青白い目が浮き出ていて、睫毛は少なかった。瞼は軽く赤みを帯びていて、若干無精髭であった。最もひどいのは顔色であった。全体の印象、平凡。

私の目はブニンスキーへ移って行った。彼もまた彼を観察していたかもしれない。私は彼の考えを察した。

我々は軽い雑談を行った。ブムケは貴兄がいないことを盛んに嘆いていた。その他聖職候補生のヒンメルリヒの欠席が最も残念がられていた。どの理由でか私には分からなかった。ひょっとしたらグレルのような神学候補生には同類の者が最も良く対応できると人々が思ったのかもしれない。しかしこの文が正しいか保証の限りではない。

十一時頃だったろうか。橋の鈴の音や通りからはすでに全く静まりかえっていて、ユルガスが始めた。『即興でカスタリア誌会議を始めたいと思います。ハンゼン・グレル氏が有り難いことに、我々に若干のものを朗読してくれましょう』。

この知らせは、かなり冷淡に、しかし勿論許容する気持ちで受け入れられた。客人はこの上なく非詩人的に見えた。貴兄が追感しているように、我らのユルガスの推薦は必ずしも彼を引き立てようというものではなかった。彼は今やポケットから危ぶむ量の草稿を引きだした。皆の心を不安が過ったと思う。

しかしやがて我々は別な感じになった。彼は屈託なく、ノルウェーの伝説あるいはメルヘンの素材を扱っているバラード、『ハーコン・ボルケンバルト』を読み上げることへの許しを請うた。つまり彼はしばらくコペンハーゲンに滞在したと貴兄は知っておく必要があろう。どうしてそのような次第になったかは、他の幾多のことと同様、別な折、貴兄は知ることになろう。彼は今や始めて、はっきりとした表現で、しっかりと、良く響く声で、炎を募らせながら読んだ。二十節ほどであったろうか。議論の際、反復された最初の節がすぐに私の記憶に残った。

国王ハーコン・ボルケンバルトは、
馬と名声、武器と防具を有する。
いつでも戦場で名乗りを上げて、
波立つ海に高く多くの船を浮かべ、
田畑は穀物の束で満ちあふれる。
しかし国王は多くの傷跡を
デンマーク人から受けて凌ぐ。

第二節ではハーコンは出征する。五十歳になっているが、美人インゲボルクに求婚するためである。私は韻を合わせて思い出そうと努めたが、無駄であった。しかしとりわけ私の気に入った第三節ではまたそれは上手く行った。少なくとも次のような次第。

すでに遠くから王を塔や城が出迎える。

誇り高く微笑んで王は覗き込む。
王は馬上から語りかける、
年を重ねているのは仕方ない、
逝去の年になろうとも、
名誉と傷跡をまた求めよう、
青春の日々のように立派に求めよう。

この箇所で、いいかい、我らの老ブムケは声高な歓声を上げた。彼がこの瞬間ハーコン・ボルケンハルトを自ら感じたのは間違いない。詩は今や展開して行き、美しいインゲボルクは彼を拒み、彼は復讐を誓う。彼は乞食の変装をし、黄金の紡錘を持って、インゲボルクの城の前に座る。彼女は紡錘を欲しがる。彼はそれを拒絶する。彼女の欲望は激しく燃えて、彼女は乞食に身を任せ、紡錘を手に入れる。そこでお定まりの葛藤。父親の怒り、追放。最後に乞食はハーコン・ボルケンバルトと明らかになって、皆が幸せな結末を迎える。

詩を追って行くことは楽しみであった。我々皆がそうだったと言って良かろう。詩人本人の他にブニンスキーが最も私の興味を引いた。彼はますます真剣になって行った。『奇妙なことだ』と私は彼の心の内を察した、『風采は上がらないのに、何という神聖な炎が隠されているのだ』。

この炎が実際、この詩と朗読の魅力であった。その他は多くの攻撃されやすい点があった。ザスニッツ博士は、この晩も我らの批評の前衛の指導者で、最初に口火を切った。彼は正当にこう強調した、我らの尊敬する客人は、その立派な描写能力を、もっと弱い力の発揮を行うべきであったろう対象に向けてしまった。全体は、彼自身が述べたように、メルヘンの素材である。このような素材は、その魅力の形成源の簡素さを、表現の煌びやかさで妨害されてはならない。詩は、疑いようもない長所を有するにもかかわらず、長すぎて、特に、難しすぎる、と。

我らの客人が、我らの皆の目に更に好ましく映ったとすれば、それは非難を受け入れたときの流儀のせいであったろう。彼は同意して、頷き、それからザスニッツに言った。『とても感謝しています。貴方の説明は当たっています。自分の仕事にどうして満足できないのか、どこに理由があるのか分からなかったのです。今や明瞭です』。

会話は続いた。その後、ポンス・ボウルが空になった。少なくともブムケが残ることに確信を抱いていたユルガスは、二回目のボウルを頼んだ。しかしブニンスキーと私は、それが出て来るのは待たなかった。いずれにせよ間もなく真夜中になる。我々が静かな広場に出て来たとき、星々の光がほとんど日中の明かりのように路上にあった。私は見上げた。幼児イエスがこの星々の煌めきから私の貧しい心の中に降りて来るかのように思われた。ブニンスキーが私の伴をした。我々は一言も言わなかった。別れ際、彼はこれまで彼の許では馴染みのなかった調子で言った。『トゥーバルよ、貴方に今晩のことを感謝する。貴方の友にもっとしばしば会うことは楽しみだ』。

これが最近のカスタリア誌の会議だ。その上即興の会議。

それでは御機嫌よう。レナーテは貴兄と一緒だとか。この賀詞の形式は望むらくは千もの挨拶を美しい私の従姉妹に届けて欲しい。

貴兄の　　トゥーバル

追伸。丁度貴兄の父上が私どもの所にいらした。大いに政治の話がなされている。ひょっとしたら多すぎるほどかもしれない。父上は、貴兄宛てにすでに書かれたように、明日の夕方にはグーゼ城に着くと期待し、挨拶されている。父上は私に一緒にと馬車の席を用意されたが、私は断った。アメリー伯母の周りには余りに多くの『友人達』が集まっている。しかし私はホーエン・フィーツとその静寂に憧れている。カティンカが私の伴をすると約束してくれるのであれば、私どもは早速期待されて良かろうと思う。　貴兄のＴ」。

第二巻
グーゼ城

第一章
グーゼ城［推定 Gusow］

我々の物語の経過は、続く章の間、ホーエン・フィーツ、つまりオーダーブルフの東側から、オーダーブルフの西側の高台に移る。この高台の麓に、当時も今日も、この一帯の歴史的村々があって、古来貴族の荘園地で、その大方ヴェンド族風な名前はすでに我らの最古の古文書にも見いだせるものである。ここらに、つまりヴリーツェンやフライエンヴァルデ周辺に、シュパル家やウヒテンハーゲン家が居を構え、彼らについて今日もなお歌や伝説が語られており、ここに宗教改革やスウェーデン人の時代に、バルフス家や、プフーエル家や、イーロー家がその本拠地を置き、そしてここに七年戦争に直接続く時代、レストヴィッツ家とプリットヴィッツ家が親しい近所の者として暮らしていた。プリットヴィッツ［Prittwitz（1727-93）］は、クーナスドルフ近郊の戦い［一七五九］で国王［フリードリヒ大王］を救い、レストヴィッツ［Lestwitz（1718-88）］はトルガウ近郊の戦い［一七六〇年十一月三日］で、祖国を救ったのであった。あるいは当時の流行の言葉では少なくとも言語上フランス語化されていた宮廷でこう言われていた。「プリットヴィッツは王を救い、レストヴィッツは国を救った」。

この荘園地のすべてはオーダーブルフ地方の干拓の後、つまり我々の物語の始まる約三十年前に、その他の長所に加え、風光明媚の長所を備え始めた。ここらに聖霊降臨祭の頃やって来ると、アブラナの畑が一面花咲いて、その黄金や香りが湿地帯に振りまかれて、マルク地方からはるか遠く、より幸多い豊かな国々に移住した気分がするに違いなかった。乙女らしい発芽力は、ここでは族長達が人気ない一帯の中にいて、自分の家や家畜の神から贈られた祝福を数え上げるとき、感じたかもしれない、そのような感謝に満ちた喜びと共に心に感知されるものであった。というのは、ここでのみ、つまり人間の手が貧しい土塊の厳しい、決して休まない仕事を通じて、二，三本の貧しい茎を得る所でのみ、自分こそはこの貧しい恵みを創り上げたものであるというイメージを描けるからである。しかし大地が百倍もの果実を実らせ、すべての撒かれた穀粒から豊作を作り出す所では、人間の心は神の恩寵に直接向かい合っているのを感じ、一切の自己充足感に包まれる。湿地のこの西側の高台の縁で、偉大な王は、黄金の田畑を眺めながら、こう発したのであった。「ここに私は平和裡に一つの地方を得た」。

この発声を正当化するような一つのイメージを、一八一二年の三日目のクリスマスの日、この低地が提供することは勿論なかった。一切は雪に埋もれていた。しかし今日でもまだ湿地を支配する「ゼーローの高台」からの眺めは魅力に欠けていない。数多い拡張された荘園や小村の上には、人間の住宅地を告げながら、一条の煙が昇り、数マイルごとに比較的大きな村々の、半ば雪に覆われた教会の塔が明るい陽光の中で、煌めいている。

こうした教会の塔の一つが、最も間近な塔が、丁度言及したばかりの高台から小銃射程もほぼない距離の所に、姿を現した。古い樫の並木道が、教会の方向へ真っ直ぐに伸びていた。樫の褐色の葉は、風が雪を振り落とすと、はっきりと分かった。この隣に、先端の

風見鶏のはるか上に、強大な、部分的には異国風に見える木々が聳え立っていた。左手に村を取り囲む大きな公園にそれらの木々は属するものであるように見えた。

この村がグーゼであった。

名前が告げているように、ヴェンド族の起源であるが、我らの地方史には三十年戦争の付随的経過でようやく登場する。その頃はシャプロー家がここに居を構えていた。オズナブリュックの和平締結[1648]の二年前、ゲオルク・フォン・デルフリンガー[Georg Reichsfreiherr von Derfflinger(1606-95)]は、当時まだスウェーデン軍に仕える将軍であったが、マルガレーテ・トゥーゲントライヒ・フォン・シャプローと結婚し、荘園を引き継いだ。女系遺産としてではなく、購入したものであった。借財のある未成年者達が荘園を維持出来なくなっていた。

最初荘園の復活は、資本投下をわずかに上回るに過ぎなかった。ひょっとしたら、ブランデンブルクに地理的にも政治的にも落ち着こうという試みでもあったかもしれない。しかしすでに六十年代に、フェールベリーンの戦い[一六七五年六月]、ポンメルンと東プロイセンの戦役[一六七六ー七九]がデルフィリンガーの名声を高みに押し上げるはるか以前に、この老人は、この地の何年にも及ぶ放任の被害を食い止める努力をするばかりでなく、建設や設備によっても、すべての点でその選帝侯の主君の例に倣って、模範的農園経営の努力も見せたのであった。下水溝が引かれ、土手と道路が湿地に築かれ、城が出来上がった。教会は、まず拡張され、地下納骨所が造られた。今日までそれと分かる兵舎は、軽騎兵分隊を受け入れた。この分隊は近隣の駐屯地からの上官の将軍の麾下、日々の勤めのためにグーゼに派遣されるのであった。しかしこの老人の最も本来的眼目は公園にあって、この公園がやがて、彼の行為の名声よりももっと彼を幸せにすることになった。剣を犂先と取り替えるほとんどすべての者がそうであるように、立派な亭主となり、管理人となったが、しかしまた立派な木々を購入するとなると、気前が良かった。糸杉や木蓮が多大な費用を掛けて運ばれて来た。今日も公園のヒマラヤ杉の杜は、「新レバノン」の名を有している。

隠棲して住み、自分の所有地を楽しむこと、これが今や八十歳になった陸軍元帥の唯一の要求となっていた。元帥は、自身言っていたように、宮廷で「多くの酸いと甘い」とを嘗めてきたのであった。「それも酸いを多く」。彼が友人のバウディシーン[Baudissin(1579-1646)]伯爵の記念帳にこう書いた時代のことである。

雨と風が
よく私に襲いかかった。
ひょいと低頭して、やり過ごす。
お天気様には逆らえない。

ほぼ快活な諦念のこうした日々は、彼にとってはるか昔のこととなった。彼は強張り、角張り、刺激を受けやすくなった。ようやく選帝侯は、高齢になっても彼を軍務に就けていようと思っていたけれども、譲歩して、老人は自らの意志を得て[天気に勝って]、自らの自由を得た。彼は町を諦め、グーゼに行った。ここでほんのしばらくの間であったが、自分が作った一切を管理し、畑や家の恵みを楽しんだ。しかし彼は疲れ、自分の幸せにも

疲れた。世紀が過ぎ去る前にもう彼の豊かな人生は終わった。彼は、自分が指示した通りに、華美なことなく、自分自身が造った墓所に埋葬された。聖職者も追悼で名声を限定しなければならなかった。「神は故人を、戦役の間、最下層から最上層にまで導かれました」。この老人は名声を生前に十分に得ていて、葬儀の際、名声の響きを欠いて済ますことができた。

彼の唯一の存命の息子、フリードリヒ・フォン・デルフリンガー[1622-1724]が豊かな遺産を継承した。遺産は村とグーゼ城の他に更に五つの他のオーダーブルフの荘園を含んでいた。彼は父親同様、首席騎兵で、ある軽騎兵連隊の隊長であった。しかしただ位階や外的身分が父に近いだけで、戦術的センスや、元帥的明察、父を大いなる名誉へと導いた才能を余り有していなかった。

時代の変化というものがその理由であったわけではあるまい。というのは新しい世紀は、平和の短い期間の後、極めて会戦の多い戦争の一つと共に始まったからで、トリノ[1706]やマルプラケ[1709]近郊ではブランデンブルク人の死者が層になっていたからである。しかし戦争の年代記が彼に言及していないとしても、グーゼでは言及されている。彼はそこで彼の父が創ったものを継続しようと努めたばかりでなく、最初から父そのものを敬うよう努めていたのである。彼は公園を拡大させ、城を美化し、とりわけ故人の父のために一つの記念碑を建造させた。シュリューター[Schlüter　(1664-1714)]時代のベルリンが示している最良の諸力が、この記念碑の遂行に躍動していた。覆いのない石棺の中へは、息子の手で元帥の杖が入れられて、石棺の上には父親の胸像が置かれ、名声の女神がラッパを吹いて、二旗のデルフリンガー家の軍旗が青い絹の旗地と銘「行動、敗北ヲ認メルマデ」と共に交錯して、一つの軍事的記念碑となっていた。今日までグーゼの教会はこの記念碑を保存している。

父の死後、三十年して、フリードリヒ・フォン・デルフリンガーも亡くなった。彼と共に有名な名前も消えた。これはほとんど半世紀よりも長く輝くものではなかった。しかしこの短い期間は十分に明るく、グーゼ村の名前も永遠の暗闇を免れることになった。古いデルフリンガー家の遺産は様々な手を経て、フォン・プダグラ伯爵の所有となった。伯爵はそれを管理させた。そしてまずまた愛国的なものが活気付き始めた頃、デルフリンガー墓所への巡礼も始まった。これはその墓所に休んでいる者にとって幸いなことではなかった。記念物に興味を抱き、自らの敬虔さの欠如を歴史への関心で糊塗する者は、死者の衣服に手を出すもので、それでこの死者は、十年経つうちに、棺の中で略奪された者同然となって、わずかに締め金で留められた胸甲と長い騎士の靴を残すのみとなってしまった。

かくて一七九〇年となった。プダグラ伯爵は亡くなった。彼の未亡人が荘園を引き継いで、狼藉は終わった。

この未亡人がアメリー伯母であった。

第二章
アメリー伯母

アメリー伯母はベルント・フォン・フィッツェヴィッツの姉であった。十八世紀の中程、つまりフリードリヒ大王の宮廷の影響がすでに貴族圏にも支配的になり始めた頃に、彼女

はフランス語の教育を受けて、『アンリアード』［ヴォルテール作、一七二八年］の長い句を暗誦できた。そもそも『メシアーデ』［『メシアス』クロプシュトック作、一七四八一七三］が存在することを知る以前のことであった。ちなみにその作者の名前を知っていたら、すでにその中身を知る妨げとなったかもしれない。

彼女はとても美しい娘で、早熟で、すべての近隣の、体重と無教養で膨れ上がったレディー達の驚異の的であり、二十歳のとき輝かしいカップルを志向していた両親の希望を満たした。一七七〇年秋、彼女はプダグラ夫人となった。

プダグラ伯爵は、四十歳、戦役を重ねていて、ロイテンの戦い［一七五七年十二月五日、フリードリヒ大王がオーストリア軍を破る］では戦功を上げ、戦争末期にはアンスパッハとバイロイトの軽騎兵連隊の騎兵隊長であった。輝かしい軍事的経歴が保証されているように見えた。しかし彼は直後の観兵式のとき、粗野な失敗に気付いたと思った国王から厳しい言葉を浴びせられ、その結果伯爵は離隊した。彼は自分の豊かな、半島ウーゼドムを含む領地に戻り、数年間西ヨーロッパの諸首都を訪問し、帰還した際、ハインリヒ王子［1726-1802］の侍従職の肩書を得て、自分の不満足を公に表明した。彼は王子が周知のように自分の周りに集めていた「不平家［フロンド派］」の一人に数えられたいと思っていた。数週間後に美しいアメリー・フォン・フィッツェヴィッツと結婚した。それを契機にポンメルン荘園地にしばらく滞在した後、ラインスベルクへ移住することになった。

この小さな宮廷が伯爵の列席で得た利点は、彼自身の人柄が問題となる限り、わずかなものであった。彼は、彼の妻が時に彼に非難したように、「心の底から」王子に反感を抱いていて、習俗に抵触し、追従文化と、ここでは盛んであった高慢な批評とに反撥し、短い奉仕の数週間後に、また自分の故郷の島に戻って来て、父祖の土地を喜び、イギリスの議会闘争に没頭出来るようになると、そのたびに嬉しがっていた。というのは彼はイギリスを愛していて、その民と、その自由、その法律に模倣すべき唯一の国家モデルを見ていたからである。

しかし伯爵が多く刺激や忠誠心で欠けることになっても、伯爵夫人はこの欠如を補う以上のことをした。彼女は瞬くうちに、社交界の人心を捉え、宮廷並びに宮廷のトップをも、つまり王子をも支配した。これは偉大な国王の祭り上げられた実弟のことを実際よりも一面的に、また外面的に見ていた人々にとってのみ驚かされる現象であった。というのは彼は女性を憎んでいたが、それでも同じほどに女性に引き寄せられていたからである。女性それ自身には、女性がいつも彼に不快な要求をするたびに、一杯に嫌悪感を抱いていたが、しかし彼は美学的に修練を受けていて、十分に繊細で、女性精神の独自の長所、つまり直接性、機知、上品な気まぐれ、表現の鋭敏さ、的確性を味わっていたのである。かくて、女性を女性であるとして否定する宮廷で、まさにこの女性が支配する、それもほんの一瞬でも彼女らのまことに女性らしい独自性や無作法を諦めることなく、支配するという矛盾に満ちたことが行われた。王子は単に個人的に大目に見られることのみを必要としていた。その他の点では、すべての、倫理的面を不安げに気にしない処世、交際作法に寛容であった。これらの作法は、彼の嘲笑的気まぐれにとって汲み尽くせない素材と、同様に雑談の好みの対象を彼に提供してくれるものであった。愛の陰謀が花開いた。しかし我らの若き伯爵夫人を王子と結び付けたものは、わけても次の認識で、つまり、彼女は、物の見方の大胆さは彼と張り合う程でありながら、この物の見方の実践を断念しており、自分の原則

を自分の快楽に合わせて模造するという嫌疑を彼女は一瞬たりとも与えることはないという認識であった。というのは倫理的因習の外部に立っているすべての者がそうであるように、王子も純粋な処世への不信仰の背後に、この処世への最も深いところにある畏敬の念のみを結局隠していたからである。一般的物の見方とはぶれずに、彼は伯爵夫人に、「彼に規則を証明する例外的場合」を見ていて、一般的な些細な関係をはるかに越えて、ある女性と最も親密な関係を維持して行けることを幸いに思っていた。つまりこの、ある女性は、女性らしい性質のすべての長所を備えながら、同時に女性のすべての弱点を免れているのであった。伯爵夫人は、彼に更に次のことを通じて、特別な喜びをもたらしていた。つまり夫人は自分の夫に対しても、ラインスベルク宮廷のすべての他の構成員に対するのと同様、同じ快活な冷淡さを有しており、プダグラ家の永続の問題をいとも無関心に取り扱っていたのである。

彼女の傑出した特徴の一つは率直さであった。彼女は自分が他の者よりももっと言っても許されると承知していて、この特権を利用していた。際どさと優美さの混合で、これを彼女は巧みに捌き、大胆なことをしていた。ひょっとしたら宮廷の他の構成員には誰にも同じように容易に許されるものではなかったであろう。彼女が永続して好意を得ていた本当の秘密は、彼女が雑談の様々な領域をやはり様々に取り扱い、大胆さが勿論まだ許される時と、そうでない時とを正確に区別する術を心得ている点にあった。彼女の率直さは大きかったとしても、彼女の賢明さはそれ以上に大きかった。哲学的領域や、教会、倫理は、広大な、何ら手綱で狭められるべき遊び場ではなかったが、一方政治はすでに個別の、また軍事的領域は王子の虚栄心と結び付いているが故に、一連の「禁止」と形容される範疇を有していた。この区別を伯爵夫人はいつでも自覚していた。ひょっとしたら彼女はヴォルテールによってまとめられた『ジャンヌ・ダルク』[1755]の鑑定において可能なものの限界にまで達することがあったかもしれないとしても、何らかの王子の関与する会戦の偉大な事蹟の推理的な取り扱いの際には、早期に調子を変えて、不敵な主張の代わりに、いとも忠誠を尽くした敬意を表明するのであった。このような敬意の表明の際、それは偶々の会話と時であれ、大きな祭典での準備された時であれ、　一　彼女の才は無尽蔵で、王子本人がまさにこの面では功績豊かな名声を喜んでいたので、少なくとも彼女は彼の才媛の弟子となった。軍事的演出や軍事的行動に対する自分の完全な無関心を、ある偽善的な、それ故に一層活気のある風に装われる関心の背後に隠す力を彼女は十分に有していた。彼女は、目的を欲する者は、手段も欲しなければならないと承知していた。そして彼女は王子の会戦を、キリスト教のカレンダーの祭日よりも確実に記憶した。プラハ近郊の戦い[一七五七年五月六日]の記念日、五月六日は、何らかの厳かな行事なしには済まされなかった。いつも新しい驚きが見られた。プラハ城とモルダウ橋の刺繍された絨毯が、隅の四つ歩兵の軍帽と共にあった。活人画があって、マルス軍神とミネルヴァが時代遅れを感じながら、より高いラインスベルクの神の前で跪くのであった。対話劇、全作品、ギリシアやローマの英雄達が生じて、[アキレウスの]ミュルミドーン人や古代ローマの兵団が登場し、それらが結局はいつもハインリヒ王子と、プラハの高台を攻めるイッツェンプリッツ連隊と明らかになるのであった。

こうしたすべてにおいて発明の技法が発揮されていたが、絶えず練習されなければならない沈黙、抑制、否認の技法もより小さいものでなかった。「旗を持ったシュヴェリーン

[Graf von Schwerin（1684-1757）プラハ戦の真の勝者、戦死]」は言及されてはならなかった。この偉大なプラハ戦でのライヴァルを指摘していたら、極めて深刻な不機嫌に至ったであろうからである。王子は、このような邪魔な偶発時は最初から除外されることを願っていて、遠慮なく、「すべての年の市で歌われた名誉の戦死」を単に「愚かなこと」と片付けていた。

すべてのこうした我が儘に、気まぐれとか不当なものにまで至ろうとも、伯爵夫人は適応する術を心得ていて、彼女の苦労は、十六年間の支配という報いとなった。ようやく一七八六年に、この支配が終わったわけではないが、そもそも諸状況の変化というものが生じた。大王が亡くなった。そしてこの逝去で、ラインスベルクの生活も痛手を蒙らざるを得なくなった。小さな宮廷は四散したも同然となった。この宮廷のすべての比較的自由な人員は、大方は王子に対する愛よりも国王に対する敵意から王子の周りに集まっていたのであるが、再び国家当局との講話を結んで、窮屈で展望のないサークルから公の仕事に復帰出来ることを喜んでいた。プダグラ伯爵もこうした者達の一人であった。彼はこの年の秋にもイギリスへ出掛けた。イギリスの政治や言語に親しんでいた他に、何人かの有力な家庭に対し友好関係にあって、これが可能になったのであった。この傑出したミッションが彼に託されたとき、彼は、より良い代理代表となるべく、伯爵夫人に同行するよう頼んだ。しかし彼女は断った。部分的には王子に対し本当に愛着があったからであるが、それ以上に彼女は生来イギリスが嫌いなのであった。

従って、彼女は残った。残留し、忠誠を尽くすことに更に喜びが感じられないまま、残り、忠誠を尽くした。幸せな日々はまさに過ぎていた。すべてが変わっていた。宮廷ばかりでなく、王子も変わっていた。彼の不機嫌は増した。国家的関心事が、何年も置き去りにされていたが、再び前面に出て来て、王子の心を乱した。特にパリで明らかに雷雲が集積した時からのことである。彼の偉大な、今や身罷った兄に対して、兄を大して愛していず、大いに兄の粗探しをしてきたけれども、結局あらゆる知ったかぶりにもかかわらず、深く沈潜した、全く偽善的でない尊敬の念を感じていた。新しい諸状況とかがそれに関し影響を与えたわけではなく、諸人間の影響は更に少なかった。女性の支配[大王の後のフリードリヒ・ヴィルヘルム二世（1744-97）は愛人が多かった]は、すべての繊細なもの、精神的なものが剥ぎ取られてしまうと、彼には厭わしいものであった。我らの伯爵夫人の手に恭しく接吻しながら、彼は、マダム・リーツ[Madame Rietz]の名前が彼の眼前で言われた時、言った。「私ハ彼女ガ心底嫌イデス。私ノ関心ハ、御存ジノヨウニ、レディーニ向ケラレテイテ、女性ニ向ケラレルコトハアリマセン」。

これは特別な信頼の表明であった。にもかかわらず伯爵夫人は、自分のラインスベルクの日々が終わりつつあるという感じに襲われた。彼女は去ることを望まなかったけれども、心の中でその準備をした。その時は思っていたよりも早く来た。一七八九年伯爵は短い休暇で戻って来た。彼は国王の控えの間で発作に襲われて、病床に就いた。翌日彼は亡くなった。その知らせは、未亡人の結婚生活を知っていた人達が予期していた以上に未亡人を動揺させた。彼女は自分が今や高慢さとカプリッチョの中で、彼の愛ではなく、彼の貴族らしい志操の価値を、過小評価していたと悟った。彼の遺書は、新たに、この志操の完全な表現であったが、自分の不当さに対する思いをただ高めるだけであった。彼女は生来、感傷的後悔とは無縁な筈であったが。伯爵が入手したグーゼ城は、家系の荘園には含まれ

ず、伯爵夫人に、かなりの現金と共に遺贈された。彼女は遺産を継承し、その荘園管理を自らの手に引き受ける決心をした。ただ冬の間、ラインスベルクの宮廷に残ることにした。この冬が経過する時、彼女は王子から感動の思いがないわけではない別れをした。王子は他の記念品と共に、自ら詩作した沓冠体[頭語詩]を彼女に渡した。

一七九〇年復活祭の聖なる夕べに彼女はグーゼ城に入った。

城はまずとても住めそうにない印象を与えていた。管理人任せの時代、わずかな部屋を除いて、一種の穀物倉庫、餌置き場に変わっていた。アブラナと小麦が散らばって部屋にあり、干し草や麦藁の塊が通路に充満していた。左翼全体が最もひどかった。そのぼろぼろの床からは至る所茸が生えて来ていた。デルフリンガー時代の古い絵が、かび臭く、裂け目が入って、大方は額縁がなく、個々に、斜めに、壁に掛かっていた。ただ荒廃の印象を増すのみであった。

しかし伯爵夫人は、城が経験したこの不様な損害の光景に惑わされることはなかった。逆に、彼女の眼前に広がっている活動の展望が、彼女の精力的性質にとって、一つの刺激となった。彼女は二階の小さな二つの部屋に越して来た。これらは一般的破壊の被害が最も少なくて、同時にまた新鮮な空気と美しい公園への自由な眺望を有していた。ここを拠点に、彼女は近隣のすべての職人と共に、時には自分に馴染みの首都の芸術家達に連絡を入れて、内部の改築、増築に励み、そしてこの増改築は、そもそも意図通りに、比較的短期間で終わった。一七九〇年十二月三十一日、彼女は迷信深く、日を選ぶ性格であったので、新しい部屋に入った。勿論異教徒的、哲学的根拠からで、これには洞察と不合理とがペアになっていて、毎年の大晦日の日を明白な幸運の日と当てにしているのであった。

新しい部屋は皆右側にあって、ビリヤードの部屋、鏡部屋、あるいは花の部屋、応接室から成り立っていて、これらに、対応する側翼に移ると、食堂と劇場が結び付いていた。ラインスベルクの王子の流派から来た人々にとって、カーテンや書き割りなしには快適な生活方法は考えられなかったからである。城の左側半分は全体、部屋の風通しとすべての不要なものの片付けを除いて、建築上変更はなされなかった。一方両半分の間にある大きな玄関のホールは、すべてのデルフリンガー記念品の集積所となっていた。ここには二台の軽砲と、二人のガラスの目の剥製人形の軽騎兵と、かの肖像画や戦闘画の中で最も保存の良いものが見られた。これらはこれまで城の部屋に散らばっていたものであった。両軽騎兵の前面に、玄関ホールのほぼ中央に、古典古代の模倣の牧羊神が立っていて、その嘲笑的笑いは、その周りのものすべての最良の批判となっていた。

翌日、一七九一年新年元旦、伯爵夫人は新しく移った部屋の落成式のために最初の夜会を開いた。近隣の貴族が招待された。アメリー伯母は名士達に、彼女の資産、精神、宮廷での慣習が許す限りの高貴な段取りを行った。皆が夢中になっていた。持て成した夫人も招待客も、刺激の多い、ことによると友好的になるかもしれない近所付き合いを約束し合った。諸計画が練られた。未来は長い一連の音楽的朗誦的昼興行、カルタ遊び、フランス喜劇の上演と思われた。

しかし別な風になった。

すでに一年経たないうちに、両方の側ともお互い合わないと確信しなければならなかった。伯爵夫人は賢明過ぎたし、近隣貴族は十分賢明ではなかった。殊に女性達がそうであった。彼女達のフランス語は（ただわずかドイツ語が勝るばかりで）、上辺の文学的関心、

自分達にとって未知であるばかりでなくどうでもいい事柄についての絶えざるお喋り、こうしたものは一人の王子との個人的な交際と、傑出した諸精神との精神的交際の間で人生を送ってきた一人のレディーの繊細な感覚を傷付けざるを得なかった。ただ最初の出会いという須臾の間のみ、こうした状況に対する錯覚が生じていたに過ぎなかった。伯爵夫人は、この事実を一望して、すべての交際を打ち切って、自分の読書熱を再び受け入れながら、何年間か極めて少数のサークルでの付き合いに限定した。このサークルは、自分の弟のホーエン・フィーツのベルント、ホーエン・ツィエーザル居住のドロッセルシュタイン伯爵、八十三歳のゼーローの教区監督から成り立っていた。教区監督はすでにモルヴィッツ近郊の戦い[1741]の際、すでに従軍牧師として参加していた。この女性抜きのサークルの中では（ベルント夫人は加わっていなかった）彼女にとって深い欲求のスキャンダルやゴシップに関して、ほとんど期待できなかったが、王子との手紙でのお喋りが役に立った。王子は、このスキャンダル年代記の領域での趣味人で、二人にとって同様に都合の良い文通を続けるよう、彼女を励ますことに飽きなかった。

それは王子が亡くなる一八〇二年まで続いた。この時以降ようやく彼女はまた、孤独から抜け出る意欲を感じた。この孤独は全くもって彼女の本性に反するもので、ただ事情によって強いられたものであった。そしてこれは為された。女性達には、彼女は年齢と共に増大して、ほとんど病的に高じた嫌悪感を抱いていて、それ以前も以降も女性達は締め出されていた。それでそれまで彼女の交際圏を形成していた小さな男性達のサークルを拡大しようとした。幾つかの彼女の所に隣接する荘園の所有に関する変遷がそのための恰好の機会となった。そして例の社交圏が形成され始めたが、これはすでに我々の物語の始まる十年前、彼女の弟の側からの勿論批判的意見と、同時にまた伯爵夫人の弁明の結論、つまり「ドンナ人デモ良イケレドモ、タダ退屈ナ人達ヲ除ク」に至るものであった。

「分かった」とベルントは答えていた、「しかし条件もあるぞ。おまえさんは侍従のフォン・メーデヴィッツを全く退屈な人達に入れようと思っているのではないだろうな」。

「そうよ」と姉は答えて、話し合いは中断した。この話し合いでは姉妹は、それぞれが自分の観点からすれば正当なのであった。伯爵夫人は、すべての行為において自己中心的で、一般的観点に従うのではなく、極めて個人的趣味に従って行動していた。ベルントがかなり皮肉に「どんなでもいい友」と形容した彼女の交際圏は、他の人々の気に入るかによってではなく、ただ彼女の気に入るかによって選ばれていた。彼女が最も軽蔑したのは、慣習的な物の見方であった。彼女の気分[気まぐれ]が絶対であった。彼女に微笑を誘う者、彼女に辛辣な嘲りの切っ掛けを与える者は、彼女に一杯のエスプリや逸話の宝庫をもたらす者と同様に楽しい存在であった。ただはっきりしない人間のみが、彼女には関心を引かない者で、一方すべてのユニークな者は、制限された方向の者であれ、賢明な方向の者であれ、彼女にちくちく刺激を与えるものを有していた。

次の章で、グーゼ城のこの「どんなでもいい友」はいかなる種類のものであったか、詳しく見てみることにしよう。

第三章
どんなでもいい友

「どんなでもいい友」はより広いサークルとより狭いサークルがあった。より狭いサークルは、七人の数で、次の人々から成り立っていた。ホーエン・ツィエーザルのドロッセルシュタイン伯爵、ビンゲンヴァルデのフォン・クラハ会長、クヴィルルスドルフのフォン・バメ陸軍少将、ヴッシェヴィーアのフォン・ペーレマン男爵、アルト・メーデヴィッツのフォン・メーデヴィッツ僧会議員、プロッツハーゲンのフォン・ルッツェ大尉、キルヒ・ゲーリッツのファウルシュティッヒ博士であった。

我々の次の任務は、これらの殿方の単なる紹介に、これらの殿方はファウルシュティッヒ博士を例外に皆六十歳に達しているか、越えているのであるが、短い性格描写を添えることであろう。これが立派な語りの法則に反するというのであれば、これで生ずる欠点はひょっとしたら実際そうであるよりもむしろ見せかけであるかもしれないものだけに、読者は大目に見て欲しいものである。というのは立派な権利であるかのように、個別的形姿の描写、その行為や思考をメモのようにコートに着用している形姿の描写は非難されかねず、その代わりの読者の空想を刺激して、ほとんど仄めかされたものを創造的に仕上げ完成させるというかの語りの技法が称賛されるかもしれないとしても、それでもいつでも例外は許されようからである。特にここでは、完成した形姿の並置は、肖像画そのものの為というよりも、この形姿が見られる土地の為に、読者に紹介された肖像画の画廊としてしか余り意味がないのである。

グーゼ城の最も高貴な人物は、同時にこのサークルに最も長く属していたが、ドロッセルシュタイン伯爵であった。ケーニヒスベルク生まれで、その近くに家系の荘園はあって、彼は、田舎の領地を替えたけれども、東プロイセン貴族の完全な代表者の一人であった。この貴族は、宮廷や「公務」に離れていて、勿論　一　少なくともまだ当時は　一　自分の名前をマルク地方やポンメルンの家系のように我々のこれまでほとんど一連の会戦を描写するにすぎない話しの中に記入することを断念しなければならなかったが、しかしこのことによって、大衆性や歴史的名の響きを失った分、また真の独立性の自覚で考量されることになった。軍事的事務的国家の歯車装置の中に編入され従属させられずに、東プロイセン全体と特にその貴族は、　一　個々人にとってはその弱点となったが、全体としてはその長所となって、　一　明白に田舎地方の独自性を保っていると自覚していた。

この田舎地方の独自性を保って、これはひょっとしたら最も立派に自由な者のかなり渋い表現と評されるかもしれないが、ドロッセルシュタイン伯爵も立脚していて、彼が女友達の、グーゼ伯爵夫人の食卓で、がに股のフォン・バメ陸軍少将の向かい側に座っているとき、この少将が怪しげな逸話を語って、馬や、王子や、踊り子について、自慢話というよりは高慢さと劣等な教育のせいで、甲高い声の隠語で演説すると、彼は東プロイセンの誇りに取り憑かれないわけではなくて、自分の故郷の田舎とマルク地方の出身国の違いを自覚したかもしれない。しかしこのような取り憑かれは生ずると同様、速やかに消えた。珍しい非党派性と、どのような形のものであれ、すべての狭小さや自己中心性から遠く、彼の認識は夙にこう確定していた。つまりマルク地方はどんなに嫌な面があっても、王国の中心地、心臓部と見なされるべきであり、バメ家がいようがいまいがそうであり、いや部分的にはバメ家のせいでそう見なされるべきである、と。

この伯爵はほんのしばらく国家に奉公していた。二十歳で最初の近衛兵大隊に入りながら、しかし一年後には健康上の理由で離隊して、そしてポツダムの演習場の光景を、ニー

スの船舶の光景と取り替えることが出来て、喜んだ。回復すると、イタリア中を旅して、全く芸術の勉強に専念して、最初はローマで、次にはパリで暮らし、自分の「大旅行」をオランダとイギリスへ旅して締め括った。

彼が一七八八年家の事情でペテルスブルクの宮廷へ赴いたとき、彼は三十代の終わりであった。ここで伯爵令嬢リーヴェンと知り合いになり、彼は彼女に会った瞬間その透明な彼女の雪花石膏[アラバスター]の肌の美しさの虜になった。彼の求愛は拒絶されなかった。女帝[エカテリーナ二世(1729-96)]自身が美しいカップルを祝福し、二人は、豪華な、ペテルスブルクの宮廷貴族の参列の許、挙行された結婚式の直後、伯爵の東プロイセンの領地に戻った。

しかし蜜月の静かな幸せは、若い伯爵夫人にとっては間もなく余りに静かすぎるものに思われた。彼女は「社交」の気散じの生活に憧れた。しかし政治的状況も、伯爵の志操も、ロシア宮廷への新たな登場に関しては、　ー　これを若き伯爵夫人は勿論最も望んでいたことであろうが、　ー　不可能に思えたので、ホーエン・ツィエーザルへの移住が決定された。この地は元来マルク地方のドロッセルシュタイン家に属する荘園で、二，三年前ようやく東プロイセンの家系に渡って来たのであった。

ホーエン・ツィエーザルからは首都との付き合いが比較的容易になった。首都では宮廷生活は、フリードリヒ大王の時、ほとんど完全に休止していたのであったが、丁度当時新たな隆盛を迎えつつあった。そこはペテルスブルクではなかったが、それでもベルリンではあった。若き伯爵夫人は、時にはあたかも魂が何か遠くのもの、失われたものを求めているかのような、半ば疲労した、半ばとりとめのない表現ではあったが、それでも憑かれたように気散じに没頭した。彼女は幸せと見なされた。彼女は実際そう見えた。しかし透明な雪花石膏[アラバスター]の肌の色合いは何ら結構なものを意味していなかった。彼女はオペラハウスの公演の直前に、大喀血に襲われた。衰弱が続き、彼女は冬の終わる前に亡くなった。

伯爵は打ちのめされなかった。彼は長い期間すべての交際を避けた。彼が当時付き合っていたグーゼ城でさえ、彼は姿を見せなかった。彼がまた社交に現れたとき、彼の自己制御は完全なものであった。しかし彼はかの道楽者の陽気さと、以前の彼を特徴付けていた会話好きな快活さを失っていた。彼はもはや笑わなかった。彼はただ人生に片を付けた者達の微笑を浮かべるだけであった。彼の本性のこの変化を創ったものは、若き伯爵夫人の死だけではないとあちこちで言われた。彼は大きな建築に目を向けた。特に彼の気散じとなり始めたのは、公園の建設であった。ホーエン・ツィエーザルは立派な素材を供した。かくて当時の趣味の高価な創造物が出来て、それは、城の平らな屋根から見ると、あるいは教会の塔からはるかに良く見えるが、大きな、石と土で出来上がったアルプスのレリーフの地図となっていた。花崗岩の塊がリーギ山風に重なっていて、山の背に二つの隘路が走っていて、それがアルトドルフとかキュスナハト[シラーの『ヴィルヘルム・テル』で馴染み]に通じており、一方見えない源泉から溜められた湖が小滝の多い渓流となって谷へ通じていた。アルプスの牧舎風なもの、牧場が、段々に点在しており、これらの人工物の麓には、現実のオーダーブルフに移りながら、魅力的な平地の風景が、田畑や野原と共に、川や、小川、橋、それに静かな、牧場を取り巻く池と一緒にあって、池の日本風な島の小さな家に周りには白鳥が浮かんでいるのであった。

この公園の造成に、我らのグーゼの伯爵夫人は、すべてのロココ的なものに魅力を感じていて、とても感興を覚え、付き合いが増し、手紙の遣り取りがなされ、会議が行われた。その最終的な結果は、ホーエン・ツィエーゼル風な「スイス」の建設ばかりでなく、一つの友情の確立でもあって、この友情はそれ以来特に伯爵夫人の側から、本当の、気まぐれや気散じの欲求をはるかに超える親密さへと高められていった。

これはほとんど止むことがなかった。というのは確かに伯爵夫人はユニークなものに愛着を示し、自分のサークルに独自な個性を欠かしたくなかったのであるが、それでもやはりまたこのサークルの大多数に欠けているもの、つまり洗練、教養、作法、とりわけ芸術や美へのすべての理解をもはなはだ求めていたからである。こうしたものすべてを伯爵は有していた。彼はラインスベルクの社交界の高みに達しているばかりでなく、ただ利己心のない純粋な本性からのみ生ずるかの持続性の声望によって、それどころかこの高みを凌駕していたのである。

ある出来事ですでに固まっていた友情に新たな絆が生じた。伯爵が切っ掛けを捉えて、伯爵夫人に秘密を打ち明けた。彼は彼女に自分の妻の逝去の話しをし、それにまたこの逝去の直前に生じたことについて語った。それは次のようなものであった。

若き伯爵夫人は、激しい咳の発作の後、深い微睡みの状態に陥ったように見えた。伯爵も数日に及ぶ看病に疲れて、背もたれの椅子で寝入っていた。遅い時刻、ただ傘状ランプが燃えていた。彼が目覚めたとき、病気の妻が起き上がって壁戸棚の壁紙ドアに近寄っているのに気付いた。忘却の睡魔に襲われながら、同時に病気の妻の行動を妨げてはならないという漠然とした思いを抱いて、彼は自分の背もたれの椅子から動かないでいた。彼は今や、彼女が戸棚から一つの小箱を、そしてその小箱の隠された引き出しから赤い紐で一束に結ばれた何通かの手紙を取り出すのを見た。彼女はまた歩いて戻って来て、彼の側を通り過ぎ、彼の眠っているのを確信した風で、それから暖炉の方へ向かった。彼女は手紙を唇で触れて、紐を解き、それぞれ一通ずつすべて用心深く、炎が余りに明るく燃え上がらないように、半ば消えていた炎の中へ投じた。すべてが燃え尽きると、彼女は臥所に戻って、掛け布団を被り、不安の重荷から解放されたかのように大きく息をした。それは彼女の最後の行為であった。朝が来る前に彼女は亡くなった。残された夫にとっては何という一日であったことか。彼は自分が愛されていると思っていた。今やすべてが妄想で夢であった。誰の手がそれらの手紙を書いたのか、それらの手紙を受け取った妻は今際の時までこの上なく大事なものと隠していたのだ。彼は再三問うた。しかし答えはなかった。秘密は死んだ妻と暖炉の灰の中に残されたままであった。

そのように伯爵は語った。しかし物語そのものは、すでに仄めかされていたように、かの日からホーエン・ツィエーザルの寡夫の伯爵とグーゼ城の伯爵未亡人の間で消し難く結ばれた友情を封印するものとなった。

しかしながらグーゼ城には単に一人のドロッセルシュタインを有するのもであった。そこに「どんなでもいい友」の中で集まった他のすべては、かなり伯爵の裏面と見なされる者であった。

位階の点で彼に最も近いのはフォン・クラハ会長で、才能と性格の男であった。彼は重要な法律家と見なされていたが、頑固な反対意見を述べて大王の怒りを誘発して、当時こ

の件で受けた不公平な沙汰により深く失望して、ビンゲンヴァルデに戻って来ていた。彼は痩せて、背が高く、鋭く、余り辛抱強くなかった。彼の顕著な特徴は吝嗇であった。彼はどんな支払いにも難癖を付けて、「時間をかけると、利子が儲かる」の原理に従って支払っていて、いつもまず裁判形式の遣り取りの導入に従うのであった。当事者達は、それを彼の法学的条文愛好心からいつも誘発されている裁判への古い愛着から生じたものとして嘲っていた。彼の正餐もある特別な評判を得ていて、毎年ただ一度繰り返されるのみであるが、すべてのオーダーブルフの貴族の真の恐怖となっていた。唯一老バメだけが、ー　彼はチップと愛嬌ある駄洒落のせいで、お仕着せの従者の恰好の御者や庭師に人気があったが、　ー　これまでワイン瓶手品の応用で、この恐怖から逃れる術を心得ていて、それで例えば、ペーレマン男爵は全く本気でこう請け合っていた。「クラハ家の正餐の間中ずっと『将軍』の側では、自らのバメ家の酒蔵から以外のワインは一滴も飲まれていないんだぞ」。バメ本人は、いずれにせよ、自分の軽騎兵本性をどんな犠牲を払っても徹底したいというほとんど病的傾向に捕らわれていて、このような敬意には甘んじていたが、他方では勿論単にクラハに対する新たな意地悪さの思いで、クラハに対する抜け目ない自分の勝利を決定的に認めることはしないという風に持っていっていた。彼は誓った、クラハは、大いに鋭すぎるから、騙されることはない筈だ。彼は三十年にわたる法律家業の犯罪を見抜く、大審問官の目を有し、何でも見ており、何でも承知している。ただ勿論彼は黙っている。少し面白くない思いをするが、しかし状況の大きな利点を早速見て取って、実際単に次のような疑問に襲われているだけなのだぞ。「なぜ奴らは皆バメのようにしないのだ」と。

伯爵夫人は、個人的には大いに気前が良くて、この吝嗇には大して反撥を受けなかった。彼女は十分に長く生きて来ていて、こう知っていた。自分自らと他人に対して同様に情け容赦ない倹約は、体を頑強にタフにし、精神を鋭く、きびきびとし、とりわけ独自なものの形成に都合がいい、勿論快適な者を作るわけではないが、と。しかし彼女にとってそれは大事ではなかった。クラハのために結局決定的であったのは、王子も経済活動への強力な愛着を有していたということであった。

サークルの第三の人物はすでに何度か言及された陸軍少将のフォン・バメ［Graf　von Zieten（1765-1854）がモデル］、あるいは、グーゼ城では短縮して呼ばれていたように、「将軍」で、小さな、極めての醜男で、頬骨が突き出て、ロココ風机のような脚であった。全体の風貌は軽騎兵風で、しかし軽騎兵というよりはむしろカルムイク人であった。

彼は古くからのハーフェルラントの種族の一員で、ラーテノー近郊のバメ家の者で、彼の死と共に消滅した。本当のことを言うと、左程消滅したわけではない。彼自身の青春はすさんだものであった。それについて奇妙な話が飛び交っている。彼に愛されていると思ったある貴族の娘、近隣の娘であるが、この娘を彼は不名誉な状態に陥らせた。結婚を迫った娘の兄弟を彼は宮廷から追い出した。娘本人は、ちなみに両親の家に留まっていたが、精神が錯乱した。

一年後老父のバメが亡くなった。父と息子はお互いに尊重し合っていた。人々は老父の棺を墓所の深みに落とそうとしていて、棺の横に、手に松明を持って、息子が立っていた。彼はツィーテン［Zieten（1699-1786）］軽騎兵連隊の赤い制服を着ていた。小さな教会は黒幕が張られていた。棺が降ろされる瞬間、オルガンの内陣席に隠れていた精神錯乱の娘が叫

んだ。「御覧、地獄へ行くのよ」。皆がびっくりした。ただその言葉が向けられていた本人は微笑していた。ちなみに彼は優秀な兵士であった。それが彼を支えた。

彼にとって面白くなかったバーゼルの和平[一七九五年春]の後、彼はハーフェルラントからオーダーブルフに移って、グーゼ城の近隣に荘園を購入した。グロース・クヴィルルスドルフの人々は、彼について余り苦情を言わなかった。彼は確かに昔からの生活を続けた。しかしオーダーブルフの人々は、自ら扱いにくいわけではなく、不同意で彼に圧力をかけることはなかった。彼の趣味はますます奇妙になって行った。誰か若い者が村で亡くなると、若者であれ、娘であれ、彼は盛大な葬儀を準備させた。条件があったが、それは遺族が死体に化粧を施し、多くの明かりで飾られた玄関に棺を置くということに同意することであった。それから彼は棺台の足許に立って、海泡石のパイプを吹かせて、片目を閉ざして、半時間ほど死体を見つめるのであった。その際彼の魂に何が去来したか、誰も分からなかった。彼は悪戯小僧と見なされていた、更にもっと悪しき者と見なされていたかもしれない。しかし彼は将軍で、頭の天辺から足先までマルク地方的で兵士的であって、諧謔的な向こう見ずな精神であった。三年前ようやく彼の最後の衝突が行われた。その切っ掛けは全く彼らしいものであった。近隣の荘園の納屋が燃え落ちた。その所有者が好きでなかったバメは、公の食卓で言った。「保険金の高い納屋はいつも燃え落ちる」。彼は撤回を求められた。その代わり彼は敵を見つめて、単にこう鳴いた。「どの火事の保険屋も同じ事を言う」と。

決闘ということになった。フォン・ルツェ大尉が立ち会った。侮辱された者は、バメの右の耳先を小さな黄金のイヤリングと一緒に射落とした。それはリューマチのせいで嵌めていたものであった。彼は残った耳半分に新しいイヤリングを嵌めて、それ以来以前よりももっと奇怪に見えることになった。

ある種の悪戯は彼の敵の多くの者との和解をもたらしたことも了承されなければならないであろう。その上、彼はいつでもいつもの彼であったのであり、自らの人生を遠慮なく珍しい逸話の中で披露していた。彼の精神的欲求は、からかい、嘲笑、瞞着にあって、それ故、彼は他の誰よりも、バルニムやレブースの収集家や古代研究者達に恐れられていた。彼は自分の悪戯を上手く行えるように、古代研究協会の会員となっていた。火打ち石の武器や青銅の偶像、燻された陶器の破片を、復活祭の卵を隠すように、置いて隠し、「大きな子供達」が探し始め、年代を測定し始めると、法外に喜んだ。トゥルガニーは、有り得ることであるが、これらの瞞着を可能な限り利用して、ザイデントプフが何か原初ゲルマン的なものを発見したと思い、追い詰められた法律顧問官に最後の一撃をお見舞いしようとしているたびに、法律顧問官は偶然であるかのようにこう言い添えるのが常であった。「バメのせいでないさえすれば、..」、これは終わりまで語られない文で、すでにこの文の導入だけで、敵の混乱は十分に見られたのである。

全体的に見て、「将軍」はグーゼ城で寵児の一人で、鯉の池におけるカワカマスでもあった。そのことから生ずる危険や不快は、彼がもたらす新鮮な活気でまた帳消しにされた。彼が道徳について独自の見解を有していることは考慮されなかった。これは自然にまかせた。伯爵夫人はこの点についての批判をこう述べて、却下した。「公然タル不道徳ハ、偽善ニ対スル唯一ノ確実ナ防御デアル」[ラ・ロシュフコー]と。

ただフィッツェヴィッツの人々にとっては、老いも若きも、このような見解は参考にな

らなかった。彼らは、外面的には昔からの悪巫山戯を我慢していたが、彼を嫌い続けていた。ベルントはよくこう言っていた。「バメとホッペンマリーケンが、カップルだったら良かったであろう」。

バメの隣に、同時に生来の反対物としてペーレマン男爵がいた。グーゼのサークルの第四の人物である。バメが度胸を余りに有していた一方、ペーレマンは余りに少なすぎた。彼がそのことで意気軒昂の反対物よりも伯爵夫人の関心を引くことが低くなることはほとんどなかったというのは、まずもって保証する必要もないだろうが、このサークル自体、度胸の欠如を真剣に難ずる風はなかった。特に軍人達はそうであった。類似のことは今日でも観察されよう。部屋に籠もっている者達は皆、絶えず「犠牲的死」を要求する。しかしベテランの兵士達は、五十もの戦闘を経験して知っているのである。つまり一方勇気とは何と独自で、不確実な代物であるか、知っているし、他方何と低級な体質でも、何とただの、どこから生じたともしれない夢遊状態にあれば、通常の範疇の英雄行為を形成するに十分であるか知っており、これらの兵士は非常に冷静に喝采を浴びる事案について考え、普通夙に、この件に属することすべてを特別な栄光として見ることをやめてしまっているのである。それでバメとペーレマンは最良の友人ということになっていた。勿論愚弄に欠けることはなかった。我々の物語の始まる数週間前初めて、ペーレマンは自らに対する突然生じて来た自信を得て、こう請け合ったのであった。「銃に対する自分の嫌悪は、単に自分の耳のまことに繊細な体質に依るものであろう」と。それに対してバメの側から出来る限り真面目に返事がなされた。「確かにそういうことはあるかもしれない。それでは昔の学生のようにサーベルで一試合やって見るか。これはうるさくない。貴方の耳の邪魔にならない。せいぜい拙者が貴方の耳を切り落とすだけであろう」。このようなからかい、嘲弄は、日常茶飯であった。しかし一時も良好な関係は阻害されなかった。「ヴッシェヴィーアの男爵」は、彼は一帯でそう呼ばれていたが、バメとは他に根本的に違っていても、少なくとも一つの良い面を彼と共有していたからである。彼は傷付きやすくなかった。詩人としてもそうで、詩人には、彼自身の告白によると足痛風のときになるのであった。つまり彼は、足痛風はミューズが生ずるたびに屈すると観察したと言い張った。これを親しく知らされたグーゼのサークルでは、それを利用して次のような詩が作られた。

強者ニハ降参
男爵の足痛風は、
彼のミューズがやって来るのを見ると、
とても驚き、言った、「おや
あのミューズにはとてもかなわない」。
そして急いで疝痛器をまとめて、
男爵とミューズだけを残した。

上辺は、バメがこの詩を作ったと言われた。本当は誰もが、これはファウルシュティッヒ博士に由来すると知っていた。彼はいつも、自分の小さな海賊船を他人の旗の下、帆掛けて走らせる用意があった。

サークルの五番目の者は、アルト・メーデヴィッツのフォン・メーデヴィッツ侍従であ

った。退屈な衒学的代物で、メーデヴィッツ家の重要性で貫かれていたが、祖国の歴史に関する冊子は、この家の名前をどこにも記していないのであった。彼の独自性は発明の才にあり、これに関しては、哲学者の流儀に従って、大小の区別を設けていなかった。彼はすべての事柄に同じ愛を抱いていた。倹約暖房であれ、気密性の高い窓の戸締まりであれ、羊小屋、馬小屋での壁の硝石の破壊であれ、人工のアミガサタケの養殖であれ、いくつか上げるとこうしたものが絶えず解決と改善に向けて精神を発揮する問題であった。軍事当局には彼は、彼が何度も手渡す、簡易化された荷物の持ち方、実用的コートの巻き方についての論文で良く知られていた。いつもスケッチが添えられていた。しかし彼の本来の道楽は、煙草缶であった。彼は収集家で、ザイデントプフが骨壺を集めていたように、メーデヴィッツは嗅ぎ煙草入れと、それに類するものすべてを集めていたと言い添えることが許されよう。フリードリヒ大王時代に関しては、彼の収集はほぼ完璧であった。若い国王がオーラウの格子門で銃の発射を受けている図のモルヴィッツ[会戦]の缶に始まって、使者が旗をなびかせて、「平和」と記された文字と共に世の中を飛んで行く図のフベルトゥスブルク[和平一七六三年二月十五日]の缶に至るまで、彼はそれらをすべて所有していた、二重に有するものもあった。

以上のことは皆結構であった。しかし彼は「静かな缶」で満足していなかった。彼はとりわけかの当時名声の頂点にあって、黄金と鼈甲で飾られた細密画の手回しオルガンの情熱的崇拝者であった。これは演奏缶の名前で世界一周旅行をしていたものである。このような音楽を充填した襲撃道具をフォン・メーデヴィッツはいつも携帯していて、それで彼は社交的暗殺を行うのであった。どんな逸話をしでかすか、一緒に葬儀の馬車に乗っていても、安心できないそんな人間がいるように、メーデヴィッツの演奏缶も安心ならなかった。彼はこの威力を自覚していて、時には幸いに上手に、不安げな休憩を一杯に取りながら行った。しかし更に頻繁であったのは、単なる気まぐれや傷付いた虚栄心の閃きに従う場合であった。自らの手段で社交界に寄与することが出来ずに、彼は知識や披露の才能で傑出した者すべてに嫉妬して、ひょっとしたら素晴らしく構築された、上手な演説家の文章がまさにその結末を迎えるかもしれないその時に、確実なことに、単なる嫉妬の悪戯で、パパゲーノのアリア[恋人か女房がいれば]とか、あるいは「マレンゴの戦い[1800]」[の唄]が挿入されるのであった。最もげんなりさせられることは、この手段が、ほんの一人でも食卓に見慣れぬ者がいたら、その陳腐さにもかかわらず、いつも成果を上げるということであった。伯爵夫人にとっては、この不協和音の音楽をやめさせることは簡単なことであったろう。しかしこの作法を大変無趣味なものと思っていたけれども、それでも演説の凱歌を奪われた者達の当惑の怒りを眺めることは、その都度楽しいことでもあった。

グーゼのサークルの中で最も重要でない者は、フォン・ルッツェであった。情熱的な猟師で、背が高く、筋張っていて、かなり寡黙な男で、かつてポンメルンのフォン・ピルヒ連隊の大尉であった。彼はプロッツハーゲンを所有していた。これはちなみに最古のルッツェ家の所有地であったのであるが、およそ二十年前にようやく購入されたものであった。その契機は次のように語られている。

フォン・ピルヒ連隊の駐屯地があったシュタールガルト方面にかけて、オーダーブルフの地形学が迷い込んだことがあった。『ブッコーとその周辺』の章の百十四頁にこう書かれていた。「プロッツハーゲン近郊、三百年近くルッツェ家の所領の荘園であるが、ここ

に深い渓谷『貴公子ハンス渓谷』がある。この渓谷の名前の由来は、貴公子のハンス・フォン・ルッツェがここで転げ落ち、遭難死したからである。これは一六九三年であった。最後のルッツェとなった」。同僚達の一人にこの注記が読まれると、果てしもなく冗談でこう言われるようになった。「ルッツェは偽者だ。もはやルッツェは生きていない。最後の者がとうにプロッツハーゲンの教会に埋葬されているのだ」と。我らの大尉は、洒落た返事の名手ではなくて、不機嫌になった。彼は離隊して、プロッツハーゲンを購入して、今や早速、「最後のルッツェ」も元気に暮らしていると証明して見せた。しかしその事で事態はほとんど改善しなかった。シュタールガルトの巫山戯は周知のことになっていて、グーゼ城でも続けられた。バメは天地神明にかけて、こう誓った。両方の「最後のルッツェ」、現今のルッツェと以前のルッツェの一方の方は、必然的に奇妙な器用さを有しているに違いない。故ハンス・フォン・ルッツェは幽霊的な前兆、いつか未来に生ずることの鏡像にすぎないか、あるいは我らの中に紛れ込んでいる友、いずれにせよほとんど肉がないが、これが幽霊であるか、である、と。自分（バメ）個人に関するならば、自分は先の仮定を優先する、なぜならそうなれば事象の現実は、なおも彼のお蔭で、鹿猟、谷への転落、首の骨を折るルッツェというものが存在することになるからである、と。

老大尉はこの議論にいつもそのたびに甘酸っぱい顔をして従っていたが、しかし夙にこれに対するどんな抗議も放棄していた。時々彼の側から攻撃したが、この技芸の助けを借りても巧みなバメに太刀打ち出来なかった。

彼のその他の小さな弱点の中で、最も珍しい弱点は、彼の隘路や山腹から成り立つプロッツハーゲンの領地に関して、自分を一種の山岳の住民と見なしていることであった。「我々高台の者達は」と言うのが、彼のお好みの科白の一つであった。

伯爵夫人にとっては、彼が彼女に対して示す特別な敬意が好ましかった。というのは敬意やお世辞は見抜いていると称するのを彼女は好んだが、それでも結局悪い気がしなかったからである。

この「より狭いサークル」の七人目の最後の男は、ファウルシュティッヒ博士であった。彼についてはもっと後の章で詳細に語ることになろう。

第四章
正餐の前

友人のサークルの全員が、昔からの習慣で三日目の祭日はツィービンゲンで過ごす習慣であったファウルシュティヒ博士を除いて、グーゼ城に招待された。我々が承知しているように、レーヴィーンとレナーテもそうであった。

二人は、到着した最初の者達であった。招待は四時とのことであった。しかし丸一時間早くすでにレーヴィーンの橇は大きな並木道の一つにカーブを描いた。それはもはや我々が最初我らの主人公と知り合いになったときの麦藁の束や切り藁袋の積まれた幌付き橇ではなかった。アメリー伯母は、自身時にだらしなかったが、しかし他の人々と混じると上品な出で立ちを守った。出来る限りホーエン・フィーツの人々もそれに合わせた。橇の席は、熊の皮で覆われていて、周知の貝殻の形で、青い縁取りの雪覆いが側面上に張られた帆のように馬の上で膨らんでいた。クリスマス・イヴの時我らのレーヴィーンを微睡みに

誘った鈴の音は、今日は馬の背の組鐘の音に変わっていた。そして二つの小さな飾り毛が赤と白になびいていた。穀粒を啄む雀達が村の露地では数百羽となって飛んでいた。かくて城に向かった。今やスフィンクスの橋を過ぎて、橇は止まった。レーヴィーンは、素早く幌を戻しながら、レナーテに手を差し出した。レナーテは今や青春の素早さで、橇から、硬い雪の上へ広げられた葦のマットへ飛び降りた。そして彼女は入口に向かった。彼女はいつもより大きく見えた。ひょっとしたら赤い縁飾りのグレーの長い絹のコートのせいかもしれない。その折り返されたフードから彼女の澄んだ目が、今日は二重の新鮮さで輝いていた。というのは走行は長かったし、それに鋭い風が吹いていたからである。

玄関は快適な暖かさで迎えてくれた。古風な高い暖炉には、その側面には両デルフリンガーの軽騎兵が控えていたが、数時間前からすでによく維持されていた炎を保っていた。

猟師のお仕着せの一人の従者が、彼は猟刀も着用していたが、彼らのコートを脱がせて、伯爵夫人は数分間お待たせしますと知らせた。これは応接時いつも繰り返させる形式であった。レーヴィーンとレナーテは了解し合って、互いに見つめ、ビリヤードの部屋、鏡の部屋を通って、「サロン」へ歩んで行った。自分達自身に任されて、二人はここでは幅広く奥行きのある壁龕の中にある隅の窓へ近寄った。その窓の下半分はただ一つの窓ガラスから成り立っていた。当時珍しく、とても素晴らしいものであった。雪の花は半ば溶け去っていて、野外の眺望が出来た。ただ尖った屋根で雪に覆われた城の堀から突き出ている白鳥の小さな家越しに、二人は真っ直ぐに、公園の端まで続いている桜の並木道を眺めた。最前列の幹には、幾つかの鳥罠の破片が、その赤いナナカマドの束と共に、見えた。一方並木道の出口には小暗いカルツォーの教会の塔が立っていた。その黄金の球は丁度沈む夕陽の中、輝いていた。兄妹の周りはすべて静かであった。二人は次第に溶けて行く氷が個々の滴となって金属のタンクに落ちる物音だけを耳にした。

窓辺のこの場所は十分懐かしい感じがした。他の訪問客であれば、最後の陽光を「サロン」の中での見物そのもののために使うことを優先させたことであろう。そこは立方体の部屋で、調度は趣味用とまた実用とで準備されていた。窓に向かい合った側では、半円形の長椅子が置かれていた。それは、真ん中で分割されて、食堂の両開きドアへ通行できるようになっていた。同様に空いた両隅には、月桂樹と夾竹桃の茂みがあって、左右に分離していた。夾竹桃の隅の横に螺旋階段が立っていて、胡桃の木の可愛い浮彫細工の手すりが付いていた。床には厚い絨毯があって、トルコ風の赤が支配的であった。その他はすべて青色であった。壁も、カーテンも、家具の素材もそうであった。周りの一面に、支柱や持送りの上に、胸像や彫像が立っていた。それらの輝く白さが入って来たとき最初の印象を与えていた。後になってようやく絵画も目立って来た。それらは、かなり暗い色調で、かの大理石やアラバスターの細工とほとんど劣らぬ数で、部屋を飾っていた。それらはすべてラインスベルク時代からの思い出の品であった。第一に王子自身の肖像画で、構成とか処理が若干バロック風で、虎の皮の折り返し、手を岩の図と戦闘作戦の上に置いていた。ラインスベルク城の向かい側に、その正面を水面に映しながら、湖の上を一艘の小舟が滑っていて、その中には解けた髪の美しい女性が、人魚のようにブロンドの髪で、舵の所に座っていた。伯爵夫人であると言われていた。窓の支柱には、影になって余り判然としないが、王子の食卓仲間のパステルの肖像画が掛かっていた。タウエンツィーン[1760-1824]、ヴレーヒ達[1733-85、1734-95]、クニプハウゼン[1729-89]、クネーゼベッ

ク［1748-1828］。大方は友人達自身の贈り物であった。

レーヴィーンとレナーテはまだ日没の太陽を眺めていたが、部屋の奥から呼びかけの声を耳にした。「ようこそいらっしゃい」。彼らは振り向いて伯母を見た。彼女は螺旋階段から二人の方へ歩んで来た。

兄妹は彼女に向かって急ぎ、彼女の手に接吻をした。

伯爵夫人は黒服であった。頭巾先端飾りも欠けていなかった。これは支配の君主の家風に従った未亡人の身なりで、これを伯爵の逝去以来彼女はまた脱ぐことはなかった。ちなみに頭巾や襞飾りは印象を損なうことはなく、より新鮮に見えたかもしれない。

隅窓の近くに、「小型ソファー」があって、他のすべての家具同様、フランス風青色の同一のカバーを有していた。これは伯爵夫人のお好みの席であった。レナーテは高いクッションを寄せて来て、レーヴィーンは伯母の向かい側に座った。会話が間もなく完全に始まり、フランス語の単語や言い回しがふんだんに混じっていたが、この物語では余り紹介しない。伯母は上機嫌に見えて、矢継ぎ早に質問した。ホーエン・フィーツのクリスマスの朝や、それどころかオーディンの馬車まで詳しく論評されなければならなかった。この馬車のことは極めて驚くべきことであった。というのは古代史の件では伯爵夫人はバメ同様進んでいなかったからである。マリーも言及されたが、単に短くで、それから会話はラダリンスキー家に移って行った。この家にフィッツェヴィッツ家が二重の結婚で繋がることが伯母の最も憧れの願望であった。この願望にできるだけ迎合することが、夫人は遺産継承の伯母であるから、あらゆる状況下で推奨されることであったろう。しかし幸いなことに、グーゼでの家族計画とホーエン・フィーツの兄妹の衷心からの願望は一致していた。

「あなたはトゥーバルとどのように別れたの」と伯母は尋ねた。

「機嫌良く別れたよ」とレーヴィーンは答えた、「今朝早く彼から届いた手紙でも、クリスマスは格別変わったことはなかったと思われます」。

「何て書いて来たの」。

「文学関係の友人達についての長い詳しい手紙です。でもクリスマス・イヴの手短な描写で、クリスマスの明かりはラダリンスキー家ではかなり冴えないと、まず書いています。カティンカについても若干述べています。お知らせしましょうか」。

「頼むわ」。

レーヴィーンは手紙を開いた。すでに部屋は暗くなっていた。それ故彼は窓にもっと近寄った。その窓ガラスは最後の赤みを帯びて輝いていた。それから彼は導入部を飛ばして読んだ。「子供達のいない家では、幼児イエスは、子供の感覚が大人達に残っていなければならず、いつも難しい目に遭うことだろう。カティンカは、多才で、（ひょっとしたらこの多才さのせいで）この感覚を有していない」。

レーヴィーンは一瞬黙った。伯母が何か言いたそうに見えたからである。すると伯母が言った。「それは正しい見解ですけど、それをトゥーバルの口から聞くとは驚きです。牧師のザイデントプフが話しているようだわ。カティンカはポーランド女性です。ソレガ全テヲ語ッテイマス。だから私にとって彼女は大事なの。子供の感覚。ドイツ人の愚かさだわ。ラダリンスキーともあろう人がそんな感傷性に陥るなんて。驚イタ。偶然の悪戯で、運命の奇想で、まさにこの人の母親には半ダースの「イツキー家」や「インスキー家」よりももっと多くのポーランド的血が流れているのでなかったら、これはドイツ人の母親の

せいと思わざるを得ないところよ。子供の感覚。ソンナノハ御免ダワ。あなた方にはお願いだから、こんなドイツ人らしい感情の特殊性が、神様の永遠の世界秩序で不可欠の小道具であるかのようなつまらぬ考え方は棄てておしまいなさい」。

レナーテが最初気を取り直して、言った。「私はそんな考え方はしないと思うけど、でも聖書は子供の感覚を何か得難いものとして称えています」。

伯母は微笑した。それからいつもの習慣のように姪の手を取り、撫でて、言った。「あなたはこの感覚を有します。神様があなたから奪わないで欲しいわ。でも、私のことを承知のあなた方に、まだまず説明しなければいけないかしら。何ノ為ニ。確かに子供らしい心には何か素晴らしいものがあります。自然なもの純粋なものの長所を有するものすべてがそうであるように。でもいつもそれについて話すとか、見せかけが本物の代わりに入っている所で、いつも生ずるものを持ち上げることは、これは小市民的、ドイツ風なことです。ソレニハ苛々スル。これは王子もうんざりなさっていたことよ。王子は不機嫌になると、敬虔な人も、偽善者も区別しなくなった。普通は用心深いけど、それ以上考慮しないの。私モ言葉ノコトデ値切ルコトハ好マナイ。必要なら安くしなさい。それではその先を聞きましょう。レーヴィーン」。

レーヴィーンは更に読み続けた。「ドアが丁度開かれて、ブニンスキー伯爵がやって来た。彼は我々皆にプレゼントを持って来た。私の思いでは行き届き過ぎるものであったが、しかしカティンカは感じていないように見えた」。

「しかしカティンカは感じていないように見えた」と伯爵夫人は、頭を振りながら、ゆっくり繰り返した。「市民階級ノ気取リ、コレガ終ワルコトハナイノカシラ。新しいカルタでの古い遊びね。私ニハ分カラナイ。世の中が存在する限り、青春と美人は贈り物を喜んで来た。花々の華麗さを、宝石の輝きをね。それが合うのよ。でもトゥーバルはそれに驚いて、ブローチや針で脅かされた青春の商人の娘を守らなければならないかのように思案げだわね。これは道徳、道徳。子供の感覚。私ハソレラヲ尊重シマス。デモ行キ過ギテハイケマセン。それに私どもの国ではそれらをもう十二分以上に有しています」。

「思うに」と今やレーヴィーンが述べた。「トゥーバルもあなたのように、私どもすべてのように、感じています。彼の思案は、私の理解が正しければ、プレゼントではなくて、贈り主のせいで発せられたものです。ブニンスキー伯爵はカティンカに近付いています。求愛しています。ひょっとしたら私の間違いかもしれません。しかし間違いではないでしょう」。

伯母は明らかに狼狽した。それから急いで質問した。「それで父親は」。

「父親は反対です。トゥーバルも。彼らは伯爵を個人的には尊重しています。金持ちで声望があります。しかし両ラダリンスキーの、あるいはともかく父親の志操は御存じでしょう。ブニンスキーは頭の天辺から足先までポーランド人です」。

「カティンカ本人は」。

この質問の際、レーヴィーンが答えないうちに、鏡の部屋で声が高くなって、二つの二重明かりを先導に進む猟師の後をペアで従いながら、最初クラハとバメが、それからメーデヴィッツとルッツェが伯爵夫人に近寄って来た。

手短な挨拶の後、大きなソファーに皆が腰掛け、伯爵夫人は、客人のあれこれに交互に声を掛けながら、客人にこう伝えた。ペーレマン男爵は新しい激しい足痛風の発作のせい

で欠席と知らせがあった、しかしドロッセルシュタインは　一　仕事で遅れて、　一　ようやく四時半に姿を見せるとの返事があった、と。「思うに」と彼女は結んだ、「彼を待つことにしましょう。すべての客人の権利である最初の十五分に、次の十五分を加えることにしましょう」。皆が、秘かに不満があったとしても、頷いた。

このような待機の三十分間は会話が弾むものではない。寡黙な者達はいつも以上に寡黙になる。雄弁な者達も、不安げに控え目になる、ひょっとしたら結末に待っているかもしれない輝かしい逸話が登場して来る従者の知らせで中断され、永遠に落ちが消えてしまう運命になるかもしれないと話しに乗り気になれない。バメはこの後の方のグループに属していた。しかし自制して、伯爵夫人の明らかな努力に加勢をしている唯一の者であった。勿論単に部分的な成果であった。飛び飛びの会話以上のものにならなかった。質問が重なり合ったが、正しい返事が待たれることはなかった。ベーレマン男爵の足痛風はこの上なく有り難い素材となった。「何故彼は最近の穴熊狩りのときまた居合わせたのだろう。足痛風で二時間も雪の中にいては。何故またラウエンタール・ワインを聞こし召したのか。それがペーレマンの素晴らしいところだが。グルメの祭壇での感激の犠牲死だな。ちなみに『強者ニハ降参』はどうしたのだ。何故ミューズを引用しなかったのか」。

「彼はね」と伯爵夫人が答えて、自分の目の前にある雪花石膏[アラバスター]の鉢から可愛く折り畳まれた紙片を取りだした。しかしアメリー伯母が同じ振子の動きに痛々しい良心の疼きを覚える両大型時計が丁度三十分を告げて、許された期限が過ぎ、明るく照らされた食堂の両開きドアが定刻に、音もなく内側へ開けられた。

伯爵夫人とクラハが進んで行った。同じ瞬間ドロッセルシュタインも入って来た。左手で挨拶を寄越しながら、食卓へ進む一同を邪魔する気持ちのないことを示すかのように、レナーテへ彼の腕を差し出した。バメとレーヴィーンが後に続き、それからメーデヴィッツが従った。ルッツェが最後となった。

ルッツェは嗅ぎ煙草に目がなく、この機会を利用して、伯爵夫人の残された嗅ぎ煙草缶からつまみ嗅ぎをした。天罰を受けた。彼がまだホールの敷居を超えないうちに、すでにくしゃみが発せられた。皆が笑った。バメが叫んだ、「逮捕」。ただクラハのみがいつものように姿勢を保っていた。

第五章
正餐

食堂ホールは、暖炉の火にもかかわらず、食堂へ入って来る冷たい気温に支配されていた。卵形の食卓はクロスが掛けられていた。伯爵夫人は、いつものように、クラハとドロッセルシュタインの間に座り、夫人の向かい側にはレナーテがいた。猟師とモール付きの従者が忙しくしていた。シャンデリアでは明かりが燃えていた。

伯爵は、ナプキンを結びながら、広間を見渡した。広間の建築学的構成は、単純な飾りに支えられていて、今日もなお彼に最も快適な印象を与えていた。四つの壁面が、黄色の色調で、金色の平縁を付けられて、天井には天井画が、「神々の饗宴」[ラファエロ作]を描写していた。ファルネジーナ宮の周知のフレスコ画の模写であった。クラハとルッツェは、戦闘準備のように、グラスをあちこち動かしていた。しかしドロッセルシュタインは

今や伯爵夫人に向かって、広間を建築した夫人と、夫人の趣味に係わる若干の世辞に従って、ナルボンヌ伯爵[1755-1813]、つまり[ナポレオン]皇帝の最初の副官について尋ねた。この伯爵は、新聞の報道によれば、クリスマス・イヴの日にロシアからの帰路[プロイセン]王の許で食事をしたと聞いているが、と。

「それについては耳にしました」と伯爵夫人は答えた、「ドゥセ将軍も居合わせました。ナルボンヌ伯爵、ヨク覚エテイマス。昔の宮廷の出身で、マリー・アントワネットの覚えがめでたく、巧みに[ナポレオン]帝国でも出世なさいました。どうして皇帝の心を捉えたか御存じですか」。

ドロッセルシュタインは否と言った。

「作法の心得ですね。だから瑣事で、今日の人々なら、詰まらぬことと言うことでしょう。でも成り上がり者達がこの心得ほど、熱心に学び報いようとするものはありませんね。私はこの逸話をハウクヴィッツ[Haugwitz （1752-1832)]伯爵自身の口から聞きました。それは皇帝の戴冠式[1804 年 12 月 2 日]直後、ナルボンヌが、当時大佐で、皇帝に至急便を届けたときのことです。彼は跪いて、手紙を帽子に載せて差し出しました。『オヤ』と皇帝は言いました、『ドウイウコトダ』。大佐は答えました、『陛下、コノヨウニシテルイ十六世ニハ至急便ヲオ渡シシマシタ』。『ソレハ、結構』と皇帝は答えました。ナルボンヌは寵臣となったのです。ちなみに、ドゥセ家も昔の宮廷[アンシャンレジーム]出身で、オーヴェルニュ出身の古い貴族です」。

ルッツェはドゥセ将軍が呼ばれた最初の時から耳を傾けていた。今や、伯爵夫人が名前を繰り返したので、彼は明確な、しかし同時にある不幸な予感で震えた見解を夫人に向けて披露した。自分の知る限りドゥセ将軍はオーストリア人との戦いで戦死した、と。自分は「マレンゴの戦い」のある音楽作品を思い出すが、ある節の結末にこうありました、「ドゥセは倒れた」と。

クラハの動じない顔にさえ一つの微笑が浮かんだ。ドロッセルシュタインは明らかにしようとした。しかしバメが彼に先んじて、自分が名手であるかの作為的厳かな調子で始めた。「いや、ルッツェよ、途方もない世界だ。ある者が一八〇〇年マレンゴ近郊で、六月の暑い最中倒れ、それが一八一二年クリスマス・イヴにプロイセン陛下の食卓に座る。こうしたフランス人ときたら信じられないような奴らだ。死者達でさえおさらば出来ない。奴らは正餐に押し寄せるのだ。今日は更に何が起こるか分からんぞ。ちなみにそれは多分兄か弟だったのだろう」。

プロッツハーゲンの大尉は顔色を変えて、侮辱されて答えた。バメ将軍に謎の最終的解明に感謝申し上げます。しかしこう述べることをお許し願わなければなりません。この点に関しては、格別軽騎兵の抜け目のなさは必要なかったでありましょう。このような解明は歩兵の範囲内でも可能でありましょう、と。

バメは笑った。彼に対してはどんな形でも反論して良かった。彼は悪く受け取らず、疑いもなく、まず自分のピストルに装填する必要のないある度胸のせいで、彼は幸せな状況下にあった。

偶発事は長くは続かなかった。伯爵夫人は和らげた。出された立派なシャブリ・ワインが夫人の役に立った。一方フォン・メーデヴィッツは、諍いに新たな養分を与える恐れなしに、ナルボンヌとドゥセの名前を今一度議論に引き入れた。「二人とも名門の男達です」

と彼は始めた、「しかし陛下はその統治の最初の日から何と変わった人々とテーブルに着かなくてはならないことでしょう。[ベルリンの]白い広間で私自身ある者と一緒だったことがあります。シェイエス神父[Abbé Sieyès (1748-1836)]です。その名前を聞いたとき、私は驚きました。一七九三年彼はフランス国王に死刑を宣告したのです。一七九八年彼はプロイセン国王に大使として向かって座りました。彼は三色の飾り帯を着用していました。その赤色だけを覚えています。彼が『陛下ニオカレテハ』と言うたびに、いつもこう聞くような思いがしたものです。『四ノ五ノ言ワズニ死刑』」。

「私も彼を見た」とクラハが述べた、重々しく自分のスカーフをつまんでいた、「メーデヴィッツは彼を認めたくないらしいが、しかし彼は少なくとも神父である。フランス国王に死刑を宣告するにも幾ばくかの力が必要であろう。しかしこれらの元帥ときたら、桶屋の息子達か、料理屋の倅だ」。

「まあ」とドロッセルシュタインが口を挿んだ、「桶屋の息子達かそうでないか知らんが、奴らはヨーロッパの大半の箍を外してしまった。それで桶板は左右にばらばらだ。これらの元帥達は好きになれんな。伍長の笹縁がいつも浮き出て来る。しかし一つのことは認めてやらなければならない。奴らは兵士だ」。

「そうなんだよ」と自分の好物の貝料理の中身に一層鋭く食い付きながら、今やバメが叫んだ、「かつて小隊を戦火に導いたことのなる者なら、奴らに敬意を払うものだ、奴らが悪漢や掏摸でもな」。

「掏摸でもな」と僧会議員は切り返した、スルト[Soult(1769-1851)]の手から苦労してようやく缶の収集を救い出したかの苦難の日々を思い出していた。

「ただ一人だけ我慢ならねえ」とバメが続けた。

「ダヴー[Davoust(1770-1823)]ですか」とレーヴィーンが尋ねた。

「いやナポリの陛下、ミュラ[Murat(1771-1815)]国王だ。奴は大事であれ、瑣事であれ、変わったことをやりたがっていて、とりわけ強力な騎兵将軍ではあった。エジプトの奴隷兵を砂漠へ追い散らしたからな[エジプト遠征一七九八年]。しかし一人のツィーテン[Zieten(1699-1786)]軽騎兵が、その上傷病兵だったのだが、彼に悪戯を仕掛けたことがあった。シャルロッテンブルクの老城代ケットリッツのことだが」。

皆が興味を示して、話すよう迫った。

迫る必要もなかったであろう。「この話しは当時ほとんど知られていなかったのだが」と彼は始めた、「私はケットリッツ本人から聞いた。十月十四日[1806]イエナの会戦だった。十日後にはフランス人の前衛がベルリンに入って来た。しかしミュラは、当時まだフォン・ベルク公爵で、シャルロッテンブルクに来た。彼は公園の側を向いている部屋に居を構えた、アレクサンドル皇帝が一年前住んでいた同じ部屋だ。老ケットリッツは頭に来て、一計を立てた。五時に大広間で正餐であった。国王フリードリヒ・ヴィルヘルム一世[大王の父(1688-1740)]の絵がなりたての公爵を真面目に無愛想に眺めていた。公爵はベルクの他に古くからのプロイセンのクレーヴェ地方も支配していた。町にはまだ多くのフランス人の部隊はいなかった。すると突然、　ー　トリュフのパイが丁度運ばれて来たとき、

ー　高らかな響きが始まり、二十ものトランペットとそれにティンパニーの響きが加わって、ホーエンフリートベルクの行進曲を吹奏した。城の中庭にプロイセンの騎兵中隊が騎行して来たのか。ミュラは飛び上がって、逃げて助かろうとした。しかし騎兵中隊はい

なかった。ようやく騒音は止み、すべてが明らかになった。隣室で、内部にトランペットの一団を隠して、音楽仕掛けの戸棚があった。その隠されたバネを老ケットリッツが押したのであった。その収集が完全なものとなるようこの怪物音楽時計が我らのアルト・メーデヴィッツのフォン・メーデヴィッツの手に渡るのを目にするとしたら、私には嬉しいことだろう。勿論、我らのいる所では決してこの秘密のバネを外さないという条件を付けなければならないが。トランペットの音は好きだが、ただ戦場の陽光の中でないといけない」。

僧会議員は、バメのからかいに入って行くことが出来ずに、ただ当惑した微笑で聞いていたが、それからこの城代の運命について尋ねた。

「また、ツィーテンの軽騎兵でなくてもすんだかもしれない。嘘を突き通したのだ。とにかく彼は偉大な軽騎兵隊長、エジプトの奴隷兵追放者がホーエンフリートベルクの行進曲で逃亡にかかるのを目にする楽しみを得たわけだ。これは一八〇六年十月のことだ。当時はまだ元帥はちょっとしたものだった。奴らはそれ以来もっと安物になったと期待している。しかしより安物になろうとなるまいと、私のクヴィルルスドルフの人々が最初の元帥を埋葬するか生け捕りにするなら、教会領地に十モルゲン寄贈する、牧師殿は好きになれんが」。

「バメよ、どうして貴方はいつも牧師殿とやり合っているのだ」とクラハは言った。彼は自分の牧師とは、牧師が彼に一条の庭園を弁償なしに譲ってくれて以来、良好な関係にあった。

「彼はまだ愛想良くしたためしがない」と鋭くバメが答えた。「牧師どもときたら、意地悪な奴らだ。鋭敏に見えるほど、一層そうだ。私の牧師は当てこすりの名手だ」。

「教会を訪問なさっているように聞こえますよ、バメ」と伯爵夫人が口を挿んだ、「賭けてもいいですが、貴方は十年間説教を拝聴していないのでは」。

「そうです、伯爵夫人。しかし私は埋葬に愛着があります。誰もが自分の信心を有します。私も私の信心を有します。そのときあれこれ詰まらぬ事で邪魔されて、腹が立ちます。牧師はナインの若者とか[ルカ、7,11-15]、この若者と対をなす周知の[生き返った]女性[ルカ、8]で始めるのですが、しかし五分もしないうちに、バベルとかソドムとか悪評高い所に移って、私をじっと見つめて、天から何か硫黄を振りまき、それから崇高な声でこう言うのです。『清らかな心の者は幸いなるかな。神を見るが故なり』と。そしてこうしたことすべてが私に向けられるのです。そんなことを五年しておった。しかし先の復活祭以来終わっています」。

「どうして」と伯爵夫人は尋ねた。

「また葬儀があったのです。可愛い、若い娘です。だからヤイロ[ルカ、8 生き返った]の少女の番というわけだった。しかしそれは長くは続かなかった。すでにその途中で当地の牧師はまたロトとその娘達となって、あたかも私が一緒に洞窟にいたかのように私を見つめた。これはどうにかしないといけないと私は思った。そこで彼を城に招待した、議論のためではなく、ただ食事のためです。我々が二本目の瓶にかかったとき、　ー　牧師は飲むことができて、　ー　私は言った。『それで、牧師さん、心からの乾杯。グラスを当てましょう。ロト万歳。良い奴だ。二人の娘は残念なことだ。母親はほとんど塩になって。ところで、長女の息子の名前は何でしたかな』。そこで私の勝利というわけです。彼はそれを知らなかった。ひょっとしたら単に混乱していただけかもしれない[父との子で、モ

アブ、それにベン・アミ、創世記、19,37]。私はしかし、彼の当惑を楽しみながら、彼の耳許に叫んだのです。『バメ』と。それ以来三回葬儀があった。しかし彼は平静に振る舞っている」。

レーヴィーンとレナーテは、バメの演説は噂には聞いていても、自らの耳で聞いたことはなくて、視線を互いに交わしていた。しかし二人はやがて、老軽騎兵の高慢はもっと大胆な跳躍を恐れるものではないと知ることになった。

伯爵夫人は僧会議員の方を向いた。議員はこれまでほとんど会話に加わらず、少し不機嫌であるように見えた。夫人は、建築上の改善のために彼の助言を求めた。まずは向かい側の側翼にある倒壊に瀕しているデルフリンガー家の祝宴の広間に関し、次には全く一般的な「暖炉かストーブか」、僧会議員の最も愛好するテーマに関するものであった。彼はこれに関し、執筆までしていた。メーデヴィッツは暖炉に賛成していて、その際風通しを良くした造作のために、不当に追放された正面玄関風両開きドアの再導入が必要であると主張したいと思っていた。彼はそこで詳細に説明した。最新の研究成果によれば、すべての燃焼は酸素の空気の強力な導入に基づいており、暖炉はいつでも、ドアや窓がこのような大気の流入を可能とする所でのみ効果的なものになるのである、と。彼はそれから次のような警句文で結んだ。「密な苔の窓は致命的です。しかし旧来の風通しのいい正面玄関のドアは暖炉の命です」。

バメは、我々が知っているように、自らよく喋り、とりわけ学問的根拠付けを嫌っていたので、今や会話をまた自分の許に引き寄せていい潮時だと思った。「伯爵夫人は」と彼は始めた、「このような正面玄関の設置に踏み切ろうとしているように思われます。警告申し上げましょう。私は、大きな、両開きの丸いドアが、本来原始古来からの、農舎からサロンへ移動された納屋の門に他ならないということ、そのことに重点を置いてはいません。しかし指摘して置かなくてはならないと思うのは、倫理的危険とは申しませんが、社会的危険でありまして、これはこのドアの形態と多かれ少なかれ不可分の関係にあるものです。見たところは最高に堅牢で、立派で、尊厳があり、落ち着いておりますが、結論は、こうしたことすべてのまさに逆を意味するものとなります。僧会議員の流儀に従って、私にも学問的説明を許して頂きとう存じます」。

異論はなかったので、彼は続けた。「どの物体もある何ものかにその存在の根拠を有します。暖炉の場合は、たった今拝聴しましたように、それは風通しです。両開きドアの場合、私見によれば、差し錠です。さて差し錠は極めて厄介な代物であることを確認して頂かなくてはなりません。ある特別な待機を要するもので、注意義務は申すまでもありません。これと共に両開きドアの生死はあると申せましょう」。

彼は間を置いた。メーデヴィッツは頭を振った。

「いずれにせよ」とバメは演説を更に続けた、「貴方らはお好きなように、閉めたり、閂をしたり、開けたりなさることでしょう。『大丈夫』と安心して思われることでしょう。しかし安心の唯一の現実的な保証、大きな支えの差し錠が不注意のままであれば、とんでもない軽率さで、十分な時にこの救いの錨を引き上げることが等閑にされていたら、この安心は当てにできないことになります。しかもこの等閑が良く生ずるのです。百回のうち九十九回従者は、その腕の長さが十分でなくて、上の差し錠を開口部に押し込むことをやめてしまいます。そして二十回のうち十九回、下の差し錠のためにしゃがむことを面倒に

思うのです。従者はもっと容易なもので満足し、鍵を錠の中でひねることに限定します。かくて単に見せかけの安心が出来上がり、その背後には台無しのすべての諸力が潜むことになります。私は自らそのようなことを体験しました。話してよろしいでしょうか」。

躊躇がちに伯爵夫人は同意して頭で頷いた。

バメはこの頭での頷きを待っていなかった。彼はますます活発になりながら続けた。「さて、ラーテノーの近衛騎銃兵達が我々に舞踏会を開いた。大きなゲストハウスの広間は半階上にあって、七つの窓が通りに面していたが、しかし下の方の狭い側面に正面玄関の形で、かの納屋の門の両扉があった。この再導入を我らの僧会議員は必要なことと思っておられるわけです。一人の旅人が死ぬほど疲れて、乗り込んで来た。すべての部屋が塞がっていて、結局直接広間の隣に一部屋見つけて喜んだ。ベッドはドアに沿ってあった。眠れると彼は何度も溜め息を付いた。このチャンスは少なかったけれども、少なくともそれを試してみようとした。神は救いを呼べば、時に来てくれる。ただ近衛騎銃兵が踊っている時だけは駄目だ。この不幸な男はとうとうすべての疲れも忘れてしまった。舞踏の音楽と衣擦れの音が彼の感覚を混乱させてしまった。好奇心に駆られて、諸悪の根源だが、今や見よ、彼は起き上がって、決して欠けることのないドアの隙間から舞踏会の静かな証人になることにした。軽率なうかつ者だ。甘美な観察に没頭して、額と肩とを一層力強く押し付けて行った。彼は覗き、聞き耳を立てた。じゃれて忍び笑いをするカップル達を彼はこっそりと人知れず観察することになった。すると厄災のかの悪戯が突然生じて、これは世のすべてのドアの中でただ大きな正面玄関扉のみが出来るものですが､ゆっくりと寛大に、しかし荘厳に、あたかも凱旋将軍の入場のように、今や大きな両翼が左右に開いた。するとこの旅人が我々の足許に平伏していたのです。詳しいことはご容赦頂きたい。私の生涯の最後の日まで叫び声が残ることでしょう。そしてこのような両開きドアを、単に風通しの良さのために、我らのメーデヴィッツは、...」。

彼はそれ以上言わなかった。伯爵夫人は、老将軍の大胆極まる脱線に付き合うことを個人的には嫌っていなかったが、他面では社交上の義務、殊に姪に対して、それを十二分に自覚していて、ためらわず退席を開始することにした。夫人は、伯爵に腕を預けながら、一緒に立ち上がる客人達に、座っているように頼み、またデザートの楽しい時間を一刻も短縮することのないよう頼んだ。レナーテはクラハと一緒に従った。サロンの入口で両レディーは自分達の騎士にお辞儀をした｡騎士達はそのようにして暗示された指示に従って、食卓仲間にまた戻って来た。

第六章
ハンガリー・ワインの他にワインなし

さてここで、他のデザートに並んで、果物の鉢や、ハンガリー・ワイン、ポート・ワイン、古いライン・ワインが並べられた。バメの前に独自な包装の、長い首のルストの完熟ワイン[Ruster Ausbruch]の瓶が置かれていた。彼はまず尖底杯の半ばまで満たして注ぎ、芳香を味わい、ゆっくりと一口飲んで、本物のすべての特徴を確かめながら、同意の表情を浮かべてグラスをまた自分の前に降ろした。レーヴィーンとルッツェ、メーデヴィッツがまた近寄って来た。皆同じハンガリーの旗の下に参じていた。「結構なものだ」とバネ

は言って、それぞれのグラスの縁まで満たした。「このようなワインは軽騎兵の国にのみ育つものだ」。

他のテーブルの端には今やドロッセルシュタインとクラハが座っていて、ドロッセルシュタインはグラーヴェンシュタイン林檎の皮を剥いており、クラハは自らの手で一本のリープフラウミルヒ・ワインに取りかかっていた。彼は冷静なままでいて、最初は諍いがちで、それからシニカルになり、最後は無気力になることに甘んずるそうした者達の一人であった。ちなみに彼は今その順番維持を怠っていた。

「ライン・ヘッセン人の樽にこんなものが生ずるなんて」と彼は言い始めて、グラスの中身を明かりに当てて眺めた。「最低の奴等に最上のワインだ。一八〇六年とまた本年ビンゲンヴァルデを通って来たすべての吸血鬼どもの中で、この連中ほど評判の悪いものはない。奴等のことを言えば、子供は寝てしまう」。

「奴等はスウェーデン人よりも狼藉を働いた」とテーブルの別の端からメーデヴィッツが声を上げた。「奴等は私の支配人を燃える麦藁の上で焦がしよった。とんでもない奴等だ。しかし強靭で、勇敢だ」。

「山岳に住んでいる者達皆と同様勇敢です」とルッツェが同感を示して、割り込んで来た。「単に高台にいるだけで性格が強くなります」。

「大尉殿」と今やバメが叫んだ、そして彼の前にあるデザートの皿を押し戻した、「我々はまだワインを十分に飲んでいないから、貴兄のプロッツハーゲンでのスイス人意識を冷静に飲み込むことが出来ない。ポツダムの演習場は山岳地帯にあるかな」。

ルッツェは目を丸くして、答えようとしているように見えた。しかし彼の精神力では頼りにならず、別の側からのハンカチが利用されなければならなかった。

「プロッツハーゲンのスイス人意識が正当かどうかは」とドロッセルシュタインが、相変わらず言葉を探している大尉に好意的に頷きかけて、述べた、「議論の余地があろう。しかし議論の余地がないように見えるのは、山岳の民の格別の勇気だ。ただ厳しい海辺に住んでいる部族のみが山岳の民に対等であろう。この点に見られるのは単にやはり自然なものであろう。自然とのいつもの戦いが力と勇気を生み、力と勇気から戦闘能力が生ずる。例が必要かな。ノルマン人はヨーロッパを取り囲み、諸国家を樹立し、ビザンチンを占領した。そして古代スイス・カントンの牛の角笛が山々から谷に響くと、ブルゴーニュ地方はすべて怯えたものだ[1474-77]。スコットランド山地の氏族クランの襲撃にロンドンは震えた。昔もそうであったし、今日までそうである。皆が征服者の足許に跪いているとき、最初の反抗は山々から下りて来た。スペイン人[1808]とティロル人[1809]が敢えて戦争を起こした。今世紀の歴史は全て、山岳と海を称えている」。

「伯爵殿、私には分かりません」と今やレーヴィーンがドロッセルシュタインに丁重に手を動かしながら言葉を発した、「貴方に同意していいものか。人間は大地の息子であるし、息子であり続けています。人間は自分の母なる大地を最も豊かに、最も直接的に有する所で、最も良く栄えもします。ここで自分の生存の条件が最も完全に叶えられるからです。それで私はこう推測したくなります。つまり山岳と海の一見したところの勝利は例外的な場合であり、部分的には単なる錯覚に基づいているのではないか、と。山岳は自然の要塞です。すべて要塞は防御されていることを欲します。早まって要塞を襲撃できると思う者は、失敗します。しかしその失敗は防御者の勇気のせいというよりはむしろ防塁や堀

のせいです。山岳は防御を代弁します。征服の要素は平原を住処とします。我らの友のザイデントプフのセムノネス部族、世界の征服者ですが、彼らはどこに由来していましたか、どこに本拠を置いていましたか。ここです。オーダー川の両側で、ひょっとしたら我々自身が今座っている所、グーゼかもしれません」。

バメは頷いた。レーヴィーンは続けた。「山岳から支配している国はありません。ローマは、ローマになろうと思った時、高台から自発的にティベル川の岸辺に降りて来ました。山岳に首都はありません。大きな平地の領土から支配の中枢部は育って来ます。その中で、それと一緒に、将軍や英雄、ハンニバルやカエサルから、グスタフ・アドルフ[Gustav Adolf (1594-1632)]、やフリードリヒが育つのです」。

「素晴らしい」とバメが叫んだ。「私の専門の観点から言えば、私はそれどころか次の文にまで高めたいところだ。つまり偉大な様式の世界史、フン族とかモンゴル族の特徴に見られるようなものは、いつも永遠に鞍から、即ち有り体に言って、一種の軽騎兵を原初的形態として遂行されたものだ、と。しかし私はすべての個人的徒な気持ちを放棄して、むしろ平和を喧伝しよう。我らのプロイセンの旗を広げるのだ。『各人にその応分を』[プロイセン黒鷲勲章の銘]だ。光に照らして見れば、人間について妥当するものは、これは同じく諸民族や部族にも言える。彼らは皆有用なのだ。しかし勿論各人がその持ち場でな。それが大事だ。『ヴィトリー号』の索具の中、荒れ狂う海と燃えさかる舷側でトラファルガルの海戦[1805]で勝利を収めようとする者は、シュヴィーロー湖とかシェルミュッツェル湖とは別の水上で泳いだことのある者に違いない。しかし逆に、紙の輪の中を曲馬師のように軽快に達者に、ツォルンドルフ近郊[1758]でロシアの方陣を破ろうとするような者は、そうは行かない。たとえすべてのインド洋上で鮫の腹を切り裂いたことがあったとしてもな。いつもながらの昔の狐とコウノトリの話しだ。一方には皿が合うが、他方には瓶が合う。私個人としてはひょっとしたら瓶も合う唯一の狐かもしれない。とりわけこのような瓶だ。乾杯をしよう。豊かなラテン語には何か素敵なものがる。ハンガリー・ワインの他にワインなし」。

第七章
正餐の後

コーヒーは鏡の部屋で飲まれた。紳士達がここにやって来て、次の三十分をまたレディー達と一緒にお喋りをしようとしたとき、彼らは予期していたものより別な光景に出会った。レナーテは、少し気分がすぐれなくなって、引き下がっていた。彼女の代わりに彼らをベルント・フォン・フィッツェヴィッツが出迎えた。彼は丁度ベルリンから帰ったばかりで、彼の姉、伯爵夫人の要請、正餐の最終幕に出席するようにとの要請を断っていた。彼は十分に年を重ねていて、このように遅くなってからの登場が不適切であると経験上知っていた。

レーヴィーンは父に挨拶した。他の客人達も自分達の喜びを表現した。最も威勢が良かったのはバメで、彼は少しもけちくさいところは見せずに、他人を評価するとき、自分がいくら査定されているかその高低とは無関係に評価していた。ただ自分の「社交的才能」と呼んでいるものに対しては、彼は自負心があった。そしてこの面に関して、制限付きで

あったが、彼をベルント・フォン・フィッツェヴィッツは評価していた。

鏡の部屋のその奥まった部分は、三つの垂直に向かい合っている段で縁取られていて、それらには花や植木鉢が密に置かれて、馬蹄形の別室を形成していた。そしてこの部屋は向かい側の窓の支柱にある窓間鏡に映っていた。この部屋の内部で、長い、四脚の上の大理石のテーブルに、これはほとんど祭壇の形で、客人達が着席して、小さな杯が差し出される間に、直に会話が始まった。これは活発さの点でほとんど終わりとならなかった正餐の会話を凌ぐかに見えた。ベルントが言葉を発した。皆が彼の口から聞きたがっていた。彼は[首席]大臣[Hardenberg(1750-1822)]と話したのであった。

「我々は打ってかかるのか」とバメは尋ねた。

「我々か、ひょっとしたらな。あるいは私が決心する立場なら、きっとそうなるが。しかし高級顧問官の貴顕氏はどうだろう。駄目だ。大臣は最も見込みがない。彼は外交をやっている、政治ではない。固い決意をすることが出来ずに、妥協に救いを求めている。彼は『打ち合わせ』を言っているが、昔の時代からまだ彼の唇に残っているお好みの言葉だ。我々は何も彼に期待できない。彼は我々を見棄てている」。

「あなたのことを別な風に思っていたわ」と伯爵夫人は述べた、「大臣に理解されたのではなかったの」。

「理解されただと。いや、個人的には、言葉の上では理解された。二人だけの時にはどんな戦闘も乗り気だ。観念では我々は一致している。[ナポレオン]皇帝は倒されなければならない。プロイセンは再生されなければならない。しかしどのようにしてか。すると心の内が明らかになる。彼は紙上で戦いたいのだ。手に武器を持ってではない。緑のテーブルの上であって、緑の荒野ではない。ただ無茶苦茶戦ってのみ救いがあることが彼には分かっていない。無茶苦茶、無分別にだ。まだ我々は賭けに勝つチャンスがある。しかし時は限られている。彼にはこれらの日々の重要性が分かっていない。無為に過ごされた時はすべて取り返しがつかない。彼は邪魔立てしている裏切り者だ。悪意から裏切っているわけではないが、弱さからだ」。

「それで貴方は国[地方]の気分を伝えたのかい」とドロッセルシュタインは尋ねた。

「確実に、それも切迫感をもって、他の者ならば誰でも乗って来ただろう。しかし彼は違う。私が彼に国民蜂起の考えを披露したら、誓ってその言葉を述べたら、彼は驚いて、その驚きを微笑の奥に隠そうとした。『武装しましょう』と彼に呼びかけた。それは彼の気に入った。今私自身がその言葉を発したが、その言葉を巧みに操って、彼は私を宥めようとしたのだ。その点彼は名手だからな。彼は私に近寄って、秘密めいた表情で、私の言葉を繰り返しながら言った。『フィッツェヴィッツ、我々は武装する』。しかしこの瑣事も彼にはまた面倒なことになったのだ。『我々は武装する』と彼は続けた、『しかし多分武装も必要ないだろう。ナポレオンは降参だ、彼は平和を欲するに違いない。我々は血を流さずに我々の目的に達することになる。イギリスとロシアは我々の味方だ』。私は呆れた。我々は良く聞き取って別れた。見かけ上は了解すらしている。しかしながらお互いが互いの見解の間に広がっている深淵を感じ取っていた。私は階段を降りながら、自分に言った。『それでもまだ懲りていない。まだ臨機と悟っていない。ナポレオンのことをまだ分かっていない』と」。

ドロッセルシュタインとバメとクラハは、ベルントの不機嫌を分かち合いながら、頭を

振った。しかしメーデヴィッツは、自分の無為卑小さに忠誠心の衣を着せることを好んでいて、今や彼の大臣への信頼ぶりを披露する時が来たと思った。

「私は貴方の怒りに同感できません、フィッツェヴィッツ。熱くなって我を忘れている。飛脚や伝令、これらは毎時間ヨーロッパのすべての首都から走っているが、何をもたらしているか我々が知っているかい。知らない。貴方は、我々皆同様に仲介された認識の観点から事物を見ている。しかし大臣は、全ての諸関係を一望するかの視点から見ており、これが我々には欠けている。彼は良く情報を得ている。我らのスパイの網がパリに張られており、皇帝は一挙一動見張られている。閣下が、『彼は降参している、平和を欲するに違いない』と仰せられたら、それに反論したいと私は思わない。彼は大臣だ。彼は知らなければならないのだ、済まない、フィッツェヴィッツ、彼も分かっていると思うぞ」。

ベルントは笑った。「見るのも知るのも同じようなものだ。誰もが自分が見たいと思うものを見ている。その点では我々は皆同じだ。大臣であれ、大臣でなかろうと。閣下は平和を望んでおられる。それで彼は平和を必要とする皇帝を創り上げている。『彼のスパイの網』は彼にその希望に添った情報を持って来る。被造物は抵抗しない。降参したナポレオンなんて。神聖な素朴さだ。彼はかつてなく一層素早くなっていて、いつものように大胆で挑発的だ。オーストリアの大使にこの前の謁見の際近寄って来た。『プロイセンを存続させたことは私の失敗だった』とそう言葉をかけた。語り掛けられた大使は、この言葉で混乱したのかもしれない、どもって言った。『陛下、一つの王座を、..』。すると皇帝は、『阿呆』と遮って、高慢に付け加えたのだ、『王座なんてな。木の台座に、ビロードが張ってあるだけだ』と」。

バメは微笑した。しかし伯爵夫人は冷静に述べた。「その点は確かに正しい。ソレニハ同意シナケレバナリマセン。私どもはこのような外面的事柄に余りに重きを置いて、存在しない所に崇高さを見ています。かくも多くの王座を打ち壊した人は、王座を高く考えることはできないのでしょう。コレガ忘レラレテイマス。私は好きになれませんが、一つの点で共感しています。私ドモノ偏見ヲ打チ砕イテイマス。蜘蛛の網を抜けるように、私どもの偏見をすり抜けて行きます」。

「そのようだな」とベルントは答えた、「それは必ずしも彼の劣等な面ではない。しかし姉上、おまえさんからその同意を聞くなんて思っていなかった。だって誰のせいで我々はこの偶像崇拝、我々が捕らわれているこの第一の戒律に対する日々の罪過を犯しているのか、つまり『汝は私の他に他の神々を敬ってはならない』なのに。おまえさんに祭り上げられたフランス人の他にあろうか、とりわけかの物々しい半神、おまえさんまで引き裾を着て行くあのルイ十四世の他に」。

「ソウデハアリマセンヨ、ベルント」と伯爵夫人は一瞬陽気な表情を浮かべて言った。一つの間違いを訂正する機会を得て嬉しいという風に感じられた。「すべてその反対です。コノルイ自身、私ノ偶像デハアリマセン。御存ジノヨウニ、私はフランス人を愛しています。でも彼らの偉大な王は愛していません。その大袈裟な身振りでかの王は自分の国民を裏切っていますからね。フランス人の本領は、冗談、気まぐれ、軽快さです。でもこのルイ王には母親の側から何か無器用にハプスブルク家的なものが絶えずつきまとっています。ブルボン王朝は皆そうでした。ただ一人の王、ドイツ人の血が一滴もその血管に流れていない王、その王が私は好きです」。

「アンリ善良王[アンリ四世(1553-1610)]とベルントが補った。

「そうですよ」と伯爵夫人は続けた、「すべての王の中で最も愛嬌があって、同時に最もフランス人的で、ガリアの闘鶏であり、尾を広げる孔雀ではなく、素朴で、騎士的で、偉容さや気取った作法を免れていました」。

「ひょっとしたら、王侯たるにふさわしいよりも、破天荒かもしれない」と更にベルントが冗談を続けた、「スペインの大使が近寄って来たとき、馬になって皇太子を乗せて遊んでいた。国王から受けた印象を尋ねられたドゥ・シミエ夫人はただこう答えただけであった。『王様ハ拝見シマシタガ、閣下ハ拝見シマセンデシタ』」。

「あなたが非難と思うもの、あるいは半分咎めていると思っているもの、それはむしろ称賛なのでした。いずれにせよ釣り合いは取れていました。その他に考えようがあったでしょうか。王は自身の中で落ち着いていて、率直に自分の弱さを受け入れていました。力の過剰を感じていたからで、この過剰は神々が王の揺り籠の中へ一緒にお与えになっていたものです。ちなみに揺り籠は、亀の甲で出来ていたものです。王は何も隠さずに、大尽様の快活なこだわりのなさで自らを冷やかしていました。王について報告されるどんな些細な特徴にも、私は惚れ惚れとします。王はいつでも何かくすねる習慣があって、ガスコーニュ地方風からかいで請け合っていました。『王デナカッタラ、縛リ首ニナッテイタダロウ』と」。

この意見をクラハは、彼はすべての吝嗇者の流儀で自他の問題に関し最も厳格な原理に従っていて、語り手の夫人への配慮が窺われる範囲内で大いに憤慨して受け入れていた。彼は「王らしくない」とか「軽佻な」と始めて、バメが苛立った調子で割り込まなければ、もっと激していたことであろう。「気前良く与える者は、些細なものは取ってよろしい。勿論まず与えることだが、これが難しい」。

クラハは唇を噛んだ。しかし伯爵夫人は丁重に彼に語り掛けた。「会長、私を誤解なさっています。私の好きな王は倫理の面では駄目でしょう。私が惚れ込んでいるのは全く別の事柄です。タルマン・デ・レオー[1619-92]がその回想録で王について述べていることを、お聞き下さい。廷臣の一人、ボーフルモン伯爵が美しいガブリエルの不実について御存じでした。彼は王にそのことを伝えました。しかし王は否認なさって、信じようとなさらなかった。余りに愛していたのです。伯爵は結局証拠を示しましょうと申し出て、王をガブリエルの寝室にまで案内しました。二人が入ろうとした瞬間、アンリ王は向きを変えて、言ったのです。『イヤ、私ハ入ラナイ。彼女ハトテモ面白クナイダロウカラ』と」。

メーデヴィッツは自身悲しいことを体験していて、国王のことは分からないと述べた。伯爵夫人は続けた。「この逸話に王の正体が全面的に現れています。王はフランソワ一世[1491-1547]がシュノンソー城の窓に刻み込んだ格言に従ったのです。

女性ハ変ワリ易イ、
信ズル者ガ馬鹿。

そもそもフランソワ一世はこの王を思い出させます。ただこの王はフランソワ一世の上を行きます。私ども女性がその弱さの点でも長所の点でもこれほど良く理解され、これほど騎士的に扱われたことはありません。すべての国々の女性が彼の彫像を建てさせるべき

と思います。勿論嫉妬する者もいましたけれども、自分のフランスがこのような像を建てようとしているのを見たとき」。

「嫉妬する者とは」とフランスの回想文学に詳しく通暁している伯爵が尋ね、この質問で一つの疑念を表しているように見えた。

「ソウナンデス」と伯爵夫人が続けた、「それも自らの孫の形でして、『偉大な国王』です。ポーの町が大好きなアンリのために彫像を建てようと思って、宮廷に問い合わせました。ルイ十四世は諾とも否とも言わず、一切の返事の代わりに、自らの肖像を送ったのです。でもポーの立派な市民の洒落を十分に計算に入れていなかったのですね。市民はその記念碑を置いて、それにこう銘文を付けたのです。『コレハ我ラノ立派ナアンリノ孫』」。

「それでどうなった」とルッツェは尋ねた。彼は子供のように逸話と物語に区別を設けず、落ちよりも経過そのものにより大きな関心を示していた。

「ルッツェさん、これは結末のない物語です。国王はこのことは多分耳にしなかったか、読むことは更になかったことでしょう。このような冗談を告げることは、誰もしないでしょう。ちなみに丁度当時はライン遠征で沸き立っていて、国王の目は別の方へ注がれていたことでしょう。王の名声の、戦争における名声でも、その収穫期でした。でも王には将軍の素質はなかったですね。アンリ善良王は会戦に勝った。偉大なルイ王は勝たせて貰った。でも詩人や画家は、ルイ王のため比較をオリンポスや英雄世界に求めて倦むことがありません」。

「ルイ王もある種の軍事的才能に」とベルントが述べた、「欠けてはいない、高貴な身分の者にふさわしく、と聞いたことがあるように思うぞ」。

「タウエンツィーン伯爵[1760-1824、ハインリヒ王子の寵臣]は逆の意見でした。彼の意見は王子[ハインリヒ]の判断と一致していたと私は申せましょう」。

「国王[フリードリヒ]の判断の方が私にはより的確に思えるが」。

伯爵夫人は怒って、黙った。しかししばらくして彼女は続けた。「ベルント、あなたは国王が自らこう話されたと御存じでしょう。『王子ハ決シテ間違イヲシナカッタ唯一ノ者ダ』と。王子は戦争の理論において、とりわけ知識や判断に関するすべてのことで、より重要な者であるとここで告白されているように見えます」。

ベルントは肩をすくめた。「実践出来る者は、理論を有する。決定するものは、天才の閃きだ」。

「でも天才には出現の多様な形式があります。王子ならばホーホキルヒで奇襲を受けなかったことでしょう[一七五八年十月十四日オーストリア軍に夜襲を受け、フリードリヒ敗北]」。

「ロイテンでは勝利を収めなかったであろう[一七五七年十二月五日、フリードリヒ勝利]。おまえさんは王子を過大評価している」。

「あなたは過小評価しています」。

「いや、姉上、私は王子にはただそれにふさわしい席を用意します。二番目の席です。いつの時代でも、このような人物問題では世界史を訂正する傾向が介在します。しかしやれやれ、成功しません。人民は、通暁者の知ったかぶりにもかかわらず、どんな学者の穿鑿にもかかわらず、自分達の偉人を固く守ります」。

「でも時間を追って、人民はこのような偉人をより正しく評価して行くはずです」。

「まさにこの点において、人民は騙されないと明らかになっています。少なくとも我らの人民は、これは冷静な点、奇襲を受けても大丈夫です。長いこと疑念を抱き、更に長いこと、抗います。しかし結局自分達の愛、称賛はいずこにあるか分かります。私はこれを偉大な国王の晩年に、仕事と祭典のためベルリンへ呼ばれた折、一度ならず観察することが出来ました」。

「私としては別の気分でした。ここでは繰り返しませんが、『騙されない人民』の切迫した声を聞かされて来ました」。

「そのような者達もいたことだろう。正当な王ならば数千人の感謝の為の仕事をしても、数百人から訴えられる。しかし王が数千人の者にとってどんな人物であったか、それは大きな観兵式から戻って、自分の妹、アマーリエ老妃殿下[1723-87]に、しばしば丸一年間会わなかった妃殿下に、通例の秋の訪問をなさるとき、見てとれたものだ」。

このような訪問を思い出したと思われるルッツェは、同意して頭で頷いた。しかしベルントは続けた。「私は王を今日のことのように眼前に見る。王は三角の軍服用帽子を被っていて、白い将軍の羽根は傷んで汚れていた。上着は古く、埃がたまっていて、チョッキは煙草だらけ、黒いビロードのズボンは着古していて、赤く褪めている。王の背後に将軍や副官がいた。そのように王の白馬、コンデに騎乗していて、ハレの門を過ぎ、ロンデルを越え、ヴィルヘルム通りへ入って来た。一杯の人で埋まっていた。皆帽子は取っていて、どこもしんと静まりかえっていた。王は絶えず、門からコッホ通りまで恐らく二百回ほど挨拶された。それから宮殿の中庭へ曲がって、前階段の段の所で老妃殿下の歓迎を受けられた。王は挨拶されて、腕を差しだし、そして大きな両開きドアがまた閉まった。一切は霊のようであった。ただ人々はまだ無帽のまま立っていた。目は玄関に向けられていた。何も生じなかった。華美なことも礼砲も、太鼓も口笛もなかった。ただ七十三歳の男が、粗末な服を着て、埃にまみれて、日々の労多い仕事から戻って来たのだ。しかし誰もがこの日々の仕事は四十五年間一日も怠りなく行われたと知っていた。この男の義務と仕事を目の当たりにしたとき、畏敬と賛嘆と自負と信頼とが個々人の胸の中に起こっていた。アメリー姉上、おまえさんのラインスベルクの王子も入って行ったことはある。このような絵を見たことがありますか、あるいはせめて聞いたことがありますか」。

伯爵夫人は答えようとした。しかし入って来た猟師が橇の準備が出来たと知らせに来た。かくて会話は中断された。ただわずかに大晦日の招待が続き、その日までにはペーレマン男爵もその発作から回復しているといいがとか、ファウルシュティッヒ博士はツィービンゲンの籠絡から解放されていることだろうと述べられた。十五分後に橇はオーダーブルホの様々な道に向かって飛んでいた。ベルントは、圏の仕事や、他の役所の仕事のせいで、ホーエン・ツィエーザルまでドロッセルシュタインと一緒に行った。湿地を横切って、レーヴィーンとレナーテは広大な道を進んだ。二人がホーエン・フィーツの領主の館の前で止まったとき、イエーツェが親密な表情で、「若いベルリンのお二方」が一時間前に着いたが、しかし旅で疲れて、すでにお休みになったと知らせた。

「それではまた明日」とそう言って兄妹は別れた。

第八章
自宅で

サロンの上、螺旋階段が胡桃の木の格子垣と共に上階に通じている所、そこに伯爵夫人の寝室はあった。静かな部屋で、高く、広く、窓は北側に付いていた。通常の状況下であれば、この位置は非難されたかもしれない。しかしここは、真昼の陽光でようやく目覚めさせられるという傾向になっていて、他の所では欠点となったかもしれないものが、長所となっていた。部屋の中央に、ただ狭い側の一つが壁と接してベッドがあった。大きな、重たいカーテンを備えた快適な造作で、眠りを単なるついでのものとか、それどころか処罰のように見えさせるかの棺のような箱のものではなかった。信頼の出来る人間はきちんと目覚めるばかりでなく、きちんと眠るものである。正しい掛布で覆われた大きなベッドを早速天蓋付きベッド[天国ベッド]と昇格させているのは、我々のドイツ語の洗練された点である。

伯爵夫人は、弟との諍いの影響をまだ受けていて、確信していた自信のある言い返しを邪魔されて不機嫌になって、ゆっくりと螺旋階段を上がって行った。一方彼女の侍女、はっきりとしたヴェンド族の風貌の、可愛いうら若い一人の娘が、悪戯と小ずるさの表情で彼女に従っていた。エーファ・クーバルケで、ホーエン・フィーツの老寺男[キュスター]の末の娘で、マリーネ・クーバルケの妹であった。

両人とも同じ贔屓された立場にあった。エーファはアメリー伯母の寵児で、信頼が篤く、マリーネはレナーテの許でそうであった。

伯爵夫人が語らないかなりの時間が経過した。とうとう彼女の不機嫌は収まったかのように見えた。彼女は鏡の前に座り、夜の化粧を始めた。少女は絶えず彼女の目を見ていた。ようやく伯爵夫人は優しく頷いて、言った。「エーファ、どんな具合」。

「奥方様はとても静かですね」。

「そうね。でも話して御覧。櫛を取って。何があったの」。

「一杯です。奥方様。レナーテお嬢様はまたお元気になりました。何でも話して下さった。お嬢様が頭痛になって、サロンから上に来られるたびに、嬉しくなります。ホーエン・フィーツのこと、姉のマリーネのことを聞けますから」。

「お婿さんはどうなったの。シャルヴェンカ家の息子さんではなかった」。

「そうです。でも姉はお断りの手紙を書いたのです」。

「断ったの。お金持ちの居酒屋の息子さんを」。

「だからなのです。シャルヴェンカの人々は厳しいのです。厳しくて、百姓の誇りがあって。姉に貧しいと息子さんは非難したのです。でもそれはお仕舞い。そんなに息子さんのことは気にかけていなかった。姉は今町へ行きたがっています」。

「上手く行きさえすればいいけど」。

「でも奥方様は、ハートノーの牧師が結婚式だったと御存じですか」。

「ハートノーの」。

「そうですよ。昨日、二日目の祭日。ユニークなものだったそうですよ」。

「誰とだったの」。

「ベルリン娘だそうです。どうして手に入れたのでしょう。たんとお話しがあります」。

「では話してよ」。

「若牧師様は、昨夏、あるお友達を、これも牧師ですが、ベルリンに訪問なさったので

す。名前を忘れてしまったけど、思い出すかしら」。

「いいわよ」。

「で、そのお友達は大きな家に住んでいて、三階建て。嵐がやって来て、土砂降りになったそうです。それが過ぎ去って、まだ雨が止んでいないときに、お二人のお友達は窓辺に来て、雨の溜まった通りを見ていたら、橋の板も浮かんでいたそうです。更にお話ししてよろしいですか」。

「勿論」。

「それで二人は路上を見、橋板を見ていたのですが、しかしまた二，三の大きな薔薇の木も見ていました。それらは雨のせいで、置き換えられて、丁度二人の下に窓から出て、姿を見せていたのです。二人の友は更に話していて、ハートノーの牧師は丁度一階下に住んでいる家主の人々に問い合わせようとしていたとき、一本の腕が伸びて来て、その腕が薔薇の木々のすぐ上を越えて、小さな陶器の植木鉢を雨の中に差し出したのです。鉢にはただ二，三枚の花弁が育っていたそうです。数滴の雨が花弁に落ち、腕にも落ちました。それから腕がまた消えました。『幽霊のようだった』とハートノーの牧師は言ったそうです。二日目にはプロポーズしました。税務顧問官の娘なのです」。

「あの若者のこととはとても思えなかったわ。いつもはとても内気だから」。

「人々もどう考えていいか良く分からないそうです。その二，三枚の花弁に対する愛にとても感動したのだ。若者はすぐこう言った、『この娘なら誰でも幸せにしてくれるに違いない』と、ある人々は言っています。でも他の人々はこう言っています、奥方様お許し下さい、腕のせいだった、と」。

「多分腕のせいだったのよ」と伯爵夫人は冷静に確信して述べた。

エーファは悪戯好きで、こう答えた。「でも牧師さんですよ」、それから夕方の報告を続けた。「マンシュノーの水車小屋では泥棒が入ったのです」。

「老クリーレの許ですか」。

「はい、奥方様。彼の蓄え物をすべて奪ったそうです。それに馬小屋から馬も。現場を良く知っていたに違いありません。お金は床板の下にあったそうですから。でも床板を上げたのです」。

「誰か見当が付いているの」。

「盗人達は古い兵士の上着を着ていました。半ば千切れていて、それで何もはっきりしたことは分からなかったのです。マンシュノーの人々は言っています。略奪兵だったろう、フランス人達です。略奪をまだ止めることが出来なかったのでしょう。顔を黒く塗っていたのです」。

「それではフランス人ではなかったでしょう。顔を黒く塗るというのは、正体が分かるのを恐れてでしょうから。それにあなた自身、水車小屋の内情を知っていたと言っていましたね」。

「でも兵士の上着ですよ」。

「そのことは判明するでしょう」。

それで会話は終わった。化粧は済んでいた。髪は軽くまとめられていた。伯爵夫人はエーファにお休みと言った。エーファは部屋を去る前に、今一度大きな据え置き鏡に近寄って、窓のブラインドを下げるように、緑の絹のカーテンを窓間鏡の上に巻き下ろした。

これは毎晩行われた。これについて一言述べることが必要であろう。すべての古い城がそうであるように、グーゼ城も家の幽霊がいた。それも「黒服の女性」であった。これらの白服や黒服の女達は事情通の間では本物の幽霊と見なされている。それはまさに素人にとって主要な事と思われるもの、由来話しが欠けているからである。この女達は実在以外何も有しない。この女達はただ出現するだけである。何故出現するのか、この点については一切の報告が欠けているか、あるいは諸報告が矛盾に満ちているかである。グーゼでもこんな具合であった。物語は多岐にわたっていた。ただはっきりしていることは、黒服の女性の出現はいつでも死、あるいは不幸を意味しているということであった。伯爵夫人は、いつもは大胆な性質であるが、この出現を絶えず恐れて暮らしていた。しかし夫人にとって最も痛々しく思えるものは、自分がいつか単なる錯覚の犠牲、自分自身の鏡像の犠牲になるかもしれないという考えであった。夫人はいつも黒い服を着ていたので、この心配にはある種の正当性があった。それ故その予防手段を講じていた。何度か言及された螺旋階段の設置はこれと関連していた。彼女は夜遅くサロンから寝室へ戻るとき、鏡の部屋を通りたくなかった。そこでこの寝室では、勿論、大きな窓間鏡が夫人の格別な注意と心配の対象となった。エーファがただの一度でもカーテンを下ろすことを怠ったら、夫人のお許しを得ることは難しかったであろう。

今日はまだ早く、ほとんど十一時にもなっていなかった。伯爵夫人はいずれにせよ夜間最も好んで昼間の仕事をしていたから、早めに休もうとする理由はなかった。まだ書くべき手紙があった。

夫人はベッドと窓の間にある鼈甲と象眼細工で飾られた机に腰を下ろして、自分の左手にあった短い手紙にざっと目を通し、それから自ら書いた。

「親愛ナル、ファウルシュティッヒ。皆順調デス。アルセスト嬢は、今日私に正書法無視の手紙で（文ハ人ナリ）告げられているように、了承されました。彼女は三十日グーゼにいらっしゃいます。ここでファルシュティッヒ博士と合流される筈と私ハ期待シテイマス。私を困らせないで下さいね。

貴方のなされた提案に感謝申し上げます。貴方が贔屓になさっているように見えるド・ラ・アルプ[de la Harpe（1739-1803）]に対する貴方の熱中には賛成できません。『バルマキッズ』に対しても、『ウォリック伯爵』に対しても賛成できません。赤い下線の箇所（第七巻は一緒に返却します）は良いと思います。

若干ノ躊躇イノ後、私はルミエール[Lemierre （1723-93）]に決定しました。多くの耳目を引いて、もっと成熟している『バルネヴェルト』の方ではなく、『ギヨーム・テル[ヴィルヘルム・テル]』の方です。マサニコノ成熟ヲ得テイナイノデ。その代わり飛躍、炎、情熱があります。アルセスト嬢は、彼女の判断を丸め込んだわけではありませんが、私に賛同されました。ちなみに効果に対する配慮も、私の選択に影響を与えたことを私は否定しません。自由へのクレオフェの科白は、丁度人々が聞きたがっているものです。グーゼ城ノ劇場ノ総監督トシテ、私は新奇なもの、時節にかなったものを上演し、私の聴衆の趣味に適応する義務があります。皆ノ趣味ニ合ワセルコトガ、私ドモノ時代ノ掟デス。アルセスト嬢には最良のことをして頂きましょう、ソノ上ニ驚キヲ。それでは秘密ということでお願いします。ドロッセルシュタインに対してもそうです。

しかし更に一件あります。親愛ナル博士。ソレ故貴方ノ好意ニ訴エマス。プロローグか

エピローグ、コーラス、前進させたり、後退させたり、横道に行かせる何らかのものが足りません。ひょっとしたらコーラスと呼んでいいのかもしれません。貴方ならきっと立派なものを見つけられるでしょう。私ハソノコトヲ確信シテイマス。ひょっとしたら歌でもいいでしょう。でもそれは、レナーテが初見で歌えるような簡単なものでなければなりません。

貴方ヲ三十日オ待チシテイルコトヲオ忘レニナラナイデ下サイ。恐惶謹言

A.P.」

二番目の手紙はアルセスト嬢宛のものであった。手紙は間もなく会える喜びの表現が見られるだけのものであった。伯爵夫人は、両手紙に封をして、書き物机の上の蠟燭を消し、床に就いた。ただ後イタリア風ランプが燃えているだけであった。彼女は、何年も前からしているように、サフランイエローの布を額に巻いて、読書しようとした。しかし本が彼女の手から滑り落ちた。その日の様々な印象が過って行った。ベルントの激しい演説を耳にした、それはより静かに響いて行った。バメが印象強く描写した大きな正面玄関がゆっくりと秘かに開けられた。しかし近衛騎銃兵達が踊っている広間には、他ならぬアルセスト嬢だけが入って来て、ルミエールの言葉を唇に乗せ、額には勝利が輝いていた、皆が拍手喝采した。

夢は更に紡がれて行った。伯爵夫人は眠っていた。

第九章
不実な寵児

翌朝、兄妹の両カップル、レーヴィーンとレナーテ、それにトゥーバルとカティンカは朝食のとき一緒になった。ようこその挨拶と、次々に発せられた質問、つまりラダリンスキー家でのクリスマスの贈り物とか昨日のグーゼ城での親しい会合についての質問の後、今日の予定を決めることになった。カティンカとレナーテは牧師館に立ち寄って、それからマリーをお喋りの時間に呼び寄せるつもりであった。一方若者二人は近隣の小都市キルヒ・ゲーリッツへの訪問を予定に入れた。その提案をしたのはトゥーバルで、彼は『イエナ文芸新聞』でファウルシュティッヒ博士とフルネームで署名された論文『ロマン主義の作法と不作法』を読んで、ホーエン・フィーツに次滞在する際、博士を訪問することに早速決めたのであった。

こうしたことすべてが決まった後、ようやくこれまで速やかに飛び飛びになされた会話は、もっと平静な流れとなって、ホーエン・フィーツの兄妹は、今やトゥーバルに、ユルガスによって即興でなされたクリスマス会議の件、殊にハンゼン・グレルについて、この『カスタリア』誌の最新の成果について語るよう迫った。カティンカも彼について聞きたがっていた。

「君達の好奇心に応えられるか自信はないな」とトゥーバルは始めた、「私の知識は、ユルガスとは最初の祭日に話したけど、本質的に、私がすでにこの前の長いクリスマスの手紙で書いたもの以上ではない。彼は不細工で、肌の色は悪く、優美さに欠ける。しかしこの印象は、彼が話すと、消える。彼に関する幾多のものは彼の名前から察せられる。この名前は彼の自分史の略図と言えるものだ。彼の父は、単にグレルと言うのだが、ガンツ

ァーの生まれで、元来兵士、何故かは知らないけど、デンマークへ漂着してしまった。そこで結婚したが、詳しくは、シュレスヴィッヒ地方で、裕福な職人の娘と一緒になった。かの地方では皆がハンゼンと言う。同時にそこで広まっている風習では、子供達に父親と母親の家系の名前から合成された二重の名前を生涯にわたって授けることになっている。それでハンゼン・グレルが生じた。数年後父親は、それまで学校教師をしたり、また時計工やオルガン演奏家となったりしていたのだが、またマルク地方の村へ帰りたくなった。そこで父親はガンツァーの領主宛に、長い手紙を書いて、自分の郷愁がどんなに切ないものであるか訴えた。これを読んだ老ユルガスはとても心動かされ、そして四週間後にはグレルとその妻は、ハンゼン・グレルのコロニー一団と共にガンツァーに戻って来た」。

「それで老ユルガスは職の世話をした。それは保証できる」とレーヴィーンは口を挿んだ、「これ以上ないような家族だからな。嘘、偽りなくそうだ。彼らはツィーテン[Zieten (1699-1786)]家と縁戚だし、ロール家ともそうだ。一方の方からは手仕事を得ていて、もう一方の方からは心を得ている」。

「君の言う通りだ」とトゥーバルは続けた、「一軒の家、一つの公職、一条の土地が見つかった。そして我らのハンゼン・グレルはハーフェルベルクの学校へ通った。しかし彼は半分大人になったとき、彼の母親の名前と血が彼の中で騒ぎ出し、彼はある日、シュレスヴィッヒの祖父母の許に現れた。全五十マイル歩き通したのだ。大した奴だ。しかしそれが吉と出た、ガンツァーでさえもな。そこでは老ユルガスが老グレルにこう説明したのだ、いずれ一廉の者になろう人間は皆、遅かれ、早かれ、逃亡したものだ、と。皇太子フリードリヒさえもな[一七三〇年]。その間に祖父母の家で、我らのハンゼン・グレルは大きくなって、コペンハーゲンへ行った。イギリス人達がその町を爆撃した[一八〇七年]同じ年のことだった。その様々な過程で、彼は自分の洞察力や勇気をまことに立派に示すことになって、彼はモルトケ伯爵家の家庭教師として採用され、幸せな年月を過ごした。彼がスカンジナビの研究を始めたのはこの頃だ。しかしシル[1776-1809]がデンマークの軍隊に囲まれて、シュトラールズントの通りで全滅したとき、このシルの登場で彼の愛国主義が輝き出したのだが、彼の中でグレルの名前が強く意識されるようになって、彼はコペンハーゲンでの職を辞して、ブランデンブルク地方に戻って来たのだ。ちなみにモルトケ家とは良好な関係が続いている」。

「驚いたな」とレーヴィーンは述べた、「以前彼について耳にしたことはなかった。この間ずっとどこにいたのか。ユルガスは普通口の難い男ではないのに」。

「彼は時間をベルリンでの文学の仕事と田舎での臨時仕事に分割しているからだろうと思う。ガンツァーには行ったり来たりしている。シュテヒオーで、聞き違いでなければ、説教したそうだ。ちなみに彼は一週間しないうちに私の報告を自ら補完してくれるかもしれない。彼自身でなくても、いずれにせよユルガスがいる。ユルガスは彼を皮肉に扱っているように見えるが、彼に対してほとんど敬意に近い偏愛を抱いている。彼はとりわけ彼の物語の才を買っている。スカンジナビアの自然の造型や個人的体験を描写する際のな。彼が我々に朗読してくれた『ハーコン・ボルケンバルト』の中ですでにこの才が顕著だ。何と注意深くブニンスキーが、まずは詩を、それから詩人を、ひょっとしたらそれ以上に彼という人間を追っていたか興味深いものがあった。しかしそのことはすでに書いたと覚えている」。

「トゥーバル」とここでカティンカが言葉を発した。「あなたは伯爵にあなたの個人的感触を押し付けているように見えるわ。彼は美や形式、エスプリ、一切を欲しているけど、これらはすべてこの北方の珍しい鳥には欠けているように見えるものよ。私には結局毛綿鴨に思える。ブニンスキーは徹底して南方の鳥の味方よ。プロイセン風の聖職候補生風なもの、教頭職風なものに対する理解はないと思う。これらの性質は、詩的なものとかそれどころか熱中したものになるときほどに、一層散文的になることはないのだから」。

「おまえは伯爵を誤解しているよ」とトゥーバルは答えた。そしてレーヴィーンは美しい従姉妹にお辞儀をして付け加えた。「私も反論しなければならない。カティンカ。ブニンスキーの嗜好は仰せの通りの道を行っている。しかし彼は同時にもっと深い構えの性質であって、おぼろげにこうイメージしているのだ。つまり我々がスラブ人の社交的名手ぶりよりも、サロンのがらくたや果てしない愛の陰謀の男達よりも優秀なものを有するとすれば、それはまさにハンゼン・グレル達である、と。ところで、我らのテーマを打ち切る時間だな。キルヒ・ゲーリッツまで一時間かかる。日暮れは早い。猟銃を持って行くだろう。途中一匹の兎を見つける可能性があるからな」。

トゥーバルは同意した。別れの挨拶は出発の時まで保留することにして、二人の友は部屋を離れ、猟と社交の遠征の準備にかかった。

若いレディー達も立ち上がった。レナーテはパンの残りを細かく砕き始めた。それらを毎朝鳩の餌にする習慣であった。

カティンカは、濃い緑色の窮屈なポーランド風上着を着ていたが、立ち上がった今ようやく彼女の美しさを完全に示すことになった。そして砕く手伝いをした。レーヴィーンが彼女に対し感じていたことは、余りに分かり易いことであった。一片のコケトリー、それは優越感の意識を与えているかの動作の軽やかな安定感とペアになっていて、彼女をどの人にとっても危険なものとしていた。まだ若くて未経験な者にとっては二重に危険であった。彼女はレナーテよりも頭半分だけ大きかった。しかし彼女の格別な美しさは、母親からの遺伝の一部で、栗色の褐色の髪によるもので、その髪を彼女は、当時の流行に反して、普通軽く黄金の網にまとめていた。その髪に肌の色が合っていて、この両者に目が合い、目は明るい青色であって、同時に炎のように輝いていた。

「御覧」とレナーテは言った。彼女はパン屑で一杯のショールを持って窓辺に寄った。「もう来ているわ」。そして実際外の雪の積もった窓の下枠では繻子グレーの鳩が舞い降りて来て、窓を突いた。「私の寵児よ」と彼女は付け加えて、閂を回して、パン屑を外に撒こうとした。カティンカは彼女の後に付いて来た。窓が開いた瞬間、美しい鳩がさっと飛んで来て、レナーテの肩ではなく、カティンカの肩に止まって、クウクウ言いながら、可愛く回転して、頭をカティンカの頬に当て始めた。

「不実な寵児」とレナーテは叫んだ。彼女の言葉には何か本当に不機嫌な響きがあった。

「仕様がない」とカティンカは言った、「これが世の中よ。至る所に不実者が一杯。鳩でもそう」。

この瞬間二人の若者がまた入って来て、すでに告げていたように、若いレディー達に夕方までの別れの挨拶を述べた。彼らは猟の上着に、毛皮の帽子、高い丈の長靴を着用し、その上肩に銃を掛けていた。

「犬を一匹連れて行くかい」とトゥーバルが尋ねた。

「いや、ティラスは萎えているし、ヘクトーは全てを追い払ってしまう。何も射止められない。最良の動物だが、最低の犬となる」。かくて二人は出発した。

第十章
キルヒ・ゲーリッツ

キルヒ・ゲーリッツはオーダー川を越えた別な側にあって、ホーエン・フィーツの南東部にある。選択肢として二つの道があった。二人の若者は行きの行軍は一方の道にし、帰りの行軍は別の方の道にした。彼らはまず村を過ぎ、それから森耕地を過ぎた。ホッペンマリーケンの小さな家の側を通り掛かったとき、静まりかえって閉ざされていたが、二人は興味深く立ち止まって、中を覗いた。しかし何も見えなかった。それから狭い道に入ったが、それはオーダー川のこちら側の丘の中程の高さを通っていた。時折一羽のカササギが飛び上がった。射撃に値するようなものは何もなかった。

彼らはファウルシュティッヒについて語った。トゥーバルは『イエナ文芸新聞』の記事の概略を述べた。レーヴィーンはまだ読んでいなかった。レーヴィーンは言った、「著者本人はその仕事が君に与えた印象に比べると劣るのではないかと私はほとんど恐れている。彼は賢明で面白い人間だが、しかし結局はかなりいかがわしい質だ」。

「それだけに結構なことだ。私は御承知のように伯母さんのアメリーと伊達に親戚なのではなくて、『針』を持つすべての人を、一部にはこの針のせいで、優遇している。ファウルシュティッヒも例外ではあるまい。キルヒ・ゲーリッツに暮らしていると聞くだけで、私にはもう面白い。最も洒落た質問を敢えてするような男だ。何の運命の波で、この岸辺に流れ着いたのか」。

「我々は彼については余り知らない。多分このわずかなことも尚訂正の必要があろう。彼はアルト・マルク人で、私の間違いでなければ、ガルデレーゲン一帯の出身だ。そこで彼の父親は説教師をしていた。厳格な信徒で、これに息子は若い頃から反抗していた。それでも父親の意志に従って、ハレに行って、神学の勉強を始めた。しかし文学の素人芸にのぼせて、しっかりと精進しなかった。一種の審美的美食三昧がすでに当時彼の関心事となっていたのだ。彼は何年も若いルートヴィヒ・ティークと知り合いになり、保護者を自任し、同時に批評の最上級審に収まった。この旧知の仲が、短期間で表面的なものであっても、結局物を言って、色々な幕間劇の後、キルヒ・ゲーリッツへ彼を導くことになった。

「それらの幕間劇について聞きたいね」。

「もっともだ。これらはこの男にとって特徴的なものだな。とうとう父親と息子の間の完全な断絶となった。そして息子が旅回りの俳優一団に加わろうかと思っていた矢先、ベルリンで縁のあった恩義により、リーツ・リヒテナウ夫人のサークルに魅力を感じていると悟った。このサークルは、君の父上からよく聞かされてきたことだろうと思うが、その評判より実際は良いものだ。リーツ夫人は、とりわけ才能として、立派な気まぐれ、鋭い分別、諸芸術に対する自然な感情を有していた。夫人は自分の役割に良く合っていた。夫人とファウルシュティッヒの間にはまさに色々近しいものがあって、彼は自分をやがて不可欠な存在として行った。彼は情景を作り、公爵的人物の警句を発明し、噂話や逸話を工夫し、祭典の詩を作った。勿論こうしたことすべては、リヒテナウ夫人の偉大さのシャボ

ンの泡がはじけたとき[フリードリヒ・ウィルヘルム二世の死、一七九七年]、終わることになった。そしてファウルシュティッヒは、ハレで四年前経験したように、二度目の不遇の時を迎えることになった」。

「...それで今やティークが、勲章に輝く、喜劇の中の王侯のように、そこから彼を救い出した」。

「図星だね。再び緩んでいた関係が結び直された。ファウルシュティッヒが最初に踏み込んだ。ティークの方はまさに当時『長靴を履いた猫』を上梓して、『ツェルビーノ』や『聖女ゲノフェーファ』を準備している時で、ファウルシュティッヒが来たるべき論争の時、自分にとってどんな価値があるに違いないか容易に察していた。彼は並みの批評家ではなかったからな。空想を一杯にしていて、彼は若いロマン派の意図や、奇想すらも、後追いする術を心得ていた。それでティークは半ば利害から、半ば親切心で、彼をツィービンゲンのブルクスドルフ家に推薦したのだ。後は容易に察せられるであろう」。

「いや分からない。少なくともヒントを与えておくれ」。

「分かった。それで彼はツィービンゲンへ来た。そこで更にドロッセルシュタイン伯爵と知り合うことになって、やがてホーエン・ツィエーザルへ移ることにもなった。私はまだそのことを覚えている。何か荒廃した図書館をまたきちんとする仕事が彼に割り当てられた。伯爵は公園建築の時間が許す限り、その際彼の手伝いをした。彼らは古い、頭文字が立派に飾られた印刷物や、一五世紀末の騎士本を発見した。これらが今や意気揚々とツィービンゲンへ運ばれて、新しい文芸や、それ以上に批判的調査の為の願わしい素材となった。一八〇四年の頃、キルヒ・ゲーリッツで二番目の教職が空いた。ファウルシュティッヒをこの職へ押し込むことは、一家の影響力にとって難しいことではなかった。アメリー伯母も一緒に働きかけた。半ば仕事のない聖職禄で、時に二，三時間義務的授業が欠けることもある。キルヒ・ゲーリッツの人々は、学校の授業が欠けるたびに、その時間はロマン派にとって役に立っているということで、まさに慰めとしなければならないだろう」。

「人々はそれで都合がいいのか」。

「どうだろう。小都市の役所のきいちごの株からは葡萄の実は採れないだろうから[茨から葡萄が採れるだろうか、(マタイ、7,16)]。ファウルシュティッヒ博士が人々に都合良くなるようにしているとも言えない」。

「彼は高慢なのかい」。

「逆だね。彼は自分の倫理的入用を美学的基盤から支払うすべての人々に内在している愛想の良さを有している。彼は迎合的で、いつも冗談を言い、少なくとも遊びを壊す人ではない。極めて気むずかしい証言者に対して、辛抱強く耳を傾けるばかりでなく、愛想良く、『貴方のお考えに従いまして』答えもし、そのような丁重さを装いながらまず混沌に明澄さをもたらすか、あるいはまた陳述されたことの逆を確定する技を有している。彼を支えているのは、彼の賢明さと彼の愛想の良いやり方だ。しかし彼は自分の生涯を通じて、自分の変遷を通じて、反撥感を与えている」。

「それではリーツ夫人の家で彼が居心地良く感じていたのは一つの偶然以上のものがあったのか」。

「そうであろうと案ずるところだ。彼は子供のいないある未亡人と暮らしている。ほぼ四十歳の女性だ。彼女に会うことになろう。彼女が勿論彼を支配している。彼女にふさわ

しい、つましい場をあてがうことが、彼の時折の努力となっているが、いつも失敗している」。

「しかし何故別れないのか」。

「その力が彼には欠けている。彼は弱い性情だ。そしてこの弱い性情の中に、他のすべてにましてもっと反撥感を与えるものも潜んでいる。志操の欠如だ」。

「キルヒ・ゲーリッツは、このような実害を明るみに出している場所なのかい」。

「どこでも、それは明らかにされると私は言いたい。それにファウルシュティッヒは山の奥に隠れていない。彼は率直に自分の享楽主義を認めている。最も軟弱な快適志向で、これは義務の遂行とか定言的命令とは全く別物だ。彼はただ自分自身を知っているだけだ。すべての偉大な行為は、単に詩的素材として、彼の興味を引くにすぎない。詩的衣装として最も好まれているにすぎない。アルノルト・フォン・ヴィンケルリート[一三八六年自らを犠牲にしてスイスのために戦った]のバラードには彼は涙を流すほどに感動することだろう。しかし一緒に銃剣突撃をするかとなると、彼の性情にとっては不快でかつ滑稽なものと見えることだろう」。

「そんな者は多くいる。それが一つの欠点か、議論の余地があろう」。

「場合によっては君に同意できるだろう。しかし一般に我々が我々の原理の提示の方が、原理の実践よりも厳密であるとしても、それでも理論的にはなお許容範囲に見えても、人生やその実践のときに許したくないと思う例外もあろう。私は知らないが、しかし賭けてもいいが、このクリスマスの日々、すべてのプロイセンの人々の心を動かしていることが、我らのキルヒ・ゲーリッツの博士からは単に邪魔なものと感じられているか、あるいは何も注目されていないかなのだ。聖職候補生ウーレンホルストの宗教パンフレットに対し私のシェークスピア全集を賭けるが、彼は報知紙 29 号を一行も読まなかったとする。グーゼ、あるいはツィービンゲンへの招待状が、一王国の将来や和平締結よりも彼には重要なのだ。彼は家では本の中にしかいない。民衆や祖国、倫理、信仰、　一　彼はこれらを分別で理解する。しかしそれらは分別の案件であって、心の案件ではない。今日、パリの図書館へ学芸員として招待されたら、明日は皇帝を賛美する用意があろう。このことを彼が一緒に暮らしている卑小な人々は感じている。今国民軍が計画されている。遅かれ、早かれ、キルヒ・ゲーリッツの人々も出動するだろう。しかしファウルシュティッヒ博士はどうか。彼は人々を見送り、笑い、家に残ることだろう」。

この会話の間、二人の友は、こちら側の山腹で続いていて、手前で鋭く左手に登りへと分岐する地点に達した。この分かれ道を辿ると、数分後の丘の尾根に着いて、足許に川が、川の向かい側にはノイ・マルク地方の平地が見えた。すべては雪に埋もれていて、個別の地形の波は、白い平野の中に消えていた。オーダー川の床も、その中程で、雪の中を通じて伸びている松の並木道がフランクフルトからキュストリーンまでの車道と、それと同時に川の流れとを示していなかったら、ほとんど見分けが付かなかったことだろう。この車道と垂直に横の並木道があって、これらが両川岸の間をつないでいて、それらが延びて、こちら側や向こう側で乏しく点在する村や町に通じていた。

二人の友はその光景を喜んだ。それは単調さにもかかわらず、魅力に欠けていなかった。そして秘かな荘厳さが感じられた。

「向こうの教会の塔はどこのものかい、あの大きな響孔と黄金の球の付いているものは」

とトゥーバルは尋ねた。

「エチャー村だ」。

「エチャーか。聞いたことがなかった」。

「それでも我らの歴史では役目を果たしている。南に二マイル行くとクーナスドルフがあって、そこでクライスト[Ewald Christian von Kleist(1715-1759)]が倒れ、国王は歴史的な、他のどんな言葉よりも的確に時を捉えた言葉を発したのだ、『くそ、どんな弾も余には当たらんではないか』と。こちらエチャーの方に、かのすさまじい八月の日[一七五九年、八月十二日、大王敗北]ばらばらの連隊は中隊へと融合し、船橋は爆破された。我々が今立っている箇所を目の当たりにして残骸が大河を覆っていた。こちらの右手がライトヴァインだ。フィンケンシュタインの荘園。そこで国王は夜を明かした」。

「君をここで案内者としていて幸いだな。この荒涼たる景色を見たら、歴史的瞬間があったとは思いもしなかったろう」。

「あったのだよ。ここらはどこを歩いても宝庫だ。向こうのフランクフルトに軍事顧問官のヴォールブリュックがいて、彼は数年前からレブース地方の歴史資料を集めていて、ホーエン・フィーツにも、我らの荘園の文書を調査に来たことがある。彼が何度かこう言うのを聞いたことがある。『我々には出来事が欠けることはない、歴史が欠けることはほとんどない、ただこの両者に対するセンスがないのだ』と。ここから向こう、つまり二つの斜めの牧草地の背後の雪の積もった家屋の群れを見て御覧。あれが目標の地、栄光に包まれるキルヒ・ゲーリッツだ。今この瞬間にはビーバーの巣のように見えるが、それでも僧正の夏の居住地で、十四世紀には有名な巡礼の教会を、十六世紀にはもっと有名な聖母マリアの像を有していたのだ。しかし今から降りて行くことにしよう。向こうに飛んでいる灰鷹は我らの領域外だ。君が聞きたいというのなら、我らの眼前のねぐらについて話すことにしよう。いずれにせよ、ブク川やヴィスワ川[ヴァイクセル川]からの君の同郷人達が町の歴史の中である役目を果たしている」。

「それは聞きたいな」とトゥーバルは答えた、「気分の良くなることは余り聞けそうにないと案ずるけど」。

「気分の良くなる歴史は少ない」とレーヴィーンは続けた。彼らは更に行軍を続けていた。

「ある日、すぐに話シノ核心ニ入ると、つまりポーランド人がこの国に来、焦がし、掠奪し、殺害し、それに尼僧修道院にも侵入した。修道院はここら辺り、キルヒ・ゲーリッツのすぐ間近にあった。尼僧の一人が、厳しく脅かされ、攻撃者を防ごうとして、離してくれるよう頼んだ。その感謝として勇気付ける格言を教えましょう、その威力はすぐ私自身の許で試されると良い、と。そう言って、彼女は跪いた。彼はその気になって、切りつけた。彼女はこう言っていた。『父ヨ、ワタシノ霊ヲ御手ニユダネマス』[ルカ、23,46]しかし彼は頭が胴体から飛んで来て、びっくりした」。

しばらく間があった。それからトゥーバルが言った。「しかし君はもっと別の出来事を話していたぞ。それにはポーランド人は混じっていないことを願うが」。

「そうなんだ。更に残っている話しは、ノイ・マルク地方のローカルな出来事と見なされるかもしれない。キルヒ・ゲーリッツ人は奇蹟を起こす聖母マリアの像を持っていて、この像は時代のすべての変遷を乗り越える定めに見えた。近隣のすべての説教壇ではすで

に新しい教義が説かれていた。しかし聖母マリアへの巡礼は続いていた。その奇蹟は日ごとに自らの困窮の中で高まっていたのだ。厳しい新教徒のキュストリーンの辺境伯［Johann （1513-71）、1539 新教徒］にとって、これは面白くなかった。彼はシュテルンベルク地方の、地方長官、ハンゼン・フォン・ミンクヴィッツに、不埒なことを止めさせるように命じた。ミンクヴィッツはドロッセンの町から十人から十二人の武装した市民を、自分の行政区の者達を、引き連れて、一緒にキルヒ・ゲーリッツへ向かった。彼は奇蹟を起こす像をただ持ち去る考えであった。しかし彼の意向、予定とは別な風になった。つまり彼が通り過ぎるすべての村々で百姓達やならず者達が彼の一行に加わったのだ。まだ数週間前にはいとも聖なる乙女マリアに祈りを上げて、マリアの足許へ数ペニヒ置いていた人々なのだ。かくてこの増大の結果、ミンクヴィッツ達は、もはや正規の部隊としてではなく、狼藉の、規律のない群れとしてキルヒ・ゲーリッツへ侵入した。聖母像はその台座から落下して、無数の破片となって砕け散った。他のすべてのもの、内陣席、木彫品、喪の旗は千切られたり、焼かれたりした。しかし黄金の刺繍のあるミサの衣装はこの運命を免れて、結局ならず者達がまとって、荒れた仮装行列となって村々へ戻った。経過全体は言語道断の例で、所謂信仰の時代にいかに信仰が少なく、野蛮がいかに大きなものであったか示している。野蛮が信仰の服をまとうことになることが、ただ信仰の力の一つの証明となっている」。

「君には反論したいな」とトゥーバルは口を挿んだ。

「それは結構。しかし今はいけない。我々の目の前のここは、キルヒ・ゲーリッツの最初の家並みだ。口で賛成だ反対だと言いながら、ファウルシュティッヒ博士の許にお邪魔することはできない」。

第十一章
ファウルシュティッヒ博士

キルヒ・ゲーリッツはほとんど一本の通りから出来ていて、その一本の通りの中央部は単に二軒の角の家を有する狭い、不規則な三角形の広場となっていた。

この町角の家の一つにファウルシュティッヒ博士は住んでいた。二階建ての、高い屋根で、綱屋の親方グリーペ未亡人のもので、彼女は上の階を町の財務局長に、一階の広場に面した表の部屋を我らの博士に貸していた。奥の、大きな、台所用品のある部屋は彼女自身が住んでいた。その他更に部屋としてあるものは、奥行きのあるアーチ状の玄関の道に占有されていて､そこにはかつての亡き親方の綱屋からの鉤状の台脚が幾つか並んでいた。

トゥーバルとレーヴィーンは玄関の道へ入って、左手の最初のドアをノックした。若干高い、しかしその他はよく響く声が「お入り」と叫んで、次の瞬間には我らの二人の友はファウルシュティッヒ博士の挨拶を受けていた。博士は外見も、レーヴィーンが彼について描いた性格肖像に合っていた。一見したところ合格点にもかかわらず、幾つかの欠点があった。軽くカールした髪や、それ以上に更に大きなチェック模様のズボンは、一時的に、自分の要求が自分の交友の要求に著しく遅れをとらないように普段努めている男の印象を与えていたが、その他のシャツやスカーフ、丸見えの上着掛けは、基本的には清潔さに無関心な、見せかけ上の上品さを大部分ドロッセルシュタイン家の仕立屋に頼っている従来

型の身繕いの学者と特徴付けていた。

二人の若者達と会って、彼は率直に喜んでいるように見えた。そしてトゥーバルが彼の批評の仕事に捧げた称賛の言葉を軽く受け流して、冗談を添えながら、「お二方、御覧の通り、ソファーの名誉席は塞がっていますな」、テーブルに二つの蓙付き椅子を押し込んだ。トゥーバルとレーヴィーンは腰掛けた。一方博士は、接待にある種の不安を感じて、部屋の奥の壁へ急いで行き、人差し指の小骨で三回ノックして、同時に中から返答があるか、聞き耳を立てていた。返答はあったと見えた。彼が満足げな顔で、客人達の許に戻って来たからで、更に軽く皮肉の色を浮かべてこう伝えた。一時間もしない前に、「伯爵伯母様の官房から」一通の手紙を受け取ったばかりで、内容は大晦日の秘密だ、と。

さてこの秘密が、類似のすべての秘密の運命と同じことになる、つまり早速喋られてしまうところであったが、未亡人グリーペが出現して、丁度始まったばかりの会話を中断させた。

彼女はドアのところに立ったままで、極めて敬意を欠いた表現で、かくて普通に今でも可愛い顔はまさに歪んだものになったが、不安げに座っている博士を眺めながら、自分の言うべきことすべてを、半ば問いかけの、半ば脅すような響きの「それで」にまとめてしまった。

「グリーペさん、お願いがあります。何か果物を持って来てください。ハーゼンコプフ林檎やレネット林檎、それにパンとバターも」。

「すぐに?」

「できれば。この若君達はホーエン・フィーツからです」。

この半端な紹介は効果がないわけではなく、トゥーバルが、彼はこのような挨拶では厳密に解さなかったので、グリーペ夫人に少しばかりお辞儀したから尚更のことであった。このような愛想は彼女の気に入った、それ以上にこの愛想を発揮してくれた人が気に行った。彼女は共犯者のかの視線でトゥーバルを観察した、この視線は、それぞれに応じて、グリーペ夫人の魅力と反感を醸成するものであった。そしてファウルシュティッヒの依頼に「諾」とも「否」とも返事せずに消えた。

レーヴィーンはその間に博士の部屋を見回した。部屋は広かったけれども、どこにも快適なスペースはなかった。品物が重なっていることよりも、全く勝手な無秩序が更にその印象を強めていた。丸いテーブルの上ばかりでなく、そこらに置かれている椅子の上にも、ノートや本が、入り交じった文芸的書類の積み重ね全体と共にあった。しかし最も乱雑に見えたのは、醜い青黄色の毛織物のカバーのある寝台兼用ソファーで、これに関してはファウルシュティッヒ自身がただまことにもっともな見解を、「すでに名誉席は塞がっておりますな」と述べたのであった。博士の仕事椅子のすぐ側にある隅の一つ取っても、ここには素早く片付けられたコーヒー・セットがあり、その陶器製の砂糖缶の上には上品な装丁本があった。読書の栞としてスプーン一本。この眺めよりも喜ばしいものは、ソファーの背の上に二列に並んだ小さな肖像画の陳列棚であった。それらは影絵やカレンダーの肖像画、更には石膏や蠟の塊で造られたメダルで、レーヴィーンはその全体を見て、容易に我らのロマン派の詩人達のパルナッソス山と察した。両シュレーゲル兄弟、それにティークやヴァッケンローダーの諸頭部がその特徴的な風貌で彼に迫って来た。

彼はまさにこれらの肖像画の個々と結び付けて質問を始め、これらの収集を若干完全に

仕上げることがいかに博士にとって難しいことであったか、興味深く聞いているとき、ドアの外でかたかた音がして、グリーペ夫人が戻って来たことが告げられた。彼女は入って来て、頼まれた間食をテーブルに置いた、その際、一束の書類をほとんど軽視の表情を隠さずに脇に除けた、そして最初の会話のときの「それで」と「すぐに？」に対して、今や短い「どうぞ」を続けて、それからまたかの明らかな表情を浮かべて、つまり普通の女性ならば、あれこれの理由で一時的に支配者の役割を従者の役割と交換しなければならないとき、その自分の犠牲の仕事の際には決して浮かべない、かの表情を浮かべて去った。

ファウルシュティッヒは大きく息をして、気兼ねなく振る舞い始めて、グリーペ夫人の提供したものに、今や自分の側でもかさ上げすることを許して欲しいと頼んだ。「今日はいつになく取りそろえてあるのだ」と言って、壁の戸棚へ近寄った。そこはレーヴィーンがおずおずとした視線を少しばかり向けたとき、混沌としているように見えたが、しかし腕に一杯品を抱えてテーブルに戻って来た。それらの品は容易にツィービンゲンのクリスマスの残り物と分かった。それらは薬味入り菓子、マルチパン[すり潰したアーモンド入り]、それに本物の包装の首の長い瓶のマラスキーノ[チェリー酒]であった。二，三個の尖底杯も持って来た。しかしマラスキーノの瓶はまだ開けられていなかった。彼はそこで小さなカールスバートのナイフを取りだした。それには特別小さなコルク抜きが付いていて、彼は抜き始めた。しかし予見されていたことが生じた。コルク抜きが折れてしまった。どうするのか。彼は小さなナイフを脇に投げて、一瞬考え込み、かなり元気なく響く冗談の調子で言った。「グリーペ夫人の穏やかさの限界を験す勇気はないな。別な方法でやって見よう」。そして彼は二本のフォークを入れて、コルクを引き出した。

彼は今や自ら腰掛けて、尖底杯を満たし、ホーエン・フィーツの弥栄を祈って乾杯した。レーヴィーンは感謝した。しかしトゥーバルは『ロマン派の作法と不作法』万歳とした。ファウルシュティッヒはこのような愛想に超然としていることはなくて、微笑し、一方トゥーバルは続けた。「いとも尊い博士殿、私は貴方が片付けてしまわれた事柄について会話することを好みません。「教皇ガ話サレタ[一件落着]」。しかし私の好奇心に免じて一言お許しください。貴方はティークを犠牲にして、ノヴァーリスを過大評価されていませんか」。

「余りそうは思わないが」とファウルシュティッヒは答えた。彼は十分に利口で、このような質問には非難よりもむしろ称賛を見ていた。「彼はそもそも過大評価されているとは思わない。ロマン派全体この見解では一致している」。

「ティークもですか。彼はこのような新しい勅令を王座剥奪と思うのではないですか」。

「それはない。だってこの新しい勅令は彼自身が出しているのだから。彼は十分に批評家で、ノヴァーリスの中にロマン派の先頭、完成を見ている。そして彼は十分に正直で、自分が悟ったことを発言もしている。自ら、自身の名声の喪失という危険を冒している」。

「余りに早く亡くなった者に、かくも格別な評価が与えられることに私は驚いています」。

「そう言って良ければ、このロマン派の寵児に、付き合うためには、ある特別な気質を必要として、少なからぬ奮闘努力が必要である。これは彼の散文についても、彼の詩についても、同様に言える。私が貴方から受けた印象によると、貴方は天成、小さなノヴァーリス教団に入会する素質があると私は結論付けたい。そしてこれが主要な点だ。他方ではこの詩人に対する貴方の努力が貴方の生来の素質に適合するかどうか、これは私の何度か

味わった経験によると疑わしい。彼が好きだと言う者達でさえ、彼にはたじろぐことがあると私は承知している」。

「私の知識は表面的であると告白することに」と上機嫌でトゥーバルは答えた、「私は躊躇うものではありません。それはここでもいつも私の徳操の一つです。私は彼の長編小説と、二，三の歌、『十字軍の歌』、『鉱夫の歌』等を知っています」。

「そうしたものは皆彼の最良のものに数えられる。しかし最良のものが最も固有なものとは必ずしも言えない。私は貴方らが通りを上がって来るのを見たとき、丁度『夜の賛歌』を読んでいた。この賛歌には固有のノヴァーリスがある」。

こう言いながら博士は上品な装丁の本を取り上げ、何の当惑の素振りも見せず、奇妙な読書の栞[スプーン]を除けて、それから本をめくりながら言った。「貴方らに私が丁度読んでいた若干のものを紹介したくなった」。

二人の友は同意した。

「いずれにせよ、我らは熱狂者と見なされよう」とファウルシュティッヒ博士は続けた、「そして熱狂主義のあるところには、改宗運動もある。ちなみに貴方らの辛抱を不当に要求するつもりはない。わずか数行で、ギリシア世界を称えているものだ」。ファウルシュティッヒは該当箇所を読んで、それからその本をまた手から置いて、言った。「ギリシア世界がかつてこれ以上に深く的確に描写されたことがあったかな。それでいてこの描写は単にキリスト教世界への描写の過程にすぎないのだ。自ら聞き給え。どの行も私には音楽のように聞こえる」。

そして彼は読み続けた。「とりわけ軽蔑され、青春の浄福的無垢とは反抗的に疎遠になった民衆の中に、かつて見られたことのない表情をして新しい世界が出現した。貧しい詩人の小屋に第一の聖なる乙女にして母親の息子が。この天上的心はひっそりと全能の愛の花の蕾へと花開いた。そして神々しい情熱を抱いて花と咲く子供の預言者の目は未来の日々を覗き込んだ。現世の運命のそれらの日々には無頓着に[原文通りではない]」。

博士は黙った。二人の友は注意深く聞いていた。「奇妙なことです」とレーヴィーンは述べた、「あたかもこの描写は、とても内密なものですが、ギリシア世界の賛美には遅れを取っているように感じられてなりません。やはり美への憧憬が彼の中ではその信仰も含めてキリスト教の伝説よりも強大であったのでしょうか」。

トゥーバルは頭を振った。「私も君と同じように感じたが、その結論は別だ。詩的表現の力は我々の確信を計る物差しとはならない。我々の嗜好を計るものとはほとんどならない。私は心から平和を愛する。しかし私はもっとはるかに容易に立派に戦争を賛美できよう。すべて多彩なものは有利で、黒でさえ白よりましだ。我らのこの上なく敬虔な詩人達を取り上げてみ給え。神と悪魔が描写されるとき、神は損をしている」。

ファウルシュティッヒ博士は、トゥーバルが語る間に、ノヴァーリスの本を、ある箇所を探しているかのように、めくり続けて、同意するように頷いて、それからレーヴィーンに述べた。「キリスト教に対する我らの詩人の最も親密な立場というものは全く疑いを容れない。この疑いが生ずるようであれば、彼の至上権もお仕舞いであろう。彼を競争者の上に押し上げているのは、彼の才能が基準だからではなく、彼の信仰が基準だからだ。古典的なもののロマン主義というものもある。しかしすべてのロマン主義的なものの現実的な発祥地とか根源となると、まさに[キリスト生誕の]厩の像や十字架だ。この流派が創造

したすべての美しいものの中で、この調子が声高にあるいは小声で響いている。この憧憬がノヴァーリスほどに顕著なものはいない。彼はこの憧憬の中で息絶えている。貴方はすでに『十字軍の歌』を名付けられた。しかし彼が一連の『聖職者の歌』の中で導入部としている節ほどに美しく、深いものはない。数行読みましょう。その効果は確信を持って保証できます。

『皆が不実になろうとも、
御身に誠を捧げましょう。
この世での感謝の念が、
絶えることのないようにするために。
私のために御身は苦しまれた、
苦痛のまま逝かれた、私のために。
それ故私は永遠に御身に対し
喜んでこの心を捧げましょう。

しばしば辛く泣かざるを得ない、
御身が亡くなられたことを、
そして御身の身内の幾人もが、
生涯御身のことを忘れていることを。
御身はただ愛に貫かれて、
かくも多くのことを成し遂げられた。
それでも御身は忘れられ、
誰もそのことを思い出さない』」。

行から行へと一層感動して行く声で読んでいた博士はその本を手から置いた。それから言を続けた。「パウル・ゲルハルト［Paul　Gerhardt（1607-76）］の『血と傷で一杯の御頭』以来、ドイツ語で類似のものが詩作されたことはない。それもこの堕落した時代の中でです」。

トゥーバルはレーヴィーンよりも感動していた。彼は、すべての感覚的性情のものがそうであるように、陶酔的な、合致した諧音の影響の下にあった。かくて彼は、レーヴィーンが博士とノヴァーリスの会話を続けている間に、窓際へ歩み寄った。そして外を眺めた。毛皮の帽子や赤い頭巾の学童や少女が通りを上がって来て、追いかけたり、雪球を作ったりして、穀粒を啄む週百もの雀があちこち跳ねていたが、飛んで行くことはなかった。皆が平和の息遣いであった。トゥーバルは、この光景を見て、静かな憧れの中に根付いている幸せ、詩の節の朗読が彼の中に芽生えさせた幸せが増大して来るのを感じて、今や窓からまたテーブルに戻って来て、言った。博士に手を出しつつ、「貴方のこれらのキルヒ・ゲーリッツの日々を羨ましく思います。人々のお喋りの代わりに、美と深みがあり、その上この両者を楽しむ閑暇があります」。

レーヴィーンは黙っていた。彼は物事の現実を知りすぎていて、同意できなかった。しかし博士は答えた。「貴方はただ杯から味わっただけです。杯を開けなければならない者は、酵母も味わいます。この澱はますます高くなるものです。本は人生ではありませんし、

詩文と閑暇は、いかに多くの幸せな時間を創り上げようとも、幸せは創りません。幸せは平和です。そして平和の単に、ハーモニーのあるところにのみ存します。しかし私のこの孤独の中では、その平和な見せかけに貴方は魅了されていますが、すべてが矛盾で対立です。貴方に自由と思われるものは、隷属です。どこを眺めても不調和です。求めて、ただ辛抱しているものです。ヘッポコ教師にロマン主義のチャンピオン、グリーペ夫人にノヴァーリスです」。

彼は飛び上がって、部屋を過って行った。「私を羨ましく思わないでください」と彼は続けた。「とりわけ存在のかの嘘には用心なさることです。この嘘は私どもの人生が私どもの信仰と矛盾に陥るときに、いつでも黙ってであれ、声高であれ、許されざるものです。私どもの確信も許さないからで、この確信は私どもの信仰に他ならないものです。真理は最高のもので、最も真実なるものとは、『心の清らかなる者は幸いなるかな』［マタイ、5,8］です」。

この瞬間、その間に化粧をしていたグリーペ夫人がまたドアのところに現れた。片付けましょうかと尋ねることを口実にしていたが、本当は好奇心と、姿を見せるためであった。内奥からの恨みの視線が博士の目から放たれたが、しかしすぐに自分の束縛を感じて、口許を好意的な微笑へと歪めた。「グリーペ夫人、後ほどにしましょう」。それでまた夫人は戻って行った。

二人の友は立ち上がった。夙に経過していた午後は、出発するようにと警告していた。トゥーバルは博士に手を差し出した。「何も聞き漏らしは致しませんでした。貴方の言葉は、貴方の思い以上に私には届いています」。博士は微笑した。「ノヴァーリスは深い、しかし今私が話した福音書の言葉はもっと深いものです。親愛なるレーヴィーン、貴方の心にはその言葉を母なる自然が書き込んである。それが貴方の幸せの保証だ」。

「幸せを口にして鬼に笑われないようにしましょう」。

そう言って別れとなった。グリーペ夫人が挨拶を逃さないよう玄関に立っていた、そして二人の友を見送り、笑っていた。

第十二章
助けて

レーヴィーンとトゥーバルが小都市の出口に達したとき、四時となった。数分後には二人は河畔に立っていた。そして数歩先を歩いていたトゥーバルはすでに急な岸辺を降りようとしていたが、そのときレーヴィーンが彼に叫んだ。

「こちら側に留まろう。ここは大きな通りだ。まずノイ・マシュノーとホーエン・フィーツ教会側の鴨罠との間に来てから渡ろう」。

トゥーバルは了解した。そこで二人は短い距離戻って、またすでに五分前に通り過ぎたばかりの広いポプラ並木の間に来て、そこでようやくラートシュトックの渡し船の方向へ進み、それからノイ・マシュノーの分農場へと進むことにした。この分農場までが半分の道のりであった。通りは少し上りになっていた。一番高い所に来たとき、ホーエン・フィーツの教会の塔が見えた。塔は向かいの高台の上、夕焼けの中に影絵のように立っていた。

「十五分したら暗くなる」とレーヴィーンは言った、「しかし間違う筈はない。今この

道を行くと、後にはあの塔に行ける」。

トゥーバルは賛同して頷いた。しかし彼を会話に導くことは、上手く行きそうになかった。「存在の矛盾」についての博士の言葉がまだ彼の耳に残っていた。彼はその言葉で、自らの行為、それ以上に自分の家の行為が言い当てられていた。今や彼にとって、結ばれたばかりの知己を継続することが肝要となった。というのはすべての説教家的なものは厭わしかったけれども、豊かな経験と瑞々しい感受性に由来する各言葉が深く彼の心を捉えていたからである。

黙って二人は並んで歩んで行った。彼らがラートシュトックの渡し船を左手に行ったとき、夕暮れになった。個々の星が鈍く輝いていた。北方では微光が発せられていた。

「月が昇るのではないか」とレーヴィーンは述べて、地平線の明るい箇所を指し示した。

「こんなに早くかい」と無関心にトゥーバルは尋ねた。その時馬車が近付いて来て、返事は先延ばしになった。馬車の鉄の首輪の鎖が轅の上でかたかた鳴っていた。レーヴィーンは馬車とは馴染みであった。マンシュノーの水車屋であった。

「今晩は、クリーレ。こんなに遅く出掛けるのかい」。

「仕方ねーのです、若旦那。あっしに生じたことは御存じでしょう」。

「知ってる、クリーレ。しかしどうしてお金を床下に置いたのかい」。

「どうしたらいいですか、若旦那。あそこも駄目、ここも駄目だ。フランクフルトへ行くところです。明日尋問」。

「それでは泥棒はもう捕まったのかい」。

「パシュケとパプリッツを捕まえたんだが、いつも一緒の奴等だ。しかし法律顧問官のトゥルガニーはパプリッツは違うと伝えて来やした。パシュケも分からないらしい」。

「法律顧問官なら大丈夫だろう。私からよろしくと伝えておくれ」。

「そう致しやしょう、若旦那」。

そして馬は再び引き始めた。しばらく二人は水車屋の「へーイ」という声とその間の鎖のかたかたいう音を耳にした。それから一切静かになった。

出会いは、重要なものではなかったけれども、少なくとも舌を潤滑にすることになった。トゥーバルは尋ね、レーヴィーンは答えた。マシュノーの水車屋の家庭の事件が語り尽くされないうちに、二人の友はホーエン・フィーツの教会の塔を真向かいに見た。彼らはポプラ並木から左手に曲がって、耕地を横に延びている小さな溝に沿って行き、直に雪の積もった二十フィート程の高さの斜面に突き当たった。そこからは川への道、小道は下っていなかった。歩くには急で、飛び越えるには高すぎて、両人は銃を腕に、仰向けになって、両肩をしっかりと雪の中に押し付けて、無事滑り落ちて行った。勿論早速ただ新たな、もっと難儀な障害が待っていた。川の中程には何本かの樅の木が見られたが、それらは川に沿っているもので、二人を快適に確実に川越えさせてくれる横切る道を示すものではなかった。それにもかかわらず、トゥーバルは前進し、力尽くで越えようとしていた。しかしレーヴィーンは我慢ならなかった。

「君は自分のしていることが分かっていない。この辺は最も厄介な所だ。この辺では至る所に村人が氷の中に大きな穴を開けている。魚のためだ。そうしないと窒息してしまう。それらが凍結してしまって、雪でその箇所が分からなくなってしまうのだ」。

「でも向こうへ渡らなければならないのだろう」。

「確かにそうだが、ここは駄目だ。きっと渡る道はある筈だ。上方千歩先でゴルガストへの道が分岐している。そこは大きな村だ。ゴルガストの人々が赤松の並木道を造っていると保証できる」。

「分かった、君に任せよう」。こう言って二人の友は川の縁を歩んで行った。そこはしばしばとても狭くて、右肩が雪の積もった斜面に触れた。難儀な行軍であった。つまり赤柳の大きな茂みを越える必要があったのである。とうとう彼らは右手に一種の窪道が通じていて、氷を越えて渡って行ける箇所を見つけた。

「迷路はようやく終わりだ」とレーヴィーンは言って、黒く、尖った小木の群れを指さした。それらはやがてはっきりと横断の並木の松と分かった。「キルヒ・ゲーリッツとホーエン・フィーツの間で想定していた以上の冒険だった」。

「それでもまだ我らは港に着いていない」とトゥーバルは答えた。「ささやかなロシア遠征だな。雪また雪。そしてここはベレジナ川[会戦、一八一二年十一月二十六日から二十八日]」。

「しかし我らの下の橋は瓦解していない」とレーヴィーンは冗談を言って、通じている道の中へ先に曲がった。道は二人の友を数分後にはもう確実に向こう岸に導いていた。

ここで二人はまた高台へ登った。この高台で左手の方にホーエン・フィーツの教会の塔をまさになお認めることができ、今や二人は先に目標より千歩進むことになった同じ歩数をまた戻るよう強いられたのであった。まだ歩むべき道はまず丘の麓を走っていて、それから密な保育林の許にあり、保育林の最先端の角からはせいぜい村まで小銃の射程で、大きな､キュストリーンからホーエン・フィーツへ通ずる通りまでの半分そこそこであった。

その角へ二人が達したとき、小道が消えていた、というか暗くてもはやはっきり識別できなかった。彼らはまた引き返して、まさに諦めた丘の道（ホーエン・フィーツの公園へ達するであろう道）を進むべきか、あるいは鋤き返されたばかりの畑を横切って大きな通りへと向かうべきか、まだ躊躇っているとき、まさにこの大通りの木々の間から様々な人影が目に付いた。果たしてすぎその後、あたかも話し声のようで、次の瞬間にはもうあたかも激しい諍いが行われたかのようであった。低地ドイツ語の侮蔑の言葉、怒鳴る言葉とが混じっていて、突然畑を越えて二人の許に聞こえて来た。

「絞め殺される、誰か助けて」。

レーヴィーンは、より速やかに状況を察知するために、ここ森の角に境界石として置かれていた大きな荒石に飛び乗った。しかし同じ瞬間、一時間前から雲に覆われていた月が姿を見せなければ、ほとんど彼はその目的を達成できなかったことであろう。彼は今やすべてをはっきりと見た。

「ホッペンマリーケンだ」と彼は叫んだ。同時に彼は岩から飛び降りて、肩から銃を取って、一発撃って、助ける者がいることを示した。「少なくとも怖じ気づいたことだろう。行くぞ、トゥーバル」。そう言って二人の友は畑を駈けて横切った。レーヴィーンはこけたが、素早く立ち上がって、次の瞬間にはまたトゥーガルの横に並んでいた。

通りまで半ばの道、進んで来たとき、二人は情景をはっきり確認できた。ならず者の一人は村の方向へ見張り役として立っており、もう一方はホッペンマリーケンと争って、彼女の髪を引っ張り、毟り取っていた。

「止めろ」と今や先頭を走るレーヴィーンが叫んだ。しかし掛け声はもはや必要なかっ

た。追い剥ぎは彼女から離れて、大きな弧を描きながら、同じ小森へ駈けて行った。その小森の反対の角からトゥーバルとレーヴィーンは鋤き返されたばかりの畑を駈けよって来たのであった。見張りとして配置されていたもう一人は村の方へ消えた。

レーヴィーンとそれからトゥーバルが道路に達したとき、ホッペンマリーケンも消えていた。しかしすぐにこの女性を見つけた。積み上げられた石の背後に横たわっていた。石の段とクロポプラの間で、この木の上の枝は烏の巣で一杯であった。背負籠はまだ背中にあった。杖は両手にあった。

「死んでいるのかい」とトゥーバルは尋ねた。

レーヴィーンは生きていると確信して、首を振って、彼女に対ししゃがみ込んで、リンネルの籠の紐から彼女の両腕を引き出した。そのようにして彼女を背負籠から離して、気絶しているだけだと確信して、彼女を地面から引き上げて、木に背中をもたれかけさせた。

「ちょっと雪をくれ」と彼はトゥーバルに叫んで、彼自身は彼女の窮屈な布のコルセットを緩めた。その最上段のホックは、いずれにせよ、諍いと引っ張り合いで千切れていた。彼は今やはっきりと赤く血まみれとなった首とうなじから、ならず者の所業の目的は彼女の財布をひったくることに他ならないと察した。彼女は普段から財布を細く強い革紐に結んで首に掛けていたのである。しかし革紐は千切れもせず、首から奪われていなかった。

この瞬間ホッペンマリーケンは目を開けた。彼女が最初にしたことは、財布を握りしめることであった。それから彼女はようやく自分にかかりっきりになっていた人物達を観察した。彼女が、自分の好きなレーヴィーン、頼りにしている唯一の人間を認めたとき、普段見慣れない、好意的微笑が浮かんだ。彼女の醜さを取り繕ってくれるであろう微笑であった。彼女は彼を撫で、軽く叩いた。しかし彼女にとって煩わしいやり方で、額に雪をトゥーバルがなおもなすりつけていたので、彼女は我慢できず、彼をはね除け、人差し指でますます性急に自分の横の背負籠を示した。レーヴィーンは若干彼女の身振りを理解し、背負籠の中を探し出し始めた。すぐ一番上に、ハンカチで包まれた瓶を見いだして、ホッペンマリーケンの意味していたことを察した。彼女の上に覗き込んで、彼は火酒の若干を手の中に注ぐ仕草をした。しかし今や彼女の不機嫌はレーヴィーンにすら向けられて、彼の手から怒って瓶を奪うと、一気に飲んだ。早速彼女はすべての活気をまた取り戻して、瓶にコルクの栓をして、レーヴィーンに呼びかけた。「では起こしてくださいな、若旦那」。それから背負籠を石段に置いて、その横に長い先の曲がった杖を置き、短い腕を背負籠のリンネルの紐に通した。かくてまた彼女は行軍の用意が出来ていた。

「一緒に戻らないかい」とレーヴィーンは尋ねた、「お伴しよう」。

彼女は頭を振って、反対の方向へ歩んで行った。勿論自らぶつぶつ分からない言葉をつぶやきながら。

二人の友は彼女を見送った。時々彼女は立ち止まって、自分の杖を、ならず者の一方が姿を消した小森の方へ、振り上げて威嚇をした。

第十三章
執務室兼審理室

ベルント・フォン・フィッツェヴィッツは、トゥーバルとレーヴィーンがキルヒ・ゲー

リッツへ訪問している間に、ホーエン・フィーツに戻って来た。緊張する日々を経ていて、同時に幻滅に満ちた日々でもあった。大臣は、我々が承知しているように、同意を並べる滑らかな言葉を用いて、身をかわす術を心得ていた。そして彼の口利きが可能な首都の影響力の大きい圏内でも、自分にとって厭わしい言い回しに遭遇していた。「我々は待たなければならない」と。時宜を理解する言葉はどこにも見られなかった。ただグーゼではルッツェ大尉だけが、出発前に直接なお会話する機会があって、彼の無茶苦茶な経過に期待する諸計画への賛同を見せた。ドロッセルシュタインは揺れていた。しかしグーゼからホーエン・ツィエーザルへの帰路、ベルントの雄弁さが語る影響下で、別の感覚となって、結局単なる一般的な民衆の武装ばかりでなく、仮に正式な戦争布告がなされない時に、自らの手で遂行されるべき国民戦争の案へ同意した。

ホーエン・フィーツに帰ってみると、訪問客に会って、ベルントには嬉しい驚きとなった。彼は時々、固定観念の呪縛となっている諸計画から解放される必要を感じていた。これに巧みなのはカティンカを措いてなかった。彼女は、政治的会話を避ける一方、同時に十分に才気があって、そのことの欠損を上手な即興芸や、宮廷圏や社交圏からの軽妙な奇話で埋め合わせをしてくれた。彼女の容姿も作用していた。彼は今回も彼女のお喋りに身を任せ、シュックマン閣下[Schuckmann(1755-1834)]の舞踏会の夕べでの描写で、バイエルンの大使があれこれのことを言ったとかしたと聞いて、一時的にすべての諸計画や心配事を忘れた。そしてトゥーバルとレーヴィーンが出現して、たった今経験した冒険を語って、彼の考えが古い軌道に押し戻されることになって、ようやく彼はまたこのお喋りの陽気な気散じから身を引いた。彼は呼び鈴を押した。

「イエーツェ」と彼は入って来る従者に呼びかけた、「クリストのヴィレムを村長の許に使いにやってくれ。あるいはむしろ自ら行ってくれ。話しがあるのだ。明日朝十時半」。

彼はこの出来事の後、早速カティンカのために、軽い談話の調子に戻ろうと思ったが、上手く行かなかった。トゥーバルもレーヴィーンもふさわしい陽気さを見いだせなかったからである。

それは夕べのことであった。

翌朝我々はベーレントを彼の二階に置かれた執務室兼審理室に見いだす。大きな角の部屋で、そこからは側面のドアが壁に塗り込まれたので、廊下には唯一の出口が通じているだけであった。まさにこの廊下に客室も接続していた。

執務室兼審理室は、その名前の荘重さに合致するようなものはわずかしかなかった。その部屋は他の多くの部屋同様、書斎部屋、仕事部屋で、ベルントは特に夏、二つの大きな窓が格子垣の葡萄の木が育ったとき、好んで戻って来た。その頃はここは風通しが良く、影となって、密な葡萄の葉陰で小鳥がさえずり、大きな部屋を覗き込んだ。というのはそこは広いままであったからであるが、もっとも父祖の代からの家具[『ファウスト』、408より]、本や書類の書架、鉄の金具付きの長持、古風なほとんど天井まで届くタイル製暖炉に欠けていなかった。その長持の一つはドアの横、右手にあって、南京錠を有しており、一方書架の棚には、雑然と入り交じって、ヴェンド族の骨壺や、イタリア製の雪花石膏[アラバスター]の花瓶、二つの軽騎兵の兜、赤いタッチで描かれたフリードリヒ大王の半身肖像画が見られた。明らかに美的センス、秩序センスの欠如が窺われた。寄せ集めであり、それ以上ではなかった。

色々な文房具の積み重なった書き物机は、側面が窓の支柱に接していて、その机の許にベルントは座っていた。大きな一枚のカルタ紙を前にして、それに定規や烏口の助けを借りて、コラムを作成していた。彼が丁度必要な上書きを記入し始めたとき、外の廊下で丁寧に身繕いをし、すぐその後ドアをノックする音を耳にした。十分に音高くなく、作法にかない、十分に音高く、不安げでなかった。

「お入り」、それは予期されていた人物であった。

「今日は、クニーハーゼ。時間通りだ。これは我々年寄りにはとにかく身に染みついている。若者達はもはやこうはいかん。お掛けなさい、そこの、暖炉の椅子に、そして近寄られたい」。

そのような挨拶を受けた者は、帽子と手袋を南京錠付きの大きな長持の上に置いて、その他、命じられたようにした。

「お呼びしたのは、クニーハーゼ」とベルントはまた言葉を続けた、「何か手を打たなければならないからだ。貴方は私が必要とする男だ。しかし早まらないことにしよう。まずは順を追ってだ。貴方は襲撃のことを耳にしたろう、我らの老魔女がほとんど命を落とすか、財布を奪われるところであった」。

クニーハーゼは頷いた。

「村から五百歩の所、公道でだ。夕暮れになったばかりのときに。この一件ならまだしも。一週間のうちに三度だ。クリスマス・イヴにゴルツォーのシュミットは小屋から雌牛がいなくなり、二日目の祭日にはマンシュノーの水車屋は床板を剥がされた。昨日はホッペンマリーケンがほとんど絞め殺された。どうしてこうなったものか」。

「クヴァッペンドルフのならず者です、旦那様。ミークライが三日目の祭日にフランクフルトに行きました。彼はパシュケとパプリッツが捕まえられるのを見ております」。

「いや、そうじゃない、クニーハーゼ。それでまさに私は苛立ち、怒っているのだ。これは意味、分別のない馬鹿げた逮捕だ。いつも同じ哀れな野郎達だ。六回のうち五回は証拠なしでまた釈放しなければならない。これが司法となっている。哀れなものだ。こうしたこと一切は事なかれだ。領主裁判官達は考えようとしない。村長達は何もしようとしない。百姓達は言うまでもない。百姓達は自分の家の屋根が焼けて、初めていつも消火にかかる。しかしこれは変えなくてはならない。我々は始めなければならない。我らのホーエン・フィーツ人は最高の者達だ。一夜にして金持ちになった植民地の野郎どもではない。悪く思わんでくれ。クニーハーゼ。貴方自身はプファルツ人だが」。

クニーハーゼは微笑した。「旦那様の仰有る通りです。昔のヴェンド族がましです。強情ですが、強靭で信頼できます」。

「それに賢い。そうでなければ、ノイ・バルニムのプファルツ人の貴方をホーエン・フィーツの村長には選ばなかったであろう。これは私が昔から言っている。しかし耳を貸してくれ、クニーハーゼ。貴方がクヴァッペンドルフのならず者と言っている者は、外国人、フランス人だ」。

「そうじゃありますまい、旦那様。丁度牧師のザイデントプフの許に寄って来ました。彼が言うにはフランス人は国境の所で、せいぜいヴィスワ[ヴァイクセル]河畔だ、と」。

「そうであろう。しかし私の言う通りでもある。私は小さくなった『大隊』のことも、モスクワから燻し出された軍団のことも言っていない。これらは今や十一月の蠅のように

白い壁の上を這っている。私が言っているのは、ここ五十の箇所に残された小さなばらばらの代物について言っている。キュストリーンに数千人、シュテッティーンに五千人、しかし大方は小さなポーランドのねぐらに潜んでいる。国境までどれほどだ」。

「十マイルです、烏が飛べるほどの」。

「分かるだろう、クニーハーゼ。要塞に寝ておれないこれらの個々の代物が、今や箍の外れた樽の水のように流れ出ているのだ。ナポリ人とかヴュルツブルク人とかナッサウ人とかが、いずれにせよ一緒におれない。ともかく鉄の結束が欠けてしまえば、兵士の生活から盗賊の生活へはほんの一歩に過ぎない。ここらをうろついているのは、ポーランドからの逃亡兵で、ひょっとしたら援軍連隊からの掠奪兵もいるかもしれない。皇帝が今やドイツ人のすべてのポケットから差し当たりの小銭として掻き集めている援軍連隊のな。そして大隊の残りが近寄って来たら、今日は百人、明日は千人となったら、言わずと知れたことだ、『千里の距離も一歩から』と諺が言っている。だから進め。早ければ、早いほどいい」。

ホーエン・フィーツの村長は立ち上がって、答えようとしているかに見えたが、しかし領主はまだ最後の言葉を話していなかった。

「クニーハーゼ、私の言いたいことはこれだ。我々は準備しなければならない、国民軍を、村ごとにだ」。

「そして国王が召集なされば、...」。

「我々は駆け付ける」とベルントは補足した、同時に鋭い調子で付け加えた、「国王が召集されなくても、我々はやはり駆け付ける。クニーハーゼ、このことだ、このこと故に貴方を呼んだのだ」。

「国王の言葉がなければいけません」。

老フィッツェヴィッツは微笑した。「いくのだ。時代は変わっている。恭順と待機の時代がある。行為し行動することが第一の義務となる別の時代がある。私は国王を愛している。国王は私にとって恵み深い旦那様だ。私は国王に忠誠を誓った。しかし国王への誓い故に生来の誓いを破ろうとは思わない。この忠誠は私が生まれた土塊に捧げるものだ。国王は国土のためにいる。国王が国土から離れたら、あるいは弱さ故に、あるいは間違った助言故に国土から離されたら、国王は国王への誓いから離れ、私は私の国王への誓いから離れる。百万人の幸福と苦難を、個々人の気まぐれとか、ひょっとしたら狂気とすらも結び付けようと欲するのは不埒な企てだ。全能の神の名の許にこの人形芝居へ引き入れようとするのは神への冒瀆だ。これがどういう結果になるかは見届けた。血と斧へ至る。この邪道、宮廷の牧師によって誇大妄想となった邪道は終わりだ。来ては去って行く人間の教えにすぎない。しかし国土と故郷への我らの愛、これは国土そのもの同様に永続するものだ」。

クニーハーゼは頭を振った。「国王の言葉がなければいけません」と彼は繰り返した。「旦那様はここでお生まれになって、湿地[ブルフ]とその百姓達を御存じです。しかしお許しください。私の方がもっと良く百姓達のことは知っています。国王が彼らにとっては一切なのです。国王が彼らの湿地を栄えさせた、国王が教会を建てられた、国王が溝を引かれたのです。そのことを父親、祖父の代から叩き込まれています。そしてそのように自らも承知しています。私がカリースとかキュメリッツとか他の一フーフェ百姓と一緒に向

こうのシャルヴェンカの所に座っているとき、二言目には『老フリッツ』[フリードリヒ大王]と言います。老王は彼らの神様なのです。老王についてまだ生きているかのように語ります。ただそれ以上に心にかかっているものがあります。自分の家屋敷です」。

「それで今は家屋敷のために武器を手に取るべきであろう。これがこの国で最初のことではない。スウェーデン人がエルベ川の向こうのアルト・マルク地方に住むようになったとき、百姓達は、左程考えずに、立ち上がった。百姓達が再びなすべきことはこれだ」。

「承知しています」、とクニーハーゼは答えた、「ドレームリングの百姓達でした[933年に記録]。しかし彼らが掲げた旗には、こう記されていたのです。

我らはつましい荘園の百姓、
我らの選帝侯殿に身命を賭してお仕え申す。

老フィッツェヴィッツは、自分の仕事に筋を通す村長とその強情さを喜んで、彼に手を差し出して言った。「そのような旗を、クニーハーゼ、我々も持とうではないか。それを晴れがましく高く掲げよう。しかし国王が我々にこの旗を禁じたら、我々はその名前がなくても、国のために掲げなければならない。この錦の御旗は必ずしも劣等なものではない。我らの国は我らの大地、我々自身が生まれ出た大地なのだから」。

クニーハーゼは再び頭を振った。「大地は生みません、旦那様」。

「生むぞ、クニーハーゼ」とベルントは続けた、「大地は生む、生まなければならない。大地は我らの最初にして最後のものなのだから。それに、現世的に言って、我らの最良のものでもある。我々は大地だ。我々は再び大地となるべきだ。そしてこれこそが、我々にとって大地をかくも貴重なものとしているものだ。誰もが最初からそれを予感している。しかし本当にそれが分かるのは、身につまされて初めて分かるのだ。私は身につまされた。クニーハーゼ、貴方もいたぞ、我々があの棺を上に運び上げたとき。誰の棺か、もう御存じだろう。冬だった。雪が降っていた。しかし雪が融け、春に最初のクロッカスが出て来たとき、私は私の幸せが眠る大地に私の唇で接吻した、何度も接吻した。その日以来、大事な愛しい大地は何か承知している」。

ベルントはこう思い出して、手を目と額の上に持って行った。

クニーハーゼはどうしてなのか十分に分かっていた。しかし彼はそれを知ろうとしなかった。彼は恥じらう性質であったからで、黙って宙を見ていた。

「それは一八〇七年の新年であった」と老フィッツェヴィッツはちょっと間を置いてまた言葉を継いだ、「しかし私はもっと良く身につまされることになった。私は大地は何かまだ学び尽くしていなかった。同じ頃であった。覚えているだろう、クニーハーゼ、キューリッツの会計官を[Bauer の書による]。貴方や私同様に無実の者を、臆病で低劣な軍事裁判の一つに奴等は引き出して、彼に判決を下し、射殺した。私は『射殺した』と言ったかな。生殺しだった。判決もひどかったが、執行もひどかった。彼は大地に横たわっていた、不幸な勇敢な男だ、そして死ねないでいた。すると同情したヴェストファーレン人が飛び出て来て、彼の心臓を射抜いた。『貴公を愛するから、無実の貴公を、介錯致す』」。

クニーハーゼは頷いた。彼は経過を思い出した、当時皆を驚愕させたものであった。

「いいかい、クニーハーゼ、その日以来私はいつも五発の銃声を耳にしていた。そして

いつも自分の心臓にその弾を感ずるかに思われた。私はもはや眠れなくなった。どうしたら落ち着けるか分かっていた。とうとう私はプリーグニッツへ出掛けた。私はその小都市に着いて、尋ね、案内して貰った。そこは市門の前で、ポプラ並木があり、その隣には荒れた野原があった。そこで私は一緒に案内して来た子供をまた離して、一人っきりになると、その塚に私は身を投げて、一握りの土を掘り出し、それを天に持ち上げた。私の心は憎しみで一杯であり、愛で一杯であった。そこで私は二度目に身につまされたのだ。大地は何であるか、故郷の大地を。その中には血があるに違いない。ここら一帯はすべて血を肥やしとしてきたのだ。クーナスドルフ近郊には『赤い野原』と呼ばれる血がある。国王が弱い顧問官を聞き入れない十分な力がないからといって、こうしたものすべてを犠牲にしなければならないだろうか。いや、クニーハーゼよ、上手く行く限り、国王と一緒だ、しかしやむを得ないときは、国王抜きだ」。

ベルントは黙った。この瞬間ノックの音がして、入って来るイエーツェが一通の手紙を渡した。大きな封印の大きな判型のものであった。ベルントはトゥルガニーの筆跡を認めた。彼は文面をざっと読み、それから声に出して読んだ。「尊敬する貴台にして朋友、貴方に貴方の一帯、ことによると森耕地も含めて、捜査の指示を頂きたく存じます。私どもの探している一味は、どこかホーエン・フィーツとマンシュノーの間に潜んでいるとすべての状況が示しています。私どもは今日二回目の尋問を行い、マンシュノーの水車屋を呼び出しました。しかし先の結果が得られるのみで、私どもの二人の身代わり人は、いつものようにまた放免せざるを得ません。また次回以降報告申し上げる所存です。貴方のトゥルガニー」。

ベルントは笑った。「お聞きの通り、クニーハーゼ、また移送と収監費用が無駄になった。しかしトゥルガニーは間違った道を進んでおる。ここら辺りにはいない。どこかは明らかになろう。イエーツェ、手紙を持参したのは誰だ」。

「オテグラーヴェン教頭」。

「まだいるのか」。

「はい、レナーテお嬢様が招き入れました。別の御令嬢と一緒に居間にいます」。

「教頭殿をこちらに案内して欲しい」。

イエーツェは行った。村長は後に従って行こうとした。

「クニーハーゼ、残って頂きたい。幸い偶然が寄越してくれた援軍を見逃したくない」。

その後すぐに教頭が入って来て、ベルントから格別に好意的に歓迎された。若干の短い挨拶の言葉が遣り取りされた。それからホーエン・フィーツの領主は続けた。「親愛なるオテグラーヴェン、貴方をトゥルガニー宛の依頼で煩わすつもりはない。いずれにせよ、明日はフランクフルト宛郵便日だ。しかし私の馴染みのクニーハーゼに対して貴方の知恵を借りたい。村長は私を見殺しにするつもりだ、村長はこの王立の国プロイセンでは王の承知のない会戦はしないと言っている。ザイデントプフも村長に同意している。貴方もかな」。

「いいえ、三度いいえと言います」とオテグラーヴェンは答えた、「ようやく一度、聞く耳を持たない人の前ではなく、同じ気持ちの人の前で証言できて本当に幸せです」。

教頭の厳格にキリスト教的方向を知っていたクニーハーゼは耳を傾けた。しかしオテグラーヴェン本人は続けた。「このプロイセンは王立の国です。そして神の御意志なら、王

立のままであるべきでしょう。このプロイセンは偉大な侯爵達が築き上げられました。そして侯爵達の誠に国民の誠は適っていました。一つの国民は常に従うべき時、従うものです。私どもの国民に嬉々とした恭順が欠けることはなかったのです。しかし生気のない恭順を国民の至高の徳操に刻印しようとするのは呪わしいことです。私どもの至高のものは自由と愛です」。

ベルントは部屋の中をあちこち歩いていた。彼はオテグラーヴェンの前に立った。「それは承知していた。それでは我々は同意見だ。私は貴方を当てにしてよかろう。この二度とやって来ない今の時は無駄にされてはならない。最上位の所で、我々が鍛えて造った武器を使用しないというほどに、盲いているのであれば、我々は自ら武器を使おう」。

「我々は自ら武器を使おう」とオテグラーヴェンは繰り返した、「しかし私どもが案じていますこの違反は起きないでしょう。別なもっと良き日々が来ましょう。弱きものは決然たるものに道を譲ります。そこへ至る最も確実な手段は、我々自身がその決然さを示すことです。私は承知していますが、私どもの力に対して、私どもの良き意志に対してさえも、一つの不信が見られます。私どもは国王に対して、たとえ私どもが国王に反対しても、国王に味方していることを示すべきです。シルの軍も国王の意志とは敵対して行動し、それでも『国王陛下万歳』と叫びながら死にました。従わないでいながら、そうして初めて誠そのものとなる誠があるのです」。

クニーハーゼは宙を見据えていた。彼は自分が立っている地面が揺れる思いがした。しかしまだ彼は得心していなかった。

「私は忠誠を誓ったのです」と彼は言った、「忠誠を守ると誓ったのであって、忠誠を破るとか考えると誓ったのではありません。権威は神からのものです。神の手から王達が由来します、強い王、弱い王、善良な王、劣等な王。私は降りかかって来る王をそのまま受け入れなければならない」。

「神の手に」と今やベルントが叫んだ、「王達は由来する。しかし他にもっと多くの別のことも由来する。そして対立があると、最後に残るのはいつも自らの心だ。名誉心とそれに、そのために死ぬという勇気だ」。

「その通りです、クニーハーゼ村長」と再びオテグラーヴェンは言葉を続けた、「決心することの方が従うことよりも難しいものです。難しいし、しばしばもっと貴重なものであります。領主様の仰有る通りです。見回してください。全体がお仕えを止めています。至る所、ほとんどそれを敢えてしているのは個々人です。貴方のような男は、クニーハーゼ、ホーファー[Andreas　Hofer(1767-1810)]たる者であり、黄金のような誠があります。しかし彼の皇帝が和平を結んだとき、この砂亭[Sandwirt]のホーファーは言いました。『フランツ君[オーストリアのフランツ一世皇帝]はそうせざるを得なかった。私はその必要はない。私は彼のためにこの古い国ティロルを守る』と。彼がそう言って、行動したとき、彼は自分の皇帝のために和平を破って、敵、味方に科があることになりました。彼はそれを死でもって償いました。しかしクニーハーゼ、皇帝はホーファーの名前を聞くたびに、誓いの破棄と不忠とを考えると貴方は思われますか。そうではありません。皇帝の心は一層高く脈打ちます。愛が生き生きしていて、官報や司令官の言葉よりも自分自身の心に耳を傾ける国や侯爵は幸せなのです」。

クニーハーゼは今や立ち上げっていた。彼はベルントに手を差し出した。「旦那様、思

うに、教頭は言い当てました。決心することの方が従うことよりも難しい。私は決心しました。私どもはここら辺で準備を完了させます。そして『否』とか『然り』と言わずに、打ちかかります。議論していたら機を失します。誰一人オーダー川を越えさせません。仮に来たら、そして私どもを異民族が永遠に足の下に踏みにじることになったら、そのときには決死の力を神に頂きましょう、ホーファーとかシルの軍が滅んだように」。

「貴方に感謝する、オテグラーヴェン」とベルントは言った、「私一人では村長を説得出来なかったであろう。これからはもっと頻繁に会うことにしよう。計画はドロッセルシュタイン伯爵と打ち合わせてある。国中に網を広げる。レブースが最初だ。我々は前衛。ここフランクフルトとキュストリーンの間で大きな諸通りが合流している。機が熟するまで、待つことにしよう」。

彼らはまだしばらく残っていた。それから教頭とクニーハーゼは別れを告げて、階段を降りて、玄関から出て行った。ヘクトーは、村長を見かけて、格別の喜びの仕草をして、庭を通って行く両人の伴をした。

彼らはシャルヴェンカの居酒屋への道を行った。相変わらず活発に会話していた。しかし戦争や国民軍とは別な件に見えた。彼らは居酒屋の正面を十二回ほど測ってから、ようやく別れた。

教頭の小さな馬車がまたフランクフルトへの道を南へ駆けて行ったとき、村長クニーハーゼは妻の許にいた。二人は長いことお喋りした。クニーハーゼ夫人は黙っていることを約束したけれども、その日のうちにすべてのこのお喋りはホーエン・フィーツに知れ渡った。

ただ一人の女性だけが何もこのことを知らなかった。このお喋りの対象であった者である。

第十四章
何かが起こる

聖ヨナタンの日、十二月二十九日は、昔からホーエン・フィーツでは行列の日であって、色々な仮装行列が行われた。午後になると、従僕ループレヒト[クリスマス、悪い子を脅す]や幼子イエスの他にヨゼフやマリア、それに東方の三博士が家から家を回った。この古い演し物に加えて、新しい像も加わっていた。今回は「夏」と「冬」で、このうち「夏」は軽い麦わら帽を被り、熊手と大鎌を持ち、「冬」は毛皮と木靴を着用して、殻竿を持っていた。これらは問答を行っていた。

私は冬で、自慢する、
木がなくても橋になる。　ー

互いに自分達の長所を誇り合い、結局自分達が入って行った家ごとに、和解と賀詞に至るまで、長く諍いを言い合って終わりとするのであった。

今日はまた学童が格別な楽しみを添えていた。学童の何人かが「白雪姫とその小人達」として行列を形成していた。白雪姫は長いブロンドの髪の毛で、小人達は亜麻色の髭に茶

色のフードであった。彼らが最後に領主の館に来たとき、彼らは若い領主家の人々がショルレンマー伯母と一緒にクリスマスの贈り物がなされた同じ大きなホールに集まっているのを見いだした。白雪姫が同行者を代表して謎かけする許しを願う短い口上を述べた後、小人達が進み出て、謎を出した。

「誰も話せない話しは何か」。

自分が死んだという話し。

「すべての言語を話せるものは誰か」。

山彦。

「どちらが強いか、金持ちか貧乏人か」。

貧乏人。貧乏人は窮しており、窮すれば通ずるから。

このように問いかけはなされた。しかしここでなされている答えは言われないままであった。ホールに一緒にいたマリーネ・クーバルケは、林檎や胡桃で一杯の幾つもの皿を持って来て、小人達の合切袋に詰めてやらなければならなかった。

かくて午後は過ぎた。暗くなったとき、ホーエン・フィーツは静かであった。老いも若きもシャルヴェンカの居酒屋でのダンスや祭日の集まりのために化粧していて、六時になって初めて、一部は遠く湿地[ブルフ]に属している飛び荘園からも鞭の音や鈴の音と共に馬車や橇でやって来て、再び静けさが破られた。

領主の館でも、支配の人々も従者の人々も、皆が出発の準備をしていた。そしてダンスが始まって三十分後､村の通りからフィッツェヴィッツ家の長い正面を眺める人がいたら、単に二つの窓に明かりを認めたことであろう。この二つの窓は、執務室兼審理室の隣にあって、唯一明かりがあったからばかりでなく、強固な格子垣から二，三本の空想的な線を描いて、明るい窓の上に広がっている薄暗い葡萄の木の枝故に、更に人目を引いたことであろう。この窓の中では、赤いフリーズで覆われたソファー付きのテーブルの許にレナーテとカティンカが座っていた。この二人に、十五分前から、夕方一緒にお喋りするために、マリーも加わっていた。この三人すべてにとって、カティンカも例外ではなく、三人きりになって、全く身内だけになることは楽しい喜びで、この喜びを更に高めるために、彼女らは一階の大きな社交室から二階のこのはるかに小さな部屋に戻ったのであった。

ショルレンマー叔母はいなかった。彼女は慣習に反して外出し、牧師館でお喋りしていた。一方、老フィッツェヴィッツは、交互に村長のクニーハーゼ、それからまたレーヴィーンとトゥーバルとを相手に、居酒屋でその政治的議論を行っていた。百姓達はすべての面で好意的であった。鉄を鍛えて造るには打って付けの晩であった。

一方我らの三人の若い乙女達のお喋りは、察せられる通り、全く別様であった。中でもレナーテは格別の活発さで、マリーは格別の控え目で目立っていた。マリーは、自分に対してカティンカがすでに以前の機会に示してくれた親しげな態度を今回もまた見せて近寄って来たけれども、それでもある種の予感で、レナーテに対するカティンカの姉妹のような親密な態度を出来る限り受け入れずに、ただ折々に、最も良いのは要求されたときに、二人の従姉妹の会話に加わるのが自分にはふさわしいと考えていた。この会話そのものは彼女にとって十分な喜びであって、カティンカが半ば座り、半ば寝そべって、右の足先をソファーのクッションに引き上げて、ベルリンの社交界の現況について、最後に老フェルディアント王子[August Ferdinand Prinz von Preußen(1730-1813)大王の末弟]の許での大きな

夜会について話し始めたとき、刻々と大きな喜びとなった。

「それはザールフェルト近郊で倒れたルイ王子[Louis Ferdinand von Preußen(1772-1806)]の父上なの」とレナーテは尋ねた。その質問が肯定されると、彼女は続けた。「そんな夜会に出席できたら、何て素敵なんでしょう。父上はこの冬にはと約束してくださった。でも時がそのような風向きになっていないわ」。

「思っている程、大したものじゃないわよ。他の多くの社交界と同じ。ツィービンゲンやグーゼにいるような将軍や伯爵、会長がいるわね。引き裾が若干長い。数百の明かりがもっと多く燃えている。それだけよ」。

「でも王子の周りにはクラハとかバメとかはいないのでしょう」。

「そんな人達ばかりではないけど。でもそんな人達を王子は避けることもできないでしょう。選べないのよ。身分と生まれで決まって、男ぶりではないのよ。あなたは旧知だからといって、グーゼ城のエリート達を余り尊敬の目で見ていないけど。でもほんの一冬の間でもあなたの好奇心や虚栄心を満足させて御覧なさい。そうしたらこの宮廷社交界の魅力は永久に消え失せてしまいます」。

「そうは思わない。あなたは個人的にいつも同じ風に話すとは思うけど。あなたが要求していることは、私には縁のないことよ。私個人としては、一目誰もが一廉の者であるこの世界を覗くことが許されたら、満足すると思うわ。老王子その人を挙げてみても。王子はフリードリヒ大王の弟。それだけで十分、私には大事な人。私は畏敬の念なしには王子を眺められないと思う。王子はひょっとしたら私を無視なさるか、あるいはそれ自体何でもない言葉を私に話しかけられるかもしれない。でも王子にお会いして、お話ししたということは、私にとってどうでもいいことではなくなるでしょう」。

カティンカは微笑した。

「あなたは私のことを笑っているけど」とレナーテは続けた、「でも考えて御覧、私は哀れな田舎令嬢の生活を送っているのよ、荒涼として孤独。母親の代わりにはただ家に善良なショルレンマーがいるだけで。マリー、手を貸して。あなたは私の慰め、喜びよ。でもあなたは宮廷舞踏会の代わりにならない。それは皆どんなに煌めき、ざわめいていることでしょう。それに国王御本人。カティナカ、二，三人名前を挙げてみて。想像してみるから」。

「まあね、老伯爵レアーレ、典侍長の夫で、二年前グーゼを訪問された。それに侍従のシュタインヘーフェルのフォン・マッソー、プレッツェルのフォン・エカルトシュタイン殿、ツィービンゲンのフォン・ブルクスドルフ殿、ホーエン・ツィエーゼルのドロッセルシュタイン伯爵」。

「でも私はその人々は皆知っている」。

「だから名を挙げたの」。

「では知らない大使達」とレナーテは、短い中断を無視して言った、「会って見たいわ、サン・マルサン伯爵[St. Marsan(1761-1842)]に、それにハルデンベルク大臣[Hardenberg(1750-1822)]、この大臣を父上はいつもとがめ立てして、非難しているけど。私には気の良い人に思える。ところでね。あなたの伯爵ブニンスキーも、そんな言い方をして御免なさい、宮廷で紹介されているの」。

「いいえ、彼は拒否しています」。

「分かった、だからあなたは宮廷社交界に冷たいのね。レーヴィーンは私に伯爵のことを描いてみせてくれた。でもあなたの口から彼のことを知りたいわ」。

「教頭の正反対と考えなさい、今日の午前偶然紹介されたけど。何という名前だったっけ」。

「オテグラーヴェン」。

「そう、その通り、オテグラーヴェン。良い名前、元々は貴族風。でもこの市民階級の変わり種は、何と衒学的な人でしょう。真っ直ぐに構えています、でも杓子定規です」。

「内実を見て判断しなければいけませんよ」。

「それだったら完璧な人と言えますね。だって教師でしょう。本に書かれているような教師だわ」。

「アメリー伯母さんの言う通りと思うわ。伯母さんは最近あなたについて、カティンカはポーランド女性と言った。昨日またザイデントプフ牧師が私に請け合ったように、ただドイツ人だけが、外見に惑わされずに見通せるのです。そう思わない」。

「馬鹿ね。そうは思いません。こうした類いの自惚れを抱けるのがただドイツ風です。私はそれに触れようとは思いません。私どもポーランド人に長いこと振りかけられている誹謗に触れたくない。ただ二点は私どもに認めざるを得ないでしょうね。情熱と空想です。それであなた、分かってね、外面に惑わされず見通せる何かがあるとしたら、まさにこの二つなのです。伯爵は美男です。でも請け合いますが、伯爵がたとえこのオテグラーヴェンに実の双子のように瓜二つだとしても、私には伯爵は同じ人物でしょう。だって外見が完全に同じ時でも、この類似性は消えるでしょうから。伯爵は内部が根本的にオテグラーヴェンとは別だから」。

「別だって。もっと良い別なの」。

「別だということで十分です。散文的徳操と詩的徳操があります。その両者の価値については争わないことにしましょう。でもあなたに教えておきたいのはね、伯爵に関し、私が大事で、心地良いものと思っているものは、私はそれを高く評価はしているけど、姿や形ではないのよ」。

「では何」。

「例えば彼の忠誠ね。だって信じられない言い方かもしれないけど、ポーランド人も忠誠を捧げられるのよ」。

「少なくともそれはポーランド人の最も傑出した特性とは見なされていないわね」。

「それだけに忠誠な人は立派よね。私はブニンスキーをその一人と数えたいわ。コシチュシュコ[Kosciuszko(1746-1817)]がポーランドを決する最後の会戦のとき、樅の小森の縁に倒れたとき、まだ半分子供の旗手が隣にいたの。そして命がけで出血して気を失った将軍をかばったの。逃げることも出来たろうけど、でも恥と思ったのよ。とうとう打ち負かされたとき、ただこの旗手は一つのことを願い出た。自分の捕虜となった将軍を介助し、同じ独房に入ることを許されたい、と。この旗手が伯爵だったの」。

それまで手編みから視線を外さずにいたマリーは、カティンカを大きな目で見つめた。

しかしカティンカは、その視線に好意的に応えながら、続けた。「分かる、レナーテ、これが忠誠だったのよ。あなた方が愛するような、こっそり接吻しては時と永遠に対する絆としたいと思うような忠誠ではないけど。でもこれも一つの忠誠で、必ずしも劣等な忠

誠ではない。伯爵は、そのような旗手の自分であり続けた。スペインへ行くことになった。自分が指揮するポーランドの槍部隊が、私にそのことをトゥーバルは語ってくれたけど、隘路を通過することになった。その名前は忘れたけど、この通過は戦史上稀なものと言われているそうよ。その会戦を生き延びた数少ない一人が伯爵だった。パリへ重傷を負って運び戻されて、皇帝の手からレジオン・ドヌール[フランスの最高勲章]の赤い綬を頂いた。それは良く似合っていると言っていいでしょうね。...そうよ、レナーテ。あなたは私や自分のことをとても勘違いしている。私どもは同じように感じているのよ。すべて詩的なものは魅了する。でも硬直や衒学は、たとえそれがオテグラーヴェンという名前でも、冷めた気持ちにする。それはポーランド風ではない。女風よ。マリーに聞いて御覧なさい」。

「聞くことはしないわ」とレナーテはからかった、「分かっているに違いないから」。

「聞かれなくても、私は応えることにしましょう」とマリーが屈託なく遮った、「皆が教頭を評価しています。私どもの牧師は彼を愛しています　ー」。

「では、あなたはどう。あなたは彼を愛せる」。

「いいえ、御免です。たとえコシチュシュコを守っても、隘路を突撃しても、御免です。彼はひょっとしたら勇敢かもしれない。でも英雄としての彼はイメージできない。不当な扱いをしていたら気の毒だけど。私が愛することになる人は、空想の中でも私を虜にすることでしょう。でもそもそも彼は私を虜にしない」。

「でもそれだけ一層あなたは彼を虜にしていますよ。オテグラーヴェンは隠し事があると、老ザイデントプフ牧師が昨日耳打ちしてくれました。　ー　でも九時だ。お喋りにかまけて、夕食を忘れていた」。

そう言ってレナーテは立ち上がって、ロココ調の簞笥へ向かって行った。その至る所欠けた所のある螺鈿細工の棚にマリーネは、家を去る前に、冷たいハム類の大きな盆を皿やナイフ・フォークと共に置いていたのであった。

ソファーと簞笥は同じ壁の所にあって、その間はスペースがあったが、そこは以前客室から執務室兼審理室へ導くドアがあったのであった。このドアの所は、半ば石混じりの壁となっていて、平たい壁龕を形成し、はっきり識別できた。

レナーテはお喋りを続けながら、丁度、　ー　カティンカがランプを持ち上げたとき、

ー　当時の慣習で木の枠が付いた盆を、テーブルの上に置いたとき、何かがたがたする音を聞いた。

彼女は二人の別の乙女を見つめた。「何か音がしなかった」。

「いいえ」。

「何かがたがた言ったわ」。

「盆の皿が音を立てたのではない」。

「いいえ、ここではなくて、別なとこよ」。

そう言って、彼女は壁に耳を当てた。埋め込まれたドアがあったところである。

「びっくりさせるわね」とカティンカが言った。しかし彼女がまだ言い終わらないうちに、三人は皆、はっきりと、大きな隣室で、窓の扉が開けられる音を聞いた。その後一つの跳躍があって、それから用心して進む足音がした。ひょっとしたら暗いので用心しているだけかもしれなかった。二人の人物に見えた。この広大な家の中では、彼女らしか誰もいなかった。救助の可能性はなかった。全く彼女らだけであった。マリーはドアへ飛んで

行って、閂で閉ざした。カティンカは、何故とも考えずに、ランプをもっと弱くねじった。わずかな微光が部屋に残った。

レナーテは再び壁に耳を当てた。しばらくして彼女ははっきりと、鋼と石とで打ち合わせて火を作るときのような鋭いかちかち言う音を聞いた。更に耳を傾けた。そしてその音がとうとう止んだとき、彼女の空想は活発になって、隣室のすべての経過を見通して追っているように思われた。彼女は火口が吹き込まれ、硫黄液の糸が燃える様を、そして両侵入者が書き物机を照らし出した後、蠟燭に点火する様を見た。この蠟燭は父親が手紙に封蠟をするとき使う習慣であったものである。すべては想像であった。しかし彼女が一瞬頭を脇へ向けると、彼女はその蠟燭の明かりを今やはっきりと見た。明るい微光で、それは執務室から古い向かい側の棟の雪の屋根にかかっていて、そこから暗い中庭の方へ反映されていた。

乙女達は一言も言わなかった。黙っていることが、自分達の陥っている危機を抑えると皆ぼんやりと考えていた。彼女達は手を互いに握って、車寄せの方を覗いた。そして覗ける限り、村の路地の方を見た。そこからのみ救助が期待できるのであった。

その間に何かまた隣室は活発になった。ならず者達は安全であることを確信した風に感じ取られた。彼らは一束の合い鍵をわざとのように音を立てて床に投げた。そして大きな、ドアの横にある長持に、その中にお金や書類があったが、とりかかり始めた。彼らはすべての鍵を試してみた。しかし古い南京錠はどんなに努力しても抵抗していた。

今や最初の言葉が呪いとなって、声高に発せられた。それからそれまでより楽に済まそうとして長持の前にしゃがみ込んでいたと思われる二人はまた飛び上がって、聞いた音が間違いでなければ、内側の、両部屋を互いに隔てる壁際の書架を探し出し始めた。彼らは揃っている本のすべてを投げだし、あたかもここには何ら自分達に都合のいいものはないかのように、ただ一回腕を動かして、棚を掻き出して、それでその上に載っていたすべての物、中国製の花瓶、胸像、軽騎兵の兜ががらがらと音を立てて床に落ちた。彼らの憤怒は獲物が劣等であるだけに増大して行くように見え、今や彼らは外の廊下に通ずる古いドアを揺すぶった。ドアは大丈夫か。

乙女達はハコヤナギの葉のようにぶるぶる震えた。しかし重いドアの錠は逆らった。先の長持の南京錠が抵抗したようなものであった。

危機は去ったかに見えた。暗闇で退却を開始したかのような、おぼつかない足音が更にした。それから一切が静かになった。

レナーテは深呼吸をした。そしてランプを再びより明るくねじるためにテーブルへ向かって歩んだ。しかしその瞬間彼女は後退った。彼女ははっきりとある頭部を見た。それは脇の方から前傾して、部屋の中を見つめていた。

一言も言えずに、ただかろうじてソファーの背もたれを掴んで、彼女は窓を示した。窓の前に今や影絵のように一人の姿があった。左手で葡萄の枝を掴んでおり、一方手袋[ミトン]をした右手は窓ガラスを押して、窓の閂を探し、内側から開けようとしていた。

三人の乙女達は声高に叫び声を上げて、互いに飛び離れた。カティンカは、いつもの決然さをすっかり失って、両手を組んで、祈ろうとしていた。レナーテは呼び鈴の紐を引いた。呼び鈴の音を聞きつける人は誰もいないという考えはお構いなしであった。一方マリーは極度の不安に襲われて、危機に突入して、自分が何をしているか分からずに、外に立

っている男の胸目がけて突進して行った。しかし突き当たる前に、格子垣の木摺がばりばり壊れ、外の暗い人影は中庭の雪の上に落下した。

乙女達の誰も外を見る勇気はなかった。しかし彼女らは今やはっきりと、レナーテが鳴らし続ける玄関の鐘の音を、そしてその後すぐに一匹の犬の唸り声を聞いた。ヘクトーが自分の竈壁の横にある温かい蓙を居酒屋でのダンスの楽しみよりも優先していて、誰も気付かないうちに、家の番をしていたことは明らかであった。犬は今や下の玄関ホールにいて、鐘の音の意味が分からずに、その唸り声や哀泣は、どこへ行けばいいのか尋ねているように見えた。しかし犬は長く返事を待つことにはならなかった。レナーテは、ドアを開けると、大きな声で下の廊下に叫んだ。「ヘクトー」、そしてその声が長い廊下に消えないうちに、忠実な動物が力強く一気に階段を飛び上がって来て、次の瞬間にはすでに若い姫君の肩に前足を置いていた。今や彼女のどんな不安も吹き飛んだ。彼女は左手で、犬の首輪を掴んで、支え、頼りとした。そしてそれから階段を降りて、中庭を飛ぶように行った。彼女が丁度車寄せから村の路地へ曲がろうと思ったとき、老フィッツェヴィッツが彼女の前に立っていた。

「助かった、父上。　ー　泥棒が　ー　入ったのよ」。

次の瞬間には老父は上の部屋にいた。カティンカが泣きながら、彼の首にすがって、マリーは震える唇で彼の両手に接吻をした。

第十五章
捜査

翌朝一家は客人達と共に通常のように一階の角の部屋に集まっていた。ただしレナーテがいなかった。彼女は熱が出て、すでに老医師のライストをレブースから呼び寄せるために、一人の使者が向かっていた。会話は勿論前の晩のことが中心であった。カティンカは、去った不安を誇張して描くことに甘んじていたが、こうした自己中傷を装って、消し去ることのできない侮辱された虚栄心の気持ちを隠そうとしていた。そうして彼女は半ば冗談の調子になったが、しかしこの調子は老フィッツェヴィッツには全く気に入らないように見えた。彼は頭を振って、彼の方としてはますます真剣になって行った。

会話の個々の点から判断できたことは、ベルントは、居酒屋でのダンスを邪魔しないように一切の警報を禁じてしまい、執務室兼審理室の検分すらも延期して、中庭と公園を、御者のクリストと夜警人のパハリーとで出来た歩哨でパトロールさせることにして済ませたということであった。その歩哨に加わることを申し出たイエーツェは、高齢で弱っているので、彼の厚志を認めながらも、就寝するように命じられていた。

九時となって、予期されていた我らの友のクニーハーゼが車寄せから中庭をわたって来た。窓辺に立っていたトゥーバルとレーヴィーンは彼を見て挨拶した。すぐその後イエーツェが告げた。「村長のクニーハーゼです」。

「お通しするように」。

ベルントは彼を迎えに行って、手を差しだし、テーブルの許に椅子を置いた。

「お掛けなさい、クニーハーゼ。話さなければならないことは短くて、秘密ではない。カティンカ、ここにいなさい。すべては我々が思っているよりも早く動いている。しかし

準備されたものであれ、そうでないものであれ、何も先延ばししてはならない。時間の猶予はない。我々は誰を相手にしているか知らなければならない。我々自身のならず者ならば、ホッペンマリーケンは襲わなかったであろう。私の主張は変わらない、外国人だ。国境からの掠奪兵だ」。

クニーハーゼは頭を振った。

「分かった、貴方は別の考えだ。どちらが、貴方か、私か、正しいのか、そのうち分かろう。どれほどの人を当てにできよう。十人から十二人いたら、出掛けよう。今日のうちにも、すぐに」。

「十人までは来られましょう。旦那様御自身と、それに若旦那方も含めて。夜警人のパハリーを飛び荘園まで行かせました。シュヴァルツ家とメッツ家、それにダーメス家で、最も若い者達です。しかし正午までには戻って来られないでしょう。ですからここ村にいる者達を連れて行かなければなりません」。

「その者達は」。

「多くはありません」。

「キュメリッツは」。

「出来ません、またリューマチです」。

「水車小屋のミークライは」。

「その気がありません。何か蜂起のことを聞きつけて、国王抜きの戦争開始に不信感を抱いています。『剣を取る者は皆、剣で滅びる』［マタイ、26,52］とか。ウーレンホルスト聖職候補生を頼らざるを得ません。彼はポケットに古いルター主義者達を有しています」。

「それでカリースは」。

「彼はその気です。ですが『クリームポット』でしょう。震えますし、血を見たくないでしょう」。

「それでは、クルルとレーツケは」。

「はい、彼らは来ます。それにドッベルトとロロフも、四人の結構な者達です。それから両シャルヴェンカ家の者、年の父と若い息子の二人とそれにハンネ・ボーグン、シャエルヴェンカの羊飼いの少年です」。

「羊飼いの少年」とレーヴィーンは尋ねた、「彼は片腕だけではないか」。

「しかし二人分の目を持っています。若旦那、奴さんは必要です。灰鷹のように見て、そしてよじ登ります」。

「分かった、クニーハーゼ、それでは我らの十人だな。最初の捜査には十分だろう。それでは百姓達が来る前に、執務室を検分しよう。ひょっとしたら参考になる何かが見つかるかもしれない」。

彼らは二階へ上がって行った。カティンカも従って、自分の隣を行く老村長に、玄関や階段で喋っていた。村長の養女が、彼女らの中で最も勇敢であって、同時に彼女達が助かる最初の原因となった、と。

そのようにして彼らは、老フィッツェヴィッツがいつも数歩先を歩きながら、執務室のドアの所まで来て、そのドアを今やある種の戦慄を抱いて、開けた。この戦慄は次の瞬間にまことに然るべきものとなって出現することになった。手の施しようのない荒れた様が彼らの目に飛び込んで来た。本や陶器は皆ごちゃごちゃで、部屋全体に滴った蠟の染みが

あり、大きな書き物机の表面は、ここにならず者達が無造作に手から投げつけた火口か硫黄液の糸に由来する燃えた痕が見られた。長持の横にはまだ鑿があって、窓の下枠には厚い、半ば千切れた手袋[ミトン]があった。

手から手へと渡されたけれども、ある明確な証拠を示すような物はなかった。かくてある種の幻滅感を抱いて、皆がまた一階に降りて来た。一階では今や百姓達が若いシャルヴェンカや羊飼いの少年のハンネ・ボーグンを含めて、すでに集まっていた。まず更に中庭も調査し、少なくとも侵入口となった箇所は調べることに決まった。ここにはまだ、泥棒達が使用した納屋の中庭から運ばれて来た梯子があった。レーヴィーンは梯子の段を上がって、窓の飾り縁を検分した。一方トゥーバルとシャルヴェンカは下の雪を調べて行った。しかし家の切妻周辺の公園の並木道と公園自体へ通じている数多くの足跡そのものについても、結局、それらが泥棒達のものか、クリストとパハリーのものか、確定できなかった。

「それでは諦めよう」とベルントは言った、「ゴルガストとマンシュノーの方にかけて何か見つかるか調べてみよう」。

イエーツェは銃を持って来て、そして行軍して行く男達の部隊がまさに庭から村の路地へ踏み込もうとしたとき、背後で羊飼いの口笛を聞いた。そして振り向いて、シャルヴェンカの羊飼いの少年を目にした。少年は差し当たりまだ残っていて、その間に梯子を執務室の窓から隣室の窓へと移して、自らの手で捜査を続けていた。

彼は今や元気よく、自分の短い腕のゆるい袖を振って、何か遺物を見つけたと思わせる合図を送っていた。

男達は戻った。彼らが間近に近寄ったとき、ハンネ・ボーグンは真鍮のボタンを見せた。

「どこにあったのだ」と老フィッツェヴィッツは勢いよく興奮して尋ねた。

羊飼いの少年は、返事をせずに、また梯子を駆け上がって行き、ボタンを自分が持ち去ったその同じ箇所に置いた。それは窓のすぐ下を走っている横木で、下の格子垣が崩れた際に上部の木摺の鋭い角がボタンを引き千切ったことに疑いの余地はないように思われた。それはフランス人の制服からのものであった。真ん中にNの文字があった。内側の縁には次のフランス語の文字が見られた。第 14 常備連隊。

ベルントは凱歌を掲げた。彼の推測は証明されているように見えた。百姓達は彼に賛同した。ただクニーハーゼは以前と同様頭を振った。しかし更に議論が続くことはなかった。ボタンが順に披露された後、皆が再び出発した。二個の獲物袋を持った羊飼いの少年が従った。

彼らはまず大きな通りをキュストリーンの方向へ向かった。二日前、ホッペンマリーケンが襲われて、半ば絞め殺された箇所まで来たとき、彼らは右手に向かって同じ小森へ向かった、つまりトゥーバルとレーヴィーンが競争して雪の積もった鋤き返された畑を駆け出したとき出発点となった小森である。しかし百姓達は彼らの地所をより良く知っていて、林の中央へ延びているしっかりと踏み固められた歩道を選んでいた。

ここに着いたとき、この小森を捜査すべきか相談された。二十五年間いつもただ高い羽根布団に寝ていた老シャルヴェンカは、十二度の冷気の中、野外で夜を明かし、雪片の掛け布団を頼りとするのは不可能だと断じた。しかしクニーハーゼは別の意見で、自分の遠征の経験を引き合いに出して、麦藁を敷いた雪小屋ほど温かいものはないと議論した。そこでこの小屋を探査することに決まった。しかし何も見つけられないまま向こう側の縁へ

来てしまった。どこにも掬い上げた雪も、柴も、火の気もなかった。

さてそこで、こちら側のゴルガスト、マンシュノー、それにラートシュトックの間にある地所にのみ限定すべきか、それとも同時に向こう岸まで渡って、キュストリーンの火薬製造所から鴨罠まで､そして鴨罠からキルヒ・ゲーリッツまで狩猟してみるか協議された。後者の方に決定されて、それでトゥーバルとレーヴィーンが、ファウルシュティッヒ博士を訪問したとき、往路、復路で通り過ぎた地点と本質的に同じ箇所が調べられなければならなくなった。これが確定すると、次にこう決められた。もっと楽に仕事をするために、チームを二つに、右手と左手とに行軍して行く部隊に分けることにする、かくて、　ー　何も事が生ぜず、予想の箇所で正しく旋回されるならば、　ー　ノイ・マンシュノーの分農場の近くで正午に落ち合うことになるに相違ない、と。一方の部隊はクニーハーゼが率いた。もう一方の部隊はベルントが率いた。このベルントの部隊には、トゥーバルとレーヴィーンの他に若いシャルヴェンカと羊飼いの少年ハンネ・ボーグンが加わった。

ベルントの部隊は右手を行った。自由な眺望を得るために、彼らはこちら側の斜面の九十九折りの歩道は諦めて、高台を登った。天候は晴れていたが、しかし日差しはなく、まぶしくて眺望が邪魔されることはなかった。ベルントとトゥーバルは五十歩先を進んでいて、直に二人は会話を始めて、二人の注意そのものが一度ならず外部から殺がれてしまった。トゥーバルは自分の子供時代、パリに住んでいる母親、そしてカティンカについて話し､青春時代から過ごしてきた不穏で矛盾に満ちた生活について自分の思いをぶちまけた。

「私は父親が国籍剥奪を決めることになったのかもしれない動機を批判する権利はありません。しかし父上は自分が踏み出したこの歩みで、家に何の恵みももたらさなかったのです。私どもの名前はポーランド風ですし、過去もそうです。それに最良の部分の私どもの所有地も、差し押さえから免れた限り、そうです。それが今や私どもはプロイセン人です。父親は一種の熱狂主義で、カティンカはそっぽを向いた意味で、私は迎合する意味でプロイセン人です。しかしいつもただ血に由来するというよりは、むしろ考察から由来する愛を込めてそうなのです。私どものように正しく祖国を有しないでいると、正しく家もありません、家庭もありません。これは最悪のことです。私どもには中心点が欠けています。カティンカと私は、大きく育った、しかし教育は受けなかった。私どもが教育として享受したものは、社交のための教育でした。かくて私どもは多彩な日々を過ごした。しかし幸せな日々ではなかった。私どもは気晴らしをし、半端な喜びを有しますが、全面的喜びを有することはなく、平和は確実になかったのです」。

老フィッツェヴィッツは一言も聞き漏らさなかった。彼はこれまでラダリンスキー家の人々の生活を単に大まかに知っていたに過ぎなかった。父親が個々の王子のサークルで享受している声望、それに今日でも重要な価値の財産、しかしとりわけこの家のどの構成員にも同等に顕彰されるすべての狭小さを脱却した態度は、この家との結び付きをいつも何か高度に願わしいことに思わせていた。今日初めて、彼は同時にトゥーバルの告白に関心を募らせて聞いていたけれども、自分の二人の子供の運命をこの家族の運命と結び付けて上手く行くであろうかという疑念が忍び込んで来た。

レーヴィーンと若いシャルヴェンカも活発にお喋りしていた。彼らは同年齢であった。それ故レーヴィーンも、昔の遊び仲間の願いに沿って、かつての「おまえ呼称」を保っていた。ハンネ・ボーグンは彼らの背後を口笛吹きながら歩み、鳥の声を真似て楽しんでい

た。

「マリーネとの仲はどうなんだい」とレーヴィーンは尋ねた。

「悪いというか、何の仲もない。私に断りの手紙を書いてきた」。

「それは聞いた。しかし彼女を侮辱したと聞いたぞ。彼女の貧しさを非難したとな」。

「それを言っているのはレナーテお嬢様で、お嬢様はマリーネが言うことを何でも信じていなさる。いいですか、若旦那、本当のことを言わないこと、そして私の悪口を言うことがあの娘の最も醜い点です。しかしならぬ堪忍、するが堪忍。どういう結果になるか分からないのですから。だってひょっとしたら私の妻になるかもしれない娘のことを前もって人の噂に晒したくありませんから」。

「しかしおまえさんは彼女に何か気に障ることをしたのだろう。おまえさんのことを悪し様に言うようなことを何か言ったのだろう」。

「そうです、あの娘はすべてを悪く取る。彼女が私のことを断って来た手紙にはこうありました。『シャルヴェンカ家の人々は百姓の誇りがある』と。しかし若旦那、我々が百姓の誇りを持っているとしたら、クーバルケ家の人々は寺男の誇りを持っています。彼女の父親は老クーバルケですが、教会の鍵を持っていて、牧師が休むようなあれこれの日曜日には、我々に福音書を読んで聞かせます。墓碑銘も書きますし、結婚式とか洗礼には詩を作ります。それに比べれば勿論百姓は形無しです。少なくともクーバルケ家の人々は皆、それをあたかも福音書そのもののように正しいと信じているのです。向こうのグーゼの末のエーフェ、これが一番ひどい。伯爵奥方様が毎日更に甘やかしているからです」。

「しかしマリーネは」。

「そう、マリーネ、あの娘はエーフェほどひどくはない。しかし同じようにやはり虚栄心があって、高慢です。聖マルティヌスの日[十一月十一日]以来、この日老法律顧問官がこちらに来て、彼女に言ったのです。『マリーネはヴェンド族の言葉で、ラズベリーの謂だ、彼女は名前がそうであるだけではなく、彼女自身もそうだ』と、その日以来彼女とはもはや付き合いにくくなっています。どうしてそうなったかって。何で悪く受け取ったのでしょうか。私は彼女のために大きなチェックのショールを取って来ることになった。そして本当にそのショールを取って来たのですが、すると私に対しそのショールを彼女に掛けるようにと言ったのです。そこで私は面と向かって言いました。『マリーネ、王女様ではないのだから。貧しい学校教師の娘なんだから』と。すると私の悪口を言い出して、人々にこう触れ回したのです。私が彼女の貧しさを非難した、と。しかし言葉をねじ曲げ、真実であるかのように嘘の化粧をすること、これは上手いものです。私が彼女にこれほど好意的でなければ、　ー　法律顧問官は元々言い当てているから、　ー　とうに二人の関係は終わっていたことでしょう。本当に終わってしまったが、しかし今でもまた、上手くいくであろうと思っています」。

話し好きな居酒屋の息子が全面的に注意を傾注し、一方それに耳を傾け、大抵は質問しているレーヴィーンが少なくとも半分ほど傾注しているこのような会話の間、この二人の若者は背後の口笛が止んだことに気付いていなかった。彼らが偶然振り向いたとき、かなりの距離遅れているハンネ・ボーグンが、両獲物袋を肩から外しながら、まさに一本の松によじ登ろうとしているのを目にした。この松は上の方で二つの大きな太枝に分岐していた。そこはこちら全体で最も高い地点で、羊飼いの少年の意図が、ここから眺望すること

であることは明瞭であった。しかし彼の意図が何であるかあれこれ忖度することよりも、今現に一本の腕の男が見せる木登りの器用さの見物の方が一切上回っていた。彼はその切り株にしっかりと登り、あたかも腕はそもそも欠けていないかのようで、巧みに細い幹の短く折れた枝の箇所を利用しながら、それらに梯子の段のように休みつつ、二人の若者が道をこの松の所まで戻って来る間に、もう上に着いていた。

「何かあるかい、ハンネ」。

彼は自分が今立っている木のまたから、何の邪魔も受けたくないかのような身振りをして、まず川の岸辺を上方、下方、眺め、最後にノイ・マルク地方をも覗いた。彼は何も見いだせないように見え、目を今一度辺り一帯に向け焼き付けた後、五分前によじ登った時と同じ軽快な身振りでまた滑り落ちて来た。

彼は今や、二人の若者が素早く先に歩む間、彼らと一緒に並んで、レーヴィーンが彼に時々向ける短い質問に、更に短い返答をしていた。

「それではハンネ、どう思うか。我々は見つけられるであろうか」。

羊飼いの少年は頭を振ったが、同意とも疑念とも取れるような具合であった。

「ゴルガストの人々とかマンシュノーの人々が奴等にもっと良く気付かないなんて考えられないな。だってここには隠れ家もなく、ほとんど一片の森もない。その上雪だろう。だれか共犯者がいるんじゃないか。そうでなければ、すぐにも明らかになろう」。

「その中の一人は良く知っているかもしれない」と羊飼いの少年は言った。

「そうだろう。しかし『その中の一人』とは誰だ」。

羊飼いの少年は思わず口笛をして微笑し、また小鳥の声の真似を始めた。ひょっとしたら偶然かもしれないし、ひょっとしたら暗示するためかもしれなかった。

「ハンネ、何か知っているような顔をしているな、誰だと思うのかい」。

ハンネは黙っていた。

「損なことにはならないぞ、シャルヴェンカ、我々は彼に毛皮の帽子を買ってやって、ピカピカのグロッシェン貨幣を総にかけてやろうじゃないか。では、ハンネ、『その中の一人』とは誰だい」。

ハンネは静かに更に歩を進め、左右を見ることなく、思わず知らず言った、「ホッペンマリーケン」。

レーヴィーンは笑った。「勿論、ホッペンマリーケンは全てを知っているに違いない。カルタが告げないものは、彼女に小鳥が告げ、小鳥が知らないものは、魔法の鏡が知っている。彼女を絞め殺した同じ奴等が、逃げ場所を知られている筈はないだろう」。

しかし羊飼いの少年に妨げられることなく、明確な表現で繰り返した。「彼女はお見通しでっせ」。

こうした会話の間に三人は、森でなされた約束に従って、高台へ進む歩道を諦めて、左手へ降りて、川を渡らなければならない所に達した。彼らの向かい側にはすでにキルヒ・ゲーリッツの塔が微光を発していた。しかしまだ優に五百歩右手にあって、このことからレーヴィーンは、自分達の足許にあって、若い松の列のある道は、一昨日トゥーバルと一緒に通った同じ道ではなく、平行した道で、多分ラートシュトックの渡し船に行き着く道であるとはっきり確認した。

老フィッツェヴィッツとトゥーバルはすでに半ば向こう側にいたが、そのときようやく

レーヴィーンはこの赤松の道に曲がって行った。彼は黙っていた。しかしそれだけ一層ホッペンマリーケンのことを考えていた。彼が自ら彼女の共犯に反駁して言ったことは、今や怪しく思えてきた。泥棒一味の間での諍いは結局珍しいことではない。一抹、有り得ないと思えても、ハンネ・ボーグンが『彼女はお見通しでっせ』とはっきり発言したことで打ち消された。この羊飼いの少年は、とレーヴィーンは自らに言った、多分十分な根拠があってこう明言したのだ。だって、ホッペンマリーケンの忍び歩きの後を付けて行ったり、あるいは国道での彼女の営みを、出会いや密談を目撃出来る者がこのホーエン・フィーツの全耕地に誰かいるとしたら、それはまさにハンネなのだから、ハンネは夏の間、シャルヴェンカの家畜の番をし、乾いた溝の中にいたり、高い穀草の中に寝たりしているのだから、と。

このような考えごとをしている間に、レーヴィーンは川の中程に達していて、老フィッツェヴィッツとトゥーバルはすでに向こう岸に達して、丁度その急な土手を登っていた。レーヴィーンの左手を若いシャルヴェンカが歩いていて、二人は以前と同様黙っていて、羊飼いの少年に注意を払っていなかった。少年はまた二，三歩彼らの後を歩いていた。

しかしこの瞬間ハンネが、素早く氷の上を滑って来て、自分の若い主人の側に来て、上着を引っ張って、自分の緩い袖で左手の方を示しながら、言った。「若シェルヴェンカ、こちらを見て」。

居酒屋の息子は立ち止まった。レーヴィーンもそうした。両人はハンネが示した方向を鋭く覗いた。

「何も見えないぞ」とシャルヴェンカは叫んで、更に行こうとした。

しかしハンネは彼を抑えて、言った。「ちょっと待って。真っ直ぐ向こう。ポプラの間。今だ」。

ハンネは良く見ていた。雪の上に立っているように見える二本のポプラの間に薄い煙が巻き上がっていた。時々消えたが、しかし次の瞬間また見えた。

「奴等を見つけたぞ。煙のある所には、火もある。行くぞ」。

そう言って、二人の若者は川を横切る赤松の道から、大きな、中心の川の流れを支えて、橇や馬車が快適に進めるようにしてある川沿いの並木道に曲がって行った。一方ハンネは実情を報告し、戻るよう要請するために、老フィッツェヴィッツとトゥーバルの許へ送られた。

レーヴィーンと若いシャルヴェンカはその間、道を進んで行ったが、ハンネがすでに向こう岸に着いていた二人の者達に追い付いて、報告し終えたと分かるまで、長いこと休んでいた。それから彼らもまた更に急いで前進して行った。やがて彼らは、最前までまだ二本の高いクロポプラに覆われた岬と思っていたものが、オーダー川ではよく見られるかの小さな葦の島々の一つであると発見した。周りを囲む葦は、ここかしこで雪の塊で押し潰されていたけれども、はっきりと確認できた。しかしその中にあるすべてのものは、まさにこの取り囲む帯で隠されていた。

彼らはここで大きな川沿いの並木道も諦めて、半ば左手に行き、車道の外部に一フィートの高さにある雪の上を踏んで島へ向かって行った。すぐ側まで来たとき、まず煙の小雲が消え、やがて二つのポプラも消えたが、次の瞬間彼らは葦の帯その前に立っていた。レーヴィーンは無理矢理わたろうとしたが、しかしこれは不可能であると納得した。それに

これは余計なことであった。彼が奮闘している間、若いシェルヴェンカが人間が通れる通路を発見した。この通路は葦の間を刈り取ったものであった。彼はレーヴィーンに近寄るよう合図した。そこで両者は進んで行ったが、難儀がないわけではなかった。風が無数の茎を通路に吹き寄せていて、通路の幾多の箇所をまた塞いでいたからである。ようやく彼らは十五歩ほどの奥行きと思われた葦の帯を通り抜けた。そしてまだ残っていたわずかな葦を一種の遮蔽に利用しながら、彼らは今や安全な場所から、島の内部を覗いた。

彼らが眼前にした光景は十分に驚くべきものであった。あたかもかなり手入れされた農場を目にしているような印象を受けた。一切が一種の整頓と清潔さを有していた。雪は両側にかき寄せられていた。両ポプラの一つに左の前足を結ばれた一頭の雌牛が麦藁紐で結ばれた干し草の束を食んでいて、別なポプラの近くには高く荷を積まれた橇があった。橇は網で縛られた帆の亜麻布の下に最近盗んで来た収穫物を隠していると思われた。

中庭はそんな具合で、その平和的風景はただ更に住居として使われている木造の小屋を見ると増して行くのであった。この木造の小屋は、両側が雪で覆われていて、雪山に建てられているようなものと左程変わらず、互いに異なる大きさの三つの部屋から出来ているように見えた。家畜小屋と台所として使用されている二つの小さな部屋は開いていて、第三の大きめの部屋には二枚の古い板と、真新しい釘のドアが付いていて、ドアの引き手や蝶番、赤い油絵の具の塗装は、それらがゴルガストかマンシュノーの出所であることに疑いを容れるものではなかった。築かれた竈の前には、そこには適度の柴の火が燃えていたが、まだ若い女性が、あく抜きや、陶器の準備に追われていて、時折ブロンド髪の子供に話しかけていた。子供は敷居のすぐ近くの餌袋に座っていた。煙突となっていたのは、暖炉の煙道で、手の幅二つ[八インチ]雪の屋根より高く突き出ていることを、レーヴィーンははっきり確認できた。開けられた家畜小屋には一頭の馬がいて、鉄の首輪をかたかた言わせていた。

「あれは水車屋クリーレの栗毛の馬だ」とシャルヴェンカは言った。

二人の若者はこうした見分の後、また葦の帯の外側の縁に戻って、ここで援軍の到着を待つことにした。左程待つことはなかった。ベルントとトゥーバルは、羊飼いの少年を従えて、すでにもう間近まで来ていて、その後すぐに五人皆が、狭い通路を通って行き、再び、レーヴィーンと若いシェルヴェンカが偵察を行っていた地点にまで来た。ひそひそ声で軍事戦略が練られ、トゥーバルとハンネ・ボーグンが女性に襲いかかり、フィッツェヴィッツ父子は、居酒屋の息子と共に、二枚の板と赤いドアで閉められた部屋に侵入する約束が出来た。

ならず者達は、夜の掠奪行で等閑にされていた眠りをまた取り戻すために、ここで休んでいるであろうことは大いに考えられた。この仮定がたとえ間違いであったと分かっても、少なくとも女性は取り押さえたわけで、この女性の助けを借りると、取り逃がしたかもしれない鳥をまた捕らえることは容易いことであった。

「一，二，三」と中庭へ向かって、跳躍がなされ、次の瞬間には女性が叫び声を上げて、一方ベルントとシャルヴェンカは、レーヴィーンが後に続いて（レーヴィーンは造作なく板とドアを取り外した)、煙と火酒の匂いの籠もった部屋の中へ侵入した。まぶしく照らし出す日中の明かりがすぐに一切を明るみに出した。壁際には、左右に、二台の松材のベッドがあって、それらは外の赤く塗られたドアのように、より良き日々があったことを偲

ばせていた。今は彼らは麦藁袋を布団代わりとしていて、その下には着たままの二人の男が、荒れた顔というよりもむしろ腫れぼったい顔をしてぐっすり眠っていた。

「起きろ」とベルントが怒鳴って、右の壁の方に寝ている男の胸に銃の床尾を置いた。

そう叫びかけられた男は、寝惚けて目を開けて、それから恐怖と奸計とで渋面に歪んだ表情をして、老フィッツェヴィッツを見つめた。彼は不意を突いた効果が十分と見てとると、銃をまた静かに肩にかけて、二人のならず者達に叫んだ。「支度しろ」。

同時に二人は両脚で立っていた。二人は中背で、四十がらみの男であった。一方の男は土地の風習に従って、厚いウールの日雇いの上着、もう一方の男はフランス人の制服を着ていた。両人とも足に木靴を履いていて、足からは長い麦藁茎が見えていた。彼らの身なりを上等にする時間の機会もなかった。テーブル代わりの小箱の上に壁ランプが弱くくすぶっていた。その隣には緑色のガラスの膨らみのある瓶が二本あって、籠の模様が刻まれていた。そして軍帽とフェルト帽があった。二人はそれを被って、まだ残りがあったと思われる瓶をポケットに収めて、それから行軍準備を示すかのように、一種の軍隊式ポーズで立った。ベルントは手を動かした。「進め」。

外では軍服姿の男が若いシャルヴェンカの側に寄って来て、半ば親しげに尋ねた。「どこへ行くのだろう」。

「絞首台」。

このならず者はにやりと笑った。「若シャルヴェンカ、そんなとこじゃあんめえ」。

「私を知っているのか」。

「存じておりやすとも。俺はグローセン・クレッシンのムッシュヴィッツ」。

「そう、そうかい。でもう一人は」。

「ポーデルツィヒのローゼントレーター」。

若いシャルヴェンカは頭を上げた、あたかも「そう言えばそうだ」と言おうとしているかに見えた。同時に彼らは中庭を通って、葦の間を行く狭い通路に向かった。

三十分後に、小さな縦隊は前もって約束していた落ち合う場所、ノイ・マンシュノーの分農場に達した。彼らは遅滞なく進んで来たクニーハーゼの部隊がすでに到着しているのを見つけた。語るべき事柄がすべて語られた後、クルルとレーツケが申し出て、フランクフルトまで行く捕虜の移送を引き受けた。この警備の増強は必要なかった。ムッシュヴィッツもローゼントレーターも冬の小屋を、凍えることのない、もっと快適な環境と取り替えることになり喜んでいるように見えたからである。女性の方は、これに関しては、この両者の男性のどちらに帰属しているか不明であったが、黙って、子供を中に入れた小さな櫓の箱を引いて、従っていた。

ホーエン・フィーツの人々は捕虜達の行軍と共に同時に退却を開始した。それもこちら側の岸辺にあるマンシュノーを通過して行くことになった。水車小屋を通り過ぎながら、彼らは老クリーレに、どこの家畜小屋で彼の栗毛の馬を再び見いだせるか伝えた。村長の事務局には、マンシュノーの人々が、島はこの人々の管区だから、小屋を捜索し、掘り返し、見つかるかもしれないすべての盗品をフランクフルトへ提出するよう命令が残された。

第十六章
グリーンランド人カヤルナクについて

二時には我らのホーエン・フィーツの人々は彼らの村に着いて、三十分後には誰もが、最後の飛び荘園に至るまで、ならず者達が見つかって、フランクフルトへ移送中であることを知っていた。やがて何人かが、カリースもキュメリッツも集まった居酒屋では、ムシュヴィッツことは、いつも怠け者、のらくら者であったと良く記憶されていて、どうしてフランス人兵士の制服が手にいれられたのか推測がなされ、推測は殺害に始まって、巧みな窃盗に移り、単純な交換、購入で収まった。交換、購入が最も有り得る話しであった。キュストリーンでは、毎日チフスが、フランス駐屯軍、部分的にはヘッセン人やヴェストファーレン人からなる駐屯軍を間伐していて、このような「闇商売」は大いに機会があったのである。ローゼントレーターについては誰も知らなかった。羊飼いの少年を称える声はどの人の唇にも見られた。

領主の館でもその話しで持ちきりであった。カティンカとショルレンマー叔母はすべてを微細な細部に至るまで知りたがった。そして下の居間でもはや話すことがなくなると、上のレナーテの病室で報告が続けられた。レーヴィーンは一時間ほど彼女のベッドの側に座って、順を追って、まず小森の捜索、それから衝撃、そして捕虜の移送を彼女の眼前に描いた。何も省略されなかった。特に彼は若いシャルヴェンカとの会話を取りだして、マリーネが不当であると言い、ハンネ・ボーグンの洞察力を称え、最後に葦の中州で一緒に掴まった女性から受けた自分の印象を語った。

かくて食卓時間となった。老フィッツェヴィッツは上機嫌であった。自分の「掠奪兵」と「逃亡兵」についての仮説が手痛い敗北を喫したことは面白くないことであったとしても、それでも普段には見られないやり方で、自分についてまた自分の見立ての失敗について、茶化して平気であった。彼は結局は自分が正しいであろうと知っていたからである。すべては単に時間の問題であった。

食事の後すぐにホーエン・ツィエーザルのドロッセルシュタイン伯爵の許まで乗り物で出掛けることになっていた。トゥーバルとカティンカは、いずれにせよ、訪問の義務があって、そもそも訪問するつもりならば、延期できなくなっていた。というのは翌日はすでにグーゼ城から両兄妹のベルリンへの帰還という予定になっていたからである。ポニーを連れて来たクリストがすでに、食事が終わったとき、階段の前で待っていた。数分後馬車は車寄せから村の通りへ曲がって行った。カティンカは、自分の諸情熱の一つに任せて、手綱を取って、御していた。彼らがミークライの水車小屋の所を通り過ぎるとき、レブースからのライスト博士[ドクトル]に出会った。博士は病気の女性の診察に誠実に往診してきたのであった。ただ手短な挨拶が交わされた。

ライスト老博士は、二十年前からホーエン・フィーツの領主の館に、自分の家同様に通じていて、イエーツェと二，三言葉を交わして、そしてその一日の大きな出来事を聞いた後、階段を登って、レナーテの部屋に入った。

ただマリーネだけが彼女の許にいた。寝室は、今は病室でもあったが、審理室と向かい合った側の棟にあって、単に何度か言及された古い連結建物の切妻壁で離れていた。この連結建物は以前祝宴のホールとして、後には礼拝堂として使われたものであるが、今では夙に以前の使命を、大きな果物部屋、物置というつましい使命と交換していた。廊下の先に狭いドアがあって、高い段の階段の助けで、この古い連結建物と結ばれていた。ライス

ト博士は病気の女性のベッドへ近寄って、脈を計り、それから、熱止めの薬を開きながら言った。

「ここに少し用意しています。老ライスト博士はクリスマスの叔父さんのようです。いつも何か用意しています」。

「クリスマスの叔父さんは甘いものを持って来るけど、ライスト博士の持って来るものは苦いわ」。

「そんなことはありませんよ、レナートヘン。老ライストのことをもっと良く知って欲しいですね。何が合うか承知しています。ドイツの諺も知っています。類は友を呼ぶ。このような可愛いお嬢さんのためには苦いものはありませんよ」。

「それでは酸っぱいの」。

「酸っぱくて甘い、二重レモネードです」。

「それは良い。いつもスプーンの薬は苦手なの。でも二重レモネード、いいかも。それで食養生はどうなのですか。お医者さん」。

「きついことは言いません。そうですね、ビスケットとか若干の蒸した果物」。

「新鮮な果物はやはり駄目ですか」。

「勿論新鮮な果物もいいです。しかし選ばなきゃ。例えば熟したグラーヴェンシュタイン林檎とかカルヴィレ林檎」。

「有り難いわ。それらはとても好きだから。それでお喋りすることも許されますか、マリーネと」。

「いいです、いいです」。

「あるいはショルレンマー叔母とも」。

「もっといいですね。思うに叔母さんは苛立たせるよりも鎮静させることでしょう。それがまさに必要なことです」。

そう言って、ライスト博士は辞去して、翌日また来ると約束した。

老医師が去るとすぐにレナーテはマリーネを呼び寄せる合図をした。

「踏み台を持って来て、私の許にお掛けなさい。ここ私のベッドのすぐ近くに。お医者様の許しが得られました。あなたの手を貸して。まあ涼しい感じ。落ち着いた夜を迎えられたらいいけど。でも眼前にイメージが浮かぶの」。

「熱のせいですよ」。

「そう、熱のせい。それで哀れなあの女性の姿が目から離れなくなって、苦しいの」。

「どの女性ですか」。

「今日の正午、隠場の葦の中州で見つかったあの女性よ。一言も荒い言葉を、嘆きの言葉を唇にしなかったとレーヴィーンは言っていました」。

「でもお嬢さん、盗みの女ですよ。誰の女かも分からない。クリストは私に言いましたよ、『あれは二人の男を持っているか、誰のものでもないかだ』と。どちらにしても、ひどいですよ」。

「でもあの女性には同情しているの。本当はそれほどひどいものではないと思う。だって、自分のことは考えてなくて、まず子供のことを考えたのでしょう。その子を小さな櫂の箱に入れて、一緒に運んだのよ。それでずっと長いフランクフルトのポプラ並木を思い浮かべるの。それは果てがなくて、遠い、遠い地平線上の一点に収斂するの。そしてポプ

ラの間をその女性が行き、子供が座っている櫂の箱を引くの。そして上がったり下がったりしてポプラ並木が終わったと見える点まで来ると、また新たな並木道が広がっていて、この並木道はもっと長くて、そして一点に収斂するの。その女性はますます草臥れて、疲れてしまう。これが苦しい。このイメージと縁を切りたいと思うわ」。

「クルルとレーツケは良い人達だから、運べない程のものは持たせないと思います」。

「百姓達でしょう。百姓達は頑固で聞かないから。若いシャルヴェンカが移送を引き受けてくれていたら良かったのに。あの人はきっと別で、話しが分かると思うの」。

「あの人が」とマリーネは尋ねた。

「そう、あの人。ただ名前を挙げたからといって、顔色を変える必要はないわ。彼はレーヴィーンと話して、窮状を訴えたのだって」。

「いつも私の悪口を言うのよ」。

「彼もあなたについてそう言っている。で、私の言うことを聞いて、マリーネ。頭を振らないの。いつだってお友達だったでしょう。だから助言を聞いて、我を通さないこと」。

しかしレナーテが更に話さないうちに、マリーネは頭を姫君のベッドの枕に当てて、激しくむせび泣き始めた。

「それであなたはその上泣こうとする。まあ泣きなさい。自分が悪いということと、頑固だからそれをただ認めたくないだけなのだということをまず白状しているようなものよ」。

「私の貧しさを非難したのだから」。

「いいえ、そうではありません。あなたの高慢さを非難したのです。彼の言う通りよ。彼があなた達クーバルケ家の娘達について言っていることは皆正しい。永遠に小馬鹿にして鼻に皺寄せて、貴人ぶっているわ、あなたと向こうの末のエーフェは。それが百姓達には気に入らないのよ。あなた達二人は都会の娘のようになりたいのでしょう」。

マリーネは頷いた。

「それで大都市で何を得るつもり。ちょっとのお化粧と、もっと多くの何人かの崇拝者でしょう。それでどんなことになるかしら。惨めな都会人よ。一等ラッパ長夫人か、集金人夫人ね。いいえ、マリーネ、ホーエン・フィーツに残りなさい。その方が幸せよ。シャルヴェンカ家は村で一番の金持ちなんだから。最悪とは言えない。それにあの人はあなたを愛していて、本当は離れたくても、あなたから離れられない。ほらね、これは私がいつも願っているような本当の恋よ、ある男に腹が立って殺したいけど、同時に憧れて死ぬほど接吻したいのはね」。

「レナーテお嬢様はよく分かっていらっしゃる。でもあの人がまず折れなくちゃ」。

「いいえ、まずあなたが折れなくてはいけません」。

マリーネは溜め息を付いた。しかしその後突然レナーテの手に接吻を浴びせて、重荷が取れたかのように、深呼吸をして、言った。「また心が軽くなったわ。お嬢様、お嬢様、あの人はこの世で最良の人です。何でも我慢するわけではないというのはあの人の素敵な所ですよね。男は男でなくちゃいけない。あの人を指に巻き付けるのは造作ないことなんだから」。

七時になった。マリーネは起き上がって、病人に薬を与えた。

「ライスト博士の言う通り。二重レモネードの味がする。それでは二，三個カルヴィレ

林檎を取ってきて。ここ斜め下の古いホールから。でも蠟燭台を持って、階段では用心してね。段が摩滅しているから。そして豆幹で足を取られないように」。

マリーネは宙を見つめた。それから当惑して言った、「林檎はむしろ食物棚から取って来ましょう。昔のホールからではなくて」。

「でもどうしてそんな遠くから。ここ壁と壁の接している所じゃない。二，三階段を下って行けば、すぐ下よ。カルヴィレ林檎は祭壇の左手にある」。

「行けないのです、レナーテお嬢様」。

「どうしたの」。

「恐いのです」。

「何故」。

「彼がまた祈りを上げている」。

「誰が」。

「老マティアス」。

レナーテは一瞬両目を閉じた。それから平静を装って言った。「私は見たことがないの。あなたは信じているの」。

「私には分からない。ただ老いた草取り女のルーシェンがいつもこう言っていたのです。『霊を信じない者には現れる』と」。

「それで誰が見たの」。

「夜警人のパハリー」。

「いつ」。

「昨夜」。

「聞いたことを教えて」。

「言いたくありません。レナーテお嬢様が驚いて、病気が進んでしまう」。

「いや、そうはならない。知りたいの」。

「それではお話ししましょう。つまりクリストとパハリーが夜警をしたのです。イエーツェも来ました。私が十時になって家に帰って来たとき、イエーツェに会いました。居酒屋はつまらなくなって、踊りたくなかった。恵み深いお嬢様は何故私が踊りたくなかったかはもう御存じでしょう。でもあの人も踊りはしなかったと言っておかなくてはなりません」。

レナーテは頷いた。一方マリーネは若き姫君の手に接吻して、それから続けた。

「イエーツェはクリストのグレーの外套を着ていて、古いサーベルをその上に革紐で縛っていました。吹き出したくなったわ。旦那様はイエーツェを見て、立腹されて、仰有いました。『これはおまえさんの仕事ではない、イエーツェ。昔のおまえさんの仕事だ』と。それから旦那様は、クリストとパハリーに歩み寄って、いつも家の近くにいるようにとお命じになりました。『クリスト、おまえは公園の側を、パハリー、貴公は村の側を受け持ちなさい。古いホールの大きな中央窓の所で落ち合うのだ。いつでも呼べば会えるようにするのだぞ』と。この自分の耳で聞いたことすべてがまだ残っています。でもパハリーから別のことを聞いたのです」。

「それで」。

「そのようにしておよそ二時間二人は歩きました。全く静かでした。まだ何もそのこと

を知らない居酒屋からのみ音楽が聞こえて来ました。そこで寒くなって来たクリストは、庭の木戸に入って、火を起こし、温かい煙草を詰めようとしました。そのことで初めて、大きな中央窓の所で互いに出会えなかったのです。パハリーは長い連結建物を一人で通らざるを得なくなりました。パハリーが最後の窓の所に来たとき、明かりをみたのです。もっと近寄って、背伸びしました。すると古い像が照らし出されていて、祭壇の前で誰か跪いて、祈りを上げているのを見たのです。でもパハリーは声を上げて呼ばなかった。そのときクリストが近寄って来ました。パハリーは彼に合図をして、クリストもまだ明かりを見ました。しかしたった今までパハリーが立っていた箇所にクリストが立とうとしたとき、すべてが消えました。そしてまた暗くなった。二人はただ足音と階段の前の麦藁の中できしむ音を耳にしたのです」。

レナーテは身を乗り出していた。彼女が側に臥せっていた壁は切妻壁で、その向かい側にはただ階段を一つ降りた所に昔の祭壇があった。心の底からの不安に彼女は襲われた。マリーネでは与えることのできない慰めの言葉の必要を感じた。そこで彼女は言った。「ショルレンマー叔母さんを呼んで」。

マリーネは行った。しかし丁度マリーネがドアを開けようとしたとき、レナーテは呼びかけた。

「駄目、残って」。そしてまた自分の恐怖を恥じて、付け加えた。「いいえ、行っていいわ。自分で落ち着くようにするから」。

数分経った。ただぼんやり照らし出された部屋の中では影があちこち揺れた。彼女の高熱の目は、この踊りを追って、最後に部屋の別な壁に掛かっている一連の絵画に止まった。それらはイギリス製の色刷りの絵で、その中の一つはゴシック式の玄関を表現していて、その玄関には吊りランプが掛かっていて、その玄関を通じて一つの祭壇が見えていた。すべては立派な遠近法で、祭壇は一つの点になっていた。祭壇は見えなかったがが、しかしただ祭壇がそこにあることは彼女には分かっていた。すると今や彼女の目の前でこの玄関が大きくなり、祭壇が大きくなって、祭壇の段の前で誰かが跪いていた。彼女の心臓は高鳴った。それでも彼女はその絵から離れられなかった。

すると外で足音がした。すぐその後、ショルレンマー叔母が入って来た。まだ作業エプロンを着ていて、彼女が竈か台所から呼ばれたばかりという確かな証拠となっていた。マリーネは幽霊の話しをして良心が咎めていたのか、引き下がっていた。

「ショルレンマーさん、来て頂いて有り難う。あなたにとても会いたかったのです。少しばかりお喋りして下さい。でもあなたの手を触らせて。そう。　ー　そして飲み物を下さい」。

「まあ、熱があるわね。あなたを三十分も一人にしておけないわね。兎に脂身を差し込まなければならなくてね。シュティーネには任せておけません。あれで料理人と言うのだから。兎には七つ皮があることも知らないの。まあ、飲みなさい、レナートヘン。一スプーンのラズベリーを加えましょう。冷えますよ。もう服用はしたの」。

レナーテはショルレンマーが渡したグラスを空にした。それからぐったりして、枕に沈み込んだ。しかしそれまで襲われていた不安は消え去っていた。そしてあたかも良き精霊の庇護の下にあるかのように、平静に言った。「あなたは幽霊を信じていますか」。

「そんなことと思った。マリーネがまた噂話を止めることが出来なかったのですね。台

所では一日中そのことが話されています。誰も似たり寄ったりですね。パハリーだけはもっとしっかりしていると思っていたのに。ウーレンホルスト聖職候補生の信徒ですからね。古いルター主義者の良い所は、このような弱点や馬鹿なことを見せようとしないことなのですがね。彼らはまさに信仰を持っていて、信仰があると迷信は生じません」。

「ショレレンマー叔母さん」とレナーテは言った、「あなたは良い人だけど、でもやはり小さな欠点がありますよ。あなたに合わないことはすべて、あなたにとって存在しないものになります。たとえそれが存在するとしても、あなたは立派な格言でそれを片付けることが出来ると思っています」。

「そうね、レナートヘン、私はそうしているかもしれない。立派な格言があれば、大いに片付けられます。神とイエス・クリストを信ずる者は、幽霊を恐れないのです」。

「話しを逸らさないでね。私は誰が幽霊を恐れ、誰が恐れないか聞いているのではないのです。私はただ知りたいのです、幽霊がいるのかどうか」。

「いません」。

「でもあなたはここ私どもと一緒に暮らしているでしょう。私どもは何百年も、多くの古い家同様に、家の幽霊を有しています。少なくとも人々はそう語っています。レーヴィーンは人々は正しいと確信しています。あなたは微笑を浮かべるけど、いいでしょう。これは大したことではない。でも父上は信じておられます。あなたは父上の信心が固いことは私より良く御存じでしょう。クリストのヴィルヘルムの事件から六週間経っていないのです。そしてパハリーが。あの人は分別ある男性です。私はあなたが『否』と仰有ることに、『然り』とは言いません。でも少なくとも可能性を否認したくないのです」。

「私は否認します。欺瞞や詐欺でなければ、幽霊は錯覚です。死んだ人は死んでいます」。

「ちょっと話していいですか。私は一度ある本の中で、こう書いてあるのを読んだことがあります。何も没落しない、ある日すべてのものが、大世界も小世界も、人間や動物、それに所謂生命のない事物も再生するのである、と。だからそうなったら、あなたやマリーネを再び見るばかりでなく、ヘクトーも、向こうの壁に掛かっているゴシック式の玄関と祭壇のあるイギリス製の色刷りも再び見ることになりましょう。こうした浄火を経た世界、かつて存在したものすべてのこうした神々しい鏡像は至福のものとなりましょう。それは私がこうしたことすべてを見いだした敬虔な本でした。これほど印象深い本を読んだことはありません。そこでお尋ねしますが、幽霊というものは、この神々しい世界の先触れの使者に他ならないのではないでしょうか」。

「申しているように、死んだ人は死んでいるのです。やがて生ずる神々しい世界はまさにこの世とは違います。その世界は私どもを待っています。しかしここで待ってはいません。現世の中ではありません。ただ一人の方が、再び人間達の下に現れています。エマオへの途上にあった人です[ルカ、24,13]。でもこの方は主キリストで、全能の神の息子です。いい、レナートヘン、幽霊はただある決まった所にだけ現れるのは理由があるに違いないのです。ホーエン・フィーツには幽霊がいます。ヘルンフート派ではいません。ヘルンフート派が北極や南極で小屋や家を建てても、いません。少なくともこれらの小屋や家の中にはいません。そのように私は自ら経験して来ました。グリーンランドでは、私どもの周囲で、恐らく数百のお化けを有するグリーンランド人が、その幽霊を静かに見続けて来ました。しかし私どもの伝道の家では、一つの幽霊も現れなかったのです。ヘルンフー

ト派とお化け、これは合いません。レナートヘン、こんな言い方は格言風ですが、それをあなたは、私が自惚れて、格言ですべて邪悪なものをこの世から片付けると仰有いますよね」。

「気にしないで、ショルレンメルヘン。気にしない印に、何かグリーンランド人について話して下さい。あなたはもう六年ホーエン・フィーツにいらっしゃいますが、あなたがかくも長く生活し、創造し、愛するものを埋葬した土地が何と言うのか私はほとんど知りません。それについて語って下さい。グリーンランドの幽霊は結構ですから。私どものホーエン・フィーツの許でうんざりするほど幽霊は聞いています。何か静かなこと、快活なこと、何か敬虔なことを、昂揚させ、天上の冷気のように私に吹きかけることを話して下さい。涼しさを求めています。でもまず薬を下さい。八時を過ぎているに違いないから」。

ショルレンマー叔母は言われたようにした。それから自分の手仕事のためにレナーテの編み道具を探しながら、すべてが見つかって、準備ができたとき、高い背もたれ椅子に腰掛けて、言った。「では何で始めましょうか」。

「勿論最初から。それでは国土そのものから。私は一度絵を見たことがあります。岩と川と氷山と雪でした。川辺にはオットセイがいて、その隣の突出部に白い狐がいて、岩の端には太って短い脚の鳥が蹲っていました。ペンギンと言ったと思います」。

「全くその通りではないけど、まあいいでしょう。あなたのイメージを改善することは諦めています」。

「改善してください。私はお喋りしたいだけではなく、学びたいのです」。

「それではいいでしょう。果てしのない沿海部を考えて下さい。数百マイルの長さですが、ただ数百歩の幅しかありません。この帯の前に海が広がっていて、千もの島々の斑点が見られます。この帯の奥に山岳があって、これが斜めに破裂して割れ目が入っています。これらの峡谷から河川が海に注いでいます」。

「見てみたいわ」。

「このような峡谷の一つに私どもの植民地もありました。ありましたと申しますが、そこはまだありますし、神の御意志で幾日もあり続けることでしょう。そしてこの植民地はノイ[新]・ヘルンフートと言いました。私の時代には二十軒の家がありました」。

「少ないですね」。

「少ないけど多い。でもあなたがこれらの家々を見たら、まずどんなに驚くことでしょう。レーヴィーンが今日の午前、葦の中州の雪の中に建てられた木造の小屋を描写してくれたとき、私はかつて十年間至福に過ごした家を突然思い出しました。同じように三つの部分に分かれていて、家畜小屋に部屋、その間に台所がありました。何を所有していたでしょうか。一つのベッドに一つの長持。その上には二，三の木釘と着物掛けがあって、それらに私どものつましい物を掛けていました。テーブルの上にはランプがあって、この横に神の言葉[聖書]がありました。これは勿論葦の中州では欠けていたことでしょうが、これが私どもの最良のもので、困窮と危険の中での唯一の慰めでした」。

「危険もあったの」。

「人々に対してではありません、あるいはほんの稀にです。グリーンランド人は穏やかな、静かな、礼儀正しい民ですし、自分達の情熱を抑える術を心得ています」。

「グリーンランド人は小人で、迷信深く、ホッペンマリーケンのように見えると思って

いました」。

「それは半分だけ当たっています。でも他の半分は違います。ホッペンマリーケンは粗野ですが、グリーンランド人は洗練されています。喧嘩と諍いは聞いたことがありません。彼らの言葉には罵りの言葉や叱る言葉が欠けています。侮辱に対しては、機知や嘲笑でお返しをして、この機知劇に出るよう原告は被告人に対し決闘のように要請し、そして大方の笑いを自分の側に取った者が勝利者となるのでした。そもそもグリーンランド人には自らを軽快に愛らしく表現する才能が付与されています。もてなし上手で、社交好きで、冬至の時には、ダンスや球戯、太鼓の伴奏付きの歌曲もあります。ちなみに彼らは自分達の立派な作法を自覚していて、異国人を褒めようとするとき、『我々のように礼儀正しい』と言います」。

「それでは彼らの自負心によってあなた方はしばしば難しい抵抗を受けたことでしょう。ザイデントプフ牧師が、私どもがまだ授業を受けていたとき、マリーと私にこう言われたのを思い出しますから。『素朴なセンスの者、偉大なセンスの者は、同じようにキリスト教の啓示を受け入れるが、自惚れのセンスの者は、頑強に抵抗する』と」。

「それはまことに正しい言葉ですね。その命題の真実を私どもの植民地では幾日も味わわなければならなかったのですから。今日は一ツォルの幅、獲得したと思っても、明日はまたアンゲコク達のせいで失ったものです」。

「アンゲコク達のせいで」。

「そうです。つまりアンゲコクというのは、予言者や魔術者で、大方は策謀的詐欺師です。でもこの人々の中に、幻視を有して、それを少なくとも自慢する陶酔者が見られます。彼らは、両方の偉大な精霊との往来を仲介する者で、良き精霊を呼び寄せ、悪しき精霊を追放するのです。ちなみにこれらの精霊の中で良き精霊は男性で、悪しき精霊は女性なのです」。

「あらあら。でもそれでは女性に対する優しさに欠けますよね。罵りの言葉や叱る言葉さえ有しないグリーンランド人のような洗練された人々というのに、驚いてしまうわ」。

「レナートヘン、そうなんです。私ども女性は辛抱して受け入れなければなりません。いつでも誘惑して、楽園から追放するのは、イヴですからね。でもアンゲコクの話しでした。彼らは生来の明察を利用して、私どもに抵抗して来ました。すでに私どもの主にして救世主が経験しなければならなかった幾多の嘲笑が、私どもにも欠けることがなかったのです。謙虚に主に対し帰依していた私どもにも。でも神は私どもの窮状を哀れに思われて、そこでカヤルナクの話しになるのです。この話しを、あなたがまだ辛抱できるなら、語って見ようと思います」。

「カヤルナクて何」。

「名前です。南方のグリーンランド人の名前です。南方と北方のグリーンランド人がいて、すべての半遊牧民の流儀で、国中あるときはこちら、あるときはあちらという具合にテントを張って、ある期間過ぎたら、昔の居住地に戻るのです。そのようにして、このような猟の一行、遍歴の一行として、南方の部隊が私どもの植民地に来て、一日あるいは一週間私どもの許で休んだのです。百人かそれ以上だったでしょうか。私どもは歓迎をし、当時植民地の首長で、フリードリヒ・ベーニッシュと私の夫のショルレンマーが助手を務めていたマテウス・シュタッハが、彼らが私どもの伝道の授業に参加する気持ちがあるか

問い合わせました。ひょっとしたらあなたは驚くかもしれません。でも彼らは、殊の外、弁論を好み、彼らの有する機知の力を借りて、自らの卓越性を誇る嗜好があることを念頭に置かなければなりません。実際多くの人々が来ました。私どもも着席していました。マテウス・シュタッハは福音書のヨハネの章から読み上げました。彼がその直前にグリーンランド語に翻訳していたのです。彼らは注意深く傾聴していました。大方は微笑していました。しかし何人かはそれでも関心を示しました。この人々に今度は私どもの同志は、面と向かって、不滅の魂を信ずるか尋ねたのです」。

「カヤルナクの話しはどうなったの」。

「今その話しの最中です。つまりマテウス・シュタッハは彼らに不滅の魂のことを信ずるか尋ねました。彼らは答えました、『はい』と。そこで彼は堕落と救済について話し始めました。私の耳にはまだ彼の声が残っています。彼は格別の才能の男でしたから。すると主は彼らの中の一人の心を開かれたのでした。私が耳にし、読んで来た多くの啓発の中で、かつてこれほど深く私の心を捉えたものはなかったのです。すべてが平明で、簡潔であったから、出来たのでしょう。自分の言葉が良き大地に蒔かれたのを見てとったマテウス・シュタッハはますます感銘深く話し、彼がまさにオリーブの山でのキリストの受難を描写したとき、一人のグリーンランド人がテーブルに来て、声高な感動した声で言いました。その震えた声にはすでに救済が感じられました。『何という出来事でしょう。今一度聞きたいものです』。この言葉は一緒に聞いていた私どもの全身に伝わって、ノイ・ヘルンフートでは忘れ難く残ることになりました。この時から神の祝福が私どもの行為に恵まれたのです」。

「そうだったでしょうね。そのような言葉は忘れるものではありません。この瞬間にもその効果を私は感じますから」。

ショルレンマー叔母はレナーテの額に接吻をして、それから続けた。「一週間が過ぎました。グリーンランドの部隊は相変わらず私どもの植民地に残っていました。しかしそれから旅立って、更に北方での猟をするために出発しました。ただカヤルナクだけが残りました。彼と共に、二人の義兄弟とその妻子が全員、合わせて十四人が残りました。私どもは彼らの滞在を称えて、一緒に祈りの時を持ちました。子供達は授業を受けました。これはとても難しいことでした。グリーンランド人は私どもが教育と呼んでいるものを全く知らなかったのですから。つまり彼らは子供達を猿のように可愛がって、従順に躾けたり、不従順を罰したりせずに、ただ育てているのです。半年過ぎた時、マテウス・シュタッハはこのように準備の出来た者達に洗礼を授けていい時になったか、尋ねました。しかし授業を担当していた私の夫のショルレンマーは、もう少し待つのがふさわしく思えると答えました。そのようになりました。復活祭の第二の祝日の時に、このグリーンランド人の最初の家庭の四人の縁者が闇の世界の威力から解放されることになりました。カヤルナクはサムエルの名前を貰い、彼の妻はアンナ、彼の息子はマテウス、彼の娘はアウナと名付けられました。このことは植民地では大きな喜びとなりました。しかしその喜びは長く続く運命ではなかった。四週間後に、しばらく私どもから離れていて、北方への猟の一行に加わった年上の義兄が策謀的残忍な方法で殺害されたこと、それは彼が異教徒のまま残っていた或るグリーンランド人の息子をキリスト教の言葉で誑かせて死なせたからだという知らせが届いたのです。同時にこう付け加えられました。アングコク達は、カヤルナクの義

弟にも同じ運命を用意するという大きな陰謀を企んでいる、と。すると私どもの小さなグリーンランド人の教区民は、洗礼を受けた者達も、まだその準備中にある者達も、震えて臆することになり、より安全であると思える自分達の縁者のいる南方へ帰還する決心をしました。私どもにはとても辛いことに思えたけれども、彼らが移って行くのを見守るしかなかったのです。そして私はまだカヤルナクの姿を覚えています。彼が激しく泣いた様を、そして再三私どもに信仰の固さを誓って、それから身を離した様を、そして橇が長い線を描いて私どもの側を通り過ぎて、フィスケネスやフレゼリクスホープを越えて南方へ向かった様を」。

「それで彼は約束を守ったの」。

「私どもは余り期待していなかった。人々の気持ちに新たな離反が生じていましたから。私どもの近くに留まっていた者達でさえ、またアングコク達の言いなりになりました。私どもは暗い気持ちになりました。私もです。私はか弱い力を尽くして、ずっと私の夫のショルレンマーを誠実に支えて来たのですけれども。一年が過ぎて、カヤルナクからの知らせはなく、彼自身の姿が見えることなどなかった。そして聖ヨハネの日[六月二十四日、夏至]、アンナ・シュタッハとフリードリヒ・ベーニッシュの結婚式を祝うことになって、食事となり、賛美歌を歌っていたとき、この歌は、ひょっとしたらあなたは驚くかもしれませんが、三人のヴァイオリンと一人のフルートの奏者の伴奏が付くものだったのですが、この同志の広間にカヤルナクが出現し、私どもに挨拶をしたのです。その喜びはとても大きくて、自ずと結婚式祝宴は再会の祝典となりました。私どもは実際放蕩息子[ルカ、15,11. 失われた息子]を再び得たのです、だって私どもはすでにそのような失われた息子と見なしていたわけですから。さてカヤルナクは、自分の縁者が彼をどう受け入れたか、大小こもごも話さざるを得ず、何も隠さずに私どもに語りました。彼らは彼の言うことを最初はしばしば、明らかに満足して耳を傾けていたそうです。しかし彼らは彼の言葉に飽きが来てしまって、そこで彼は静かな場所に赴き、一人で自分の教化を行ったそうです。最後にまた私どもの所、同志の許に来たいという思いが次第次第に募って、とうとう憧れは止み、収まることがなくなって、そこでやって来たと語りました。彼を本来立派に救済へと導いた私の夫のショルレンマーは、喜びの余り泣いて、フリードリヒ・ベーニッシュは言いました。これは自分にとって忘れ難い時だ、自分の晴れの日は、今や二重の神聖さを有する、と」。

「そう言って良かったでしょうね。誰もが願いたい結婚式の日となりましたね。この再会は喜ばしい前兆の印だったように思えます」。

「実際そうでした。若い二人は幸せになりました。カヤルナクもそうでした。しかし彼の命数は定まっていました。彼は自分の誠実さの限りを尽くして、(蒲柳の質だったのに)、熱意が度を過ごしたのだと私は固く思っています。かくて彼は激しい肺の痛み、脇腹の痛みに襲われて、速やかに彼の命は奪われてしまいました。この上ない痛みの中で彼は落ち着いた人柄を見せました。彼の縁者が、彼のことを泣き始めたとき、彼は言いました。『悲しむことはない。おまえ達の中で私が神の息子に帰依した最初の者だということをおまえ達は知っていよう。主の許に行くのは、私が最初になるということが主の意志だ。おまえ達が主に忠実であれば、我々は再会するであろう。そして主が我々になし給うた恩寵を永遠に喜ぶことにしよう』と。その後彼は眠りに就きました。私どもは祈って、彼の身罷る

魂を憐れみ給う主に委ねました。彼の妻は、彼が土地の風習に従ってではなく、キリスト教のやり方で埋葬されることを強く求めました。そこでそのようになされました。同志や縁者ばかりでなく、植民地の商人達も彼の葬儀に参列しました。私どもの新しい墓地はこの葬儀で清祓されたのです。グリーンランド人は彼らが見たことすべてに驚きました。しかし私ども同志にとってこの死は深い悲しみを与えるものでした。彼を失ったのはとても痛手でしたから。福音の啓発された、才能のある、祝福された証人を失ったのです。

これが最初に洗礼を受けた者、カヤルナクについての私のお話しです」。

レナーテは老いた女友達の手を握って、言った。「ショルレンマーさん、とても感謝申し上げます。すべての恐怖が消え去ったかのようです。お化けや幽霊の話しなど聞かなかったような思いがします。それでは眠ることにしましょう。でも更に十四人の天使の呪文を称えて下さい。一緒に称えましょう。

夕方ベッドに入るとき、
十四人の天使が側にいる。
二人が頭部に、
二人が足許に、
二人が私の右脇に、
二人が私の左脇にいて、
二人が私を被い、
二人が私を伸ばし、
二人が早速私を
天国に導き入れる」。

二人はしばらく黙っていた。それからレナーテが言った。「それでは行って下さい。安心致しました。ただ脇のドアだけは開けておいて、私の声がマリーネに届くように」。

「お休み、レナートヘン」。

「お休み、ショルレンマーさん」。

第十七章
大鴉の巣

翌日は大晦日であった。

まだ早朝もうホッペンマリーケンは出発した。出来れば正午までにまた戻って来て、すべてを洗い上げ、飾るためで、また大晦日のポンスの準備も出来るようにするためであった。彼女は今日は短い旅をして、キュストリーンを目指していた。彼女が領主の館を通り掛かって、中庭越しにイエーツェと挨拶したとき、ようやく七時となっていた。イエーツェは大きな角の窓にある両方の側への閉まった鎧戸を開けていた。彼女の挨拶の屈託のなさから、二人のならず者の捕縛について、多分彼女にも大いに関心があったろうこの捕縛について、知らされてないことが分かった。ようやく真夜中に、湿地[ブルフ]を抜けて、前日旅から住居に戻って来たとき、普段は夜を日中に変えることを好んだ森耕地の人々の

許にいながら、もはや起きている人とは誰とも出会わず、彼女が起きたとき、多分ホーエン・フィーツ全体で前日の出来事について何も知らない唯一の人間だったのである。

ようやく二時間後に領主の館の主人と客人達は、朝食の食卓に集まって来た。ベルントも、仕事がないときは、早起きではなく、午後の四時以前には組み込まれていなかったグーゼへの出発があるといっても、夙に一種の家風となっていた習慣を変えることにならなかった。

ショルレンマー叔母は、レナーテの許に引き留められていて、更に若干遅れて現れ、病人の具合についての問い合わせに答えていた。

更にライスト博士の安心できる言葉も伝えられた後で、会話はそれから、前日の夕方、ホーエン・ツィエーザルへとなされた訪問に及んだ。その個々の経過は次第に活発になって行くお喋りがあちこち飛ぶ中で今一度体験されることになった。すべてのことから明らかになったのは、ドロッセルシュタインはホストとして極めて愛想が良くて、ベルントを大いに歓迎し、カティンカに対して細かい気配りを見せたということであった。初めてホーエン・ツィエーザルに伺ったカティンカが、他のマルク地方にはどこにも見られない城郭の立派さに驚きを表明すると、伯爵は遅い時間になっていることは構わず、他の客人共々彼女を二階の長い部屋の並びを通じて、つまり先祖のホール、武器の部屋、絵画陳列室を通じて案内する労を取ったのである。二人の従者が腕木燭台を持って先導した。この半ば陰鬱な照明の下では、日中の明るい光の許では無視して通り過ぎてしまうようなすべてが、一種貴重さの影を帯びて、半ば閉ざされた面鎧の脇に立っている騎士達とか、十字に置かれた槍、それに「何故我らの静寂を乱すのか」と尋ねているように見える先祖の肖像画そのものが、カティンカに過たず深い印象を与えたのであった。とりわけ一人の青春時の女性の肖像画、彼女に伯爵から自分の家の近い親戚のヴァンゲリーネ・フォン・ブルクスドルフの肖像画として紹介されたものが、彼女の記憶に残っていた。

このヴァン・ダイク［van Dyck（1599-1641）］派のオランダ人に由来する肖像画について、その不気味に明るい青色の目はすでにホーエン・ツィエーザルへの幾人かの以前の訪問者の夢にまで出現したことのあるものであるが、カティンカの質問に対する昨夜の単に手短な答えがまた蒸し返されて、そしてベルントが、彼は一帯のすべての城の歴史や家系の歴史の真の生き字引であって、「ヴァンゲリーネ」についての詳しい説明で美しい質問の女性の好奇心に応えようとしていたとき、つまり多くのマルク地方の研究者によって「白い女性」の歴史的に確かな原初とされる「ヴァンゲリーネ」のことなのであるが、そのときドアがノックされて始まったばかりの会話が中断された。かなり年輩の男、乏しい、後へ梳った髪の男が入って来た。籐の杖とそれ以上に、長くて青い上着は、胸の一つの金属の紋章と共に廷吏であると特徴付けていたが､老フィッツェヴィッツに一通の手紙を渡して、再び数歩戻って、ドアの近くにまで下がった。すべては昔の兵士であると明示していた。ベルントは書類を開封して、読んだ。「尊敬する貴台にして朋友。取り急ぎ、最初の尋問の結果をお知らせします。昨日の午後、貴方の捜査によって発見され、引き渡された泥棒の一味に対してなされた尋問です。二人のならず者達、彼らに関しては、ホーエン・クレッシンとポーデルツィヒが出生の地の栄誉を分かつものでありますが、どのように縦横に尋問しても要領を得ません。しかし女性の方は、これはこの両者に最近ようやく合流しており、自らの科というよりむしろ他人の科によって葦の中州の一味に加わったもので、概

略白状致しました。これはともかく大方のキュストリーンの郊外の町が行われた窃盗に関するものであり、それから更にこの行為を支援して故買に関するものです。最も重大な罪を被る者は我らの旧知のホッペンマリーケンです。ホッペンマリーケンの家宅捜査を指令なさるか、自ら指揮を執られるよう、貴方に依頼します。また差し当たり疑いの濃いホッペンマリーケンの格別のずる賢さを顧慮して、その家の床や壁にご注意下さるよう願います。盗まれた財宝の提供が、この発見は疑い得ないものに思えますので、速やかになされることを期待しています。この罪人の女性に関しては、法の完全な厳格さを適用することが要求されるのか、それとも彼女の精神発達状態を考慮して、大目に見るべきなのか、この点についてはいずれ貴方からの御返事をお待ちしています。

トゥルガニー」。

ベルントは半ば声にして読んだ手紙を自分の前に置いて、それから老廷吏に向かって言った。「リュッセルマンさん、法律顧問官によろしく伝えて下さい。彼の指示通りに致す所存である、と」。それから呼び鈴を引いた。「イエーツェ、間食の準備をして差し上げなさい。フランクフルトまでは遠い。この老公は私とおまえさんとの間くらいだろう。そうじゃないかな、リュッセルマン、六十歳」。老人は頷いた。「それからクリストをクニーハーゼ村長に送って、夜警人のパハリーを呼び寄せて貰おう。そして森耕地で私を待って貰おう」。

「レナーテは嘆いているが」と老フィッツェヴィッツは、イエーツェとリュッセルマンが部屋を退出すると、続けた、「ホーエン・フィーツは日々が退屈だと。カティンカ、あなたがこちらに来てから、我々は冒険の国に暮らしているようなものだと、そう自ら思わないかい。まず公道での泥棒の襲撃があった。それから我々の自宅への侵入。それから戦略的戦術的作戦を保った本格的泥棒捜査、そして今や小人の女性の管区の家宅捜査だ。一　三日間でもっと多くのことが予想されるような平和な地がこの世にあるものだろうか。ちなみに、葦の中州の女性の陳述が果たして本当かどうか、興味が湧いてきたぞ」。

「私は確信しています」とレーヴィーンは述べた、「ハンネ・ボーグンが昨日述べたすべての点から見て、更には彼が私に対して口を噤んだ点からもっと視て、トゥルガニーが今書いていること以外のことはほとんど期待し得ません。いつ森耕地に出掛けるつもりですか」。

「すぐにか、あるいはもう直にだ。午前を逃してはならない」。

「一緒に行っていいですか」。

「いいとも。証人は多いほどいい。いずれにせよ老魔女のずる賢さには十分な目が必要だ」。

かくて人々は別れた。ベルントはカティンカの許で二，三言葉を添えて離れた。カティンカは今や階段を上がって行き、レナーテと一緒に奇妙に錯綜する話題、ドロッセルシュタイン伯爵、老リュッセルマン、ヴァンゲリーネ・フォン・ブルクスドルフ、そしてホッペンマリーケンについてお喋りすることにした。

十五分後老フィッツェヴィッツは出発した。トゥーバルとレーヴィーンがお伴していた。彼らは速やかに行った。ミークライの水車小屋に達する前に、彼らはすでに出掛けていた村長クニーハーゼとパハリーに追い付いて、彼らと一緒に森耕地へと曲がって行った。そ

の後すぐホッペンマリーケンの家の前に立つことになった。人々はその前すでに、全く本格的に行うこと、つまり台所の玄関に始まって、部屋で終えることにし、いずれにせよ拙速を避けようと打ち合わせていた。

ドアは留め金で閉められていただけであった。ドアが開けられ、丸太が置かれて、入って来る日光の力で隅々まで覗くことが出来るようにされた。床の石のように固い粘土の玄関の間は何も隠せそうになかった。それで竈と竈の向かい側の暖炉が残っていて、ここから部屋の暖房がなされていた。しかし火の間近では、この場に隠すことは有り得ないことに思われた。同様に内側へ置かれている敷居の石も、この奇妙な位置のせいで、いかがわしく思えたけれども、余りに大きくて重かった。レーヴィーンとクニーハーゼが力を尽くしてみたが、石をこの場から動かすことはできなかった。

従って台所には何もなかった。かくて人々は部屋に入った。すでに鳥籠の中の大きな鳥達が前面の止まり木に止まっていて、見知らぬ訪問者を眺めていた。訪問者は今や仕事を分担し始めた。パハリーは、赤と白のチェックの掛け布団を裏返して、手で枕の中を探し、それから麦藁袋の中を探した。一方ベルントは周囲の壁を、トゥーバルは比較的高い暖炉の基底部のタイルを叩いた。どこにも何もなかった。開けられたままの食器台、箪笥の引き出し、机の引き出しを覗いても甲斐はなかった。新しく磨かれた床は一枚板で窓から壁まで達していた。どこにも切れ目とか他に不審な箇所はなかった。かくて付属室が残った。

付属室は、暗い窓のないアルコーヴで、七フィート[二メートル強]の正方形をわずかに越えるものでしかなかった。それ故五人がその中で回転し、動くことはほとんど不可能で、それ故ベルントとクニーハーゼは玄関のドアの前に立ち、いずれにせよ両人は過度に暖房された部屋の窒息性の空気に嫌気が差していて、その二人に、数分遅れてレーヴィーンが続いた。レーヴィーンは一羽の黒い、胸元に赤い斑点のある鳥と馴染みになろうとして出来ないでいた。

ただトゥーバルとパハリーだけがなお付属室にいた。二人は明かりを点火して、ここでも粘土の壁を叩き始めた。四つあるいは五つの太い木釘に薬草の束が掛かっている一方の側では、これは難しかった。しかし出来た。勿論玄関や部屋よりもましな結果は生じなかった。

「シャルヴェンカの羊飼いの少年を連れて来ようか」とトゥーバルは言った、「あれは一番良い目をしている」。

「その必要はない」とパハリーは言った、「奴は評判と約束された毛皮の帽子でもう舞い上がっている。わしはあの少年を知っている。他の者達よりよく分かるわけではない。ただ事情によく通じているのだ。あの少年自身森耕地の出身で、ならず者どもが通るすべての抜け道や脇道を知っているのだ」。

「そうかもしれない。しかしどこをまだ探したものだろう。壁には空洞はない。床には釘が打たれている。このアルコーヴ全体、中にはこの赤く塗られた箪笥しかないし、二つの引き出しは空だ。ここの我らの上の天井には何も隠されていないだろう。ホッペンマリーケンは小人で、その手では五フィートには届かない」。

「天井にはないよ、若旦那。しかしここの箪笥の周りには何かあるに違いない。ホッペンマリーケンのような類いは見栄っ張りで、化粧し、すべての人々に自分の持ち物を見せたがるものだ。何故箪笥を小暗い付属室に老いたのか、誰も見ない所に。これは何か曰く

がある」。

「それでは調べて見よう」とトゥーバルは言って、このパハリーの疑惑の対象を右手の大きなカキドオシの束の方へ押しのけた。この際カキドオシはがさがさと木釘から落ちて来た。そしてトゥーバルはすぐ壁際の、大きな幅の中央部の床に足を踏み入れた。その床の左端はそこにあった簞笥で隠されていた所であった。この瞬間床板は、そこには支えの梁が欠けていて、数ツォル分沈み、中心部で支えられているシーソー板の具合に、反対の側が高く上がった。

「そんなことだろうと思った」とパハリーは言って、飛び込んで来て、床板を除けた。それは簡単に外れた。今や出現したものはさてものこと十分に驚くべきものであった。板の縦の長さ全体に沿って、土塊が削り取られて、かなり平板な溝を形成していて、これが板が上に跳ねるただ左の方にかけて深まって、二フィート以上の溝になっていた。この両溝の間にすべてが巧みに分類されていて、平板な溝には、切り売りの反物、手芸用品が、深い溝にはホッペンマリーケンの植民地産の食料品が見られた。

パハリーは荷を解いて取りだして、見つかったものをトゥーバルに渡し始めた。トゥーバルはましな場所がなくて、ホッペンマリーケンのベッドに横たわっていた。それはエプロンの類いや、赤いフリーズ、花柄の綿ビロードの残り物、色鮮やかな頭巾のリボン、黒絹の布製で、オーダーブルフの女性達が頭飾りによく使うものであった。深い溝にあるのは砂糖やコーヒー、米の袋で、その上に棒状に切られた石鹸や獣脂蠟燭があって、この蠟燭は上の芯が大きな総飾りのように一緒に縛られていた。このすべてからホッペンマリーケンがこの貯蔵品を用いて、一種の商売を行い、キュストリーンやフランクフルトから取り寄せる筈の物件を出来る限り自身の隠匿貯蔵庫から持ち出す習慣であることが見て取れた。板はまた置かれた。蓋のようにぴったり合った。普通の床にふさわしい釘も欠けていなかった。しかし釘は打ち込まれる前に鉗子で短く切り取られていて、ただ上部で釘の頭部を見せる以外の目的を有していなかった。

外であちこち歩いていた者も、その間遊歩を止めていて、また入って来た。ベルントはすべてを調べて、それから言った。「ホッペンマリーケンのことは良く知っている。これで強制執行はできない。彼女はこのすべてを自分の所有物と称するだろうし、そうではないと証明することは難しいだろう。色々な商売の民と結託していて、いつでもこの民が彼女の合法的所有を証明してくれるだろう。しかし盗品であることは確信しているが。彼女の逃げ道を遮断するような独自のもの、例えば明白な個人所有のものがただ欠けている。更に探してみよう。ここ森耕地にいる我ら自身のならず者については言うまでもなく、ムッシュヴィッツとローゼントレーターはエプロン類とか石鹸棒だけを狙ったのではなかろう」。

しかしパハリーは、ベルントがそう語っている間にも、捜査を継続していて、小さなドアの敷居の所に出て来て､すぐ側に立っていたレーヴィーンに付属室に入るよう合図した。レーヴィーンが続くと、パハリーは早速カキドオシの束が落ちて来た元の太い木釘に明かりを当てて、言った。「御覧下さい、若旦那。木釘がぐらぐらします。周りの粘土は剥がれています。奥に何かある」。

「そうだろう」と元気良くレーヴィーンは叫んで、木釘を掴んで、大した労なく木釘を抜き出した。

粘土の壁に深い穴が現れた。比較的単に短い木製品が要するよりもはるかに深かった。これには理由があるに相違なかった。それ故レーヴィーンは窪みを探って、小袋を見つけた。拳半分よりも余り大きくないもので、最初は一片の青い砂糖紙に、それから次に出て来た、粗い亜麻布の布切れに包まれていた。この二つを取り除くと、中身が大鴉の巣の盗品のように出て来た。銀製の針入れ、鼈甲のケースの懐中時計、子供用鳴子、小さな煙水晶で縁取られた紫水晶のブローチ、これは針が折れていた、それに彫り込まれた名前が判読できない印章、小さな卵形の黄金の縁、この中には多分細密画が嵌められていたであろうものであった。すべては格別の価値のないものであったが、まさに所有証明の必要なものであった。

「それでは手に入ったな」と静かにベルントは言って、物件をまた包んで、自分の許に収めた。

更に他の木釘も調べられた。しかし粘土の中でびくともしなかった。未調査のものは残っていないと思われた。そこで更に調査することは止めにすると決められた。台所には古い背負籠があった。パハリーは見つかったものすべてをこの背負籠に入れて、領主の館まで運ぶよう命じられた。彼は渋っていた。白昼このような背負籠で村の通りを歩くことは不名誉なことであったからである。しかし仕事ならば選択の余地はなかった。自分の怒りを短い独白としてぶつけながら、結局命じられたようにした。

ベルントとクニーハーゼは、二人の若者を直接従えて、その間に、領主の館への車寄せに達していて、まさに村の路地から館の前庭に折り曲がろうとしていたとき、三百歩も離れていない地点にホッペンマリーケンがキュストリーンからの通りを通ってやって来るのを目にした。小さな姿、急ぎ足、そして活気のある動作で容易に彼女と分かった。

「やって来るぞ」とベルントは言って、パハリーに向かって、言い添えた。パハリーはすでに牧師館で先に進んでいた者達に追い付いていたのであった。「急ぐのだ。上の書き物机の前に、二，三椅子を並べて、今持っているものを展示して置け」。

すでに遠くからホッペンマリーケンは挨拶した。彼女はとても上機嫌に見えて、近寄ると、一通の手紙を、すでに一行を見かけたとき、自分のコルセットから引き出していて、自分の領主に渡した。

「今日はこれだけ」と彼女は言って、説明を加えた、「ベルリンからの郵便が遅れたもんで」。

彼女は先を急ごうとして、すでに数歩行ったとき、ベルントが声をかけた。「ホッペンマリーケン、まだ用がある。上の私の部屋へ来て欲しい」。

話し手の意志に反して、その声に何か余所余所しい調子があったに違いなかった。いずれにせよ、小人の女性の顔から安心の表情が消えていて、彼女は庭を通り、それから階段を上がって、領主の後を付いて行った。クニーハーゼと二人の友が従った。

パハリーはその間に急遽また整頓された審理室でその展示を終えていた。リボンや布類は余り見えなかった。すぐ目に入ったものは単に大きな、ただ正規の板に巻かれた赤いフリーズの布と、石鹸棒や蠟燭の束で築かれたピラミッドであった。

「さて、ホッペンマリーケン」とベルントは言った、「この赤いフリーズは好みかい」。

「へえ、旦那様、とても好きですよ。イギリス製だろうもの。一エレ七グロッシェン」。

「このフリーズの布地は見た覚えがあるかな」。

「分からん」。

「思い出してみろ」。

「沢山見てますから、旦那様。見たことはあるかもしれねえ」。

「どこで」。

「ユダヤ人のエフライムの許で」。

「あるいはおまえさんの所だろう」。

「あたしの所で。あれまあ。あたしの家でですか。ハハー。分かりやした。あたしの家に行ったのですね。そしてあたしの細々した衣類を見つけた。床下に。面倒でしょうとも。しかし他に安全な場所がねえもんだから」。

「分かった、ホッペンマリーケン。用心深くしなくちゃいけないんだな。多くのならず者がいる、...」。

「沢山ですとも」。

「分かった。しかしおまえさんは商人の食い扶持を奪っているぞ。商売免許を持っているかな」。

「ありません、旦那様、ありません」。

「そうか。それでは仕舞にはおまえさんを処分しなければならなくなるぞ」。

この陽気な色合いで発せられた言葉で以前の安心が彼女に戻って来た。彼女は突然すべては順調な経過になるであろうという思いになった。そこで思わず、半ばにんまりとして、半ば頼むように言った。「旦那様はそこまではなされますまい」。

「いや分からんぞ、ホッペンマリーケン。これを見ろ、釈明してみろ」。そして家宅捜査で自分の許に収めていた小袋を大きな外套のポケットから取りだして、彼女のすぐ側の机に置いた。

彼女はすぐさま跪いて、叫んだ。「あたしは何も知んねえ」。

「しかし我々は良く知っている」。

「あたしは何も知んねえ。あの二人があたしの所にやって来て、...」。

「誰だ」。

「ムッシュヴィッツとローゼントレーターだがね。...隠しておけと言うのです。あたしはそうしたくなくて、叫んだ。するとムッシュヴィッツがポケット・ナイフを取りだして、あたしに言った。『叫ぶと喉を切ってやるぞ』と。それで受け取ったんだがね」。

「おまえさんは嘘を言っている、ホッペンマリーケン。おまえさんは盗品隠匿者だ。いつもそうだった。奴等に金を渡したのだろう。思うに十分な金ではなかった。だから奴等は国道で更に何か取り戻そうとしたのだ。おまえさんは奴等のことをばらさないと奴等は承知していた。しかし奴等はおまえさんのことをばらしたのだ」。

「ばらしたんでしょう。それで逃れようとして、あたしを身代わりにしているんだがね。でもそうはさせねえ。あたしは負けない。誓いますとも。誓えますよ。ザイデントプフ牧師を呼んでくだせえ。ザイデントプフに来て貰いましょう。神様、人間て何とひどいんでしょう。めったに良い人はいねえ。神様、神様」。そう言って跪いて彼女はベルントに近寄って、上着の裾に接吻した。

「起きなさい」。

しかし小人の妖魔は、ずっと跪いたまま、続けた。「何一つ本当ではねえ。あのムッシ

ュヴィッツに、もう一人のポーデルツィヒからの男。二人とも悪魔のような嘘つきだ。誓いますとも。誓えますよ。パハリー、聖書を持って来て。ほらこれがあたしの指。誓いますとも、教会の中でも、教会の外でも、お望みの所で」。

「誓ってはならん。嘘の誓いだから。どうしたものだろう、クニーハーゼ」。

ホッペンマリーケンは、人々が彼女の命を奪おうと思っているのだとしか考えずに、今や情けなく叫び声を上げて、短く太い指で両手をもんだ。最後にドアの所に立ったままのレーヴィーンを見つけた。彼女は彼目がけて滑って行こうとした。多分たった今労フィッツェヴィッツの前での場面を繰り返すためと思われた。しかしパハリーは押し止めた。

「父上、許してやって下さい」と今やレーヴィーンが叫んだ。あたかも彼にとって責任能力の欠如が自明に見えたホッペンマリーケンが居合わせないかのようであった、「御覧下さい。最も低級な段階の人間です。脅すこと、これが彼女に理解させる唯一の手段です。彼女の法律概念の全ては恐怖です。トゥルガニーは私ども同様によく分かっています。彼は何も大事[おおごと]にしようとしていません。しかしやむを得ないとなれば、彼は彼女のことをありのままに記述することでしょう。これが彼女の最良の弁護となります。お願いします、放免して下さい」。

「聞いたかね」と今やベルントは小人の女性に向かって尋ねた。彼女はレーヴィーンが話す間にようやく立ち上がっていた。

彼女は瞬きをして言った。「すべてを聞きやした。分かる。分かる。その通り、若旦那。あの人はあたしを御存じで、あたしはあの人を存じ上げておりやす。あの人を小さいときから、ちっぽけなときから存じ上げておりやす、若旦那、...」。

「あれはおまえのために願い出ている」とベルントは続けた、「私がおまえさんを放免するよう欲している。何故か。おまえさんがホッペンマリーケンだからだ。しかし私の方がおまえさんのことはもっと良く知っている。おまえさんは自分が聡いと思い込んでいると承知している。おまえさんは抜け目がなくて、何の役にも立たない。それがこの件の全てだ。背負籠を持って行くがいい。今回は目をつぶろう。しかし注意するんだぞ。今度またおまえさんを捉えたら、おまえさんは終わりだ。もう行ってよろしい。来年は心入れ替えろ」。

彼女は杖と背負籠の方を見回した。この部屋に入るとき、鉄金具の付いた長持の隣に置いていたのであった。再び行軍の支度が出来ると、彼女は椅子の上に広げられた品物に今一度目を滑らせた。それらに対する所有権を主張したい気があることが見てとれた。ベルントはその視線を見て、今、レーヴィーンの主張が正しいと感じた。

「行きなさい」と彼は繰り返した、「これらはすべて返さない。フランクフルトへ渡されるのだ、ひょっとしたらおまえさんもな」。

彼女は最後の言葉を冗談と受け取って、再びにやりと笑った。

一分後彼女は、杖で敬礼しながら、庭を越えて行った、あたかも何も生じなかったかのような、あるいは日常茶飯の諍いが終わったかのようなテンポであった。

第十八章
オテグラーヴェン

老リュッセルマンは、イエーツェの小さな召使い部屋で間食で元気を付けられ、また体が温められて、丁度フランクフルトの大通り沿いにある村、ポーデルツィヒを通り掛かっていたとき、軽快な四輪馬車と出会った。その革のベンチには法律顧問官の友人、教頭のオテグラーヴェンが座っていた。オテグラーヴェンは止めさせた。

「今日は、リュッセルマン、元気かい。何故ポーデルツィヒにいるのだい」。

「ホーエン・フィーツからの帰りです。仕事です。法律顧問官の手紙をフォン・フィッツェヴィッツ殿にお届けしました。立派な方です。村全体がそうです」。

「私もそこへ行こうと思う」とオテグラーヴェンは言った、「クニーハーゼ村長に会えるだろうか」。

「村にはいらっしゃる。しかし教頭殿が会えるかは、分からない。旦那様が村長に使いをやるのを耳にしたから。ホッペンマリーケンという老いた郵便女の家宅捜査をするつもりだそうです。盗品故買の女らしい」。

「有り難う、リュッセルマン。法律顧問官によろしく。さようなら」。

こう言って教頭は速やかに馬を駆って更にホーエン・フィーツを目指した。リュッセルマンが告げたことは、不都合なことであった。予兆に気を遣う類いの人であれば、彼は引き返したことであろう。しかし彼は迷信の類いは一切信じなかった。生ずるすべてのことに不変の既定のものを見ていた。彼の信条に従えば、更にもっと党派的立場に従えば、厳格にルター主義的であったが、生来それ故に表面に現れないまま、心の奥底から立派な予定調和的信仰のカルヴィン主義が宿っていた。

ポーデルツィヒからわずかに一時間であった。オテグラーヴェンが牧師館の前に止まったとき、正午となった。彼が一昨日ホーエン・フィーツに来たとき訪問しなかったザイデントプフは、書斎の敷居の所で心から彼を歓迎した。書斎は今、冬の日差しが射していて、格別に好ましい外見であった。すべては変わっていた。二日目の祭日の時、塵取りや薫香精を持って慌ただしく行き来して注目を引いた家政婦は、今日は完璧な落ち着きを見せて、家の慣習に従い、要求もされないのに、オテグラーヴェンに対して朝食をテーブルの上に置いた。二人の男性は、暖炉近くの小さなソファーに腰掛けて、神学図書の埃を被った書架の下、外の雪の積もった庭を眺めていた。窓の前にはトネリコがあった。夏には素晴らしい木となるものである。今はその枝が麻の紐のように垂れ下がっていて、悲しい光景であった。しかし二人のうちどちらもそれに目を向けていなかった。教頭は今日の計画で食が進まず、朝食よりも一杯のワインを嗜んでいて、牧師の方は一昨日からホーエン・フィーツで起きていたこと、つまりならず者達の侵入と葦の中州での摘発について語っていた。

「冒険と戦役で、すでに敵が国にいるようなものだ」と彼は結んだ。

オテグラーヴェンは、明らかに非戦闘的な気分で、こうした事柄の話題にわずかな関心しか見せなかったが、話題が変わって、ザイデントプフが二日目の祭日、かの晩の快活な会食、抵当遊びでのツァーベル牧師の困惑、とりわけマリーについて話し始めるとようやく関心を募らせた。いかにマリーが魅力的であったか、自分の同僚のヴェルノイヒェンについて素敵なことを述べたか、自分は彼女に同意は出来なかったけれども、と牧師は語った。

「それ以上に楽しい話題は」とオテグラーヴェンは牧師を遮った、「ありません。牧師さん。私がこの美しい娘に心から愛着を抱いていることを御存じでしょうから」。

ザイデントプフは驚いた。彼はオテグラーヴェンを一層高く評価していただけに、尚更驚いた。このような出来事は彼に関して考えられなかった。今それが出現して、不可能な出来事と感じていた。ようやく彼は気を取り直して、尋ねた。「マリーはそのことを知っているのかい」。

「いいえ、私は一昨日村長と話しをしました。村長は答えました。マリーは町の娘だ、町に属している。彼女が自分の愛する立派な男の側にいることを考えると、自分の心は嬉しくなる。それも学問をしている者、ひょっとしたら直に牧師となるかもしれない者の妻となったら、これは自分が本当に願いとしてきたものだ。この娘は目の中へ入れても痛くない娘だ。貴方の求婚は名誉に思う。しかし彼女が自分で決めなければならないだろう、と。私はただ同意するだけでした。そこでこの決定を聞きに来ているわけです」。

「上手く行くといいね、オテグラーヴェン。しかし一切を吟味してみて、マリーは貴方に合うかな」。

オテグラーヴェンは答えようとした。しかしザイデントプフは最初に発せられた言葉から、その答えが「黄金の星の付いた紗の服」とそれに関連する諸々に関していると聞き取ると、教頭を遮って、静かに言った。「私はそのことを言っているのではない。私が言っているのは、二人の性質の人間、一方は全く強い空想の性質で、もう一方は全く強き性格の性質の者が、互いに合うか考慮なさったかということなのだ」。

「私は考慮しました。しかし告白しますと、疑念や臆病に陥るよりもむしろ希望を抱きました。空想の強い女性、性格の強い男性、貴方が私に認めて下さるこの秀でた特性を早速仮定することが許されるならば、これはまさに私には理想に思えるものです。結婚とは補完に他ならないのではないでしょうか」。

「本や論文ではそう言われる。そのような場合は考えられるし、むしろ私はこれが当てはまる事例を承知していると言えましょう。しかし私が私の経験という本に当たって見れば、これは全体概略逆になる。結婚生活は、少なくとも結婚生活の幸せは、補完には基づかず、両者の理解に基づいている。男と女は対立である必要はなく、段階の相違であり、二人の気質は近くなければならず、二人の理想は同じでなければならない。しかしとりわけ、オテグラーヴェンさん、まだ結婚生活を送っているのではない。まずは心の特徴が問題だ。これはほとんどいつも同類を求めるものだ。少なくともマリーのような性質の者の許では」。

オテグラーヴェンは微笑した。「それでは、牧師さん、貴方が先ほど私になさった質問は、マリーが私に合うかということではなくて、私がマリーに合うかということになりましょう。マリーが私に合うことは私には確かです。私がマリーに合うかという二番目の問いに関し、確証を得るために、ここに来ているわけです。私の馬車を貴方の中庭に留め置くことのお許しを頂きたい。三十分後にまたお目にかかります。賽はいかに私に対して投げられたか、貴方は知る最初の人となります。非キリスト教徒的言い方です。私は敢えてそう言います。私どもに関し決定するものは結局賽子遊びではないと一切確信していますが、今この瞬間に私が感じていることをそれは正確に言い表しているからです。信仰深い心も陥るこのような矛盾に対して、我々はひょっとしたら通常恐れるほどに恐れることはないのかもしれません。我々はこのようなことをした方が、我々自身にとって、そして他人にとってはもっと、得ることがありましょう。硬直しているものは、死んでいます」。

彼らは別れた。オテグラーヴェンは村長屋敷へ向かった。

彼は左手の部屋に、クリスマスの二日目の祭日に老クニーハーゼが預言者ダニエルの章から読み上げたその部屋に、ただ村長夫人だけを見いだした。彼女は心のこもった挨拶をして彼を迎えたが、しかし一種困惑していて、遺憾の意を伝えた、つまり自分の夫は不在であり、仕事のせいであるが、この仕事に関しては教頭殿を煩わせたいとは思わない。何のためにいらっしゃっているか承知しているから、今日はとてもできない。マリーを呼びましょう、と。それから彼女は彼に椅子を用意して、上の屋根裏部屋に上がって行った。娘はそこで色々な手仕事、繕いや縫い物にかかっていて、何も片付いていないものや未整理のものを新年まで持ち込まないようにしていた。前もっての覚悟や驚きの予防には左程心を用いない女性の決然たるやり方で、夫人はここで短く、直截に言った。「マリー、来なさい。教頭のオテグラーヴェンが下にいます。彼は父親にあなたに対し求婚をしました。それで『はい』か『いいえ』を言いなさい。私ども年寄りにはどちらでも結構です。あなたの幸せだけを願っています。自分の幸せは自分自身で決めなければなりません」。

マリーは激しく驚いた。しかし気を取り直して、階段を降りて行った。オテグラーヴェンは、彼に差し出された椅子に座っていなかった。彼は窓辺に立っていた。右手の指で左手の指の節を叩いていて、心が平静でない人のようであった。

「連れて来ました」とクニーハーゼ夫人は言って、再びドアの方へ向かった。

「お母さん、残って下さい」とマリーは頼んだ。

クニーハーゼ夫人は自分の意図を断念して、糸車の許に腰を下ろした。「マリー、何故私がここにいるか御存じでしょう」とオテグラーヴェンは短い間の後、始めた。

「はい、母がたった今言いました」。

「驚きましたか」。

「知り合ったばかりです」。

「心は、そもそも相性があるならば、速やかに語るものです。マリー、貴女を初めて見てから、今半年になります。公園で、円形花壇のある箇所でした。どんな些細なことも覚えています」。

マリーは頷いた。彼女もその日のことは覚えていることの印であった。

「そのときは」とオトグラーヴェンは続けた、「シュタインヘーフェルからのフォン・マッソー殿、フォン・ブルクスドルフの若君、キルヒ・ゲーリッツからのファウルシュティッヒ博士の訪問がありました。輪投げを貴女らは遊んでおられた。私が老フォン・フィッツェヴィッツ殿と一緒に大きな楡の木の垣根から出て来たとき、遠くから貴女らの笑い声を耳にしました。レナーテ嬢が薄青の夏服で貴女の向かい側に立っていた。それから私が遊びに加わって、貴女に慣れぬ手で輪を投げたとき、短過ぎようが、離れ過ぎようが、すべての輪を貴女は受けとめられた。私の無器用さを貴女の器用さが補ったのです。そのことを何一つ忘れていません。かの晩フランクフルトに戻ったとき、私は自分が貴女を愛していると知ったのです」。

マリーは黙っていた。糸車がきしんだ。一本の針が落ちても聞こえたであろう。

「マリー、私に何も言うことはありませんか」。

今や彼女は速やかに彼に向かって歩み、彼に手を渡して、決然として言った。先駆けていた不安がまだかすかに感じられた。「ないかもしれません。貴方自身が私に返事を唇に

されました。心は、そもそも相性があるならば、速やかに語るものです、と」。それから彼女は顔を両手で隠して、叫んだ。「私は恩知らずなのでしょうか」。

「マリー、私は貴女に恩を売っていません」。

「それでも私はひょっとしたら恩知らずかもしれません。貴方に対してではなく、私の運命に対して。私はこの家に来たとき、もう幼い子供ではなく、以前の自分のことを忘れる年齢ではなかったのです。私がいつか忘れるとしても、上の私の父の塚にある十字架がそれらの日々をすべて思い出させてくれることでしょう。私を導く神様のやり方に私は格別な恩義を感じています。私が今単純に、私の心は語らないと申したら、この恩義に報いることになるのか分からないのです。ひょっとしたら心は語るべきなのかもしれません。でも心は黙っています。だから心はそのままにしておかなければならないのでしょう。何か私どもを隔てるものがあります。性質の違いでしょうか、名付けることはできないけれども、しかし違いがあります。その違いを感ずるのです」。

マリーは黙った。

「それで少なくとも私は」、とオテグラーヴェンは言葉を発した、「有り得る最も悲しいこと、つまり希望もなく希望することは除かれたという確証を得たわけです。貴女は曖昧な物言いに逃げるということはなさらなかった。感謝申し上げます。このことからも私の好みは正しく選択したと保証していますが、しかし幸いなことにはならなかった。しかしマリー、あなたから別れることは辛くはない。心を強制することはできないのですから。貴女の心が別な決断をしてくれていたらと願いはしますが、しかしその決断は必然的なものであったと分かっています」。

彼はまずマリーに、それから母親に手を差し出して、家を去った。その家の中で短い会話が彼の幸福について判決を下したのであった。

一時間後にまた彼はフランクフルトへ向かった。

「親愛なる友よ」というのが牧師の最後の言葉であった、「私は人生を眺めて四十年になるが、再三気付いてきた。貴方のような類いの男達はマリーのような性質の女性に抗いがたく惹き付けられるけれども、こうした性質の女性達が自分達に向かって来る愛に決して応えることはない、と。性格の強い男性は、空想の強い女性に惹かれるが、その逆はない」。

オテグラーヴェンは、ザイデントプフの言葉をあれこれ考量しながら、痛々しく微笑んだ。

「その通りだろう。老公の言われる通り。それで私はこの人生を愛に報われずに行くことになる。私に欠如している存在の面のみが、私にとって魅力で、私を惹き付けるのだから。私の運命は決した。耐えよう。私はそうしなければならないからばかりでなく、そうするつもりだから。自分にふさわしいことをすること。しかしもっと素敵な風に夢見ていた。今日になっても先ほどまで」。

こう自己会話しながら、教頭はポーデルツィヒへ来ていて、老リュッセルマンと出会った場所を過ぎた。まだ彼に語り掛けたときに昂揚した気分を思い出して、思わず知らず繰り返した。「いや、もっと素敵な風に夢見ていた。今日になっても先ほどまで」。

第十九章

ホッペンマリーケンが「今日はこれだけ」と述べてベルントに渡した手紙は、直接続く場面では忘れられていた。森耕地の我らの小人の女性が、何もなかったかのように昔ながらの威勢の良さで庭から村の通りへ曲がって行ったとき、ようやくベルントは書状を思い出した。それはキルヒ・ゲーリッツからのもので、「キュストリーン近郊のホーエン・フィーツ。レナーテ・フォン・フィッツェヴィッツ令嬢様」と宛名書きあった。彼はその手紙をレーヴィーンに渡した。レーヴィーンは長い廊下を下って行き、手紙を自らレナーテに持って行った。

病室は明るかった。レナーテ自身は熱が下がっていたが、ただまだ疲れていた。カティンカがベッドの側に座っていて、マリーネは少し脇の窓辺に立って、カルヴィレ林檎の一つを剥いていた。前の晩、彼女が幽霊の出る古いホールから取って来ることを拒んだ林檎であった。

「いいかい」とレーヴィーンは尋ねて、椅子に座った。「空の手で来たのではない。レナーテ、おまえ宛の手紙がここにある」。

「まあ、素敵。毎日手紙が来るといいわ。カティンカ、覚えといてね。レーヴィーン、あなたもよ。あなた達社交的な人々は、孤独な私どもにとって一通の手紙の意味が分かっていないのだから」。

こう言いながら彼女は手紙を開封して、差出人の方を見た。「ファウルシュティッヒ博士」であった。他に考えられなかった。キルヒ・ゲーリッツの彼の他に、レナーテ・フォン・フィッツェヴィッツ令嬢様宛に書ける縁のある者は考えられなかった。ちなみに手紙は二十九日付けで、従って一日遅れていた。

「読み上げてよ」とカティンカは言った、「博士と秘密がないのであれば」。

「分からないわよ。でも読み上げてみましょう」。そして彼女は読んだ。

「恵み深い御令嬢。上告を許さない裁判官の判決が貴女を選び、グーゼ城で大晦日に行われる上演の際協力を要請しています。更に、貴女はこの祝典を開演し、同封のプロローグを朗詠することになっています。このプロローグは、これまで監督めいた口調で述べて来ましたが、詩人としての自惚れが不安なものとなって、貴女の好意的な判定と、更に、昨日嬉しい訪問を頂いた両『カスタリア』誌同人の格別な寛恕に委ねるものです。我々のキルヒ・ゲーリッツの郵便事情には正しく不信感を抱いていて、この手紙を至急便で貴女に届けさせるのがひょっとしたら好ましいのではないかと悩みました。キュストリーンを迂回して行っても単に一マイル半の距離ですが、これに対して二十四時間余裕を見ています。それでこの文面が同封のものと共に間に合って貴女の許に届くよう希望を抱いています。貴女ニ神様ノ御加護ノアランコトヲ、貴女トソシテ私ノ手紙ニ。こう述べまして、この形式と言葉の点ではホーエン・フィーツよりはほとんどすでにグーゼにお辞儀しております。恐惶謹言、ファウルシュティッヒ博士」。

「素敵な話し」とカティンカは言った。

「更に追伸もあるわ」、そしてレナーテは更に読み続けた。

「化粧に関しては、恵み深い御令嬢、心配御無用です。私が私のプロローグの詩節を読み上げて頂く役はメルポメネー本人に他ならないものでありますが。クリオからポリュヒ

ュムニアまでの九人の姉妹[ミューズ]はたとえ多くの関連で煩わしいものであっても、一点だけは快適です。コスチュームに関してです。襞取りだけで済みます。ちなみに助言が必要な場合は、アルセスト嬢を頼りにしています。アルセスト嬢は、ラシーヌ[Racine (1639-99)]とその一派の加勢を得て、四十年来アトレウス[アガメムノンの父]達と暮らしてきており、クリュタイムネストラ[アガメムノンの娘]やエレクトラ[その娘]の間の梯子の段を上がったり、下がったりしてきた方です」。

「まあ、残念だわ」とマリーネは窓際から叫んだ。全くもって、会話に口を挿むことを好む甘やかされた侍女達の流儀であった。

「そうね、その通りね」とレナーテは、手紙をまた仕舞ながら、半ば本当に、半ば冗談で不機嫌になって言った。「一瞬明るく稲光したけど、また私のホーエン・フィーツの日々の暗さが一層ただよく感じられることになるだけだわ。カティンカ、御免なさい、あなたの訪問や、私のベッドの側でつい先ほどまでお喋りして貰った時間のことを忘れてしまって。でもグーゼへのこの旅が出来ないこと、アルセスト嬢や私のプロローグを逃すこと、このことの償いは生涯かかっても出来ないわ。ミューズ役とかメルポメネー役とか、口にしたら、すごいことだわ。それにフランス人の女優自身の手で襞取り出来るなんて。これほど素晴らしい要請はないままま た七十歳になるかもしれない」。

「でも不可能かしら」とカティンカは尋ねた、「あなたは気分が良くなっていて、熱は下がっている。行きましょう。あなたに保温足袋を履かせて、上からは毛皮を被すから」。

レナーテは頭を振った。「老ライスト先生にそれは出来ないわ。私が死んだら、　ー　先生は私を一生許さない。いいえ、私は残ります。カティンカ、あなたがその役を果たしなさい」。

「私が」。

「そうよ、あなたしかいない。私どもの叔母のサロンでは、御承知のように、あなたと私の他にはレディーの花は家にいないの。それにアルセスト嬢が、　ー　たった今それらの詩節をざっと見たけど、　ー　自分の伝令としては登場出来ないし、自らのことを告げて、ひょっとしたら賛美もしなくてはならないとなったら、あなたがプロローグを語る他ないでしょう。いずれにせよあなたはメルポメネーの姿をしているし。でもあなたはしたくないのじゃない」。

「そうじゃないわ。でも記憶力に自信がない」。

「それなら、協力するよ」とレーヴィーンが言った、「まだ出発するまで二時間ある。しかしとりわけ旅そのものに時間がある。私が途中その詩節を一回、二回、朗詠しよう。模倣して覚えればいい。いずれにせよ外の空気では覚えやすいだろう」。

カティンカは納得した。かくて人々は別れた。食卓の鐘が今にも鳴りそうであったばかりでなく、その上わずかな猶予もラダリンスキーの兄妹にとっては準備のために必要であったからである。この準備はグーゼへの旅よりも彼らの出発そのものに関連していた。つまり二人は、叔母が二人を引き留めなかったら、その夜のうちにもベルリンへ帰る計画であったのである。

四時に橇の馬が、雪覆いと赤い羽根飾りを付けて、家の車寄せの前に止まった。三日目のクリスマスの祭日にレーヴィーンとレナーテがグーゼへ出発したときと同じものであった。ショルレンマー叔母と、それにイエーツェやマリーネから別れた後、マリーネはエプ

ロンの先で涙を拭って、「何と素敵なことだったのでしょう、このお嬢様は」と繰り返していたが、ようやくラダリンスキーの兄妹はクッション付きの席に収まって、レーヴィーンは御者台に乗った。まだトゥルガニー宛に書き、家宅捜査の結果について報告を添えることになっていた老フィッツェヴィッツは、十五分したらポニーで追いかけると約束した。

「追い付いてみせるよ。何を賭けるかい、カティンカ」。

「負けますよ」。

「いや、勝つとも」。

すぐその後馬車が出発して、軽やかな橇は素早く飛んで行き、まずは少なくともベルントが勝つ機会はないかに見えた。

カティンカは、前の晩ホーエン・ツィエーザルへの短い旅のときのように、今日もまた手綱を取って、組鐘の音が鳴り、赤い羽根飾りが揺れた。その道はまず千歩ポプラ並木の間のキュストリーンへの通りを進んで行き、それから左手の湿地[ブルフ]の広大な雪原へと折れて行った。襲撃が行われた箇所を通り過ぎるとき、トゥーバルは冗談で森の端を示しながら、妹に鋤き返された畑を通っての競走を描写して見せた。

「こうしたことすべてはホッペンマリーケンへの騎士の奉仕だ。『レディー達に捧げる我が心』の格言により忠実だったのはどちらかな」。

「あなた達を騎士的行為へと鼓舞するためにはまさに小人の女性達が必要なのでしょう。さもないと別な女性達に行為や歌を向けることでしょう、ファウルシュティッヒ博士であってもね。ところで、レーヴィーン、レッスンを始める時間じゃない。私が差し当たり知っているのは、最初の詩節はグーゼと韻が合うということだけ。ムーゼ[ミューズ]、グーゼ。思うにこの韻がなかったら、メルポメネーの考え全体が生まれなかったのではないかしら」。

さて笑いながら朗詠が始まった。新しい詩節が課されるたびに、レーヴィーンは礼砲を発射し、彼の橇の鞭の音が、あれこれのとき木霊となって、広大な雪原に反響した。このようにして彼らはゴルツォーを、直にラングゾーを過ぎて、すでにグーゼの教会の塔が公園の木々の間に見えて来たが、その時突然、ポニーが彼らの脇に来た。その黒い鬣は競走心で櫛のように立っていたが、軽快な四輪馬車に身を起こした老フィッツェヴィッツがカティンカに呼びかけた。「勝ったぞ」。

「そうはさせない」。かくて賭けの競走が始まって、そこで間近の対象として博士のオッターヴァ・リーマ[八行五詩脚]と、その後すぐにプロローグやメルポメネーについての一切の考えが放棄されてしまった。橇を引いていた栗毛の馬達にも昔日の名誉心の発露が見られたが、しかしポニーよりも大きな歩幅という利点もより長い奉仕という欠点に陥って、ほんのしばらく雪覆いのせいで若々しく見えていただけで、二，三馬身先に轟然と軽四輪馬車がスフィンクスの橋を渡って、最初に城の前に止まった。ベルントはすでに泥よけ革を跳ね返して、飛び降りて、十分間に合って側に立ち、カティンカに手を渡して、彼女が橇から降りる際に手助けできた。

「賭けに勝ちましたね」と彼女は言って、心からの接吻を老公に与えながら、同時にレーヴィーンに向かって付け加えた。「ココハ私ドモノ昔ノ宮廷[アンシャンレジーム]」。

それから彼らは暖房された玄関ホールへ入った。そこで従者達が彼らの外套や毛皮を受け取った。

伯爵夫人の青いサロンには今日は「拡大されたサークル」がすでに三十分前から集まっていた。このサークルにはテンペルベルクやクヴィリッツやフリートラントの幾つかの直近の近隣の者達の他に、管区指導官や新しいゼーローの従軍牧師も見られたが、彼らは注目を主催の夫人と夫人の格別の客人たるアルセスト嬢に向けていた。アルセスト嬢は、彼女が約束していたように、すでに一日早く着いていて、真夜中過ぎまで続いたお喋りの際に、ラインスベルクの日々が、ブレーヒ達や、クネーゼベック達、タウエンツィーン達が、とりわけまた王子の許の俳優であった天才的なブランヴィルや美しいアウロラ・ビュルセが思い出されたのであった。期待以上に再会は両レディーを満足させていた。再会は二十二年以上を経ていて、いずれにせよ冒険に等しかったが、早速二人の歩調が合ったという功績に関しては両者とも自分のお蔭と言って良かった。勿論最も言って良かったのはアルセスト嬢の方である。彼女は自分の中に、その身分と国民性の愛嬌をまとめていた。はなはだ大柄で、はなはだ強壮、はなはだ喘息性で、ほとんど銅色の肌色で、黒い絹の夜会服を着ていて、その服はラインスベルクの日々にまで遡るものに見えたが、こうしたことの一切を、彼女は自分の小さな黒い目の強大な善意を露わにしている表情によって、とりわけすべての陽気なもの、悪戯っぽいものに対する、そして機知をもって発せられてすべての紛らわしいものに向かって行く嗜好によって、忘れさせていた。彼女の魅力的な本性を更に高めていたのは、彼女が無防備なままであった芸術家気質の発作で、これは、それ自体すでに一種の喜劇性を有していなかったとしても、いずれにせよ自己中傷の跳ね返りとして出現する際には、とても心から快活なものに導くものであった。彼女の精神的活発さ、皺を許さない彼女の肥満も、彼女を実際よりも若く見せかけて、それで彼女は、ルイ十六世の就任の時に[一七七四年]、『フェードル』[先妻の息子を誘惑しようとして拒絶されたパイドラ]を演じていたのであったが、三十分しないうちにドロッセルシュタインを征服し、それからバメを征服したことを誇って良かった。

この征服に関しては、彼女の全性向に従えば、二番目のバメの征服がより重要であったに違いない。彼女はドロッセルシュタイン達には多く会って来た。バメ的人物には会ったことがなかった。愛のアヴァンチュールの日々はとうに遠ざかっていて、彼女は自分の征服の価値を、この価値が保証した会話の魅力に従って判断する習慣に夙になっていた。彼女はその点で伯爵夫人に近かった。ただ違いは、伯爵夫人はそもそもユニークなものを愛したが、他方彼女の気に入るものすべては、全く快活さの刻印がなければならないという点にあった。その際舞台では驚くべきことに、喜劇的なものは成功せず、単に近親相姦や夫殺害に基づく配役の時に、彼女は本当の成功を収めて来たのである。

ホーエン・フィーツの人々が入って来て、アメリー伯母に歩み寄ったとき、すでにコーヒーが配られていた。伯母は懇ろな挨拶の後、ソファーから起き上がって、彼女の寵児カティンカをフランス人の客人と引き合わせた。　ー　カティンカはレナーテの不具合と急遽危機に陥ったメルポメネー役について話す時間がほとんどなかった。

アルセスト嬢はバメとの会話を打ち切って、両レディーに向かって来た。

「貴女ト会エテ嬉シイ」と彼女は活発に始めた、「貴女ノ伯母ノ伯爵夫人ハ、色々貴女ニツイテ話シテ下サイマシタ。貴女ハポーランド女性デスヨネ。私ハポーランド人ガトテモ好キデス。ポーランド人ハ全クモッテ北方ノフランス人デス。王子ノハインリヒハ、ポ

ーランドノ王冠ヲ受ケル用意ガアッタコトヲキット御存ジデスヨネ」。

カティンカはこのことを聞いた覚えがなかった。しかしそう告白することを賢明に控えた。一方アルセスト嬢はますます政治的になって行く会話の表現を継続していた。アメリー伯母でさえ言いかねるような王子への賛嘆と兄の国王への嫌悪に関するものであった。ポーランドの王冠のテーマはその絶好の機会であった。

「フリードリヒ大王にとってはね」と彼の名前を嘲笑的に強調して彼女は[フランス語で]続けた、「自分の弟を強力な国の王として側に持つという考えはただ受け入れ難かったのです。勿論いつもよくあるように本来の動機を『高度な政治』判断という理由で隠す試みもなされました。貴女の方がもっと良く御存じでしょう。でも嫉妬だけで決まったのです」。

カティンカは王子については女嫌いという面しか知らずに、彼女にとってはとても好きになれないこの病的な特徴を手掛かりに、さし当たり偉大な国王に忠誠を誓って擁護することにして、ようやく微笑しながらこう口を挿んだ。「アラ迂闊デシタ。私ハ心ノ底カラポーランド女性デ、プロイセン国王ノタメニ尽クス羽目ニナッテイマス[継承戦争はフランスにとってただ働きであったとのヴォルテールの言を暗示]」。

かくて彼女達の会話の政治的部分は中断し、まもなく迫っている劇上演という平和的主題へ滑って行った。しかしここでも完全な一致へは至らなかった。再三カティンカの側から、プロローグを開始するメルポメネー役として、ファウルシュティッヒ博士と、その芸術上の主役たるアルセスト嬢との内密な関係を知っておく当然な権利があろうと仄めかしたけれども、空しく終わっていた。アルセスト嬢は、俳優達や女優達が互いに出会って驚くことが劇場生活での最も優美な点であると主張し続けた。このような快活な芝居は気まぐれによって妨害されてはならないのだ、と。

大きな窓の壁龕[ニッチ]でこうした会話がなされている間に、壁龕からは公園と沈む夕陽が眺められ、　ー　一条の夕焼けがまだ天に残っていたが、　ー

トゥーバルとレーヴィーンは伯母の側に腰を下ろして、最新のホーエン・フィーツの出来事を報告した。その輪は間もなくもっと大きくなった。まずはクラハとメーデヴィッツ、それからレブースの管区指導官がゼーローの従軍牧師と共に、最後にはペーレマン男爵も、男爵は足痛風の残りを我慢しながら、しばしば乗り切ってきた社交を大事にして、姿を見せていて、皆が一層近寄って、泥棒の侵入と、葦の中州での両浮浪者の摘発と、最後にはホッペンマリーケンの許での家宅捜査の話しに耳を傾けていた。アメリー伯母ほど興味津々で聞いていた者はいなかった。伯母は、生来泥棒侵入の話しに興味があった他に、弟が推測していたフランス人の掠奪兵が単にムッシュヴィッツとローゼンタールに変わったのを見て、仕返しの気分で心から味わっていた。ベルントの立ち勝った性格が彼女にとってはしばしば余りに不快に思われて、先の件で彼の計画に生じた喜劇の影が嬉しいことに思えたのであった。

しかしまたまさにこの計画に、姉が静かに凱歌を上げているとき、弟は活発に従事していた。カティンカの紹介でアルセスト嬢とバメとの間の会話が中断した同じ瞬間、ベルントはこの老将軍を相手にすることになった。そして彼を脇へ連れて行きながら、早速彼にこれまで単にちらと暗示していた、オーダー川とエルベ川の間の国での反乱について、自分の考えを述べた。眼目は常に不退転の国民の蜂起であって、つまり可能ならば国王と共

に、必要ならば国王抜きで、立ち上がるものであった。しかしこの点に関してはベルントはまさに老将軍に対して一抹の不安を覚えていた。つまりバメはかの絶対主義の下で育った軍事上の貴族のグループに属していて、このグループでは枢密の命令に基づくものは何でも行いかねず、国王の秘密指令の下、ようやく本格的に機能するような者達であったのである。そのような風にベルントは将軍を理解していた。しかし彼は二つの点を見過ごしていた。一つは彼の強力に刻印された郷土愛で、この愛は、傷付けられるといつでも我らの貴族にとってはいずれにせよ馴染みの文、「我らはホーエンツォレルン家[プロイセンの王家、マルク地方は 1411 年以来]より古い」に高揚し得るものであったし、次にそもそも大胆な行為、冒険への彼の嗜好があったのである。この嗜好はとても強く、彼にとってはどのような陰謀も快適で、気に入っており、上方へ向けられた廃位の試みは、稀であり、異常であるが故に、上方から指令された鎮圧の試みよりもひょっとしたら一層魅力的に思えたかもしれないのである。原理もなく、理想もなく、彼の最も顕著な特徴は賭けへの欲求であった。彼は刺激を求めて生きていた。

ベルントは彼に一切を打ち明けると、静かに付け加えた。「バメ、これが私の計画だ。この計画は忠誠という点で反駁され得る。我々は国に味方している。神が私の証人だ、国王にも味方している。しかし我々が国王の意思に反して武器を取ったら、我々は大逆罪とされよう。私はそれを承知していて、そのことをはっきり述べておく」。

バメはこの最後の言葉を聞きながら微笑して、自分の白い鼻下髭をねじっていた。「貴方の言う通りだ、フィッツェヴィッツ。しかしそれがどうした。虎穴に入らずんば、虎児を得ずだ。これがこの国の慣習だ。上の奴等がどうするかはよく承知している。むしろ奴等はどうしなくちゃならないか教えてやろう。奴等としては選択はないと思うぞ。奴等は我々を抑えることで始めよう。再三再四抑える、ますます本格的に、ますます強迫して抑え込むだろう。しかしその間に待機するようになって、我らの賭けに注意深く、敬虔な願いを抱いて、追って来るようになる。上手く行くと、奴等は得るものがあって、国土と王冠とを早速受け入れよう。そして我々を　一　許して、それで感謝とすることだろう。失敗したら、奴等は我々を血祭りに上げて、自らの救出を図ることだろう。我々の首がかかっている。しかし私個人としては蜂起はハードルが高すぎるとは思わない。私は味方する、フィッツェヴィッツ」。

サロンの様々な箇所で、様々なテーマが、ポーランドの王冠が、ホッペンマリーケンが、オーダー川とエルベ川の間での国民の蜂起が語られている間、奉仕の重荷全体は、同時にこの晩の成功あるいは不成功の全責任は、ファウルシュティッヒ博士の両肩に懸かっていた。伯爵夫人は、単に最上級の司で、最終的な諾か否かを残して置きながら、他の一切を「貴方ニオ任セシマス」と軽く添えて、キルヒ・ゲーリッツの博士に転嫁していた。「ツィービンゲンの伯爵にとって正しいことは、グーゼ伯爵夫人にとって公正なことです」と夫人は言っていた。彼は恭順でなければならなかったし、また好んで恭順であった、しかし不安でもあった。そしてこの不安はまことにもっともなことであった。状況を一望すると、本来ただ自分自身にだけ信頼が置けた、しかしこれもほとんど自信がなかった。百もの疑念が彼に湧いて来た。最も間近な、最も重要な件の一つを上げてみても、弦楽器とフルートの五重奏は上手く行くであろうか。この五重奏は、ゼーローとキルヒ・ゲーリッツ

の音楽家を総動員して、若いグーゼの楽長、アメリー伯母の意見では埋もれた音楽的天才という者の指揮に委ねられていたのである。カティンカは、本当の朗詠は言うまでもなく、プロローグの八行詩を果たしてただ失敗もなく、よどみなく、話すことが出来るだろうか。アルセストは全上演を余りに瑣事として取り扱わないだろうか。男達にしろ女達にしろ召使い達は信頼が置けるだろうか。彼らは飾り物の交換や、若干の小道具の用意、カーテンの開閉を任せられていたのである。グーゼの劇場では巻き上げカーテンの代わりに、左右から一緒に閉まる絨毯だったのである。一度ならず博士の頭に血が昇り、この十二時間のうちにも伯爵夫人に辞職願いを提出しようという思いに駆られたのであった。しかし同じ瞬間にこのような歩みの不可能性を見てとって、彼はこのような状況のときよく頼りにした文で奮い立った。「まずはやって見ることだ」。ちなみに、困惑が最大に思われたとき、突然小さなエーフェが出現して、彼にとって本質的な救援となった。エーフェが彼の助っ人に加わると、早速召使い達により良き精神が点火された。召使い達は伯爵夫人が口にするお気に入りの娘に邪魔立てしない気になったのである。

かくて九時になった。すでに一時間前にアルセスト嬢とカティンカはサロンから呼び出されていた。今やエーフェが伯爵夫人に近寄って、すべて用意ガ出来た旨、囁かれた。早速伯爵夫人は身を起こして、ドロッセルシュタインに腕を渡して、食堂を通って、奥の劇場のホールへ歩んで行った。ホールはかなり正確に、舞台と観客室とに二分割されていた。観客室はただほどほどの明るさで、舞台上の人物がそれだけ一層鮮明に照明を受けるようにされていた。およそ二十脚の椅子が二列に置かれていて、その列の前面には高い背もたれの椅子が音楽用にあって、その中央ではカーテンに視線を向けて、手には譜面の巻紙を持って、指揮者として働くグーゼの楽長、名はニップラー氏と称する者が立っていた。クッション付きの席には劇プログラムが置かれていて、これはファウルシュティッヒの尽力でキルヒ・ゲーリッツの製本屋兼入門書出版者の P.ノッテボームの許で印刷されたものであった。今や皆が席に着くと、早速熱心に読まれ始めた。そのプログラムは以下の通りであった。

グーゼ城劇場
一八一二年十二月三十一日　木曜日
九時上演開始

１．序曲。グーゼノ楽長ニップラー氏ノ指揮ニヨル。ヴァイオリン三名、フルート一名、コントラバス一名。

２．プロローグ（メルポメネー）

３．アルセスト・ボニヴァン嬢ノ登場。『ギヨーム・テル[ヴィルヘルム・テル]』カラ抜粋サレタ様々ナ場面。ルミエール作、五幕ノ悲劇。

a. クレオフェ。テルノ妻。夫ニ向カッテ言ウ。
何故コノヨウニ私ニ対シテ余所余所シクナサルノデス。
見知ラヌ女ノヨウニ私ヲ避ケルノデス。

b. クレオフェ。ゲスラーノ守衛ニ向カッテ。
私ハ夫ニ会イタイノデス。止メテモ無駄デスヨ等。

c. クレオフェ。ゲスラーニ向カッテ。

ゲスラー、私ノ息子達ノ一人ヲココニ、アナタノ前ニ連レテ来マショウ等。

d. クレオフェ。ヴァルター・フュルストニ向カッテ。

スイスガ蜂起スル時ダッタノデスヨ。アナタハ逃シテシマッタ。

４．結末の音楽。ニッペル氏ニヨル二ツノヴァイオリンと一つフルートノ為ニ作曲サレタモノ。

助監督ファウルシュティッヒ博士

キルヒ・ゲーリッツの製本屋兼書籍商兼出版者

P.ノッテボーム印刷

出席者の過半がまだプログラムを読んでいて、半分も済まないうちに、呼び鈴の合図が鳴った。ニップラーは硬い巻紙で演壇を叩くと、早速ヴァイオリンがその音色を始めた。今やフルートも始まって、時々「[コントラ]バスの根源的威力」[『ファウスト』2086]が割って響いた。さてそれが終わり、ニップラーは額を拭って、幕が開いた。メルポメネーが立っていた。

「嗚呼」という声が集合者全員の心から漏れて、カティンカよりも臆した質の者であれ、語る勇気が生じたに違いなかった。

彼女が始める前に、ルッツェが小声で隣に座っているペーレマン男爵に尋ねた。「彼女は何をするのか」。

「メルポメネー」。

「しかしここにプログラムは載っているぞ」。

「同じものなのだ」。

「そうか、分かった」とルッツェは彼が請け合った真実に対し訳があって[分からずに]尋ねていたのだと表明する表情で囁いた。

カティンカは一歩前に踏み出した。彼女は白い服を着ていて、それにはアルセスト嬢の襞取りの技法が完璧に見てとれた。そして長くて、緑色に装丁された譜本を、　ー　その両側の表紙に語るべき詩節が張られていたが、　ー　左手で腰に止めた。右手は鉄筆を持っていた。かくて彼女はメルポメネー[悲劇の女神]よりは、クリオ[歴史の女神、巻物を持つ]に似ていた。落ち着いて、あたかも舞台の板が彼女の故郷であるかのように、目を交互に集合者と、それからまた頼みの譜面に向けながら、彼女は語った。

「私を御存じでしょう。かつてはギリシアの神々の子でありながら、
今は国から国へと彷徨っています。
私の神殿があった瓦礫の上には、
ただ雑草の苔や蔦が這っています。
しばしば患うほどに憧れます、
いつまでも頼りになる故郷の浜辺へと。
亡命のミューズがただ休める地は、
ここ最愛の地、グーゼ城の他にありません。

私の姉妹の運命についてお尋ねでしょうか。

多くが日々のパンを求めて不安になっていて、
タレイア[喜劇の女神]は居酒屋と隠れ家で戯れ、
テルプシコラー[舞踏の女神]ときたら、踊り疲れて亡くなっています。
かくて一人っきりで歩いていたら、昨日
愛しい同行者に出会いました。
御存じでしょう、今日この祭典に、
私の最良の人を紹介します、アルセストです」。

ここで彼女は一瞬中断して、何の屈託もなく譜本回転させて、結末の詩節が書かれた裏表紙が上の方に来るようにして、それから続けた。

「彼女がお気に召すよう願っています。果たして上首尾か、
ご贔屓の強弱は、貴方らの御判断。
言葉が貴方らに余所余所しく響こうとも、
異邦人には客人へのもてなしを願います。
私同様に彼女を迎えて頂きたい。
フィッツェヴィッツにドロッセルシュタイン、それにクラハの方々、
私の名代が彼女で、喝采を賜りとう存じます。
『二の矢[外した後の矢]は持たないのです[シラー『ヴィルヘルム・テル』Ⅳ.3]』」。

幕が下りた。生きのいい喝采が音高くなった。最も高かったのはルッツェの側からで、彼はともかく、自分が今や完全に理解し、事を上手に成し遂げたファウルシュティッヒを賛嘆していると何よりも保証していたのである。カティンカのこの小さな勝利の際に黙っていた唯一の者は、レーヴィーンであった。単にちらと覚えただけの節を朗誦した際の彼女の落ち着きぶりは、しかし彼の賛嘆をまた抑制することになった。「彼女は自分の欲することは何でも出来る」と彼は自分に言った、「彼女は自分が頼まれたとき、いつも欲してくれるだろうか」。

彼女の性情の豊かな素養、そのことから生ずる彼女の高慢さ、その中に彼は二人を遅かれ早かれ互いに隔てるであろうものを痛々しく予感していた。

この休止が終わって、ヴァイオリンが秘かに演奏し始めて、次の番号に入ることをただ暗示した。皆の視線がプログラムに向けられた。「『ギヨーム・テル[ヴィルヘルム・テル]』カラ抜粋サレタ様々ナ場面。第一幕。クレオフェ。テルノ妻。夫ニ向カッテ言ウ」。この瞬間幕が開いた。山と湖とを表した背景の装飾画が、今やギリシアの神殿の前に押し込まれた。牛のホルンが響き、その間に家畜の群れの鈴が鳴った。かくて場面が変わった。しかしその場面に登場する人物像はもっと変わっていた。白い服の若々しい兄姉の代わりに黒服の老レディーが現れた。アルセスト嬢で、コスチュームの問題は無造作に軽視されていて、黒い絹服（唯一の服で、それが全てであり）を替えずに、長い家畜番の杖とグーゼの菜園から取り寄せられたシャクナゲの花束とによって、スイスの国民性を、またまばゆいブローチの付いた平たい帽子によって偉大な悲劇のスタイルを創出することで済ませていた。カティンカが受け取った賛嘆の「嗚呼」は彼女に対しては発せられなかった。しか

し彼女はそれを気にしていなかった。長い経験から、結末が決め手と知っていて、この結末に彼女は自信があった。

さて彼女は、すべての偽りの激昂を避けながら、まずは夫から彼の秘密の告知を引き出そうとする言葉を語った。「何故コノヨウニ私ニ対シテ余所余所シクナサルノデス。見知ラヌ女ノヨウニ私ヲ避ケルノデス」。それから素早く順番のただ短い文が、交互にゲスナーの召使い達に向けられ、最後にゲスナー本人に向けられた。すべての言葉が良き修練を物語っていた。そしてこの第三の場面の結末では、彼女は自惚れでなくこう告白して良かったであろう。自分は「観客の心を掴んだ」と。

しかし第四の場面、「クレオフェ。ヴァルター・フュルストニ向カッテ」はまだ始まっていなかった。その作品を細部に至るまで知悉していたアメリー伯母は、まさにこの怒りの六詩脚[アレクサンドラン]に至高の効果を予想していて、まさにこの意味でドロッセルシュタイン伯爵に話かけていたとき、カーテンの奥の演出家の呼び鈴が劇の進行を示した。

しかし皆の驚き、殊に伯爵夫人自身の驚きを誰が描けよう。今や、幕が再び開くと、クレオフェの代わりに、近いけれども、しかしまた本質的に変わった人物像が彼らを見下ろしていた。この新しい形姿は何か。ただ一瞬問いがまた浮かんだ。家畜番の杖、シャクナゲの花束、ブローチ付きの平たい帽子は外されていた。緑の襟の短い上着、それが少なくとも黒い絹服の上半身を覆っていて、反抗的に岩の上に立っている猟師の姿は他ならぬヴィルヘルム・テル本人であることに疑念の余地はなかった。石弩の先で彼はまさに射当てたゲスラーを指し示していた。ドイツ語で、奇異であるが、しかし支障なくアクセントを付けて、アルセストはドラマの結末の言葉を語った。彼女はこのファルシュティッヒによって計画された驚きの効果に大いに自ら進んで賛同していたのであった。この言葉はここかしこでスイス的なものを越えて、諸民族の解放への一般的な賛歌を意味していた。

「暴君は死んだ。暴君が我らを害することはもはやない。
抑圧された兄弟よ、友よ、歩み来たれ。
炎に包まれている彼の城からは、
火災の明かりが旗のように揺れている。
圧制は終わったと告げている、
ゲスラーは死んだ。我らの国は自由だ」。

こう言いながらアルセスト嬢は岩の段を降りて来て、すぐ演壇の縁に歩み寄って、高尚な声で続けた。

「たとえ敵が報復の出撃を考えても、
我々は十分に強くて、敵を撃退する。
来るがいい、我らは皆兵士だ。
我らの山々が高い防塁となって我らを守る。
敵が我らの深い峡谷に侵入しようとも、
出口も分からず、逃げ道も分からない。
そこで敵には岩や、塊や、石が、

混乱に乗じて投げ入れられる。
大鎌や利鎌も、剣や槍も一緒だ。
『降伏せよ、万事は休す』、
かくて敵の誇りの飾り、兜の前立ちは落ちる。
自由が、我々が、一層強大だったのだから」。

カティンカの勝利のすべてを消してしまう喝采の嵐が今や湧き起こった。「アルセスト嬢」と響いた、最初は口ごもりながら、次第に声高になった。拍手を高める休止が続いた後、呼ばれた女性アルセストが、厳かに礼をして現れた。そして花輪もブーケも用意されてなかったので、アメリー伯母本人が演壇に近寄って、感謝の印に舞台の上に彼女の手を差し出した。すぐその後ニップラーは、短い、彼自身が作曲してフィナーレを演奏し始めて、その音色を聞きながら、客人達は立ち上がって、正面の部屋で晩餐を摂ることになった。

ここではその間に小卓ごとに食事の準備がなされていて、そこで、今日の労苦を本当に引き受けた面々が現れた後、偶然か選別かのように適宜着席された。ニップラーも招待されていた。バメは珍しい人物を特に好んでいて、彼を格別熱心に、ともかくとりわけこう請け合って受け入れた。「音楽が何と言っても素晴らしい、特にフルートが」と。

六人用食器が置かれていた主要テーブルは鏡の部屋にあった。ここには直接伯爵夫人の隣にアルセスト嬢とカティンカが座り、レディー達に向かい合ってドロッセルシュタインとベルント、ペーレマン男爵が座った。男爵はフランス文学の分野で一家言ないわけでなく、『アンリアード』を翻訳で、それどころか『カール十二世伝』［以上ヴォルテール作］は原語で読んでいたのであった。トゥーバルとレーヴィーンはこの家の親戚として、青いサロンでホスト役を務めた。殿方の何人かはビリヤードの部屋に籠もっていて、その人々の中にメードヴィッツもいて、彼の若干裏声のかかった声が時々伯爵夫人のテーブルにまで届いていた。

それはクリスマスの正餐の時、コーヒーが出されたのと同じ四本の円柱の上の大理石のテーブルであった。その時は結局昔からの論争のテーマ、「フリードリヒ大王か、アンリ王子か」を契機に老フィッツェヴィッツと彼の姉の伯爵夫人の間でかなりしこりの残る議論がなされたのであった。今日もこのテーブルでは姉弟間の諍いが見られる筈であった。

しかしこの諍いはまだずっと先のことで、まずは単にアルセスト嬢の「完成された芝居」とその後あらゆる思い付く限りのお世辞が言い尽くされた後、ようやく作品そのものが話題となる長く続く会話の結末でのことであった。

伯爵夫人は、巧みな器用さでこの話題進行を捌いていたが、良く自分の行動を弁えていた。彼女はこの悲劇を読んでいた唯一の女性で、同時に印刷された伝記も参照して、ルミエールの生涯について勉強していて、それでフランス文学の件ではライヴァルのドロッセルシュタインを二番手として下位に見る快適な状況にあって、そもそもすべての面で輝いていることが出来た。とりわけアルセスト嬢本人に対して輝いていて、この女優は根っからの舞台人として、自分の配役を暗記することに集中していて、前書きや後書き、それどころか注や文学的注釈に深入りする気は毛頭なかったのであった。

伯爵夫人が左右から質問を誘い出して、次第に聞き手に対して展開して見せたのは、優美な生涯のイメージであった。聞き手の中では、ベルトントさえも、彼は人間的美点を傾聴するのが好きであったので、はなはだ関心を示していた。ルミエールは詩人のタイプとしてはずっと半分子供のままであった。つましく、彼の生涯は単に三点に関与していた。詩文と窮乏と敬虔である。彼が名声を得たとき、すでに六十歳であった。しかしこの名声も彼に、資産、財産をもたらさなかった。彼の作品の上演の実入りは少ない額であった。それを受け取ると、自分のほとんど八十歳になる母が暮らしていたヴィリエ・ル・ベルへ向かった。彼は母と分け合って、自分の希望を喋って、それから、来たときのように、また徒歩で首都に、そして自分の仕事に戻った。

多くの悲劇作家がそうであるように、彼は陽気な性格で、彼の冗談、彼の逸話、彼の慶弔機会詩は仲間を元気付けた。とても貧しく、とても善意であった。自ら嫉妬を抱かず、誰からも嫉妬されなかった。死の数ヵ月前に陥っていた神経疾患が彼の感覚を閉ざした。かくて一七九三年七月彼は亡くなった。まだ彼が体験した恐怖政治の最中ではあったが、しかしもはや目撃していなかった。

大体以上のようなことがまとめると、伯爵夫人が個別に述べた注解であった。彼女は自分が勝っているという自覚に浸っていたので、それ故、ドロッセルシュタインが、ルミエールの名前を数回繰り返しながら、あたかも何か半ば忘れていたことを思い出すかのように、軽い冷罵の影を浮かべて、こう言ったとき、余り面白くない驚きであった。「そうだ、ルミエールに他ならないだろう。恵み深い伯爵夫人は、『ギヨーム・テル』の二回目の上演の際に発せられた洒落をきっと覚えていらっしゃることでしょう。『劇場逸話』の中で見つけました」。

アメリー伯母が質問に添えた表情は、その返答に疑念を抱かせなかったので、ドロッセルシュタインは彼女に当惑の「いいえ」を言わせないよう間髪を入れず、続けた。「すでにこの二回目の上演の際に、この作は熱狂的に受け入れられたのですが、劇場は空でした。ただおよそ百人のスイス人が愛国心から姿を見せていたでしょうか。居合わせたフランス人の一人が観客のこの奇妙な構成に気付いて、隣の者にこう囁いたのです、『普通は、金がなければ、スイス人はいない[給金を払わなければ、フランスにいるスイス人傭兵は働かない]と言うが、ここではこう言わなくちゃならない。スイス人がいなければ、金はない』と」。

伯爵夫人は自ら洒落を解して、落ちのある言い回しの影響下で自分の不快を抑えることができた。そしてまたルミエールの悲劇の題、『イドメネー』や『アルタクセルス』の諧音に浸って、夢中になる余り、フランスの精神の卓越性は二等級の作品でさえ、ドイツ文芸の中で一等級と見なされるものに勝っているという事実に見事に現れているとまで主張した。

ベルントは、伯爵夫人の言わんとしていることを感じ取りたいと思って、傾聴していて、静かに述べた。「例を挙げることができるかな」。

「出来ますとも。私どもに最も快適なもの、まさにこの『ギヨーム・テル』を挙げます。私どもの立派な客人のお蔭で」とここで彼女はアルセスト嬢に愛想の良い手の動作をして、「この作品から素敵な時間を得ました。ルミエールハ二流ノ作家ニスギマセン。でもこの『ギヨーム・テル』はシラー殿の『ヴィルヘルム・テル』にどれほど勝っていることでし

ょう。シラーの作ときたら、四つのヴァルトシュテッテ[スイスの四州]の住人よりも多くの人物が登場します。それに絶えず場面が変わって、歌が歌われ、月光の虹が現れ、すべてがオペラのようです。最後にゲスラーが馬に乗って現れ、...」。

「...それでプロンプターは、マックス・ピッコローミニのように蹄に蹴られて死んでしまいかねない[『ヴァレンシュタインの死』Ⅳ、12]。そうだろう、姉上」。

「あなたの言葉を受け入れます。あなたの流儀で詩人に対するよりも私に向けられている嘲笑を聞き逃しましょう。ちなみにシラーは私の賛同を必要としていません。ヴァイマルの公爵は彼を貴族にしました[1802 年 11 月]」。

「そうだった。しかしおまえさんはシラーのテルを注意深く読んだのかい」。

「少なくともそう努めました」。

「それではおまえさんはこの論争では私よりも一歩先んじている。私の側ではルミエールの読書を試そうとしたことすらも誇れないのだから。しかし一つのことは確かだ。彼は、来て、去って行く。人々は私の知らないこと、アカデミーの椅子を用意したかもしれない、花輪を作ってやったかもしれない、どこかの栄誉のホールで肖像あるいは胸像を建てたかもしれない。しかし私の言ったことに変わりはないのだ。彼は来て、去って行った。何の痕跡も残さなかったのだ」。

「でも私どもは一時間前にまずまさにこの痕跡に従っていて、彼の言葉の美しさに夢中になったのですよ」。

「彼の言葉ではあったが、もはや感じられなかった。彼は彼の国民の心に触れたかもしれないが、その心を射当てたのではない。シラーのテルが有するような、慰めの心を癒やす言葉、

抑圧された者がどこにも正義を見いだせないとき、
この者は安らかな勇気を天に差し伸べて、
そこから永遠の正義を取り寄せる。[Wilhelm Tell、Ⅱ.2]

これをおまえさんのルミエールのテルに探しても無駄であろう。それは確かだ。あれば私は知っていよう。この『シラー殿』は、おまえさんはそう呼んだが、月並みな詩人ではない。彼はその民衆の詩人だ。今、この哀れな虐げられた民衆が救済を求めて戦っている今このとき、まさに更にそうだ。しかし、済まない、姉上、おまえさんは民衆と祖国について知らない。おまえさんが知っているのは宮廷と社交だけで、おまえさんの心はよく尋ねてみると敵の許にある」。

「敵の許ではありません。でも敵が私どもに先んじているものの許にあります」。

「そしてそれが多かれ少なかれ一切だ。私もおまえさんが見ているように敵の長所を見ている。しかしおまえさんと私の違いは、おまえさんが例外を知ろうとしないで、全体的に告白された卓越性を個別の点でも見られると思っている点が違う。考えて見て欲しい。ほんの乏しい実しかならない果実の木があるとする。ひょっとしたらドイツはこのような木かもしれない。それで非難されるべき点があるとすれば、木を罵るべきで、個々の果実ではない。この果実は、珍重なればこそ、一層味がするものなのだ。このような珍しい果実が我らのテルだ」。

この諍いの間にサロンからとビリヤードの部屋から聞き手の輪がフィッツェヴィッツの周りに速やかに増強されていて、彼はようやく自分が黙ったとき、状況の痛々しさを感じた。いつも彼に対して挑戦的な姉に対してではなく、多分にアルセスト嬢に対して感じた。それ故彼はアルセスト嬢に向かって行き、彼女の手に接吻をして言った。「済みません、マダム。私の言葉が至らずに貴女を傷付けていましたら。私は異国の客人に対する義務感と同時に私どもの祖国に対する義務感を感じています。貴女はフランス人です。貴女にお伺いしますが、貴女がフランスのどこかで貴女のコルネイユ[Corneille （1606-84）]が二級の異国の人物の下位に置かれましたら、どんな気持ちになりましょうか。貴女に尋ねて間違いはないと信じています。貴女は社交の因習の要請に従ってではなく、自分の心情に従って語られたのですから。マダム、貴女のお許しを頂きとう存じます」。

アルセスト嬢は品位を持って起き上がった。あたかも少なくともコルネイユの一場面を演ずるよう促されている趣であった。そして言った。「男爵殿、貴方ノ仰有ル通リデス。本当ノ貴族ト御面識ヲ得テ、幸セデス。私ハトテモフランスヲ愛シテイマス。デモドコデ出会オウトモ、心根ノ良イ人ヲモット愛シテイマス」。それから礼儀正しく伯爵夫人にお辞儀して続けた、「伯爵夫人、千回オ詫ビ申シ上ゲマス。デモキット私ドモノ大事ナ王子ノ好キナ言葉ヲ覚エテイラッシャルコトデショウ。『真実ガ最良ノ政治ダ』ト」。

伯爵夫人は老フランス人女性に手を差し出して、無理に微笑した。弟の視線を彼女は避けた。彼女はこのような情景を忘れることが出来たろうが、しかしすぐに出来ることではなかった。この瞬間は当然彼女に残った。

十一時を過ぎていた。夙に余りに文学的なものになっていた会話は今やごく表面的なものに向かって、馬車や橇はいつ出発し、誰が出発し残るかという問いを巡っていた。トゥーバルとカティンカの出発は伯爵夫人の側から決定的な否認が出されて、これに兄妹は安んじて従った。彼らは留まることに同意し、二人と一緒にファウルシュティッヒ博士とアルセスト嬢も残った。カティンカはその後すぐ部屋を去った。トランクと箱の鍵をエーファに渡すという口実であったが、本当はエーファとお喋りするためであった。というのは小間使いの娘とのお喋りが大事で、教授の調べ物は有り難く思わないという点で全く世のレディーと同じであったからである。

その間、ますます短いものになっていく問いかけと返事の中で会話はなされていたが、そのうち若干のバメ的強力な言葉[峻下剤]ももはや効き目がなくなっていた。とうとう十二時になった。ベルントは両開き窓の一つを開けて、旧年を追い出し、新年を迎え入れて、新鮮な空気が流入する間に叫んだ。

「新年よ、ようこそ。しばしば汝の来るのを目撃したが、しかし今のこの時のようなことはなかった。甘美にそして痛々しく感じられる。希望なのか、不安なのか分からない。願いは様々ではない。願いはただ一つ、汝がまた去るとき、我々は自由であって欲しい」。

グラスが合わせられて響いた。アルセスト嬢もそうした。彼女は自分の愛国的情感を昔の宮廷[アンシャンレジーム]と共和国に分割していた。皇帝に対しては、彼女にとって異邦人で、コルシカ人であったので、廉直な憎悪を抱いていた。かくて彼女の心の中には、自分が多くの幸福な年月を送った不幸な国に対して、自由と自立への帰還を祈念しないものは何もなかった。

短い乾杯の祝詞が惹起した高揚は、カティンカがまたホールに戻って来たときも続いて

いた。

「鉛を溶かしたの[溶けた鉛を水に注ぎ、大晦日に占う]」と彼女は笑いながら煌めく塊を伯母の前に置いた。そこには苔葉飾りが見てとれた。「エーファはこれを花嫁の花輪だと言っている」。

エーファは正しく見ていて、大方より正しく予告したのであろうと、皆が一致した。溶かされた鉛は手から手へ渡された。最後にはレーヴィーンの許にも来た。レーヴィーンは迷信の見方に捕らわれていて、花輪が閉ざされていないという印象を抱いた。

従者達が入って来て、馬車や橇の用意が出来たと伝えた。ベルントが最初に辞去した。それから別の客人が続いた。多くは二人連れか、もっと多かった。ドロッセルシュタインはレブースの管区指導官と一緒だった。彼らは同じ道であった。

ただレーヴィーンだけは一人であった。最初の村々からはまだ音楽が聞こえていた。その間に新年を歓迎する銃声がした。それから静かになった。一頭の犬の吠える声だけが時々遠方から響いて来た。彼の橇は、車道が劣等なとき、左右に雪をかき退けた。しかし彼自身は夢見がちにこの日のイメージを追っていた。

クッションの席にはまたカティンカが座っていた。「レーヴィーン、私どものレッスンを始める時よ」と。そして彼が前傾すると二人の頬が触れ合った。そして彼女に対し詩を朗読し始めた。それから彼は彼女が舞台に、静かに、自分の成功を確信して立っているのを見た。あたかも彼女の声の諧音を聞いている気がした。「何と綺麗だったことか」。彼はある情熱的欲求に駆られて、彼女の足許に転げ込み、彼が告白する勇気を有しないが故に彼女が嘲弄する彼の恋を、千もの誓いと接吻の許、彼女に告白したくなった。しかし彼は頭を振った。というのは彼はそれは空しいことであり、自分は彼女をものに出来ないだろうと感じたからであった。

星々はますます明るく微光を発した。彼は上を見上げた。そして彼の魂の中では突然またかのボールスドルフの墓碑銘「そして星空を歩いて行ける」が響いて来た。

するとすべての欲求が彼から落ちて行った。彼はまだカティンカの像を見ていた。しかしそれは次第に薄れて行き、情緒の平安が戻って来て、彼は今や一人っきりで湿地[ブルフ]の広大な雪原を飛ぶように進んだ。

第三巻
アルト・ベルリン

第一章
ヨハネ騎士修道会宮殿

老フィッツェヴィッツは直に六時過ぎ早朝ベルリンに着いて、ランゲン橋からただ数百歩離れたベルク通りの当時は声望のあった旅館「ポルトガル国王亭」で降りた。彼はクリストに若干の指示を出した。それは慣習のように馬を連れて行くことになる「緑樹」亭に関するものであった。それから彼は二時間の朝の眠りで、夜の間逃したことの一切を取り戻すことに決めた。それは難しいことではなかった。というのは彼は疲れて来ると、ベッドであろうが板の上であろうが、同じことである幸福な者達の一人であったからである。

九時になった。彼は正確にこの時間を守っていた。彼は新鮮な気持ちで朝食を摂った。置き時計がチクタク音を刻み、暖炉の炎がはじけ、窓の氷の花は溶け、すべてが快適に呼吸していた。ベルントは窓辺に寄って、川の向こう、真っ直ぐに、こちらではまだ中世風に残っていた宮殿のゴシック風な、明るい陽光の中で輝いている切妻を見た。

「一夜で消えるものではないだろう」と思わず彼は語って、それから窓の壁龕[ニッチ]から戻りながら、軍人的速やかさで着替え始めた。彼はノイ・マルク地方の自分の軽騎兵の制服の代わりに、これは計画中の諸訪問の大多数に対してはふさわしいものであったろうが、ブランデンブルク選帝侯騎士の赤い燕尾服[地方議会用]を選び、丁度身繕いを終えたとき、給仕が入って来て、フォン・ラダリンスキー枢密顧問官が立ち寄られていると告げた。ベルントは帽子とハンカチを取って、錠の鍵を回し、一分後には枢密顧問官の側に座っていた。彼とは手紙で若干の新年の挨拶を一緒に行う約束をしていたのであった。

枢密顧問官は正装であった。彼らは懇ろな挨拶をしたが、しかし本来の会話は断念した。待ち構えている用件は注意が必要であったからである。

名刺が渡されるべき個別の大臣や大使の名前のみが挙げられて、その間に馬車はとうとうヴィルヘルム広場の角にあるヨハネ騎士修道会宮殿の車寄せに着いた。

この宮殿に修道会会長、老フェルディナント王子が住んでいた。この王子の許で、フォン・ラダリンスキー枢密顧問官は何年も前からほとんど友情的関係を築いていた。一方ベルント・フォン・フィッツェヴィッツは、単に表面的に知っているに過ぎず、ただこの王子をフリードリヒ大王の弟ということで尊敬していた。この点に当時は多くの心が寄せられていて、これまでの王子の長い、いずれにせよ多事多端な生涯では恵まれないままであった忠誠が、この八十二歳の王子に向けられていた。彼は「偉大な時代」を一緒に目撃し、一緒に戦い通して来た。このことが敗北のこれらの日々、かつての彼の意義以上に一つの声望を与えていた。そして幾多の希望が彼に向けられていた。彼の長男の英雄的死も彼への感謝と名声とに共に与って力があったとも言えよう。この長男は歌で大いに持てはやされたルイ王子[Prinz Louis (1772-1806)]で、この王子は迫り来る破局を予想するかのように、ザールフェルト近郊で、イエナの戦闘の日に先立って倒れたのであった。

老王子は、両紳士の到着が告げられると、両氏を迎えるべき、両氏に執務室で待っていて欲しい旨伝えさせた。両氏が執務室に入ると、二人の間で役割が分担されて、ベルント

が出来る限り会話を進め、枢密顧問官は単に時折助け船を出すことになった。

王子の執務室は家の正面の左手の角にあって、窓二つがすでにヴィルヘルム通りに面していた。普通王子の部屋に見られるものよりも、かなり快適な部屋であった。厚いトルコ絨毯、半ば閉じられたダマスク織りのカーテン、戸口のカーテン、ランブルカン[布飾り]は、この大きくない部屋に、四つの窓と二つの戸口の場合本来見られないもの、つまり閉ざされた落ち着きを与えていた。そして暖炉の火は、同時に明かりと暖かさをもたらしながら、快適で内密な印象を高めていた。窓の縦仕切りには低い書架と段棚があって、胸像や絵画のための余地があり、中でも最良のものとして、建築の風景画が、王子の夏の離宮であるフリードリヒスフェルデ城を描いたものがあった。彼自身の等身大の肖像画はグラフ[Anton　Graff(1736-1813)]作のものが暖炉の上に掛かっていた。その横には背もたれのない幅広のソファーが次のドアの縁取りに接してあって、一方丸い、雪花石膏[アラバスター]の花鉢で飾られたテーブルがソファーで形成された右隅に押し込まれていた。

初めてこの箇所に来たベルントが観察を終えないうちに、王子は自分の寝室に通ずるドアのカーテンを押し退けながら、思っていたよりも早く入って来た。そして両紳士のお辞儀に友好的挨拶で応じながら、手の動きで、ソファーに腰掛けるよう促した。彼自身は暖炉に背を向けて立ち、両手を後ろの方へ向けて組み合わせ、明らかに両手でできるだけ多くの暖を取ろうと努めていた。こうせざるを得ない所に彼の高齢が窺われた。その他は、彼の姿勢も、彼の表情も八十二歳を思わせるものはなかった。ベルントはすぐにこの顔の独自な点を見て取った。これは謙虚さと自負心との奇妙な混淆にあるように思われた。実際そうであった。生来重きがなく、生涯、殊に自分の兄達と比べられて、この重きのなさを自覚していたが、しかし自分の家の高貴なミッションの感情に貫かれていて、彼に一つの威厳を与えていた。この威厳は、額に皺を寄せると（これを彼は好んだが)、雷を落とすジュピターの表情にまで高まるものであった。強大なローマ風の鼻がその際彼の役に立った。しかしもっと鋭く見る人があれば、その人は、彼が静かに微笑しながら、雷を落とす役を単に演じていて、時折発揮せざるを得ないと思っているすべての誇り高い拒絶を、単に一種の家系の義務として行っていることを見逃さなかったことであろう。

「貴方らは、新年の賀詞を述べにいらっしゃっている」と彼は始めた、「ご丁寧なこと痛み入ると申し上げる。老人の運命は忘れられるということであることが確かであるだけに、一層有り難い。勿論時の流れで私に目が向いて来ている」。彼は一瞬黙った。そして思念の流れを締め括って、その最初の部分は発声せずに品位をもってこう言い添えた。「私は自分がこの国にとって単なる思い出以上の者でありたいと思っている」。

「王室陛下は国の手本です」とラダリンスキーは答えた。

「親愛なる枢密顧問官、それにはほとんど疑念を抱いている。私が自分の国にかつて幾ばくかのことをしたとしたら、それは忠誠によってであった。私は戦争や平和で、私の兄、国王の諸計画に反対したことはなかった。反対しようという思いすら抱いたことはなかった。これが今や別だ。忠誠は世から消えてしまった。その代わり知ったか振りが生じて来た。軍隊でさえそうだ。お尋ねするが、私の尊い兄の存命時に三百人の将校達の辞任が有り得たことであろうか、あるいは考えられることでさえあったろうか。彼らの大元帥や君主の政治への公然たる抗議ではないか。不服従の精神が人々の頭に生じていて、私はこの精神の相手であろうが、しかし手本なんかではない」。老フィッツェヴィッツは、王子は

自分の諸計画については何も知らないし、知り得ないと確信していたが、その一言一句が当てはまるこれらの言葉を聞きながら、それでも顔色を変えざるを得なかった。

「王室陛下におかれましては」と彼は言葉を発した、「私がこの時代の諸現象を別様に解し、この現象に対する別の理由を求めもしても、お許し頂きとう存じます。大王も抵抗を経験され、受け入れになられました。このような抵抗が稀なときは、国王と民衆が一致していると分かっているからであります。最も艱難のときは、最も一致しています。しかし今は一つの溝があります。心の同じ鼓動が欠けています。これなくしては大王でさえも、すべての戦争の中で最も犠牲の多い戦争を遂行し得なかったことでありましょう。我らの現存の統治の諸規則は、民衆の判断を軽視することによって、不服従を接種しております。民衆は反抗したいから反抗しているのではなく、反抗せざるを得ないからなのです」。

「私は意見の対立があることは承知している。しかし私個人としてはより大きな経験とより良い自覚の側に立っている。このより良い自覚はどこにあり、見いだすべきかとなると、それに疑いの余地はない。貴方らは私の甥の息子[大王の弟の家系]、つまり恵み深い国王陛下の英知を信頼しなければならない」。

「私どもは国王陛下を信頼申し上げています、...」。

「しかし伯爵を、王の筆頭大臣を信頼していない」。

「王室陛下が仰せになっています」。

「それには賛同できない。というのは、親愛なるフォン・フィッツェヴィッツ少佐、国王と筆頭家老の間の齟齬は許されないし、プロイセンの伝統に反するものだ。私はフォン・ハルデンベルク伯爵を好きになれない。彼は私が五十年間会長を務めていた教団を一筆で解散させた[後で再編成した]。彼は我らの財産を没収して、我らの騎士修道会管区を取り上げた。しかし私は彼の諸規則に反対しなかった。私が知っているのはただ忠誠だ。我らは王制の国に生きている。生ずるものは、国王陛下の意志に従って生じている」。

「お言葉に従えば」とベルントは辛辣さの色合いを帯びて、答えた、「国王の意志ですが、　ー　誰が今や、その意志が如何なるものであり、どこにあり、どのようなものであるか、言いたくなるでしょうか。王室陛下の大いなる兄上の大王の許では、国王陛下の意志を遂行することが諸大臣の義務でした。今では、諸提案を、つまり諸大臣の意志を裁可することが国王陛下の義務です。かつては国王の許にあったものが、今や諸顧問官の許にあります。まだ国王が決定されます。しかし国王はもはや、自分では知らない現実のものや、事実に基づくものに従ってではなく、単にそれについて起案されたイメージに従って決定を下されます。国王は、敵や味方、世界、状況、自らの民を、彼の諸大臣の眼鏡を通じて見ておられる。赦免や命令で私どもに語りかける国王の意志は夙に単なるフィクションになって来たのです」。

王子は不機嫌の素振りを見せなかった。彼は数回絨毯の上を行き来した。それからまた暖炉の所に落ち着いて、信頼している表情で答えた。「貴方は、私の甥の息子、国王を誤解している。貴方に、それに貴方を含む多くの者が誤解している。私は国王陛下の諸計画に通暁していると誇ることは許されない。王室のメンバー、老いた者であれ、若い者であれ、これらと相談すること、あるいはほんの仕事の進行具合であれ、メンバーに知らせること、これはプロイセン王達の慣習ではない。しかしこれは貴方に最も請け合ってよろしいと思っていることだが、つまり個人的な統治のことで、これについて、貴方は埋葬され

たと思っているが、この統治は貴方の推測よりもはるかに大きなものだ」。

「王室陛下の仰有ることには驚かされます」。

「そうであろう。私はあれこれの点で間違っているかもしれない。しかし一点間違っていない。これが肝要な点だ。つまりどのように我々は皇帝に、我々の高貴な同盟者に対応すべきかという点だ。これが今すべての者に関心のある問いだ。貴方は、躊躇い、押し延ばし、約束によって時間を稼ごうとしているのは大臣であると思っておられる。違う、国王自身だ」。

「選択の余地がないほどに物事がそのように上奏されるからです」。

「そうではない。国王は待機の政治にのみ正しいものを見ているからだ。時のみがこの混乱の解決をもたらそう。国王は現在の状況が保たないことを確信している。一度ならず国王がこう言うのを聞いたことがある『皇帝は節度がない、節度を保てない者は、均衡を失い、倒れてしまう』と。国王はナポレオンの皇帝制度をシャボン玉と見ている、それ以上ではない」。

「しかし触れると一緒に諸国家や王座が崩れるほどに堅牢なシャボン玉でしょう」。

「私には私の甥の言葉を保証する義務はない。その言葉は私自身の意見でもあるが。しかし国王はまた雷雨についても言及している。それが荒れ狂うに違いない、それから収まる、と。ほぼ三世代の物事の推移を経験してきた老人を信用されたらいい。雷雨はきっと荒れ狂うことだろう、そして収まるだろう」。

「確かに、王室陛下、しかしまずは最も高い尖端に当たった後でしょう」。

「この尖端が守られなければ、稲妻が駆け落ちよう」。

「同盟によって守られなければですか」。王子は頷いた。

しかしベルントは続けた。「同盟も必要な時があったかもしれません。しかしこの時は変わってしまった。どの日もそれぞれの義務と要請があります。ある日は降伏を要求し、翌日は同盟を要求し、三日目は反逆を要求します。王室陛下、反逆の日が勃発したと思えます」。

「何でもって反逆するのか、我らは軍を持たない」。

「しかし我らには民衆がいます」。

「国王は民衆に不信を抱いている」。

「民衆の力にですか」。

「ひょっとしたら、その力に対してもそうかも知れない。しかしとりわけ新しい精神、今や多くの者達の頭に息づいている精神に対してだ」。

「まさにこの精神に救済があります。その精神を役立て、賢明にその精神を信用する術を心得ていますれば」。

「私は反論しない。しかしこの課題に国王は向き合えると感じていない。この課題は国王の性情には難しい。これは船頭多くしてに当たるのだ。この面に関しては国王に何も期待しないのがよろしい」。

「国王に確信が芽生えますように、そしてこの確信の中で善良で忠実な民衆への信頼が芽生えますように期待しています。民衆はその国王のために死ぬことが許されますように、その承諾しか欲していないのです」。

王子は、その席を今一度変えながら、肘掛け椅子をソファーの側へ押しやり、腰を下ろ

しながら、ベルントの手を自分の手に握って、彼の顔をしっかりと見て、好意的に大きな目で見つめた。

「私は民衆のことは知っている。私は民衆と共に生きて来た。私の高齢時には、多くのことへの感覚が閉ざされてしまっているが、別なことへの感覚が開かれている。それで私は良く承知している、立派な民衆だ。あたかもこの眼前にいるかのように、民衆がはっきり見える。しかし国王は怖じ気づいている。国王は多くの辛いことを体験した。そして私の若い時に見たような偉大なことを知らない。私は国王のことを正確に知っている。彼はむしろ敵との同盟を結ぶことだろう、この敵が彼の前に権力者の姿をして、あるいは秩序立った統治の姿をして向かって来るならば、自分自身の、百もの意志に分裂した、忠誠の軌道から外れた民衆との同盟よりも優先させることだろう。国王は全く秩序の上に収まっているのだから。統一された敵となら、国王は自分がどこにいるか分かる。船頭の多い民衆の塊と一緒では分からない。今日民衆は国王と一緒でも、明日民衆は国王に敵対する。一方国王の枕元に立っているナポレオンの雷雨は、国王を直撃しようとも、また国王を守ってくれるというとき、箍を外された民衆の力は国王にとって単に嵐の海に見えることになる。この海は、まず堤防が決壊すると、その洪水の中ですべての社会的秩序をすべて無差別に埋葬してしまうものだ。この社会的秩序が国王にとっては政治的秩序よりも大事なのだ。この点の国王は正しい」。

短い間が生じた。王子はまた立ち上がった。謁見を終えようという意思表示であった。彼は両紳士に手を差し出して、枢密顧問官に、祖国に忠実な男性を親しく紹介してくれたことに感謝した。

「自立していて明確な諸見解に接することは極めて喜ばしいことである。しかし指揮官の大臣の立場を難しいものにしないで欲しい。我らは同盟を、それが自ら瓦解するまで、維持することになろう。この時期は、すべての兆候が間違いないのであれば、近い。沈んで行く魔神は、そうなったら我々を束縛している鎖をも一緒に持ち去るであろう」。

「しかし単に、それでも我々を不自由の中に、ひょっとしたら永遠に不自由の中に残すことになりましょう。支配者を替えるだけのことになりましょう。我々の行為、あるいは不行為が我々の運命を決めます。他の者どもがやって来て、かくもいそいそと引き裾を運ぶおべっか者達には、新しい鎖を用意することでしょう」。

「そうでないことを祈りたい」。

かくて彼らは別れた。両紳士はお辞儀をした。馬車が再び車寄せに来て、宮殿の前に立っていたフランス人の二重歩哨が敬礼をした。「王子は気に入りましたか」と枢密顧問官は尋ねた。

「そう、しかし王子の仰有る通り、大臣と見ていた抵抗が、国王自身に見られるとしたら心配だ。しかしそうであっても、私は揺るがない。私は民衆に対して不安を抱いていない。私は民衆と一緒に挑戦しよう。敵に法を知らしめる力を有していながら、敵の失敗と寛大さを計算に入れようとしているのは馬鹿げている。懐手のままというのは、神を信頼することであると同時に、またしばしば神を験すことになる。神ハ自ラ助クル者ヲ助ク」。

かくて馬車は右手にウンター・デン・リンデンの方に曲がって行った。そしてすぐその後旅館「太陽亭」の前で止まった。そこで小昼を食べることに決めていた。

第二章
ヴィントミューレンベルク[風車丘]で

ヴィントミューレンベルクのヴィーゼッケのホールでは、そこでは前の晩、大きな大晦日の舞踏会が開かれていたのであるが、元旦にはおよそ百人の常連客が妻子を連れて来ていた。すべてはまた旧来のままで、ほとんどまだ二十四時間も経たない前には諸カップルが踊っていた同じ場所に、あたかも舞踏会はなかったかのように、緑色の、若干がたがたするテーブルが四脚の椅子と共に並んでいた。そして椅子やテーブルの間に、あちこち、上下に一群の商売人達が集まっていた。彼らは何年も前からここを馴染みとしていて、この飲食店のほとんど構成員となっていた。輪形クリーム・クッキーやシナモン入りブレーツェル[８の字形]を持った老婆や素朴な引き出し商人、前で結ばれたその小箱には、鋼や火口、硫黄液の糸、青いガラス球が売り物として入っていて、最後に義足の者達が二種類のベルリンの新聞[Haude und Spenersche Zeitung, Vossische Zeitung]の他に色々なパンフレットを安売りしていた。全体に酸っぱい白ビールの大気が、明かりの油煙や煙草の煙によって重たいものになりながら、時折一杯の蒸気を発するポンス酒が運ばれて来て、爽やかになるのであった。

これらのテーブルの一つに、半ばすでに音楽演奏の高桟敷の途中にあって、四人のベルリン市民が座っていた。そのうちの二人が熱心に喋り、他の二人は同じく熱心に聞き入っていた。プレンツラウ通りからの近所の者達であった。煙突掃除親方のラーベと、ブラシ製造人シュタッペンベック、笹縁職人のニートリヒ、それに小麦商、食糧商のシュネーケルであった。四人とも皆四十歳かその上で、ニートリヒとシュネーケルは同じ家に住んでいた。ただ廊下で隔てられていた。

ラーベが彼らの中で最も声望があった、そして大方の煙突掃除親方が良く持っているもの、つまり立派な姿勢と色艶のいい肌、白い歯を有しているばかりでなく、すべての上に立つ者にとって誉れとなるような立派な性格頭脳を有していた。彼はこのことを自覚していて、これに従って行動し、自ら語るよりも、むしろ聞き手となって、古いベルリンの家系の出であったけれども、すべての大言壮語を避けた。彼はこのサークルのドロッセルシュタインに当り、そもそも煙突掃除親方の職は父から息子へと渡って、実際一種の市民的貴族を形成するように、貴族的要素を保っていた。

ラーベがこのサークルのドロッセルシュタインであるとすれば、シュタッペンベックはバメであった。ニートリヒは彼に対し、ブラシ製造人の性格が丸出しであると非難していた。これはすべての点で当たっていて、彼の髪の毛ばかりでなく、彼の作法も語り方もそうであって、剛毛がいつも上を向いていた。真のベルリン子であった。彼は声望の点ではラーベに遅れを取っていたが、しかし彼よりも知識や機知において、経験においてさえ、はるかに上回っていた。彼は旅を経験していて、熱心に丁寧に行っていた仕事のせいで、ポーランドやロシアへ赴いていて、モスクワへの遠征以来、すべてのロシアの地のすべてに関し、議論の余地のない権威となっていた。ラーベでさえ、いずれにせよ長く議論するには、余りに上品であって、彼の英知の発言に服従していた。この発言は土地勘という確かな基盤に基づきながら､勿論好んで政治的軍事的なものに滑り込んで行くものであった。

彼と対照をなすのは、笹縁職人のニートリヒで、小さな行儀の良い男で、その雄弁さは

ただ自分の臆病さで制御されていた。彼は薄緑色の上着を着ていたが、頭痛持ちで、花柄の綿ビロードの総付き帽子を被っていた。この帽子のことを「彼の身分の印」とシュタッペンベックは形容していた。彼は仕事柄絶えずあちこち飛ぶことに慣れていて、五分と同じ所に座っていられなかった。全く鳥籠の梯子の段を上下に動くことを止められない真鶸に似ていた。彼の痩せた頬には二つの鋭く目立つ丸い斑点が、結核病か熱病者のように現れていたが、結核病でも熱病でもなかった。

最後はシュネーケルである。彼はこの小さな男達のコンサートの中のコントラバスであった。声でも形姿でもそうであった。ベルリンとコトブスの白ビールに関して根本的通であった。彼は種類を味わうばかりでなく、貯蔵日数も味わい尽くしていて、飲み、吸い、黙っていた。ただ時折蓋を何度か叩いても気付かれないとき、すべての間のテーブル越しに、大音声で新しい「白」を求めて叫ぶのであった。

シュタッペンベックは「ベルリン新聞」を左肘の下に持っていた。それは十二月二十六日付けの新聞で、これを基に、彼は三人の仲間に丁度そこに印刷されていた知らせ[報知紙]第二十九号の主要箇所を読み上げた所であった。彼は、気付けに、テーブルの中央に置かれていた嗅ぎ煙草缶に右手を延ばした。ラーベは静かに煙草を吸い、シュネーケルは大きな雲を作って吸い、一方ニートリヒは明白な非喫煙者で、　一　彼は朗読の間、シュタッペンベックには極めて不快であったが、一ダースの砂糖入り煎餅を音立てて噛み砕いて、食べ終わっていて、今や老婆に合図して、輪形クリーム・クッキーに向かおうとしていた。

ベレジナ川通過の際の描写を、これで報知紙から引用された新聞の抜粋は終わっていたが、特にラーベは、愛国的喜びの他に、また人間的関心も呼び起こされて聞いていた。彼が思わずこう漏らしたとき、感動がないわけでなかった。

「神の裁きだ、シュタッペンベック、奴はどうなる。この雪原、氷原の遠征からまた戻って来れるだろうか」。

「氷が底まで凍ったら、鯉がどうなるかってものだ。窒息してしまう。ラーベ、奴はもうお仕舞いってことだ。まず忘れてならないのが、その一帯で、次に雪、それから民衆だ。俺は良く知っている。ここ我々の許とは違うぞ。おまえさんがポツダムへ行こうとするとしよう。まずは黒鷲亭、それからシュティミングス、それからコールハーゼンブリュックを通って行く。どこでも何か温かいものを食べられる。しかしロシアときたら。丸一日ずっと行軍して行き、夕方ある人に出会って、『後何マイル』と尋ねる。すると『五マイル』と答えるのだ。しかし尋ねることは出来ない。誰にも出会わないのだから」。

ラーベは頷いた。誇張は多分聞き逃していたが、しかしこの誇張は真面目に述べられた件に対する冗談の衣装とはっきり気付いていた。しかしニートリヒは言った。

「シュタッペンベックよ、ただ一点忘れているぞ。奴等はもうヴィルナにいるのだ。ヴィルナから国境までは単にただ九十マイルにすぎない」。

「単にただ九十マイルだと」とシュタッペンベックは繰り返した。引き延ばした調子で、そこには怒りと上機嫌とが平衡を保っていた。

「アルト・ランツベルクまでどれほどだ」。

「三マイル」。

「よろしい、三マイルだ。それで、おっさんよ、まだ洗足木曜日を覚えているだろう、

一　我々が一緒に旅してから、今三年目だな。おまえさんは温かい上着を着て、大きな靴を履いていた。我らが持参した食料のことは言うまでもない。それで、笹縁職人のニートリヒがアルト・ランツベルクの青獅子亭に到着したときのことを思い出してみな。嘘言っちゃいけないぞ。水膨れを治療してやったのは俺だからな。それなのに単に九十マイルと言っている」。

シュネーケルは笑った。「そうだな、九十マイルは相当ある。しかし皇帝は、シュタッペンベックよ、だからといってお仕舞いってもんじゃない。どうしてお仕舞いなんだ。皇帝は無事なんだろう。また暖を取って、パリで食べ尽くして座っているんだろう。そして一緒に凍えたわけではないフランス人どもが、奴等のことは知っているが、奴等がまた直に新たな軍を作ることだろう」。

「いや、シュネーケル、そうはならない」とシュタッペンベックは答えた。彼はその間にパイプに火を着けて、燃える付け木をテーブルの縁で消していた。ただ二，三の火花がまだ微光を発した。「この付け木に思い切り吹きかけてみろ。これはもう燃えない。フランス人が奴のために新たな軍を作るとは思えない。そうしたところで、誰が指揮を取る。そこが問題だ。奴は悪魔の申し子だが、しかし結局すべてを一人では面倒見切れない」。

「自分でやる必要はない、将軍達がいるだろう」とラーベが述べた。

「将軍達はまさにいない。差し当たりまだロシアで凍えた足先のままだ。言っておくが、ラーベ、たとえ一人がまたパリに戻って来て、皇帝に『戻りました』と言おうものなら、滑稽なことになろう」。

「我々が皆奴等を殺したろうか」とニートリヒは戦慄と悪ふざけの混じった表現で尋ねた。

「いや、おまえさんは駄目だ。おまえさんの立派な笹縁職人の手は、元帥の血で汚しちゃいけない。おまえさんは、総付き帽子が似合うのだから、　一　奴等がもしまたここへ来たら、そのときは総や総飾りを作ってやって構わない。しかし『もし』なのだ。勿論おまえさんが言うように、ヴィルナからメーメルまでは単に九十マイルにすぎない。しかし俺はロシア人を良く知っているが、ロシア人はこの散歩を見逃さないぞ。それでメーメルと我らのプレンツラウの市門までの間に、一ダースの将軍や、彼らと一緒の一切合切を埋葬するのにまさに十分な大地がまだ残っているわけだ」。

「誰がそうするんだい」とレーベが拒絶するような威厳を保って尋ねて。「我々の許ではそんな雰囲気ではないぞ」。

「しかしそうなるかもしれない」とシュタッペンベックは続けた、「困ると祈るばかりではない、世界はただ笹縁職人だけで出来ているわけではない。いいかい、ラーベ、リトアニアやマズリアではすべて立ち上がっている。たとえ立ち上がらなくても、何の手も動かなくても、神様が味方だ。奴等は蠅のように落ちる。ここまで這って来る、二，三の者は、どこかで我々が始末しなくちゃならん」。

「どこでだい」。

「新たなフランス人の植民地だな、しかし塁壁や溝に隠れてな」。

「皇帝がまた取り戻そうとしたら」。

「そのときは取りに来ればいい。しかし来ないだろう。その頃にはロシア人がこちらに来ている」。

「ひょっとしたらな」。

「いや、きっと来る。悪く思わんでくれ。ラーベ、俺の方が良く知っているのだ。怒っている者は、静かにしちゃいない。どこでもそうだ。俺の妻が俺と諍いがあったら、　ー　今その問題があるんだが、　ー　もう飽き飽きして俺は別の部屋へ行く。すると妻は後を付けて来る。諍いが続くのだ。これが人間の性と呼ばれるものだ。でロシア人も一人の人間だ。本当に、その通り、ラーベよ、ロシア人はやって来る。皇帝は来ないだろう。フランス人は皇帝に飽きが来ている。請け合うとも、どうせ奴は大したものになりっこないのだ。すでに一八〇六年に俺は言った、皇帝が真っ赤な雌馬に乗って、黄色の顔と刺すような目をして入場して来たとき、『子供らよ』と俺は言った、『小さな奴に過ぎない。老フリッツ[フリードリヒ大王]も小さかったが、これほど小さくはなかった』と。今は俺は大きな者の味方だ。ザルデルン[Friedrich　Christoph　Saldern（1719-85）]とかメレンドルフ[Grafen von Möllendorf(1724-1816)]とかだ」。

シュタッペンベックは更に話したいように見えた。しかし不具者がテーブルからテーブルに、足の切り端を包帯で巻いて、寄って来て、丁度一枚のビラを差し出して言った。「シュタッペンベック殿、これは貴方向きだ。一グロッシェンだが、二個欲しい」。

吸い取り紙のビラであった。『本年印刷された新しい歌』とあって二つの木版画があり、そのうちの一つは卵形の薔薇の花輪の中に三優美女神を、もう一つは裏面に一人のアモールを描いていた。

シュタッペンベックは不具者に望み通り二倍の報酬を与えて、ビラを開けてみて、何かフランスに敵対する詩を見いだそうとした。これらの詩は当時このようなビラの形で流布していた。「ターラウのアンナちゃん」、「戦友よ、馬に飛び乗れ、馬に」、「シュミットさん、シュミットさん」、「テーゲルの幽霊」。彼は苛立って、ビラを裏返した。「グロース・アスペルン近郊の戦い」、「シルよ、汝の剣は痛ましい」。不具者の言ったのは、この二つのことであろうか。しかしこれらは周知のものであった。待て、ここにある、これに違いない。これには表題はなかったが、先の二行を読むと、題になっていた。

「読んでくれ」とラーベは、シュタッペンベックの顔を見て、彼がやっと捜し物を見つけたと察して言った。シュタッペンベックは読んだ。

「待っていろ、
ボナパルト。
待っていろよ、ナポレオン、
待っていろ、おまえをきっと掴まえて見せるから。

いや、ロシア人は、
どのように始末するべきか範を垂れた。
クレムリン全体の中で
ゼンメル[巻きパン]一つない。
すぐ後に迫って来るのは、
いつもただ空腹とコサック兵。
いや、ロシア人は

どのように始末するべきか範を垂れた。

アウステルリッツでのおまえの太陽の
輝きは失せた、
雪の下に
おまえの全部隊が埋まっている。
待っていろ、
ボナパルト。
待っていろよ、ナポレオン、
待っていろ、おまえをきっと掴まえて見せるから」。

次に続けてなされたことは、不具者に対してまた来るように合図がなされたことであった。誰もが今や自分の妻に対してその嘲笑歌を持ち帰ろうと欲した。報知紙の朗読の際に見られた同情はもはや残っていなかった。特にシュネーケルは増大する、喘息発作に伴われた快適な響き、「クレムリン全体の中で、ゼンメル[巻きパン]一つない」を繰り返した。彼らの朗読と笑い声は周りのテーブルの注目を引いた。そして一人の老紳士が、勿論彼らの陽気さに加わろうという雰囲気は見られなかったが、近寄って来た。彼はラーベから「クレムさん」と挨拶され、しかしシュタッペンベックからは格別の、若干嘲笑を帯びた調子の「クレム曹長殿」と挨拶された。シュタッペンベックが名付けた地位は部分的に彼の姿の特異さを説明していた。彼は真っ直ぐな姿勢で、乏しい白髪を、大きな櫛で後の方に留め合わせていて、長く青い上着と硫黄色のチョッキに合わせて、対の騎兵用長靴を履いていて、これは膝の所までピカピカに磨かれていた。固い襟飾りの中に痩せた首が収まっていた。

「お掛けになりませんか、クレムさん」とラーベは尋ねた。

「もう読まれましたか、クレム曹長殿」とシュタッペンベックが付け加えて、彼にビラを渡した。それは彼がその間に彼にとって肝心の歌が上に来るよう折り畳まれていた。

クレムは感謝して、その嘲笑詩を読んだ。その間彼は自分のオランダ製のパイプからは小さな煙も吹き出さなかった。彼は顔を歪めずに、読み終わると、そのビラをテーブルに置いて、言った。「警察は、自分達に関係しない多くのことに気を回しているが、目を開けるべきときに、目を閉ざしている。これはどういう次第になるか。暴動と反逆になる。この歌の結末は何か。我々は左手の代わりに、両手首を縛られ、その上両足を縛られることになろう」。

彼は自分の右手の指の節で自分の前のビラを叩いて、続けた。「我々は皇帝と同盟を結んでいないか。遅すぎたがな。前から同盟を結んでいたなら、我々はもっと上等な具合であろう。しかし以前の過ちはまた修復可能だ。修復がなされれば、結構、なされなければ、つまり我々が現場を押さえられたら、我々はお仕舞いだ。忠誠のことを私は話したくない。政治は忠誠であることを必要としない。しかし利口でなければならない、利口でな、諸君」。

「今何が利口なことか、明らかなことだ」とシュタッペンベックが言った、「皇帝はただ瓦礫を持っているだけで、ロシア人が後から追って来る。我々は前から追う。パタンと叩けばいい。すると奴は蠅叩きの下にいる」。

「蠅叩きだと。亭主抜きで勘定をなさっている、ブラシ製造人のシュタッペンベック殿。ロシア人は追って来ません。確かです。しかし追って来たら、ニエメン川を越えて、ヴィスワ川[ヴァイクセル川]を越えて来たら、勿論貴方は同じようなことを見ることになりましょう。しかし蠅叩きではありません。鼠捕りです。誰がその中に入るか、ロシア人です」。

「そうかもしれない。聞きたくなった」とラーベが言った。

「ニートリヒさん、チョークを一本貸してくれますか」。

ニートリヒが飛び起きた。

「いや、結構です。私のポケットにここにまだ一本ありました」。

こう言って、戦略家の曹長はグラスをまとめて隅の方に寄せて、上方から下方へ緑のテーブルの上で一本の線を引いた。「つまりこの太い線が」と彼は始めた、「国境で、右手がロシア、左手にプロイセン、ポーランドがあります。皆さん注意してください、ポーランドをお忘れなく。この左の点がベルリンです。そしてここのベルリンと太いロシアの国境線の間に、この二つの小さな蛇行線があります。これがオーダー川とヴィスワ川[ヴァイクセル川]です。さて承知していなければなりませんが、オーダー川とヴィスワ川に沿って六つの要塞に三万のフランス人が潜んでいます。同様の数の者がここ下のポーランドに、所謂側面陣地で、半ば背を向けて準備しています。繰り返しますが、ご注意下さい。というのはこの側面陣地が肝要ですから。今やロシア人が追って来ます。ロシア人は弱い、というのは一つの軍が凍えると、次の軍も凍えるからで、よたよたとヴィスワ川を渡ります。するとどうなりますか。オーダー川の要塞から三万の休んでいた部隊が向かって行きます。側面陣地からは別の三万の兵で、ロシア人の前にいて、退路を断ちます。パタン、するとロシア人が中に収まります。これが鼠捕りと呼ばれるものです。罠が閉まる箇所を示して進ぜよう。ここここの地点です。ケスリーンに違いない、ひょっとしたらフィレーネかもしれない。賭けてもいいが、ケスリーンとフィレーネの間でロシア軍は降伏します。ウルム近郊でのマック[Karl Freiherr Mack von Leiberich（1752-1828）オーストリアの将軍、一八〇五年ナポレオンに負けた]のように。降伏しない者は死んでいる者です」。

「俺は一切信じない」とシュタッペンベックは言って、彼の粗ラシャの上着の袖で鼠捕り全体をテーブルから拭き消した。

「無理に信じろとは言いません」とクレムは静かに勝ち誇った表情で言った。「軍事戦略は難しい、ブラシ製造人には」　ー

「それに曹長には、ー」。

「やはり手に負えない」とクレムは自分の文を結んだ。

「やはり手に負えない」とシュタッペンベックは繰り返した。

シュネーケルはこの掛け合いに重々しい喘息性の笑いで応じた。しかしラーベは、喧嘩、口論に至るようなもの一切に反対であって、立ち上がって言った。「皆、時間だ。私は出る、一緒に出るか」。皆が要請に応じて、購入したビラをポケットに収めて、短く、「良い晩を、クレムさん」と言って、クレムの側を通り、出口へ歩んで行った。皆がほとんど出口の所に来たとき、黄色の、中等の大きさの犬が追いかけて来て、忘れられていたと不安げに、小さなニートリヒの脚の間を駆け抜けて、それでかろうじてニートリヒはバランスを保つことになった。それはシュタッペンベックのスピッツのクラッツァーで、その間ずっと子供達のいるテーブルの許で輪形クッキーと戯れていたもので、不格好な動物で、

主人同様に強情で片意地であった。今やこの犬は主人に高く飛びつき、くんくん鳴き、吠え、追いかけ、外の野外に出ると、ヴィントミューレンベルクの高原を縦横に、明らかに喜んで、今までの社交的強制の後、また跳ね飛んでいた。

四人の市民達はかなり幅広の歩道で耐えていた。この歩道はヴィーゼッッケの店のかなりの数の客がプレンツラウの市門の方へかけて厚く降り積もっている雪を踏み固めていたものであった。ラーベは、寒かったけれども、ひときわ上品なその姿勢を保っていた。しかし他の三人は、余り外見に構わずに、帽子を目深に被っていて、耳の許まで高く、厚い編まれたマフラーを巻き付けていた。東風で話すことができないシュネーケルはしばらく立ち止まった。ニートリヒは他の二人と並ぶ線を保っていたが、小股歩きなので苦労していた。

会話はすぐには始まろうとしなかった。ようやくラーベが、彼は思考が素早いというよりは長く続く方であったので、始めた。

「思うに、シュタッペンベックよ、おまえさんは彼の取り扱いがぞんざいすぎるぞ。つまり考えてみたのだ。第一に彼は老公だ、第二に彼は兵士だ、第三にトルガウ近郊の戦い[1760、Zieten 活躍]で勝利を収めたのだぞ」。

「そう収めた」とニートリヒは叫んだ。彼は他人の明白に述べられた文、殊にラーベによって発せられた文には好んで賛同するのであった。

シュタッペンベックは立ち止まって、犬を口笛で呼んだ。クラッツァーは大きく跳ねて寄って来て、数回吠えて、それからまた、あたかも邪悪な敵に追いかけられているかのように、雪の積もっているヴィントミューレンベルクの上を荒々しくジグザグに駆けて行った。「見ろよ」とシュタッペンベックは言った、「あのようにクレムはトルガウ近郊の戦いで勝ったのだ。いつも手に脚を入れてな。嬉しいから、走ったのさ」。

「しかし彼は集合をかけたそうだぞ」とラーベがまた言葉を発した、「よくその件は覚えている。『そちの名は何だ』と国王は、彼がばらばらになった歩兵に整列するようにしたのを見て、彼に尋ねたのだ。『クレムです、陛下』。　ー　『健気なことだ、親愛なるクレム、そちのことは覚えておこう』。それから国王は更に馬で行かれた。私は彼が自ら語るのを耳にしたのだ」。

「誰が。国王が語ったのか」。

「違う、クレムだ」。

シュタッペンベックは笑った。「ラーベ、それは単なる間違いだ。おまえさんは何でも信ずる。この殿方は私の方がよく知っている。彼はトルガウ近郊で整列させた歩兵達の中の一人ではない。整列させられた者達の中の一人だ。それも老フリッツ[大王]の自ら有する撞木杖によってだぞ。『おい、ダチ公、お主らは永遠に生きる気か』と。このいとも恵み深い呼びかけに対し、我らのクレムは栄誉ある分け前に与っているのだ」。

「おまえさんは彼が好きでない、シュタッペンベック。何か恨みでもあるのか」。

「この曹長には恨みはどんなに抱いても十分じゃねえ。徹頭徹尾劣等な奴だ。臆病者で、法螺吹きで、乞食だ」。

「乞食だと」とラーベが尋ねた。

「そうだ、乞食だ」とここでニートリヒが口を挿んだ。彼はこの勝負がどうやらシュタッペンベックに有利に終わりそうだと素早く判断していた、「乞食だよ。夏にはいろんな

荘園に居座っている、ブレードー家やロール家の許だ。彼らは気がいい。これが彼の放牧の時だな。そして十二月の初めに家畜の屠殺される時分には、彼はもう長い新年の賀詞を述べにやって来る。ただまた自分のことを思い出して貰うためだ。喜捨も貰う。大した額だ。彼が自らドゥカーテン貨幣を磨くのを見たことがある」。

「まあ、まあ」とラーベは言った、「生活に困窮していたなら、　ー」。

「吝嗇で、それにならず者だ」とシュタッペンベックは、ますます熱を帯びて、また言葉を発し、話す時邪魔になる厚いマフラーを若干より深く顎の下に引き下げた。「俺は自分の言っていることを請け合うぞ。彼は俺の妻の兄の家に住んでいる。あいつらは知っているぞ。奴は太鼓持ちで、スパイだ」。

「まあ、まあ」とラーベは繰り返した。

「たとえスパイではなくても、それは証明が難しいから、もっとも固く確かにスパイだと思っているが、彼は、しかし恩知らずの屑だ。ニートリヒが言っていたように、彼はハーフェルラントの貴族達の許で、この貴族達のことを皆俺はブラシのせいで知っているが、何度もおこぼれに与っていて、これは以前のことで、良き時代のことだ。彼の正直な時代と言おう。俺も人のことは言えない、誰に対しても生活だから大目に見ている、他の諸々も。しかし一八〇六年以来、我らのクレムはハーフェルラントの貴族達のことをもはや知らないのだ。他の貴族達のことも知らない、以前は曹長が宿営としていたのに。領主を替えたのだ。犬だってしないぞ。『クラッツァー』、ほら犬はもうやって来る。『お座り、クラッツァー』、忠実な動物だ。しかしこのクレムときたら、匙付帽のフランス部隊がハレの市門を通って来て、一週間と経たないうちに、奴等の皆と仲良しになりおって、将軍達の許に押しかけ、挨拶し、告げ口しているのだ。それでドゥカーテン貨幣の代わりにルイドール金貨となった。奴は追従者で、日和見主義者だ。それでイエナ会戦[1806]の前まではフランス人を皇帝もろとも料理していたのに、今ではロシア人を料理すると言う。そしてチョークで鼠捕りをテーブルに描いて、捕らえようとしている。しかし消してやったがね」。

この瞬間、二本のフランス人の合図のホルンが響いて来て、直に太鼓の鈍い音も聞こえ、シュタッペンベックの演説の流れを中断させた。彼はまだ最後の言葉を発し終えていないように見えた。四人は立ち止まって、聞き入った。シュネーケルもその間に近寄って来たからである。そこに見られた最後の者はクラッツァーであった。犬はその首を主人の膝に当てて、空中で鼻をくんくん言わせ、鳴き、自分も考えごとをしているかのような振りをした。

「退却[消灯]だな」とシュタッペンベックは、自分の言葉の二重の意味を表現するかのような調子で言った。

「南無三宝」、とラーベは答えた。

それから、ホルンの響きが消える間に、男達は家路を急いだ。彼らの前には町が千もの明かりと共にあったが、遂には高原から市門へと下って行く峡谷となって、明かりの光景が消えた。

しかし彼らの上には冬空の星々があって、明るく新年へと瞬いていた。

第三章

フォン・ラダリンスキー枢密顧問官

フォン・ラダリンスキー枢密顧問官が住んでいる家は、旧ベルリン法廷の斜め向かい側のケーニヒ通りにあった。それは先の世紀の初頭に由来する、当時フリードリヒ一世［1657-1713］の命令で建造された後期ルネンサンス様式の建築物で、正面は多様な無趣味な修復によって不様であったが、しかし内部は以前の荘重さを完全に保っていた。特にこのことが妥当するのは、中庭や階段の他に、二階全体であって、そこには応接室や社交室があった。ここにはまだシュリューター[Andreas Schlüter(1662-1714)]作のバロックの建築物に多くの魅力と生気とを与えているかの化粧漆喰が見られたし、天井からは、かなり薄暗くなっていたけれども、マントヴァのコルテ・レアーレ宮にある、大きな、ジュリオ・ロマーノ[Giulio Romano(1499-1546)]の原画を模倣して作った天井画が覗いていた。これは、華美好みの国王が二階全体を装飾させたときのものであった。これらの社交室に接して左右に、二つの小規模の部屋があった。幅広の壁の平面に一つの窓があって、よく使用されるので、損失も多く、かつての豊かな装飾からは単に天井画のみが残っていて、中でも「夜と朝」、それに「パエトンの墜落」が救済されていた。

この二つの小規模の部屋の一つが枢密顧問官の仕事部屋であった。その部屋の戸口の向かい側にある縦長の壁には二つの高い、全書類棚を形成する文書の書架が収まっていた。これらの書架の間にある残った壁の平縁には美しく若い女性の肖像画が掛かっていた。カティンカとの類似性は紛れもなかった。同じ赤みを帯びた栗毛色の髪、とりわけ同じ目の表情は、唯一の差異、余り鋭く彫り込まれていないプロフィールを些細なことに思わせていた。部屋の半分の長さほどの大きな仕事机があった。机の位置は、枢密顧問官が目を上げると、美しい女性の肖像画に出会う風になっていた。ちなみにこの小部屋は独身の若者の部屋設備を思い出させていた。古風な、聖書の物語の挿絵で飾られた暖炉の横に、かなり大きな、しかし平らな、赤い継ぎ布切れで満たされた籠があって、人目を引いた。これはイギリス産のグレーハウンドの住処となるものであった。一方窓の壁龕[ニッチ]にあるガラスの水槽の中には何匹かの金魚がいて元気に泳いでいた。半ば下ろされたブラインドは、いずれにせよただほどほどに差し込む日光を和らげていた。すべては温かく心地良かった。

小さな振子時計が丁度十時を打ったとき、枢密顧問官が入って来た。六十歳代、大柄で痩身、短く刈られた灰色の髪は一杯あり密で上に向かっていた。彼は菫色のビロードのナイトガウンを着ていて、その下ではすでに入念な身繕いを済ませていた。彼の姿勢、とりわけ鷲鼻は、何か決然たる卓抜さを印象付けていた。グレーハウンドが彼に寄って来て、彼に恭しく、しかしうんざりしたように挨拶して、それから震えながら首の鈴をあちこち鳴らしながら、また温かい籠に戻って行った。枢密顧問官自身は水槽の方へ歩んで行って、金魚に二，三のパン切れや昆虫の卵を餌として与えた。彼はそこに数分留まっていて、仕事机に腰を下ろした。その机の上には職務上の書類が、それに幾つかの新聞も、その中にはイギリスやフランスの新聞もあったが、広がっていた。彼はまず、すべての書かれたものを片付ける習慣であった。今日彼は新聞に向かって、「モニトゥール」紙［1800-69、フランス政府の官報］を取った。

十五分間だけ我々は彼の読書の邪魔をしないで、彼が歓迎の祝典や忠誠の上奏文に読み

耽っている間に、彼の生涯の若干を語ることにしよう。

アレクサンダー・フォン・ラダリンスキーは先の世紀の半ばに、ビヤラノヴォ城で、つまり同じ名前の領地の中心地で生まれた、次に大きな町は、数マイル離れているが、チェンストハウ[実在、チェンストホヴァ、ヴァルタ河畔]であった。領地として所有する荘園の幾つかは西側に移り、その主要な財産と一緒にシュレージエンの公爵領に編入され、この公爵領はまさにプロイセンのものとなっていた。

若いラダリンスキーは入念な教育を受けて、この教育を完成させるために、まずパリへ行き、それからウィーンへ行き、二十三歳のとき、まさに自分の荘園の管理を引き継いだのであった。国の諸状況が彼を政治的戦いに巻き込んでいた。彼は戦いを好まなかったが、この戦いに足を踏み入れてからは、良心的に戦いを遂行した。彼は帝国議会に席を有し、反ロシアの党派の指導者の中では、傑出した者の一人に数えられた。すでに当時彼の姿勢な中で一度ならずプロイセンに肩入れするものが表明されていた。この肩入れが、ひょっとしたら彼の所有地の一部がプロイセンの国家同盟に属していたというすでに言及された事情と合わさって、フリードリヒ・ヴィルヘルム二世の戴冠の際に[一七八六年]、彼の使命をベルリン宮廷へと向かわせる契機となったものと思われる。彼はベルリン宮廷の中に自分を引き立てる対応を見いだした。殊にビショフスヴェルダー[Johann Rudolf von Bischoffwerder(1741-1803)参照、神秘主義者]の側は積極的で、この家へ彼は間もなく毎日の客人となった。ここで、彼は若い伯爵令嬢、ジドーニエ・フン・プダグラと知り合いにもなった。彼を最初の瞬間魅了したものは、彼女の美しさ以上に、更に彼女の気まぐれの陽気な放縦さで、つまり優美な無鉄砲さでなされる手管であり、人生の泡をすくい取って棄てるものであった。彼自身に固有のものとして、少なくとも若い頃、自分に満足できない点として自覚されていた何か衒学的なものが、専ら彼にこの手管を一種の長所の明かりで照らし出した。彼がベルリンを去る前に婚約が祝われた。それからクリスマスの週に結婚式が続いた。結婚式は王子ハインリヒの宮廷全員の出席の下、花嫁の兄と兄嫁によって、つまりフォン・プダグラ伯爵夫妻によって、ラインスベルクで準備された。

すでに結婚式の式典が輝かしい性格を帯びていたとすれば、結婚式旅行は更にそれ以上であった。それは皇妃の輿入れのようであった。休憩地ごとに常に新たな驚きがあって、これは目的地に近付くほどに大きなものとなって行った。最後に、彼らの前にビヤラノヴォが、高く、夕闇の中にまだそれと分かって控えていた。そして最前列の橇が広大で、冬枯れの並木道へと曲がって入ったとき、四つの厚い円塔では四つの大きな炎が点火された。その明かりの中、今や古い、半ば朽ちた煉瓦建築がメルヘンの城のように横たわっていた。すべての荘民の歓喜の叫び声の下、若いカップルは城の中庭へ乗り入れた。

夫は、夫自身の手で演出したこの芝居の無事の遂行を喜ぶ余り、若き夫人の表情に余り注意を向けて観察していなかった。さもなければ気付いていたに違いなかった、つまり夫人がこの思いやりの本来の価値に何の理解も有していない、と。この思いやりの中で語られていた愛に、彼女は気付かず、あるいは感動しなかった。彼女は感謝していなかった。

そして彼女はこの気分のままであった。彼女を陽気と思った彼女の夫は、彼女は幸せであると信じた。しかし彼女は単に表面的にそうであって、享楽と気散じの他は何の責務も知らなかった。彼女にとって、彼女の夫が思いやりで尽くす対応は月並みで疲れるものに見えた。ただわずかに外からやってくる忠誠のみが大事であった。

結婚式から一年後、家では息子が一人生まれた。この子供はペルトゥーバルという名前を得た。この名前は最古の昔からこの家系では使われていて、各世紀に少なくとも一度は輝きを帯びるのであった。あるペルトゥーバル・フォン・ラダリンスキーはイヴァン雷帝[1530-84]に遠征を行っていて、この名前の次の者はタンネンベルクの戦いで[1410]、三番目の者はウィーンの前で[1683]ゾビエスキーの下、倒れていた。この名前はシリア風で、十字軍に由来すると言われていた。しかし皆が、古文書から明らかなように、「トゥーバル」という短縮を、完全な名前よりも優先させていた。

息子の誕生は、世間が皆賀詞を述べなければならないと思っていたのに対し、母親の側からはほとんど邪魔なものと思われていて、母親は実際乳呑み児を渡されると、臥所からこう述べた。自分は小さな子供はいつも好きになれなかった、自分自身の子供だからと言って、例外とするわけに行かない、と。子供は、赤い頭巾をした、更にもっと赤い胸掛けをしたポーランドの乳母を得た。そしてこの女性、世話係の女性と共に上の階にやられた。しかし母親は最初の教会参詣を済ませると、すぐに中止されていた社交を新たに始めた。この社交は「喜ばしい出来事[おめでた]」で単に数週間中断されたわけであった。

ビヤラノヴォ城と付き合いのある者達の中に、ミークシュ伯爵もいた。近隣の荘園主で、小さく、小綺麗で、長く、赤いブロンドの鼻下髭を有し、典型的ポーランドの騎士の風采であった。彼の性質が若い夫人の性質と近いために、最初から両者の間にある親密さが生じていた。この親密さは、全く公然と行われていたので、ラダリンスキーは確かに気付いていたが、しかし邪推を抱くことはなかった。彼は完全に信頼していた。彼に知らされた個々の事を、彼は戯言、嫉妬として退けた。それでも時に軽い雲が彼の天を陰鬱にすると、彼の妻は、大胆に、このような嫉妬の情動にただ陽気な嘲笑で答えて、速やかに彼の信頼を回復させる術を心得ていた。彼は幸せで、カティンカが生まれると幸せは倍増した。自分の喜びが彼の妻とも共有されると知ったからである。実際この若い母は、トゥーバルを見たときとは違った目でこの二番目の子供を見ていた。子供は上の階に押しやられずに、むしろ彼女に直接間近に留まっていて、いや、彼女はその揺り籠に近寄って、一言も言わなかったが、その姿を見て喜ぶことを好んだ。この子供に自分自身を見ていたのであろうか。

これは一七九二年の春であった。快活な夏が続いた、しかし秋になると、最初から単に見せかけであった一つの幸福が瓦解した。同様な事件の場合いつも起こることが生じた。禁じられていたことが、最後の強制力を失って、世間に公表することに満足を見いだした。

その遂行の仕方は、若い夫人の性格に合っていた。ミークシュ伯爵の許で狐狩りが告知された。伯爵の広大な、唯一の大きな平面を形成する領地は立派な地形を提供していた。近隣荘園のレディー達も招待され、誰も欠けていなかった。伯爵は、他の社交的長所に加え、立派な饗応の良さの評判を得ていた。素晴らしい九月の一日で、天は鐘のように輝き、ここかしこで松の手入れがなされ、地平線上には次の小都市の尖った教会の塔が見えた。風は凪ぎ、夏の蜘蛛の糸が浮遊していた。狐がやがて狩られ、輝く行列をなして、騎士や騎士の夫人達が野原や刈り株畑を越えて銃を放ち、誰もが他人に勝ろうと欲していた。ただフォン・ラダリンスキー夫人は残っていて、ミークシュ伯爵も彼女の側にいた。両人はこの日の栄光の断念を欲しているかのように見えた。しかし間もなくこの図柄が変わった。ますます多くのカップルが最前列から離れて行くにつれ、一時間もしないうちに、伯爵と

その連れの夫人のみが、その狩を続行する、あるいは続行するように見える、唯一のカップルとなっていた。残っている者達は、二人を見送りながら、両騎乗者の辛抱に惚れ惚れとしていた。二人の姿は、青い薄明かりの中の小都市に近付くにつれ、ますます小さく、ますます影のようになっていった。最後に二人は全く消えた。そして正午に近付いたとき、人々は伯爵の城に戻る決心をした。一時間過ぎた、二時間、三時間と過ぎた。夕方となった。人々はまだ待っていた。とうとう客人達は出発して、自分達の荘園に戻ることになった。彼らの中にラダリンスキーもいた。「やはりそうか」と彼の心の中で百度も反復された。三日目になってようやく一人の使者が封をされた書き付けを彼に渡した。「私の帰りを待たないでください。もはや二度とお目にかかることはありません。私どもを導いて来たのは一つの錯誤でした。お忘れください。子供には接吻を送ります。

ジドーニエ・フォン・Ｐ.」。

書き付けは彼の手から落ちた。一言一言が屈辱であった。彼女の署名、ジドーニエ・フォン・Ｐ.さえもそうであった。従ってまた彼女は自分の家系の名前を名乗り、彼女が彼の側で過ごした六年間を、不快な間奏曲のように消してしまったのであった。彼は打ちのめされた。しかし彼は彼女が述べた「お忘れください」の短い要請に応えることが出来なかった。自らの極めて苦い恥辱ではあったが、彼はこう自らに告白した。彼女が戻って来たら、一言の非難も説明もせずに、喜んでまた彼女を受け入れることにしよう、と。彼の中では自然の謎めいた特徴がすべての観念よりも強かった。

彼は鬱々としていたが、彼の国の運命が彼を拉致した。かの一連の出来事が生じて、結局ポーランドは諸国家の列から消された。ロシアが色々画策した。これを挫くこと、これにすべての愛国者達の努力が向けられた。彼はコシチュシュコ[Kosciuszko（1746-1817）]の党派に与して、イギリス議会でホイッグ党の支持者の喝采を受けたリベラルな憲法を企画した。最後に武力勝負ということになったとき、彼は軍に入った。軍事的経験で欠けていたものは、度胸と熱意で補う術を心得ていた。コシチュシュコが彼ほどに信頼を置いていた者は他にいなかった。シュチェコチニ近郊の戦いの際[一七九四年六月六日、ロシア勝利]、彼は最後まで耐えた。マチェヨヴィツェの不幸な戦い[一七九四年十月十日]の後、プラガへ退却する際に、彼は四個の弱体化した大隊から成る後衛の指揮を任された。これらと共にピリツァ川[ヴィスワ川支流]の渡橋を二時間にわたって防ぎ、まだ橋の向こう側にいて敵と戦っている最中、その時間を利用して、タールを塗った麦藁冠を木の支柱の周りに置き、この冠を点火させた。彼が自分の大隊の残りを無事に渡り終えさせたとき、橋はすでに煙と炎に包まれていた。ロシア人達が後を追って来た。ロシア人達の弱い一部の部隊が同時に一緒に渡ったが、これらはその後すぐに捕縛された。しかし本隊が集団で追って来たとき、半ば燃え落ちていて中央の支柱が瓦解して、橋上にいた者達は皆、落下した。スヴォーロフ[Suworow（1729-1800）、ロシアの将軍]自身、この災難の地から百歩と離れていなかった。それは野外では最後の輝かしい行動であった。三日後にプラガが落ちた。

ラダリンスキーは指揮を止めた。彼はそう言わなかったが、彼の戦友の言う「ポーランドの終わり」をそれでも彼は感じた。国がロシア化するであろうこと、ひょっとしたら見せかけの独立を得るかもしれないということは彼には明らかであった。この考えは彼には耐え難かった。もはやポーランドはなかった。かくて彼は亡命を決意した。彼はまず国境

の向こう側にあったシュレージエンの荘園に赴いて、ここからプロイセン宮廷に彼の勤務を申し出た。ビショフスヴェルダーの折り返しの返信は、素早く勇敢になされた決意に対して彼の喜びが表明されていて、国王の承認は留保されていたが、彼を外交職に任命していた。この承認は数日後になされた。丁度ポーランドの大平原は当時プロイセンに編入されており、国家行政はこのような[ラダリンスキーの]申し出を拒絶する謂われがなかった。

速やかにラダリンスキーは新しい状況に適応した。ポーランド的というよりは、むしろプロイセン的に出来ていた彼の性情が彼の支えとなった。無秩序や恣意的なものが嫌いで、彼は自分が今や参入した統治機関に自分の理想が実現していると思った。ここに見られる害悪を彼は見過ごしていたか、あるいは些細なことと見なした。それとは逆な仕方の欠点を何年間も見続けていたせいもあった。彼はやがてプロイセン人そのものよりもプロイセン的になった。彼に与えられた顕彰、最初はコペンハーゲンへと、次にはイギリス宮廷へと向かった彼の仕事、この際彼は当時まだ子供であったトゥーバルを連れて行ったが、これらは然るべき成果を上げた。国王の死後、それにビショフスヴェルダーの失脚の後、ロンドンから呼び戻されて、彼はまずは自分の国家帰属を証明しようという正しい感情の下、プロテスタントに改宗した。彼は宮廷の教会に属していたが故に、改革教会[カルヴィン主義]を選んだ。良心の躊躇いというものは啓蒙主義の当時馴染みのないものであった。彼の地位の声望に、統治[国王]の交替は何の影響もなかった。もっともこの地位そのものは別の地位になった。彼は外交職を離れて、一般財務管理に、王領の部門に任命された。彼の農学上の知識は、これはかなりのもので、ここで有利な応用を見いだすことができた。この職を引き受けると同時に、彼の住まいもケーニヒ通りの古い宮殿と関連することになった。彼はここに住んで今や十五年となっていた。カティンカはこの宮殿で大きくなった。

時々彼にビヤラノヴォと四つの煉瓦造りの塔のある古い城への憧れが、彼の人生の最も素晴らしい時と最も困難な時とを結び付けているこの土地への憧れが、忍び込んで来たか、誰か尋ねようとするであろうか。そのことを仄めかすような言葉は一言もかつて彼の唇に上がったことがなかった。彼は自分の養父とした祖国で幸せであるように見えた、ひょっとしたら実際そうであったかもしれなかった。そして、自分の古い故郷には、この故郷が国家としての独立を、一瞬そう見えはしたが、また与えられることになろうとも、戻ることはないと固く決意して、彼は王子達の諸宮廷に仕え、この堅固な与えられた点から、次第にますます親密になって行く諸関係の中で、この国の貴族へとのし上がって行くことにした。彼は自分が告白する以上に、ただこれらの諸計画の遂行のために生きていて、ちなみにこの諸計画に関しては、義理の姉の「アメリー伯母」の支えを頼みとしていて、それ故自分の子供達がホーエン・フィーツに滞在することを何よりも好んでいた。マルク地方の古い家系との二重の結婚は彼が踏み込んだ歩みをまず確実なものとするものであって、カティンカのポーランドへの共感に対して心を落ち着かせるものであった。カティンカの共感は、その共感の理由は何であれ、彼にとって秘密ではなかった。

枢密顧問官はその間に閲覧を終えていた。彼は書類を脇に除けて、呼び鈴を鳴らした。従僕が入って来て、ココアを持って来た。従僕がまだ再び部屋を去らないうちに、早速グレーハウンドが籠から寄って来た。このたびはうんざりしていなかった。そして主人の側面に体を押し付けた。枢密顧問官は微笑して、ビスケットを投げ与えた。この優しさへの

褒美であった。このとき初めて彼は同じ盆にあった一通の手紙に気付いた。アメリー伯母の特徴的な筆跡が見られた。彼は若干驚いた。前日の晩ようやく、遅い時間になって、トゥーバルとカティンカはグーゼ城から戻って来た。二人と挨拶を交わす時間はまだ見られないまま、すでに一通の手紙が来ていた。従ってこの手紙はベルリンへの旅をかなり二人と同時に行ったに相違なかった。枢密顧問官は封を開けて、読んだ。

「親愛ナル、ラダリンスキー。トゥーバルとカティンカはようやく一時間前に去り、二人と一緒に残念ながらアルセスト嬢が去りました。貴方はきっとこの嬢のことを昔のラインスベルクの日々から思い出されることでしょう。私は、全くいつになく、空漠を感じまして、滞在してくれたお蔭でここ数日快適な思いで過ごすことになった子供達のことをお話しして、この空漠を埋めることに致します。子供達と会うことが嬉しく思われるにつれ（実際子供達ニハ惚レ惚レシマス)、私どもがしばしば語り合ったかの二組のカップルへの願いがますます強くなってきます。私はトゥーバルがグーゼで仕切り、管理し、私の手ではただ露命を繋いでいるだけの昔のデルフリンガーの居住地が昔日の栄光を取り戻す夢に浸って生きてきました。その為に彼が必要とする助力はホーエン・フィーツから確実に得られることでしょう。様々な国籍の美しい女性達がそこをいつも住処としていました。私の祖母は百合ト薔薇ノ肌ヲシテ、ブラーエ一族であり、ベルントの妻はデュムラン家の出で、このサークルを私どもの寵児で拡大できれば嬉しいことに存じます。貴方ハ夙ニコノコトヲ御承知デス。シカシ物事ハ私ドモノ願望ト違ッテ来テイマス。若いホーエン・フィーツの二人には確信を抱いていますが､しかしラダリンスキー家には確信を抱けません。カティンカはレーヴィーンの忠誠を受け入れ、ちなみに彼女は彼と戯れています。トゥーバルはレナーテに心を寄せています。ソウシナイ者ガイマショウカ。しかしこうした感情は、青春と美とがいつでも語りかけてくれるかの快適さ以上のものを意味していません。それで私は難しさを感じていまして、カティンカの場合、感情の無関心、トゥーバルの場合、感情の表面性になっているように思われます。ドチラモ好マシクアリマセン。明らかにカティンカは別な方への好みを隠し持っています。貴方の家への伯爵の訪問は私どもの計画の妨げとなります。しかし変えられないことでしょう。一切ふさわしいことは、情熱を焚き付けるようなことに用心して、それを避けることです。親愛ナル義弟ノ方、貴方は賢明に適切に対応なさると信じています。私としては別離を一番に推奨しています。レーヴィーンは自分の狭いサークルから出る必要があります。彼はとりわけ文学的振る舞いを脱却しなければなりません。彼は貴族にはふさわしくないほど文学に根本的に真剣に取り組んでいます。これは確かに面白いでしょうが、しかし専門的に関わるべきものではありません。衷心カラ望ンデオリマスガ、フランスと良好な関係ならば、彼のためには、パリへの一年間の滞在が叶えば幸せなものと思います。彼はそうなれば、世の紳士然としたものを得ましょう。これは今彼に欠けているもので、カティンカは唯一これに重きを置いています。私モ同ジデス。

私ハフランスニ言及シマシタ。私の弟は私が「良き関係の存続」のことについて話したと知ったら、私を内乱罪で訴えることでしょう。それでもこれがまさに私の振る舞いで、いずれせよ私にふさわしい以上に、この願いを強く抱いています。弟ハ全テヲ仕切ッテイマス。オーダーブルフの全ての地に限無く国民武装へと呼びかけて、そのために百もの名前を遣っています。国防、国民軍、『最終動員』。熱中する余り、弟はこの最後の呼称が

恐れを呼び起こす代わりに、単に悲喜劇的に響くことを見逃しています。弟はドロッセルシュタインの心を掴みました。バメについては言うまでもありません。この人は愚行や大胆さが席を争う段になると、いつも決まって名乗りを上げるに違いないのです。それが彼の専門です。彼の大小のクヴィルルスドルフの民を中部マルク地方のゲリラ兵として考えると可笑しくなります。これらの村々には平均して六丁の猟銃しか見当たらないのに、ネー元帥[Michel Ney（1769-1815)]に対峙しようと言うのですから、モスクワでの英雄、ネーにですよ。私ニ関シマシテハ、このような途方もない行為に対し、狂気の沙汰の印象を持っています。私が無条件に信頼している国家の宰相の英知でもって、私どもを破滅させ、他の諸国の同情すらも貰えないような政治から守って頂きたいと切望しております。滑稽ナモノハ同情シテ貰エルモノデハアリマセン。

私はより静かな時代と、より安定して状況とを信頼して願っています。ロシアは攻撃的勢力ではありません。フランスは世界征服の計画を埋葬し、二十年に及ぶ不穏な時代の後に、平和の時代を到来させることでしょう。私ハソレヲ確信シテイマス。パリは、過去、常にそうであったもの、未来、止めることがないであろうもの、これにまたなることでしょう。つまりヨーロッパ文明ノ心臓デス。ソレヲ皆ノ関心ノ為ニ、私ドモノ関心ノ為ニ願ッテイマス。貴方ニ神様ノ御加護ガ有リマスヨウニ。親愛ナル、ラダリンスキー様。

貴方ノ良キ友、アメリー・P.」。

枢密顧問官は手紙を手から置いた。その政治的意見は余り印象を残さなかったが、カティンカとブニンスキーについての先立つ意見はそれだけ一層大きな印象を彼に残した。彼は今一度その箇所を読んだ。「貴方の家への伯爵の訪問は私どもの計画の妨げとなります。しかし変えられないことでしょう。一切ふさわしいことは、情熱を焚き付けるようなことに用心して、それを避けることです」。彼が顔を上げると、彼の視線は美しい向かい側の女性像に止まった。最初は未来に対する恐れも混じった諸々の思い出が彼の中に湧いて来た。彼は多くの家庭での話しに熟知していた。「遺伝する、...」。しかし彼がその思考を展開する間もなく、彼に挨拶の呼び声がした。「おはよう、父上」。自分の椅子で向きを変えながら、彼はカティンカを見た。彼女は戸のカーテンに頭を隠しながら、彼に優しく頷いていた。その瞬間彼女は彼の側に来ていた。彼女の愛撫を受けながら、丁度今まで彼の魂の前に立っていた陰鬱なイメージが消えた。

第四章
フーレン夫人の許で

その同じ晩、フーレン夫人の許で社交パーティーがあった。このパーティーを自分の身分にふさわしいものにし、有する部屋の一連の列をすべて開放しようと思うならば、引き延ばすことができなかった。レーヴィーンが翌日にはもうホーエン・フィーツから戻って来ると告げていたからである。この手紙を貰った後、小さな足萎えの若者の助けを借りて、この若者は隣室の貯蔵庫でビール瓶を洗ったり、たまに体の不具のせいで使い番をさせられていたのだが、パーティー招待に行き、例外なく承諾の返事を貰って来ていた。

七時にはフーレン夫人の住まいのすべてに明かりが点された。この住まいは、小さな、すでに側翼にある台所の他に、二つの正面の部屋と二つの暗い小部屋[アルコーヴ]から成り立っていた。その半分はレーヴィーンに借用されていた。しかし彼は自分が不在の折、

自分とこの女将との間の親しい間柄故に、自分の住居部分が祝祭の部屋にされてしまうことに少しも異存はなかった。

今日それらは祝祭の部屋となっていた、廊下まで惜しみなく使われていた明かりや蠟燭は全く抜きにしてもそうであった。両ストーブは暖房され、蛇腹には赤と黒の香蠟燭が燻されていて、一方すべての工芸品、記念の品が、これらにフーレン夫人は客人達の格別の注目を向けさせたいと願っていたが、特別な、それらの品にふさわしい照明を受けていた。これらの品の中には、小さな染物屋の親方、染色職人であった夫人の亡き夫の厚紙細工が上位にあった。夫人の夫は暇な折り、造型芸術家でもあったのである。大方は建築的面に向かっていた。親方は未亡人に、『群盗』[シラー作]からの野営の場面による公開の人物像の多い舞台の他に、ドリス式の神殿と、三フィート半の高さの、すべての窓に薔薇色の紙の張られたシュトラースブルクの大聖堂を残していた。この大聖堂は今日小さな油ランプの助けを借りて、塔の先端まで輝いていた。更に言及して良いならば、この大聖堂は高い脚の支柱簞笥の上にあって、通常はその奥にある小さな鏡を隠していた。しかし今日はそうではなくて、鏡は、部屋の調度に何か身分相応のものに欠ける疑念が生じないように、一フィート[手の幅三つ程]分高く置かれていた。ただ塔の先端のみがかろうじて若干鉛色の鏡面を覗き込んでいた。

それでフーレン夫人自身の様子はいかなるものであったか。彼女は高く白い頭巾の他に、これなくしては誰も彼女を見かけたと思い出さないものであったが、褐色の、故人存命のうちに手ずから染められたメリノ[ウール]地のドレスを着用していて、それに黒い、首にぴったりと会うビロードの首飾りを合わせていた。この首飾りには交互に青と黄の星が刺繍されていた。

「どんなことになるかしら」と彼女は自問して、今一度すべての重要な点を点検し、ただ気分を静めるために蠟燭の芯切りをし、今日はクロークとして使用されることになるレーヴィーンの小部屋[アルコーヴ]で掛け布団を直した。それからまたシュトラースブルクの大聖堂とその照明を見て、あたかもその内部に入ったかのような気になった。「どんなことになるかしら」と重苦しい気持ちで彼女は繰り返した。そして同時に鏡に視線を送りながら、少しばかりずれていた首飾りをつまんだ。

この瞬間呼び鈴が鳴った。フーレン夫人は急いでドアを開けて、ただツンツ夫人であると気付いて、少しばかりがっかりした。この夫人は老いた聾の女性で、同じ階に住んでいて、今日のパーティーへの招待は単に彼女のお喋りへの心配から得ていたにすぎないのであった。というのは彼女はこの世で何もする事がなくて、誰かが家に入り、最後の階段を上がって来るのを見るたびに、いつも二重ドアの覗き穴の前に立って、誰が何の用なのか調べたからである。

「フーレンさん、私が一番乗りでしょう。でも誰かが一番になりますよね」。

「その通り、ツンツさん。隣人だからといって待たせることをなさらなくて有り難う。ショールを外しませんか」。

フーレン夫人の言葉が理解できなかった老婆は、しかし手の動きから何のことか察して、うんざりしたように頭を振って、赤い中国製の紗のショールを、古き良き時代の名残であるものを、より固く身に着けて、あたかも自分が及ぼした畏怖の念に安堵しているかのように堂々と間近の次の部屋へ歩んで行った。それはレーヴィーンの部屋であった。ここで

彼女はしげしげと見回して、数回頷いて、貸し出された部屋を一緒に使用していることに驚いたかのようにして、尋ねた。「若い殿方は旅行ですか」。

「勿論、ツンツさん、御存じでしょう」。

「そうだわね」と老婆はつぶやいて、人差し指で小さなピアノを触り埃が拭かれているか験した。それから香蠟燭の煙が煩わしいかのように数回咳をして、「上室」の敷居を超えて、ソファーに腰掛けた。

これは全くもってフーレン夫人のパーティー上の心積もりに反することであったので、夫人は老婆の厚かましさに怒って、老婆への畏怖を払拭し始めた。

「どうぞこちらに、ツンツさん」、こう言って、固い背もたれの大型椅子を指し示した。この椅子は暖炉と段棚の間にあった。「貴女に絵本を持って来ましょう」。

老婆は何か口ごもった。ほとんど何か抗議のように、いずれにせよ驚きのように響くものであったが、しかしそれに従って、フーレン夫人の指し示した椅子に座った。その後すぐに夫人はまたやって来た。両手に一冊の大きなかなり重い本を持っていて、その扉には（表紙は破られていた）太い活字でこう書かれていた。「北ドイツの囀り鳥。九十枚のカラー銅版画」。

ツンツ夫人はめくった。しかし三頁にならないうちに、また呼び鈴が鳴った。

このたび現れた女性はラーケ嬢で、音楽教師、声楽教師で、フーレン夫人の格別の女友達、夫人はこの付き合いを得意に思っていた。四十歳の娘で、大柄で痩身、長い首、薄い赤みがかったブロンド髪であった。彼女の水色の青い目はほとんど睫毛がなく、独自に動くことはなく、むしろいつもただ自分の頭部の動きに従っていた。そしてその際水平に世間に向かって微笑みかけていて、あたかもこう言いたいかのようであった。「私はラーケ、御存じでしょう、妙な噂のない、非難する声のないあのラーケです」と。ルイーゼ王妃［Königin Luise (1776-1810)］から彼女は、慈善コンサートの折、紫水晶のブローチを頂いていた。それ以来いつもこのブローチを付けていた。ちなみに貧窮と謙虚と高慢とが彼女の揺り籠に立っていた三優美女神で、彼女の人生の伴をしていた。彼女は老ツンツに上品に、いくらか強張って、見下げるようにお辞儀して、それから当たり前のようにソファーに腰を下ろした。

フーレン夫人は新たな客の女性の許に座って、左手を叩いて言った。「お会いして嬉しいわ、ラーケさん。いつも親切で、分け隔てしないのだから」。

「あら、フーレンさん、どうしてそんなことを仰有るのです。そんなのは不作法ですよ。私どもは皆人間ですもの」。

この間小さな間が生じた。その間このピアノ教師はその華奢な急傾斜の肩からショールを滑り落ちさせた。それから尋ねた。「他にどなたがいらっしゃるのですか」。

フーレン夫人は落ち着きなくあちこち体を揺すって、それから若干当惑して言った。「ツィーボルト夫妻」。

「おや、ツィーボルト夫妻、素敵。覚えています。彼はいい声をしています。テノールかバリトン」。

「そう彼はいい声をしています」とフーレン夫人は続けた、「いつも冗談言って、ちゃんとしています。でも誰もあの人の側には座りたがらない。奥さんとはもっとそうです。質屋だからでしょう。でも老ツィーボルト夫妻は、つまりこのツィーボルト夫妻の両親の

方ですが、とても良い人達でした。上品な人達であったと言って良いでしょう。亜麻布や靴下の商売を、ユダヤ通りとシュトラーラウ通りの角でしていて、私どもは同じ屋敷に住んでいたことがあります。それは老フリッツ[大王]の亡くなった前年のことでした。そうです、そのとき、私の老母が病気になり、老母には栄養を与えなければならず、私にはそれが出来ず、いつも裁縫の仕事で外に出ていたものですから、ラーケさん、とても悩みましたよ。そのときツィーボルト夫妻が来られまして、ある日はスープが、別な日は焼肉や鶏が、いつも手羽か胸肉という具合で、日曜日には御主人は、とてもケチな方でしたが、でもそんなことを言ったら罰が当たりましょう、ワインをボトル半分送って下さいました。それが死ぬときまで続きました、つまり私の母の死ぬときまで」。

こう思い出して、語りながら夫人は人差し指の関節で右目を拭った。

「それは『老』ツィーボルト夫妻の話しですよね」とラーケ嬢は述べた。彼女は老と強調して、本当は若いツィーボルト夫妻のことを聞きたかったと仄めかそうとした。フーレン夫人も察して続けた。

「そうです、老夫妻です。つまり、でもまだ少しも年取っていなくて、五十代半ばでしたかね。でも二人はそれから長いことはなくて、私の母が亡くなったときの同じ冬にもう亡くなられました。最初は夫人の方で、クリスマスの三日目で、確か二日目ではなかったと思いますが、でも御主人は更に三月まで持ちました。ラーケさんよく言うでしょう。『三月の太陽と三月の空気は体に毒』と。御主人はいつも胸が弱かった」。

「それで仕事は多分若いツィーボルト夫妻が引き継がれたのでしょうか」と今度はラーケ嬢は速やかな連続した死亡に関心の色を大いに示して尋ねた。

「そうです。若いツィーボルト夫妻が」とフーレン夫人は請け合った、「つまり息子さんの方です。息子さんは当時まだ嫁がいなかった。とても素敵な青年でした。立派に語り、金縁の眼鏡を掛けていたので、人々はいつも弁護士に見えると言っていました。それで『弁護士のツィーボルトさん』と呼んでいました。それで気を良くして、いつも俳優や女優と一緒にいました。ある日ある女優に首ったけになった」。

「それが今の奥さん、なるほど」。

「そうです、彼の奥さん。それで今や太平楽の竜宮城です。でも天網恢々疎にして漏らさずなんですね。一年と経たないうちに、すべて売りに出されて、二人は苦しいことになった、とそうツンツさんが私に話されました。当時私はまだロス通りに住んでいたものですから」。

ツンツ夫人は聾であったが、大方を理解していて、頭で頷いた。

「でも若いツィーボルト夫人は」とフーレン夫人は続けた、「いつも決然とした人物で、直に立ち直りました。そして私が夫と結婚してまたこちらのクラスター通りへ越して来たとき、二人はすでにホーエンシュタイン路地に住んでいて、質屋を営んでいました。そう、ラーケさん、質屋ですよ。まだ何もひどいものではなかった。それで私は当時亡き夫に言ったものです、自分は老ツィーボルト夫妻を知っていて、とても良い人達だった、と。そして私どもはまた知り合って、お互いに訪問しました。でも長くは続かなかった。こう噂されたのです。質屋なんて、単に表向きのことで、ツィーボルト夫妻は高利で金を貸している。高利貸し並みだ、十ターラー借りると、二十ターラー払う羽目になる、と。だから誰もツィーボルト夫妻の横に座りたくないのです」。

「私はツィーボルトさんの隣に座りたいわ」と自分の評判と地位を楯に女子大修道院長のように平静な態度で述べた。「他に誰がいらっしゃるの」。

「曹長のクレム」。

「あら折り返し長靴のあの強張った老紳士ですか。トルガウ近郊の戦いで勝ったという。いつも喧嘩していて、硫黄色のチョッキを着ている。　ー　他に誰か」。

「ヌンティウス・シンメルペニングさん」。

「シンメルペニング」とラーケ嬢は繰り返した、「最高裁判所の使者の方。覚えているわ。老会長シンメルペニングの息子さんだそうだけど、ただフォン[貴族の]を欠く、私生児だとか。フーレンさんどうして知り合いになったのですか。余り面白くない人で、偉ぶっている」。

この瞬間また針金が引かれた。そしてフーレン夫人のパーティーも他のパーティーと同じで、たった今話されていた当の人物がまさに入って来た。ヌンティウス・シンメルペニング氏であった。彼は壮年の五十代で、突き出た唇で、これを合わせていたが、再び小さくパフと言わせながら開けて、その際白く、素晴らしい歯を見せた。老会長がこれと同じことをしていた。ちなみにラーケ嬢の言うことは正しかった。彼は自惚れと威張り方にかけてはどんな七面鳥とも渡り合えたし、あたかも自分は少なくとも自分の父親かあるいはそれどころか最高裁判所そのものであったかのように世の中を睥睨していた。彼は実際そのようなものを信じていた。

さてフーレン夫人は紹介した。しかしシンメルペニングは、自分にとっては不快なラーケ嬢のお辞儀には皆目注意せず、老ツンツ夫人の許に歩み寄って行った。彼にもその名前が紹介されたからで、大きな声で言った。「ツンツとは、ヴィルヘルム通りのフォス伯爵の許の方かな。覚えています。御主人とは面識がありました」。

「私も」と老婆は、ヌンティウスの立派な風采に敬意を表して、立ち上がって言った。ちなみに彼が大きな声で話したので、一切を誤解していたのであった。シンメルペニングは老婆の「私も」をどう解していいか分からず、またいつも過敏に反応する質で、それを嘲笑と解する傾向があって、顔をしかめて、そもそも態度全体でこう言いたいかのように見えた。「奇妙なパーティーだ。何で来てしまったのだろう」と。それから高い脚の簞笥に近寄って、シュトラースブルクの大聖堂の屋根を叩き、鏡を覗き込んだ。その折りまた老会長と自分が似ていることにびっくりすることになった。

クロークの部屋から、　ー　そこでは間違いでなければ、二組の急いで互い違いに入って来たカップルが自分達の物を脱ぐことにかかっていたが、今や活発な発声が聞こえて来た。これは一種強調して、自分達の屈託のなさや、あるいは自分達の格別の権利を表現したい人物に特有のものである。そしてすぐその後にこれらのカップルの最初の二人がフーレン夫人の部屋に入って来た。それはツィーボルト夫妻で、夫の方は彼の巻き毛と金縁の眼鏡で、妻の方は芝居のような姿勢と、体にぴったりと合った、そして同時に深くカットされた絹のドレスでそれと分かった。

シンメルペニングは挨拶する代わりにただ軽く顎を下に押し下げ、その勿体ぶった態度で、これは両手を背中にもって行くほどのものであったが、すぐ後に続いた二組目のカップルで注意が彼からそらされなければ、もっとこの態度は人目に着いたことだろう。それ

は敷物職人のグリューネベルクとその娘で、男は痩せて、蠟色をしており、小さな織機で色々なフェルトの布切れを大小の絨毯に織り込むので、時には絨毯工のグリューネベルクとも呼ばれていた。彼自身は、そのフクロウのような顔つきにもかかわらず、重みはなかった。その顔は額、顎、鼻先が同じ垂直な線であったが、目と口は広く後退していて、いわば日陰にあった。それだけ一層彼の娘は重みがあった。彼女は大柄で強壮、彼とは少しも似ていず、そもそも娘なんかではなく、最初結婚したときの亡くなった夫人の連れ子であった。彼女はウルリーケと言った。ほとんど醜く、大きな、目立たない、その上過剰に突き出た目をしていて、それでも彼女は固く信じ込んでいた。自分は美しくて、その美しさ故に何か高貴なものに召命されている、と。フーレン夫人との交際は彼女には自分の身分以下のものに、それ以上に自分の個人的欲求以下のものに思えていたが、それでも大事にしていた。それはこの老夫人の許には貴族の若い殿方が借りて住んでいると知っていたからである。彼女の思考はいつもこのような方向に向かっていた。

ツィーボルトはラーケ嬢のソファーに、その横に腰掛けていた。ウルリーケは芝居[『群盗』]に近寄って、個々の像、カール・モールやロラー、可愛いコジンスキーをその野外の場面から取りだした。ツンツ夫人についてはもはや話題にならなかった。シンメルペニングは窓の一つに背を向けて、無関心に天井を見つめていた。ただツィーボルトとグリューネベルクが雑談を交わしていた。両人の雑談ははなはだかみ合わず、グリューネベルクは言葉の洪水であったが、ツィーボルトは個々に短く、時に嘲笑的意見を述べた。フーレン夫人はますます苛立ってきた。彼女は自然の成り行きになっていないと感じていて、客人達を近付けようと常に新たに試みながら、すでに三回目か四回目こう言っていた。「お互い以前から御存じでしょう」と。

しかしそのように語りかけられた者達は、その都度ただゆっくりと抗うかのようにそのことを考えているように見えた。最も抗っている者はツィーボルト夫人であった。彼女は自分の黄金のネックレスを触っていたが、誰の所有していた物かについて色々な暗い噂のあるもので、自分の夫に視線を送って、愚かな人間、グリューネベルクとは深入りすることのないよう仕向けていた。その他は彼女は表情を変えなかった。ただウルリーケの勿体ぶりを見ると、彼女は微笑した。というのはグリューネベルク家のことを「仕事上」知っていて、父親の知らない所で娘は好き放題していて、一度ならずこの娘のピンチを救ってやっていたからである。

客人の中ではただ曹長のクレムだけが欠けていた。ようやく彼もやって来た。フーレン夫人は彼から珍しいことを期待していて、一息付いた。彼は同じ装いで、折り返し長靴、高くボタンを閉めた、いつも着て現れる硫黄色のチョッキであり、ウルリーケにとって腹立たしいことにラーケ嬢に格別贔屓して挨拶した後、特にツィーボルト夫妻にかまけていた。自分の密告者、日和見主義者という特性上夫妻に色々訳ありの関係を有していたかもしれないし、あるいはただこう示そうと欲していたからかもしれない。つまり自分は、人々の噂にはお構いなく、自分という太陽を正義の人の上にも不正義の人の上にも照らし出す権利を有するのだ、と。その間に自分の位置を半ば右に変えていて、古風な隅の戸棚に寄りかかっていたシンメルペニングの側を彼は挨拶しないで通り過ぎた。彼ら両人は互いを軽視の表情で評価し合っていた。

「さて皆さん揃いました」とフーレン夫人は言葉を発した。「本当に楽しくくつろいで

過ごしましょう。そうですよね、ラーケさん。後で何か歌ってくださいな。『スイスの家族』[Joseph Weigle (1766-1846)]とか『恋を知る殿方は』[『魔笛』より]を」。

「まあ、フーレンさん」。

「頼みますよ、ラーケヘン。ほんの歌じゃありませんか。ウルリーケ嬢もきっと聞きたいだろうし、私ども他の者もそうですよ。そうでしょう、ツィーボルトのご亭主、伴奏[デュエット]なさるでしょう。でもまずは食卓に着きましょう。ツンツさん、テーブルをこちらに運ぶ手伝いをお願いします」。

我らの善良なフーレン夫人は最後の言葉をとても強く話した。それにもかかわらず、老婆はこう答えた、ひょっとしたら本当に聞こえなかったのかもしれないし、あるいはひょっとしたら、当たり前のようにこの奉仕に呼ばれたことに単に腹を立てていたのかもしれない。「十時までと思います」、これに対してラーケ嬢はこれ以上何の議論も生じないように、ほとんど若々しい機敏さで起き上がって、食卓を台所から運ぶ手伝いをした。椅子が寄せられて、瞬くうちに皆が座っていた。クレムが上座に、フーレン夫人が下座に、ツンツ夫人はすぐフーレン夫人の側、それから質屋の夫妻がやって来て、両端に向かい合った。ツィーボルトの横には、取り決めていたように、ラーケ嬢となった。

すべての食事はすでに中央にあった。最初の一品として罌粟の実入りケーキの大きな鉢があり、その左手に鰊のサラダ、右手にゼリー寄せがあった。すべて立派に薬味があった。罌粟の実入りケーキの上には潰したシナモンの厚い層があったし、サラダの上には小さな玉葱が、胡瓜のピクルスと酸っぱい桜桃と交互にあった。典型的ベルリン料理であった。

「どうぞ各自召し上がってください。ウルリーケさん、ケーキを皆に回して頂けますか。とても嬉しく存じます」。

「こちら側こそとても」とツィーボルト氏は答えて、まず自分の眼鏡を拭いた、それからこっそりとフォークもテーブルクロスの尖端で拭いた。

会話に関しては、多分主導はクレムになるか、シンメルペニングになるかが問題であったろう。グリューネベルクは単純すぎたし、ツィーボルトは若い年齢の時には典型的なベルリンのお喋り屋であったけれども、次第にこの任務から離れていて、他人の話しに若干の決まり文句を挿入することで満足していた。

「フーレンさん」とシンメルペニングは言葉を発した、「貴女の許に住んでいる若い殿方の名前は何と仰有るのですか」。

「フィッツェヴィッツです、ヌンティウスさん」。

「フィッツェヴィッツ」と彼は繰り返した、「変わった名前だ」。

「誰もがシンメルペニングというわけではない」とクレムは言って、彼の敵対者と視線を交わした、「ちなみに、私の情報が正しければ、彼はフォン・フィッツェヴィッツと言う」。

シンメルペニングはこれに悪意を感じ取るだけの機転を十分に持ち合わせていたけれども、この挿まれた言葉を完全に無視して、フーレン夫人に向かって続けた、「彼は何を専攻しているのですか」。

「彼の専攻は、　ー　何か外国語風のラテン語風のもので、更に数年続けていたら、最高裁判所に行くのです」。

「そうですか」とシンメルペニングは言って、少し背筋を伸ばした。

「でも続けないでしょう。いつも別のことを計画していて、一日中自分の妻を絞め殺すモール人の喜劇とか[悲劇『オセロ』]、自分の子供達、それも娘達に見棄てられて気が狂ってしまう老王とか[『リア王』]読んでいますよ。いつも聞いています。いつも声高に話されるからで、ツンツ夫人も壁越しに聞こえるのではないかしら。そうでしょう、ツンツさん、それで私がノックして、彼に一通の手紙を渡したり、新鮮な水を一瓶差し上げると、泣いているのを見たこともありますよ。お笑いになるけど、シンメルペニングさん、でも優しい心の方で、優しい心というものは恥ずかしいことじゃありませんよ。どんなに良い人かお話しできますよ」。

「それではお話しして」とウルリーケは叫んだ、ツィーボルト夫人とその夫は再び訳知り顔で見つめ合った。

フーレン夫人は続けた。「いいでしょう、ウルリークヘン、あなたにお話ししましょう。私どものベッドは壁と壁で接しています。壁は単なる石です。それで私は胃痙攣を起こして、どうしようもなくて、医者もいないし、薬局もない、そうです、聖マルティヌスの日[十一月十一日]の頃でした。ひょっとしたら私自身のせいだったかもしれません。鶫鳥の焼肉を食べたのでした。これはいつも私には毒で、その通りまた痛くなりました。どうしていいか分からなくなって、ますます痛みがひどくなって、私はノックしたのです。最初はこっそりでしたけど、二度目ノックしたとき、彼が叫びました。『すぐ行きます、フーレンさん、すぐに』と。何が最もいいか私がまだ考えているうちに、彼はもう長靴履いて支度していました。そしてただこう言いました、『胃痙攣ですか。そう思っていました。フーレンさん、お任せください』。三十秒しないうちに、彼が台所に行って、薪を割り、灰をかき起こして、私の台所の戸棚から引き出しを次々に開ける物音を耳にしました。それで何を考えているか気付いて、ベッドから『右の二番目の引き出し』と叫びました。『分かった、フーレンさん』と彼は言って、『ありましたよ』と。それから何分もしないうちに、もう現れました。何を持って来たと思います。立派なカミツレ茶です。ただ少し濃すぎて、まだ熱すぎました。しかし彼は上のカップから下のカップに注ぎ、二回、三回そうして、口に出来る温度になりました。それを飲んだのです。するとすぐ良くなりましたよ。効いたのはカミツレ茶ではありません。でもその行為が私の心に効いたのです。胃痙攣は去っていました」。

「でもねえ、フーレンさん」と今やゆっくりと、音節をすべて強調しながらラーケ嬢は言った。彼女は話しの間中当惑して自分の皿を見つめていた。

しかしフーレン夫人は臆することなく、かなりはっきりと答えた。「ラーケさん、まだ胃痙攣を経験なさったことがないでしょうから」。

「その通り」とツィーボルトは述べて、自分の横に座っている老夫人の枯れた手を上機嫌で、親密に撫でた、「私はこの痛みを経験したのをただ一度だけ思い出します。しかしまさに徹底的なもので、生涯胃痙攣とはどういうものか味わいました。一八〇六年のことで、匙付帽部隊が入場して来た日のことです。雨がしとしと降っていて、すでに寒かった。いつでしたかね、曹長のクレムさん」。

「十月の末」。

「まさにその通り。死ぬほど風邪を引いて、痛みがあって、叫び声を上げました。でもこの匙付帽部隊の入場を目撃したことは、残念なことには思いません」。

「何故匙付帽部隊と言うのですか」とウルリーケは尋ねた。

「羽根飾りの代わりに金属のスプーンを付けているからです。他の殿方は当時目にしたことでしょう、でもグリューネベルク嬢がお聞きになりたいのであれば、...」。

「お願いします」とウルリーケは丁重に言った。そしてツィーボルトは、自分にとって不快になり始めていた妻の監視から自由になろうとして、躊躇なく続けた。「この匙付帽部隊は、曹長のクレム殿も保証されましょうが、とても変わっていて、入場するとき、その中から一人を、次に続く縦隊よりも二，三十歩先を歩かせて、とても奇妙なやり方で、わざと破損した衣装でこう知らせることになっていたのです。今から匙付帽部隊が来るぞ、と。この名前とその印がとても自慢だったからです」。

ツィーボルトは、上手な話し手として、間の価値を大いに評価していたので、ここで一杯の水を飲むことにし、フーレン夫人がその願いを叶えてから、話しの糸をまた紡ぎ出した。

「私はハレの市門を通って来る先頭の者の姿が今も目に浮かびます。悪評高いダヴー[Davoust(1770-1823)]部隊の一員で、この部隊が意味する一切は、この先頭を行進する男に体現されていました。彼は背が高く、痩せていて、青白い顔、ピッチのように黒い髪で、それが深く額にかかっていました。彼のズボンは一種のリンネルで、汚れて、千切れていて、半分剥き出しの両足が靴に、実際はただの靴底に置かれていて、サンダルのように縛っていました。彼には紐に繋がれた一匹のプードルが二本足で並んでいて、彼から投げられるパンを拾っていました。普通の歩兵のサーベルの代わりに身に帯びているパラッシュ[重いサーベル]には鵞鳥が付いていて、彼が斜めに、いかれた風に被る小さな狐色の帽子には金属のスプーンが収まっていて、全ての一味徒党の軍旗なのです」。

「まあ、可愛い」とウルリーケは言った、彼女の為にとこのすべての話しが語られたのであった、「金属のスプーンなんて。でも滑稽すぎるわ」。

しかし曹長のクレムは、自分のフランス人贔屓を強調する機会を逃さず、最終判断を任せると好意的に言われたけれども買収されずに、テーブル越しに叫んだ。「ツィーボルトさん、一言添えたいが、当時ダヴー将軍の命令で、つまりフォン・アウエルシュテット公爵、後のフォン・エックミュール王子陛下の命令でハレの市門を入場したのは、結局一味徒党ではなかったのです。しかし一味徒党と言うのであれば、いずれにせよ非凡な一味徒党ですな。だって立派にイエナ[で勝って]から来たのですから。我々は穏やかに言って、この一味徒党には歯が立たなかったのです」。

「そう。歯が立たなかったのです」とフーレン夫人は答えた、「でも悪く思わないでください。曹長のクレムさん。それについて私どもは何も言ってはなりません。自分の巣を汚すのは劣等な鳥ですから。でも当時の不幸を、あるいは当時の恥辱を、どちらが正しいか知りませんが、もう埋葬して、忘れなければなりません。私どもは終わってしまうと勿論私も考えていました。皆が言っていましたから。それに他の人々が『そうだ』と言うときに、『違います』と言っていいのは、哀れな女にすぎないのですから。でもクレムさん、貴方に言っておきますが、すでに翌年には、二つの緑の棺を見たのですよ。そのとき私どもはまた復活すると確信したのです」。

「二つの緑の棺ですか」とウルリーケは尋ねて、笑おうとした。

「そうです。二つの緑の棺です。そこに収まって老いたゼンゲブッシュさんが埋葬され

たのです。夫と妻です。あなたはお聞きにならなかったのですか、ウルリークヘン。でも当時あなたは、済みませんね、すでに半ば大きくなった若い娘だったでしょうに」。

「いいえ」とウルリーケは請け合った。

「それではね」とフーレン夫人は続けた、「ここのすぐ角に、孤児教会から二軒離れて老いたゼンゲブッシュ夫妻が住んでいたのです。夫は登記吏でした。しかし以前は兵士であって、四人の国王に奉公したのです。ラインスベルクの記念碑が出来上がって、ハインリヒ王子が古参兵を招待なさって、そのとき出席するよう老ゼンゲブッシュも招待されました。私は手紙を自ら見ましたよ、全部ドイツ語で、でもアンリ[ハインリヒ]とフランス語でした。それで彼が亡くなったとき、つまり老ゼンゲブッシュのことですが、メモが見つかって、それにこう書かれていたのです。自分は緑の棺で埋葬されたい、と。ただ自分の愛する祖国のプロイセンがまた復活するようにと自分の信頼と確信を示そうとされたのですね。...そして奥さんも亡くなられた。彼女も年で病気でしたから、同じ日です。それで二つの緑の棺が注文されたわけです。しかし老説教家のブンテバルトは、二人が埋葬されるときに、その上に黒い棺掛けを置かせました。心配になって、騒ぎや騒動を起こしたくなかったのでしょう。でもベルリン人のことを良く分かっていなかったのですね。行列が動き出すと、人々は棺掛けを下ろして、緑の棺がまた目に見えるようにし、何千人もの人々の間を運んで行きました。皆が帽子を取って、こう考えたのです。『老ゼンゲブッシュの言う通りになるだろうか』と。彼の言う通りだったのです。パン屋のレーヴェスは私が朝のパンを求めたとき、私に言いましたよ。『フーレン、いいかい、プロイセンは復活するぞ』と。パン屋の老レーヴェスは、責任の持てないことには口は重いですから」。

ツィーボルト氏は老フーレンに優しく頷きかけた。しかし曹長クレムは左の人差し指で首とネクタイの間を上下させていたが、半ば苛立って、半ば蔑んで言った。「フーレンさん、それは感動的なお話しです。しかし老ゼンゲブッシュと緑の棺には敬意を払うとしても、しかし間違っているかもしれませんよ」。

「間違わない者がいますか」とシンメルペニングは答えた。クレムによって表明された見解に反論する機会を逃すことはなかった。「今一度言いますが、間違わない者がいますか。貴方にしても、私にしても、皆にしても。間違うのは人間的なことです[Hieronymus (331-420)]。しかしこの老ゼンゲブッシュは間違っていなかった。私を誤解しないでくださいよ。あの緑の棺、この緑の棺、私はプロテスタントで、どんな迷信も軽蔑しています。しかし我々は復活しなければならないのです。何故か。我々は正義を有するからです。これが肝心です。正義ハ帝国ノ基本ナリ。全古代史、全近代史の中でサン・スーシの水車小屋や、粉屋アルノルトの裁判のような例を示して頂きたい[フリードリヒ大王は宮殿近くの水車小屋を停止させようとしたり、直訴した粉屋に便宜を図ろうとしたが裁判官に抵抗された]。最高裁判所です、皆さん。『ベルリンにはまだ裁判官がいる』と我々の敵でさえ認めました。私は何もフランス人に敵対して言おうとは思いません。ただ一つのことは言わなければならない。彼らには正義がない。正義のない所には、尺度がありません。尺度のない所には勝利がありません。たとえ一つの勝利があったとしても、長く続かず、敗北に変わります。この敗北の端緒が現れています。ロシア人が後を追って来ます。我々は前に立ち塞がっています。そこで我々はこのフランス人の栄光を二つの石臼の間でのように磨り潰すのです」。

「貴方は二つの石臼のことを言われている」とクリムは微笑した、「よろしい、二つの石を置きましょう。しかしその間で磨り潰されるのは、フランス人ではありません、ロシア人です」。

「そうじゃないよ、そうじゃないよ」とツィーボルトとグリューネベルクは同時に叫んで、それから付け加えた。「少なくともどうしてそうなるか説明しなくちゃ」。

この要求はクレムの望むところであった。

「カードがあったらいいのだが」と彼は言って、「二，三線を引けば、分かる。フーレンさん、紙を一枚お願いします」。

フーレン夫人は急いで望みの紙を用意した。そこでクレムはその紙に、日々の切り返しで手慣れたものになっているかの確実さで、すでに新年の晩にチョークでテーブルに描いた同じ線を描き始めた。

それからこう始めた。「注目願いますが、つまりこの太い線が国境で、右手がロシア、左手にプロイセン、ポーランドがあります。皆さん注意してください、ポーランドをお忘れなく。この左の点がベルリンです。そしてここのベルリンと太いロシアの国境線の間に、この二つの小さな蛇行線があります。これがオーダー川とヴィスワ川[ヴァイクセル川]です。さて承知していなければなりませんが、オーダー川とヴィスワ川に沿って六つの要塞に三万のフランス人が潜んでいます。同様の数の者がここ下のポーランドに、所謂側面陣地で、半ば背を向けて準備しています。繰り返しますが、ご注意下さい。というのはこの側面陣地が肝要ですから。今やロシア人が追って来ます。ロシア人は弱い、というのは一つの軍が凍えると、次の軍も凍えるからで、よたよたとヴィスワ川を渡ります。するとどうなりますか。オーダー川の要塞から三万の休んでいた部隊が向かって行きます。側面陣地からは別の三万の兵で、ロシア人の前にいて、退路を断ちます。パタン、するとロシア人が中に収まります。これが鼠捕りと呼ばれるものです。罠が閉まる箇所を示して進ぜよう。ここここの地点です。ケスリーンに違いない、ひょっとしたらフィレーネかもしれない。賭けてもいいが、ケスリーンとフィレーネの間でロシア軍は降伏します。ウルム近郊でのマックのように。降伏しない者は死んでいる者です」。

皆が驚いた。しかしただシンメルペニングだけは、彼の敵対者に劣らず、町の白ビール店を大いに馴染みとしていて、鋭く冷静に言った。「クレムさん、貴方がこの命題を毎日繰り返していること、つまり文字通り繰り返していることは世間周知のことだ。貴方がヴィスワ川を鉛筆で紙に書こうが、チョークでテーブルに書こうが変わらない。貴方は早晩このことで面倒なことになろう。しかしそれは貴方の件だ。しかし私の件としては、貴方に申さなければならない、貴方の言動の一切は非愛国的なものだと思う、と」。

「私が貴方に愛国主義を学ばなければならないのか」とクレムは激昂して、箆手でテーブルを叩いた。「貴方の母が、済みませんレディーの方々、貴方に最初のお襁褓を当てがっていたとき、私はすでにトルガウ近郊にいたのだ、私は歩兵を整列させて、...」。

「それは承知しています」とシンメルペニングが遮った、「しかしそれは貴方ではなく、フォン・レストヴィッツ[Lestwitz（1718-88）]大隊長でした」。

「私はフォン・レストヴィッツ大隊長がしたことは知らん」とますます興奮してきたクレムは叫んだ、「しかし私のしたことは覚えている」。

「良く記憶しておくことです」と更にシンメルペニングは嘲笑した、「クレムさん、貴

方がいつか貴方の偉大な行為を忘れるなんて誰も思い付かなかったことです」。

「偉大な」という言葉の時に、ヌンティウスは長く、意地悪な間を置いた。しかしフーレン夫人は争いを片付けたいと願って、シンメルペニングに向かって、左手の翼にまだ手を付けられずにいるゼリー寄せを皆に回すよう切迫した声で頼んだ。高波が押し寄せていたが、聞き逃されることはなかった。新しい料理がツンツ夫人の許を通り過ぎるとき、夫人は時々咳の発作に襲われていて、それ故刺激物には用心せざるを得なくて、フーレン夫人の許に屈み込んで、小声で尋ねた。「胡椒が多いの」。これにフーレン夫人は答えた。「いいえ、ツンツさん、イギリスの薬味です」。この落ち着かせる説明を老婆は正しく理解したように見えた。老婆はまだ両手にしているその鉢から存分に取ったのである。敵対者達の争いの勃発は上手く回避された。その後間もなくして皆が立ち上がって、クレムとシンメルペニングを除いて、握手して、御馳走様と述べた後、ペアになってレーヴィーンの部屋に赴いた。そこではポンス酒とビスケットが振る舞われた。

「それでは、ラーケさん、何か歌ってください。悲しいものではなくて、そうでしょう、ウルリークヘン、悲しいものではないものをね」。ウルリーケは賛同した。これに対してラーケ嬢は、何も悲しいものは歌いたくないが、陽気なものも歌いたくないと述べた。陽気なものは嫌い、平板で、大事なものではないから。自分は情緒深いものを好む、ただ自分の性質に合うものだけをいつも歌うべきだ、と。というのは「私どもの声には私どもの心が宿っていますから」と。

そこでレーヴィーンの楽譜が何度も繰り返し調べられ、とうとう二，三のオペラのアリア集が見つかった。ツィーボルト氏の大いに称えられたテノールが生きた効果を発揮しそうであった。ラーケ嬢は彼に空色の綴じられた表紙の冊子を渡した。その扉にはこう書かれていた。「リラの娘、ファンション。フリードリヒ・ハインリヒ・ヒンメル[Himmel (1765-1814)]作。ピアノ曲編曲。第二幕」[von Kotzebue による Bouily 作の翻訳]、その下にはファンションの肖像があった。半袖で、頭巾[カチーフ]をしていて、一種のマンドリンを手にしていた。

あれこれ考えても、これ以上歓迎すべきものはなかった。デュエットはいつも何かドラマ的場面の魅力を有する。ラーケ嬢は歌い出しを初めて、ツィーボルトは左手を低い椅子の背もたれに置いていた。

石楠花[シャクナゲ]の芽吹く向こうの
快活な夕陽の光の中に、
私が子供時代夢見て過ごした、
優しい小屋が浮かんで来る。

よこしまな心のみがとらわれる
軽はずみなことをしないこと、
恥ずかしい贈り物はありはしない、
真心のこもった人からの贈り物に。

この最後の行が三回繰り返されたばかりでなく、情緒深いラーケ嬢の側から格別に強調

されて歌われた後、ツィーボルトのテノールが加わって、二人は今や最後の節を歌った。

およそ幸せがもたらすもの、それを、
愛は惜しみなく分かち与える。
与える人と受け取る人に
愛は何も区別を設けない。

ツィーボルトは昔からトレモロの力強さがあって、それを今日も発揮することを目指して、それでそれまでの冷静の気分は一転して、一般的な人間愛が瞬時であれ突発して来た。この夕べは今や決定的に頂点に達していた。フーレン夫人はこのことを感じて、それ故とっさにポロネーズの舞踏を提案して、実際すべての部屋を通って、残ったままの食卓の周りを巧みに回りながら遂行された。しかしラーケ嬢は最後急ぎすぎるほどに奏して、わざと数拍子外した。「私はこの安物ピアノでこの蛙目のウルリーケ嬢のダンスの為に演奏するよう招待されたのかしら」。このような疑問が押し寄せてきて、祝典の最後の瞬間はまた不協和音となった。

十五分後、諸カップルは様々な方向へクロスター通りを下って行った。ツィーボルト夫妻は左手を行き、ホーエン・シュタインヴェークの方に向かった。

「これを最後にして下さいね」とツィーボルト夫人は言った、「もう私を連れて行かないで。私はラーケ嬢と同じソファーに座りたくありません。それにあの阿呆な娘。ウルリーケときたら。私を見たことがないかのように見ていたわ。私がまずあの娘に挨拶しなさいとあの娘は考えていたのかもしれない。どうしてそうなるわけ。あの娘が私どもを助けているのではなくて、こちらがあの娘を助けているのに。黄色のモール人のドレスと角砂糖挟みはもう質の十週目よ」。ここで話しているこの女性は、風が強すぎて、一瞬息をするために、立ち止まった。それから続けた。「それに男達ときたら。本当にどちらが耐え難いか分からない。あのクレムの方かしら、いつも少ない持ち歌ばかり歌っていて、それともあのシンメルペニングの方かしら、あたかも正義を発明したかのような顔をしている」。

ツィーボルトは笑って言った。「グリューネベルクを忘れているよ。食卓では隣だったろう」。

「勿論そうだった。でもね、私と一言でも話したと思う。何故話さないかって。老いぼれの阿呆で、いつも可愛い娘に目がなくて、いつかあの娘を黄金の馬車で迎えにやって来る王子様を待っているのよ。でも悪く取らないで、ツィーボルト、フーレン夫人はいい人よ。でもあのケーキ何て代物。パン屑よ。それに少しばかりの罌粟は固くで、少し腐っている」。

グリューネベルク家はその間右手に向かった。シュトラーラウ通りの角を曲がるとき、ウルリーケは言った。「フーレン夫人は何を考えているのか分からない。いつもそう、自分は貧しい女じゃありませんて。三品の料理に、ビスケットとポンス酒。気に入らないわ。厚かましい。それにいつも二部屋使って、あたかも二部屋とも自分のものであるかのように。一部屋貸していたら、それは貸したものよ。フォン・フィッツェヴィッツの若様は、

この前呼び鈴を鳴らしたとき、フーレン夫人がいなかったから、開けてくれたけど、でもラーケ嬢があの長い節くれ立った指であの人のピアノを叩きまくっているのを見ていたら、とてもびっくりしたことでしょう。それにあの歌ときたら。少年合唱団の方がまし。でもいつもああなってしまう。ちょっとした目隠し鬼ごっことか、二，三のカルタの手品、これでは夫人には十分でないのよね。...それに何という人達でしょう。あのツィーボルト、如才ない人であることに間違いはないけど、でも揺り籠で歌を聞いて育った人には思えない。それにあの人、あの人の奥さん。いつも絹の服を着ていて、珊瑚の耳飾りをして。誰も物なのか、聞きたくもないわ。四十も半ばに違いないのに、最も若い娘のようなネックライン。もう二度と行かない。私の評判を落としたくないわ」。

そのように他の人々も考えていた。ただフーレン夫人本人だけが満足していた。

第五章
夜会と舞踏会

翌日の丁度四時、太陽がまさに沈んで行ったとき、一週間前からまだほとんど馬具から外されたことのないポニーが、我らの物語の冒頭から馴染みのクロスター通りの建物の前に止まった。レーヴィーンが手綱を持っていて、御者の帰りを辛抱強く待っていた。御者は、古風な、四本の革紐で縛られた旅行バッグをフーレン夫人の住まいへ運び上げるために降りていた。乗り物はもはや夜の出発のためにのみふさわしい藁袋と幌付きの橇ではなく、軽快な、二人席の四輪馬車であった。ベルントがよくあちこち遠出するときに利用する習慣であった馬車である。我らの友にとって待つのは難儀ではなかった。北西の空全体がまだ輝いていて、小さな、ほとんど直接彼の左手にある、周りが木蔦で覆われたクロスター[修道院]教会が、この夕方の輝きの中、影絵のように立っていて、彼の注目を受けていたからである。四方八方から烏がやって来て、切妻壁の先端に止まって、いつものように夜のために準備し合っていた。通りはわずかな活気しかなかった。ランタンは長い針金の鎖から下ろされて、ゆっくりと点火され、ゆっくりとまたガタガタ音を立てて、高みに引き上げられていた。ようやくクリストが戻って来た。クリストが、また御者席には上らずに、乗り物を「緑樹」亭に導いて行く間に、レーヴィーンは重い、中にある石の重みで自動で閉まる玄関のドアを開けて、階段を上がった。

三階の最後の段で､フーレン夫人が手にして入口に出て来た明かりが微光を発していた。一つには若君のレーヴィーンに敬意を表するためであり、更にもう一つには彼を迎えるために編んだドアの上の太い木蔦の飾り[花綵]を見せるためであった。

「今晩は、フーレン夫人」。こう言って、彼はまずアルコーヴに入って、ここから大きな前面の部屋に入った。この部屋も老夫人の愛と配慮で同じ具合に祝い事のように整えられていた。丸いソファー卓の上には、二本の燃える明かりと、コーヒー・セットと鉢形カステラがあり、更にやはり木蔦の二本目の花綵が、細く、可愛く、個々の葉を縫い合わせて、ダマスク織りのコーヒー・ナプキンの縁にあった。

「まるで新郎の入場のようではありませんか、フーレン夫人。この木蔦は皆どこのものです」。

「教会の木蔦です、若様」。

「それでは向こうの」。

「そう、向こうのクロスター教会からのものです。左手の内陣支柱の側にあるものから摘んできました。寺男ズーゼミールのヨハンナが幼児と一緒に埋葬されている所です。皆一緒に、母と子一緒です。三年になりますかね、若様はもはや覚えておいでじゃないですか」。

「いや、一体どういうことだい」。

「元帥[マーシャル]のせいだったそうです。でも商人ツィーボルトは私のことを笑って、勿論元帥には違いないが、しかし単にフランス語の補給マーシャルのことで、ドイツ語では騎兵曹長に当たるそうです。でもね、私には分かりません、老婆ですから。でも元帥かどうか知らないけど、彼はとにかく難しい問題を抱えていたのです。ヨハンアは良い娘でしたからね。体面を重んじて、老ツンツさんでさえ、あの人はどんな人も隅々まで知っているけど、彼女のことは何も陰口を言わなかったのですよ。子供もすぐ亡くなって、それでも幸いだったことでしょう。何人かは勿論、その子は死んでいなかったと言っていますが、私には分かりません。証拠のないことは言うべきではありませんし。それで、若様、どうぞ注いでください。コーヒーが冷めます」。

「そうだね、フーレンさん、言うよりは行うは難しだ。でも、何でまた、墓場の木蔦を、...」。

「若様、貴方のことはもっと良く存じていますよ。火曜日の殿方がこちらにいらしたら、いつも冗談好きの太った大尉様に、フォン・ユルガス様、とても細い声のヒンメリヒ様がいらしたら、それで隣で聞いているんですよ。大声で読まれたり、感動的になるにつれ、もっと沢山カップやグラスを運ばなくちゃならないと分かっているのですよ。それを一番必要とされる方は、若様ですからね」。

「そうですか、フーレン夫人、そういう次第ならば、私は飲まなくちゃならない」。そう言って、彼は自ら注いで、くつろいだ。一方老夫人は、彼をこれ以上邪魔しないよう、部屋から出て行った。

テーブルの上には、小さな扇形になって、四，五通の手紙があった。彼の不在の折に届いたものであった。ユルガスからの一通は短い問い合わせで、次の「カスタリア」誌の会合はいつどこで行おうかというもので、もう一通は、数時間前に書かれたもので、トゥーバルからであった。数行であった。レーヴィーンは読んだ。

「一月四日。一昨日の晩、我々はまたこちらに帰った。父上はもっと早く我々がグーゼから戻って来ると思っていて、今日（月曜日）夜会を計画していた。間に合って帰還するのであれば、見棄てないで欲しい。殿方は過剰だが、踊り手の男は少ない。ヴィーリヒ家での祝典前に行われたマズルカで、カティンカは、貴兄も耳にすることになろうが、成功の一つをめでたく得た。これがまた繰り返される予定。その折、貴兄は不在であったが、今日は出席を願う。　　貴兄のT.」。

レーヴィーンは自分にとって面白くないこの紙片を手から置いた。馬車の中で、彼は今日の最初の晩を、家庭的な牧歌として描くことに没頭していた。すべてが明るく輝いていて、そこではフーレン夫人の白い頭巾と、白いお茶のポット、多くの平方に畳まれた白い紙（このそれぞれに書き込むことを期待していた）が、彼の目にとって好ましい点となっていて、この夢が今や取りかかろうと考えていたこの瞬間崩れたのであった。彼は踊る気も踊りを見る気もなかった。カティンカは最も見たくなかった。彼女のマズルカのお相手

は、友人達の夢中になった描写から良く推測していたように、ブニンスキー伯爵であったのである。しかし招待を避けるわけにも行かなかった。まだ二時間ほどあった。彼は馬車で疲れていて、疲れを理由に不機嫌を克服して、海藻のように固いソファーのクッションに身を沈め、眠り込んだ。

彼が目覚めたとき、すべての部屋は暗くなっていて、短い明かりは燃え落ちていた。彼は掛け布団から起き出た。布団は、彼が眠っている間に、フーレン夫人が掛けてやったものである。しかし気分を持ち直すのに難儀した。自分はどこにいるのか。彼は窓辺に歩み出て、下の通りを見下ろした。するとランタンが、陰鬱な明かりで、燃えていた。向こうに二つの小さな塔の影が見えた。クロスター教会であった。教会がどうしたのか。誰が教会について話したのか。そうだ、フーレン夫人だ。それであの木蔦の飾りがあった。それにヨハンナ・ズーゼミールとその幼児の話し。彼は今や部屋の窒息するような空気を感じた。木蔦の麻痺性の匂いと明かりの煙が鈍い頭痛を引き寄せていたのであった。どうしよう。彼は窓の扉を開けた。窓の扉の閂に機械的に身を任せた。そして冷たい夜風が部屋に入って来たとき、ようやくまた楽に呼吸できた。それから彼はノックした。フーレン夫人がやって来た。

「何時ですか」。

「八時です」。

「おや、寝過ごしてしまった。それに頭痛がする。フーレンさん、一杯の水と、それに明かりを下さい。急がなくてはならない」。

老夫人はあちこち走った。簞笥の箱が開閉された。そして一時間の後、レーヴィーンは広い石の階段を上がっていて、壁龕の所で、三，四人の鬘の選帝侯達の肖像画の側を過ぎて、ラダリンスキー家の二階に達した。そこで彼は外套を脱いで、衣装室で身繕いをしながら、ヴァイオリンの弱音の音を聞きながら、それから温室の木のある控えの間を通って、開け放れた入口に向かった。入口は大きな、両社交ホールの間にあって、丁度すべての部屋の並びの中央にあった。ちなみにそれは他の大方と変わらない入口で、飾り気がなく、唯一の高い、同時にバルコニーのドアとなっている窓があり、描かれているのは天井画だけであった。ヴィーナスがトロイの落城の際に気を失って、ゼウスの両腕に沈み込んでいた。古い天井画の最良のもので、同時に最も保存の良いものであった。

我らの友は、造型芸術の世界には余り詳しくなく、どんな時でも、この構成の線に対して熱中した目を向けることはなかったことであろうし、今日はとてもそんな余裕はなかった。頭痛がし、不機嫌で、丁度この箇所に見られる人混みでは、いずれにせよ入念な観察はできなかった。左手に舞踏会場があった。レーヴィーンは覗き込んで、十二人から十四人のカップルがアングレーズ[英国風社交ダンス]を始めていた。しかしカティンカはいなかった。彼女はどこにいるのか。この問いかけの際、様々なイメージや想念が押し寄せてきた。それらを馬鹿げた考えとして押し退ける試みはただ渋々と躊躇いがちになされた。彼は今や自分の視線を座席に滑らせた。座席はホールの長い壁に沿って中年のレディー達が占めていた。ここにもカティンカはいなかった。

この列の中央に、老いた伯爵夫人レアーレ[die Gräfin Neale]が、つまりフェルディナントの皇妃の典侍長が座っていた。七十歳かそれ以上のレディーで、曲がった、それでも尖った線の鼻をしていた。彼女の許では一切がグレーであった。長衣も、ショールも、高く

編み上げられた髪もグレーで、彼女は邪悪な鸚鵡に似ていた。特に彼女が今二つの大きな水晶ガラスの黒い柄付き眼鏡を当てて、レーヴィーンをびっくりして、ほとんど咎めるように見ていたとき、似ていた。レーヴィーンの急いで探す様が彼女の目に留まったと思われた。レーヴィーンは視線を落として、かなり狼狽して、老伯爵夫人の隣の女性に向けた。これはフォン・ビショフスヴェルダー嬢で、かつての大臣の娘、故皇太后妃[フリードリヒ・ヴィルヘルム二世(1744-1797)の妻(1751-1805)]の侍女であった。彼女は自分の有するわずかなブロンド髪を二つの巻き毛にしていた。この巻き毛が今やホールの暑さのために、いずれにせよ乏しい弾力性を失って、細く、不様に長くなって、ベルトの所まで垂れ下がっていた。そもそも彼女にあっては一切が長かった。首も、デンマーク製の手袋もそうで、手袋は肘まで達していた。ずっと彼は不機嫌でいるのに一つの微笑が浮かんだ。「ラーケ嬢」と彼は思わず言った。

彼はようやく一切の捜査、探索を止めて、右手の方にあるホールへ歩んで行った。そこでは飲み物が渡されて、密集したグループの中で、一日のニュースが遣り取りされていた。大方は中年の紳士達であった。様々な王子達の、当時とても多かった宮廷国家の副官や侍従達、より小さな宮廷の大使達、外交部門や、戦時官房、王領官房の財務管理の部局長達からなる貴顕氏であった。その中の数人はこの家の格別の友人達で、王城と庭園の監督者であるヴァーレンティーン・フォン・マッソー氏､城代のフォン・ヴァルテンスレーベン、王立劇場の総監督、フォン・デア・レック男爵[1745-1810]、枢密院顧問官、それに警察会長ル・コク[1753-1829]であった。大学教授や医師、聖職者、ベルリンの市の名士達も現れていた。最初の窓の壁龕[ニッチ]では、宮廷説教家のアイレルト[1770-1852]と首席宗教参事官のザック[1738-1817]が熱心な会話を行っていて、レーヴィーンのすぐ間近では、教授ムルジナ[1744-1823]博士、同時町で最も著名な外科医であるが、それに俳優のフレック[1757-1801!]が活発な議論を行っていた。レーヴィーンは一語一語分かり、ムルジナがリチャード三世のびっこを不自然と思っていることを明瞭に聞いた。別の状況下であれば、この会話の進行に付いて行ければ、極めて多大な興味を覚えたことであろう。しかし自分の感情が落ち着かずに、この広間でも誰も馴染みの顔に出会えないことで、ただ重苦しい気持ちになっていた。自分が知っている若者は誰もいなかった。ブニンスキーもいなかった。こう気付くと突然また血が額に上がって来た。彼は顔色を変えたが、勿論単に、すぐ次の瞬間にはまたこうイメージしたことを恥ずかしく思うことになった。嫉妬はこのイメージのたびに、いつも新たな発作を引き起こしていた。

ようやく彼は一人のホルシュタインの男爵ゲールツに出会った。彼は故皇太后妃の廷臣で、ユルガスと親しく、ラダリンスキー家に出入りし、冬の間何回か「カスタリア」誌会合に出席していた。我らの友は彼に近付き、ユルガスとトゥーバルのことを尋ねた。「丁度彼らの所に行く途中です」と男爵は言って、広間の向かいの横側にあるドアに向かって行き、戸のカーテンを払い除け、レーヴィーンを入らせ、自らも後に従った。

それは我々に馴染みの、枢密顧問官の仕事部屋であった。しかしこの部屋は今日、社交室として共に使用出来るように、完全に模様替えされていた。グレーハウンドと金魚がお好みの場としていつも占拠している箇所には、当時流行していたアジサイの大きな植木鉢があって、高い、撤去を嫌う文書棚には深紅の、黒いギリシアの笹縁のあるカーテンが張られていた。ただフォン・ラダリンスキー夫人の肖像画は残っていた。大きな書き物机は

多彩な彩りの寝椅子と一群の可愛い金鍍金の黒檀椅子で置き換えられており、その中心には中国風の絵の描かれたテーブルがあった。ここで友人達は不均衡なほど多い数の様々な形状、色彩の空のグラスを前にしていて、レーヴィーンを歓呼の声を上げて迎えた。しかしその声は上品な社交の慣例を破るものではなかった。ブムケ[歩兵]大尉とフォン・ユルガス騎兵隊長は、寝椅子そのものの上でくつろいでいたが、彼を真ん中に迎えた。トゥーバルは黒檀椅子の一つに座っていて、真向かいであった。ゲールツ男爵と侍従のブリュール伯爵が寄って来て、サークルとなった。ブムケは、アングレーズが始まる前の十五分前にすでにカティンカとワルツを踊っていて、麻のハンカチで絶えず扇いでいることから察するに、務めた努力からまだ回復していなかったが、言葉を発した。

「トゥーバル、もう勘弁してくれだ。しかし貴方の妹御との踊りは妖精を相手にしているようだ」。

「どこにいるんだろう」とブリュール伯爵[1772-1837]は異を称えた、「十分前から探しているのだが、見つからない」。

「マズルカのために着替えているのだ」とトゥーバルが答えた。

「それでどんなに相手をしてくれたかと言うと」とブムケは続けた。シェリー酒の盆を持って丁度ドアの所に現れた給仕を手招きしながら、「彼女に何か洒落たことを言おうと思ったのだよ、　ー　美味しいシェリー酒だ、ゲールツ男爵、逃しちゃいけない、　ー　それで恵み深いお嬢様、と言ったのだ、貴女の名前を全部聞きますと、カティンカ・フォン・ラダリンスカ、すると私はいつもイエニチェリの音楽を聞くようです、いや正直、アルト・ラリシュ連隊のカリヨン[組鐘]の音のように響きます、と」。

「それで彼女は何と答えた」とユルガスは尋ねた、レーヴィーンとトゥーバルは視線を交わしていた。

「すると彼女は短く答えた。『それでは私どもはぴったりですね』と。それで私は不吉な予感がして、若干当惑して返したのだ。『何故と尋ねてよろしいでしょうか、恵み深いお嬢様』、すると彼女は言った、『あら、ブムケ大尉、少し驚きますわ。貴方の繊細な耳は他人の名前の音楽的意味のみに向いているのですから。貴方のいわば最初の名前の音節に生きている楽器[ブンバス、鈴の付いた軍楽器]を本当に呼ばなくてはいけませんかしら』、そう言って、彼女は私の腕を取って、それで丁度踊りが始まって、私は気まずさを隠すことができて、結局は彼女に感謝することになった次第」。

テーブルを丸く囲んでいた一同は笑いながら、自らを嘲弄する語り手の陽気さに和した。ただユルガスは、シェリー酒のグラスからコルクの砕けた屑を丁寧に取り除きながら、わざと真面目さを装っていた。

「貴方にはあきれる。ブムケ。どうして貴方はまだ踊るのか。危険に赴くものは、そこで沈没する。しかし諸君のことは知っている。歩兵隊の諸君。速やかなワルツを踊って、自らの痩身を披露したいとか、それどころか痩身を取り戻したいと思うすべての太った多大将達の空しい考えだ。いや、ブムケ、貴方は踊りが多すぎるか、少なすぎるかそのどちらかだ。享受するには多すぎるし、治療するには少なすぎる。踊りは中尉に任せればいい。三十九歳は軽い小昼の男、長短の諸会議の男というわけだ。それがたとえ『カスタリア』誌の会合であれ。ところで、レーヴィーン、次の会合はいつになる」。

「火曜日を守れば、明日」。

「分かった、ハンゼン・グレルと他の者達にも知らせよう。ヒンメルリヒとラバツキーは大丈夫だ。しかしトゥーバル、貴方の都合はどうだ。我らの友ブムケは、無分別に彼の年齢をさらけ出した私に怒っていると思うが、私が個人的に説得することにしよう。誰も欠けてはならない。以前も今も、カスタリアの枯れつつある源泉に新しい湧水を得るために尽力していて、また新しい諸力を開発したのだから。諸力だ、複数形だぞ。私が連れて来るのはまさに二名で、二人の負傷の仲間だ。詳しくは明日、貴方らに両紳士を紹介する栄を得たときにしよう。今日のところ、言えるのはただこうだ。昔は詩人だった、良かれ悪しかれ、こうした手合いは我らの若い少尉には多いけどな。しかし戦役、スペイン戦役[1808-13]とロシア戦役[1812-13]では、というのは実際両紳士はこちらに北方と南方からやって来て、我らの良き町ベルリンで出会っているからで、詩作の面に関しては、彼らは何も生み出していない。スモレンスクとボロジノは抒情詩には向いていなかったのだ。彼らが持参したのは傷と日記だけ。しかしこれも歓迎しなければならない」。

「それはそうだ」とレーヴィーンは保証して、今や起き上がって、ダンスの広間に戻ろうとした。これが皆にとって合図となった。ブムケでさえも、たった今耳にした警告にもかかわらず、半分ようやく空になったグラスを脇に置いて、従った。

これ以上都合の良い時は選べなかったかもしれない。四組のマズルカのペアが、ブニンスキーとカティンカ、それにシュレージエンの伯爵マトゥーシュカ、ゼーエル・トス、それにジェロティーンがその若くて美しい夫人達と一緒に丁度踊りを始めるところであった。紳士とレディーは同じコスチュームで、これは、強く国民性を打ち出さなくとも、少なくともポーランド的要素を角張った帽子と短い毛皮の上着で暗示していた。トゥーバルが短い手紙で言及していた、すでにヴィーリヒ家の夜会で輝いていたかの四組のペアであった。さて踊りが始まった。踊りは、当時我らの首都の社交では流行となっていたが、それでもオーダー川の向こう側からのポーランド人やシュレージエン人が居合わせるときには、彼らの卓越性を正しく恐れて、いつもただこれらの人々に踊って貰う習慣であった。

皆が優美な演し物のせいで集まって来ていた。それでドアの近くで更に席を見つけることは難しいことであった。ブムケは、肥満のためにその難しさが倍加していて、巨大に大きいフォン・ハーケ少佐と、首席教会説教家ザックの二人前宗教局参事官風采の隣に占拠することを諦めて、至聖所に戻って来た。すると彼が少なからず驚いたことにユルガスとゲールツ男爵が寝椅子の隅二つにすでに座っていた。

「三人寄レバ定足数。私は今日を貴方の改宗の日と名付けよう」とユルガスは彼を受け入れた。「来ないよりは遅れた方がいい。踊りそのものの他に、踊りを見ることは最悪だ。誘惑を考えてみるだけでいい、すべて覗くことにはそれが悪評高く備わっている」。

一人のお仕着せの従僕が通り過ぎた。見るからにこの晩のためだけの衣装であった。

「おやおや、グリューツマッハー、どうしてここにいる。しかし良く似合うぞ。ヴーヴ・クリコ[Cliquot]を一本。ういやつ」。それからゲールツ男爵に向かって言った、馴れ馴れしい調子にびっくりしたであろうからである。「ゲッキング軽騎兵の我らのかつての連隊付き理髪師です」。

従僕は戻って来て、瞬きしながら真新しいコルクの瓶を一本テーブルに置いた。

レーヴィーンはその間に見物人の最前列にまで乗り出して来て、また三十分前のように広間を見渡した。可愛く回転している四組のペアの中では、ただ一組だけ彼は見ていた。

彼はその姿の美しさに惚れ惚れしながらも、同時に最も痛々しい感情が忍び込んで来た。待機していなければならず、打ち負かされたという感情で、それも気まぐれや偶然によって負かされたのではなく、自分の恋敵の現実の卓越さによって負かされたという感情であった。彼は自らそれを感じた。彼が視たすべては、力、優美さ、情熱であった。これに比べれば自分の人の良さはいかほどのものであろう。彼の唇には一つの微笑が痙攣した。彼は自分が生気なく、素面で、退屈に思われた。レアーレ老伯爵夫人は、彼を目にして、再び大きな水晶グラスを目に当てて、しばらく観察してから柄付き眼鏡を下ろした。彼が自分に下した判決と同じものを下そうとした表情に見えた。フォン・ビショフスヴェルダー嬢の両巻き毛は更に長く、陰鬱に垂れ下がっていた。彼にとってはすべてが一つの印に思えた。

踊りは終わった。皆が広間に押し寄せて、四人の魅力的なレディーに感謝と称賛を表明しようとした。ブムケとユルガスも現れて、突然また姿を見せて、三十分間の不在を否認しようとしていた。

祝福を述べる者達の中に老ラダリンスキー本人もいた。彼は丁度美しい伯爵夫人マトゥーシュカと喋っていたが、夫人は肌色と柳腰の評価で、誇らかにカティンカの隣にさえ並ぶ女性であった。そのとき従僕の一人が彼に近寄って、何か彼の耳許で囁いた。

枢密顧問官は一瞬まだ会話を続けていたが、それから若い夫人にお辞儀をして、従僕に続いて行った。控えの間で彼は外交部門からの一人の使者を見いだした。使者は彼に封筒に入った書き付けを渡した。枢密顧問官は、この知らせの内容をどこで知ったものか迷って、衣装室に入って、書き付けの封を破った。ただ短いものであった。

「ヨルクは降伏した[York von Wartenburg(1759-1830)、一八一二年十二月三十日、ロシアの将軍に自ら部隊の中立を申し入れた]。マクドナル[ド][Alexandre Macdonald(1765-1840)]の副官がフランスの大使に知らせた。宰相は丁度国王の許に向かっている」。

「誰からの手紙だ」とラダリンスキーは尋ねた。

使者はラダリンスキー家と親しい閣下の名前を告げた。閣下はハルデンベルク[宰相]の右腕でもあった。

「閣下に私の感謝と敬意を伝えて欲しい」、そう言って、枢密顧問官は書き付けを自分の許に収めて、社交の場に戻った。

彼は黙っている決心をしていた。しかし広間の中央窓の側にカティンカとブニンスキーを、すぐその後にトゥーバルも熱心に会話しているのを見ると、冷静さがなくなって、喋っている者達に向かって歩いて行った。

「おまえ達に知らせることがある、貴方にも、伯爵、しかしここはまずい」。

返事を待たずに、彼はすぐ側の脇室へ向かった。ここは通常カティンカが住んでいて、今日は彼自身の仕事部屋同様、共に社交室の列に組み込まれていた。心の秘め事がひょっとしたら今晩のうちに生じたのかもしれない数人のカップルが、このいずれにせよ単にわずかな蠟燭とルビー色の赤いランプで照らし出された化粧室の静寂の中に逃げ込んでいた。しかし今や追い立てられて、その時の気分次第で、陽気にか、あるいは不機嫌の仕草で、その場を去った。

カティンカは空いた席を指し示したが、しかしラダリンスキーは言った。「腰掛けはしない、いずれにせよ社交は続けなくてはならない。私が言うべきことは要するに、ヨルク

は降伏したということだ」。

「何ダソウイウコト」とカティンカは言った、明らかに父親が真面目な表情を浮かべていたために、聞いた言葉がそれだけだったことに失望していた。彼女は全く非政治的で、個人的なこと、人物のことにしか興味はなかった。

「カティンカ」と伯爵[ブニンスキー]は叫んだ。そのとき興奮して、一瞬我を忘れていて、しかし速やかに自制して、丁重に言い添えた、「恵み深いお嬢様」。彼の声には軽い非難が感じられた。それから枢密顧問官に向かって言った。顧問官は、最初親しげに、それから丁重に語りかけたその変化を聞き逃していなかった。「降伏ですか。それはロシア人の側に付いたということでしょう」。

「そう思う」。

ブニンスキーは地団駄踏んだ。「これをこの国では忠誠と言う」。

時折一つの頭が戸の所に現れては、また速やかに消えて行った。しかし伯爵は興奮していて、あれこれのことに気付かず、辛辣に続けた。

「ドイツ人の忠誠については永遠に歌われます。誰もが学び、誰もが歌います。とても長く歌い続け、遂には自らそれを信じています。椋鳥もこの国ではそれをさえずるでしょう。このヨルク将軍がプロイセンの制服を着ていない者すべてを軽蔑していることは確かです。それの結末がこの『降伏』です」。

痛々しい間が続いた。誰も適切な言葉を見いだせなかった。老ラダリンスキーの中で、ポーランド人の血とプロイセン人の規律とが火と水とのように諍っているとき、カティンカは自分が浅はかに「何ダソウイウコト」と言って、この嵐を半ば引き寄せてしまったことを感じていた。

トゥーバルが最初に気を取り戻した。「伯爵、思うに、貴方の熱意が貴方の判断を曇らせています。貴方は私の立場を御存じです。その上私の出自から言って、狭小なプロイセン贔屓の疑いは持たれないと思います」。

枢密顧問官は囚われていた。しかしトゥーバルは、それを見ていず、あるいは見ようとせず、平静な調子で続けた。

「この事件をありのまま考えましょう。生じたことは、政治的行為です。歴史がある限り、大転換は、最も恵豊かな大転換でさえ、約束違反、忠誠違反から導かれてきました。数え上げることは致しません。例外はあるとしても、その数は多くありません。あるいは賢明に配慮して、巧妙に汚名を隠してきたのです」。

老ラダリンスキーは大きく息をした。一方トゥーバルは続けた。「偉大な、日常的なものの彼方にある使命を前にしている者は、その使命を忘れてはならないし、評判と良い名前という国内的概念の下僕となっては最もいけません。小心翼々と責任を放棄してはならないのです。そのことにこの名誉の件すべてが懸かっているのですから。神と自分自身とを相手に振る舞うべきです。自分を犠牲に出来なければなりません。自分と生命と名誉とを。それが正しい精神の中で生ずるならば、その精神は自分の賭けた名誉を二重に再び得ることでしょう。これは色々な義務の間の永遠の抗争で、その諸義務の価値を吟味する必要があります。一つの忠誠と別の忠誠は敵となり得ましょう。一つの忠誠を保持するには、別の忠誠を傷付けて購わなければならないとき、勿論いつも苦い臭みが残ることでしょう。しかしこの臭みを最も苦く感ずる者が、まさに最も純粋な動機から行動していたことにな

りましょう」。

「貴方がそこで考えておられるのはヨルク将軍ですか」と嘲笑の色を浮かべてブニンスキーは尋ねた。

「まさに彼のことを考えていました。要するに伯爵、貴方は彼を非とすることは許されますが、邪とすることは許されません。彼の行為の有効性は、そのうち分かりましょう。しかし彼の名誉は、私の擁護の必要ないもので、どのような嫌疑や攻撃からも守られるべきものです」。

ブニンスキーは返事をしたいように見えた。しかし音楽がまた始まった。戸口のカーテンが今や半分開かれていて、ペアがコントラ・ダンスのために集まっていることが分かった。カティンカは若い伯爵ブリュールと約束していて、会話を中断するように言った。会話はいずれにせよ、枢密顧問官が予想していたよりも別な方向に行き、もっと長く続くものになっていた。幾多のことが顧問官にとって痛々しいものとなっていた。ただトゥーバルの立派な態度がこの痛々しさを再び和らげていた。

コントラ・ダンスが終わらないうちに、社交の全員がこの大きな出来事について知っていた。その効果は推定予想以上にはるかに小さかった。殿方はこう請け合っていた、「想定内のことで、むしろただ不可避のことがなされたにすぎない」と。レディー達は大方がカティンカのように考えていた、ただ無関心な「何ダソウイウコト」を発しないだけの十分な賢明さを有していた。しかしその効果はどんなに小さくとも、それでもある種の放心を呼び起こすほどに十分大きくて、かくて社交の妨げとなった。すでに十二時には最初の馬車が出発して、三十分経たないうちに、広間は空になった。

ブムケにユルガス、レーヴィーン、それにゲールツ男爵と他の皆より頭一つ分高いフォン・ハーケ少佐が加わって、一緒に階段を降りて行った。下の方でレーヴィーンは彼らと別れた。しかし他の四人は皆同じ道を通って、ランゲ橋へ向かって歩んで行った。彼らが橋の中程に来たとき、大選帝侯[1620-88]の騎馬像[Andreas　Schlüter、1698 年作]が上半身を王の厩舎と古い郵便局によって、それらの窓にはまだ明かりがあって、照らし出されていた。立派な頭部は微笑しているように見えた。「見ろよ」とユルガスは言った、「我々はまだお仕舞いではないような表情をしている」。

第六章
大学の講義

レーヴィーンはケーニヒ通りを左手へ下って行って、自分の住まいに近道で帰ることにした。微かな、しかし凍える風がアレクサンダー広場から吹き寄せて、彼の顔を刺した。彼は外套の襟を高く上げて、身を守るために市役所の玄関に立っていた番人に挨拶した。

「刺すような風だ、エーレケ」。

「そうです、若旦那。ベルナウからの風で、これはいつも骨にこたえる」。

同時にお休みと言い合って、レーヴィーンはわずかにランタンの軋る音を耳にした。ランタンは長い通りに張られた鎖の中でゆっくりと風を受けて左右に揺れていた。彼はホーエン・シュタインヴェークを過ぎて、クロスター通りに曲がって、ここで絶えず歩道の右手を行きながら、半眼で反対側を窺った。ずっと前からどの家とも馴染みであった。パン

屋のレーヴェスの許では明かりがあって、焼きたてのパンの匂いが、地下室にあるパン焼き窯部屋の開け放たれた窓から車道を越えて彼の許まで漂って来た。倉庫として使われている古い「貯蔵の家」（かつての選帝侯の宮殿）のすぐ側で、一人のフランス人の守衛が、自分の武器を哨舎に立てかけて、両足で雪を踏み固めて、指をまた柔軟にしようとするとき、水夫がするように、腕を交差させて胸を叩いていた。それからグラウエ・クロスター学校が見え、それからクロスター教会となった。教会の二つの尖端の塔には高い雪の頭巾が被されていた。教会は岩が脆くなるにつれて、一層雪がしっかりと被っていた。

レーヴィーンは教会を目にすると、突然ヨハンナ・ズーゼミールの墓に詣でたいという気分になった。彼は道路の右手から左手へ移って、崩れたアーケードを通って、墓地へと歩んで行った。全ては厚く雪に覆われていた。しかし墓の側を通る小道が雪の中に踏み固められているのに気付いた。小道は墓が沈んでいるところではこれを越えて、教会の周りに通じていた。この道を歩んで、左手の内陣支柱の所へ来た。それが例の墓であった。墓を覆っている木蔦は、白い墓の覆いの下では多く見られなかったが、しかし支柱に沿って上がっていて、雪を余り被らずに、屋根の下では密に育っていた。まさにこの支柱に木製の十字架も寄りかかっていて、まだほとんど三年経たないというのに、すでに半ば朽ちていて、その銘は、　一　分かる限りでは単に名前のみで、銘文も日付けもなく、　一　嘆くように、哀願するかのように、天を見上げていた。レーヴィーンはこの光景に震撼されて、思わず両手を組み合わせた。それから雪の中、更に狭い道を進み、自分が出発した地点に戻って来た。そして車道を渡って、自分の住まいに向かった。

フーレン夫人はまだ起きていた。彼女は彼の若様が無事家の中に入るまでは、寝ようとしないのであった。

「フーレンさん、私はどこに行ったと思います」。

「枢密顧問官の所でしょう、美しい令嬢のいる」。

「そこにも行きました。それは先のことで、今先のことです」。

「分かりませんね」。

「ヨハンナ・ズーゼミールの所です」。

「この真夜中にですか」。

「最も良い時間です。フーレンさん、ヨハンナが哀れでなりません。いつも品行方正ではおれませんから」。

「神様、若様、どうなさったのですか」。

レーヴィーンは答えなかった。思わずかすかに口笛を吹いた。彼は放心しているように見え、老夫人がいるのにほとんど気付いていなかった。ようやく彼はまた語った。「私はまだ疲れていません、フーレンさん。今日の午後、先に一眠りしたからかもしれません。緑色の笠の明かりを、丸い台の小さな明かりを持って来てください。本をまだ読むことにします」。

フーレン夫人は頼まれたようにした。それから更に、外套を足先に置くように、じっとしていて三回、百まで数えるように勧めた。それから彼を一人にした。

彼は実際、興奮していた。老夫人によって与えられた立派な規律がただまことに功を奏することになった。熱に浮かされた速やかさの中、互い違いに様々なイメージが彼の許に侵入して来て、形姿が入り乱れて去来し、彼を圧迫した。カティンカがマズルカを始めた、

しかし相手はブニンスキーではなく、ブムケであった。それから彼は伯爵ブニンスキーがヨハンナ・ズーゼミールと一緒に内陣支柱の側に立っているのが見え、それからまたヨルク将軍が広大な雪原を騎乗して来て、その雪原は次第に小さくなり、クロスター墓地となり、将軍は内陣支柱の影に隠れようとする両人を指で威嚇した。ようやく形姿が消えて、熱病は彼から去った。彼は甘美に疲れた状態になって、時折少しばかり希望の小さな炎がちらちら点される兆しさえ見られた。同時に彼の中で、悲哀と希望とが釣り合いを取っているこの気分に表現を与えてみようという願望が生じた。彼は自分の古風な机に向かって行き、小さな明かりを、夙に傾いで、触れるたびにぎしぎし言う写字板の上に置き、引き出しの一つから、いつも用意してある白い紙の何枚かを引き出して、書き付けた。

案ずるなかれ、時は速い、
どんなに苦しい目に遭おうとも、
最悪のものさえ、長くはない。
別な一日がやって来る。

永遠の無常迅速の中、
苦しみもあれば、喜びもある。
楽しい日々の思い出も、
いつかおまえの許に戻って来る。

待機も、希望も、空しくはない、
時の拍子を数えることだ。
変遷が人生の定め、
見よ、別な一日がやって来る。

彼の心は一行一行書くにつれて、一層自由になっていった。彼はその紙片を別な紙片の間に差し込んで、横になり、眠り込んだ。

すでに八時を過ぎていた。フーレン夫人は、週の予定、一日の予定をすべて正確に覚えていて、火曜日は「講義の日」とよく承知していて、若様を茶碗をがちゃがちゃ言わせたり、アルコーヴのドアを開けたりして何度か起こそうとして出来ないでいたが、とうとうブリキの塵取りを大きな音立てて、あたかも二つの水盤を打ち合わせたかのように、落下させた。これはやはり上手く行った。レーヴィーンは起きて、半ば寝ぼけて、サイドテーブルを探して、時打ち時計で時を確認した。八時十五分であった。彼は遅れた時間にびっくりした。しかし急いでまた遅れを取り戻すことに重きを置いて、二十分後には長靴を履いて、行軍の支度が出来た。

しっかり眠って元気になっていた。すべての陰鬱な考えは四散していて、自分の書き付けた数詩節を見てようやく、これ写字台に半ば隠れてあったが、昨晩の気分を思い出した。しかし自分の記憶として残り、情緒としては残っていなかった。彼は数行ざっと見て、半ば声にして結論付けた。「見よ、別な一日がやって来る」。するとこの「別な一日」がす

でに始まったかのような新鮮な思いがした。高揚した気分で彼はまずランゲ橋を渡り、シュテッヒバーンやシュロスフライハイト[王宮特区]を過ぎ、かつてのハインリヒ王子の宮殿たる大学へ歩んで行った。

彼はこの道を週にただ二回通うだけであった。すでに学期を重ねていて、秋からは、三学年課程を終えていて、後はただ格別自分に気にいるものとか、自分が自由に使いたい一日の邪魔にならない時間割のものを聴講すれば十分ということになっていた。それで彼はサヴィニー[Karl von Savigny(1779-1861)]とテーア[Thaer(1752-1828)]、フィヒテ[Fichte(1762-1814)]を聴講していた。三人とも皆火曜日と金曜日で、それも経過順に並んだ時間に講義していた。残りの日彼は家にいて、全く自分の嗜好にあった研究に没頭していた。彼は多読で、全くロマン派の世界観の中にあって、ロマン派の行う論争を格別熱心に追いかけ、時には自らこの論争に参加していた。彼のテーブルにある愛読書はシェークスピアとパーシー[Thomas Percy (1729-1811)]によるバラード収集であった。両者が好きで、彼は英語を学んでいた。英語は話せなかったが、良く理解していた。時折彼は自ら数詩節試みた。「カスタリア」の見解によれば立派なものであったが、自らの判定によれば、本当の詩人的召命に欠けるものであった。しかしここで付言しなければならないのは、彼はこの点行き過ぎで、少なくともある点、ひょっとしたらまさに決定的な点で、自らに対し間違った厳格さに陥っていたことである。つまり彼が自分の弱点と考えていたものは、本当は彼の利点であった。彼は詩を作らなかった、詩は彼にやって来るのであった。彼は自分を苦しめる一切を、歌って心から下して行くという幸福と報酬を（詩人ならばきっと得られる唯一の報酬を）享受していた。

今日最初の講義はサヴィニーであった。彼は「中世におけるローマ法」について話し、彼が話し始め、終えた完全なる平静さから判断するに、大きな出来事について何も聞いていないように見えた。この出来事は実際午前の時間が経つにつれ、皆に知られていったのである。その後直接続くテーアの講義でも降伏については一音節も言及されなかった。教授は同じようにまだ知らなかったからか、それともこのテーマは彼の講義「輪作、並びに馬鈴薯栽培の農学的意義」とは上手く結び付かないと如才なく感じていたからであろう。

十一時から十二時まではフィヒテが「真の戦争概念」について講義した。それは公開講座で、これに対しては、主題並びに講演者の人気を顧慮して、最初から講義室の中で最も大きな部屋が選ばれていた。それでもレーヴィーンが入ったとき、皆が夙に席に着いていた、レーヴィーンはただようやく苦労して、最後のベンチの半ば隅の席を確保することが出来ただけであった。皆の期待が張り詰めていた。この期待は裏切られなかった。大学の猶予の十五分がまだ過ぎないうちに、彫りの深い顔の、そして青い鋭い目の小さな男が演壇に登場した。彼は演壇に達するまでに苦労していた。「皆さん」と彼は始めた。満足げな微笑を浮かべて視線を聴衆に滑らせた後であった、「皆さん、私どもはある大きなニュースの印象の下にいます。このニュースを無視することはこの瞬間には、不自然なこととも、あるいは臆病なこととも思われるもので、そのどちらも良くありません。私が何を言いたいか御存じでしょう。ヨルク将軍は降伏しました。この言葉は普通劣等な響きです。しかしそれ自体で良いもの、悪いものは何もありません。我々は将軍を知っており、それ故どのような精神で我々は彼の行為を解すべきか承知しています。私自身と致しましては、これはまず第一歩で、この第一歩は我々を貶めるように見えるが、この貶められた地点か

ら我々を高みへ導く第一歩であると確信しています。皆さんの耳許では別の言葉や解釈がなされることでしょう。臆病は自らを恥じるが故に、権威ある格言の裏や、偽りの名誉の法典の裏に隠れようとします。いや、この国の最良の紋楯の背後に逃げます。しかし鷲の巣はカラスの巣ではありません。偉大な行為が小心翼々たるものと承認されないことがあってはなりません。たとえ小心翼々たるものであろうとも、我々はこう信ずるべきです。たとえそうであろうとも、そうではないのだ、と。勇気を与えるものに希望を抱きましょう、希望を与えるものに勇気を抱きましょう。とりわけ我々は勇敢な将軍がなしたことを、なしましょう。つまり我々は決意を致しましょう」。

熱狂的に聴衆は答えた。それから皆が黙した。それ以上の示威は音高くならなかった。十二時の鐘の音と共に講演者が止めて、速やかに演壇を去っても、黙していた。ただ個人的尊敬の印として、彼の後に多くの者が長い廊下を通じて従った、それは彼が建物の西側の翼から野外に出るまで続いた。

レーヴィーンは講義室に残った。ユルガスに挨拶するためで、講義の間、彼が最前列の一つにいるのに気付いていた。彼は一人の若者と熱心に会話を行っていた。この若者はトゥーバルがクリスマスの手紙で描写した記述によれば、ハンゼン・グレルに他ならないと思われた。実際彼であった。

短い紹介の後、その際ユルガスはいつもの小さな悪巫山戯の嗜好に手綱捌きを合わせていたが、三人皆まず正面玄関に向かい、石造りの哨舎の間にある格子門へ赴いて、最後に一緒に散歩するために、右手のウンター・デン・リンデンへ曲がって行った。

この通りは、寒い日ではあったが、晴れた日なのに、人が少なかった。ただ多くの馬車が往来していることで、外交圏ではある興奮が生じていることが見てとれた。

当時はまだシンケル[Schinkel　(1781-1841)]による修復のなされていなかったレーデルン宮殿[Graf von Redern（1802-83）]の角で我らの三人の友はフォン・ハーケ少佐に出会った。彼は丁度王子の許から出て来た所であった。

「今日は、ハーケ、どんな具合」。

「良くない」。

「どうしてまた」。

「国王が憤慨されている。何の容赦もない命令を持ってナッツマー[Anton von Natzmer（1782-1861）]は今日のうちにも[フランス人]本隊へ送られる。クライスト[Kleist　von Nollendorf（1762-1823）]が指揮を引き受ける。老公は戦時法廷へ引き出されるだろう。運が良くても、首が飛ぶ」。

「皆芝居だろう。有り得ない。ヨルクを知っているが、正直な奴だが、ずる賢くもある。指示を受けていたのだろう」。

「そうは思わない。指示する時代じゃない。指示したら、受ける方ばかりでなく、与える方も束縛される。第三者を関与させたら、最悪だ。今最良なのは、その日暮らしだ。誰もが黙って受け取る唯一の指示は、自分で良いと思うことをしろ、結果は自己責任、ということだ」。

そう言って人々はまた別れた。我らの散歩者達はティアガルテンの縁を歩き、メーヴェスの花園という店に入った。彼らは小さなテーブルの許に腰掛け、幾つかの要求をしたが、全て出来ない性質のもので、店側を困惑させ、ようやく一杯のコーヒーを注文することで

落ち着いた。そのコーヒーは、一時であることを考えると、二回目の朝のコーヒーなのか、最初の午後のコーヒーなのか、誰も判断できないものであった。

レーヴィーンはこの間ずっと降伏のことよりもカスタリア誌会合のことを考えていた。この順番に回る社交を、文学上の内容の点で、できるだけその都度輝かしいものにすること、これが各人の名誉心となっていた。今日は彼の所に集合することになっていたが、しかし彼の方としては今晩の成功を確証させるものを何も持っていなかった。

彼はその点を冗談でユルガスに訴えた。ユルガスは同じ調子でまず、二人の紹介された客人、　ー　この機会にフォン・ヒルシュフェルト氏とフォン・メールハイム氏と明らかになったが、それではやはり不十分となったら、ハンゼン・グレルがいると指摘した。ハンゼン・グレルは、自分の知る限り、いつもポケットに何か新鮮なもの、かなり読めるものを持っている、と。「疑イナク、今日モイツモノヨウニ」。

ハンゼン・グレルはその反対を述べた。しかしこれに疑念を抱くことを許すような表情であった。ユルガスは頭を振った。レーヴィーン自ら直接交渉することにした。

「何か持っている」。

「いや」。

「あるとも」とユルガスは異を称えた、「求めよ、さらば与えられん」［マタイ、7,7、ルカ 11,9］。

少し間が生じた。それからとうとうハンゼン・グレルがポケットから厚いノートを出しながら、言った。「分かった。何か持っている。しかし元々出来上がっていなくて、それに出来上がることはないであろうものだ」。

「それでは」とレーヴィーンは答えた、「出来上がったも同然だ、いやそれよりましだ。いずれにせよ、断篇の文学はある。『断章』は書き得る最良のものだ。見せて」。

グレルはさっとノートから紙片を引き裂いて、レーヴィーンに渡した。レーヴィーンは、ユルガスが、「またしても巧妙な手口の詩人を逮捕した」と述べて、心地良く笑っている間に、数詩節を素早くざっと読み、何度か頷いて、自分の喜びと同意とを明らかにした。

コーヒーがその間に出された。彼らは飲むだけで、段々に置かれたシャクナゲの鉢も木蓮の鉢も、更に珍しいものとして椿も置かれていたが、ユルガスにとっても、彼の同僚達にとっても格別の興味を引かず、彼らはすぐまた出発して、町へ向かった。

ライプツィヒ通りとフリードリヒ通りの角で彼らは別れた。

第七章
カスタリア誌

レーヴィーンは昼食に行った。タウベン通りの袋小路状に塞がった一角に、ここから当時、今日もそうだが、城代広場までの細い通路があるのだが、古風なワイン店があって、そこの高い鏡板張りの壁や天井が煤けた客室、食堂で、レーヴィーンはかなり簡素な昼食を摂る習慣であった。いつもより早く彼は今日昼食を済ませて、四時にまだなっていなかったが、もう自分の住まいに戻って来た。二通の手紙が彼の不在の間に届いていた。一通はザスニッツ博士からのもので、カスタリア誌会合には出席できない旨遺憾の意を大層に述べており、もう一通は聖職候補生ヒンメルリヒからのもので、同時に抒情詩の寄稿が添

えられていた。同じ題「安息日」の下の四つのとても長い節であった。レーヴィーンは微笑して、その紙片を、赤鉛筆でＩと印付けてから、用意してあるカスタリア紙挟みとして使われる厚紙のフォルダーの中に入れた。その後すぐにまたハンゼン・グレルから受け取った詩と昨晩書いた自分の詩文を挿入した。これらの両寄稿も前もって赤い番号が付与された。

これで最初の準備はなされたことになる。しかし勿論最終的な準備ではない。まだなすべきことは多かった。それでも個々の問題は、賢明な法制化によって、極めて立派に規則化されており、前もっていわば解決済みとして了承される必要があろう。例えば接待の問題である。ユルガスによって制定された規約第七条は文字通り次のようなものであった。「カスタリアは、接待の件に関しては、その名前と起源とにふさわしいものでなければならない。その饗応の基盤は純粋な水をゆるがせにしてはならない。この水の次に位置するものはお茶である。ただ例外的にラインワイン、あるいはモーゼルワインを供して宜しい。偉大な同盟の杯は、我らの会員レーヴィーン・フォン・フィッツェヴィッツ司祭の手許に、同盟の創立者として任される。食事という実物は、例外としてさえ、認められない」。

これは第七条であった。しかしその先見性がすべての面倒を片付けていたとは言えない。レーヴィーンにとってますます焦眉の急となりつつある座席の解決には少しも役立っていなかった。これは一部には比較的狭い彼の部屋に原因があり、一部にはフーレン夫人の不十分な家具備品に原因があった。微妙な点であり、レーヴィーンは老夫人に対して打ち明ける勇気がなかった。かくて今日もまた、絶えず新たに苦労して試しながら、二台の丸いテーブルを並べるだけでなく、対角線上に並べる必要があった。壁と並行に並べては、ドアが開閉できず、フーレン夫人とのいずれにせよ大事な、唯一の連絡口の妨害になるであろうからである。

ようやくすべてが整った。レーヴィーンは自分の仕事が嬉しく思えた。ランプと明かりが燃えていた。両テーブルの一方の上にはカスタリアの象徴、大きな水のカラッフ[ガラスの瓶]が置かれた。一方別のテーブルの中央には、真珠の刺繍の煙草の箱が聳えていて、その中心の蓋の絵は、女王ディドーの死[『アエネーイス』]が描かれていた。ソファーとドアの間の壁となる箇所には、少なくとも大方の座席から容易に届くように、当時の慣習でスタンド風なパイプ用テーブルが置かれていて、ミザクラ材や他の材のパイプがタッセルや総で豊かに飾られてあり、また窓の下枠の隅には、何本かのラインワインの瓶とその隣に薄い銀鍍金のカスタリア杯があって、その時を待っていた。

フーレン夫人のシュヴァルツヴァルト産時計が、その拍子はレーヴィーンの部屋でも聞こえるものであったが、七時を告げたかと思うと呼び鈴が鳴った。ラバツキーとヒンメルリヒで、互いに三階で出会って、すっかり暗くなっていたけれども分かって、あるいは当てずっぽうに挨拶を交わしていた。一種の沈黙の協定で、彼らはいつも一番乗りで、他のメンバーが入って来るまでの数分を利用して、編集関係の問題を片付けるのであった。つまりラバツキーは小さな日曜新聞を出していて、その抒情詩的短編小説的部分はいつもこのカスタリア誌会合の始まる直前に最終的に確定されることになっていたと言っても過言ではなかったであろう。

ただ今日はそう行かなかった。ラバツキーは、ヒンメルリヒが良く呼ばれる「彼の正しい手」を最初の問題に加えようとしていた矢先、騎兵隊長が出現して、更なる下準備の全

てを不可能にしてしまった。ユルガスと一緒に二人の予告されていた客人、フォン・ヒルシュフェルト[Moritz von Hirschfeld の弟]とフォン・メールハイムが現れた。後者のフォン・メールハイムは左腕がまだ包帯の中にあった。レーヴィーンは、彼らに会えて嬉しい、フォン・ユルガスが見込みを告げたように、彼らが日記や回想の記事で、時に若干枯れかかっているカスタリアの源泉に力添えしてくれる用意があろうから、二重に嬉しいと述べた。両紳士ともお辞儀をして、ユルガスの方は前もって点検確保していた二人の原稿をレーヴィーンに渡した。

レーヴィーンはまだ会議は始まらないうちに、これまで個人的付き合いのなかった客人達と少し詳しい会話をする機会を持ちたいと願っていたが、しかし最初の挨拶を終えたばかりの時に、また呼び鈴がなって、始まったばかりの会話が打ち切られた。入って来たのはトゥーバルとブニンスキーであった。レーヴィーンは伯爵とヒルシュフェルトの間で、両人ともスペインに行って、それぞれ違う側で戦っていたので、最初から緊張した関係が生ずるかもしれないと予期していた。しかしまさに思いがけないことが生じた。ブニンスキーは、トゥーバルから知らされていて、単なる礼儀よりもほとんど親密さの調子の感じられる丁重さで、早速ヒルシュフェルトに向かっていた。そしてもとより、特にユルガスの愛好する疑問や中断で、長い会話は無理であったが、伯爵は些細な気遣いを通じて、自分の敵対者に対する格別な共感を表明する術を心得ていた。

フォン・ブムケ歩兵隊長が最後となった。ユルガスは大目に見ようとはせず、彼に時間を示した。

「親愛なるブムケよ、軍人には大学教授の猶予の十五分はない。夏の時であれば、貴方の格別の事情を鑑みると、遅れることは有り得よう。しかし十二度の寒さでは、世のどんな肥満者にもおよそ二十分の遅刻の弁解は許されないぞ」。

「始めよう、始めよう」と何人かの声が叫んだ。その中ではラバツキーとヒンメルリヒの声が明瞭に聞き取れた。レーヴィーンは、会員と客人が、都合のいいように、二つのテーブルの周りに集まる間に、砂糖叩きで叩いて合図して、それから自ら、立てたソファーのクッションを一種の会長席に見立てた背もたれ椅子に着席した。彼は演説の名手ではなかったが、職務と状況上他に選択の余地はなかった。

「皆さん」と彼は始めた、「ようこそと申し上げます。残念ながら全員は揃っていません。最良の批判的勢力が欠席です。つまりザスニッツ博士から手紙で都合が悪いとのことです。これに対し、立派な一連の品を、その中には印刷物もありますが、貴方らの御前にご披露出来ることは嬉しいことです。これらの印刷物の中には上の方に、カスタリアの以前の会員によって書かれている出版物があります。それは、フリードリヒ・カルクロイト伯爵[Graf von Kalckreuth(1790-1873)]による叙事的賛歌の『ブランデンブルクの先祖』でありますし、また数日前当地の J.E.ヒッツィヒから刊行されたばかりのフリードリヒ・ド・ラ・モト・フケー男爵[Freiherr de la Motte Fouqué(1777-1843)]による『ドラマ集』であります。このドラマ集の中には「ハラーゼー家」や「大選帝侯の帰還」が含まれていますが、これらは前年の冬、我らのサークルでまず読まれ、大いに称賛を受けたものです」。

ここでレーヴィーンは中断して、紹介した二冊の本を回覧させた。それから続けた。「今日の会合のために新しい寄稿として五つの作品が集まっています。分量は様々です。抒情詩や抒情的叙事詩、更にはスペインやロシアからの日記や回想記です。抒情的なものから

始めて、物語の領域に含まれるものすべてを、後に続ける慣例です。聖職候補生ヒンメルリヒにお願いして、私の判断が正しければ、英語から翻訳された彼の数詩節を朗読して貰いましょう。タイトルは「安息日」というものです。

こう言ってレーヴィーンは紙を渡した。

ユルガスは題を名付けたとき、かなり示威的なやり方で左の手のひらを顎に持って行った。

ヒンメルリヒは明らかに神経質に落ち着かず、熱心に、何度か畳まれた紙片をまた滑らかに広げようと努めていて、まず繰り返した。

「安息日。ウィリアム・ウィルバーフォース作の詩」[実際は John Critchley Prince (1806-66)作 The Poet's Sabbath]。

「それは奴隷商売を止めさせた」とユルガスは尋ねた、「あのウィルバーフォースと同じ人物かい」。

「いや、逆です」。

「それでは、またその商売を導入しようとした人物のことか」。

「それも違います。かくも有名な名前を有する若き詩人、私が今日紹介しようと思う詩人は工場労働者です。『逆です』と申したのは、彼自身がまだ一種の奴隷状態にあるということを言いたかったのです。私の言い回しの非論理性を感じています。お許しください」。

「分かった、分かった、ヒンメルリヒ。いつもそうむっとせんでいいだろう」。

「一切むっとするような感情を私は抱いたことがありません。しかし話し始めましたので、若干注解を述べさせて頂きます。皆様には御承知のことですが、英語は短い単語が過剰にあります。この短い単語は、いつもではありませんが、大抵ただの一音節で、それで我々の三音節分を済ませてしまいます。更に注意を促しますと、イギリスには女性韻[強音節＋弱音節]はほとんど見られません」。

「とんでもないな」。

「この言語上の違いにより面倒が生じていまして、少なくともこの面倒についてざっと触れることを好意的にお許しください」。

「いや、ヒンメルリヒよ、議長の決定は別として、好意的にお許しはできない。これまで黙って聞いてきた。どの雌鶏も卵を生む前には、があがあ鳴くと承知しているから。しかしこの大目に見る自然権利も限度がある。カスタリアの記載された権利を踏み越えそうになったらいけない。我らの規約の第九条に前口上の問題は明確に記されている。そして前口上そのものに然るべき節度を与えている。熱弁についてもあの詩人の言葉は妥当する。『炎の力は、人間が見守る限り、有益である』と[シラー『鐘の歌』]。私は規約に配慮されている節度をすでに越えているという印象を持った。それ故我らの議長殿に詩の朗読を自ら要求するように願いたい」。

レーヴィーンは同意して頷いた。ヒンメルリヒは、少し顔色を変えたが、震える声で始めた。

「安息日の朝まだき、沈みながらなお
満月の魔法の銀の明かりが華麗に注がれる。
静かな、青白い星々の夏の夜の

夜半が過ぎたばかりの朝まだき、
すでに私はいそいそと出掛けた、
畦に沿い、森と沃野に沿って、
そして朝が目覚めるのを待つ、
敬虔に景色を眺めるために、
この景色の荘厳さを前になべての心は溶ける。

雲雀が目覚め、翼ではばたいて、
高みへ上がる、我らの世を蔑しながら、
そして上がるにつれ、雲雀の歌声は、
喜びの諧音に次第に溢れ、
大鷭[おおばん]は追いかけられたかのように、
羽根をばたつかせて私から逃げる。
小羊さえびっくりして立ち止まり、
草をゆっくりと食み続ける代わりに、
杭から身を振り解き、湿原を駆けて行く。

この箇所で朗読はお茶の盆を持って入って来たフーレン夫人の出現で中断された。レーヴィーンは、絶えず詩人の虚栄心に共感していて、自分自身それに馴染んでいるが故に、何度か老夫人に出て行って欲しいと合図した。しかしすでに遅すぎた。ヒンメルリヒは数分間の殉教に耐えなければならなかった。回ってくる盆が彼の所に来たとき、彼は短く感謝して、ようやくまた去って行く老夫人に対して、悲喜劇的憎悪で一杯の視線を送って、それから高揚した声で続けた。

さて明るくなって行く、見よ、山の頂は
深紅に輝き、太陽自らの
炎の球がすでに梢に金鍍金をかけている。
谷には霧が湿った波を追い立て、
永遠の光の源泉はより高く
水晶の穹窿の中へ拡がろうとする。
光は高みと深みのいずれにも溢れ
峡谷に沿って最後の影が漂う、　ー
新しい一日がやって来て、新しい命が息づく。

今や、神よ、私を御身の許にいさせ給え、
すべての英知の源泉、私の主にして父なる方、
私の心を覗き給え、御身に私は手を合わせて祈る、
御身の光で私の道を照らし給え、
私の罪と弱さから抜け出す力を
私に与え給え、　ー　御身のみが能うことなれば、

そして御身の目の輝きの許で、
私の目の弱い視力を鍛えさせ給え、
正しき道を選ぶ意欲が湧きいずるように、と」。

最後の行の響きが終わると、書籍商のラバツキーがその席から立ち上がって、重々しさと謙虚さとが絶えず競い合っているような調子で、「皆さん、貴方らの一層優れたご判断に」(「いいぞ、ラバツキー」)「何か先回りしたいわけではありませんが、単にただ私の主に仕事柄からの観点から意見を述べさせて頂ければ、この数詩節を私の日曜新聞の次号に、それも例外的にその新聞のトップに持って来ることが出来れば幸せと評価する次第であります。ヒンメルリヒ氏にその許し頂きたく、また同時に注釈でこのイギリスの詩人の短い経歴のメモを書いて頂きたく存じます。この詩人はその著名な同名人に全く匹敵するように思われます」。

ラバツキーのこの追従の言葉をこの先の一切の良き兆候と見なして、ヒンメルリヒの顔に神々しい影が差した。しかし彼は彼の勝利を長く祝うことはかなわなかった。丁度新鮮なパイプを吸っていたユルガスが、つけ木を叩き消して、言った。「我らの友ラバツキーの日曜新聞への感激は尊重するとしても、一つ伺いたい。これは断篇かね」。

「いいえ」。

「それでは、貴方の安息日は確かに終わってはいるが、しかし結論はないと私は言いたい」。

「それについては議論の余地がありましょう。私は私の朝の散歩者が朝食に至るまで付き合う必要はないように思えます」。

「私としては、この詩にそのような情緒的牧歌の添え物をしても害はないように思えるが。しかしそれはいいことにしよう。しかし形式だ、形式、ヒンメルリヒ。これは何という奇妙な詩節だ」。

「所謂スペンサー詩節です」[八行弱強五詩脚に九行目六詩脚][Edmund Spenser(1553-99)『妖精の女王』]。

「スペンサー詩節だと」とユルガスは続けた、「私にはその名前はこの詩そのものよりももっと奇妙に思えるぞ」。

「思いますに、フォン・ユルガス殿」とヒンメルリヒはますます興奮して行く調子で答えた、「貴方はオッターヴァ・リーマ[八行五詩脚]の構成には馴染みがあると思います。かの八行の美しい詩節で、タッソとアリオストが不滅の作品、『狂えるオルランド』[1532、アリオスト作]や『解放されたエルサレム』[1575、タッソ作]を詩作しているものです」。

ユルガスはこの領域では全く不案内であると感じていて、更に煙草を吹かせて、自分の募る自信のなさを隠そうとして、優越性の表情を浮かべて、「それで」と発した。

「それで」とヒンメルリヒは最後の言葉を捉えて言った、「スペンサー詩節はこのタッソやアリオストの詩節の兄弟の子供と見なされるかもしれません。勿論韻の位置は違います。それに八行ではなく、九行で、まさにこの九行目では五詩脚のヤンブスから[六詩脚の]アレクサンドランへ移っています、...」。

「しかしそれでも結局同じものではないか、ヒンメルリヒ。この結論は羨ましいな」。

熱を帯びた議論は不可避に思えた。しかしレーヴィーンはこう述べて、巧みに議論を打

ち切った。このサークルの課題は、スペンサー詩節とオッターヴァ・リーマの間の親近さの程度の大小を確定することではなかろう、と。自分としては詩文そのものに注目して欲しい、それがなされないのであれば、フォン・ユルガス殿による若干の些細な非難にもかかわらず、いつも誠実に出席される会員、書籍商のラバツキーがすでに表明された温かい言葉を、ただカスタリアそのものの判断、感謝の表明として受け入れて欲しい、と。

そもそもこの提案は受け入れられたばかりでなく、進んで受け入れられたので、この皮肉な臭みは不幸なヒンメルリヒによってとても十分に感じられることになった。

「それでは次に届いた寄稿に移ることにしましょう」とレーヴィーンは続けた、「それは我らの尊敬する客人、ハンゼン・グレル氏の詩節です。彼を客人としてではなく、今すぐにも会員としてお迎え出来ますれば、それは私の個人的願いでありますが、またカスタリアのすべての会員の共に抱く願いであろうかと存じます。ハンゼン・グレル氏にその詩節の朗読をお願いします」。

ハンゼン・グレルは煙草の煙がすでにそのヴェールを広げ始めていたので、明かりをもっと手近に引き寄せて、躊躇いなく、平静に、しかし良く通る声で始めた。「ザイドリッツ、一七二一年二月三日、カルカル生まれ」[Friedrich Wilhelm von Seydlitz（1721-73)]。

「それが題かね」、とユルガスが遮った。

「そうです」と短い答えがあった。

「それでは一言述べさせて頂くが、このタイトルにはヒンメルリヒのスペンサー詩節の構成や韻よりもびっくりする。『一七二一年二月三日、カルカル生まれ』、これは墓碑銘の題で、詩の題ではない」。

「それでも題に関しましては」とハンゼン・グレルは陽気に答えた、「フォン・ユルガス殿自身のせいに他ならないのです。好意詐取に類するもの一切がお嫌いでなければ、私の詩のタイトルは単に『ザイドリッツ将軍』となる予定だったのです。しかしながら、ここで欠かすわけに行かない『カルカル生まれ』を慣例的前口上でご披露することが一切許されなくなると、かの伝記的メモとしてすぐタイトルに加えるしか手がなかったわけであります」。

「それではまた前口上を聞いたことになろう、...」.

「前口上はいかんというわけですから。　ー　いや、お仕舞いにします」。そしてハンゼン・グレルは今やよどみなく読んだ。

「ザイドリッツ将軍

本を読んだり、ベンチに座ったり
それは彼の本領ではなかった。
馬屋の馬に水を飲ませること、
それがもっと立派なことに見えた。
彼は輝く銀色の拍車を帯び、
それに青い鋼の刃を持つ、
生まれた地はカルカル、
カルカルとは拍車の謂。

風車の翼がざわめき、
梯子や桟橋が揺れ、
全速力で馬が
翼の下を駆け抜ける。
止めずに身をかがめて、
大地から彼は束の
穀物を引き抜く、
カルカルたあ、拍車の謂。

皆が橋の上を駆ける、
国王が冗談で仰せられる、
『いいか、前も後ろも敵だ、
ザイドリッツ、いかがする』。
彼は橋の壁を越えて、
前方半ば左に飛んで行く。
奔流は岩のように押し寄せる、
いざカルカル、拍車の謂。

また別の時代になった、
短い英雄時代。
彼は致命傷を受けている。
微笑して言う、『儚い名声。
しかしもっと立派な騎兵のホルンを
どこで耳にしようとも、
私はこの敵に向かって行く、
カルカル、それは拍車の謂だから』」。

カスタリアが長いこと聞いたことのなかった歓声がすべての側から上がった。そしてハンゼン・グレルが更なる小凱旋式を避けるべく冗談で述べたように、この火曜日の会合の騎兵的構成について完全な証言がなされた。彼の言はこの点当たっていた。ブニンスキーとヒルシュフェルト、メールハイムは専門の騎兵であったし、トゥーバルとレーヴィーンは騎乗者であった。少数者の方も活発な賛同の表明を欠かさなかった。ブムケは、騎兵ではないとしても、少なくとも兵士であった。ラバツキーは決して非難せず、ヒンメルリヒは自分の不機嫌を、熱狂的な、たとえ短く、いくらか痙攣的であっても叫び声の背後に隠すことが出来て、ほっとしていた。その上自分自身に対して更に嫉妬しない性格の偉大さという快感を味わえたのである。

ようやく興奮は収まった。トゥーバルは発言を求めたが、「前方半ば左に」の表現の可否について丁度またブムケとユルガスの間で勃発した私闘で、若干その機会が得られずにいた。しかし最後に出来て、トゥーバルが今や述べた。「私はまずザスニッツ博士がしば

らく前この場で述べた文を思い出して頂きとう存じます。『我らの厳格さは我らの誇りである』と。貴方らにはこれが私が攻撃に取りかかろうとするときの橋頭堡であることを承知して頂きたい。我々が丁度耳にしたこの詩の魅力は、専らその調子と処理にあります。大胆に取りかかり、大胆に遂行されています。しかしこの大胆さが多すぎます」。

「そうかなあ」とユルガスは反論した。

「そうです」とトゥーバルは続けた、「我らの尊敬する客人も自らこのことを感じておられた」。

ハンゼン・グレルは頷いた。

「どの芸術作品も、少なくともこうした事柄に関する私の知見と致しましては、作品それ自体で理解されなければなりません。歴史的注解や伝記的注解なしに。しかし私はこの詩においては、この要求が叶えられていないと思います。これは顕著に機会を手掛かりとしていて、婚約や結婚の乾杯の辞のように、狭い、極めて狭小なサークルを当てにしています。半ダースものザイドリッツの逸話が既知であることを前提にしています。これは単にプロイセンの聴衆にのみ理解されると私が主張しても言い過ぎではありますまい。この詩を、最良の翻訳であれ、イギリス人やフランス人に朗読してご覧なさい。この人は戸惑うばかりでしょう」。

ブニンスキーは頭を振った。

「我らの尊敬する客人、ブニンスキー伯爵は」とトゥーバルは続けた、「私に同意なさらにように見えます。この詩人のために、思いがけぬ側から擁護者の出現を目にすることは、嬉しいことです。伯爵はひょっとしたら、もっと詳しくこの対象について表明される好意をお持ちかもしれません」。

レーヴィーンは同じ依頼を繰り返した。

「手短に述べさせて頂きます」と伯爵は、立派な、ポーランド訛りのドイツ語で言葉を発した、「私はザイドリッツ将軍についてはその名前と名声についてしか知りません。しかしハンゼン・グレル氏の詩を完全に理解したと思っています。彼の詩節から、ザイドリッツはカルカルの生まれで、彼は勉強は好きではなかったが、それだけ一層乗馬は好きであったと分かります。それから逸話が続きますが、これは明瞭にそのことを語っていて、同時にまたその騎士精神の見事さを語っています。そして最後の詩節で、かのもっと立派な騎士に屈しますが、このもっと立派な騎士に我々皆が早晩屈するものです。このわずかなもので十分です、これは豊かなものですから。ここに秘密があります。私は、自分が懐かしく思う以上に長く生きた年月の間に、私の故郷の民謡を気にかけてきました。その多くを収集もしてきました。しかしいつでもこう気付いたものです。飛躍の仕方が、こうした詩文の特徴であり、美点である、と。空想はただ正しく蹴り出す必要があります。これが成功している場合、こう大胆に言ってよろしいでしょう。『少ない語りほど、一層良い』と」。

「申し上げます」とトゥーバルは答えた、「我々の会合の進行を願わしいもの以上に長く中断させないことにしましょう。我らの議長殿のフォルダーを不躾に覗きますと、私の間違いでなければ、次は更に若干の議長本人の詩節が期待できるかと存じます」。

「我らの友ラダリンスキーの慧眼は、このたびもまた正しかったことが保証されます。一連の抒情詩を今日自分の詩で締め括ることが私の意図でしたが、まだ推敲が必要で、私

の寄稿を取り下げさせて頂きたく存じます」。

レーヴィーンはこの言葉を、当惑も交えて、語っていた。彼の本来の意図から彼を遠ざける切っ掛けとなったものは、実ははなはだ別な理由であったからである。どのような臆病な気分からこの問題の三つの小さな詩節は書かれていたか、そしていかにこの臆病は結局、希望の衣装に纏われていたかったことか、彼は最も良く承知していたけれども、それでもあたかもブニンスキーが繊細な耳で、この歌の悲歌的根底の調子を聞き取って、その調子の由来を推し当てるに違いないかのような気がせざるを得なかったのである。この考えは彼にとってはなはだ辛いことで、それでやはり本当にこの詩節をフォルダーに押し戻し、そして今や上の方にある散文の原稿を、騎兵隊長フォン・ヒルシュフェルトに渡して、朗読を始めるよう頼んだ。

頼まれた者は、兵士の魅力と長所である例の率直さで、姿勢を正して、何の前口上もなく、響く声で始めた。

スペイン戦争の思い出
プラー近郊の戦い

私の兄オイゲンは、最初シル[Schill（1776-1809)]の許で、それからフォン・ブラウンシュヴァイク公爵[Herzog von Braunschweig（1771-1815)]の許で戦って、更にイギリスへの乗船に加わった後、そこからスペインに仕えることにして、一八一〇年夏アンダルシアに上陸しました。私はそのことを耳にすると、彼に従い、まさに上陸して、カディスの大きなマルクト広場で兄に会いました。再会の喜びについては省略します。兄はその日少佐の辞令を受けていて、兄の力で私は容易に将校の地位を得ることができました。

カディスの日常は面白くないもので、我々は、カタルーニャ常駐の、毎日敵との戦いに明け暮れている軍の部隊に配属されるという知らせが届いたとき、喜んだものです。我々はそちらに赴き、極めて難儀な、スペイン軍船とイギリス軍船との違い全体を思い知らせてくれる海の旅の後、タラゴナの港に上陸しました。これは十一月の終わりで、丁度私がスペインに到着してから二ヵ月経っていました。カタルーニャはアンダルシアよりも立派に見えました。我々はアルカンタラ軽騎兵連隊に所属しました。私の兄は陸軍中尉で、私は一級将校でした。我々が受けた歓迎は戦友風なものでした。人々はすべてのプロイセンの将校に格別の信頼を抱いていました。

アルカンタラ軽騎兵はかつてとても傑出した、とても華麗な連隊でした。軽騎兵は、旧体制の許、白い飾り紐の付いた三角帽と、赤い裏地と赤い襟の付いた、黄色の長い上着、それに緑色の折り返し付きで、そして青くて短いズボンを着用していました。従ってすべての色が使用されていたわけです。しかしこの華麗さ、壮麗さは、それ以降全軍が経験した新編成の後では、ほとんど残らず、我々が見いだしたアルカンタラ軽騎兵は、低級な革の筒形軍帽と連隊番号と真鍮ボタン付きの長く青い上着で満足せざるを得なくなっていました。武器は細い刃と、重い鉄の護拳の付いた長い剣で、それで手に重みが加わり、それに騎銃とピストルがありました。

我々の連隊はオドネル将軍[O'Donnell(1769-1834)]の軍に属し、個別には、サースフィールド将軍の特別部隊に属していました。サースフィールド[Pablo　Sarsfield]将軍は、二

十六歳になったばかりの、傑出した兵士で、戦闘の際、鉄のように冷静で、私の兄に格別の信頼を寄せていました。兄の中に、将軍自身秀でているすべての特性を素早く再認識したのでした。この部隊は数は少なく、二個の歩兵連隊と四個の騎兵連隊から成り、合わせてせいぜい五千人でした。それはアルメリア歩兵連隊とヴィンプフェン男爵スイス連隊、それにアルカンタラ軽騎兵、ヌマンシア軽騎兵、カタルーニャ重騎兵連隊とグラナダ軽騎兵連隊でした。

我々が到着して最初の数日してすぐに、四百頭の馬を有する前衛が形成され、私の兄の命令下に置かれました。我々に敵対するのはマクドナル将軍で、将軍は我々が支配している北側のバルセロナに対して、強大な勢力で対峙していて、迂回行軍を遂行し、我々が支配している南側のトルトサをも奪回しようと考えていました。こうなると、我々は閉じ込められてしまい、タラゴナへ引き返して、ここからまた出航できることを喜ぶしかなくなったわけです。するとカタルーニャは敗北となります。事実そうなりました。しかしそれ以前に一連の死闘が続いたわけです。

この一連の戦いから、私はただプラー近郊の戦いだけを取り上げます。これは私にとって個人的に決定的なものとなったからです。

トルトサがやられたと我々が知らされたのは、一月七日でした。我々は当時サースフィールド全部隊がある高い山岳の北側に、それは海岸からある程度離れて海岸と並行に並んでいる山岳でしたが、陣を構えていて、毎日マクドナルの部隊の前線と前哨戦を繰り返していました。この部隊はレリダからタラゴナへと山岳を横切る道を占拠しています。この道路は、隘路、つまり所謂プラー山道を含めて我々が押さえている限り、重要な地とは言え、トルトサを失っても、少なくとも我々の直接な安全には危害の見られないものでした。この山道の確保が海への退路を保証していたのです。全体として見て、敵の側からの大きなエネルギーの仕掛けとは言えないものを計算に入れると、我々は陣地を変える必要はなかったのでした。我々は持ち堪えたので、攻勢に転じました。すると北側斜面の我々の陣地を空にして、山岳の別な側に移ることになって、我々はすでに半ば敗北に近いかの憂慮の隙を敵に見せてしまったのです。

我々は敵の戦意を過小評価していました。少なくともシュシェ将軍[Louis Gabriel Suchet (1770-1826)]の戦意たるや、将軍はマクドナル将軍と一緒に戦いながら、活発さの点ではマクドナル将軍に勝るほどでした。一月十四日、強力な敵の前衛が海岸から、つまり我々の背後から行軍して来て、明らかにプラー山道を閉めきる意図を有しているという知らせが入りました。プラー村は山岳の我々の反対側に、山岳のすぐ麓にありました。サースフィールド将軍はこの知らせを受け取ると、すぐに決断を下しました。彼はそれまでアルカンタラ連隊とグラナダ連隊のわずか四百頭の馬で構成されていた前衛に、ヴィンプフェン・スイス連隊の二大隊を補強して強化し、私の兄には夜行軍して山を越えて行き、夜明け前に反対側にあるプラー村を占拠するように命じました。出発はすぐになされました。しかし恐ろしい天候で、雨と嵐になり、狭い山道では人が一人続いて通れるほどで、プラーへの到着は朝の十時までに延びてしまいました。ぎりぎりの時になっていました。すでにフランス人の前衛部隊がエウヘニオ[Eugenio]将軍の許、(そんなわけでここでは二人の同名の者達[兄は Eugen]が対峙していたわけです)、プラー村に侵攻して来ました。私の兄は死力を尽くして、村を正午まで守りました。

この頃になってサースフィールド将軍が主力と共に現れて、すでに押されがちであった戦いをまた立て直しました。しかし我らの側は前進は出来ず、一時間後には敵の側もかなり増強されて、敵は全員揃った軽騎兵連隊が重ねて攻勢に転じました。こちら側は一時、我らの前衛が崩れて、前に引き出された重騎兵連隊、つまりドン・ペドロ・ガロン司令官の下のカタルーニャ重騎兵しかいなくなりました。これらの重騎兵のすぐ後ろに我々はいました。つまりアルカンタラ軽騎兵とグラナダ軽騎兵です。我らの重騎兵は二百頭弱の馬で、余りに弱く、動揺致しました。しかしこの瞬間、私の兄はこの動揺を察知して、我々に攻撃するよう合図して、長い戦列の中、我々は敵の軽騎兵の左の側面に押し寄せました。敵は早速引いて、その背後にいた猟兵連隊と共に自ら敗走して行きました。追撃がしばらく続き、多くの捕虜を得ました。エウヘニオ将軍は、自ら敗走を抑えようとしましたが、斬り倒され、その翌日亡くなりました。

完全な勝利でした。我らの側としては左程代償は高くつくものではなかったのです。ただ私はこの戦いで多くを失いました。私の兄オイゲンは、自分が向かい合った将軍エウヘニオ同様傷を負って倒れました。更に私が言うべきことは、ただ兄と私に関することだけです。

五時になると戦闘は終わりました。私はアルカンタラ連隊のうちまだ勢力として残っていた者達をまたプラーへ戻しました。私は全体として上手く移動致しました。しかし私は取り押さえようとしていたあるフランス人軽騎兵との戦いで、剣の一撃を顔に受けてしまい、それで黒く腫れ上がり、多くの負傷者よりももっと惨めな恰好になってしまいました。そんな様子で私は兄の前に行きました。兄の負傷はすでに途中耳にしていました。兄はプラーの百姓の家で立派な人々の世話を受けていました。兄は私を見ると、まず包帯をして貰えと主張して、その通りになされました。また私が兄の許に戻ったとき、私は腰を下ろして一緒に話し始めました。まずは無事に済ませて来た戦闘について話しました。私はすべて些細なことを語らなければならず、兄はそれにとても関心を示して聞いていました。例えば私の馬の片方の耳が、これは立派な黒い雄馬でしたが、頭部のすぐ近くから切り落とされたことを、兄はとても残念がっていました。しかし私が戦利品分配の際ある旅行カバンの中に見つけた日記に、兄は格別注意を向けていました。それはカタルーニャへのフランス人達の最初の入場から一八一一年一月十四日まで大変正確に記入されたもので、小さな略図を含んでいて、我々も従軍した戦争のほとんどすべてが描写されていました。オイゲンは三十分ほどこの日記をめくっていて、描写の中立性を称えました。私はこうしたすべてから、危機を察知せず、ドクトルの言葉を信用せざるを得なかったのです。医師は、負傷した兄が時々激しい痛みを訴えても、単に二箇所の軽い負傷について述べるのみでした。左脇への剣傷でした。ただ兄の気の優しさが目立つように思われました。兄は感傷的気分になっていて、多く家のことを語り、私どもの老いた父について語り、私に挨拶の言葉を頼みました、自分は数週間まだ書くことができないであろうから、と。

このように晩は過ぎました。私はとても疲れていましたが、兄の許で番をする計画でした。しかし別な風になりました。すぐ真夜中過ぎに、警報が吹かれて、私は村の正面で露営している連隊へ行きました。連隊はその後すぐ、バルスという名前の、海岸に位置する小都市に関し偵察するようにとの命令を受けました。私は負傷した兄を立派な看護に預けました。私はヴィンプフェンのスイス連隊に何人かの隊員を、兄の警備のために頼みまし

た。すると、この隊員を指揮している下士官は、以前私の兄がまだハルバーシュタットで駐屯していたとき、兄と一緒に同じフォン・ブラウンシュヴァイク公爵連隊の中隊にいたことが分かりました。両人は、再会をとても喜んでいました。

バルスへの我々の騎行は大したことがなくて済みましたが、しかし時間と苦労を要しました。偵察を終えた部隊は翌日の午後になってようやくプラーに戻って来ました。私が出会った何人かの将校は、オイゲンの調子はより良くなっていると言いました。兄はまた本当により平静になって、痛みがない状態と思われましたが、しかしとても疲れていました。それでも兄は一日の些細な出来事を私に話させ、注意深く耳を傾け、私が彼の状態を慮って黙っていると、もっと知ろうとしました。しかし彼は突然私を遮って、言いました。「カディスからタラゴナへの海の旅での晩のことをまだ覚えているかい。我々が我々のドイツ人の同僚と一緒に故郷を偲んで、『誰がまた故郷を目にすることだろう』という問いが生じたときのことだ。故郷を二度と目にしないであろう者が誰か今の私には分かる」と。私は彼の上に身をかがめて、そのような悲しいことを考えて興奮しないように頼みました。しかし彼は私の言うことを聞かず、それから続けました。「今日のうちにも多くのことが起こるだろう。私には黒い未来が見える。戦いとなったら、用心することだ。我らの馬は疲れていて、倒れよう。どんな時でも無分別に攻め込んでいけないということを忘れてはいかんぞ。さもないと犬死にだ」と。これが彼の最後の言葉でした。私は一スプーンの薬を与えるために、彼を起こしたばかりでした。彼を再び枕に寝かそうと思ったとき、彼はとても青ざめているように思えました。私は彼の手を握りました。手は冷たくなっていました。彼は私の手を痙攣して握りしめ、空中を掴み、亡くなりました。

これは十六日の午後でした。サースフィールド将軍は、彼の逝去を耳にすると、私に悔やみを伝えて、こう見解を添えました。故人をできるだけ早く、プラーの高い位置にあるクロスター教会へ運び上げることがいいであろう。新たな戦闘がいつ始まってもおかしくなく、その結末は見通し難いから、と。

私はこのことを伝えさせました。古い床の「四枚の板と二枚の小板」から速やかに一つの棺が造られ、オイゲンは彼の連隊の制服を着て、死者の長持[棺]に収められました。私の軽騎兵の何人かが彼をクロスター教会へ運び上げ、彼を祭壇のすぐ間近に置きました。

過ぎた日々の緊張と興奮とで、全く疲れて、私は夜になると一束の麦藁の上に寝ました。私は心底悲しかった。私の子供時代と最初の青春の日々のイメージが湧いて来ました。今や私は一人っきりです。全く一人っきりです。私がとても愛していた兄は亡くなりました。

私が眠り込もうとしていた矢先、私は一人の伝令の将校によって起こされました。将軍からの伝令で一枚の紙片を取りに寄越された者です。サースフィールド将軍がプラー近郊での会戦のほとんど直前にオイゲンに与えていた紙片のことでした。それは重要なもので、持ち帰らなければならないとのことでした。

私は事の次第を思い出しました。兄がその紙片を騎兵のジャケットに収めるのを目撃していました。それで将校に上のクロスター教会まで同伴して欲しい、死者は戦闘の始めに着用していた制服と同じものを着用しているのだから、と。しかし彼は、仕事を口実に断りました。私の従者のフランチェスコも、その姿を探したとき、消えていました。そこで私は一人で行くしかなくなりました。

私はただ一つのガラスしかない小さなランタンを持って、かなり広大なクロスター[修

道院]の建物へ向かって行きました。従者の会士が開けてくれましたが、しかし教会のドアを開けて欲しいと頼むと、びっくりして言いました。「今夜中入ることは出来ません」。彼を説得することは難しいものでした。「恐ろしいことです」と彼は言い続けました。最後に彼は少なくとも教会の鍵を渡してくれて、こう指摘しました。二回錠の中で回したら、全力でドアに体当たりする必要があります、歪んでいて、開けるのが難しいから、と。

教会に達するまでに更に二回、長いクロイスター[回廊]を通らなければならなかったのです。まさにここで前日激しい歩兵隊の戦いが（我々の側ではスイス連隊が遂行したのですが）行われたのであり、まだこの戦いの痕跡が至る所に見られました。死体は確かに片付けられていましたが、血の溜まりが残っていました。立像は、壁から落とされて、砕けて床にありました。空気そのものが澱んでいて、かび臭いものでした。こうした破壊の諸像の中、私は教会へ進んで行き、鍵を差し入れ、二回回して、ドアを押し開けました。ドアはゆっくりとぎっと音立てて開きました。私は今や邪魔なものに思えて来た外套を脱いで、片手に剣を、もう片方の手にランタンを握って、高いドームになっている中央内陣を進んで行きました。不気味な静寂が見られました。私の靴音の反響で私はびっくりしました。

そのようにして私は祭壇まで来ました。そこに棺がありました。差し当たりただ一枚の板で覆われていました。私はそれを開けました。私の兄の無表情の目が私を見つめていました。私は他に置く場所がなかったので、彼の足許にランタンを置き、ゆっくりと制服をボタン一つずつ開けて行きました。それはしっかりとほとんど窮屈に胸を閉ざしていました。私は顔を逸らして行ったのですが、どんなに目を合わすことを避けようとしても、死者の顔が私に迫って来ました。ようやく私は紙片を見つけて、それを自分の許に収めました。それから最も面倒なことになりました。私はまたボタンを閉めなければならなかったのです。掠奪された者のように兄をはだけた制服のままにしておくことは出来なかったからです。それが済むと私は帰路に就きました。

翌日の午後、　ー　敵は攻撃して来ず、　ー　私の兄はすべての軍事的栄誉と共にヴィンプフェンのスイス連隊によってプラーの同クロスター教会で埋葬されました。そこの祭壇前に二十四時間前から安置されていたのでした。埋葬箇所では彼のサーベルと手袋、拍車が掛けられました。数ヵ月後にようやく、死者に対し礼を尽くそうと思ったオドネル将軍の命令で、それらはタラゴナの中央大聖堂に移されました。そこにまだそれらはあります。

朗読者は、ここまで読み上げると、原稿を丸めて、窓の下枠台の一つに置いた。聴衆は、視線を落として、黙っていた。最初に立ち上がったのはブニンスキーであった。

「私自身このサークルでは客人です。同人の方々より先に発言したら、干渉のお叱りを受けるかもしれません。しかし私の立場というものは、許し頂けると思いますが、例外的なものです。私はフォン・ヒルシュフェルト殿、貴方の二年前に同じ戦場で、貴方とは敵の側になりますが、戦ったのです。貴方が朗読された地のそれぞれを私は存じています。ほとんど消えかけていたイメージが再び蘇って来ました。敵も味方もありません。同じ所で、同じ危険に出会ったのです。貴方に対し、これから私にとって大事な戦友として挨拶することをお許し頂きたい」。

この言葉の間にユルガスは、間近にあったラインワインの瓶のコルクを抜いて、この状況にふさわしい素早さで、大きな銀のカスタリア杯になみなみと注いだ。「皆さん、我々の規約の第七条にあるように、私は躊躇わずに申し上げますが、その英知が予想しているかの例外的事態の一つが生じました。それで私は我らの尊敬する客人フォン・ヒルシュフェルト騎兵隊長の御健勝を祈念して飲みます。隊長万歳。多くの栄誉が彼の頭上に降り注がれて来ました、傷同様に多くの栄誉です。しかし今日まで注がれて来なかったものがあります。彼はまだカスタリアの銀杯を飲んでいなかったのです。この時も来ました。私は彼に乾杯します。彼も乾杯を返して頂きたい」。

そして繰り返し万歳が叫ばれ、杯が回った。

このような忠誠の儀の後では、レーヴィーンにはただ結びの言葉を述べる仕事しか残されていなかった。「時が進み」と彼は始めた、「それ以上にこの時がもたらした感情は高揚しました。それで散会、停会となります。同意を求めます」(「賛成、賛成」)「私どもの次の会合は異議がなければ」(「異議なし、異議なし」)「すべてのそれまで入手される抒情詩の留め置きの下、我々の尊敬する客人、フォン・メールハイム氏の日記によって、今日は残念ながらもはや朗読には至らなかったのですが、開会されることになります。これにて閉会致します」。

かくて人々は大小のグループに別れて出発した。大方は左手に進んで行った。ただユルガスとブムケ、ハンゼン・グレルは、ケーニヒ通りの角に達したとき、右手に行き、アレクサンダー広場に向かった。ムントの地下酒場の低い所で、勿論カスタリア会合を肴に、喋りながら、批判しながら、晩を締め括るためであった。

第八章
軽い曇

翌日の朝は明るく、快晴で、枢密顧問官の仕事部屋にも通常冬の日々見られるよりも明るい光が射し込んでいた。光線は、グレーハウンドが眠りと震えの中間状態のとき横たわっている暖炉の隅の籠にも射していた。振り子時計が十時を打った。枢密顧問官は彼特有の時間通りの慣習で部屋に入って来て、書き物机の前で腰掛けた。机上には今日もまた新聞や、個別の彼宛に個人的に送られた書き物が黒い大理石の文鎮の下にあった。その横には象牙のペーパーナイフが彫刻された蛇の柄と共にあった。

澄んだ日であったが、しかし「軽い曇」が見られた。少なくとも枢密顧問官の心の中にはあって、顧問官は事実、物事の通常の順番を逆にして、今日は金魚の下への朝の訪問は引き延ばして、その代わり早速新聞を開けていた。彼は欄に目を向けたが、しかしその目は読んでいないことがすぐ分かるもので、ただ彼は充満してくる落ち着かない気分を自ら抑えようと努めていただけであった。

「お早う、父上」とまた以前述べた折の訪問の時のように、彼の背中で声がして、彼がまだ振り向かず、返事を返さないうちに、カティンカが彼の側にいた。彼女もとらわれているように見えて、彼の目を鋭く見ながら言った。「父上、お呼びになったのでしょう」。

「そうだ、カティンカ、お掛けなさい」。

「いやだわ。まずはもっと優しく見てよ。そんなに厳かではなくて、まるで政治事件が

始まるようだわ」。

枢密顧問官は象牙のナイフの柔軟な尖端で書き物机を叩いて、それから自分の椅子を少し回転させて、窓の壁龕[ニッチ]の方を向いた。そこにカティンカは、光を背にして、腰掛けていた。彼女はその結果とても魅力的な薄暗がりの中にいることになった。美しい娘を誇りに思って喜び、父親は一瞬この折の心配事を忘れた。カティンカ自身、自分がなしている印象をしっかり自覚していた。彼女は髪をいつものように午前の時、黄金の網の中に収めていたが、しかしこの網は半ば開いていて、栗毛の褐色の巻き毛の一部が広くてドミノの化粧衣風の朝のドレスの襟にかかっていた。彼女の足は、軽く組まれていたが、小さなサフィアン[モロッコ]革の靴に収まっていて、父親が象牙のナイフでの戯れから引き出した利点を素早く考えて、彼女の側では小さな金魚の横にある網の杓子を手に取って、それで戯れ始めた。

「カティンカ、二，三の質問をしていいかい、数週間前から気になっている質問だ。アメリー伯母さんの手紙でこの質問が新たに浮かんで来たのだ。ここ数日の動揺のせいで出来ないでいたが、おまえが帰って来たすぐ後に話そうと思っていたことなのだ」。

「あの善良な伯母さんは」とカティンカは言った、「私本人よりも私の幸せのことを考えていらっしゃる。そのことでは自分よりももっと伯母さんに感謝しなくちゃいけないと思っています」。

「そうできたらいいな。伯母さんが抱いている願いは、私の願いでもある。その実現は私には近いと見えていた。しかしおまえ自身がすべてをまた疑わしいものにしてしまった。正直に言うと、私は悲しい。レーヴィーンをどう思っているのだ」。

「いいわ」。

「この『いいわ』は返事のすべてに見えるが、しかしただ半分の返事にすぎない」。

「それでは、遠慮なくすべての返事を申しましょう。レーヴィーンは好きです。でも彼を愛してはいません。彼の一切は空想です。彼は行動するよりも、もっと夢想しています。これが理由の一つかもしれません。でも色々な理由が必要かしら。伯母さんはいつも賢いけれども、あるいはひょっとしたら賢いからか、この理由は愛情問題ではほとんど意味がないことを、全くもって忘れているのです。伯母さんは私の幸せを願っています。でもそれは伯母さんの流儀で願っています。私にとっては心の問題なのに、伯母さんにとっては単に家の問題です。私はグーゼ家の宮廷政治、家の政治のために婚約を結ぼうとか、それどころか同盟を結ぼうという気にはなれません。これはラインスベルクの思い出であり、アメリー伯母さんには大事かもしれないけど、私にはほとんど意味がありません。伯母さんはすべてを二軒の支配の家同士の縁組みのように考えています。これは追従された気になるけど、でもレーヴィーンは王子様ではないし、私は王女様ではありません」。

「おまえはただ一つのことを忘れている。レーヴィーンはおまえを愛している」。

カティンカは、左の足先をぶらぶら揺さぶりながら、網の杓子で水槽の縁を軽く叩いた。しかし枢密顧問官は続けた。

「レーヴィーンはおまえを愛している。そしてほどなくしておまえがこの愛に応えた、あるいは応えるように見えた。この数ヵ月初めて一切が変わった。おまえは今や『二軒の支配の家同士』の縁組みと嘲笑的に語っている。私は伯爵[ブニンスキー]を評価している。しかし彼を我々の家に連れて来たのは、不幸な時であったと案じておる。伯爵はおまえに

[愛を]打ち明けたのか」。

「いいえ」。

「おまえは彼がおまえを愛していると思うか」。

「はい」。

「それでおまえは」

彼女が入って来てからすぐ籠から離れて、愛撫と小粒の砂糖を受け取るために彼女の側に待機していたグレーハウンドがますます不機嫌になって来ていたのは、カティンカにとって都合が良かった。犬は、以前も今も砂糖の小粒が貰えずに、彼女と砂糖缶のある戸棚の間を行き来し始めて、会話の途中絶えず鈴を鳴らしたり吠えたりして割り込んで来た。枢密顧問官はこれを明らかに妨害と感じて、カティンカは、彼の表情を逐一追いながら、この機会を捉えて、間を入れた。それ故彼女は椅子から立ち上がって、缶を取って来て、砂糖の塊の一つを噛み割り、砕いて、その屑をグレーハウンドに投げ与えた。犬はすぐに落ち着いた。それから彼女はハンカチの端を水槽に入れて、指先を拭いて、言った。

「父上、ご質問に答えましょう。私は伯爵が好きです」。

枢密顧問官は微笑した。「それでは伯爵は不満であろう。カティンカ、おまえが彼はおまえを愛していると思うならば、この愛に応えられるか、答えを出さなければならないだろう」。

「答えは出せます」。

「そして実行するつもりか」。

彼女は黙っていた。時計の振子の音が聞こえた。とうとう枢密顧問官は言った。

「十分に答えて貰った、カティンカ、黙っていることでもな。私は一つだけは確認した。私が大事と思うことをな。つまり単純におまえの心の動きに従う代わりに、おまえは私の願いに注意しているとな」。

カティンカは答えようとした。しかし枢密顧問官は繰り返した。「私の願いにだ」、そして続けた。

「しかしこの願いは不屈のものであり、変更できないものなのだ。私はこの願いをおまえの願いの下に置くことは出来ない。それは禁止だ。聞きなさい。伯母さんはレーヴィーンとの縁談を願っている。私もそれを願っている。しかし私はそれを要求しない。私が要求するのはただ、ブニンスキーとの結婚をしないということだ。それは許されない。伯爵には個人的に好感を抱いているけれどもな。ラダリンスキー家はポーランドから離れた。この家は二度と戻れない。私は橋を壊したのだ。済んだこと、それのみが正しいことか、もはや問うことはしない。済んだこと、それで十分だ」。

「父上、私が」と今やカティンカが発した、「『王子様と王女様』とか二軒の支配の家の縁組みについて話したのは一つの冗談でした。お気に召さなかったのですね。残念です。でも本来私は正しかったのではありませんか。伯爵は、父上の仰有る通り、個人的には父上の好感を得ています。豊かで、声望があって、正直です。私どもの心と性格は互いに合っています。でも一切空しい。こんな言い方をして済みませんが、父上の外交に合わないからです。父親達の中で最も優しい父親が、いつもはどんな些細な願いをも叶えて下さる気なのに、一番大きな願いを許してくださらない。自分の政治的計画の邪魔になるから、体面を汚すから、と」。

「私は主張を変えない、私の意味での主張だ。体面を汚す恐れというのは、必ずしも卑小なものでも、下位のものでもない。それも正当なもので、生きるか死ぬかの問題だ。私にとってはそうなのだ。自惚れとか気まぐれな思いつきではない。こうしたことすべては、おまえが思っている以上に、私の名誉と関わっている。私に対する不信は抱かれなかったわけではない。私が改宗してからもな。おまえがポーランドに戻る瞬間から、私の同意を得て、プロイセン敵対の志操が隠れもない男の妻となった瞬間から、多くのことを窺い知る今の地位に就いているのは、単に機会を窺うためであったという疑念を抱かれかねないのだ。おまえ自身知っていることを繰り返すが、社交界は宮廷が私に用意してくれた信頼をただ渋々と認めて来たのだ。この信頼を失うと、ほんのただ揺り動かされるだけで、私の人生の難破から救って私を今なお支えてくれている梁は手許から消えてしまうのだ。笑いたい者は笑うがいい。私は国王と王子達の好意を必要としている。この好意が失われると、私は二度目の故郷喪失者となる。これには私の心が竦む。政治的とか体面の汚れを恐れていると言うがいい。それは何であれ、私の人生の問題なのであって、自惚れなんかの問題ではない」。

カティンカは父親の許に歩み寄って、彼の額に接吻し、腕を彼の肩に置いた。それから言った。「繰り返しましょう。まだ私と伯爵の間に[約束は]一言も交わされていません。思うにわざと打ち明けるのを避けているのです。父上の前でも苦情を申しますと、父上同様に遺憾ながら、彼も政治絡みなのです。私が知る限り伯爵はまた皇帝[ナポレオン]のポーランド軍へ加わる考えを持っています。まさにこの現在の状況がこのような歩みを促しているように見えます。でもどういうことになろうとも、一つだけ私は約束します。父上を私個人として自分の願いや依頼で不安な思いにさせることはしない、と。私は沈黙することにします。私のせいで、上々の方への父上の立場を危険にさらすようなこと、この国への父上の帰属に新たな疑念を生じさせかねないようなこと、これは一切起こしません」。

カティンカの言葉は、彼の願いに一見従っているように見えるけれども、格別な用心で選ばれていることを、枢密顧問官は聞き逃さなかった。しかし彼は同時に、より明確に同意を求めることは水泡に帰すると感じていた。それで彼は半分の成果に満足して、話し合いを打ち切った。「伯母さんに」と彼は結論付けた、「少しばかり書いて貰えたら嬉しい。伯母さんの計画を邪魔しないことだ。それはおまえのためでもある。日々変わって行く。我々もそれに合わせて変わって行く。しかし最も変わりやすいのは女性の心だ。おまえにとって今日何の意味もないものが、明日には何ほどかのものになるかもしれない。縁を切るな。名前を挙げる必要はないだろう。表現には言い回しがある。私の思い違いでなければ、おまえが十分に心得ている言い回しのことだ」。

「書くことにしましょう。父上、読んで貰いましょうか」。

「おまえの約束とおまえの賢さを信用している。取りかかりなさい。私は十二時馬車を予約した。老ヴィーリヒはいつも時間にうるさい。マチネー[昼間興行]のときには特にそうだ。ところでツェルター[Zelter(1758-1832)]の新しい曲を聴くことになっている。ルンゲンハーゲン[Rungenhagen(1778-1851)]が伴奏するのだ」。

こう言って二人は別れた。

第九章

レーヴィーン宛のレナーテ

一週間が過ぎた。レーヴィーンとラダリンスキー家の知人や友人のサークル内で何か特筆すべきことは生じなかった。このサークルについて言えることは、町全体について言えた。この町でもヨルク将軍の降伏の知らせによって生じた興奮は、夙にまた収まっていて、新しい時代の始まりという定め難いが、しかし人々の気持ちを高揚させる考え方に移って行った。この新しい時代を導いて来るためには、更にいかに強力な戦いを必要とするか、予感していたのはわずかであった。大方は、ナポレオンの敗北の結果のようなものとして、勝利が自ずともたらされるであろうと確信して暮らしていた。国王はフランスとの自分の同盟を維持するために、この同盟を危機にさらしたヨルク将軍を軍事法廷に引き出すと考えておられるという多くの、再三反復された請け合いでさえも、この確信に何の変更ももたらすことが出来なかった。人々はこうしたことすべてに強制された芝居を見ていて、フィヒテ教授が聴衆の心に訴えた言葉と全く一体化して、単なる仮面と思い、この仮面はいつでも外せられると思っていた。民衆の感情は、しばしばそうであるが、支配者達の決心よりもはるかに先に進んでいた。こうした気持ちの中で日々が過ぎていた。

二巡目の一月の週の静寂は、カスタリア誌会合によってさえ破られなかった。ユルガスの許で行われることになっていたが、彼は確定していたその日の早朝に、友人達に前もって会合の中止の知らせをわざわざ伝えて、同時に翌日開かれる予定の「特別会合」への招待を受けて欲しいと頼んだ。この会合はより狭い仲間を当てにしていて、小昼の形式を取ることになっていた。

そこでその翌日となった。しかしまだ決められた時間ではなかった。レーヴィーンは、ソファーの構造が許す限り、ソファーで快適な姿勢を取って、ヘルダーの『民衆の声』[1778]をめくっていた。彼にとって特に大事な本であった。それはカティンカからの贈り物で、情熱的なものや喜劇的なものにはセンスを有するが、素朴なものにはセンスを有しない贈り主の女性の側から、嘲笑の色合いと共に渡されていたという事情すら何もその価値を損なうものではなかった。彼はまさに次の箇所を読んでいた。

そんなわけで、一人の娘が二人の少年を愛すると、
上手く行くことはめったにない。
二人は身に染みて感じた、
間違った愛はどうなるか、と。

そのときフーレン夫人が、郵便で届いた一通の手紙を持って入って来た。それはレナーテの筆跡であったが、しかしキュストリーンの消印ではなく、ゼーローの消印であって、そのことからその手紙は速やかに運送するために至急便で湿地[ブルフ]を通って送られて来たに相違ないことが分かった。このことが目に付いたが、同時に手紙の長さも目に付いて、彼は一種不安な思いを抱いて封を開けることになった。すべての手紙を書くレディー達の二つの極端な党派の中で、レナーテは通常極端に言葉数の少ない書き手の党派に属していたからである。この例外は何を意味するのか。

レーヴィーンは読んだ。

「ホーエン・フィーツ、一八一三年一月十二日、火曜日。

親愛なるレーヴィーン。あなたに手紙を書こうと思っていた父上は、丁度呼び出されたところです。ドロッセルシュタイン伯爵がいらして、仕事上のことを一緒に片付けなければならないのです。それであなたに最近の出来事をお知らせする役目が私に回って来ました。大変な時を私どもは経験しました。昨日大火災があったのです。古いホール家屋が焼け落ちました。

詳しいことを知りたいでしょう。お話し致します。

十二時になったかならないうちに、騒音で私は目覚めました。私は起きて、窓が夕焼けが射し込んだように赤く燃えているのを見ました。私はベッドから飛びだして、窓辺に行きました。中庭はまだ空で、でもホール家屋の中央から炎が上がっていて、入口の下に、私に背を向けて、老パハリーが立っていて、角笛で村の路地に吹き鳴らしていました。その音色はまだ私の耳に残っています。

私は失神に襲われて、次の数分のことは何も覚えていません。私がまた気を取り直したとき、私はベッドの上に身を起こしていました。ショルレンマー叔母とマリーネが私の側にいて、二人とも不安と興奮とで震えていました。二人は絶えず私の背中に新しい枕を持って来ました。マリーネは香煙を持って来て、ショルレンマー叔母はこう唇で称えながら、祈っていました。『万軍の主、私どもの困窮を助け給え』。

私は、どうしてかは分からないけど、でも不安はすべて突然消えてしまいました。失神が消えて、それで恐怖も消え去ったかのようでした。私は起き上がることを望んで、素早く服を着て、丁度手許には他になかったから、カティンカがここに残して行ったポーランドの帽子を被りました。そうして私は下に降りて行きました。

火事はその間に猛然と進んでいて、相変わらず消火する者は誰もいなかったのです。しかし私が中庭に来ると、すでに村の路地からがらがらという音を耳にして、次の瞬間には私どものホーエン・フィーツの消防ポンプが門から入って来ました。クリストと若いシャルヴェンカが轅に繋がっていて、ハンネ・ボーグンが不具の腕で水タンクを押して、移動を手伝っていました。車道のすぐ近く、でもそれを越えて、農舎の中庭まで彼らは押して来ました。父上はすぐに何人かを釣瓶井戸と小さな中庭ポンプの所に配置していて、今や二列で桶が渡されました。皆が一所懸命で、五分経たないうちに、炎に最初の水流が放たれました。村長クニーハーゼがすべてを指揮しました。奇妙なことに、この戦慄の最中、私の心は歓喜の余りかのように一層高鳴るのでした。でも何という眺めだったことでしょう。私はこの瞬間のことを忘れないことでしょう。夜なのに昼のように明るく、皆の顔が輝きを帯びて、指令の言葉や、その間に今や、塔の方から長い、一定の休止の早鐘が響いて来ました。八十歳になるというのに、老クーバルケが自ら登って行って、全湿地[ブルフ]に呼びかけたのです。『火事だ、火事だ』と。すると程なくして、近隣の村々から、それに呼応する鐘の返事が聞こえて来ました。

『あれはホーエン・ツィエーザルの鐘だ』とイエーツェが言いました。彼は寒さで震えながら私の横に立っていました。その後すぐにマンシュノーの鐘も鳴りました。私は自分でその低い音色で分かりました。ますます急いで桶が渡されました。誰もが今すぐにでも近隣からの救援が来るに違いないと分かっていたからです。果たしてその助けは来ました。ホーエン・ツィエーザルの救援がまたしても最初でした。二頭の伯爵[ドロッセルシュタ

イン]の馬の二輪馬車で森耕地を下って来ました。すでにミークライの水車小屋の角を曲がるとき、その声を耳にしました。雷のようでした。大きな歓声で、彼らは歓迎されました。足痛風が治ったばかりのキュメリッツが指揮を引き受けました。

農舎の中庭には、その間に村の大半の人々が集まっていましたが、前方にある消防ポンプの邪魔とならないようにしていました。最前列にはザイデントプフ牧師とマリーが立っていました。牧師は古い黒の布地の帽子を被って、大きな目立つ庇帽で、あたかも火の火照りを避けているかのように見えました。マリーは牧師の腕にすがって、私同様、刺激的光景に全く心を奪われていました。また彼女の格別の美しさに感銘を受けました。彼女の顔はいつもより、細く、長く見えました。そして赤と黒のチェックのスコットランドの布地から、それを僧帽の流儀で被っていましたが、彼女の大きな、黒っぽい目そのものが炎のように輝いていました。

桶は次々と渡され、水流が炎に放たれました。しかし間もなく、ホール家屋だけでも部分的に救うことは不可能だと確信せざるを得なくなりました。それで父上は、放水を単に住居の屋根と切妻にのみ向ける指示を出して、少なくとも火事の延焼を食い止めようとしました。しかしこれも上手く行きそうになかったのです。葡萄の格子垣はすでに幾つかの箇所で燃え始めました。そして家を伝って下りている排水管が、上部で亜鉛が溶けて、樋から離れて、中庭へ落ちて来ました。

この瞬間、ホッペンマリーケンが入口に現れて、立ち止まったまま、炎を見ていました。彼女は家から来たのではなく、これから帰宅の途中だったのです。それまでどこにいたのか誰も分かりません。ハンネ・ボーグンはこの老婆を見つけると、左のジャケットの袖で勝ったかのように振って、叫びました。『ホッペンマリーケンだ』。そしてすぐ続けました。『呪文を称えてくれるかも』。父上は彼女について沢山知っている人々が、彼女は呪文で鎮火させることができると噂していることも御存じだったことでしょう。でも自分が信じない彼女の魔術、あるいは自分の嫌いな魔術を、彼女に対し切願するように頼むことは嫌だったのです。彼の心中を察したと思われるザイデントプフ牧師が、彼に近寄って言いました。『神を心に抱く者に対しては、良いものであれ、悪いものであれ、すべて奉仕してくれるに違いない』。そこで父上はこの老婆に近寄って言いました。『マリーケン、おまえさんの術を見せておくれ』。

老婆はただこの一言を待っていたのでした。彼女は二台の消防ポンプの間を抜けて、素早く、古いホール家屋が私どもの家の部分と垂直に接している箇所に進んで行き、二，三回合図して、二，三の意味の分からない言葉を発した後、彼女の鉤状杖を鋭くその角に立てました。それから中庭を横切って、また入口の所まで戻って来て、消防ポンプの人々に向かって言いました。『ホーエン・ツィエーザルの方々はまた家に帰れますがね』。そして見回すことなく、村の通りを下って、森耕地の方へ歩いて行きました。彼女の大きな鉤状杖を彼女は自分の代わりに、火事場に残したままでした。

火事はすぐに収まりました。格子垣とバルコニーは崩れ落ちました。しかしすべてが自分自身を食べ尽くして、他に手を出す余力はもはや残っていないかのようでした。同時にそれまで吹いていた小さな風も止みました。そして雪が降り始めました。魅惑的な光景でした。暗赤色の炎の輝きに、雪片が舞っていたのです。

ホーエン・ツィエーザルの消防ポンプは本当に去って行き、中庭はまた空になりました。

ただ父上と老クニーハーゼだけがまだ残っていて、夜の間の指示を出していました。私は去って行った最初の人々と一緒で、そして私の部屋は直接火事場に接していたけれども、危険は片付いたとすっかり確信して、それですぐに眠り込みました。私の夢の中ではたった今体験したことが、かのストックホルムの古い宮殿での奇妙な火災の現象と混ざり合いました。私どもが最初のクリスマスの日、暖炉に座っていて、クリスマス・ツリーから拾い上げていたとき、あなたがマリーと私に語ってくれたお話しです。私は夢の中で私の窓ガラスが輝くのを目にしました。しかし私が起きて、輝きの方を見に行くと、私はもう一人っきりではなく、罪人達の長い列を目にしました。彼らははだけた首で、断頭台へ連れて行かれたのです。恐ろしい光景で、私が見たものすべてが赤くなっていました。でもこの瞬間ホッペンマリーケンが帝国広間のドアに入って来て、皆が叫びました。『彼女が鎮めてくれるかもしれない』。

すると彼女が杖を上げて、血はもはやなくなり、その光景は消え、彼女自身も消えました。

今朝私は朝食に間に合いました。父上とショルレンマー叔母はすでに私を待っていました。私はこの出会いを恐れていました。二年前に焼け落ちた納屋はまだ瓦礫のまま残っています。それに二度目の火事です。これをどう埋め合わせるものか全く術はないように思われます。でも案じていたものより全く別の気分を見いだしました。父上は饒舌で、悲しみよりもむしろ希望を証する優しい心根でした。父上は私の手を取って、私が慰めの言葉を探しているのを見ると、微笑して言いました。

『すると一人の王女が家にやって来て、

血痕は火事で消えてしまう、　ー

私はこの古いホーエン・フィーツの民謡と和解し始めた。王女はまだ現れていない。しかし血痕は消えた。火事が消してくれたのだ。そうだ、レナーテよ、謎に我々は取り巻かれている。迷信と呼ばれるもの、ひょっとしたら迷信ではないかもしれないものすべてを、我々の知識と信仰の二重の思い上がりの中から引き抜こうとすることは、ひょっとしたら愚かなことかもしれない。迷信の中にも、遠くから吹き寄せられて、啓示の芽があるかもしれない。＜血痕は火事で消えてしまう＞、こうしたすべての試練の中で、別なより良き時代が来るような気がする。我々にとって、皆にとってな』。私は答えようとしました。でもイエーツェが入って来て、ドロッセルシュタイン伯爵が到着されたと伝えました。

そんなわけで、あなたは私が今まで書いた中で最も長い手紙を貰うわけです。カティンカによろしく、フーレン夫人にもよろしく。

衷心より、あなたのレナーテ・フォン・Ｖ.」。

レーヴィーンは手紙を手から置いた。彼は動揺していた。しかし父親と妹に見られた同じ感情が彼の中でも支配的になった。つまり彼らの人生における何か不気味なものが奪われたという喜びの感情である。

彼は素早く写字台に腰かけると、この感情を表現した差し当たり短い返事を書いた。結末はこうであった。「祭壇はもはやない。老マティアスは、更に『徘徊しよう』と思うなら、別の祈りの場を探さなければならないだろう」。しかし再び読み返して、自分の言葉に驚いた。「これでは」と彼は思わず語った、「彼をホール家屋から我らの家の中へ招き

入れるようにも聞こえる。こんなつもりではない。『騎士修道会管区長』殿は客人に招待したくない[モーツァルト、『ドン・ジョヴァンニ』、石像の第二幕参照]」。そして彼はこの箇所を太いペンで再び消した。

それから彼は速やかに着替えた。ユルガスを待たせないためで、ユルガスはこの一点にかけてうるさいのであった。

第十章
ユルガスの許での小昼

枢密顧問官フォン・ラダリンスキーが表現したように、ヴィーリヒ老閣下ばかりが時間にうるさかったのではなく、ユルガスもそうであった。このことは仲間全員が知っていた。それで十二時の一分前にはすべての招待者が、玄関や階段で出会った。ブムケでさえもそうで、彼は先のカスタリア誌会合の際、冗談めかしていたが、しかし真面目になされた叱責を忘れていなかった。

ユルガスの住まいは、ジャンダルメン広場の幾つかの浮彫渦巻模様の付いた角の家の、広場の方を向いた二階の半ばを占めていた。それは、紹介すべきものとしては、狭い入口と、三つの窓のある居間兼社交室、それに食堂から成り立っていた。すでに住まいの大きさと、更にはその飾りを見ると、マルク地方の、半給で勤務している軽騎兵将校のものとしては幾らかびっくりさせられるものである。父親の荘園からは三回最良の収穫があっても、この部屋の設備の三分の一にも足りなかったことであろう。しかし我らの騎兵隊長は、父の息子であるばかりでなく、叔母の甥でもあって、この叔母はフォン・ツィーテン老嬢で、ハイリゲングラーベン[聖墓]修道院の[選挙権を有す]修道女として、かなりの遺産を遺言で残してくれたのであった。この遺言は文字通り以下のものであった。「私の甥のダーゴベルト・フォン・ユルガス、つまり最愛の姉アーデルグンデ・フォン・ツィーテン、結婚後フォン・ユルガスの唯一の息子は、その母の血を引いて、殊にまた精神と肉体の鍛錬を通じて、真のツィーテン家の者であることを考慮して、上述の甥、ゲッキングの（かつてはツィーテンの）軽騎兵連隊の騎兵隊長に、神様の思し召されるように、ツィーテン家の家風を磨き、守ろうとする限り、私のすべての現金と私の兄、ハンス・ヨアヒム・フォン・ツィーテン陸軍中将[1699-1786]の肖像画を贈ります。そして神様に、私の愛しい甥が、ルターの宗教を守りますよう、誠実に王家に仕えますよう、祈ります」。

この遺言は偶然まさに一八〇六年十月十四日の日に、つまりイエナ近郊とアウエルシュテット近郊の二重の戦闘の日に、その年の冬身罷った老修道女によって記されていた。それ故ユルガスも毎年、十月十四日が来るたびに、彼らしい口ぶりでこう言う習慣であった。「奇妙な日だ、この日には晴着を着たものか、喪服を着たものか良く分からない。プロイセンは倒れたが、しかしダーゴベルト・フォン・ユルガスは昇ったのだ」。

ちなみに叔母は彼を正しく評価していた。彼は母方の血を引いて、時折晴れやかな登場への好みを有する他に、ツィーテン家の立派な家政も受け継いでいた。それで彼の財産は、すべての不幸な時代にもかかわらず、遺産を受けてから六年間の間に減少するよりもむしろ増大していた。

格別見事にすでに言及された彼の居間は整えられていて、その結果、今日初めてこれら

の部屋に入った面々は、支柱やその壁に注意を向けることになった。フォン・メールハイム氏は早速、大きな、ドレスデンの画廊の目玉となっているティントレット[Jacopo Robusti (1512-94)]の、縮小されたサイズの複製を見いだした。一方フォン・ヒルシュフェルトは一連の多色刷りを見つけて喜んでいたが、その原物は彼がロンドンでジョシュア・レノルズ[Joshua　Reynolds(1723-92)]の作品の展覧会の際見たものであった。こうした装飾品の充実は、それらの中では特に注目すべき彫刻品もあったが、いずれにせよあちこち動き回る雑談に何か落ち着きのないざわついた感じを与えて、情緒を醸し出す雰囲気ではなかったが、しかしユルガスにとっては、普通は情緒的育成を心掛けるものの、気分を悪くするものではなかった。こうした絶えずおあちこち飛ぶ話題の根底には、専ら、彼の芸術作品に対する、彼の虚栄心におもねる賛嘆の念、あるいは他にまだある見世物への好奇心が潜んでいることを彼は見逃さなかったからである。

これらの見世物の一つにとりわけ「大きな長靴」があった。これは六フィートの高さで、一・五インチの厚い靴底と九インチの長さの拍車とが付いていて、かつての「話題の品」そのものであったか、あるいはそのようなものとして刺激を与えていたものであった。つまり次のような話題があった。

九十年代の末、当時ユルガスはゲッキング軽騎兵のまだ青二才の中尉として、ジャンダルム連隊のヴォルフ・クヴァストと一緒にフリードリヒ通りをオラーニエンブルク門の方へぶらぶら歩いていた。ヴァイデンダム橋のすぐ直前、軍医養成所の向かい側で、彼らは巨大な拍車を目にした。それは鉄器商店のショーウインドウに掛かっていた。彼らは立ち止まり、笑い、お喋りして、拘留を受けた最初の者がこの拍車を購入することに決めた。最初となったのはユルガスであった。しかし拍車が購入されるや、新しい取り決めが生じた。「次の拘留者は、それに合う長靴を作らせる」と。この次の拘留者はクヴァストで、一週間もしないうちに、その間に製造された巨大な靴が虚礼の限りを尽くしての行列で、まずは兵舎に、それからクヴァストの部屋に運ばれた。両連隊の年若い戦友達の中でこの行事に欠ける者はいなかった。巨大な像が据えられ、それに巨大な拍車が嵌められた。しかし一度目覚めた増長は静まることがなく、高揚を求めながら、巨大な長靴と巨大な拍車の栄光のためにそれにふさわしい大祝典を催すことが決められた。長靴は勿論ポンス用器となるのであった。即断即決。祝典はすべての参加者の完璧に満足の行くものとなった。しかし国防大臣の満足することにはならず、大臣はむしろこの狼藉に終止符を打つよう、そして大きな長靴を始末するか、そのまま渡すよう命じた。

この当該命令が発せられると、すべての若い中尉達は一致して、この長靴をどんなことがあっても救出することは名誉にかかわることだと決めて、今やこの長靴は実際、その直後に行われる兵舎検査の際部屋を次々に移動させられ、結局退却兵站地を経由して、まずはその都度父親や叔父のいるハーフェルラント荘園やそれからルピーン荘園、プリークニッツ荘園を転々とし、この父親や叔父が否応なく息子や甥の始めた遊びに巻き込まれてしまったのである。それで結局長靴はガンツァーに来て、丸十二年間忘れられていて、我らのユルガスが父の家に短い訪問をした折、かつての犯罪証拠をまた目にすることになって、早速それを独自の部屋飾りとして、丁度整備に取りかかっていた住まいで使用することに決めたのであった。ちなみに彼はこの件については、その件に値する過不足のない扱いをして、「大きな長靴」の謂われを話しながら、一面では手厳しい判決を下して、最年少士

官の悪戯を英雄行為とは見なさなかったけれども、それでも十分に大胆で、とらわれてはいず、自分の若い年月の増長を更に恥じてはいなかった。

従者が入って来て、食堂の両開きドアを開けながら、この黙った仕草で、朝食の準備が出来たことを知らせた。ユルガスは、先に行きながら、客人達に付いて来るよう頼んだ。丸い食卓では用意が整っていた。ヒルシュフェルトとメールハイムはホストの両側で席に着き、ハンゼン・グレルがホストに向かい合った。トゥーバル、レーヴィーン、ブムケは、この者達にカスタリアのメンバーの中からの招待は限られていたが、左右から入って行った。

ユルガスの朝食は有名であった。その品選びのせいばかりでなく、食事を伴にする際、いつも見られる気配りや思いがけないものによってほとんどもっと有名であった。今日はその名声に遅れを取るものではなかった。ヒルシュフェルトの食器の下には、フランスの旅の絵本から切り抜かれて、「タラゴナの大聖堂」があった。小さな絵で、その裏面には次の言葉が読み取られた。「一八一三年一月五日の思い出を感謝して」。一方ハンゼン・グレルはナプキンをめくると、可愛い銀製の拍車が目に付いたが、それはカルタ紙に固定されており、そこには格言の流儀でこう銘が記されていた。

彼は輝く銀色の拍車を帯び、
それに青い鋼の刃を持つ、
生まれた地はカルカル、
カルカルとは拍車の謂。

ブムケに対しても配慮されており、思いがけないものであった。もっとも勿論気配りというよりは、からかいの性格のものであった。それは大きな、彼の皿の横におかれた巻いた紙で、それをまとめてある赤い糸を解くと、幾重にも破損した、大雑把な腐刻でなされた銅版画と分かった。その下にはこう書かれていた。「フォン・ブムケ大尉のコペンハーゲン入場」。実際デンマークの首都への大尉の入場は信じ難いものであったが、それは多かれ少なかれそのようなものに見えた。確かに通りの建築物が忠実に再現されていたからで、コペンハーゲンを知っている者は誰でも、三本の竜の尾の伸びて行く、古い取引所の尖塔で、全くそれとはっきり分かるのであった。それでもその絵の本来の対象とは、幌のない、四頭の馬で引かれた、軍の護衛する馬車と見えるものは、何かとても違うもので、陽気なブムケの入場でもなければ、そもそも入場なんかではなく、多分に「ブラント伯爵［von Brandt （1738-72）］とストルーウンセ［Struensee（1737-72）］の最初の尋問への連行」を表現していた。ブムケは古い古物商店からその銅版画を昔から知っていて、その冗談を素早く理解して、少なくともそのような素振りを見せた。これは彼のなし得る最良のことであった。というのは、つまりここに挿入していいだろうが、彼には弱点があって、彼がそもそもこれまでなし得た唯一の旅、彼の「北方への旅」について語るという若干手に余る偏愛を有していて、この弱点の結果、　ー　ちなみに彼自身この弱点については強く自覚しているのであるが、　ー　一度ならずユルガスのからかいの犠牲となってしまうばかりでなく、また沈黙こそがこの巫山戯を避けるか、短縮する唯一の方法であるという体験を重ねてきたからである。

ポートワインとシェリー酒の盆が回って来たとき、ブムケは紙片を今一度開きながら、確かな話題の提供という感じを抱かせるかの平静な調子で始めた。「哀れなストルーウンセだ。私は彼の首が落とされたヴェステルンガーデの手前で、外のその場を見た。何であったのか。嫉妬か、怨恨か、国民的偏見か。類いない冤罪の死刑だ。彼はお天道様のように無実だったのだ」。

「しかし彼の贔屓関係は明らかにされたように見えるな」とユルガスは重々しく述べた。ユルガスにとっては歩兵隊長を彼の好きなデンマークの水路に導くことだけがただ肝要だったのである。

「贔屓関係だと」とブムケは釣針が見えたけれども好餌には抗いがたく、答えた、「贔屓関係だなんて。ユルガスよ、愚かだと中傷されようが、貴方に請け合うよ。私はコペンハーゲンでの私の滞在中、受動的であれ、能動的であれ、このドラマと関連した人々と付き合いになったのだ。正真正銘一つの芝居だったのだ。最初から最後まで血まみれの茶番だ。列福化することは今流行らないが。しかしまだ幾らか神聖視できるならば、この王妃カロリーネ・マティルデ[Karoline Mathilde（1751-75）]は列聖化されなければならないことだろう」。

「不躾でなければ、貴方の情報の由来の名前を尋ねてよろしいかな」。

「王妃の侍医からだ」とブムケは言った。

「それでは、その方は詳しいに違いない」とユルガスは高慢に答えた、「しかしその権威をもってしても、自ら罪を認めた者達の陳述を世の中から消すわけに行くまい。差し当たり、我らの友ハンゼン・グレルに聞いてみよう。彼はその伯爵家で経過についてあれこれ聞いたに違いないから」。

「いいえ」とハンゼン・グレルは答えた、「伯爵家では、私の知る限り、その件については箝口令が敷かれていました。それに私は本で調べることも怠ってきました。私はお恥ずかしいことに、デンマークの歴史に関しては、個別の、はるかに離れた世紀のことは別にして、その歴史にふさわしい尺度の注目を傾けて来なかったのです」。

「しかし我々はまさに」とトゥーバルは丁寧に述べた、「クリスマス・イヴに貴方がプレゼントされたハーコン・ボルケンバルトのバラードを聞いて、それとは反対の印象を受けたものです」。

「この国の半分伝説的な前史についての私の知識から私の全デンマークの歴史知識についてもとより過分の御推測を頂いたものでありましょう。しかし残念ながら間違いです。私は歴史よりは詩文のためにサクソ・グラマティクス[1150-1220]や少し昔の僧侶の年代記を読みました。そんなわけで結局現代の王妃カロリーネ・マティルデのことは古代の王妃テューラ・デーネボーズ[Thyra Danebod（880 頃-935）]にかまけて忘れてしまいました」。

「テューラ・デーネボーズ」とユルガスは率直に熱を帯びて叫んだ、「実際、不思議な名前だ。カティンカ・フォン・ラダリンスカより若干響きは硬い。しかしそれでも。ブムケ、貴方はどう思う」。

ブムケは、思いがけずラダリンスキー家での舞踏会の夜を指摘されて、上機嫌で指で脅していた。しかしハンゼン・グレルは続けた。「私は我らの尊敬するホストの思い入れに全く同感です。私は自分の本心を問われたら、この名前や多くの類似の名前の魔力からまことに私の古代デンマーク史の研究への刺激を受けて来たと告白しなければならないでし

ょう。スィグアト・リングそれにヘリェ王、ラウナ・ロートブローク、ハーラル・ヒルデタントはその単なる響きで、私をうっとりさせました。これらの名前を聞くたびに、あたかも霧が晴れて、不思議な北方世界、断崖に囲まれた入り江や、その前に拡がっている青い海、百もの白く膨らんだ帆を水平線に見る思いがします」。

「我らの耳を惚れ惚れさせるのは、異国の響きです」とヒルシュフェルトは述べた。彼はスペイン以来同じように名前の印象で籠絡されてきたと思い出したのであろう。レーヴィーンとトゥーバルは彼に賛同した。

「確かに」とハンゼン・グレルは続けた、「この異国の響きは重要です。しかしこの響きを越えて、この古代デンマークの名前に独自の魔力を与えているのは、結局更にある別のことです。つまりその名前で、かの民衆の諺の英知に等しい才能が発揮されることになるのです。人間や現象、いや全世紀を唯一の称号で特徴付ける才能のことです。簡潔さの力、わずかなものの豊かさ、ここに秘密の鍵があります」。

ブムケは興奮して来て、それで、 ー これはいつもの彼には見られないことであるが、

ー シャトー・ディケム[ワイン]を拒絶する手の仕草をして自分の側を通り過ぎさせながら、心の友に向かうかのようにハンゼン・グレルに向かって叫びかけた。「貴方の言わんとしていることは分かる。諺の英知と貴方は正しく述べられた。エーリクの王は少なくとも最初の六世か七世まで、最も良くそれが現れている。エーリク・子供王、エーリク善良王、エーリク小羊王、エーリク耕地税王[プロペニング]、エーリク目配せ王[グリンピング]。それぞれに一つの像、一つのイメージが思い浮かぶ。特にプロペニングとグリンピングはそうだ。グリンピングは、これは『瞬き』とか『目配せ』といった意味だ。実際、笑いたくなって、私はいつも彼が右の瞼を絶えず閉じたり開けたりして合図する様が思い浮かぶものだ」。

ユルガスはのけぞって、咳の発作にかられながら、全く愉快になって収まりそうになかったが、言った。「それは私が全生涯で出会った最も立派な異国崇拝だ。目配せ王だと、それはおめでとう」。

「もっと彼のことを知ったら、ユルガスよ、貴方はこの重要な人物についてもっと敬意を払うことだろう。彼は立派な国王だった、そしてヴィボルで五十六回刺されて殺されたのだ」。

「当然だろうな。目配せの報いだ。二コース分のシャンパンに手を出すことにしよう。エーリク・目配せ王万歳」。

「万歳、万歳」、そして老デンマークの国王の栄誉のためにグラスが打ち合わせられた。しかしハンゼン・グレルはまだ増長が完全に収まらないうちに、言った。「聖職候補生や学校教師の衒学をお許し頂ければ、まだこのテーマを続けましょう。しかし手短にとお約束します」。

「長かろうと、短かろうと、グレルよ、貴方はいつでも歓迎だ」。

「分かりました。お話しします。我らの尊敬する大尉の目配せ王への偏愛、それにこう表現して良ければ、大尉が国王を紹介された時の対象の具体性というもののお蔭で、一気に陽気な黄金の門が開きました。しかし私は今一度真面目な話しをします。私どもの近世の歴史では、皇帝や国王について語るときは、今や数字が流行です。一世とか二世、三世、それに十四世や十五世。数字が支配して、それと共に、この上ない素っ気ないもの、詩的

でないもの、無性格なものが生じています。これに対して私の古代スカンジナビア国王の名前は、響きにしても内容にしても、強調するとこの内容にしても、詩的大地の上にあり、これが私にとっては得難いものとなっています。エピグラム[警句]よりも、エピグラム的です。そして同時にこうした名前の多くは詩のようなもので、それぞれの場合に応じて、感動的もしくは感銘的なものです。御自分で判断してください。私はただ二つの名前を挙げましょう。オーラフ・フンガー[空腹王]とヴァルデマル・アダデーイ[他日王]です。人物とか時代をただ一つの言葉でこれ以上鮮明に克明に描くことができましょうか。二度と忘れられるものではありません。オーラフは立派な国王でした。しかし国は不作と疫病で長患いしました。国王の祈りも、自らを民のために犠牲にするという国王の明白な意志も、この不吉を消すことはできず、恵みに変えることなどできなかったのです。それでこの国王は、デンマーク史を繙けば、呪いの時代、困窮と死の時代を意味します。そしてその幽霊的イメージは、無邪気に恐ろしい署名オーラフ・フンガー[空腹王]を有するのです」。

「我らの朝食に立派な四旬節[断食節]の説教だな。空腹王はもういい、グレル。もう一つの名前はどうなのだ」。

「まさにその反対です」。

「有り難や」。

「彼は美しくて、戦いに勝ち、女達を愛しました」。

「それは良い奴だ」。

「しかしそれ以上なのです。彼は陽気で、善意でした。若い頃は自らの情熱や他人の助言で激しい行為に導かれていました。しかし大人となると、若い頃の性急さを後悔し、もはや今からは苛酷なこと厳格なことは何もしないと誓ったのです。彼の廷臣達がせっついて、素早い宣告を、例えば死刑といったものまで要求しても、頭と手を軽く振って、ただこう言ったのです。『アダデーイ』、すなわち『別の日[またの日]』です。豊かな恵みの宝角がこの一つの言葉から溢れました。アダデーイはデンマークでは今この時まで良い響きとなっています」。

「いいぞ、グレル。アダデーイ[他日王]か。貴方の言う通り、響きと内容が合っている。互いに補っている。目に浮かぶようだな、ブムケの目配せ王のように明確だ。しかし我がアダデーイは目配せしない。不思議な青い目をしていて、彼の後には無数の婚礼の行列が続く。旗を振る人がその棒を高く空の中に投げ入れる。トゥーバルよ、雉の皿を今一度回して欲しい。これらはアダデーイ[他日王]のお蔭であり、オーラフ・フンガー[空腹王]にぴったりだ」。

さて会話でデンマークの王のことは終わり、間もなくスカンジナビアそのものも終わり、ただブムケのみがなお従来のやり方で、コペンハーゲンからオールボーへ上陸し、それからユトランドを経由して、大きなリムフィヨルド海峡へ移って行った。これは彼の好みの旅であった。彼は十中八，九、仲間では自分だけがその旅をしていて、それで戦わずして主導権を握れると確信していたからである。いかしこの利点は今日は失われた。そして彼が北方ユトランド地方の風景を「嘆きの調子」と「憂愁のヴェール」のかなり感傷的な表現で話し始めるや、すでに厳しくグレルの反論が踵を接して来て、グレルは、リムフィヨルド海峡に浮かぶカモメの何十万羽もの白い白花睡蓮のような群れは言うまでもなく、エメラルドグリーンよりも緑の水とか、瑠璃色よりも青い空というものは見たことがないと

主張したのであった。

「受けた印象のこのような対立ほどよく見られるものはありません」とメールハイムは言葉を発した、「このような矛盾に出会うには、二人の人物すら必要ありません。我々自身の中にこの矛盾は見られます。我々が風景の情緒と呼んでいるものは、大抵我々自身の情緒です。喜びと悲しみで別々に染められます。我々がスモレンスクの街道を進み、昔のロシアの首都の近くに来たとき、我々は虹の下を行軍するかのようで、我々が目を向ける至る所に、鏡を通すかのように、モスクワの黄金のドームが立ち上りました。我々の憧れが見ていたのです。それらが本当に地平線の霧の大気の中に浮かぶ随分以前のことです。これは九月の半ばでした。四週間後にまた我々はこの同じ街道を進みました。退却が始まったのです。まだ寒くはなく、十月の太陽は、九月の太陽の輝きに劣った明るさには見えなかったものです。しかし周りは至る所、荒涼として孤独でした。河川は、我々とお喋りする代わりに、冥界の河川のように這って進むように見えました。風景は同じだったが、我々が変わっていたのです」。

誰もが賛同した。ユルガスでさえ、彼はただノイシュタットとガンツァーの間の特徴を取りだして、これについていつも同じ印象を受けて来たと請け合ったけれども、賛同した。どの特徴についてか黙っていた。用心のせいか、あるいは今まさに更に顕著な要求への絶好の機会を捉えて、見逃すまいと思っていたかであった。

「フォン・メールハイム殿は」と彼は始めた。グラスをナイフの背で叩いていた、「モジャイスクの平原、あるいはその地に近い地域について、詳しい描写ではないけれども、議論の描写で、こう言って良ければ、風景の奇想風に、対立する情緒のスケッチ風に説明された。この前のカスタリア誌会合が終わったとき、一つの講演が残っていたことを思い出して頂きたい。これは、私の知る限りでは、モジャイスクの同じ平原を移動するもので、勿論この同じ平原でも、現実であれ、幻覚であれ、モスクワのドームとは別のイメージを我々の目の前に展開させるものです。それで我らの尊敬する客人に、敢えて質問をさせて頂きたい。先の会合で出来なかったことをやり直して、このより狭い仲間内で、その日記から、我々用にとお考えの断章を朗読して頂けないものであろうか、と」。

フォン・メールハイムはお辞儀をして、それから言った。「喜んで貴方の親切なご提案に従いましょう。もっともフォン・ヒルシュフェルト氏の言葉に全く共感していました、彼はこの前のカスタリア誌会合の後、その件についてこう告白されたのでした。この種のものを読み上げるのは居心地が良くない、と。この居心地の悪さは、すべての個人的英雄行為、　一　これはそのままの意味で理解して欲しいと思いますが、この行為の伝達を断念しても避けられないものです。人間はまさに全体の一部です。この全体を祝い上げることによって、良きにしろ、悪しきにしろ、自らをも祝い上げます。自分が居合わせた偉大な出来事を描写すると、このことは避けられません。どんなに調子を抑えた描写でも避けられません。それでもそのことを敢えて行う者は誰でも、聞き手の格別な寛大さを当てにすることになります。貴方らの許ではこの寛大さは確実なものと感じています。ちなみにこのサークルでは前口上は禁止ですが、更に前もって述べさせて頂ければ、私は単に体験したことのみを述べるのであって、偉大な経過を考えれば、何ら完全なものでありません。個人的体験を超えた個別のこと、更には土地や人物の名前といったものは、後にスモレンスクの野戦病院で一緒となった捕虜のロシア人将校の教示や情報に基づいています。以上

です。それでは我らの尊敬するホストに、準備ができ次第、取りかかると申し上げます」。
「コーヒーとすることにしよう」とユルガスは食事を終わりとし、フォン・メールハイム氏に腕を差し出して、居間へ先に案内した。
ここで、その間に、すべての準備が行われ、時間はまだ早かったけれども、 ー 重い窓のカーテンが差し当たり閉められ、 ー 小さな、クリスタル・グラスで飾られた壁明かりが点火された。居間の飾りとして大きな暖炉の中に造られた光沢のあるイギリス製の煙出しの中では明るい炎が燃えていた。黄金の糸で編まれたトルコ布で覆われたソファーテーブルの周りには、適宜配置された高い背もたれ椅子と、クッション付き安楽椅子があった。コーヒーが用意され、ホストと客人達がテーブルの周りで席に着く間に、フォン・メールハイムは二重燭台を手許に引き寄せて、『ボロジノ』を読んだ。

第十一章
ボロジノ

...我々はもはやロシア人は抵抗しないだろうと思った。彼らは大きなスモレンスクの街道を引き返して行った。我らの前衛の前兵との遭遇戦を避けて、モスクワは大きな戦いをしないまま放棄する気に見えた。しかし別な風に決まっていた。ロシア側では最高司令官が代わった。クトゥーゾフ[Kutusow(1745-1813)]がバルクライ・ド・トーリ[Barclay de Tolly(1761-1818)]の代わりに最高司令官となった。そして我々がモスクワに入場する前に一つの会戦があった。これについては皇帝[ナポレオン]自身が夜が明けるときに言ったものである。「私は今日最も素晴らしい会戦に勝った、しかし最も恐ろしい会戦であった」と。
それは九月十日ボロジノ近郊であった。
すでに五日の日、前哨戦があった。我々がこの日の夕方、露営に入ったとき、前線では激しい戦闘が行われていた。そしてコンパンの師団は、これには第六十一常備連隊も所属しているのであるが、ロシアの角面堡を攻撃したと、我々は聞いた。その直後皇帝が現れて、この六十一常備連隊が欠けているのに気付いて、落ち着かずこう尋ねられたそうである。「第六十一連隊の第三大隊はどこにいるのか」。これに対しコンパンはこう答えたそうである。「閣下、角面堡に眠っています」。
六日には、ロシア人が戦闘を我々に仕掛けるのは確かとなった。その翌日我々は早朝すでに大砲の射程で対峙していた。
晴れた日であった。太陽は昇ったばかりで、赤い球のように地平線上の森の一帯に懸かっていて、荒涼たる高原を見下ろしていた。高原は半ば湿地で、半ば刈り田の畑で、かなり奥行きがあり、しかしただ半マイルほどの幅で眼前に拡がっていた。我々が陣取った高台は、この地帯を見通すのに便利であった。そして直に、この眼前に拡がる高原は平らな台地ではなく、幾つか起伏があることが分かった。特にこの沈んだ地の一つは、見るからに乾燥した河床であって、鋭く区分けして、予見される戦場を二つの部分に分割しながら、外濠のように我々の陣地と敵の陣地の間を縫っていた。我々がこちら側で、ロシア人は向こう側である。この乾燥した河床はセメノフスカ峡谷と呼ばれていた。攻撃する者は、この峡谷を渡らなければならなかった。実際九時間の戦闘はこの峡谷と、及び一部はこちら

側と一部は向こう側の縁にある三つの陣地の奪い合いを巡って行われた。この三つの陣地というのは次の三つである。一．バグラチオン［Bagration（1765-1812）］突角堡、　二．セメノフスコワ村、　三．ラエフスキー角面堡である。第二と第三の陣地は峡谷の向こう側にあって、戦場のロシア人によって占拠された半分の側である。しかし第一の陣地はバグラチオン突角堡といい、橋頭堡状で、セメノフスカ峡谷のこちら側の縁まで突き出した仕掛けであった。この三つの陣地が敵の中心部となっていて、これに右翼と左翼の陣が接していた。右翼はボロジノ近郊にあり、左翼はウティツァ近郊にあった。敵は奥行きのある縦隊で、見たところ果てしないものであった。我々は更に銃剣の煌めきを見、敵の陣地の前面、峡谷の縁にかけて、その大砲の暗い開口部を見た。

以上が敵である。しかし朝の陽光、それに我々が陣取っている高台のために、我々自身の布陣も一望できた。我々のすぐ直前には、六個師団で、ダヴーとネーの軍が構えており、我々の背後ではジュノー［Junot（1771-1813）］と近衛兵が構えており、我々自身は、ミュラ王麾下の一万の騎兵で、縦横の面から見て、こちらら側の軍隊の中核を形成していた。

ナポレオンの計画では、まずは両翼の地点、ボロジノとウティツァとを、ボロジノは副王［Eugen　Beauharnais（1781-1824）ナポレオンの最初の妻、ジョゼフィーヌの息子］のイタリアの近衛兵を通じて、ウティツァはポニャトフスキー［Poniatowski（1762-1813）］下のポーランド人を通じて奪取させて、それからまさに今述べた左右両翼から攻め入る翼兵達の共同の許、（彼らが速やかに侵攻することをナポレオンは疑っていなかったが）、敵の恐るべき中央陣地を撃破する段取りであった。まずは突角堡であり、それからセメノフスコワ村、それからラエフスキー角面堡であった。

すでに夜明け前に最初の大砲の砲撃がなされていて、七時に戦闘が始まった。副王はボロジノを取った。しかしポニャトフスキーは思っていたよりも強力な敵に押されて、その陣地［ウティツァ］を得られなかった。かくて、主にまたボロジノでも攻撃が進みがたくなったとき、両翼からの共同が欠けることになって、我々の足許にいるダヴーとネーの軍隊は、敵の中央部の撃破、つまり左右両翼から支援されての中央突破が上手く行かなくなった。コンパンの師団は、五日、厳しい会戦を勝ち抜いて来た師団であるが、これがまた先陣となった。この師団は次の攻撃目標、バグラチオン突角堡に向かい、占拠し、奪われ、二度目の占拠をし、しかし更に奪われること二度目となった。勇猛なコンパンは倒れ、ラップ［Rapp（1772-1821）］とダヴーも、多かれ少なかれ、重傷を負い、戦場を去らなければならなかった。そして再三師団が投入されて、ようやくこの突角堡の占拠を我々の側で確実なものとして行った。こちら側の四回目の攻撃の後、ようやくヴォロンツォフ侯爵［Graf Woronzoff（1782-1856）］の許、働き流血していたロシア側の歩兵がすべての再奪還の試みを止めて、残っている者が皆、セメノフスカ峡谷の向こう側の縁へ引き上げた。自ら独立した部隊を形成するには余りに弱く、彼らはそこに集結していた部隊と合同した。残っていた者は四百人ばかりで、六千人の残りであった。ヴォロンツォフ侯爵は、皇帝にその日の夕方報告したとき、こう結んだ。「私の歩兵大隊はもはやありません。しかし戦場から離れて消えたのではなく、戦場で戦って消えたのです」。

十一時に我々は突角堡を得た。今や峡谷を渡って、まずはすでに多くの箇所で燃えているセメノフスコワ村と、その左手にある大きなラエフスキー角面堡を占拠しなければならなかった。しかしすでにその為の戦力は、少なくとも前線では欠け始めていた。ダヴー隊

の師団はわずかに鉱滓となっていて、ネー隊の師団もそれに劣らず、ただフリアン[Frian(1758-1829)]師団のみが新鋭であった。この師団が攻撃命令を受けて、今や先陣となった。一方戦火の中にあった師団は集結した。攻撃側の勇気は一瞬大きな成果を約束しているように見えた。しかし最前列の大隊がセメノフスカ峡谷の向こう側の縁を登ろうとした瞬間、間近な射程を置いて放たれた集中射撃の長い列で打ち倒された。後から攻める大隊は当惑して、向きを変え、こちら側の峡谷の窪地や渓谷で逃げ場を求めようとした。突撃の試みは失敗と見なさざるを得ず、我々の前線全体で、我々の直前の者達も、両翼にかけての者達も、もはや無傷の歩兵隊はなくなって、攻撃の再挑戦を任されそうになかった。

この瞬間ミュラ王に、その騎兵の群れで試すよう命令が下された。この騎兵隊に我々も所属していた。ミュラは命令を受けると、早速左翼から、彼の四個騎兵隊を梯形で率いた。まずはグルーシー[Grouchy(1766-1847)]で、次はナンスティー[Nansouty(1768-1815)]、それからモンブリュン[Montbrun(1770-1812)]、それからラトゥール・モーブール[Latour-Maubourg(1766-1850)]で、最後の部隊は差し当たり温存しながら、ただ短い間を置いて、敵の中心部の陣地に突撃させた。グルーシーが先導して、ナンスティーとモンブリュンが従った。戦場は六千頭の馬の蹄の音の下、轟いた。大砲の音でさえ、一時かすんで聞こえた。しかし途方もない騎兵攻撃も、歩兵師団の再三の攻撃以上のことは成し遂げられなかった。セメノフスカ峡谷のこちら側の縁で最前線の列は墜落し、残った者達は、続く連隊と共に、崩れた前線の逃亡となった。

新たな失敗であった。何千頭もの騎兵のいない馬が戦場を彷徨っていた。グルーシー、ナンスティー、モンブリュンは及ばなかった。ただ我らの第四騎兵隊、ラトゥール・モーブールはまだ動かずに、右翼にあって、その前線には、我らの重騎兵師団がド・ロルジュ[de Lorges(1767-1826)]将軍の下にあった。我々は彼のことを冗談で、同時にまた彼の騎士的徳操を認めて、我らの「ド・ロルジュ騎士」と呼んでいた。実際、その誇り高い名前を有するこの師団が、「ライオンの庭からハンカチ」[シラーのバラードより]を取って来る時が近付いていた。一つの塵埃が左手から見えて来た。ミュラ本人で、彼はそれまで別の翼で守っていたのであるが、我々の前線へ飛んで来たのであった。彼はいつもより華麗に、幻想的に衣服を着ていて、我々が時々侵入して来る砲弾にも構わず、完全に平静に戦列を守っているのを見ると、馬で通り過ぎながら、手で接吻を送って、サーベルの代わりに帯びている乗馬鞭で挨拶した。同時に彼は攻撃の命令を下した。そして二個の大きな騎兵大隊となって、戦場に攻め込んだが、この大隊の一つは、六連隊のポーランド槍騎兵師団で、ロツニエツキー将軍麾下にあり、(すぐその後その師団は視界から消えた)、もう一つの大隊は、これについて専ら話すことになるが、我らのド・ロルジュ重騎兵師団である。しかしこの師団も再び分かれた。そして丁度我らの総ラトゥール・モーブール隊の塊からポーランドの槍騎兵師団が取り除かれたように、今やわずか数分後に我らのド・ロルジュ重騎兵師団から、ヴェストファーレンのフォン・レーペル旅団が取り除かれた。フォン・レーペル将軍はヴェストファーレン軍の中で最も美しい将校と見なされていた。彼はジェローム王[Jérôme-Napoléon Bonaparte (1784-1860)、ナポレオンの末弟]の妻、フリーデリケ・カタリーナの寵児であった。彼がその旅団の前線で、直身刀を掲げているのを丁度我々は目にしていたが、検径弾に当たって馬から落ちたのであった。致命傷を受けて、彼は王妃の名を呼び、亡くなった。彼の旅団は当惑し、側面を向いたが、しかし後になっ

てようやくまた戦列に加わった。

かくて我々は孤立していた。ザクセンのティールマン[Thielmann（1765-1824）]旅団、八百の近衛精兵[Garde du Corps プロイセン]連隊と、フォン・ツァストロ連隊である。いずれにせよ我々の陣地は最右翼にあって、それで今や我々の状況は、フォン・ティールマン将軍が先行の戦闘経過から明らかに察知していたように、ますます右側に移るよう強いられていた。何故我々のこれまでの攻撃は失敗していたのか。敵の砲列を前にして、急斜面のセメノフスカ峡谷を通過する際のいつに変わらぬ困難さのせいであった。河床で通過地点を発見できれば、そのときにのみ成功の可能性があろう。傾斜面が余り絶壁でなく、敵の砲火が余り激しくない所である。このような地点は川の上流のウティツァの方に拡がっていて、ますます離れ、ますます砲列射程から抜け出すにつれ、我々はようやく上述の翼兵の地点から千歩離れていない所に、平坦の斜面の、ロシア側の大砲のほとんど達しない地点を発見した。そこはセメノフスカ峡谷を快適に降下することを可能にするように見えた。そこが我々の求めていた所であった。一分後、我々は乾燥した河床にいて、その縁は我々が左手に折れて、敵の中心部に近付くにつれ、ますます高く急峻になって行った。しかしこのますます高く急峻になる縁はまず我々の防護となった。そしてセメノフスコワ村の周りで砲列に置かれている百ものロシアの大砲は、我々の頭上を越えて行った。我々は特段の損失を蒙らずに、すでにすぐ村の近くまで接近していた。ティールマン将軍の巧みな統率が損失から守ってくれていた。しかし決定的瞬間がやって来た。これまで我々の防波堤となっていた同じ急な傾斜面が、今や我々の危機となった。しかし我々はそれを登らなければならなかった。我らの近衛精兵連隊が先駆けた。「列をなして右に旋回、駆けよ」。次の瞬間我々は斜面を相手にし、すぐその後高みに達していた。何人かは転覆して、転げ落ちた。しかし大抵は胸牆に達して、戦列を整えて、攻撃に移った。

駆けて行って初めて、自分達がどこにいるか分かった。我々の手前三百歩も離れていない所で、セメノフスコワ村が燃えていた。我々と村の間に、また村を越えて、チェス盤の上でのように、六個のロシア人の方陣が、近衛歩兵大隊が、有名なイズマイロフスキー連隊、リトアニア連隊、フィンランド連隊が控えていた。すぐ間近から、その銃火が我々を襲った。しかし二回目の一斉射撃が行われる前に、村のこちら側にある方陣は蹴散らかされて、燃えるセメノフスコワ村を通じて、攻撃が行われた。合図も司令の言葉もなく、自ら飛ぶようになされた。勿論村では最前線の騎士の多くがかつては住まいの穀物倉庫、貯蔵庫として使われていて、今や燃える瓦礫で一杯の地下の穴蔵に転げ落ちた。しかし続く分隊は上手く危険な箇所を通り抜けた。そして向こう側にいた者達は、皆、こちら側にいた者達と運命を共にすることになった。リトアニアの連隊は、十分するとその隊員の半分を失った。

しかしティールマン旅団の全員が燃える村を駆け抜けたわけではない。その旅団の少数者達、百人弱であろうが、それと両連隊の一部が混じって、第一の方陣を崩したすぐ後に、右手へ深くロシアの隊列へ分け入って、ここからまさに勃発しようとしている敵の騎兵分隊の攻撃に対処しようとした。これは上手く行った。敵の重騎兵は投げ倒され、そしてこの箇所でのほとんど思いがけない成功成果に図に乗って、 一　私自身この分隊にいたが、
一　群れをなして背後に控えている大隊縦隊の中を突き進んで行き、 一　ふと気が付いてみると、突然背中にロシアの陣営全体を背にしていることになった。

この箇所からならモスクワまで騎行することの方が、セメノフスカ峡谷まで戻るよりも容易であったろう。しかしこの峡谷を、つまり敵と味方の間の分断線を再奪取するよう努めなければならなかった。

それでは戻るぞである。誰もが我らの指揮官の言葉に進んで従い、付いて行ったが、しかしまだ旋回しないうちに、二方の左右の森の一画からバシュキール人やカルムイク人の群れが出現した。非正規軍で、前線では信用されずに投入されず、この予備陣地に配置されていた群れであった。咄嗟に彼らは我らの脇腹やうなじを槍で突いて来て、敵の精鋭部隊との二回の戦闘でも幸い敗北を免れてきたというのに、今やこの敗北がこのならず者達の顔をして待ち構えていた。フォン・ライザー連隊長は馬から突き落とされた。すぐその後フォン・ホイヤー[von Hoyer（1767-1848)]大隊長が続いた。そして五分しないうちに、我らの小部隊の全員の中でただわずか二人が残った。フォン・ミンクヴィッツ旅団副官と私である。我々はますます密になるならず者の群れから抜け出し、それから我らの疲れた馬に乗ってやって来たときと同じ間のスピードで再び戻った。我々の救いとなったのは、多分フォン・ツァストロ連隊の帯びている黒い胸甲で、それで我々は長い歩兵隊翼兵の側を通過する際にロシアの重騎兵と思われたのであろう。我々の馬は十分驚きに値するが、耐えて、三十分しないうちに、我々は再び、まだ残っている限りの仲間の列に復帰した。我らの死ぬ思いの騎行について語る時間はなかった。というのは丁度この時、ロシア人はセメノフスコワの陣地の奪還の為に、(同じ名前の村はもはや存在しない状態で)、大規模な攻撃を準備していたからである。そしてまた峡谷の向かい側にいる者達が皆、再びこちら側に戻らなければならないことになった。我々もそうであった。

今や正午であったろうか。それとも少し経っていたろうか。我らの努力は、これは隠しようもないことであったが、本質的には先行したグルーシーやモンブリュンや、ナンスティーの騎兵の攻撃と同じで成果を上げることなく終わっていた。我々はセメノフスカ峡谷の敵側に登って行き、六個の近衛大隊を蹴散らして、ロシア側の騎兵連隊を倒し、敵の陣営を背にするほど侵攻した。しかし最終結果は、千歩前進したとは言え、再びこの峡谷のこちら側の縁に立っていて、ロシア人をまた向こう側の縁から追い払うという使命を、新たに受けなければならないというものであった。これが再びなされるであろうこと、それに疑いの余地はなかった。それを断念することは、戦闘の敗北を意味していたであろう。従って残る問題は、いつ行うかであった。

二時間我々は待機していた。上層部で揺れているように見えた。とうとう、皆前線にいる勢力を結集して、全線で今一度侵攻するという命令が下った。我らのティールマン旅団には、半分の勢力にまで縮んでいたけれども、獅子の働きが要求された。つまり、敵の衷心陣地の最も堅固な箇所、恐るべきラエフスキー角面堡を攻撃するという命令を得た。騎兵で角面堡に突撃せよというのである。

この命令をもたらしたのは、ネー本人であった。ティールマン将軍は、すべての返事の代わりに、惨憺たる旅団を示した。疲れた馬の上の四百人の騎兵である。しかしネーはこの時、恐ろしく興奮していて、馬鞍の鞘からピストルを取りだし、構えて、自分は抵抗のどのような対応に対しても沈黙させる用意があることを示した。ティールマンは全線に列して、トランペットが吹かれ、再び峡谷に対して向かって行った。このたびは半ば左であった。ラエフスキー角面堡は五百歩先の川の下流にあったからである。この騎乗で何を誰

を失ったか、私はもはや覚えていない。生じた一切のことは数分間に凝縮されていたからである。損失は甚大であったと言えるばかりである。我々は接近したかと思うと、次の瞬間には下の渓谷にいた。しかしそれは三時間前に、ウティツァから大きな弧を描いて、旋回し、敵の十字砲火からはほぼ完全に守られたときの、人気のない河床ではなかった。このまさに防御してくれる深みには、今や新鮮な、予備隊から投入された大隊が巣くっていて、密な迷路に配置されて、まずは銃火が我々を迎え、それから我々が迷路を越えると、棍棒や銃剣が迎えた。しかし無駄なことであった。我々は旋風のように抜けて行き、飛び越えた。我々の使命は、ここ下の方で群れや迷路の戦いで時間を潰すことではなく、向こうの高く聳えるラエフスキー角面堡に一番乗りすることであったからである。今や我々は急峻な河床の側面を再び駆け上がって、角面堡自身の更にもっと急峻な傾斜の前にいた。我らの最前列の一行は無意識に右手へ旋回し、半円を進む動きで、角面堡の曲がり角に達しようとした。続く一群は、あたかも角面堡の傾斜は単に飛びようにしてきた河床の傾斜の続きであるかのように、方形堡を駆け上がり、上から角面堡の中へ突入した。一対一の戦いが始まった。洗矢や鉄梃を掴んだ砲兵は斬り倒された。残っていた者達は武器を棄て、捕虜となった。ただここで指揮を執っていたリハチョフ将軍だけは負けを認めようとしなかった。彼は一時間前に角面堡を離れていて、クトゥーゾフ将軍に、その時はまだ上手く行っていた戦いの進行の報告に行っていた。「角面堡はどこか」とクトゥーゾフは尋ねていた。リハチョフは右手を挙げて、方向を示した。その手を六ポンドの弾が砕いた。彼は左手を上げて、鋭く南の方を指して言った。「向こうです」。それから彼は、ただ軽く包帯をして、馴染みの角面堡へ戻って来た。今や彼は死者達と共に眠ることになった。

中心部は撃破された。ラエフスキー角面角面堡は我らの手に落ちた。我々は解散する為に、モラン師団が近寄って来て、ティールマン将軍が旅団の集合を命じたとき、もはや吹奏のトランペット兵はいなかった。重傷者はようやく馬に乗せられ、合図が吹かれた。かくて我々は峡谷の別な側へ戻って行った。

ようやく三時となっていた。しかし両軍の力は燃え尽きたようになっていた。我々はこの日に全軍の三分の一を、ロシア人は半分を失った。クトゥーゾフは行われた軍事会議で、モスクワの背後まで退却することを決めた。彼は悪し様に言われることを承知していて、言った。「砕かれた鉢代は支払うことにしよう。しかし私は祖国の安寧のために身を粉にする」と。

翌朝彼は退却した。ナポレオンはその翌日続いた。我々もそうであった。我々は無残な姿であった。我々と共にいた者は、セメノフスコワ近郊とラエフスキー角面堡に眠っていた。しかし我々は軍旗にボロジノの名を記すことが許された。

第十二章
二つの市門を通って

『ボロジノ』には百もの質問が寄せられた。そしてフォン・メールハイムはこれらの質問に答えながら、一同の中心であった。彼は、まだ片付けられていない、恐ろしい光景のままの戦場を越えての行軍について、モスクワの入場について、希望と幻滅について、最後に、荒れ果て、その間、火災現場となった首都の放棄について語った。この悲惨の火災

を描くイメージで、　ー　その一週間後彼は傷を負って、　ー　自分の描写を終えた。その際、個々のフランス人の将軍、ネーとかナンスティーとか、もっと頻繁にはミュラとか副王とかが、あからさまに贔屓されて言及されたことも事実であった。しかし当時プロイセンや、全く特別には首都ベルリンにおいては、状況は独自なものがあって、このような贔屓を述べても反感が表明される心配は少しもなかった。誰もどのような政治的立場になるのか、誰に自分の心を向けていいのか、ほとんど分からなかったのである。というのは戦争の勃発直前に三百人の我らの最良の将校がロシア側に付いて、「不倶戴天の敵」のために戦う必要のないようにする一方で、まさにこの「不倶戴天の敵」のために必要な救援隊を用意して、その将校の兄弟や縁者が同様の数、あるいは倍の数、対峙していたからである。我々は自分を本質的に観客として考えていて、明らかにロシアの勝利から増大してくるに違いないすべての利点を認識していて、それ故この勝利を願っていたが、しかしだからといって、クトゥーゾフとかヴォロンツォフと一体化して、フランス人の戦闘の卓越さの描写に対し、この卓越さには我々ドイツ人が、好むと好まざるとにかかわらず、傑出した関与をなしているのであって、何らかのけちが付けられるようなことには我慢ならなかったのである。

丁度六時となった。フォン・メールハイムは立ち上がって、オペラ上演の開始に　ー『ヴェスタの巫女』[Gasparo　Spontini 作曲、1807]が催されていて、　ー　間に合わせようとした。彼が他の仲間達と約束していなかったことが分かると、上演に彼の伴をして行くことが決定された。ただハンゼン・グレルとレーヴィーンは断った。そして別々の道で住まいに戻った。

レーヴィーンはまだ朗読のことを考えていた。この朗読は戦闘の描写としてではなく、多分にそもそも描写として、彼に大きな印象を与えていた。彼は燃えているセメノフスコワを見た。馬がさっと火事場、石炭乾留場を過ぎながら、わざと灰で隠された地下穴蔵へ墜落するのを見た。彼は奥行きのある縦隊を見、その間を排列撻刑を受けなければならないかのように、フォン・ライザー連隊長とその死の部隊が進んで行くのを見た。最後に彼は、草原が突然黄色の羊皮の騎兵達で、バシュキール人やカルムイク人で一杯になり、彼らが今や雀蜂の群れのようにその犠牲者を刺し殺すのを見た。こうした一切を彼は目にした。そしてその間に自分の耳から離れないメロディーのように、老コンパンの言葉を聞いた。「閣下、角面堡に眠っています」。

彼が自分の住まいの階段を上がって行ったとき、それはまだ耳に残っていた。ここで彼は一切が明るく、光が点されているのに気付いた。フーレン夫人は彼の帰宅時間を正確に見積もっていたか、玄関での彼の足音を正しく聞き分けていたに違いなかった。いずれにせよ彼の写字台では小さな緑色の勉強用明かりが燃えていて、彼を招いているように見えた。彼は果たして自らを長く待たせず、腰かけて、本や書類や手紙に視線を投じた。それらは彼が午前中、ユルガス家での朝食[小昼]のために準備したとき、残しておいたときのままであった。レナーテの手紙を今一度ざっと見たが、印象は格別生じなかった。それはそのままであった。外的損失は内的獲得と比べたら比較を許されない。他面ではまた、一年を経て程なくして二度目の火災が生じたという憂慮の事態は疑えないという考えをできるだけ安心する方向へ導きたいという思いに駆られた。手許にある本で気が晴れるかもしれないと思った。一番上にあったのは相変わらずヘルダーの本であった。彼がまた開くと

同じ歌が目に飛び込んできた。その結末の行に彼の心は午前悲しい思いがしたのであった。彼は迷信深くて、そこにほとんど良き前兆の印を見てとれなかった。願わしい喜びを与えてくれそうにないこの本を彼はうんざりして閉じて、更に探しながら、最後に仮綴じの冊子を見つけた。そのレモン色の表紙には、その本来の表題、つまり『歌謡と民衆の歌』の側に、更にアメリー伯母の個性的文字でこう記されていた。「愛シイ甥、L.v.V.ニ。謹呈アメリー、P.伯爵夫人、グーゼ城ニテ。一八一二年クリスマス」。レーヴィーンはグーゼの伯母の文学的趣味には信頼がおけず、この小冊子を覗いたものかこれまで決心がつかないでいた。今や微笑してこれに手を出し、めくってみた。小さめの詩節の表題の一つに、全く当たっているとは言えなかったかもしれないが、「わらべ唄」と彼が訳したものが、ちょっと彼の興味を引いた。彼は読み始めた。

私ノ孫娘ガ明日誕生日、
何ガプレゼントサレルカオ楽シミ。
パン屋ハケーキヲ焼イテ、
仕立屋ハ小サナコートヲ作ル。

「これは可愛い」と彼は言った、「今憧れていたものだ。このわらべ唄は楽しい」。彼は興味を募らせて最後まで読んだ。各行はすぐに彼の記憶に収まった。しかしこれは十分ではなかった。彼はそれをドイツ語にしようと思った。ひょっとしたら次のカスタリア誌会合に役立つかもという合図を彼の魂に送ったのか、それは判然としなかったかもしれない。いずれにせよ喜ばしい気分の影響下にあって、この翻訳者はより素早くペンを走らせて、飛ぶように可愛い小さな詩節の対の韻を合わせて記した。ただ仕立屋の「小さなコート」が少しばかり面倒であった。

最後の行が紙上に記されたと思ったとき、ノックの音がして、フーレン夫人が入って来た。彼女はお茶を持って来た。

「お掛けなさい、フーレン夫人。何か読んで上げましょう」。

老夫人はドアの所に立ち止まったまま、当惑して彼女の若様を見た。今ようやく若様は、突然の上機嫌で増長して、大胆なことをしたことに気付いた。彼の方が当惑する番になった。しかし彼は、彼の以前や彼以降の多くの者同様に、古い逸話で、つまりモリエールも自分の家政婦[Laforest]の判断を参考にしたということで、納得した。それ故フーレン夫人がお茶の盆を下ろしているとき、またかなり屈託のなさを取り戻して、言った。「お聞きください。悪くないですよ。

私の孫娘の誕生日に、
誰もが何かを持って来たがる。
パン屋は菓子パンを、
仕立屋は赤いコートを。
商人は、白くて、可愛い、
人形の服に、人形のベッドを、
それに丸い箱も送ってきて、

中には羊飼いと牧羊犬、
それに羊の群れに、小さな木、
六頭の羊は雪のように白い。
そして雲雀が鳴いて、
お日様が昇ると、その声が聞こえる、
雲雀は好きなだけ、歌い、さえずる、
私の愛しい子の命名日に。

どうです、フーレン夫人」とレーヴィーンは朗読を結んだ、「どう思います」。
老夫人は頭巾のリボンをつまんで、それから言った。「とても可愛い」。
「それでは物足りない」。
「でもね、若様、とても素敵とは言えませんよ」。
「どうして」。
「全部が小学生の詩のようにピーチク、パーチクしています」。
「まさにそうなんです。そうあるべきなんです。全く正しい。フーレン夫人、あなたは賢い女性です。また小学生の詩を書いたら、また最初に聞いて頂くことにしましょう」。
このような次回の顕彰の知らせが、それを受けた当人によって額面通りに評価されたようには見えなかった。フーレン夫人はむしろ、いつもは法外にお喋りを好むのに、退却しようとした。そしてすでにドアノブを手にしたとき初めて、今一度振り向いて、言った。「あら、若いシュナーターマンもいらして、...」。
「リヒテンベルクから」。
「そうです、リヒテンベルクから。お父さまからの案内状を持って来られました。明日ダールヴィッツの森で穴熊狩をされるそうです。更にベルリンの殿方も御一緒で、若様もひょっとしたらお出でになりますか、と。リヒテンベルクの通りに十一時」。
レーヴィーンは頷いた。
「それは都合がいい。木曜日は暇だし。フーレンさん、早く起こして下さい」。
それで二人はお休みと言い合った。
レーヴィーンは良い時に目覚めた。普通の冷たさであったので、彼はいずれにせよ、風や気候では鍛えられていて、その集まりのために格別の準備の必要はなかった。
出会いの場所までの道のりは大したものではなく、フランクフルト門から同じポプラ並木道が続いていて、この並木道をレーヴィーンはホーエン・フィーツへの帰省や休暇の旅の折、何度となく通って来ていた。彼はリヒテンベルクやフリードリヒスフェルデ方面についてはどの個々の食堂も知っていて、訪問客の多い享楽の酒場、「新世界」の側を通るときは、めったにやり過ごさず、一杯のベルナウを飲んで、自ら給仕してくれる青い前掛けの老亭主と長い談論を重ねるものであった。しかし今日は、始めるよりも止めることが難しいこのような議論を行うことは断念することにして、食堂を通り過ぎて行った。丁度この食堂の前では二頭の大きな犬を繋いだパン車から積み荷が降ろされていた。
更に三百歩ほど先に進んだかと思うと、快適さ故に自ら歩んでいた幅広の車道を乱雑な群れの人間がこちら側に向かって来るのが見えた。遠くから見る限りでは、四十人から五十人ほどであった。彼も気付かれたかのように見えた。というのはこの群れは、司令官の

言葉によるものか、個々人の性向からか、突然軍隊式に整列し始めたからで、そしてレーヴィーンはこの出現にどう対処したものか分からずに、脇に寄って、近付いて来る者達を通り過ぎさせることにした。しかししばらく待つことになった。というのは、近寄って行軍して来る者達の足どりは重かったからである。ようやく最前列の者達がはっきりと分かった。彼らは軍帽と灰色の外套を着用していて、一瞥して、なお制服の部隊と言えるものであった。しかしより詳しく見てみると、その状態の全くの惨めさが分かった。長靴はまだ履けるものであったが、開けられていて、腫れ上がった足を少しでも痛みを抑えて運べるようにしていた。そして風で外套が広げられると、ゲートルが垂れ下がっていたり、全く欠けているのが見えた。一切が悲惨であった。彼らの霜焼けしたり、あるいは夙に凍傷であったりする両手は布切れやぼろ切れで巻かれていて、武器で有するものはただ銃剣だけであった。彼らはレーヴィーンの方を見て、上品に、しかしおずおずと挨拶した。

この歩兵部隊の後、騎兵、重騎兵が来た。十人から十二人で、全連隊の残りであった。彼らはもっと良い衣服であって、まだ白い外套を着ていて、一部の者はまだ大きな騎兵の長靴を履いていて、馬を失ったのは、不運のためか、過失のせいではないことの印に、馬の鞍を自らの肩に担いでいた。何人かの者はなお長い馬の尾の飾りの付いた兜を被っていた。彼らの栄光の日々からのこうした意志に反して目立つ遺物は、彼らの出現に何か格別に慄然たるものを与えていた。

掉尾はまた歩兵達で、彼らは一人の左翼を行軍する、千切れてはいるが、まだ完全に武装している伍長によって率いられていた。大きな、痩せた男で、黒い顎髭、深く窪んだ目をしていて、明らかに南フランス出身の男であった。レーヴィーンは気を取り直して、彼に歩み寄って、こう言った、「御出身ハ、...」、しかし声は続かなかった。すると「ロシアカラ」と伍長は補って、手を軍帽に置いた。

次の瞬間には部隊は通り過ぎていた。自らを墓場に運ぶ葬列であった。レーヴィーンはしばらく見送っていた。自分の魂がかつて味わったことのない情感にかき回されていた。

「これが、我らが待ち構えていて、罠を仕掛け、背後から叩き殺そうとしている相手だ。いや、父上、これは眠りを殺す[『マクベス』、Ⅱ,2 参照]ことよりもひどいものだ。最悪この上ない」。

彼はなおしばらく考えに耽っていた。それからまた前方を向いて、リヒテンベルクの通りの待ち合わせの場所に行こうとした。

しかし彼はまた止めた。深い同情に襲われた。同時にこの不幸な者達にとって、一つの救い、助けになりたいという無限の欲求に襲われた。待ち合わせやシュナーターマン、ダールヴィッツの森や穴熊狩りを安んじて諦めながら、再び町に戻る決心をした。

小さな部隊が先んじていた距離は大したものではなく、すでにフランクフルト・リンデンの所で彼はその部隊の最後尾にまた追い付いた。ここで多くの人々がこの個々の兵士の周りに集まって来ていていることが分かったが、しかしここに来ているのは、大方好奇心や関心からであると知って、安心した。時々憎しみの言葉が吐かれたが、軽蔑や嘲笑は見られなかった。それ故彼は控え目に従って、ただ若干の距離を置いて行列に従っていた。行列はまずアレクサンダー広場を過ぎて、ケーニヒ通りに入り、それからシュロス[宮殿]広場を過ぎて、ベーレン通りへ入った。ここにはフランスの司令部があって、その大きな中庭に、まずこっそりとノックしてから、かつての「大連合軍」のこの退却前衛は入場を

許された。外にいた群衆は、やがて疲れて、近くの通りへ消えて行った。

ただレーヴィーンだけは残った。彼は十五分ほどその建物の前を行き来していたであろうか、大きな正面玄関のドアが内側から開いて、白い外套の重騎兵の五人がまた通りに出て来た。鞍は司令部に置いて来ていた。困窮で身に着いた鋭い目で、彼らはレーヴィーンを再び見分けて、彼に近寄って尋ねるように頼むように宿営の通知文を提示した。その内容にどう対処していいか分からなかったのである。レーヴィーンはその文書を読んだ。すべて同じ「ロンデル[円形]広場」にある兵舎状の建物宛に交付されていた。当時はまだ現在のベル・アリアンス広場がそう呼ばれていた。

「付イテ来テクダサイ」と彼は言って、最前列の男の右側に寄った。彼らは一言も発せずに、静かに付いて来た。

彼らがヴィルヘルム[今日のテールマン]広場をほとんど過ぎ去って、角の所に達したとき、ヴィンターフェルト[Winterfeldt （1707-57)]の彫像の立っている所だが、軍楽の音を耳にした。その音は、聞き間違いでなければ、ポツダム門かあるいはその門の近くから響いて来ているものに違いなかった。レーヴィーンは、この音色には上手く逆らえずに、より早いテンポの行軍になったが、疲れた重騎兵達には付いて来るのが難しいだろうと気付いて、再び止めた。彼は自分の過ちを優しく償おうとするかのように、すぐ側を行く男の方を向いて、音楽が聞こえて来る方向を指で示しながら、言った。「聞コエマスカ」。

すると話しかけられた男の疲れた表情に微笑が浮かんで、答えた。「フランスノラッパノ音ダ」。

その間彼らはヴィリヘルム通りとライプツィヒ通りの角の所まで来て、市門から一つのフランスの師団全体が行軍して来るのを見た。そこから果てしなく続いているように見えたのである。音楽は丁度止んだ。多分息をするためであったろう。しかし歩道では、行軍して来る縦隊の両側の方で、人々が密に押し寄せていた。いやその人々の中には、はるかに先駆けている者もいて、公園により早く着こうとしていた。そこで部隊の入場やその他の軍事パレードが完結する習慣であると知っていたからである。レーヴィーンは被後見人と一緒に門道に入って、すぐ側を通り過ぎて行く群衆の声高な言葉から、それはイタリアから着いたばかりのグルニエ[Grenier （1768-1827)]師団であって、今軍事的華麗さを纏って、ライプツィヒ通りをやって来るところだと容易に聞き取っていた。彼はまた更に聞いていた、ベルリン知事のオージュロー[Augereau （1757-1816)]将軍が、この師団をシェーネベルクで出迎えて、この師団を厳かに案内して、ベルリン市民にご丁寧に、皇帝ナポレオンは以前も今も無尽蔵の救援隊を有し、モスクワにもかかわらず、相変わらず全軍を有することを示そうとしているのだ、とも。

声高になったのは、いつも同じ名前と見解であった。しかし今や皆が黙った。というのは縦隊の先頭のオージュロー将軍本人が近くに来たからで、鷲鼻の、射抜くような目の、大きな強壮な男であった。彼はフランスの将軍の制服を着用していた。馬を失った重騎兵達は、将軍を目にすると、整列して、一人の者は、将軍をすでにイタリア遠征の時から知っていて、別の者達に囁いていた。「あれは、カスティリオーネ公爵だ」。

伝令将校達のお伴がその直後に続いた。そしてこれらも通り過ぎた後、先頭を行軍して来る大隊の前面がはっきりと分かるようになった。イタリアの若い近衛兵であった。まず先を行くのは鼓手長で、小さくて痩せていて、しかし狐色の鼻下髭を有し、これが赤い肩

章にまで達していた。その後を五歩下がって巨大なモール人が行き、これはただ頭と首だけが、高く結び付けた連隊のティンパニーよりも高くなっていて、この男の隣には十四歳のラッパ手が、美形で、容易に分かることだが、すべての女達にちやほやされて来た少年で、笑いながら、コケットに白い歯を見せていた。彼は右手に小さな銀製のラッパを持っていて、窓を見上げては、自分を覗いている者がいないか確かめていた。

音楽はまだ止んだままであった。しかし今、ヴィルヘルム通りの角から三十歩も離れていない所で、鼓手長が杖を上げ、空中に投げ、そして再び取った。この瞬間モール人はティンパニーを打ち、その隣の小さなラッパ手は銀製のラッパを口に当てて、合図を吹き鳴らした。それからまたティンパニーが響き、ラッパは止んだ。四十人かそれ以上からなる連隊軍楽が始まった。速やかに通り過ぎた。対壕兵が続き、それから歩兵が続いた。絶えず司令の言葉が大隊の長い列に届いていた。

レーヴィーンが同行者達の方を見回すと、彼らはそっぽを向いて立っていた。昔の矜持からは、現在の窮状に対する羞恥しか残っていなかった。彼は自分が見るべきでないものは、見ないようにした。それ故彼は目をまた縦隊に向けた。縦隊は今や大隊の最後の隊が進むところであった。これが通り過ぎてようやく、彼は手をそっと自分の間近に立っている男の肩に置いて、言った。「ソレデハ、急ギマショウ」。

かくて彼らはヴィルヘルム通りからロンデル広場の方まで歩んだ。更に一言も話されなかったであろう。

彼らが十五分後、ここで別れるとき、五人の白い外套の者達は列を作って並び、直身刀の護拳に手を置いて敬礼した。しかし彼らの目には、高貴な心を最も感動させるものが見られた。不幸な中での感謝である。

第十三章
一通の文と一通の手紙

レーヴィーンがかの午前に、つまり彼にとって少なくともシュターナーマン家の狩の集合をふいにすることになった午前に、目撃したこのような対照は、その時以来毎日のように見られた。町の北東の市門から戦争の悲惨さが、西側の市門からは戦争の栄光が侵入して来た。しかし通りでは両者が出会って、互いに不思議そうに、しばしば敵意を抱いて見つめ合った。「以前はそうであった」と一方の暗い眼差しは言っていた。しかしそれに呼応するもの、「未来はそのようになろう」は、もう一方の側の軽薄さ、自惚れの中で消えていた。

ベルリン人は、その習慣上、その両種の部隊の入場をどちらも等閑にせず、誰もがこの現象の対照性から、自分に都合の良いものを取りだしていた。我らの友のサークル内では、ラダリンスキー家も含めて、ナポレオン皇帝国のより正規なイメージとして見るべきは、汚い、夜警番の火で半ば焦げ落ちた外套で行軍して来る老兵の方か、それともグルニエ軍の巨大な、黄金のモール付きのティンパニーを打つモール人の方か、これに関して大いに見解が分かれていた。ブニンスキーは、ポーランドへ頻繁に送る文通の助けを借りて、丁度当時副王［Eugen　Beauharnais（1781-1824）］の命令下に、ヴィスワの要塞やワルシャワやポーゼンに集結していたかなりの数の部隊の塊について知識を得ており、南方からの新鮮

な師団の登場を見て、この師団の存在は彼自身思ってもみなかったものであり、ナポレオン皇帝国の一時的危機をすべて無視したばかりでなく、この一見無尽蔵の援軍の源泉に果てしもない希望を繋いでいた。他方ユルガスやヒルシュフェルト、それにフォン・メールハイムは、　ー　殊に全面的潰走を目の当たりにしていたメールハイムは、　ー　ナポレオンの軍がまた昇るとは信じようとしなかった。

「新しい軍を大地から呼び寄せたところで」とメールハイムは言った、「スモレンスクとモスクワの間で埋葬されて眠っているような軍ではない」。

レーヴィーンは非政治的で、その全本性が機会に依存していて、ある明確な確信に達することはなく、ナポレオンの皇帝国が沈んだり、また浮き上がったりした。たまたま目撃を許された陽気な場面や悲しい場面に応じて異なった。

一週間が過ぎ去った。またしてもカスタリア誌会合は開かれなかった。すべてのメンバーが「火曜日」にこだわるという入念な厳格さがその理由であった。このたびの火曜日には、客人も含めて、カスタリア誌の構成員の大半に不都合が生じた。ユルガス、ブムケ、トゥーバル、それにヒルシュフェルトとメールハイムがポツダム行きとなった。翌日、皇太子の堅信礼が宮殿礼拝堂で行われ、それに引き続き、駐屯教会で礼拝が行われる予定となったからである。トゥーバルは父の伴をしてそこまで遠出することになった。父親はこの祭事に参加するよう直接の招待を受け取っていた。カティンカも出席できたら、枢密顧問官にとっては嬉しいことであったろう。しかし枢密顧問官ががっかりしたことに、娘は自立した行動に慣れていて、それを拒否した。彼女は儀式には退屈なものしか感じていなくて、殊に教会の儀式は嫌いで、「当日の祝典の祈念として」水曜日の夕べを優先し、ー　水曜日、夜遅くになってようやく、ポツダムに招待されていた者達が帰還することになっていて、　ー　美しいマトゥーシュカ伯爵夫人の許に出席を告げていた。それに続く木曜日には週の最初からすでにささやかな、ただごく親しい内輪だけのパーティーがラダリンスキー家で計画されていて、これには勿論レーヴィーンも招待されており、応じていた。それ故この日の朝、可愛い、三角形に折り畳まれた、青いワニスで封をされた文を受け取ったとき、若干びっくりした。以下の文面である。「親愛なるレーヴィーン。あなたには一昨日か昨日、父上とトゥーバルがポツダムにお出掛けの際、お会いできると思っていました。お上手を聞かずに済みましたけど。白昼夢を見ているのではないでしょう。しっかりして、レーヴィーン。この手紙を記しているのは、あなたに朝の御挨拶を言いたいからで、あなたが今晩のお約束を忘れていないか、心配だからです。詩人は忘れっぽいから。私に寄せる詩をあなたはとうに忘れてしまっていますよ。カティンカ・v.L.」。

レーヴィーンは二，三回、繰り返し言葉を読んだ。「白昼夢を見ているのではないでしょう」、それに「しっかりして、レーヴィーン」。一瞬、熱帯の、陶酔的香りの漂う庭園が彼の目の前で開かれて、カティンカが隠れていた植込みから両腕を広げて飛びだして来て、彼に高慢にこう呼びかけているように思われた。「あなたはどこを探しているの。私はここにいるのに」。しかし彼はまた呼んだ。「詩人は忘れっぽいから。私に寄せる詩をあなたはとうに忘れてしまっていますよ」。彼は辛辣に笑った。

「これが本当だ、嘲笑的だから。彼女にとって詩が何ほどのものか。今彼女の正体が分かった。幸福な恋人だけでは自分の幸福に十分ではないのだ。幸福を十分に味わうために、更に不幸な恋人を必要としているのだ。それ故彼女は私を離さない。これが私に彼女が命

じている役回りだ。より輝かしい宝石のための裏箔だ」。

彼はその文を引き破ろうと思った。しかし自分の手が動かないのを感じた。より柔和な気分に襲われた。彼は数瞬間、少なくとも自分の中に希望を焚き付けてくれた箇所に、自分の唇で触れた。それからその紙片を折り畳んで、懐に入れた。

自分が次の数時間写字台に向かっていても、成果ないであろうことは明白であった。それで彼は町で気晴らしを見つけるために、出掛けた。彼は思っていたよりも素早くそれを見いだした。市役所の角に数百人が立っていて、フランス語とドイツ語でまとめられた、大きな黄色の用紙に印刷された路上掲示を読んでいた。彼は近寄って、自分の前に立っている者達の頭越しに、読み取った。「第十一軍部隊の元帥閣下にして司令将軍は以下の報告を受けている、大連合軍のベルリン在住の多くの少尉や軍吏で、許可なくしてその部隊を去った者が見られる、と。閣下はすべてのこれに該当する人間に町から去るよう命令する。さもなければ、この命令に従わないすべての人物を警察によって逮捕させ、その名前を国軍大臣に通知させることにする。すべての旅館業者は以下の順に記載された将校達の誰一人として泊めてはならない。現行犯の場合、より詳細に規定されることになる罰金刑に処せられる。署名者。オージュロー、カスティリオーネ公爵」。

この路上掲示は、クリスマスの日々に現れた第二十九報知紙よりも更に、大連合軍の完全な解体の告白を含んでいた。規律がなくなって、それと共にまとめている縛りがなくなっていた。この通知を読む誰もが、この印象を受けて、ベルリンの流儀で、鋭い見解に欠けていなかった。「軍吏と少尉だって。将軍達については言及がない」とある者が言った。「元帥様にはまずだんまりだな」と別の者が付け加えた。「だんまりだとも。武士は相身互いだからな」。そんなやりとりがなされて、その間一度ならずこう請け合わされた。ベルリンの旅館業者はフランス人の警察官じゃあるまい、と。

レーヴィーンはやがて人々の群れの中から抜け出してシュテヒバーン[馬上槍試合場]の近くで、数人の同級生と出会った。彼らは、講義はやめにして、シャルロッテンブルクの方へ散歩することに容易に同意してくれた。マルヴィッツ[Alexander von der Marwitz (1787-1814)]とかレッシュブラントと言った者、同郷人やグラウエ・クロスター学校時代からの古い馴染みであった。彼らはまずウンター・デン・リンデンを行き、それから大きな国道を下って、「トルコのテント」亭へ向かった。そこでかれこれ十二時に近かったので、小昼を注文した。

活発なお喋りをしながら、これは交互にヨルクについてや、オージュローの掲示や、スポンティーニの『ヴェスタの巫女』や皇太子の堅信礼についてのものであったが、レーヴィーンは午前中にもたらされた不機嫌を忘れることができ、それをただちらとまた思い出したのは、彼が札入れを取りだして、形状と色合いから若干人目を引くカティンカの文を地上に落とした時であった。

「おい、フィッツェヴィッツ」とレッシェブラントが言った、「恋文じゃないか。目にするたびに、新規な方からではないか。そうだな、マルヴィッツ」。マルヴィッツはそう証言して、次の瞬間にはその出来事は忘れられていた。

四時かもう少し遅くなっていたであろうか、レーヴィーンはまた家の玄関に入って、古い、夙に鏡のように滑らかになった階段の手摺を伝って、半ば窪んだ段を上がって行った。

彼は上で一通の手紙を見つけた。その宛書きで、すでに半ば薄暗くなっていたけれども、

容易に父の筆跡と分かった。彼はそれ故窓辺に近寄って、読んだ。

「ホーエン・フィーツ　一月二十日

親愛なるレーヴィーン、

先週のホーエン・フィーツの出来事はレナーテがおまえに知らせた。おまえの折り返しの返事で、おまえが災難を、とにかく災難に違いないものであるが、我々皆と同じようにこれを同じ感懐で見ていることが分かった。農舎の焼け落ちた納屋と、領主の館の灰となった翼部分は喜ばしい眺めではない。秩序ある眺めとはとても言えない。しかし我々の生きている時代はそもそも秩序ある時代だろうか。たから火事場は他のすべての箇所と似合っている。この件は以上。これよりもっと気がかりなことがある。

我らの組織化は終わった。私はドロッセルシュタインとほぼ毎日会っている。彼はその保守的性格故に私が予期していた以上に、熱意を見せている。私が和解し始めているバメも同様だ。バメは火と炎と化して、侮辱するようなシニシズムと、これを今や彼は手放さないが、滅私奉公と言うしかない驚くべき志操の折々の高揚とを、二つ対にして見せている。彼に次いでオテグラーヴェンが最も活動的だ。彼は市民の間で大きな影響力を持っている。一級生[高校三年生]や二級生のクラスの生徒達は彼の言葉をことごとく信じている。普段彼に視られる衒学的調子は抑制されているか、あるいはその調子は自身に対する強力な信仰に根ざしているので、彼の登場の効果と言えるほどの支えにすらなっている。

私が、我らの組織化は終わったと言っているのは、単にバルニムとレブースに限定しての話しだ。他の場所ではまだ多くのことが欠けている。特にその地形上重要な、オーダー側の向こう側の村々で欠けている。こちら側の我々は国民軍旅団を形成した。四個大隊で、我々の両圏内の多くの町の名に従って名付けられている。ベルナウ、フライエンヴァルデ、ミュンヘベルク、それにレブースだ。このレブース大隊の構成はおまえの興味を最もそそるだろう。それ故ここに記す。

レブース国民軍大隊

1. ホーエン・ツィエーザル連隊。ドロッセルシュタイン伯爵。
2. アルト・メーデヴィッツ・プロッツハーゲン連隊。フォン・ルッツェ大尉。
3. ホーエン・フィーツ連隊。フォン・フィッツェヴィッツ少佐。
4. ノイ・リーツェン・ドルゲリーン連隊。（欠員）

おまえがここに認めるであろう原理に従って、 ー　バメが旅団の司令権を引き受けた、

ー　我々はいつでも対処する。将校がまだ不足している。上層からの風でのみ帆走する者達の数が我々の許でも多いからだ。それでも十日から十二日したら稼働しなくてはならない、大方遅れを取っている所でも発動だ。

これはある意味遅すぎるものだ。私がクリスマスの日々にすでに予定していたことは、今日では手遅れであろうだけに尚更だ。オテグラーヴェンがフランクフルトから、クラハがキュストリーンに行ってそちらから、書いていることによれば、フランスの将軍達は皆、無事にオーダー川を越えている。黒テンの毛皮を着て、奉公熱心な者達が呈上申し上げるいつも新たな馬を繋いで、彼らに範を示したナポレオン皇帝に従っている。そのことから生ずる弱点は計り知れない。将軍達を片付けること、あれこれ画策して（この計画を私は手放さない）、このことは軍の残りを片付けること以上にまさに大事なことになった。多くのことが等閑にされ、致命的損失となっている。待機という我らの政策のせいだ。

しかしまさにこの待機のお蔭で、多くのことが等閑にされたけれども、同様に多くのことから我々は守られた。それで結局良い結果と悪い結果を天秤にかけるとなると、天秤は良い方向に傾くことは有り得るし、　ー　躊躇わずに白状すると、　ー　多分そうなりそうでさえある。三週間前は国王抜きでなされなければならないと思っていた。今、私は、

ー　事象のこの変遷に祝福あれ、　ー　国王と共になされるであろうと分かっている。古式のプロイセンの伝統に則った戦争を行えるであろうわけだ。私は、内乱でも動ずることはないだろう、まずは国を救い、それから王座を救うのだから。しかし我らのマルク地方の諺にもある通り、より良いものはより良い。

そう、レーヴィーン、事象の変遷だ。私がもはや信ずる勇気のなかったものだ。それが来ている。今すぐにもこの変遷は知らされるであろう。おまえがこの行を読むとき、目指されていた歩みの第一歩がすでになされていることは容易に有り得ることだ。

聞きなさい。宮廷はポツダムを去って、ブレスラウへ移る。この歩みはおまえが思う以上に大事なものだ。この歩みに踏み切らせたものについては、ただ噂が飛び交っているだけである。つまりナポレオンが国王を捕まえて、人質として、国の和平交渉の担保として、フランス人要塞に拉致しようと考えていたというものだ。この噂にどれほどの真実が、あるいは嘘があるか、私は調べていない。国王がこの噂を信じたということで十分だ。今日行われる皇太子の堅信礼の後、直接出発されるであろう。五つの兵站地を経由する。近衛連隊がこの移動の伴をする、あるいは警護する。ブレスラウ、シュレージエンは良い選択だ。この地方はフランス人占領のない唯一の地だ。それに我々が当てにしているオーストリアが近い。

更に聞きなさい。

二十六日が国王のブレスラウ到着と確定している。一週間後に国王は国民に武器を取るよう布告することだろう。この布告の原案を私は自分の手で確かめた。今布告されなければならない言葉が語られている。ただ欠けているものが一つある。敵が明示されていない。しかし、有り難や、この明示は必要ない。見せかけ上非難されたヨルクの、しかし今や私が承知している、すべての面で了承されたこのヨルクの降伏、その上多分明日きっと行われる宮廷の出発、当てにならない同盟者の気まぐれから逃れるためのこの出発、こうしたこと、誰を相手にしているか、疑念を抱かせない。

そして空虚な大気の中にこの布告がなされることはなかろう。私は我々の国民を知っている。国民は存続の価値のある民であり、自分の存続のために立ち上がることだろう。これがこの国民の出来るすべてだ。誰も自分自身以上のものを有しない。我々は多くの欠点がある、しかし多くの長所もある。白黒の対立が見られるのはただ我らの色[プロイセンの旗]の中だけではない。国全体に対するセンスは、偉大な国王フリードリヒの時代以来、我々の中で目覚めたものである。この全体が消えてしまったら、自身の生存への意欲も消えてしまう。クーナスドルフ近郊の戦いの後、我らのホーエン・フィーツ教会で出血死した昔の少佐を思い出すがいい。彼の血痕は彼のことを今でも語っている。彼は、プロイセンの最後の時が来たと思ったのだ。『皆聞け、私は死ぬつもりだ』と彼を横にしたとき、彼は叫んだ。そして自分の包帯を外したのだ。

我々の許ではこのような者が多く生きている。

ところで、レーヴィーンよ、我々は正規の戦争をすることになろう、そして正規の旗を

持つことになろう。いいか、正規の、プロイセンの、国王の下の旗だ。おまえも私に満足することだろう。おまえが私の領域に踏み込むよりも、それ以上に私がおまえの領域に踏み込んだようだな。返事をおくれ。もっと良いのは、こちらに来ることだ。皆がよろしくとのこと。ショルレンマーに、レナーテ、マリー。ヘクトーでさえ、私を大きく見つめ、くんくん鳴いて、挨拶したがっているように見える。

いつもの汝の老父　B.v.V.」。

第十四章
小さなサークル

ラダリンスキー家の招待は六時となっていた。老枢密顧問官は、避けることが出来るときには、遅い会合を好んでいなかった。それでレーヴィーンにとっては、準備しなければ遅れる時になっていた。準備した。しかし上機嫌とはいかなかった。再三数時間前からどうしようもなく抑えがたい疑問、カティンカは二番目の、とても謎めいた招待状で何を意図していたのかの疑問に襲われ、再三次の答えを得ていた。「コケットな戯れだ。彼女は私を必要としている。私は彼女にとって価値がないし、同時に価値がある。彼女は私を紐に結んだ小鳥のように得ていて、紐を手放さないように遊んでいるのだ」。これが彼の考察の基調音で、これにほんのわずかに希望の声が混じっていた。

聖母マリア教会の塔の鐘が丁度七時を告げ、すぐその直後、ニコライ教会の塔の鐘が告げたとき、我らの友はラダリンスキーの家へ入った。

一行はすでに集まっていた。それも我々に馴染みの小さなレディーの部屋で、この部屋には今日は、ぼんやりと赤い吊りランプの代わりに、大きな明るい無影燈が燃えていた。かの舞踏会の夜よりもすべてが陽気に輝いていた。かの晩には出来事としては、マズルカと降伏の知らせの二つの大きなことしかなかったのであった。

カティンカは、レーヴィーンが入って来たとき、美しいマトゥーシュカと親密にひそひそ話しをしていたけれども、いつものように一時間遅れて入って来るレーヴィーンに屈託なくまた親しげに、詩人達の「遅刻」について嘲笑するのを止めず、レーヴィーンがトゥーバルとブニンスキー、ユルガス、それに老ラダリンスキーから形成された半円の中に割り込んで、椅子に着席する間に、遅刻は「忘れっぽさ」の連れ合いだからこそそもそも不思議なことではないと、言った。「忘れっぽさ」の言葉を彼女は強調したばかりでなく、格別な親しみを込めていて、あたかもこの言葉で、彼の「忘れっぽさ」について軽く咎めて結んだ彼女の午前の文の全内容をその通りでしょうと言いたいかのようであった。彼の方はそれに対し何の反応もしなかった。この戯れが面白くなかったか、あるいはこの瞬間、今日もまたフォン・ビショフスヴェルダー令嬢の隣に座っている典侍長妃殿下の、大きな両水晶眼鏡が鋭く自分に向けられたのを感じたからである。彼が遅刻して入って来て、始まったばかりの講話を中断したが故に二重に先鋭で、意地悪であった。出来るものならば、また彼女を宥めたい一心で、彼はまず掛けたばかりの椅子から起き上がって、若干もつれた言葉で詫びを言おうとした。しかし老妃殿下は、明らかに意図的物音を立てて、柄付き眼鏡を畳み、高慢に微笑して、黙って自重するのがはるかに礼にかなっているであろうと言いたげであって、それからビショフスヴェルダーに向かって頑固にその話しかけを遮っ

て、自分の報告をしわがれた声で続けた。「繰り返しますが、ラダリンスキーさん、陛下は明日早朝にポツダムを離れることでしょう。次の夜の宿営地はベースコーになります。評判よりも良い町です。そこにはかつての僧正の宮殿があります。近衛兵が国王の伴をします。ティッペルスキルヒがケッセルの代わりに司令権を引き受けます。ケッセルはポツダムに留まります。陛下は二十六日にブレスラウに到着する予定です」。

「たった今ホーエン・フィーツの私の父から同じ内容の知らせを受け取りました」と当惑の中で重ねて失態をおかしながらレーヴィーンは述べて、　ー　目配せでは効果がないと思われて、　ー　今や老伯爵夫人妃殿下の側からの直接の返事を甘受することになった。

「まだ確証の必要のある」と妃殿下は刺すように答えた、「国王陛下についての情報を流すのはプロイセンの典侍長達の流儀ではありません。でも貴方の御父上が立派に情報を得ているのを目にするのは嬉しいことです。次に会う機会の折には私からよろしくとお伝えください。彼の義母、フォン・デュムラン将軍夫人は私の青春の友でしたから」。

レーヴィーンはとても高慢さの窺われるこうした言葉にどう対応したものか分からずにいたが、しかしまた微かな関心の色合いが発せられていて、その中のすべての不機嫌を無視するのが最良と見なして、上品に老伯爵夫人にお辞儀した。伯爵夫人は重々しく続けた。

「オージュローは、ある明瞭な場合、主に反逆の場合ですが、国王の身柄を確保するよう厳命を受けているのです。陛下は三週間以上前から、この厳命のことは御承知で、もっと以前にもこの窮地から脱出されたことでしょうが、差し迫っている皇太子の堅信礼まで待たれたのです。これは私ども皆が知っていますように、昨日現実に執り行われました。ちなみに皇太子陛下におかれては、枢密顧問官様、貴方は御出席されましたが、お見逃しになったかもしれません、この極めて重要な日の記念に陛下の御手ずから、立派な指輪を頂いたのです」。

「ゴモットモ」とブニンスキーは述べた。

「ゴモットモ」と老典侍長は問い質すように延ばして繰り返した。伯爵の挿入した言葉の嘲笑的調子を聞き逃していなかった。「何故ゴモットモなのです。ブニンスキー伯爵」。

「指輪は」とブニンスキーは答えた、「永遠の、破られることのない忠誠の印だからです。この国では祭典は、殊に教会の祭典ではこの印なしには考えられないでしょう」。

枢密顧問官は席で左右に落ち着かなかった。彼にとって、自分の家で、その上宮廷の二人のレディーの前で、発せられるとき真面目ではあるが、その皮肉な意味は誰にとっても明瞭な言葉を耳にすることは、耐え難いほどに痛々しいことであった。それ故彼は伯爵の方を向いて、明らかに伯爵に対し、会話の内容を変えなくても、少なくともその調子を変えるよう促そうと努めて見つめた。しかしブニンスキーはこの努力を無視して、同じ調子で続けた。「これはドイツ国民の独自性の一つに数えられます。常に厳かに義務忠誠の誓いがなされます。それに対しふさわしい象徴が与えられます。皇太子陛下が国王の、つまり父親の御手ずから頂いた貴重な指輪に、更に忠誠を守るよう直の要請が、刻み込まれた格言、あるいは聖書の言葉の形で添えられていなかったら、私には驚きだと言ってよろしいでしょう。例えば『死に至るまで忠実であれ』とか類似な風に」。

老伯爵夫人は両唇を閉じ合わせた。どのように返事すべきか揺れていることが明らかに見てとれた。しかし宥和の態度の方に素早く決心して、強いて機嫌良く言った。「伯爵、良く指輪のことを御存じと拝察致します。霊感によるものならば、貴方にも私どもにもお

めでとうです。勿論内側の縁に銘があります。『ヨハネ黙示録、第二章、第十節』[死に至るまで忠実であれ]です。この点ではまさに貴方は正しい。しかしこの堅信礼の指輪が宮廷の慣習とか国の慣習であるかという点では正しくありません。その逆です。これはこの種の最初の出来事です」。

「かくて慣習となりましょう。立派な例が国民の忠誠の感覚の中で実り豊かな土壌となっていつも見られることでしょう」。

ブニンスキーの止まない嘲弄は、結局高慢で同時に激しやすい典侍長のすべての平和的決意を、その逆へと大方反転させかねないと思われていたこの瞬間、カティンカが、それまで美しいマトゥーシュカと続けていた会話を中断して、二つの床几を、自分用と話し相手のマトゥーシュカのために、半円の中に、レーヴィーンとブニンスキーの間に押し込んで来た。

「伯爵、何という神聖冒瀆です」とカティンカはブニンスキーに向かって言った、「貴方の言葉の調子を裁判にかけるとしたら、貴方は指輪を世界史で無用な代物と見なしたがっていると訴えられますよ。この点貴方は間違っています。指輪なしでは何も生じません。そうでしょう、フォン・ユルガス様」。

「ゴモットモ」とユルガスは言った。ほとんど諍いの林檎となったこの言葉を繰り返しても、そのことで生ずる反撥には少しも臆していなかった、「カティンカ嬢に賛成します。指輪なしでは何も生じません。指輪を巡って、人生、伝説、歴史ではすべてが動いています。私にとっては一番の好みはポリュクラテスの指輪です。幸運な人々を評価しているからです。[ポリュクラテスは不幸を避けるために、大事な指輪を海に棄てた。ある日漁師の魚からその指輪が戻ってきた。やがて不幸になった]。それでそのバラードがあるわけです[シラー作]。指輪の助けを借りて、僧正は教会と、ヴェネツィア総督は海と、ヘンリー八世はその六人の妻と、この天才的な賭博者は[カルタの]六倍儲けと結婚しました。ちなみに彼の六個の結婚指輪の収集展示は格別の考察に導くに違いないことでしょう」。

「このオーガー王[童話での人食い巨人]の話しはやめて頂戴。この国王は、無実な女性は自然死して良いということを忘れていたように見えますから」。

「でもアン・ブーリン[ヘンリー八世の妻の一人（1507-36)]は、お嬢様、罪を認めました」。

「まあ、ひどい、ユルガス。罪を認める女性がいるなんて思っていらしたのですか。もっと真面目にヘンリー八世を弁護なさればいいのに。そしたらもっと女性に優しい方と思ったことでしょう。ヘンリー八世の六個の結婚指輪よりももっと良い指輪についてお話しください」。

「それではお話しできるのはただプットカマー家[ポンメルン地方の名家、ビスマルクの妻ゆかり]の三個の指輪についてでしょう」。

「御冗談を。チューダー王朝からプットカマー家ですか。少し飛躍ですね。でも興味がわきました。どういうことです。陽気な話しでなくちゃいけませんよ」。

「どうかな。この話しは始まるとすぐに、この三つの指輪は二個になってしまうのです。そしてこの二個がまた消えてしまう」。

「まあ。面白い始まりですね。若干幽霊風。でもまだ早いから。続けて下さいな」。

「それでは分かりました。つまり三個の指輪が、小鬼達かあるいは『小人達』あるいは

黄泉の人々からプットカマー家の人々に贈られました。長い長い昔、丁度ポンメルンが出来上がった頃です[1100 年頃]」。

「いつだったの」。

「マルク地方が出来上がってから[931 年、ハインリヒ一世]百年経った頃でしょうか。この違いは私の郷土愛故にご容赦頂かなければなりません。それでプットカマー家では、小鬼達に命じられたように、彼らの三個の指輪を守り、大事にして来ました。そうすると家には幸せと恵みがもたらされるというのですから。実際家には恵みがあって、主に子供達に恵まれましたが、突然どうしてか分かりませんが、一個の指輪がなくなって、恵みも減少しました」。

「あらー」とトゥーバルは言った。

「人々は『あらー』と言い、溜め息を付きました」とユルガスは続けた、「しかしプットカマー家では恵みを断念したくなかったのです。安全に行こうと思ったのですね。それでその人々の中の最も豊かな者が立派な宮殿を建てて、中に塔を造りました。塔では壁が最も厚くなっていて、そこに二個の残っていた指輪を埋め込んだのです。指輪はまだそこにあって、自らも安泰で、家も安泰なわけです」。

それまで強張って､動かずにソファーに座っていたフォン・ビショフスヴェルダー嬢は、ユルガスが話し出すと、次第に身を乗り出して、賛同して顎を首に押し込んだ。今や彼女が言葉を発した。「私どももそのような指輪を持っていました」と彼女は言った、「言い伝えによると家の幸福を築いてくれることになっていました」。

「多分築き終わったのでしょう」と老妃殿下は遮った、「それは思うに、貴女の父上殿[一八〇三年逝去]の霊の指輪で、生きている者達を眠らせ、死んだ者達を目覚めさせたのでしょう」[指輪の色が褪せて、死期を悟った]。

「確かに」とビショフスヴェルダー嬢は答えた。彼女はこの嘲笑で、これまでの心酔が消えて行くのを感じた、「確かに、妃殿下。この死者達の中に全家族が含まれていて、父の指輪なしにはずっと存続しなかったことになったことでしょう。感謝もドイツ人の徳操ではありませんか、ブニンスキー伯爵」。

ブニンスキーは思いがけない面から自分の異端ぶりが支援されているのを見て、若干びっくりして、ビショフスヴェルダー嬢に向かってお辞儀をした。一方枢密顧問官は前門の虎が済んだかと思うと後門の狼が近付いて来る不安な思いに駆られて、レーヴィーンに向かって問いかけた。「レーヴィーン、ブレードーの継承指輪は何だったかな。私にクリスマス前に話してくれた代々の指輪だ。ただ印象だけが残っている。もう一度聞きたいものだ。レアーレ妃殿下は許されることだろう。指輪について弁護したカティンカは、自分のテーマが若干見事なものになるのを聞いたら、感謝すると思うぞ」。

「確かに」とカティンカは述べた、「私どもの寡黙な友がそもそも会話に参加して下さいましたら、感謝申し上げます。指輪とその世界史的ミッションについて擁護して下さいましたら、二重に感謝申し上げます。餅は餅屋ですから。指輪と従兄弟のレーヴィーンほどぴったりのものを知りません。とりわけ結婚[忠誠]指輪の件でしたら。この両者には静かな、生来の盟約があります。それについては童話が書けそう。いや私でも、とても散文的な私だけど、書けそう。私は結婚指輪を、小さな丸い、真ん中がくり抜かれた王様と考えるでしょう。この王様がすべての善良な人々を、正直な人々、有徳な人々を支配してい

るのです。その王座の段に筆頭大臣が立っているのです。最も正直な、有徳な者として、その名はレーヴィーンと言います」。

レーヴィーンは真っ青になったり真っ赤になったりした。しかし素早く気を取り直して、平静に言った。「このような性格描写の後では、勿論、私に割り振られました要請を断ることはできないでしょう。ファラオの時代以来[ヨセフのこと、創世記 41]、徳操の大臣[創世記 39]の使命、特権の一つに、夢を解釈し、物語を語るというものがあります以上、尚更できないことです。それでは始めましょう。

つまり本当に代々の指輪というものがあって、幅広くて、印付けられていました。そしてフォン・ブレードーの若い夫人が左手の薬指に嵌めていました。夫はヨーズア・フォン・ブレードーで、レニーンの騎兵隊長、管区長でした。冬は若い二人は、小さなペルレベルクの駐屯地で過ごしていましたが、五月になると、義務上レニーンへやって来て、昔の修道院時代からまだ残っている広大な唯一の僧院長の家を管区長の住まいとして使い、同時に夏を楽しんだのです。それは幸せな毎週でした。彼らはプレッソーやゲッティン、レッカーネへ行って、様々なロホー家の人々に会い、またグロース・クロイツへ行って、老フォン・アルンシュテット殿に会いました。しかし二人が最も好んだのは、いつも美しいクロスター湖畔を散歩することでした。殊にブラックベリーとムラサキハシバミの間の道を通って、密に草花の花咲く平原を越えて行くのを好みました」。

「素敵ね」とカティンカが言った、「一緒に遠出したかったわ」。

「ある夕べ」とレーヴィーンは続けた、「二人はまた散歩をしました。丁度野バラが花咲いていたので、若い夫人は、一つ野バラを摘もうという気になりました。それで夫人はバラをより容易に摘めるように、周りのムラサキハシバミの木を脇に押し退けました。すると夫人が左手をバラに差し伸べたその瞬間、ハシバミの枝の最も丈夫な枝が跳ね返ってきて、夫人の指輪を指から外しました。夫人は指輪が空中に黄金色の弧を描くのを見、それから指輪が生垣のすぐ背後の平原一帯に落ちるのを見ました。小さな叫び声が彼女の唇に生じました。それから二人は入念に生垣に分け入って、背を屈め、探し始めました。すでに三日月が静かな夕べの空に懸かっても、二人は捜しました。二人は早朝も捜しました。そして正午になりました。見つかりません。指輪はなくなってしまいました。カティンカ、一緒に遠出したかったのでしょう。ひょっとしたらあなたの手が幸運に指輪を見つけたかもしれませんよ」。

「話しを逸らさないで」とカティンカは答えた、「お話し、お話し」。

「指輪と共に若い二人の幸せも消えてしまいました。ゆっくりと次第に消えたのではなく、直後に消えたのです。『もっと用心すればよかったのに』と亭主は非難の調子で言い、この言葉と共に幸せは消えたのです。最初の非難の言葉が最初の諍いとなり、家の平穏を乱す一切のものが一年の間に入って来ました。病気に侮辱、不作に嫉妬です」。

「嫉妬も、あら嫌だ。主人公達を勝手に変えて、聞き手の好感をふいにしてはいけませんよ」。

「ただ好感を新たに得るためです。もっとも後年になってからようやくとなります」。

「それではその中間は飛ばして」。

「私もそうしようと思っていました。銀婚式がようやく近付いて来ました。夙に服務を終えていて、レニーンのひっそりした地での管区長職に引退していて、ヨーズア・フォン

・ブレードーは、それ以前同様にずっと家庭内に見られた幾多の不満にもかかわらず、この銀婚式を祝いたいと考えました。何と言っても二十五年間ですから。それ故夫は大きな一枚の紙を広げて、この式に招待する予定の人々の名前を書きました。その時、フォン・ブレードー夫人は、四十五歳になっていたけれども、まだ変わらず可愛い立派な女性でしたが、彼の肩越しに覗いて、きっぱりとこう要求しました。老アルンシュテットは、この前のポツダムの舞踏会で失礼な振る舞いをしたから、外すべきだ、と。

一騒動が不可避に見えました。その時、大いに興奮して家政婦が部屋に入って来て、言いました。『旦那様、ありましたよ。ホルツェンドルフェン婆さんが見つけたのです』。そう言って彼女は大きな早生じゃがいもを彼の前に差し出しました。じゃがいもは根の生長のとき、その先端を黄金の代々の指輪に入れて育っていたのでした。それでまた指輪が戻って来たのです。恵み深い母なる自然が指輪を生み出しました。ヨーズア・フォン・ブレードーと旧姓フォン・リベックはまた良い日が巡って来るであろうと分かりました。彼は夫人に接吻をして、老アルンシュテットを反論せずに消しました。そして一週間して銀婚式が本当に祝われたとき、二人は祭壇の前に二度目として進み、レニーンの老牧師クロキジウスが、当時はまだ中年でしたが、格言『神の愛でし者には、なべて丸く収まる』[ローマの信徒への手紙 8,28]について素晴らしい演説を行いました。そして彼の演説がようやく終わると、彼は手短に話すことが出来なかったからですが、彼は銀婚式の花嫁の手を取って、指輪を四本目の指に嵌めました。この指から指輪が邪悪なハシバミの枝で飛ばされて、それで不和の長い中間期間が生じたのでした。この祝典の後日、二人はこの宝をまた失いたくなかったので、ベルリンから彫版師を呼び寄せて、指輪の喪失の日と再発見の日を､それに牧師クロキジウスが説教して美しい聖書の箇所を彫って貰うことにしました。二人は亡くなっていなければ、今日も幸せに暮らしていることでしょう」。

伯爵夫人妃殿下は、話しの間次第に高慢な姿勢を外して、今やレーヴィーンに、自分の青春の友情の封印のように柄付き眼鏡の先で軽くレーヴィーンの手を打った。

カティンカは、自分が女王になったら、彼を夢の解釈者として、第一の語り部として自分の宮廷に引き入れようと約束した。ただビショフスヴェルダー嬢は、このうっとりとする指輪がまさにじゃがいもに生えたのはいかがなものか、「詩が台無しだわ」と述べて、レーヴィーンは即座に同意した。彼はこの美学的見解を啓蒙することは不可能と思ったからである。

老枢密顧問官は、彼の本性にふさわしく、副次的なことに言及し、主に代々の指輪はどのブレードー家の家系に属するものか知りたがっていた。それからレニーンに及んで、その予言に触れた[Seidel 作、1693 年逝去とされる]。その最初の行と最後の行をラテン語の原文で諳んじていた。そして溜め息を付いて結んだ、この丸十七年間、この古い文化の地、同時に多くの辺境伯や選帝侯の埋葬の地に訪問が叶わないでいる、と。

「叶わないことないよ」とトゥーバルは遮った。そして老ラダリンスキーが返答する前に、カティンカが極めて明確に言った。

「遠出しましょう。誰が旅の世話係になります。トゥーバル、だめね。レーヴィーン、倍だめ。でも貴方なら、フォン・ユルガス殿。教授様と外交官補とを区別できないようでは、私には人を見る目がないでしょう、貴方は生まれながらの旅の世話係です」。

「抗弁したら、早速その才なしでしょうな」。

「それではやって頂けますか」。
「いいよ」。
「ではいつ」。
「火曜日までは、だめだな。ポツダムで馬の交替としよう。正午に出発したら、都合がいい。待ち合わせは、シェーネベルク。『黒鷲』亭、十二時丁度だ。ではまた」。

第十五章
レニーン

約束の火曜日となった。しかし同じような約束の際に再三生ずる事態が生じないわけに行かなかった。半数はその間に別な事態に対処しなければならなくなった。故皇太后付き侍女を含めて伯爵夫人妃殿下ばかりでなく、老枢密顧問官も結局参加を取りやめることになった。顧問官の、現場のレニーンの予言のラテン語の行を引用して見せるという衒学的ロマン主義的契機が、この遠出の本来の推進力となったのであるが。しかし去って行く者達の代わりに別の者達が寄って来た。そして新鮮な、月曜日から火曜日にかけての夜降った雪のお蔭で、速やかな華麗な出発が約束された。というのは遠出を橇ですることに決まったからである。微かな東風が吹いて、太陽が輝き、天は青く、雲一つなく、一つの鐘のようであった。

丁度シェーネベルクの塔が十二時を打ったとき、四台の橇が、ユルガスが待ち合わせに指定した「黒鷲」亭の前に滑って来た。そこに座っている者達はラダリンスキー家の舞踏会以来馴染みの者達で、マトゥーシュカ伯爵、ゼーエル・トス伯爵、ジェロティーン伯爵で、三人は皆若い夫人と一緒であった。ただブニンスキーはいなかった。その代わりにトゥーバルが橇の同伴者として乗り込み、カティンカの横に座っていた。一分遅れて、五台目の橇が来た。若干大きめで、借用の橇らしくかなり不細工であった。そこにはレーヴィーンと、フォン・ヒルシュフェルト、ブムケが座っていた。ユルガスは馬交替の仕事のせいで、すでに三時間前にポツダムへ先に出発していた。

素早く挨拶がなされた。日が短いので、瞬刻を惜しむ必要があったからである。トゥーバルが先頭となった。それから三組の若いカップルが続いた。一方「若衆の橇」は、こう伯爵夫人達は最後に侵入して来た橇を上機嫌で命名していたが、最後尾となった。この上機嫌に直に皆が加わって、馬は泡を後ろへ飛ばし、鈴や小鐘が鳴って、低く垂れた小枝をかすめると、雪が空中に舞って、きらきらした水晶となって、マフや熊皮の幌に落ちた。その際どこでもお喋りで、最後尾の若衆の橇でも同じであった。

「ブニンスキーは一体どうしたのだ」とレーヴィーンは尋ねた、「とても行きたそうにしていたのに」。

「貴方は聞いていないのか」とブムケが答えた、「ユルガスが遠出への参加を見送って欲しいと頼んだのだ」。

「どうしてまたそんなことを。少なくとも私だったらそんな頼み事は出来そうにないな」。

ブムケは笑った。「ユルガスのことは分かっているだろう。賭けてもいいが、目の前の疲れたカラスが羽を広げるよりも奴さんにとっては簡単なことだったろうよ。奴は古い原理、『正直は最良の政治』に従ってやっていて、伯爵に率直に、彼がいたらやりにくいこ

とになると言ったのだ。つまり思うに何か仕掛けを、プロイセン的な愛国的なことを考えているんだろう。奴はそんなことが好きだからなあ。ブニンスキーが何と答えたかは知らない。でも確かなことは、彼らの仲が悪くなったわけではないということだ。驚くことではない。ユルガスは無邪気だし、伯爵は高貴な性質だ。伯爵の偏見でさえ、侮辱的なものではない。伯爵は我々を憎んでいるが、我々の全体を憎んでいるのであって、個々人ではない。ヒルシュフェルトよ、貴方がスペインについて読んだすべてをとても好意的に受け入れていたよなあ。彼には料簡の狭いところがない」。

ヒルシュフェルトは同意して頷いた。そしてこの会話が紡がれて、これに引き続き、ラダリンスキー家でのこの前の晩のこと、高慢な老妃殿下と強張った儀式ばったビショフスヴェルダー嬢と、最後にやはりこの両者の間での諍いが話題になっている間に、我らの友人達はシュテーグリッツ公園を過ぎて行った。ここを四人のマズルカのカップル達のより軽快なより上品な造りの橇はしばらく前にもう出ていたのであった。レーヴィーンはもっとスピードを上げて追い付くよう迫った。しかし差は縮まらず、道で曲がり角に来るたびに、後の五番目の橇は四台の先を飛んで行く橇の側面とレディー達の青いヴェールと風を受けて膨らむ白い雪の幌を見ることになった。

ツェーレンドルフの張り出された家々の側を通り過ぎて、飛びようにしてヴァン湖のシュティミング旅館に向かって行った。レーヴィーンは、手で左を指しながら、今や囲いをされて、ただ四本のポプラでそれと分かる箇所を示した。一年前からハインリヒ・フォン・クライスト[1777-1811]の墓が築かれている所である。当時すでにスペインにいたヒルシュフェルトは、この悲しい出来事については何も知らなかった。それで同行者達は彼に、戦友たる者[クライスト]の最後の運命、生涯と死について語った。クライストとは、二人がまだ同じ駐屯地にいたら、少なくとも表面的に知り合えた筈であった。こう語りながら会話はやがて彼の文学へ移って、『ハイルブロンの少女ケートヘン』[1810]の性格、とりわけ夢遊病者のドラマ的合理性あるいは非合理性が少しも確定されないうちに、すでに橇は狭い隘路の中を滑って行った。その隘路はコールハーゼンブリュック近郊の密に通りに迫って来ている唐檜の森と別な側のグリープニッツ湖の葦とで形成されているものであった。一分後には、ノヴァヴェースの雪の積もった織工の家々が、冬の墓塚より左程大きくないものであったが、両側に並んでいて、そして今やブラウハウスベルク[醸造所丘]の麓を、それから宮殿の列柱の側を通り過ぎ、静かなポツダムに入って行った。今日はいつもより静かであった。宮廷と近衛兵が、老妃殿下がこの前のラダリンスキー家の夕べで予告していたように、半週間前から去っていたからである。イエーガー門[猟師門]でユルガスは止まっていた。十歩更に脇へ行ったら、馬交替があって、すべての紳士淑女が旅の世話係に挨拶し、二，三人の郵便局従者が馬を替え、馬の首革と鈴とがまた付けられた後、更に滞在することなく、ますますテンポを上げて、ハーフェルラントに侵入して行った。目的地には日没前に着かなければならなかったからである。

今や二時となっていた。コミューン[従者部屋 1763-69 建設]と新宮殿のドームの屋根が午後の日差しの中、輝いていて、すぐその背後にゴルムの湿地が拡がっていた。アイヘ村は教会の塔と共にその中に沈んでいるように見えた。さてその村も背にすることになって、一面の氷や雪の砂漠からは、これはいつもは湖面状に流れ込んでいるハーフェル川が変化して生じているものであるが、わずかに、二，三ダースの小舟のマストの先だけが伸

びていた。小舟は凍結のために航行できず、氷の中に越冬を強いられていた。それからヴェルダーの町となった。わずかに煙突の煙でそれと分かったが、それは島の大きな醸造所に立っているものであった。そして今や低いが、しかし急峻な丘の側を通り過ぎて、ただ山腹にカラスと雪とを目にしながら、橇は次の村々を目指して行った。

会話は停滞し、寡黙になった。皆がただ一つのことだけを考えていた。目的地である。ユルガスが先導した。グロース・クロイツを通り過ぎて、道は、今や左手の方に大きなレニーンの樅の森、樫の森の中へ曲がり始めて、鋭い目と確かな手の両方を要求することになったからである。

まずは樅であった。何と森の静けさは皆をさわやかな気分にさせたことか。風は黙していて、秘かに話しても、言葉はすべて声高に反響した。温かい樹脂の香りが大気にあって、快適さの感情を高めた。道をあちこち横切って、猪が雪の中をかき回した痕跡があった。小枝が揺れて、ヨーロッパコマドリが舞い上がった。森の奥から啄木鳥の声が聞こえた。さて、大きな林間の空き地が見られて、その向かい側には広葉樹が始まっていたが、しかしまずはまだ樅が混じっていた。太陽が木々の背後で燃えていた。そしてその明かりが落ちるにつれ、樫の褐色の葉は黄金色に、銅色に微光を発した。一方黒い樅の梢は鋭い線の影絵を夕方の漂う光輝の中に描いていた。皆が光景の美しさに心奪われていた。レーヴィーンははっきりと、小さな手が次々と温かいマフから引き出され、影と光が魔術的に混じり合っている森の箇所を指し示すのを見ていた。

ブムケは、勿論コペンハーゲン由来で、これと同じ夕焼けを再現しているクロード・ロラン[1600-82]のことを思い描いて、まさに美術的な考察に移ろうとしていた。そのとき、森が、すぐその前までは果てしなく思えていたのに、突然開けて、若干の数の点在する建物がかなりはっきりと見えてきた。そしてまだあれらの旅行者達が事態を把握して、驚きを表明しないうちに、すでに彼らは目的地レニーンのクロスター教会に着いた。

偶然かそれともユルガスが到着の時間を前もって告げていたからか、いずれにせよ大きな円形アーチの正面玄関の横にある脇ドアから、彼らの方に、ノックしたり待ったりする必要なしに、長く白い髪の、小柄な痩せた男がやって来た。レニーンの老寺男で、ホーエン・フィーツの同僚、イエーゼリヒ・クーバルケよりもただ二歳若いだけであった。彼は帽子を取って、まず近くにいるレディー達に挨拶し、ユルガスと二，三言葉を交わし、それからユルガスが頼んだからか、あるいは彼自身できるだけ厳かな案内を望んでいたからか、重たい金具の付いた中央ドアを開けた。この中央ドアの中に、隙間風が吹いて来たけれども、訪問客が皆入るまで、彼は立ち続けていた。

夕方の輝きはまだ西側の窓に見られた。すべてにまた生命の色合いを帯びさせる赤い微光が、花嫁の冠に注がれていた。この冠は、干涸らびていて、長い、色褪せたリボンと共に向かい側にある教会壁に掛かっていた。考えられる限り最良の時間であった。それでも皆ががっかりしていたことは誰も見逃さなかったであろう、殊にレディー達がそうであった。彼女達はもっと期待していた。

「色々な墓はどこにあるの」とマトゥーシュカは失望した者達の完全なる平静さで尋ねた。

「色々と複数形を要求なさってはいけません、恵み深い伯爵夫人」とユルガスは答えた。

ユルガスはこの伯爵夫人とカティンカとを一行の残りから分けて、自分がこの修道院を良く知っていたので、二人の若いレディーの特別案内を引き受けていた。「レニーンの墓塚は公的、非公的荒廃によって、一つの墓塚に限定されております。間もなく貴女等にご紹介の栄が叶います」。こう言って、高い内陣への段を上がって行った。そこには一人の僧侶が、石に刻まれて、墓塚に収まっていた。カティンカとマトゥーシュカ夫人が続いた。

「私は兵士を見るのかと思っていました」と伯爵夫人は言った。それから素早く訂正して言い添えた、「つまり戦士のことです。ユルガス、笑わないでください。辺境伯は戦士で、楯と鎖帷子と王冠を有していたと思われますからね。黙っていらっしゃる。駄目ですよ。案内者はいつでも説明してくださらなくては。いずれにせよ、これらの辺境伯達は何か頭に被っていたのでしょう。アスカニアの家系[マルク・ブランデンブルクの領主、1319年まで続いた]だったとか、老ラダリンスキーは確か仰有っていましたよ」。

「そうです、アスカニアの家系かあるいはアンハルトの家系[最初はアスカニアを名乗った]です」。

「そうじゃないでしょう。混乱させるおつもりですか。アスカニアの家系ならばアンハルトの家系ではなかったはずですよ。老デッサウ侯[Leopold Ⅰ. von Anhalt-Dessau (1676-1747)]、遊園地[ルストガルテン]に立っていて、大軍事パレードの際の長いトランペットのソロを叩き込んだ方、あの方がアンハルト家の一人でした。...でもこれは何」。こう言って、美しい伯爵夫人はその足先で木の切り株を突いた。切り株は、それ自体石のように固くて、床から一フィートほど突き出ていた。

「それはかの樫の木の遺物で、かれこれ何百年も前に、その正確な年数は煩わしいので止めますが、レニーンの修道院全体が出来たときのものです。この木の下で、この木がまだ木であって、切り株ではなかったとき、辺境伯オットーが、最初の辺境伯ですが、夢を見たのです。その夢がこれらの森の中での危険を告げました。辺境伯オットーはアルブレヒト熊公の息子です。この熊公については恵み深い伯爵夫人はお耳になさったことがあるかもしれません」。

「確かに、確かに。ハインリヒ獅子公[1129-80]、アルブレヒト熊公[1106-70]」。

「結構なことです。それでオットー辺境伯は邪悪な不吉な夢を見ました。すると自分の一族が、彼らもキリスト教徒のアスカニア人でしたが、その夢のことを聞くと、ヴェンド族に対する防御の砦を建てるよう迫ったのです」。

「ヴェンド族に対して。ヴェンド族て何」。

「ヴェンド族というのは、当時ここいらを住処としていた異教徒の民のことです」。

「分かったわ。それで辺境伯は何をしたの」。

「彼は答えたのです。『ヴェンド族に対する砦を築きたい。しかし我らの悪魔的敵対者を追い出すことにする砦は』、敵対者とはヴェンド族のことですが、『武器の騒音によるものではなく、聖なる歌声によるものとしよう』と。それで修道院を建てたのです。その修道院がレニーンと言いました」。

こうした会話の間に、彼らは歩みを進めて、教会の側廊まで来ていた。そこでは雑多な絵が、虫に食われて、半ば砕けた木の枠にあって、それでほとんど作品全部が落ちていた。これらの絵の中で最も大きな絵の前にカティンカは立ち止まっていて、マトゥーシュカの腕を取って、レーヴィーンに言った。レーヴィーンはその間別のグループから彼女らの側

に来ていた。「醜いわ。年の市の絵みたい」。

「そのようなものです。区画の分割さえも、レディー方がお気づきのように、判然と残っていません。勿論画家は単なる上方と下方の二分割で満足しています。上方のごちゃごちゃした残忍なものは、最初のレニーンの僧院長［Abt　Siebold、1190 没］の殺害で、ヴェンド族が殺したものです。情事の疑いを抱いたからです」。

「根も葉もないのにと思います」とカティンカは言った。

「指輪の王の筆頭徳操顧問官としての私の特性上、それに疑いを入れることはふさわしくないことでしょう。画家ももっと大目に見て欲しかったと思うばかりです」。

「ひょっとしたらすでにプロテスタントの時代からのものかもしれません」。

レーヴィーンはこの絵が生じたのは、純化された教義のせいではないとはっきりさせようと思って、まさにこの議論を始めようとしたとき、ユルガスが割り込んで来て、急ぐようにと言った。済まされるべきプログラムによれば、次の十分以内に、教会外部にある瓦礫の半分ばかりでなく、教会回廊とその回廊を含む昔からの建築物の残りも見学される必要があるとのことであった。

この大きな声で発せられたユルガスの警告は、レーヴィーンによって聞き取られたばかりでなく、皆が急いでこの警告に従うべく、出口に向かった。ただゼーエル・トス伯爵夫人とジェロティーン伯爵夫人は、殺害された僧院長の絵の側で、推測や陽気な嘲笑に余念がなく、残っていて、今や突然花嫁の冠と死者の冠の中に二人っきりになっていると気付いてびっくりした。それらの冠は入って来る隙間風の下、ざわざわ音を立て始めたのである。不気味になって二人は見回し、出口を探し、不安になって混乱し、すぐ出口の側に立っていたけれども、分からずにいた。ようやく寺男がやって来て、二人を外へ導いた。二人は自分達の不安を隠さず、彼が鍵をまた錠の中で回したとき、彼に親しげに頷いた。

外の瓦礫の下に、　一　この教会の後期ゴシック様式の半分は崩れていたが、　一　皆がまた集まっていた。しかし彼らはこの箇所に長く留まらなかった。彼らはただまさに残っている螺旋階段の塔の中を覗き込み、互いに控え壁の斜面の上に土よりは雪のせいで固定されているように見えたナナカマドの茂みを示し、それから方形の中庭に歩み寄った。中庭は、新旧の修道院の建物によって、一棚の薪と生垣によって囲まれていて、光輝と困窮の不思議に混じり合った光景となっていた。残っている荒石壁に沿って、これは内側に向けて一種の庇が付けられていたが、九柱戯場があって、その板敷きの溝には九柱戯の球が雪の中に埋め込まれたように置かれていた。この小屋の隅の一つに豆の蔓用棒が乱雑にまとめられていて、その右側の、薪が積み上げられている所では、聳える支柱の上に、二，三のメギの茂みがあって、それらの暗赤色の実は、近くのすでに黄色くなっているナナカマドの束を嘲笑しているように見えた。こうしたこと一切はただ迅速になされた。そして見るのに疲れて、しかし正餐に全く憧れて、ちなみにユルガスを知っている者達は皆それに揺るぎない信頼と希望とを抱いていて、今やカップルが幾組か九柱戯の小屋の隣にある高い段を上がって行った。その段は長い半ば荒石と半ば煉瓦で築き上げられた建物へ通じていた。古い食堂である。

それは高い、半ば崩れたホールで、ただ低い端の方で防御の屋根を有していた。この守られた箇所に長い食卓が用意されていて、その食卓の横の一側面で、　一　ほとんど向かい側の切妻壁に接しているように見えたが、　一　強力な暖炉の火が燃えていた。一方二

つの縦の側面に沿って六人の兜と胸甲を付けた僧院の下僕が立っていて、皆松明を手に持っていた。各側に三人である。「あらー」と声が上がったが、これがこの日の旅の世話係の勝利の眼目であった。

皆が席に着いた。レーヴィーンは、普段いつもの自分の流儀に似合わず速やかに美しいマトゥーシュカと教会訪問の際に親しくなっており、マトゥーシュカとカティンカの間に座った。ユルガスが座長を務めた。高い暖炉の炎を背に受けて、彼は立ち上がって、歓迎の言葉を一言述べた。

「皆さん、これらの部屋へようこそと申し上げます。私自身客人です。これらの部屋にどうして達したのか、それは秘密です。ヘルマン修道士[フォンターネによると 1300 年頃存命]が、その予言を朗誦しながら私を自ら台所や地下室に案内したのか、それとも私の従兄弟達、ブレード一家の代々の指輪がより近い時代からここでその奇蹟を見せたのか、どちらにしても謎のままです。とにかく私どもはここにいます。食卓は準備されています。それでは給仕の同志諸君、お願いします」。

この最後の言葉は、四人の彼の席の両側にいる僧侶達に向けられていた。彼らはレニーンのシトー派修道士とみられるべく最良の意図を有していたが、しかし疑いもなく舞踏会のカプチン会修道士の衣服に収まっていた。彼らは褐色の、紐で結ばれた頭巾付き僧衣を着ていて、彼らの一人は大杯にヴェルダーのビールを満たし始め、二番目の者は、猪の頭を、それから鹿の背肉を手渡し始めた。他の二人はゆっくりとホールを、屋根のない所、日光の最後の残りが床に注いでいる所まで下がって行った。ここには古い時代からか新しい時代からかの一つの揚げ蓋があって、その中に今や修道士の一人が、両手に燃える小松明を持って、下りて行き、一方もう一人は上げられた蓋の所に立ったまま、時々興味深く地下室の入口を覗き込んでいた。やがて瓶が、埃も蜘蛛の巣も見られなかったから、長いことそこに貯蔵されていたものとは思えない瓶が、上に渡されて、上に立っている修道士が受け取った。それから修道士は、ユルガス派と容易に分かる素早さで、コルクを引き抜き、黄金色に微光を発するラインワインを緑色のグラスに注ぎ始めた。彼の同僚は（燃える小松明を持っていた者は）地下室に残っていた。誰ももはや彼のことを考えていなかった。

食卓ではその間会話が弾んでいた。レディー達が開放的であった。しかしレーヴィーンが最も開放的であった。彼は　ー　見たところ彼に好感を覚えている美しい伯爵夫人の愛想に対してまんざらでもなく、　ー　とりわけようやくカティンカの前で、彼女が馬鹿にしている夢想家とは別な役割を演ずることが出来ると思って、幸せに感じていた。彼女のからかいには、次第に嫉妬と傷付けられた虚栄心の色合いが生じて来たので、それだけ彼の満足感、上機嫌は高まった。

「恵み深い伯爵夫人、貴女は」と伯爵夫人に向かって言った、「私どもが螺旋階段の塔を覗き込んだとき、白い令嬢に気付かれましたか。私は縮み上がりました。不幸な恋の完璧な絵でした」。

伯爵夫人は笑った。しかしカティンカはレーヴィーンを無視して言った。「ヴァンダ、彼の言うことは信用なりませんよ。不幸な恋なんて何も知らないのだから。彼の言うことは当てにならない。彼の作り話しが一番当てにならない。その話しに欠けているのを作り出すのだから」。

「それなら尚良いわ」とマトゥーシュカは言った、「本当の話しはどうでもいいの。本当の話しはいつも退屈で、あるいは醜いものだわ。フォン・フィッツェヴィッツさん、『白い令嬢』について話してください。お任せします。でも可愛らしく。僧侶に、愛に、憧れ」。

「その通りです。恵み深い伯爵夫人、すでに先取りして話されました。僧侶に、愛に、憧れ、　ー　それで全てです」。

「まあ。でももう少し付け足してください」。

「出来ませんね。お役に立ちたいですけれども。このような話しはとても敏感なもので、それを揺すったり、あるいはそれどころか改善しようとしたら、悪くなります。白い令嬢は階段を上がったり、下がったりして、愛する僧侶を求めます。でも僧侶は隠れています。日没時に令嬢はバルコニーに出て、両腕をあたかも会っているように、憧れて広げます。でも見せかけにすぎません。それから支柱の陰に腰を下ろして、泣きます」。

「可愛いわ」とマトゥーシュカは言った。彼女の変わらず笑っている顔に一瞬関心のような、あるいは悲しみのようなものが震えた。彼女は見かけよりも幸せではなかったからである。しかしカティンカはうなじに頭を反らして、言った。「私は不幸な恋は聞きたくない」。

「でも世界はそれで一杯ですよ」とレーヴィーンは答えた。

「ひょっとしたらまさにそのせいで、私は不幸な恋が好きでないのかもしれない。ありふれていて、致命的で、いつもいつも同じ。私には不幸な恋が分からない」。

「金持ちは、貧乏人もいることが、分からない」。

しかしカティンカは聞き入れず、パラドックス好みが高じて、極端なことも恐れずに、自分が一度発した命題を快活に戯れて更に嬉々として展開して行った。

「恋が幸せになれないのであれば、そんな恋は存在しなくていい。私が聖書で（旧約聖書のこと、人間がもっと人間的であったときのことで）、不幸な恋について読んだ記憶がありません。ダヴィデは幸せに愛したし、ソロモンはもっとそれ以上に幸せに愛した。何か言えるとしたら､ひょっとしたら彼らは余りに幸せに愛したということかもしれません。不幸な恋というのは近代の発明です。印刷術や糸車のような発明です。そう、糸車です。ぶんぶんと唸って、果てしなく涙に濡れた糸が紡がれて行きます」。

マトゥーシュカはびっくりして聞いていた。しかしカティンカは、聞いて貰っていることで、怖じけるよりもむしろ焚き付けられて、ますます増長して続けた。「それで僧侶を愛する『白い令嬢』についてだけど。そもそも僧侶相手に愛しませんよ。でも僧侶を愛するとなったら、　ー　突然あら僧侶でも愛してみようという気まぐれが生じたけれども、　ー　そうなったら、世の修道院のどこにも僧侶の逃げ場がないようにその僧侶を愛しなければなりません。あら御免、ヴァンダ。笑い出しそうね。どうしても話しはそうなるのよ。でもレーヴィーンには御免とは言わない。レーヴィーンは私がたった今話したことすべてを信ずると分かっているから」。

その間にますます暗くなって行った。暖炉の向かい側にある切妻壁にはわずかに灰色の薄明かりがあった。時折ホールの更に上の方にある松明のより明るい光輝がその上に煌めいていた。このぼんやりした明るさの中でも、外では雪が降り始めたに違いないと分かった。開いた屋根を通じて、個別の大きな雪片が落ちて来たからである。誰もが寒気を感じて、レディー達は毛皮の上着をより高く首の所まで引き上げた。これはユルガスが必要と

していた気分であった。彼は今や立ち上がって、最初の、正餐の始まる際に述べた挨拶の言葉に次いで、この日の本来の演説を発した。

「レニーンで」と彼は始めた、「私の客人として堪能して頂けたと存じます。このレニーンでは、四百年前ヘルマン修道士によって起草された予言をプロイセンの敵どもは何度も嬉しげに思い出したものです。とりわけ敗北のこれまでの日々、憎むべき明察でこう算段されて来たものです。今や予言が述べていること、つまり『その部族の最後の者の王笏が手から打ち落とされる』とされる時が来ているのだ、と。しかしプロイセンのこれらの敵は終わりまで読んでいなかったのです。我々は別のことを思っていて、別の、より美しい箇所を取り上げます。そこには先の悲しみの言葉に引き続きこう書かれているのです。『マルク地方はすべての苦しみを忘れるだろう。敵は早まって歓声を上げてはならない』と。いや、友の方々。この時が来ているのです。かくてその時が来ているが故に、私はまさにこのホールで、これは間もなくまた、　ー　これも予言がなされていますが、　ー　新しい黄金の屋根の光輝の中、国中を照らし出すでありましょうので、叫びます。プロイセン万歳。しかし夜から生まれたものは、夜に帰るがいい。ボナパルトヲ倒セ」。

この倒セは、まずは少なくとも、応答されることなしに、響き止んだ。というのはユルガスが最後の言葉を言い終わらないうちに、下のホールの方で、丁度揚げ蓋のあるに違いなかった所で、濃煙のような、深みから立ちのぼって来る明かりが見えたからである。そしてまさにこの濃煙の明かりから震えながら、揺れながら、まず馴染みの形の帽子と、それから短いフランス人の軍服の上着が上がって来て、だらりと垂れ下がった両袖と揃いの奇妙な指があって、人間と手とも切り詰められた根毛とも判然としないものであった。一瞬その幽霊は立っていて、頭のないまま、目のないまま、ホールを見下ろしていた。それからまたそれが上がって来た同じ深みに沈んだ。ホールに轟く鈍い音を発して、揚げ蓋は閉まった。

さてようやく呪縛が解かれて、ユルガスのすぐ側に座っていたゼーエル・トス伯爵とジェロティーン伯爵は今や倒セを繰り返して、他のすべての客人が、速やかに回復した食卓の陽気さに和した。ただヒルシュフェルトは黙っていた。彼は外の世界での「人類の偉大な敵」との戦いで、まさにこの敵に対する敬意を得ていて、この敬意のために、ジャンダルム連隊の能天気な調子が混じっている上演に楽しい気にはなれなかったのである。

しばらくなおお喋りが続いて弁舌が交わされた。その中には短い、気の利いたやり方で、カティンカの発した「旅の世話係」への乾杯があった。それからユルガスは立ち上がって、ほとんど燃え落ちた暖炉を示しながら言った。「消えて行きます。祭典も終わりです」。

これが出発の合図となった。彼らはすぐその後、松明を持った者達に伴われて、カップルになってホールを下って行き、揚げ蓋の所を通り過ぎた。この揚げ蓋には、隙間風がここでは雪片を切妻の方へ押し寄せたがっていて、ホールの他の屋根のない箇所よりも深く雪に埋もれていた。ユルガスは一行を案内しながら、そこを指し示して言った。「雪に埋もれている」。この言葉を聞きながら、皆が出口の所に来て、高い石段を下りて、すでに出発の準備をしていた橇の席に座った。

十五分するとすべてが、レニーンとその教会、食堂、「小さな帽子の幽霊」が過ぎたものとなった。静かな森を通じて、個々のカップルの会話と笑い声が聞こえた。

より目新しい会話を楽しむために、個々の馬車駅ごとに座席を替えることに皆が一致していた。最初の駅までの行程をレーヴィーンはユルガスと一緒にした。この折彼は、どのような昔からの関係でこのレニーンでの演出がそもそも可能となったかユルガスから情報を得た。しかしグロース・クロイツの座席替えとなって、ユルガスはマトゥーシュカの側に来て、一方カティンカがレーヴィーンを連れにと頼んだ。

「あなたは私を恐れているように見えますよ。馬鹿な人ね。いつも恐れているのだから。あなたが私を選んでくれないから、私があなたを選んでいるのです。いつもそうなんだから。逃げようと思っているその不幸が後を追って来ますよ」。

この最後の言葉が終わらないうちに、橇は、グロース・クロイツの樫の並木道を上がって、飛んで行った。橇の狭い御者席にレーヴィーンは腰かけていた。それから狭い川辺の道に入り、その道は見たところ果てしのない、氷と雪の中にあるハーフェルラントの平原と雪の積もった高台の山腹の間を縫っていた。

二人はすでにかなりの道のりを進んでいたが、会話はなされず、ほんの一言も交わされなかった。ようやくレーヴィーンは屈んで、言った。

「カティンカ、手を貸しておくれ」。

彼女はそうした。彼はその手に接吻した。「私はあなたなしには生きられない」と彼は耳許で言った、「私を憐れんで、愛していると言ってくれないか。私はしっかりなさいと言われてきた。白昼夢を見ちゃいけないと。カティンカ、白昼夢を祓うのは、あなたにかかっている」。

彼女は黙っていた。ただ馬の鼻息と小鐘の音だけが荒野に響いた。しかしレーヴィーンは彼女の息と自分の心臓の鼓動しか聞こえなかった。

「グーゼへ行って、詩節を暗記したときの大晦日の日を覚えているかい。とても嬉しいお出掛けで、とても幸せだった」。

カティンカは頷いた。

「しかしトゥーバルがその時は一緒で、私は心の中で百度も言ったものだ。『二人っきりだといいのに』と。それで今や二人っきりだ、カティンカ。...あなたは、私が恐れていると言う。いや自分の幸せを前に人は恐れるものだ」。

彼女は自分の手を引き抜いた。しかし彼は、不機嫌故ではないと感じながら、次第に興奮して来て続けた。

「いや、あなたと二人だけ。これに私の幸せのすべてがある。いやこの時間が増大して、私の生涯となってくれないものか、私はあなたと一緒に、世の中を、雪の中、風の中進んで行きたいと願うし、私の額にあなたのなびく髪しか感じたくない」。

彼には自分の言葉が手応えがないままに響いているとは思えなかった。というのはいつもの調子とは別の調子で彼女が半ば小声で思わずこう言ったからである。「手綱を頂戴、レーヴィーン」。

「いつもそうだな、今日も変わらず」。

「でも手綱を使うにはもっと腕が自由でなくちゃ。手伝ってよ」。

それで彼は彼女の腕と肩から軽い絹の外套を外して、手綱を彼女の手に置いた。

馬は、より緊迫した先導を受けたかのように、瞬時により素早く駆け始めて、風で後に吹き寄せられた外套がレーヴィーンの顔に翻った。無限の憧れに彼の心は満たされた。そ

してカティンカは今や進行と飛行の歓喜の中で席のかなり後ろに座り、彼女の肩が軽く彼の胸に当てられたとき、彼の血の一滴一滴が震え、熱を発した。しかし彼の生来生得のものである臆病に彼はまた襲われ、彼が震えながら彼女のうなじに押し付けたのは一回の接吻だけであった。

かくて数分が過ぎた。それからカティンカが言った。「風が鋭すぎるわ。レーヴィーン。また私の外套を手伝って」。それはほとんど嘲笑のように響いた。彼はそれを感じた。しかし従った。

さて二人は黙っていた。ハーフェル川の橋を越えて、橇は行った。星々は冬の空に澄んで輝いていた。雪の平原が瞬き、煌めいた。やがてやはり、銀灰色の薄明かりの中、再びコミューンのドームや新宮殿の広大な塊が眼前に拡がって来た。イエーガー門となり、先程の場で馬交換となった。レーヴィーンとカティンカが最初であった。彼は彼女が席から降りる際手伝い、彼女の手に接吻した。彼女は彼を大きく、しかし好意的に、見つめ、ただこう言った。一語一語強調しながら、「あなたは子供よ」。

ほどなくして、別な橇も寄って来た。馬が交替され、席も交代となった。トゥーバルは再び妹の隣に座った。

かくてベルリンへ一路目指して行った。

第十六章
カティンカ

レニーンからの帰路、天に輝かしく煌めいていた冬の星々は晴天を約束していた。そしてこの晴天がやって来た。鋭く射し込む太陽は屋根の雪を溶かして、太陽が正午頃、最も高い天にほぼ達したとき、鋭くニコライ教会の塔越しに、カティンカの部屋を覗き込んだ。それはまぶしく、急な斜光線だったので、緑色のブラインドは高い窓の半分まで下げられなければならなかった。それでもどの対象も光を一杯に受けていて、この光が、新鮮なヒアシンスの置かれた花瓶台と共に、この丁寧に手入れされた部屋にいつでも居心地の良さの印象を与えるのに一役買っていた。調度の幾つかはこの二，三日で替えられていた。ソファーの前では、つまりレニーン遠出が約束されたかの晩、そのソファーに老妃殿下が陣取って、最初ほとんど一行のどのメンバーとも喧嘩腰だったのが、結局は皆と和平を結んだのであったが、今日は丸いテーブルが撤去されていた。その晩はそのテーブル越しに論争が行われたものであったが、代わりにまさにその箇所に大きな絨毯が敷かれていた。それはブリュッセルの織工の傑作で、そこにはヴィーナスが鳩馬車に乗って空中を飛んでいた。この絨毯の華麗な色彩の絵が、我らの友レーヴィーンがクリスマスにホーエン・フィーツに帰る際、つまり我らが最初彼と知り合った時、彼の夢の中にまで忍び込んで来たものである。というのはかの日彼の最後の訪問は、ラダリンスキー家に当てられていたのであったからである。

それは一ヵ月前のことである。今日、ソファーからこの絨毯の絵に向けられたのは、カティンカの目であった。しかし彼女はそれを見るとはなしに見ていた。というのは彼女の魂の前には別な絵があったからで、多彩で笑っていたけれども、それには深く黒い影がかかっていた。この影を投げているものは何だったか。

彼女は誰かを待っているように見えた。少なくとも、時々ドアの方へ耳をすましていた。しかし静かなままであった。落ち着きのなさが募って、彼女はとうとう立ち上がり、花瓶台へ歩み寄って、それから据え置き鏡の許へ行き、自分の服をあちこち変えた。それは朝用の身繕いで、彼女がグーゼから帰って来た日に、父親との会話の際に着ていたものに似ていた。ケープと白い螺鈿のボタンを留める、大きな梨形のホックの付いた白い縁の濃い化粧着であった。誰もその形姿にけちを付けられなかったであろう。ただ彼女自身は満足しているようには見えず、髪を再三整えたり、軽く首の周りに結んでいるモスリンのスカーフを代えたりした。それからまたソファーへ行って、その隅の一方に身を投げ、足をすでに前もって絨毯の上に置いていた床几に乗せた。隅には一冊の本があった。彼女はそれを開けて読もうとした。しかし出来なかった。彼女は集中できなかった。

この瞬間伯爵が案内なしに入って来た。彼女はクッションから足を引き下ろし、その他は姿勢を変えなかった。二人はこの日の朝、すでに約束していたように見えた。挨拶の言葉は一言もなされなかった。彼は彼女に近寄って、彼女の手に接吻した。

「それでは何の知らせ」と彼女は落ち着きを再び取り戻して尋ねた。

「決定の件」。

「それでは、話して、語って」と彼女は続けた。人差し指で左手の指先をつまんでいた、「すべて分かっているけど、でもあなたの口から聞きたいの。どんな具合だった。あなたを傷付けるようなものは何も、言葉も、表情も出なかったでしょうね」。

「出なかった」と伯爵は答えて、床几に腰を下ろして、カティンカの手を自分の左手に取った、「父上は静かに私の言うことを聞いていらした。私が終えると、習慣的にいつも弄んでいる象牙のナイフを脇に置いて、言った。文字通りこう言ったと思う、『びっくりはしない、伯爵。私はこの申し出を予期していた、有り体に言って、恐れていた。請け合わなくても、私の見解は貴方の人格に向けられているものではないと御承知だろう。そのことを完全に証明することは難しいことになろう、貴方を別な面から傷付けてしまい、貴方の同意を得られないであろう点に触れ、条件を出さなければならなくなるだろうから』と」。カティンカは微笑した。

「昔からの歌ね と彼女は言った。

「そうなのだ」とブニンスキーは続けた、「彼はポーランドと、我らの祖国と今生の限り別れをしたと主張するのだ。要するに彼はこう結んだ。我々の間での縁組みは二つの理由で出来ない。彼の言うには不可能だ、というのだ。宮廷のせいと、自分の思い出のせいで。思い出のせいというのは分かる、しかし宮廷のせいというのは分からない」。

「でもその二つは関係しているのよ」とカティンカは答えた、「その言い分は認めてあげなくちゃ。父上は宮廷を必要としている。橋を壊してしまって、自分と私どもとを、正しいことか正しくないことか分からないけど、故郷の大地から余所の大地へと移植したから、余所の土壌に新しい根を張るためには、格別な好意的条件を欠かすことが出来ないわけ。こうした恵まれた条件の中では、あなたにまず言っておく必要があるけど、宮廷の太陽が一番上にあるのよ」。

「ひょっとしたらそうかも」とブニンスキーは言った、「きっとそうだと言っても構わない。結局でも事態は変わらない。何故まさに父上はこの土壌を選んだのか、分からない。父上がこの土壌を選んだこと、それが今や我々のことを決定することになる。というのは、

彼が暗示しているように見えたこと、つまり私の側でもこの国と和解すること、カティンカ、これは決して出来ないことなのだ、決して、カティンカ。あなたを求めるためでも出来ない」。

彼は立ち止まって、激しく指を絡ませて打ち付けていた。それから老ラダリンスキーの奇怪さを一種の自己会話で明らかにしたいかのように、思わず語っていた。「父上をこちらへ引き入れたものは何か。まさに父上を。それは一つの謎で、矛盾のままだ。父上はかの高貴さという過剰なものを有しておられる。この国では高貴さが全く欠如していて、それで私にはこの国が嫌でたまらないのだ。父上は大きな犠牲、大きな決意を御覧に入れることができる。この自己追放へと追い込んだ不幸な歩みでさえ、相変わらず諦念の刻印を額に帯びている。ここでは何が見られるというのか。利害、思い上がり、大言壮語だ」。

「あなたも昔からの歌を歌っているわ」とカティンカは言った。

しかしブニンスキーは聞いていなかった。自分の立っている所から動かず、次第に興奮して着て、続けた。「父上は衒学者だ。勿論ここでは適任だったわけだ。ここで花咲いているものはすべて、式法、形式遵守、数字に型紙なんだから。それに加えてかの厭わしい貧しさ、これが質朴さではなく、狡猾と惨めさを生んでいる。かつかつかろうじて丁度、これがこの国の作法だ。私がまだ子供のとき、クラカウの学校で老フリッツ[大王]の歩兵について読んだが、彼らはチョッキを着ていたが、それはチョッキではなく、単に赤い三角の布切れで、直接制服に縫い付けられたいたものだったそうだ。本当にしろ、嘘にしろ、こうした三角の布切れを、こちらで私はすべてのもの、卑小なもの、偉大なものの中に見て来た。縫い付けられた体制、見せかけと策謀、その際深く浸透している考え、何か特別な存在であるという考えがある。何を目指しているのか。彼らはいつも貧乏に根ざした喧嘩好き、掠奪好きがある。この民は飽きることがない。洗練さもなく、形式もない。何もない。気持ちが良くて気に入っているもの、それはただ一つの要求、もっと多く寄越せだ。そしてこの民はとうとう手に入れてしまうと、要らないものは脇に置いて、そしてそれに触れる者に噛み付く。この国の特徴をなしているのは、海賊の流儀だ。それでいていつもテデウム[賛美歌]と一緒で、神とか信仰とか至高の善のためなのだ。旗の銘文にこの国は欠けたことがないのだから」。

「あなたの言うことがもう分からない」とカティンカが遮った、「あなたは正しいことを話しながら不当なことに移っている。あなた自身、偏見と辛辣さで、言い過ぎた誇張だと思っているでしょう」。

「いや、誇張はしていない。私は貨幣の裏を読んでいるだけだ、読もうと思っているから。別な者がまた裏返したら、そして上に掲げられた素晴らしさに、像と銘文とに喜ぶとしたら、私はそれで良しとしよう。そこには何か偉大なものがあるかもしれない、ただ私にとってはないし、それに父上にとってもない」。そう言いながら彼は、左手で家の向かい側にある枢密顧問官の部屋を指さした、「父上にとってもないと私は申し上げる。彼は頭の天辺から足先までポーランド人なんだから。忠実なプロイセン人の表情をしていても私は騙されない。プロイセンだと。何故まさにプロイセンなのだ。我々に対し真っ先に銀貨三十枚にて[ユダの裏切り、マタイ、26,16]不正商いをしたプロイセンなのだ[1795 年ポーランド第三次分割]。勿論今はプロイセン自身鎖に繋がれているが。しかしいつまでなのか。...プロイセン、プロイセン。何故フランスではなかったのだ。何故ロシアではなか

ったのだ、最悪ではあるが。その罪の中でも少なくとも自分の行為に帰依する勇気が持てるであろうに。しかし、いや、プロイセンでなければならなかったのだ。そしてこのプロイセンが、この地でラダリンスキーの部族が、妄想や狂想に導かれて、新たに花咲き、根付く定めとされて、今や私とあなたの間に割り込んで来ている。そしてひょっとしたら安物王達の微笑が止まっているせいで、この時期、やれやれ王家のお産の部屋よりも戦場でもっと多くの王子が誕生したものだが[例えば、ネー元帥、モスクワ侯爵]、我らの幸福も、空中に羽毛のように消えて行く。そんなことでいいか、カティンカ。決心をしたかい」。

彼女は黙っていた。

「我々は愛し合っているのかい」

「あなたはそう仰有っている」。

「それでは私は一本の道を行くだけだ。あなたはその決心をして頂けよう。そう思うし、そう望む」。

カティンカは額に手を置いた。それから何か忘れ物を思い出したかのように、言った。

「私は父上に約束したの。父上の地位を脅かすような、あるいはこの国への帰属に新たな疑念を生じさせるようなことは何もしない、と」。

「この約束を守ればいい。逃げたら、すべての科は我らのせいになる」。

「それでも躊躇いがあるの」とカティンカは続けた、「私が自分の科の分を恐れているのではないけど。私のことは分かっているでしょう。私の中での恐れは、向こう見ずなことの喜びで消えているわ。だから自分のことではないけど。でもあなたのことを案じているの。あなたを愛しているから。あなたが誤解されてはならないわ。でも、誤解される。厳しい言葉が下されるのは、...トゥーバルから、...」。

「レーヴィーンからか、...」。

「レーヴィーンの名は言わないで。胸が痛む。私が最も苦しめて、罰当たりなことをしてしまうのは、彼の他にいないのだから。彼に対して最も辛いことをすることになる。彼は私を愛していたし、若い時から仲良かったのよ。それが今はお仕舞い。でも厳しい言葉が彼の唇から発せられるとあなたが思うとしたら、それは間違いです。彼は言わない。でも他の人々ときたら。あなたがヨルク将軍の降伏を聞いたときの、舞踏会の夜を思い出して御覧なさい。あなたが皇太子の祝福の指輪についての老妃殿下の厳かな話しを台無しにしたときのあなたの嘲笑の『ゴモットモ』を考えて御覧なさい。この一切についての意見は何か。この国で『ドイツの忠誠』と言われるものについての深い軽蔑よ。それであなたに聞きます。私どもは忠誠を尽くしますか。あなたは忠誠を尽くしますか」。

「不忠もしない」とブニンスキーは答えた。

カティンカは頭を振った。

しかし伯爵は言葉を続けた。「カティンカ、あなたが不忠だと思うのであれば、そう言うがいい。そしてそれは不忠だと分からせたらいい。私は自分がすることに言い繕いをしようとは思わない。私は不忠をこの世からなくしようと思うラ・マンチャの騎士ではない。私は不忠をなくしようとは思わない。自分が個人的に不忠を脱しているとか、不忠の上にいると大層な考えを少しも抱いていない。不忠か。不忠はここでは最初にあるものだった、そして最後のものとなるだろう。私はその言葉に驚かないし、その行動にさえ驚かない。しかしこの国で持てはやされる徳操面、それを私は憎む。私が嫌いなのは嘘だ。ただこれ

だけは分かっている。生ずることになるものを、私が信頼の破棄とか不忠と呼ばずに、強制とか自己責任とか正当防衛と呼ぶとしたら、それは嘘ではないということだ。臨機応変だ。あなたの父上の技巧的に乱用された権利、私どもを不可解な配慮の犠牲にしようとしている権利に対しては、私どもの生来の権利、相性という権利を対置することにしよう」。

短い間が生じた。ただ痛々しい沈黙を避けるために、伯爵は付け加えた。「カティンカ、未来を見ることにしよう。もっと良い日々がやって来るだろう。父上は納得されることだろう。どうしようもなく生じたことは、千もの依頼の言葉よりも説得力がある」。

「あなたは父上を誤解されています」と彼女は言った、「父上は善良な者、弱い者の頑固さを持っています。こう私は言っても良いでしょう。私に対しては若い頃から弱かったから。父上は私どもを憎まないでしょう。私に対する父上の愛は揺るがないでしょう。でも起きた事と和解することはないでしょう。そして私どもと仲直りはしないでしょう。私は自分のすることが分かっています。今生のお別れなのです」。

伯爵はあちこち歩いた。彼がまたソファーの所に寄って来たとき、彼女は彼の手を取って、言った。普段の彼女には見られない表情で彼を見上げながら、「それではそういうことにしましょう。ヤロシュ。決定されたと思います。私どものせいばかりではありません。私どもは皆受け継いでいます。まずは血を、それから科を。私はいつでも母の子供でした。そこで今はすっかりそうなります。私をよろしく。私にはあなたしかいません」。

そして彼女は彼の胸に身を投じた。

第十七章
ハンゼン・グレルの許で

カティンカとブニンスキーの間のこの会話の後二日して、レーヴィーンは片付けられるべき手紙を相手に座っていた。何通かは、その中にはファウルシュティッヒ博士とアメリー伯母の手紙も見られたが、その返事を多分更に引き延ばせられないだろうし、三つの講義を　一　というのはまた金曜日だったからで、　一　聴講しなかったことが、怠慢というよりは功績と見なされるほどにすでに長く文鎮の下にあった。フーレン夫人は時々、そのアルト・ベルリン風の、色々な布切れから縫い合わされたフェルト靴を履いて部屋の中を行き、ソファー・テーブルの上に十五分おきに増えて来る手紙の数を見て、頭を振った。幾つかのものはまだ出来上がっておらず、ただ最初の一頁のみが記されていた。というのはレーヴィーンは[インク乾かしの]撒き砂を嫌っていたからである。彼が例外的にカティンカと一致していた点であった。

「撒き砂の付いた恋文では」とカティンカはよく言っていた、「すぐにその恋は撒かれて、埋葬されてしまう」。

彼はすでに二時間書いていた。しかし肝心の手紙はまだ書かれていなかった。レナーテ宛の手紙である。その手紙を最後まで取っておいた。妹としゃべることを、それ以前にすべて書き上げてしまう手紙への苦労あるいはそれどころか強制に対する償いの報酬と考えていた。ファウルシュティッヒ博士宛の手紙は文学的論文であり、アメリー伯母宛の手紙はいつものように卵ダンス[卵の間を目隠ししして踊る]であった。それが今や終わり、彼は息抜きをすることが出来て、ペンを自由に動かせた。

「親愛なるレアーテ」と彼は書いた、「今日は二十九日[金曜日]だ。この月の半ばからのおまえの手紙の日付けを見ると恥ずかしい思いがないわけではない。それに対する私の短い返事は返事というものではなかった。怠っていたことを取り戻すことにしよう。

今週とか先週は、新聞から分かったろうと思うが、色々重要なことが生じた。父上が私に手紙で書かれたことが、証明された。皇太子の祝福に続いて、国王のブレスラウへの旅立ちがなされた。宮廷全体と、それに近衛兵も伴をして行った。ポツダムはそれ以来死に絶えたような状況だ。これについてはレニーンへ向けてなされた遠出の折、自分達の目で確認できた。この前の火曜日に行われたこの遠出について今からおまえに語ろうと思う。レニーンは古いシトー派修道士の修道院であることを知っているだろう、あるいはひょっとしたら知らないかもしれない。アスカニア族の大方がそこに埋葬されたもので、何人かはホーエンツォレルン[プロイセンの王家]の一族もいる。私の間違いでなければヨーハン・ツィーツェロ[Johann Cicero(1455-99)]、それにヨアヒム・ネストー[Joachim Nestor(1484-1535)である。しかし両人は墓所に入ったかと思うと、国有化があって、大きな金属の棺は、修道院のクリプタ[半地下墓所]からベルリンの大聖堂のクリプタに移った。レニーンの予言、『Vaticinium Lehninense』もあって、百ものラテン語の詩行だ。マルク・ブランデンブルクのホーエンツォレルン家の没落とカトリックの信仰の再興を予言しているものだ。しかしこのすべては曖昧で判然としない。それでよく起こるのだが、若干の善意にもかかわらず、まさにその反対が読み取られることがある。このレニーンに先週会話で触れられ、枢密顧問官は、幾つかの詩行を我らの老校長ベレルマン[Bellermann(1754-1842)、グラウエ・クロスター学校校長]を通じて何年か前から読み覚えていて、引用し、それで突然、顧問官は普段見られない熱意、修道院を見てみたいという威勢の良さに取り憑かれたのだ。顧問官には大いに敬意を払っているので、ついでに臆測を述べさせて貰うと、彼は現場で自分の講義を続けて、我々を一種中世風古典世界に導こうと思い付いたのであろう。しかし彼の熱意は続かなかった。火曜日が近付いたら、彼は参加を取りやめた。ユルガスが前もって旅の世話係と任命されていた。勿論任命したのはカティンカだ。カティンカやラダリンスキー一家と親しい仲間の他に、マトゥーシュカ、ゼーエル・トス、ジェロティーン伯爵達が若い夫人達と一緒に遠出に参加した。次々に仕掛けがあった。ユルガスは祝典幹事の昔からの評判を維持した。マトゥーシュカ夫人は魅力的で、カティンカが嫉妬するのをみるという勝利を私は得た。帰りある道のりをカティンカと一緒の橇に乗った。私は彼女に思いのこもった言葉をかけた。ひょっとしたらそれ以上に思いがこもっていたかもしれない。彼女はその言葉を好意的に受け入れてくれた。ブニンスキーは間もなく我々の許を去る。彼は自分の荘園へ戻って、そこからワルシャワへ行き、自分と親しい副王[Eugen Beauharnais(1781-1824)]に協力しようとしている。ポニャトフスキー[Poniatowski(1762-1813)]とは合わないのだ。私が彼の旅立ちの日を願っていることを否認しようとしたら、嘘になるだろう。カティンカは彼を称えている。しかしいない者を相手にするとか、思い出に生きることは彼女の流儀ではない。彼女は時の流れに従っている。そしてこの時は、私には好都合に見える。私はまた自分の幸せの可能性を信じ始めた。彼女は最近こう書いて来たのだ。「白昼夢を見ているのではないでしょう、レーヴィーン」と。

それで尋ねたい、ホーエン・フィーツはどんな具合かい。親しい人、ザイデントプフ牧

師やショルレンマー、マリーはどうしている。いいかい、昨夜マリーについての夢を見たのだ。彼女は何だったと思う。花嫁だった。長い長いヴェールに包まれて、彼女は祭壇の前に立っていた。しかしそれはホーエン・フィーツ教会ではなかった。彼女のドレスはヴェールのように白く、軽かった。小さな星々が付いていた。彼女はとても綺麗に見えた。彼女の新郎は誰だったと思う。ドロッセルシュタインだ。老人ではなく青年のドロッセルシュタイン。大きく、すらりとしていて、制服を着ていた。今朝この夢を思い出したとき、おまえがマリーについてよく言っていた言葉を思い出さないわけに行かなかった。驚かないでね、黄金の馬車がクニーハーゼの側に止まって、可愛い王女様が泣きながら、でも喜びに輝く目をして王子様の横に腰かけるのを目にすることになるのよ、と。その点ではおまえの言う通りだった。マリーがオテグラーヴェンの求婚を断ったのは自然の成り行きであったろう。当時は納得できなかったものだ。ちょっと悪いこととは言えなくても、賢明なこととは思えなかった。しかしマリーには不当なことをしていたと思う。彼は大寺院の国から来ている。彼女は妖精の国から来ている。すべてヴェストファーレン的なものが、妖精達の親しめるこの世界での最後の地であろう。

ファウルシュティッヒ博士とアメリー伯母には今朝手紙を書いた。満足の行く出来ではなかった。伯爵伯母への手紙はいつも難しい。何故だか分からない。私は逸話や警句の収集箱を置いて、伯母さん宛に手紙を書く段になると、この箱をただぶちまけようとするだけだ。しかしこのようなことは出来ない。それで次第に自分の無器用さが嫌になる。これが私にカティンカが許そうとしない同じ特徴だけに尚更嫌になる。

私は今晩カティンカに会うことになっている。トゥーバルとも。トゥーバルはよくブニンスキーや騎兵隊長フォン・ヒルシュフェルトに会っている。ヒルシュフェルトは立派な将校で、スペイン遠征に行っているが（イギリスの側で）、伯爵との仲での支障となっていない。前回トゥーバルと会った折、　ー　レニーンで教会を訪ねていたとき、　ー　私に尋ねた。『ホーエン・フィーツには我々はいつ旅するのか』と。その際レブース国民軍大隊への編入が気がかりなのか、従姉妹のレナーテがもっと気がかりなのか不問にして置こう。

それでは御機嫌よう。久しぶりに私は未来をより陽気に見ている。すべてが順調だ。大きな事も小さな事も。そして小さな事が肝要だ。それは私事だから。父上と友の方々によろしく。　　おまえのレーヴィーン」。

その間に一時になっていた。彼の昼食の道は、いずれにせよ、大きな郵便局の建物の側を通ることになっていたので、レーヴィーンは、今日の午前の成果である五通の手紙を自ら窓口に持って行く労を取った。郵便局の隣にラダリンスキーの家があった。彼は見上げた。しかし枢密顧問官の部屋も含めて、二階の部屋はすべてブラインドが降りていた。一瞬、その理由は何かと考えたが、しかしその印象は、シュテヒバーンの角でユルガスと出会ったとき、消えてしまった。ユルガスとは次のカスタリア誌会合について手短な会話をした。

「では火曜日に」、そう言って、二人は別れた。レーヴィーンはタウベン[鳩]通りの馴染みの場所で簡素な食事を摂った後で、長い、かつてのベルリン市壁に当たるヴァル[塁壁]通りに向かって行った。そこからはシュピッテル広場とはわずかしか離れていず、

一　古くからの堂々たる、しかし勿論零落もしている家々から成り立っているクロイツ路地へ曲がって行った。

こうした古くからの堂々たる家々の一つにハンゼン・グレルは住んでいて、彼に対してレーヴィーンは、その簡素さと、それに劣らず、そのロマン主義的、まさにこの簡素さとはほとんど矛盾する特徴のせいで、最初からはなはだ魅力を感じていた。訪問して欲しいという要請のようなものは発せられたことがなかった。しかし彼らが偶然二日目に出会って、かなり長く詳しいお喋りをした後、別れてから、レーヴィーンはグレルの住まいに要請がなくても出掛ける決心をしていた。それは中二階であった。八段から十段上がると、使い古されて、曲がった鉄の手摺が付いていたが、上に達した。ドアには太いペンで、半ばカードに、ハンゼン・グレルと書いてあった。

レーヴィーンはノックした。

「お入り」。

それは、三つの区画に分割された、ただ最前列の三分の一のみが開くドアで、まさに人間が一人横向きになって入れるだけの幅であった。

レーヴィーンは隘路を通って、大きな、恐らく十四フィートの高さの部屋に入った。そこには一瞥したところ、四つのがらんとした黄色の上塗りの壁と、巨大な黒いタイル張り暖炉しか見えなかった。同時に四枚の長く細いカーテンの襞が、ドアが開けられたときの風のせいで、ゆっくりと無器用に揺れた。しかしこのがらんとした荒涼たる印象は長く続かなかった。もっと心地良い要素が然るべく加わった。内部から暖房されたストーブでは、泥炭がかなり燃え落ちていて、青い炎を上げて揺らめく明かりの眺めは、すべての暖房素材の中で最も劣等のものとまた和解するもので、隣にある本の積み重なった折り畳みテーブルからは、小さな渦巻く湯気が立ちのぼっていて、入室者に優しい挨拶を送っていた。ハンゼン・グレルは午後のコーヒーを準備していた。

「ちょっと待って」と彼は叫んで、ただ半分だけ空にしたお湯の鍋をまた暖炉の火の上に置きながら、今やレーヴィーンに歩み寄って、まだ半分煤けた手を彼に差し出した。手は自分のフリーズの上着の袖で精力的に拭って、少なくとも最もひどい状態からは脱していた。

「会えて、本当に嬉しい」と彼は言った、「特に今この時は、丁度暖炉の火でコーヒーが出来上がって、家のもてなしが出来る時なのだ。一緒に飲もう。御覧のように、つましい暮らしぶりだけど、しかしカップに関してはどんなお喋り女とも張り合えるのだ」。

レーヴィーンは答えようとした。しかしハンゼン・グレルは続けた。「いや私の分がなくなると、案じなくてもよろしい。ここにコーヒーがあり、あそこにお湯がある。個人的損失とか何も心配しなくても、カスタリア誌会合の全員をもてなす余力はあるのだ。どうぞお掛けなさい。私は最良のマイセンのカップを探すことにしよう。貴方には金鍍金のカップで飲んで頂こう。アモールと羊飼いの女、矢でもう射られて、笑って泣いている女が描かれているものを。私がこのような遊びの趣味を有していると思われますか。私のコペンハーゲン時代の名残なのです。老伯爵は情熱的な収集家でした」。

こう言いながら、ハンゼン・グレルは、厚い壁の中に収まっている一瞥しては見分けがたい戸棚を開けて、そしてここで約束のマイセンのカップを探すばかりでなく、もっと良くもてなすために、砂糖鉢を探した。上か下の板の上にあったはずとはっきり思い出して

いた。彼は個人的には砂糖紙袋を普段使っていた。

その間レーヴィーンは半ば当惑して更に話し続けているホストの要請に従って、カーテンを引き開けて、奥行きのある窓の壁龕[ニッチ]の一つに腰かけた。こちらには二つの藁付き椅子があって、その一つには二，三の開けられた本が置かれていた。ハンゼン・グレルは　ー　砂糖鉢が相変わらず見つからずに、　ー　ますます単なるいぶかしみの発声に終わりがちな会話を続けていたが、レーヴィーンは小さな巻の一つを手に取って、覗き込んだ。それはヘルダーリン[1770-1843]の詩であった。開けられた頁の一つに次の四行があった[『かつてと今(Ehmals und jetzt 1798)』]。

幼い日々、私は朝が嬉しかった。
夕方には泣いた。しかし、大人になると、
疑わしげに朝を迎える。けれども
一日が終わると、神聖にして快活である。

レーヴィーンはこれらの行に顕著な印象を受けた。しかしその印象に長く没頭しておれないように配慮がなされた。その間にハンゼン・グレルは自分にとって願わしいと思えるものをすべて見つけていて、今や不安げに暖炉と窓の間の床板の上の遠い道を進んで来て、自分の客人に縁まで満たされたコーヒーのカップを差し出した。

客人のレーヴィーンは受け取り、啜り、称賛して、それから言った。「貴方がヘルダーリンを読むとは驚きだ。貴方から受けたイメージではこちらの人生でもあちらの人生でもずっと『明け方に出発するレオノーレ』[Bürger 作 1773]好みと思われた。ひょっとしたら『野生の漁師』[Bürger 作]あるいは『あらくれ猟[英詩 Cheyy Chase]』も考えられるだろう。しかしヘルダーリン。これは考えられない」。

ハンゼン・グレルは向かい側にある藁付き椅子に腰かけて、言った。自分の両手を楽に組んだ膝の上に置いていた。「貴方は、微妙な点、何なら、私の性質の中の矛盾について触れておられる。私が自分の情感上、私如き詰まらぬ者についてこう言って良ければ、自分の詩作上、全く新しい流派に所属することは全くその通りです。良いか悪いか別にして、私はロマン主義者達と共にあり、北方の王女達とかドラゴンを退治する者達についての夢想しか好みではありません。そして時にロマン主義的装置にうんざりすると、対照の教義に従って、一種の情熱を抱いて、ロココ調のものに身を投ずる習慣です。髪粉や[膨らんだ]フープスカートにも恐れません。しかし古典的なものは駄目です、形式の面でも内容の面でも」。

レーヴィーンは微笑して、彼らの間に置かれている本を指さした。

「それについて申しましょう」とハンゼン・グレルは続けた、「これはまさに私が矛盾について話すことになった当のものです。私は古典的感性は有しないでしょうし、ヘクサメターとかそれどころかアルカイオスの詩節を書こうという試みすらしないと思います。しかしながら、この古典の世界と接触するたびに、いつも私はその呪縛にとらわれて、この魅惑が続く間は、すべての民謡調のものが単なる大道芸人の歌に聞こえてしまいます。すると突然すべての素朴な詩作に対して、美しい村の娘達が宮廷の舞踏会に出現している感じに襲われます。彼女達は可愛い。しかしその化粧の彩りや気ままさはその現実の魅力

さえも低級なものに思わせてしまいます」。

「その点には賛同できないな」とレーヴィーンは答えた、「貴方自身が見逃せないと思う言葉を発せられている。『この魅惑が続く間は』と。これが肝心だ。芸術においても『いつも山鶉』[アンリ四世が情事にうるさい聴罪師に毎日提供して閉口させた]は妥当します。多すぎるといつもその反対への欲求が生ずる」。

「『いつも山鶉』というのは的確かもしれません」とハンゼン・グレルは言った、「しかし私の個人的経験によれば、別な面に目を向ける必要があります。ひょっとしたら貴方も似たような観察をされたことでしょう。私どもの詩作作品は、これは私が力点を置く点ですが、私どもの性情に合致するものです。しかし必ずしも私どもの趣味に合致するものではありません。趣味が性情を上回ることが有り得ます。一つの調和を生み出そうとして、私どもの読書さえ差配している私どもの趣味が、私どもの作品を決めることになると、すると別の道へと進んで行った性情は途方に暮れてしまい、私どもは頓挫します。私どもは私どもの意志に従ったのですが、しかし死産となります」。

レーヴィーンは答えようとした。しかしハンゼン・グレルは自分の考えの展開を威勢良く続けた。「ちなみに私どものシュヴァーベンのヒュペーリオン[シュヴァーベン生まれのヘルダーリンの作品名]に関してですが」とそう言いながら、彼は指で自分の前にある小巻を指で叩いた、「貴方に最初白状した矛盾はひょっとしたらもっと簡単な方法で解決されていると思われます。ヘルダーリンはその形式の全くの古典性にもかかわらず、根底からロマン主義的です。私の好きな詩節を朗読してよろしいですか」。

「お願いしましょう」。

すでに薄暗くなっていた。しかしハンゼン・グレルはその詩節をほとんど暗記していたので、どのような明かりでも十分であった。彼は読んだ[『パルカ（運命の女神）に寄せる。(An die Parzen 1798)』]。

御身、強力な者達よ、一夏を恵み給え、
そして一秋を、実りの歌声のために、
私の心がいそいそと、甘美な音色の
戯れに満たされて、身罷れるように、と。

現世でその神々しい権利を掴まなかった
魂は、下の冥界でも安らぎはない。
しかしいつか、心にかかる神聖なもの、
詩作が成就したならば。

そのときにはようこそ、影の世界の静寂よ、
私は満たされている。私に竪琴の
伴奏がなくても構わない。かつて私は
神々のように暮らしたのだ。更に欲しいものはない。

彼はその本を手から置いて、休みなく続けた。「これはアルカイオスの詩節です。構造、

形式、古典的です。それでいて、そこからロマン主義的に響いて来ます。冥界とか、古典性のすべての影の世界、神々の世界にもかかわらず」。そう言ってようやくレーヴィーンの顔を見た。

レーヴィーンは相変わらず黙っていた。しかし彼の沈黙は最も熱狂した言葉よりも雄弁に語っていた。最後に思わず知らず言った。「何と素敵なのだ。気分にぴったり会っている」。

「そうなのです」とグレルは今一度言葉を発した。「気分が会っています。それが決定的に大事です。今気分について語ること、気分に入ることが話題の流行になっています。しかし気分に入るだけでは大した意味がありません。自分にやって来る気分、謎めいた定かならぬもの、雲のように移ろうものを鋭く正確に確定する術を心得、そしてこの確定されたものに同時にまたその魔術的な、薄明かりの中で動く揺らめく状態を維持する術を心得ている者、この者が初めて巨匠です」。

レーヴィーンは頷いた。しかしぼんやりしていた。彼は明らかに半ば空耳で聞いていて、他の一切の返事の代わりに、ただ歌の結末の言葉を繰り返した。「かつて私は神々のように暮らしたのだ。更に欲しいものはない」。

ハンゼン・グレルは立ち上がった。短い藁色の髪と赤みがかった瞼をした彼の不細工な顔が内部からの本当の美しさで変容した。「歌であれ、恋であれ、また自由であれ、祖国であれ、一度神々のように生きて、それから　ー　死ぬことです。やがて死ぬ、思い出の偉大な感情が色褪せぬうちに」。

彼らは更にしばらく語った。両人とも同じ考えにはまり込んでいた。それからレーヴィーンは言った。「一緒に出よう。外はまだ夕焼けが見られる。外で話すのが良さそうだ」。

こう言って両人は家を後にして、オペラ座を越えて、遊園地[ルストガルテン]と城の構内[シュロスフライハイト]へ向かった。

ソフィア教会の背後に丁度三日月が昇った。

第十八章
さらば

六時にレーヴィーンはまた住まいに戻って来た。ハンゼン・グレルと交わした会話がまだ彼の魂の中で響いていた。理想的なものの美しい力、簡素な状況から害を受けるというよりは支援されているその力が彼にこれほど純粋に感じられたことはなかった。彼は訪問の間、一度ならずファウルスティッヒ博士のことを思い出さざるを得なかった。しかし幾多の類似にもかかわらず、何という違いか。芸術に関与し、芸術に喜びを感じている点、両者は似ていた。しかし一方の者が美しいものをただ繊細に味わっているのに対し、もう一方は全身全霊で追い求めている。一方の者は軟弱になりながら、他方の者は鍛錬されていた。かくてグレルは手本となったが、ファウルシュティッヒ博士は警告となった。

今日はいつもはこの時間向こうの屋根の上にかかる夕焼けが欠けていた。それでレーヴィーンの部屋はすっかり暗くなっていた。彼はフーレン夫人の部屋をノックした。彼女は家にいなかった。同様に緑色の笠の明かりも欠けていて、隣室でも見当たらなかった。

「老夫人はどうしたのだろう」とレーヴィーンは言って、一瞬「乱雑さ」に嫌気がさし

たが、しかしまた笑って付け加えた。「勿論一年半で初めての乱雑さだ」。

彼は台所までおぼつかなく歩いて行って、竈の火をかき起こして、炎が出るようにし、長蠟燭に点火した。今一度点火の必要がないように用心して自分の部屋へ戻った。

このとき初めて、一通の手紙がテーブルにあることに気付いた。宛書きをちらと見ると、多分にトゥーバルの筆跡であった。最も人目を引いたのは、異様に大きな封印であった。内容が無用な詮索を拒んでいることが、明らかに見てとれた。フーレン夫人に弱点があるとすれば、この方面が弱点であった。

レーヴィーンはそのことを承知していた。彼はそれ故、封を破って開けられた紙をもっと良く読めるようにと、小さな長蠟燭の明かりまで持って行ったとき、微笑していた。しかし彼の微笑が続いたのはほんの一瞬であった。三行以上ないものであった。

「今夜は来ないで欲しい。カティンカが去った。彼女の書き物机の上にメモを残していて、我々に別れを告げていた。他は推測して頂けよう。　　貴兄のトゥーバル」。

その紙片は彼の手から落ちた。そして彼自身はソファーに戻って沈み込んだ。彼は一分間麻痺していた。それから立ち上がって、自分の頭をまず自分の組んだ両手の上に置き、それからテーブルの上に置き、ソファーの背もたれの上に置いた。しかし一切が彼には暑すぎた。彼は飛び跳ねて、窓辺に寄った。鈍い三日月が、丁度雲間から出て来て、彼の顔を覗いた。二，三羽のカラスが向こうを飛んで行った。そして下の方ではランタンがぎしぎし音を立てた。窓ガラスの冷たさは心地良かった。しかし不安が残り、高く心臓に昇って来た。彼は外気を求めた。それで梁からフェルト帽を取って、玄関と階段へ出た。すでに最初数段降りたところで、突然小さな心配事が生じ、再び戻って、テーブルに置いてあった数行の紙片を千切って、そしてまだ燃えていた長蠟燭を消した。そしてようやく家を後にした。

下の方では彼はケーニヒ通りへ曲がって行った。しかし石の塊で、彼の心が部屋で圧迫されたように、圧迫された。それで彼は町から出なければならないと明確に感じた。かくて彼は右手に行き、それからアレクサンダー広場を越えて、フランクフルト門の方へ向かった。

それはダールヴィッツの森での穴熊狩が予定されていた日に向かった道と同じであった。彼が旅館「新世界」の近くへまた来たとき、この前は真の午前中の静寂の中にあったのが、今やすべての窓に明かりが点されていた。クラリネットが演奏されて、中では暑すぎると感じた若いカップルが、外の雪の積もったリンデンの木の下に立っていた。吹きすぎて行く風、積もった雪には頓着していなかった。次に踊るとまた涼しさを求めて出て来るのだ。

レーヴィーンは二つの支柱の一つに寄りかかっていた。その支柱は上に置かれた横木と共に「新世界」へのかなり原始的な入口を形成していた。中の音楽はますます元気になって行った。彼は右足で拍子を取って、踊りがとても気に入っていた。「一緒に踊りたいものいだ。踊りたい者には演奏は易しいと諺には言う。しかし何故言わないのか。演奏される者は、踊れ、と」。

この瞬間背後から一本の腕が彼の腰に巻かれた。彼が気付かないうちに生垣に忍び寄って来たに違いない若い娘が、親しげに言った。

「来てよ、音楽が始まるわ。今度はスコットランドの踊り。私とマールヘンを家まで送

ってよね」。

それは執拗というよりも悪戯っぽく聞こえた。レーヴィーンはこのことを感じ、振り向いて彼女の手を握った。少女は、彼を取り違えていたのであろう、今ようやく彼の胡乱な顔を見て、驚き、前庭を横切ってホールへ戻って行った。中で彼女はこの出会いについて語ったに違いなかった。すぐその後二，三の頭が窓辺に現れて、見知らぬ男を好奇心を抱いて眺めたからである。

勿論長くは続かなかった。今や本当にスコットランドの踊りが始まったからである。レーヴィーンは更に歩きながら、行軍のための正しい拍子を取ろうとした。しかし少ししか続かなかった。ダンスのリズムが他のものよりも強かったからである。そして強制的行軍のテンポは次第に崩れて行って、奇妙に踊りと歩行とを取り替えながら、真っ直ぐなポプラ街道を下って進んで行った。シュナーターマン家の日、退却軍の悲惨さに遭遇した箇所を通り過ぎた。しかし彼はもはや震撼される出会いのことは思い出さず、ただ音楽の拍子だけを数えていた。この音楽そのものは夙に聞こえなくなっていたのであるが。

「このように踊って行くこと」と彼は言った、「それが人生だ。深刻に考えないことだ。私は最良のことを怠って来た。挙げ句が今日もまたそうだ。彼女は可愛く、気取っていなかった。『私とマールヘンを家まで送ってよね。...しっかりして、レーヴィーン』。いや違う。そうは言わなかった。その言葉はもっと以前だ」。

彼はしばらく黙っていた。自分の考えを静かに更に紡いでいた。「ヨハンナ・ズーゼミールは、結局どうなった。老ツンツ夫人が子供を祝福しようが、しまいが、何の関係があろう。彼女は死んでしまった。ただ補給マーシャルは、思うに、まだ生きていよう。彼は帽子に縁飾り、それに総飾りを有していた[Matthias Claudius の詩の響き]。外国人の縁飾り、いやそのせいだ。新しいもの、外国風なもの。何か別様なもののせいに違いない。母なるイヴの時代のように好奇心のせいだ」。

彼はいまやフリードリヒスフェルデ[平原]を越えていた。振り向くとまだ村の明かりは見えた。空には星一つなかった。三日月には雲がかかっていた。ますます密に、ますます早くかかった。しかし更に早く彼の魂の中ではイメージが過ぎて行った。

「フーレン夫人は驚くだろうな。小さなランプで私を探すことだろう。隠れた恋人を探すように。実際そのことをしている。ただ隠れ方がすごい。私は決して見つからないだろう。フーレン夫人は、フランス語の子供の歌を詠み上げられたときのように、呆気にとられることだろう。『ピーチク、パーチク』と言っていたな。愚かな言い草ではない。どんなだったけ。

私の孫娘の誕生日に、
誰もが何かを持って来たがる。
パン屋は菓子パンを、
仕立屋は赤いコートを。

そうだ。こうだった。『パン屋ハケーキヲ焼イテ、仕立屋ハ小サナコートヲ作ル』。とても容易な箇所に見えたのだが、その後とても難しかったな。まだ覚えているが。...しかし何とも奇妙な組み合わせだ。フランス語の子供の韻がフリードリヒスフェルデとダール

ヴィッツの間にある。しかし何でもない。更にもっと奇妙なことがあるのだ」。

彼は今や、その名前を彼が名付けたばかりの村を通り過ぎた。古い楡で占められた車道は暗がりの中にあった。大抵個別に立っている家々の鎧戸は閉められていた。しかしハート形の開口部からは小さな明かりが路上に漏れていた。

「燃える心は」と彼は言った、「朝方にはまた壁に収まる、以前と同じように真っ黒だ。四時間燃えるのは、十分長い。ここには牧師が住んでいる。彼は六時間燃える」。

牧師の家を過ぎて、百歩行くと、村は終わった。レーヴィーンは野外に出た。彼は悪寒がした。夜風のせいか、熱のせいか。彼は上着の襟を高くして、帽子の垂れ縁を下に下げた。しかし悪寒は残った。

「どこへ行こうか。分からない。それとも引き返そうか。いやだ。また家々の塊に戻ることはできない。息が詰まる。殺されてしまう。更に行くしかない。多分どこかに着くことだろう」。

それで彼はまた歩き続けた。四分の一マイル、半マイル。右手にかけて、街道のある曲がり角に、ある教会の塔の影絵が見えた。

「疲れたな。ほとんど腹ぺこの感じがする」。

彼は道路の側に運ばれて来た岩塚の上に腰かけて、滑らかな雪道を越えて、自分の側を舞い飛んで行く枯れた葉を見つめた。数時間前からすでに厚い集雲を追いやっていた風が、今自ら吹いて来て、ポプラ並木の間で散らして行ったからである。南西の風で、湿って、小さな雨粒が一杯であった。しかしこれらの滴の一つ一つがまた凍って、彼の顔を針のように刺した。「雪解け風」とレーヴィーンは言った、「何と言うのだっけ。雪解け風が南の海から吹いた。...雪解け風何たらだと思うが、しかし他は忘れてしまった[Bürger のバラード Das Lied vom braven Manne]。わずかに思い出すのは人物ばかりだ。伯爵に税官吏、それに正直な男。私は誰だろうか。伯爵は違う、正直な男、そうだこれだ、これが私の役回りだ」。

彼は街道を見上げ、見下ろした。そして言った。「これは湿地[ブルフ]を通って行くポプラの並木道に見える。あそこの下に立っている影はグーゼの教会かもしれない。...四週間になるな。一年経ったように思える」。彼は自分の手で額を支えて、夢想した。そして夢の中で、かすかな遠くの鐘の音がますます聞き取れるようになって響いて来た。憧れが一杯になって、それに耳を澄ました。とうとう、涙の慰謝を感ずるかのように、重苦しい心が解放されるかのような気分になった。

しかしそうはならなかった。別な風に決定されていた。ただ夢の中で聞こえていたと思った物音は、実際近付いて来た。そして彼がまだはっきり目覚めないうちに、ダールヴィッツの方から乗り物がポプラの間を進んで来るのが見えた。奇妙なことに、その物音から推察される橇ではなくて、軽快な、幌のない馬車で、その二頭の小さな馬には、気まぐれからか、あるいは過度の用心からか、鈴のベルトが取り付けられていた。今やこの馬車が近寄って来た。馬は臆して、右側に逸れた。前の席に若いカップルが座っていた。男性は両腕を組んで外套を着ていた。女性は大きく、すらりとしていて、ぴったり合った上着と、毛皮で飾られた帽子を着用していた。顔は分からなかった。しかし彼女が手綱を握っていて、道端に座っている男を見かけて激しく驚いていた。次のポプラの木の所でようやく彼女は今一度振り返って、それから大方多分に勢いよく同行者に語りかけていた。

レーヴィーンはこのことをすべて見ていて、何をしているのか分からないまま、飛びだして、速やかに消え去って行く馬車を追おうとした。彼は声を上げ、叫ぼうとした。しかし声を出せなかった。彼は駆け、最後の力が尽きて、声を上げずに、道の中に崩れ落ちた。

一時間後、一台の橇がボールスドルフの居酒屋の前に止まった。丁度塔の鐘が鳴った。馬の挽き革を外すために、切り藁袋から降りた下僕が、鐘の音を数えて、うんざりしたように思わずつぶやいた。「十一時か。真夜中過ぎに着くことになるな。しかしあれを放ってはおけなかったもんな」。そう言って、側に二，三の雪の積もった飼い葉桶のある生垣の方へ向かって行った。一方中庭、庭園の側からは、高く築かれたパン焼き窯の熾火が、丁度柴の束が燃え落ちて、垣根越しに通りに見えていた。下僕はじっと見つめていたが、温かい息吹を喜んで、それから飼い葉桶を、ただひっくり返して中の雪を除いた後、輓馬の前に持って行き、切り藁袋を開けた。馬は十分長く待ったと思って、口で空の桶の中を探し、嗅ぎ回った。一回馬をぴしゃり叩いて、「ちょっと待て、ほら」、そしてようやく餌を放り入れた後、玄関を通って居酒屋の中へ踏みしめながら入って行った。二枚の大きな板の上には、窯の中へ入れるために出来上がったばかりのパンが置かれていた。

「今晩は、女将さん」。

「今晩は、ダーメロー、こんなに遅くお仕事」。

「そう、哀れなもんだわな。いつもながらこんな悪天候は骨身に堪える」。

「その通り。何にする。チェリー酒、それともカラム酒」。

「チェリー酒を頼む。だがちょっと待った。橇に誰かさんを拾ったんだ。里程標石のところで死んだように寝ていたがね。ひき殺す所だったがね」。

「誰だか分からないの」。

「知らねえ。町からの奴に見えるがね。ベルリン子かな。一緒に来てくれねえか」。

まだ拭いていた居酒屋の女将は、小さなランタンを板から取って、蠟燭の燃えさしを入れて、また留め金を掛けて、下僕に付いて通りへ出た。そして二人は橇の背面に近付いた。橇は二つの籠壁があったが、背面は開いていた。下僕は毛布代わりと思われた藁束を押し戻して、居酒屋の女将が橇の中を照らし出した。しかしランタンは彼女の手から落ちた。彼女は叫び声を上げた。それからまた家の中へ走って行き、隣のアルコーヴで眠り込んでいた夫を揺り動かして、叫んだ。「起きて、ドレーヴ、早く来て。死んでいるかもしれない」。

「誰なんだよ」と亭主は、目を覚ましながら言った。

しかし女将はすでにドアの所にいた。「神様、仏様、おめえさん、誰だと思う。...ホーエン・フィーツの若旦那だよ」。

第四巻
再びホーエン・フィーツにて

第一章
ボールスドルフ［Bollersdorf より］

三日後であった。客室の背後にあるアルコーヴにはボールスドルフの居酒屋の女将が座っていて、自分の子供を覗き込んでいた。子供を歌で寝かせつけていたが、小声であって、更に一層こっそりと揺り籠を揺すっていた。この用心は必要なかったであろう。というのは、この用心が向けられていた病人、アルコーヴの上のベッドに寝ていた病人は、三日目になっても深い眠りの中にあったからで、自分の周りで起こる一切に対して、無感覚で死んだようになっていたからである。医者にはまだ診て貰っていなかった。しかし看病は行われていた。もっとも昨日から二人の女性によって間断なく行われている単なる注視と待機とを看病と呼ぶならばの話しであるが。

正午が過ぎていた。二時になったかもしれない。すでにまた沈みかけた太陽が小さな屋根裏部屋の窓越しに見えて、病人本人から発生しているような優しい輝きが、この病人の周りにも見られた。

「彼の額は潤っている」とショルレンマー叔母が言った、「レナーテ、行きなさい。休みなさい。十五分だけでも」。

「疲れていません」。

「そうしなくちゃいけません。行きなさい」。

そして彼女は行った。しかし休むためではなく、約束していたホーエン・フィーツ宛の手紙を書くためであった。

彼女達の到着の後すぐ居間兼寝室として空けられた小部屋はこの家の次の切妻壁の屋根裏部屋にあって、到着の最初の瞬間にいつも生ずることになる例の無秩序をまだ示していた。整理し片付けるにはまさにまだ十分時がなかった。二脚の椅子の上には開けられた旅行トランクがあって、両ベッドの一つにはマフや外套が、あらゆるショールや布類と共に投げられていた。

レナーテは今になってもこれらの品には目を向けていないように見え、一切をそのままにしておき､ただテーブルだけをより良く明かりを得るように窓の支柱の側に持って来た。それから赤い亜麻布のテーブルクロスを、かなり無遠慮に外した。テーブルクロスには尾を広げた孔雀が白く模様付けられていた。それからカールスバート製の筆記ケースをトランクから出した。これは、開けると写字板となるものであった。しかしインクは固く乾燥していた。とても固くて、数滴の水を垂らしても役立ちそうになかった。それで別の解決法を見いださなければならなかった。彼女はメモ帳から細い鉛筆を取りだした。勿論先が欠けていた。できるだけ先を鋭くして、今やただ筆圧が弱い場合にのみ判読し難いものになる筆跡で次の文を書いた。

「ボールスドルフ、二月一日

親愛なるマリー

私どもは昨日四時にこちらに着きました。私どもの病人は深い眠りにありました。今も

この眠りは続いています。この眠りがどんなに深いか、今朝分かりました。私が暖炉の横にある火かき棒に当たってしまい、大きな音がしてびっくりしました。しかしレーヴィーンは目を開けただけで、またすぐに閉ざしてしまいました。ちなみに彼は私のことが分かったようです。彼が微笑むのが見えました。もっともただ夢の中のようで、すぐにまた眠りの力に負けてしまいました。今すぐにもドクトル・ライスト先生が現れるのを待っています。この手紙はドクトルの言葉を聞いてから出すことにしています。

全体どうして生じたのでしょう。すでに分かっていたことより他のことはほとんど分かりません。あなたにしても私どもと同じです。一人の下僕が道で気を失っている彼を見つけて、橇に乗せて行き、ここボールスドルフで下ろしたのです。居酒屋の人々が彼を受け入れ、大事にお世話したのです。彼は屋根裏部屋にいます。ショルレンマー叔母と私は別の屋根裏部屋にいます。廊下で隔てられています。

何故彼がベルリンを去って、風と悪天候の中ここまで来たのか、これについては単に推測してみるだけです。そしてこの推測もほとんど出来ません。何か突然のことだったのでしょう。軽装でしたし、ただ上着とフェルト帽を着用しているだけだったから。湿った冷たい夜だったというのに。下僕が彼を見つける一時間前に、ボールスドルフの行政官が、若い夫人と一緒に隣村の一つからやって来て、街道の里程標石に座っているのを目撃していました。その若い夫人は（とても可愛くて）今日の午前私の所にやって来て、出会った時のことを話してくれました。幽霊を見たかのように彼のことでびっくりしたと言っていました。それから彼は飛びだして来て、彼女らの馬車をかなりの距離、ポプラの間を追って来たそうです。少なくともそのように思えたとのことでした。しかし確証はないそうです。すべてがぼんやりして謎めいているでしょう。若い夫人は三十分ほどこちらにいたかしら、カティンカと似ていて、驚きました。着こなしそのものも似ていました。それでただ一例を挙げると、ポーランド風の白い毛皮で飾られた帽子を被っていました。

マリー、何と周りではすべてが変わってしまったことでしょう。今では静かなホーエン・フィーツの日々がなつかしい。あんなによくぼやいていたけれども。四方八方から切迫して来ます。私の心は余りに弱く、小さく、起きることのすべてに然るべき心配りをすることができません。平静な時だったら、伯母さんの突然の訃報を聞いたら、悲しくなったか、あるいは手伝っていたことでしょう。今はそのことを考えることもなく、時間が過ぎて行きます。ただあなたのことだけは、沢山、いつも考えています。

今日のうちにもグーゼからの頼りがあるものと待っています。父上が約束して下さった。伯母さんの葬儀は明日と思います。それに列席すること、それは考えられません。レーヴィーンが大丈夫と分かるまでは、ここから離れられません。老ライスト先生が来ない。...でも彼の声が大きく、階段に響いて聞こえます。家の中では皆がひそひそ声です。やって来る下僕達でさえ、静かにするよう合図され、その強制に従います。でも老先生達は語り方や立居振舞では無遠慮の特権を得ていらして、老ライスト先生も例外ではありません。差し当たり筆を置き、先生の仰有ることを聞くことにしましょう」。

レナーテは紙片を筆記ケースの下に押し込み、すでに向こうのベッドにいるドクトルに出会った。外套の襟の上の左右の厚い紐に結ばれた毛皮の手袋を有する彼は十分怪奇に見えたが、空いた片方の手で挨拶し、もう一方の手で病人の脈を数えていた。彼は満足しているように見えた。更に額とこめかみを触って、それから言った。「彼を一人っきりにし

ておこう。我々は必要ない」。そう言って、三人は皆この静かに眠り続ける若者の許を去って、女性達の部屋へ移った。そこで老医師は外套を脱いだ。その間レナーテはレーヴィーンの発見に随伴する諸々の大小のことを、マリー宛の手紙と同じ流儀で報告し始めた。

「結構、結構」と明らかにかなり上の空のドクトルは彼女の言葉を遮って、そして蘆付き椅子に腰かけて、幅広の褐色の染みのある両手を心地よさそうに摺り合わせた後、親しげな調子で続けた。

「それでね、レナートヘン、更にお喋りする前に、私はコーヒーを頼むよ。それはつまり、お願いすると、コニャック入りコーヒーなのだ。ミルク入りコーヒーは御免だね。それは管区臨床医老ドクトル向きではない」。

ショルレンマー叔母は願いのものを持って来るために出て行った。しかし老ライスト先生は、すべてのドクトルがそうであるように、軍医が初勤務ではなかったとしても、話し好きで、逸話をよく語り、永遠に同じ病気の話しから逃げだそうとし、ショルレンマー叔母が出て行くと、最後の言葉を繰り返して、それから釈明して付け加えた。「あのね、レナートヘン、ミルクは関係ないのだ。コーヒーのことを言っている。コーヒーの話しでなければ、ミルクの話しなんかしない。大事なことだからね。しかし話したいことはこうなのだ。あのね、フランス人というのは普通私の趣味じゃない。ギロチンの仕掛けとか、当時彼らは『ラ・テルール』とか我々は恐怖とかテロリズムと呼んだものだが、これは忘れられるものじゃない。しかし正直に本当のことを言うと、コニャックコーヒー、これはでかしたものだ。フランス人にも我々より優れた点がある」。

レナーテは苛々して左右に体を揺すった。しかし老ライスト先生は気付かないように見えて、続けた。

「それに本来私が正直にこれに帰依するのは、私の義務であり責務であるという以上でもなければ、以下でもない。というのはこのコニャックコーヒーがなければ、私は生きていないだろうし、この立派なボールスドルフの居酒屋に座ってもいないだろうからなのだ。九十三年戦役[実際は一七九二年秋]のことを聞いたことがあるかな。フランス人の言い方ではキャトル・ヴァン・トレーズだがな。彼らはピシャッとしたもの、そう耳に響くものを愛好している。あたかもユニークなもののようにな。それでね、当時、そう、シャンパーニュ戦役だったわけ。私も参加したアルト・ラリッシュ歩兵中隊と一緒に。それで『シャンパーニュ』だが、これは響きが全くよろしい。それが良く分からない者は、ただ丸みのあるワインの瓶とポンと天井に届くピカピカの栓を考えるとよろしい。しかし可愛いお嬢さん、我々のシャンパーニュは全く別だったのだ。雨が昼も夜も降って、いつも露営で、野外の石灰土壌、粘土土壌の上でキャンプとなった。これは雨水を浸透させないのだ。それで四週間しないうちに、プロイセンの軍の半ばは、露営ではなく、野戦病院行きとなった。老ライスト先生は、ドクトルではあったが、用心が足りなかったら、やはり野戦病院行きとなっていたことだろう。ドクトルは野戦病院がいかなるものか知っていたからで、知っていたが故に、むしろこっそり抜け出して、一軒の百姓の家までよろよろ行ったのだ。そこの戸口にな、お許し願うが、一人の太ったフランス人の老婆が立っておった。この老婆がドクトルに同情されて、引き受けてくれたのだ。要するに私を塔のように高いベッドに押し込んで、私が悪寒戦慄に襲われて、まだある限りの歯を寒さの余りガチガチと震わせているとき、夫人は一杯のコニャックコーヒーを持って来た、一杯、二杯、何杯飲んだ

か分からない。しかし三日目にはまたしゃきんとなったことを覚えている。それ以来一切の困難な状況のときにはコニャックコーヒーを飲むようにしているのだ。十度の寒さの時の七マイルもその状況の一つだろう。まずは感謝の念から飲み、次に用心の意味で、第三に味が良いから飲むのだよ」。

この瞬間またショルレンマー叔母は再び入って来た。そして居酒屋の女将が要求のコーヒーと共に続いた。カップの横に一杯のグラスがあった。ドクトルはグラスに秋波を送り、礼儀と欲望の間で揺れていたが、いつものように欲望に負けて、グラスを一気に飲み干した。混ぜる過程は省略された。

レナーテは最初苛々していたが、老先生の講釈の間にそれは高まるというよりは消えていた。そして微笑して彼を見ていて、それから手を彼の腕に置きながら、言った。

「では、ドクトル・ライスト先生、私どもの病人はどんな具合です。危ないですか」。

「危ないか、危なくないか」と老先生は戯れに叱るような調子で答えた、「危なければ、九十三年戦役の話しはしないよ。レナートヘン、老ライスト先生の舌先に何か気になるものがあれば、味はしない、たとえコニャックコーヒーでもな。彼の具合のことか。問題ない。健康に眠っている。危険は何もない。神経衰弱だ。それが全て」。

レナーテは黙った。彼女はそれ以上尋ねようとは思わなかった。事象の関連を予感し始めたからである。しかしショルレンマー叔母は、このような状況を何も知らず、半ば怒って尋ねた。

「神経衰弱。それは何です。どうしてです」。

「それはね、叔母さん」とライストは答えた、「哀れなドクトルには知り得ない話しです。ドクトルはどういう事態か分かれば、それで満足しなければならない。どこから生じているか、それには立ち入れない。これはまさに病人自身だけが知っています。我らのレーヴィーンはきっと承知していよう。そしてある日我ら皆の好奇心を満たしてくれよう。本当に面白い話しだ、それは保証するよ」。

そう言って老先生は思わず策謀的ににんまりした、あたかも恋愛小説を冒頭から最後まで読み通したかのようであった。

「でも服務規程を教えて」とレナーテは言った、「どうしたらいいのですか」。

「待つことだ。これがそもそも人間ができる最良のことだ、時だ。時。時がすべてをもたらす。病人には健康をもたらす。だから待てばいい」。

「どれくらい」。

「そうだな。それがまた問題だな。計算してみよう。今日が三日目とすると、五日目になるかな。つまり明後日だ。明後日には眠り尽くすことだろう。そして何かを欲しがることだろう。ひょっとしたら炒めたベーコンか、玉葱か。それは何にしろ与えてやらなければならない。声を上げているのは、自然の声だからな。自然の声には従うのがよろしい」。

「まあ、嬉しい」とレナーテは言った、「私の手紙を嬉しい知らせで締め括ることができます。貴方がいらっしゃる前に、丁度マリー・クニーハーゼ宛に書いていたのです。ドクトル、最後の行を口述筆記させてくださいな」。

「そうしよう」と老先生は言った、「それに郵便配達も引き受けよう。ホーエン・フィーツを経由して行くから。用意はいいのか」。

「いいです」。

「それではこう書くことにしよう、『...丁度ドクトル・ライストがここにいらして、こう保証されています。危険はない、二日したら私どもの病人はベッドから起き上がって、三, 四日したら元通りになるだろう、と。このことすべては老先生の口述で書いています。老先生自らこの手紙を持参されます。点。ダッシュ。あなたのレナーテ』」。

レナーテは跳ね起きた。上機嫌になって、ドクトルに紙片を押し付け、言った。「それでは白地に黒く[印刷]しました、ただ下に署名をお願いします。『以上確かに』そして貴方のお名前を。でもドクトルの書き殴った字ではなく、誰にでも読めるように、はっきりとですよ」。

老先生は命じられたようにした。それから彼は立ち上がった。そしてレナーテが、彼がまたその重たい、沢山の襟がある外套を着る手伝いをしている間に、自分の往診を次の言葉で結んだ。「ただ後一言。レディーの方々。健康な方々に、病人にかまけて自分達を疎かにしないよう頼まなければなりません。さもないとただ役目を交替することになります。だから夜の看病とかその他の余計な馬鹿騒ぎはしないことです。叔母さん、よろしく頼みますよ。明後日また様子を見に伺います。それではおいとましましょう」。

彼女らは階段を降りて、玄関の下に止めてあった馬車の所まで行った。やがて馬が引いていった。レナーテとショルレンマー叔母は老先生を見送った。本当の心配事が二人から除かれていた。彼はしっかり保証していた。夕方頃看病の老婆がやって来て、二人は病人のベッドから離れることになった。二人はそこで自分達の屋根裏部屋へ行って、二晩の不眠の夜の後、落ち着いた夜を迎えた。

レナーテは疲れていた。しかしショルレンマー叔母はいつものように矍鑠として機敏であった。彼女は愛しい娘の許に腰かけ、まだ十五分ほどお喋りする気であった。

「グーゼではどんな具合かしら」とレナーテは尋ねた、「ショレレンマー叔母さん。伯母の夢を見ないか心配です」。

「そんなことはありませんよ」。

「一体どんな風にして亡くなったのかしら」とレナーテは続けた、「キリスト教徒らしい死に方をしたとは思えない。それで今棺の中にいる伯母が思い描けます。青ざめて、黒い未亡人頭巾をして、その先端飾りがいつもより更に深く額に張り付いています。この像を思うと恐い。良いことじゃないかもしれない。ショルレンマー叔母さん、あなたにこう言いたくなります。私はグーゼよりここボールスドルフにいる方がいい、と。良くないことかしら」。

ショルレンマー叔母は彼女の手をさすって、言った。「それが良くないこととしたら、レナートヘン、小さな良くないことですよ。死者の顔を覗くことがキリスト教徒の務めなのか私は本当に分かりません。伯母さんは何か不気味なところがありました。イエスを蔑ろにする人は皆、イエスの恩寵の輝きを頂けません」。

「それでグーゼはどうなるの。あそこは自由所有地で、購入荘園としてプダグラ家には戻らないのですよ」。

「一人の相続人は分かっています」。

「誰」。

「レナーテ・フォン・フィッツェヴィッツ。でもその時には別の名前でしょうね」。

「止めてよ。何を仰有るの。私は哀れなお嬢で、立派な荘園なんて」。

「それがね、レナートヘン。人間は必ずしも表面通りではありません。あなたは私がグリーンランドとノイ[新]ヘルンフートのことだけを考えていると思うでしょうけど、私は全く別のことを考えています。私も小さな情熱があって、人々を結婚させるのが好きなのです。私が未来を見るとしたら、わけても見るのは、..」。

「何」。

「結婚式の行列を措いてありません。小さな行列、大きな行列。あなたに、マリーに、マリーネ。エーフェに対してさえももう考えてありますよ。あの娘は尊大で、本来それに値しないけど」。

「カティンカは」。

「いや、カティンカは考えない。彼女はすべて自分で行います。私の手配を必要としない」。

「まあ、羨ましい。そんな素敵なことを考えることが出来るなんて。私には結婚式の行列は見えない。今そのような行列を思い浮かべるとしたら、黒々としています」　。

「それはグーゼのことを考えているからですよ」。

「あなたの仰有る通りと思う。少なくともそうであればいい。でもあなたが側にいらして、本当に嬉しい。大晦日前の晩を思い出します。幽霊への不安を物語で追い払ってくださった。カヤルナク、最初の洗礼を受けた者の話しでした。私は良くその名前を覚えているでしょう。でも今日は眠りたい。あなたの歌の一つを歌ってくださいな。本当に素敵なものを、子羊とか小さな天使の甘いのではないものを。甘いのは堪えられない」。

「それではほんとうにしっかりした芯のあるものにしましょう」とショルレンマーは言った。

御身の王座より見守り給え、
父親にして聖霊にして息子たる御身」

レナーテは同意して頷いた。老叔母はますます小声になって行く声で第三節まで続けた。

私の痛みと共に
私の心を清め給え。
私の我意が静かに
御身の意志に従いますように。
まだ私のものであるすべてが
御身一人のものとなりますように。[Zintendorf による。痛みを「私の」痛みと変更]。

彼女は更に語らなかった。レナーテは両手を組み合わせていて、微笑み、眠った。

第二章
ある出会い

次の午前の太陽は、明るいボールスドルフの屋根屋根に輝いた。レナーテは行政官の妻

の許へ、返礼の訪問で出掛けて、丁度荘園の家屋敷から戻って来たとき、立派な馬車が居酒屋の前に止まっているのを見た。その馬車の所有者の主人は、その間村の路地を散策していた。彼は背が高く、毛皮の上着に、毛皮の長靴であって、時々教会の塔を見上げていた。そのグロテスクな形状の雪の覆いが彼の注意を引いているように見えた。近寄って見ると老枢密顧問官とレナートには分かった。

「ラダリンスキー叔父さん」と彼女は叫んで、彼に急いで向かった。

枢密顧問官は明らかに気後れしていた。最初の挨拶の言葉の後、短い間が生じた。そしてレナーテが尋ねた。

「グーゼへの途中ですか」。

「そうだ、親愛なるレナーテ。伯母さんの葬儀のためだ。しかしどうしてこの村にいるのかい。グーゼで会うものと思っていた。あなたに、レーヴィーンに、それに父上に」。

「グーゼでは父上にだけお会いになるでしょう。レーヴィーンはここにいます」。

「レーヴィーンはここにいるのか」。

「そうです。病気で、意識がなくて。もう四日目になります。こちらの人々が一人の使者を送ったのです。伯母の訃報が届いた同じ朝のことでした。父上はグーゼに行って、私はこちらに来ました。ショルレンマー叔母と一緒です。レーヴィーンは、使者が伝えたことすべてで私どもが覚悟していた通りの状態にありました。兄は深く眠っていました。一切はぼんやりしています。あれこれ推測しています。何故、濡れて冷たい夜、ベルリンから出て、こちらに来ることになったのか、と。一人の下僕が死んだように街道の里程標石の横に倒れているのを見つけたのです」。

枢密顧問官はしばらく黙っていた。それからレナーテの腕を取って、言った。「それでは何も知らないのか。あのな。何という日々を過ごして来たことか。カティンカが家出をした。二度と再会することはないだろう」。

そういうことだったのだ。今やレナーテは判然とした。しかし枢密顧問官が彼の言葉で予期していた程には余り驚いていないように見えた。

「レーヴィーンに会えるかい」と顧問官は尋ねた。

「はい、上に寝ています」。

彼らは今や階段を上に上がって行き、病人のベッドの側にショルレンマー叔母を見いだした。彼女は部屋を去ろうとした。しかし枢密顧問官は残るよう頼んだ。レーヴィーンは、眠りを喜んでいるかのような表情で眠っていた。老ラダリンスキーはこの光景に心打たれていた。かの日以来、顧問官は爽やかな眠りを奪われていた。彼は病人の手を取って、言った。「彼は治ることだろう」、そしてこの言葉を語るときの苦痛の調子に、次の言葉が伴われて響いた、「私は治らないだろう」。

かくて二人はまた家を離れて、村の路地へ戻った。その間、若い者や老いた者が、軽装二輪馬車と、そしてうんざりして（桟敷の手摺であるかのように）革太鼓越しに覗いているグレーハンドの周りに集まっていた。

「もう少しだけあなたとお話ししたいのだが」と枢密顧問官は言って、そして軽く頭を振って村の人々を指さした。人々は今やその好奇の視線を馬車よりも、やって来る二人連れに向け始めていた。

「教会へ行きましょう」とレナーテは答えた、「ドアが開いています」。

彼はそれに異存はなかった。二人は半ば崩れた荒石壁の上を越えて、二，三の墓塚の側を通り過ぎて、レーヴィーンがクリスマス・イヴの時、入って行った同じ脇口のドアへ歩んで行った。

教会では一切が荒涼としていた。ただ黒板にまだ先の日曜日に歌った賛美歌の番号が書かれていた。鋭い斜光線が祭壇の絵にかかっていた。磔刑の絵であった。マリアとヨハネは欠けていた。ただマグダレーナだけが跪いていて、十字架を抱えていた。先の世紀の半ば頃からの醜い絵であった。マグダレーナが最も醜かった。赤みがかったブロンド髪の高いトゥーペー[逆毛前髪]をしていて、その髪には大きな真珠が編み込まれていた。表現は官能的で粗野であった。枢密顧問官の趣味ではなかった。彼は顔をそむけて、この光景を見ないで済むような教会の席を探した。それは見つかった。祭壇の横、隅の方に持ち上がっていて、四つの古い内陣座席があった。それらは、その彫刻作品から推察するに、まだカトリックの時代からのもので、こちらで教会の改築の際にそれ以来支援を得たものであった。老ラダリンスキーはそちらを指し示して、二人は最前列の席に座った。

どちらも、カティンカについて話すのを恐れた。それでスムーズに会話が進む前に、支えた。ようやくレナーテが気を取り直して、言った。「トゥーバルがいないのは寂しい。伯母さんの寵児でしたよ。葬儀に出ないのですね」。

「控えるというのはそれでも正しい気持ちなのだ」と枢密顧問官は答えた。

レナーテは訝しげに見つめた。

「正しい気持ちなのだ」と顧問官はちょっと間を置いて繰り返した。「共同の責任の気持ちだ。大事なレナーテよ、我々が自身に担っている責任は一人では負えない。一緒に担うよう他の者達が強いられる。トゥーベルはそう感じているのだ。彼はあなた方の誰にも合わす顔がない、レーヴィーンにもあなたにも」。

「それでも乗り越えるべきでしょう」とレナーテは言った、「そうしなかったというのは、ラダリンスキー叔父さん、良いことには思えません。少なくとも良いこととは言えません。繊細な気持ちに従ってはいますが、私どもの気持ちを分かっていません。それはいけません。そうでないと、私どもはそのような共同責任を認めない、その気持ちは受け入れられないと言わざるを得ないでしょうから」。

彼女は一瞬黙った。それから会話を別な方向へ導こうとするかのように尋ねた。「伯母はどのようにして亡くなったか御存じでしょうか」。

「いや何も聞いていない。私が知っていることはすべて、あなたの父上の短い知らせからのものだ。私は震撼された。彼女は私の心に寄り添って下さっていた。こう考えて、気を紛らわす他なかった、つまりこんなに速やかに思いがけず亡くなられて、知らずに済んだことがある、と。自分の計画が邪魔されるのを見るのは好きではなかったからな。こんなに邪魔されてしまって」。彼はしばらく黙っていた。それから付け加えた。「彼女の計画、レナーテよ、それは私の願いでもあったのだ。その計画でまだ残っているすべてを、私はあなたの手に委ねる」。

レナーテは宙を見て、赤面した。しかしそれから速やかにほとんど快活な調子で言った。「ラダリンスキー叔父さん。率直に言わせてください。そうして宜しいでしょう。叔父さんは正しいドアをノックしていません。御承知でしょう。御親切に私の手に委ねようとしているもの、それは別な方の手にあります」。

「いや、レナーテ、あなた次第なのだ。一人の心が別な心に対して強いているが。それで分かっているのは、...」。

彼女は頭を振った、そして答えようとした。しかし両人は外のドアで今やかきむしる音を聞いた。そして次の瞬間、グレーハウンドが教会の中央通路を駆けて来て、落ち着きなく頭を振りながら、吠え、鈴を鳴らして、枢密顧問官の前に立ち、それからまた脇の入口へ戻って行った。主人も付いて来るか、絶えず振り向いていた。

「御者や従者が辛抱できなくなっている」と老枢密顧問官は言った、「打ち切らざるを得ない」。

そう言って、両人は教会を去り、再び教会墓地を越えて馬車へ向かった。馬車には丁度グレーハンドが押し込まれていた。枢密顧問官はその横に腰かけて、犬を撫でた。そして右手をレナーテに別れのために差し出した。

「会話は忝い。よく覚えていて欲しい。頼んだよ」。

そう言って、二人は別れた。レナーテは居酒屋の玄関の下に立っていて、馬車を見送った。彼女はトゥーバルのことを思っていた。彼女はトゥーバルの顔を思い出そうとした。しかし彼女が見たのは、いつもカティンカの面影であった。

「二人はこんなに似ているのかしら」と彼女は自問して、階段を上がって行った。

一時間後、居酒屋の女将が食事を持って来て、テーブルクロスを置き、こんなに遅くなって、と再三詫びた。「しかし『威勢のいい赤ん坊』がなかなか寝ようとしない。誰の子なのか分からない。父親の子じゃきっとないだろう。父親は寝過ぎるのだから」と。彼女の語り方は、そのお喋りから察するに、身分より上のものであった。かなり自在な物言いで、ただ時折、勢いが増すと、低地ドイツ語が漏れて来た。

ショルレンマー叔母とレナーテは腰かけて、テーブルに三つ目の椅子を寄せた。

「ここに居て下さいな」とレナーテが言った、「美味しく頂きますから御覧下さい。料理自慢ですよね。昨日すぐ気付きました。赤ん坊は眠っているし、時間があるでしょう。何か話して下さい。私どもはこちらに来て、まだお名前すら伺ってない」。

「ケムニッツと申します。...これは夫の姓で」。

彼女はこう言ったが、自分の父方の名前は一ランク上であったことを匂わせる言い方であった。

レナーテもそれに気付いて、それ故こう続けた、「あなたはきっと町の出でしょう。アルト・ランツベルクかミュンヘベルク出身ですか」。

「いいえ、それは違います。私はここの出です。私の父は学校を経営していて、私がレッメルヒルト牧師の許で堅信礼を受けてから、公務に就いたのです。私どもは三人姉妹で、私は真ん中。クリスティアーネはマルツァーンのミュラー[粉屋]と結婚しました。末の娘のマリー[ヘン]はまだ家にいます。母が存命なのです」。

「それであなたはずっと公務に就いていたわけですか」とレナーテは尋ねた。

「そうです、一年半前まで。楽しかったですよ。若奥様は一人っ子でした。私どもはいつも一緒でした。それですべてのことを見て、聞いてきました。今の行政官は母親と仲良くなって、結婚までこぎ着けたのです。最初はただの管理人でした。そのことは今でも感じられます。外では大きな口をたたいています。でも家の中ではおとなしいものです。母親が実権を握っていますから。娘の方はそれを毎日見習っているのです」。

「ケムニッツ夫人、あなたの夫もやはり公務に就いていたのでしょう」。

「そうです。彼は職長でした。すでに七年間務めていましたかね。いつも私を面白い仕草で見て、私は笑わざるを得なかったものです。最初は嫌だったのですが、でも牧師のレンメルヒルトが『幸せを逃しちゃいけない』と仰有ったのです。それで一緒になりました。後悔はしていません。私に優しいですから。それに赤ん坊ができて、それはもう夫が可愛がっています。だから片目は瞑るしかないですね」。

「立派な主婦はいつもそうしなくてはなりません」とショルレンマー叔母は言って、優しく警告して、人差し指を上げた、「立派な主婦はいつも見張っていなければなりません。しかし目を瞑ることも心得ていなければなりません。事情に応じて。何でも見ていなければならないが、しかし何でも見ようと欲する必要はないのです」。

居酒屋の女将は、村の人々の流儀で、見張ることと瞑ることをいつも単に浮気と関連付けていて、ショルレンマー叔母のはなはだ別様の意味の言葉を誤解して、笑いながら答えた。「いやそのようなことではないですよ。それだったら簡単だけど」。

「それでは何のことです」とレナーテは好奇心が芽生えて尋ねた。

「何だと思います、お嬢様。それを話すのはほんと恥ずかしいですよ。夫はいつも眠っています。それは良くありません。晩に、客室が空になると、私は夫に賛美歌の信書を読み上げます。そのようにして育ったし、亡き父の許でもそうでした。公務でもそうでした。公務でも誰も本当には聞いていなくても、聞いている振りをしました。でもケムニッツは眠っています。しばらく夫に読ませたのです。するとやはり上手く行かないのに気付きました。いつも砂男[睡魔]に襲われるのです」。

「でもそんなひどいことかしら、ケムニッツ夫人」とレナーテは言った。

「ひどいんですよ、恵み深いお嬢さん」と居酒屋の女将は答えた、「眠っているときに、眠るだけならまだしも。起きているときにも、眠っているのだから。これが最悪と言えますね。夫は何でも忘れ、何も覚えていない。ほら、先の鳥撃ちの会のとき、店は一杯の人になって、すべての部屋がもう、私は上に行ったり、下に行ったり、台所、地下貯蔵庫とてんてこ舞いで、半アンカーのジンをただで振る舞うことになったのです。ジンをただ酒ですよ。私のケムニッツがチョークの印付けを忘れたからなのです。夫が最後に付けたときは、記憶頼りで、私がやかましいもんだから、それで間違って書いたのです。騒動が丁度始まったとき、私が駆け付けていなかったら、喧嘩となって、後々悪口を言われるところでした。そして私は自分の袖で勘定のすべてを消して、言ったのです。『すべて振る舞い酒でした』と。そして一人一人にサービスのグラスを持って行って、私は嬉しい振りをしましたよ。百姓達はとても難しい人々ですからね。でも夜には血の涙を流しました」。

居酒屋の女将は夢中になって話していて、そのときのことを思い出して、また目に涙を浮かべていた。しかし彼女は話して、語り尽くすのが最良の慰めとも感じていて、それで続けた。「それで、一昨年前の夏のままであれば良かったのだけど。でも今は居酒屋『赤亭』ができて、タスドルフの方へ、村から百歩と離れていない所です。復活祭の時、建て始めて、降臨祭の時には棟上げで、夏至の時には開店でした。亭主はビンデマイヤーと言う名前で、元は車大工です。やくざな人で、いつも蕩尽して、いつも離婚を繰り返しています。今は三番目の奥さんです。子供達は最初の奥さんの子で、リーネもそうです。明日結婚式です」。

「結婚式、誰と結婚するの」とレナーテは尋ねた。

「ダールヴィッツの百姓の息子です。最初は上手く行きそうでなかった。あちらの老父が反対で、けちですし、百姓の誇りを持っているのです。するとリーネがダールヴィッツへ乗り込んで、老父を手玉にとって、今では老父は全霊で誓っています。息子がリーネと結婚しないなら、自分が結婚しよう、自分は男やもめだから、と」。

「彼女はそれでは可愛いの」。

「いいえ、可愛くはありません。でも上手いのですよ。誰から教わっていると思います。父親譲りなんです。全くそうです。いいですか、お嬢さん、父親はただ居酒屋の営業許可を得ているだけで、れっきとした居酒屋の亭主ではありません、赤亭は所有していますがね。でも間違いなしに、居酒屋業務が分かっているのです。一方私のケムニッツはそれが分かっていません。一方はチョークで書き付けられない。もう一方は倍に書き付けるのです。それでも、赤亭に入る誰一人それに気付きません。誰にでも話しが上手くて、よいしょする話しをするのですよ」。

「それでは取り替えたいですか」とレナーテは尋ねた、「赤亭の御主人のような夫と取り替えたいですか」。

「御免ですよ」と居酒屋の女将は驚いた、「呑気に暮らせませんから」。

「ほら御覧なさい。自分は幸せだと仰有っている。一番大事な情緒の安らぎを得ていらっしゃる。夫は静かに寝かしていなさい。良い人なんでしょう。それで十分です。夫が沢山寝るのであれば、あなたが沢山起きておればいい。それでバランスが取れます。何かいつも不足はあります。いつでも靴にはきつい所があるものです。ある人にはここが、別の人には別の所が」。

居酒屋の女将は溜め息を付いた。「レンメルヒルト牧師も同じことを言いました」。そう言って、彼女は立ち上がって、皿を集めた。しかし最初の言葉に戻りながら付け加えた。「寝ぼけた男は良くありませんよ。受け入れがたいことです」。

そう言って、彼女は部屋を去った。　ー

「誰のことを考えたに違いないか分かります」とレナーテは尋ねた。

「きっとマリーネね」。

「ただ若いシャルヴェンカは寝ぼけていない。ひょっとしたら反対すぎるかもしれない」。

「靴の痛みは別の先ね」とショルレンマーは結んだ。

レナーテは頷いた。そしてこれらの日々の緊張で疲れて、ベッドに身を投げて、一時間眠った。ショルレンマー叔母は外套を彼女にかけてやって、別の部屋へ入って行った。ここで彼女はレーヴィーンの枕元に腰かけて、編物道具で編み始めた。居酒屋の女将から借りたものだった。彼女の両手は休みを知らなかったからである。

陽がすでに沈みつつあったとき、レナーテとショルレンマー叔母は散歩に出掛けた。外気と陽光が必要であった。二人はタスドルフの方へ進むポプラ並木を下って、「赤亭」の側を通り過ぎた。そこではすでに皆が結婚式の準備に取りかかっていた。二人とも黙っていた。ようやくショルレンマー叔母が、レナーテの考えも同じであると察知しているかのように言った。「何の準備もしないで、聖餐も受けず、手にはフランス語の本しか持たずに、逝ってしまったら。そうしたら天国へは行けませんね」。

二人は立ち止まっていた。そして今や暗い森の一帯に月が昇るのが見えて、青白く、銀

色であった。
「向こうがグーゼですね」とレナーテは言った。
ショルレンマー叔母は首肯した。
「今頃葬儀かしら。歌声が聞こえそう」。
「あの方の御魂に神様のお恵みがありますように」。
両人は両手を組み合わせて祈り、村へ戻った。

第三章
「声を上げているのは、自然の声」

夜の間は居酒屋の女将と村からの老婆とが交替でレーヴィーンの番をした。朝の九時になった。レナーテとショルレンマーが再び彼のベッドの許で座っていた。彼は数日前よりも落ち着かず寝ていた。個別の、勿論半ば分からない言葉が彼の唇から漏れた。部屋には明るい朝の光があって、窓の氷は溶けた。その他聞こえるのはただ真鍮の轉りとショルレンマー叔母の編む針の音だけであった。そのようにして三十分、女性達はぼんやりと宙を見たり、病人を見たりしていた。今や陽光が彼の顔に射し込んだ。レナーテは囁いた。
「見て、夢を見ている。何か親しいことに違いない」。そしてショルレンマー叔母が答える前に、外では鐘が鳴って、レーヴィーンが目覚めた。彼の最初の視線は、妹に注がれた。彼は妹が分かった、「レナーテ」と言った。
レナーテは跳ね起きた。そして彼を自分の腕に掴んで、何度も叫んだ。「レーヴィーン、レーヴィーン」。ショルレンマー叔母は編物を続けていた。しかし彼女の唇は震えていた。レーヴィーンは叔母に気付くと、頷いて、彼女に手を差し出した。
明らかに、彼はまだ疲れていた。彼女達は彼の背中にクッションを置いて、寝ているというよりは座っているようにした。そして彼の目は部屋を眺め回して、自分の状況を掴もうとした。
「ここはどこ」。
彼女達は村の名前を告げた。彼は頭を振って、考え込んでいるように見え、それから尋ねた。「父上は、どこ」。
「グーゼよ」。
「グーゼ。何故またグーゼに」。
レナーテとショルレンマー叔母は互いに見つめ合って、何と答えたものか分からないでいた。しかしレナーテは直に気を取り直して、静かに言った。
「アメリー伯母が亡くなったの」。
「そうかい。...何歳だったのかな」。
この質問のままであった。というのは彼の意識がまた薄れ始めたからで、一瞬して彼はまた深い眠りに陥った。しかしそれでも彼は生命を取り戻して、彼は語ったのであった。二人の女性は嬉しく感動して、感謝の印に手を差し出し合った。
そのようにして三十分ほど過ぎた時、居酒屋の女将が明らかに興奮して入って来た。「行列が今来るわ」と彼女は叫んで、普段声を落とす習慣になっているのに、忘れていた。「オルガンがもう演奏されている。公務の若夫婦も御出席。最悪だわ。でも老夫人は違う。私

どもの味方だから。神様、神様、震えが来ます」。

「でもケムニッツ夫人、あなたも行列に遅れずに、少なくとも教会へは一緒に入ったらどうです」とショルレンマー叔母は言って、居酒屋の女将をドアの方へ押しやった。

「そうは出来ないのです」と夫人は嘆いた、「私どもは敵同士なのです。人々は指を上げて、私どもを指さして、人の幸福を妬んでいると言うに違いないのです。ですから出来ません」。

「私は花嫁を見たいわ」とレナーテは言った。

「お嬢様、そのためにここへ来たのです。可愛くはありません。でもすでに申し上げましたように、上手なのですよ。それでどんな様子だったか、後で教えてください。神様、何でこんなにうろたえているのか分からない。いや、お嬢様、花嫁を御覧になってください。それにそう呼んでよろしいのであれば、ショルレンマー叔母さんも御一緒に。一人の目よりも二人の目の方が確かでしょう。もうやって来ます。あれは音楽です。私は窓際にさえ行けない。窓際に行ったら最後、行列は通り過ぎて行かないでしょう。何故通り過ぎないか。人々はこう思うからです、切り藁を道に撒いたのは、嫌がらせだ、と」。

レナーテはショルレンマーの目を見て、行っても大丈夫か尋ねた。「行きなさいよ」と叔母は言った、「私も一緒に行きます。教会に行っても何も害はありません。花嫁をよく見なさい。私の務めは分かっています」。

居酒屋の女将は大いに喜んで、あちこち行き来し、交互にショルレンマー叔母とレナーテに感謝した。それからビロード仕立ての金属の締め金付きの二冊のポルスト［Porst（1668-1728）］の賛美歌集を持って来て、何度も病人の看護を引き受けると約束した。「ここに私の役目がありますから」と彼女は結んだ、「そして時間が最も快適に過ぎて行きます。蠅一匹病人に止まることのないようにします」。レナーテとショルレンマーは外套を着て、今一度静かに眠り続けるレーヴィーンの方を見て、部屋を去った。一方居酒屋の女将はベッドの足許の方に腰かけた。

二人がまだ通りを渡りきらないうちに、三度目の鐘が鳴り始めた。しかしようやく静かになった。「それでは歌か」と思わず知らず女将は言った、「神様、神様、一度見てみたかった。新郎は新婦に銀のネックレスを、留め金とチャックを付けて贈ったことだろう。新郎には出来る。何と言っても新婦は老父を丸め込んだのだから。厚かましい娘。赤毛に雀斑。でも何も反対しようとは思わない。新婦は今や祭壇の前だ。ひょっとしたらそんなにひどい娘ではないかもしれない。神様、新婦に御身の祝福を給え、私どもにも給え。ケムニッツは頼りにならないのだから。それに全部を一人だけではやって行けないのだから」。

更に彼女がこの長い溜め息で祈っていたとき、レーヴィーンが前触れの落ち着きのない眠りを示すことなく、両目を開けた。そして居酒屋の女将を見つめた。彼は最後の一時間の眠りで全く明瞭に丈夫になっていた。「レナーテはどこ」と彼は尋ねた。「令嬢のことだけど」。

「教会です、若様。ショルレンマー叔母さんも一緒です。私のせいなのです。私が送り出しました。つまりそうお願いしたのです。今日が結婚式なのです。『赤亭』のリーネですよ。新婦が百姓の息子を、ダールヴィッツからの新郎をかっさらったのですよ。祝福してやらんでもないですがね」。

そのように彼女はお喋りを続けた。

その間にレーヴィーンは身を起こしていて、すべてに関心を向けているように見えた。しかし彼をもっと鋭く観察する人がいたならば、彼は居酒屋の女将のお喋りよりも真鍮の轉りに耳を傾けているのに気付いたであろう。ようやく彼は女将の方を向いて、言った。「腹が減った」と。

「分かりますよ」とケムニッツ夫人は答えた。そして更に二，三質問をした後、病人が欲しているものを全く正確に弁えて、台所に急いだ。ここではいつものように竈に火が燃えていた。さもないと彼女は自らすべてを行わなければならなかっただろう。雇人は向こうの教会にいたからである。彼女はシチュー鍋を煙道から取りだし、それからすり鉢を出し、殊更に大きな音を立てて、がちゃがちゃと搗き始めた。彼女はこの物音に満足しているように見えた。しかし彼女は台所のドア越しに、ケムニッツが眠そうに窓の支柱の背後に蹲って、何も見えない村道を見ているのをみると、彼を揺すぶって、有無を言わせず彼の手にすり鉢を渡して、怒った調子で、低地ドイツ語で叫びかけた。「ちったあ働きなさい」。

「何だい、これは。レーネ」。

「阿呆なことを聞いてねえで。この鉢をかき回して」。こう言うと彼女はすでにまた台所の入口まで行った。しかしケムニッツは勝手に色々と休みながら、彼女が外で皿の戸棚を扱っているのを耳にしていた。

そのようにして十分な時間が過ぎて、再開されているオルガン演奏が、向こうの儀式が終わりであることを示していた。教会のドアが一斉に開けられ、音楽の先駆けの下、結婚式の行列がまた動き始めた。教会を去る最後の人々と一緒に、レナーテとショルレンマー叔母もいた。彼女達はオルガン席の横に立派な座席を見つけていた。二人はレンメルヒルト牧師の説教を論評していた。ショルレンマー叔母にはほとんど気に入らないものであった。レナーテの方はもっと穏やかに考えていた。二人が居酒屋に達したとき、ドクトル・ライストもまた馬車で乗り付けた。

ライスト先生は行列に出会って、上機嫌であった。「幸先良い」と彼は両レディーに呼びかけて、一緒に玄関に入った。ここで彼らに出会った最初の者は、居酒屋の女将本人であった。彼女は階段を降りて来て、皿とスプーンの載った盆を手にしていた。

「どんな具合」とレナーテは尋ねた。

「良いですよ、お嬢様」。

「目覚めたの」。

「そうです」。

「それでは話しておくれ、女将さん」とドクトル・ライストは言った、「何がありましたか」。

「そうですね、恵み深いお嬢様が行かれてほどなくして、向こうで説教が始まったか始まらない頃、彼は両目を開けました。若旦那のことです」。

「何と言ったかな」。

「恵み深いお嬢様のことをお尋ねでした。私がすべてを話して、リーネとその結婚式について話すと、大きな目で私を見つめて言いました。『腹が減った』と。そこでドクトル・ライスト先生が仰有ったことすべてをすぐ思い出して、何を食べたいか、ただ尋ねまし

た。十種類くらい上げました。そのどれも外れで、頭を何度も振っていました。そしてうんざりしていました。でも最後にこう言いました。『今分かった』と。何だったと思います。お嬢さん、考えてみてください、スープの類いでしたよ。それもですね。ビール・スープ。それで私はただこう尋ねました。『若様、カラム入りですかそれとも生姜入り』。すると静かに笑っておられて、言いました。『生姜入り』と」。

「生姜入り」と老ライスト先生は繰り返した、「それは回復に向かっている。その類いはどうでもいいことではない。そうか生姜入りね。いや、レディーの方々、声を上げているのは、自然の声です。皆に、貴方らに、我々におめでとうです。それでは病人の様子を拝見するかな」。

彼らは再び階段を上がって、レーヴィーンがベッドに垂直に座っているのを見つけた。彼はドクトルが分かった。しかし左手を上げて、彼と握手をしようとしたとき、手は力なくベッドに落ちた。

「どんなかい、レーヴィーン」。

「良いと思います」。

「良いと思います、か。これはまだ十分に良いとは言えんな。スープはどうだった」。

「美味しかった」。

「それは結構。そうこなくちゃ。頭痛はないかい」。

「ありません」。

今やドクトルは自ら手を取って、脈を数えた。それを終えると、病人が疲れてまた眠り込むのを目にした。「そのままにしておこう」。

こうして人々は部屋を去り、外の階段の所でまた会話を始めた。「然るべく順調だ。峠は越した。回復のすべての兆しがある。熱もないし、ただ疲れているだけだ、疲労。しかし一時間の眠りが一週間分となる。明日にも彼は起き上がろうとするだろう。明後日には出発できる」。

「それで私どもは」。

「私どもは明日にもきっと出発できよう。彼は泊めておきなさい」とドクトルは答えた。

「そしてクリストと幌付き橇を送るのですか」。

「その通り。橇を丁度勧めようと思っていた。背中に切り藁袋を置いてな。真っ直ぐな姿勢はまだ無理だろう」。

こう言いながら、下の廊下に達して、客室の前に立っていた。客室では博士のために更に温かいビールが用意されていた。しかし彼は遠慮した。「まだライトヴァインまで行かなければならないから」と。それでも居酒屋の女将がどうしてもと勧めると、彼は最後に更なるやり取りを一つの言葉、「お産」できっぱりと断った。これは効いた。ショルレンマー叔母はレナーテより更に当惑していた。

玄関の下にはすでに老先生の馬車が止まっていた。彼は丁度上に登ろうとしていた時、足を踏み台からまた降ろした。「老ライストも老いた。肝心のことを忘れる所だった」。そして自分の外套のポケットの底を探し始めた。ようやく彼は厚い、赤革のメモ帳を見いだした。それは同時に外科用のセットとなっていたが、そこから一通の手紙を取りだした。「レナーテ・フォン・フィッツェヴィッツ宛」。

そしてようやく登った。「ホーエン・フィーツでまた会おう」。レナーテとショルレン

マー叔母は彼の挨拶に答えた。
手紙はマリーからのものであった。

第四章
回復

そしてすべては、ドクトル・ライストが告げていたようになった。翌朝レーヴィーンは起き上がることを欲して、とても疲れていたけれども、十分に部屋から出る余力を感じて、下の玄関で、レナーテとショルレンマー叔母から別れた。それは居酒屋の馬であった。ケムニッツ自身が御者となった。彼はいつになく活発に姿を見せて、そしてレナーテが彼を指さして、居酒屋の女将に彼の素早さを称える言葉を囁くと、女将は一種誇らしげに言った。「やれば出来るんです。やる気が出ないと。やっと出たんです」。その次の瞬間両レディーは席に着いた。ケムニッツは覆いの革を張った。そして彼自身は車輪の上の、背もたれのない御者席に上った。更に握手をして、馬車は教会の向こう側へ消えた。

レーヴィーンは自分の部屋に戻った。彼は自分の余力以上に努力していた。そして今や着衣のままベッドに横になった。眠るためではなく、休むためであった。色々なイメージが彼の許を去来した。交代交代、空想的に、しかし次々に変わって行った。彼はフーレン夫人の暗い台所を見、竈で大いに苦労して点火した小さな長蠟燭を見た。そしてこの長蠟燭はただの蠟燭となって、この蠟燭は十二本となった。そしてこれらの十二本の蠟燭が棺の両脇で燃えていた。棺の中には伯母がいて、黒い未亡人頭巾が深く額に収まっていた。棺の横には小さな糸杉の木があったが、それらは段々大きくなってポプラとなった。そして今やポプラ並木となり、そのポプラの間に一台の馬車が速やかに走って来て、彼はそれを追いかけ、叫ぼうとした。しかし声が出なかった。

こうした一切が去来し、再度去来したが、しかし彼の心を本当に乱すものではなかった。ある圧力を感じた。鉛のようなものであったが、しかし痛みはなかった。そしてほとんど甘美な麻痺の影響下にあって、間近のものははるか遠くへ離れ、現実的なものは夢となった。空想による高揚、それ以上のものではなかった。そして情感の中ではただ一つの情感が感じられた。ホーエン・フィーツへの憧れである。

さてまた一日と一夜が過ぎた。明るい朝が窓に光っていた。十時であったろうか。真夜中過ぎにもう幌付き橇で、毛皮の上着やマフラー、フェルトの長靴といった冬の装い一式を揃えて到着していたクリストは、すでに馬屋で、二頭の栗毛の馬に胸革と鈴とをあてがう仕事をしていて、居酒屋の女将は馬屋の戸口に立っていた。自分自身が更に語るためと、ホーエン・フィーツでのニュースとボールスドルフでのニュースとを交換するためであった。

レーヴィーンはその会話が続く間、旅の支度をして自分の部屋に座っていた。彼はすでに朝の散歩を済ませていた。野外ではなく、単に向かいの教会へ出掛けて、今一度自分が夙に暗記していた墓碑銘を読むためであった。半時間前に彼はそこから戻っていて、折り畳まれた紙片を両手にしていた。その中身が気にかかっているように見えた。それは前日、レナーテが出発する際に、レナーテに頼んで貰っていたマリー・クニーハーゼの手紙であった。「もう一度ざっと読んでみよう」と彼は言って、窓の方に身をかがめて、半ば声に

出して読んだ。

「親愛なるレナーテ

あなたの手紙を昨夜、ドクトル・ライスト先生が私どもの所へ馬車で寄られて、頂きました。先生と個人的にお話しする時間はなかったのです。遅い時間だったので、すぐに去ることをお望みでした。私は読んで、それからとても嬉しくなって、牧師さんの所へ行きました。牧師も私に劣らず喜んでおいででした。でもちょっと悲しいことがあります。あなたは『何故彼がベルリンを去ったのか』、そして付け加えています。『これについては単に推測してみるだけです。そしてこの推測もほとんど出来ません』と。親愛なるレナーテ、それは分かっています。夢うつつに私はこの時が来るのが分かっていました。

こちらでは皆が静かです。多くの百姓達や夫人達があなたの伯母さんの葬儀へお参りしました。伯母さんは伯母さん風に愛されていましたから。誰もが伯母さんについて話していました。ザイデントプフ牧師も一時間前に出掛けました。牧師はまずグーゼに行き、それからキュストリーン、ホーエン・ツィエーザルと行くつもりです。週末になってようやく戻る予定です。何という奇妙な一同が伯母さんの棺の周りに見られることでしょう。バメに、ルッツェ、ファウルシュティッヒ博士です。イエーツェも弔意を表しに行くのですよ。今日彼の姿を見たら、ほとんど感動しました。対の黒いゲートルを探し出して来て、『恵み深い奥様からのものだ』と言っていて、喪章を付けていました。

私の思いはいつもあなた方の許にあります。思いは屋根裏部屋から屋根裏部屋へと移って行きます。そしていつも村は馴染みの村に思えます。私どもにレーヴィーンがクリスマスの最初の日に話していたその村ですよね。まだすべてありありと思い描けます。若い、可愛い居酒屋の女将とクリスマス・ツリー、ブロンドの[赤ん坊の]頭、それから祭壇に脚立と小さなランタンのある薄暗い教会。祭壇の前には美しい銘の墓石があって、その銘を私はあの日以来百回称えたものです。するといつも翼が生えて、飛べるような気がします」。

ここでレーヴィーンは一瞬止まって、その言葉を繰り返した。翼が生えて、飛べるような気がします。「何と的確に捉えていることか」と彼は付け加えた。それから手から置いていた紙片を再び持って最後まで読んだ。

「老ライスト先生の予言通りになるよう祈っています。先生はこの紙片をまた届けると約束なさいました。この紙片をホッペンマリーケンを通じて[老先生の]レブースへ送ります。彼女は外に待っていて、杖で玄関のタイルを突いています。苛々している印です。彼女を怒らせるのは恐いので、機嫌をこれ以上損ねたくありません。それでは御機嫌よう。私のただ一人愛するレナーテ、私の幸せ、私の誇り、私の安心のあなた。ショルレンマー叔母さんによろしく。レーヴィーンが目を開けたら、私のことも衷心より思って欲しいです。そのときには私の心でそのことをかみしめることでしょう。

あなたのマリー」。

レーヴィーンは最後まで読んで、身を起こし、真鍮の鳥籠に近寄って、過ぐる日の長い時間、彼に親しげにさえずってくれていた小鳥に、感謝と別れの印に止まり木の間に砂糖棒を差し込んだ。

再び腰かけようとしたとき、クリストが入って来て、準備はすべて出来て、橇が用意されていると知らせた。同時に彼は触れられないまま掛け布団の上に置かれていた冬の装い

一式をまとめて掴み、また階段を降りて行った。そしてレーヴィーンは後に従った。ドアの入口の所でレーヴィーンは今一度立ち止まって、部屋を眺め返した。彼は震撼されていなかった。しかし本来感動もしていなかった（病気の余韻でまだそれに縛られていた）。しかしすべての感覚の麻痺にもかかわらず、彼は明瞭に、ここで過ごされた日々が何であったのか、そして自分の背後で一つの人生が沈み、別の人生が始まったことを感じていた。

下では居酒屋の女将が立っていた。ケムニッツはまだ戻っていなかった。しかし彼女の豪華作品、ブロンド髪の[赤ん坊の]頭を自分の腕に抱いていた。彼女は別れにこれ以上見栄えのするものを有しなかったし、そのことを承知していて、心から、愛想良く笑って、やがてレーヴィーンが手を差し出して、謝辞を述べると、早速情熱的に痙攣したように嗚咽し始めた。というのは、彼女は公務で標準ドイツ語で躾けられ、レンメルヒルト牧師の許での堅信礼の授業のときは、自分の小さな女友達よりもしっかり言葉を述べていたけれども、どんな時であれそれに適していると思える時には涙の洪水を見せる自然の力を有していたからである。レーヴィーンはこの自然の力をホーエン・フィーツの百姓の女将達から知っていて、そのようなものとしてしか感じなかったが、手を親しげに彼の方へ差し出している子供の頭を撫でて、それから馬の背後で橇の轅から乗った。「それではクリスト、出発」。そう言って彼は快適に背もたれとしてしっかりと束ねられている麦藁の束に寄りかかった。そして速やかな速歩で教会の周りを回ると、次の家屋敷を過ぎて、陽光を受けた風景の中へ入って行った。

素晴らしい日であった。爽やかではあるが、寒くはなかった。地平線には樅の木の暗い帯が見えた。その間様々な地方、村々の尖塔が見えた。その幾つかを過ぎて、ここら一体には仲間の多いクリストは、一言語りかけたり、あるいは橇を止めて、煙草に火を付けたりした。しかしレーヴィーンは素晴らしい大気を享受し、呼吸するたびに、段々と治癒して行くのを感じた。彼の神経がまた活気付いた。それまで彼に置かれていた圧迫感が消えた。ますますイメージが親しみのあるものになって行った。彼はザイデントプフ牧師を思い出した。平和に向かって進んでいるような気がした。

そのようにして数時間が過ぎた。鈴の音を立てながら馬は速歩で進んだ。そしてすでに陽は沈み始めた。

四時過ぎに彼らはドルゲリーンの居酒屋の前に止まった。丁度向かい側に牧師館があった。レーヴィーンは降りて、居酒屋の中で軽食を摂った。しかしクリストは一頭の栗毛に毛布を掛け、もう一頭には古い軍服の外套をかけた後、車道を越えて、村の反対側へ向かって行った。そこには丁度ツァーベル牧師の小さな橇がすぐ格子垣の前に止まっていた。牧師館の下僕が左右の手に手綱を握り替え、性急に雪を踏んでいた。

「今晩は、カルゲス」とクリストは言った、「どこへ行くんだい」。

「グーゼだがね」。

「何でまた。夫人は亡くなったんだろう。一昨日より前に」。

「そうなんだが。しかし学童に今日お恵みがあるんだ。六時に食事となるのだ。焼いた鹿の肉や豚肉だがね。それに一人一人巻きパンのお土産だがね」。

「そうか、そうか。学童か。しかし牧師は何の用があるんだ」。

「何の用があるんだと。わしゃ知らねえ。いつもそこに用があるのは確かだ」。

この瞬間レーヴィーンがまた居酒屋から通りに出て来た。クリストは彼の若旦那を見る

と、会話をすぐに打ち切って、馬の許に戻って来た。ここで彼は古い騎士用外套を一頭の栗毛の背から取って、広げたままレーヴィーンに差し出して、着るように言った。また乗り込む前に、これを着て貰わなければいけない、と。しかしレーヴィーンはその気がなかった。

「いいよ、クリスト」と彼は言った、「寒くない」。

「寒いです、若旦那。陽は沈んでいます。注意するよう言われておりますんで。お二人に、代わる代わる言われておりやす。言いわけできません」。

「いいよ、着たくなかったのだと私が言ってやるよ」。

「駄目ですよ、若旦那。他に仕様はありません。お嬢さんの方はね、何とかなります。しかしショルレンマー叔母は。これにはかないません」。

「分かった、着るよ」とレーヴィーンは言って、広げられていた外套を纏った。

やがて、クリストの押し付けを頑なに拒まないで良かったと思えることになった。一分ごとに爽やかな気分になった。厚い外套のぬくもりが心地良かった。星々が上がっていた。甘美な、名付け難い悲傷の気持ちに襲われ、彼の目から涙の洪水が溢れた。善良なケムニッツ夫人が数時間前に流したほど多くはなかったが、しかしもっともっと熱いものであった。それでもこの涙は彼にとって幸福と回復を意味していた。彼はマリーのことを思い出し、二人が同じように感じていると思った。「翼が生えて、飛べるような気がします」と彼は彼女の手紙から繰り返して、ますます明るく瞬く星々を見上げた。

そのように橇は進んだ。昨晩以来十二マイル動いていた栗毛は次第に歩みが落ちてきた。そしてようやくマンシュノーから、馬小屋を嗅ぎつけ始めて、再び速歩となった。ホーエン・フィーツの塔が七時を打つと、最前列の公園の先端が見えて来て、最後の鐘が鳴り終わらないうちに、橇は館の上向きの車寄せに着いた。レーヴィーンが最初に見たのは、瓦礫の中にあるホールの建物であった。当時火事の知らせはほとんど彼の心を震撼させなかったが、火災現場の光景の印象は今やはなはだしいものとなった。この印象は館そのものがすべて静寂と暗闇の中にあるだけに強まった。

誰も姿を見せなかった。ようやく明かりが生じて、イエーツェの痩せこけた姿がガラスのドアの背後に現れた。彼は燭台を若干斜めにして、炎を隙間風から守り、それから室外に出て来て、若い主人が降りる際の手伝いをした。

「今晩は、イエーツェ。皆出払っているのかい」。

「はい、若旦那。こんなに早いとは思わなかったのです」。

「父上はどこ」。

「相変わらずグーゼです」。

「レナーテは」。

「水車屋のミークライの許です。ウーレンホルスト[聖職候補生]が来ています。そこにまたルター教徒が集まっているのです。向こう側からも来ています。ツェーデンの行政官に、リーツェ・ゲーリッケの老首席森林官です。お嬢様は最初その気はなかったのですが、しかしショルレンマー叔母が連れて行かれたのです」。

「そうかい」と軽く不機嫌になってレーヴィーンは言った。

「迎えに行きましょうか」。

「いや、いい。私は疲れている」。

そう言って、この会話が行われたホールから家の裏玄関の方へ行った。そこではヘクトーがすでにその若旦那を待っていた。しかしこの若旦那は病気であったことを知っているかのように、一切の激しい愛撫を控えていた。静かに尾を振りながら、彼の側を付いて行き、単に再三彼の手を舐めつつ、階段を上がって行った。

レーヴィーンの部屋はすべて受け入れの準備が出来ていた。軽い羽根布団は半分折り返されていた。側の椅子にはカラーのキルティングの掛け布団が畳まれてあった。ソファーテーブルの上には鈴蘭があった。フォン・フィッツェヴィッツの奥方の逝去以来等閑にされていた植物園から生じた唯一のものであった。しかしその価値は、レーヴィーンが大好きな花であるという点にあった。彼はその香りを吸い込んだ。そして感動した声で、「レナーテ」と言った。重い試練を受けた心は、故郷の安心感と誠実な愛という幸せな気持ちに包まれた。

一時間後、イエーツェがこっそりとまたドアを開けた。明かりはまだ燃えていた。老人はその明かりをテーブルから取って消した。ヘクトーは、鹿の皮の上に寝ていたが、片目で瞬きしたものの、動かなかった。

次の瞬間、すべてがまた静かになった。

第五章
遺言の規定

次の晩、我らの友はまたホーエン・フィーツの暖炉の周りで半円を形成していた。最初のクリスマスの日のイメージとかなり同じであった。ただクリスマス・ツリーが欠け、それ以上に陽気さが欠けていた。その時には黄金の胡桃と戯れながら、この陽気さが見られたものであった。ショルレンマー叔母はまたショールを編んでいて、レナーテは縮緬の布切れを目の前にして、喪の襞飾りを縫っていた。レーヴィーンは相変わらず、病の予後、あるいは昨日の緊張の疲れにあって、　ー　ぼんやり放心していて、側にある木の籠から取った樅の実と無造作に戯れていた。ただマリーだけが色々な質問をして会話を導こうとしていたが、短い返事に終わっていた。

暖炉の蛇腹の小さな時計が八時を打った。この瞬間イエーツェが牧師の到来を告げ、すぐその後牧師が入って来た。誰もが歓迎し、レナーテは色々なちっとしたからかいを述べた。司牧が群れを離れては良くありませんよ。四時間でもどうかと思うのに、四日なんだから。狼が来ていましたよ。ウーレンホルスト[聖職候補生]本人が、と。

「分かっていますよ」とザイデントプフは言った、「自発的に危険の中に飛び込んだ人がいましたか。誰がまた行ったのです」。

「勿論私どもです。でも今回は無事帰って来ました。私どもばかりではありません。ツェーデンの行政官も彼を困らせていました。何度もこう繰り返したのです。『剣を取る者は皆、剣で滅びる』[マタイ、26,52]。あの人はクリスマスの日以来、この格言を手放せなくなっていて、誰でもうんざりして来たのです。あの人は昔の兵士達に向かって話しているというのをいつも忘れてしまうのです。あの人はラウエンブルク人かそれともオイティーン[いずれもフランス人支配が強かった]出身です。あの人がこう言うのを聞くと、いつも田舎が違うと、別のキリスト教になるかのような気がします。でもこれは喧嘩の基で

す。ショルレンマー叔母さんがもう苛立って来ていますから、この話しは止めましょう。それではお掛け下さい、牧師様。ここに貴方の椅子があります。マリーと私の間に。そして話して下さいな」。

「何について」。

「何でもかんでもですよ。でもまずはグーゼについて。私どもは何も知らないも同然なのです。父上はただ一回帰って来ただけで、それも私どもがまだボールスドルフにいたときでした。ですからお願いします。すべて初耳です。厳かでしたか。棺は開いていたのですか、それとも閉ざされていたのですか。何時間も開かれた棺の側にいたら、とても不安な気持ちになったと思います。誰が弔辞を述べたのです。誰がいましたか」。

「全員です。友人関係は皆。バメに、ドロッセルシュタイン、クラハ、プロッツハーゲンの大尉、彼はピルヒ連隊の古い制服姿でした、　ー　誰も欠けていません。ファウルシュティッヒもいました。一種のカンタータを作っていて、これは、ニップラーが作曲をし終えたら、グーゼの教会で二回目か三回目の日曜日、歌われることになっています。我らのキルヒ・ゲーリッツの博士[ファウルシュティッヒ]は差し当たりそのテキストの詩節を印刷させており、我々各人に一枚渡しました」。

「カンタータなの」とショルレンマーは言った、「それもファウルシュティッヒによるもの。きっと最初から最後まで異教徒のお化け風なものだったでしょうね。墓も死もなく、復活など有り得ない。単に冥界と影と一ダースのギリシアの神々の名前ね」。

「そうじゃありませんよ。ショルレンマーさん」とザイデントプフは答えた、「それは不当な言い分です。彼が書いたものはキリスト教的なものではありませんが、しかし何も反撥を覚えるものではなりません。彼は作法を十分に弁えています。ちなみに私はその紙片を持参して来ています。レディーの方々が判断されるとよろしい」。こう言って彼は黒枠のある紙片を胸ポケットから取りだして、レーヴィーンに渡した。レーヴィーンはそれを力なく広げ開けて、ちょっと考えてから、内容をちらとも飛ばし読みせずに、更に渡した。「レナーテ、読んでみて」。そしてレナーテが読んだ。

伯爵夫人アメリー・フォン・プダグラ
旧姓フォン・フィッツェヴィッツの
墓にて

御身は高貴な意味で
低俗なことを避けられた。
御身は今や身罷られた、
何処に、何処に。

何処に。その問いかけは
すずろに発せられる。
何故それを解く必要があろう、
御身は目指す地におわすのだから。

この世で最良のものに
御身は達せられた。
御身は安らぎの中におわす、
御身に大地の軽やかならんことを。

短い間が生じた。それからショルレンマー叔母が言った。「反撥を覚えるものではありません。嘲笑的ではないから。しかし、いとも尊い牧師様、キリスト教徒の心にとっては十分に反撥を覚えるものですよ。彼は『何処に』と問うています。そしてその答えを知りません。有り難いことに、私は知っています」。

何でも弁護を引き受ける者の一人であって、いつでも弁護する箇所を見つけだすザイデントプフは今回もファウルシュティッヒのために肩入れしようとした。しかしレナーテは、その間に、展開にしろ信仰にしろ同じように短くまとめられたこのカンタータの裏面にも鉛筆で何か記されていることに気付いて、牧師に反論させず、人差し指で走り書きを示しながら、ただこう述べた。「いとも尊い説教師様、ここに、この紙片の裏面にすでに貴方の批判的注釈が記されていますよね。その通りでしょう」。

「いや、そうではありません、レナーテ」とザイデントプフは答えた、「私はそもそもトゥルガニーが請け合っていますように、無批判です。ひょっとしたら多くの領域で、彼の言うほどには、無批判ではないかもしれません。しかしカンタータの領域ではきっと無批判でしょう。カンタータとは何か、そもそも確定しようと思ってすら、当惑することになりましょう」。

「では注釈ではないとしたら、これらの行は何なのです」。

「グーゼの伯母さんの遺言の規定です。彼女の本来の遺言ではありません。　ー　そのようなものはそもそも見つからなかった。　ー　しかし一種の葬儀次第です。彼女の書き物机の他の書類の間に見つかりました。私は父上の許可を得て、勿論若干のフランス語の挿入文を省略して、大急ぎでそれを書き写したわけです」。

「まあ、それでは聞かなくちゃ」とレナーテは元気よく叫んだ。「でも細かすぎて全く読めませんよ。御本人でないと分からない」。

「宜しいですよ」とザイデントプフは答えた、「この葬儀次第の内容通りに正確に行われただけに尚更都合が宜しい。まさにこの規定が、葬儀そのものについてお話しする最良の描写となっています」。

「では読んで下さい」とレナーテは頼んだ。

レーヴィーンとマリーは同意した。ただショルレンマーは言った、「また何を聞かなくてはならないのでしょうね」。

それからザイデントプフは紙片を裏返して、遅滞なく、前口上なく始めた。

「私の逝去の際、守られるべき規定

私は死を恐れます。でも恐れるからと言って、死の顔を見ないで済ますことはできません。死は避け難いものです。それで私こと、アメリー・フォン・プダグラ、旧姓フォン・フィッツェヴィッツは次のように定めます。

第一。私は私の未亡人服を着用してヒマラヤ杉の棺に収められ、その後、大きなホール

に安置されることを望みます。牧羊神の所です。牧羊神は、葬儀の間、別の場所に移さなければなりません」。

「牧羊神の所です」とショルレンマー叔母は繰り返して、編み針をカタカタさせた。

ザイデントプフは続けた。

「第二。四日目、日没の際、私は埋葬を望みます。教会でもなく、建造されたデルフリンガー家の墓所でもなく、グーゼの城公園で、それも新レバノンと呼ばれている小さなヒマラヤ杉の杜の中です。

第三。城からの途中、公園に入るまで、ニップラーを先頭に、すべての村の子供達によって、歌『神のなされること、そは良き計らい』[Samuel　Rodigast(1649-1708)校長]が歌われることを望みます。しかし『血と傷で一杯の御頭』[Paul Gerhardt(1607-76)]はいけません。これは明白に禁じます」。

皆がこの規定にはびっくりしたように見え、互いに見つめ合っていたが、黙っていた。ただショルレンマーだけが言った。「まあ、何故あの素敵な歌におかんむりなのかしら。私はそんなことを遺言で書いたら、墓場で眠れませんよ。レナーテ、いい、私のためにはあの歌が歌われるようにしてね。私の時のことですよ」。

「そうします。ショルレンマー叔母さん。でも次を聞きましょう」。

「第四。墓場では説教師は短いお話しをして下さい。しかしこの世での私の人柄とかなした仕事について私を称えるべきではありません。むしろただこう言って欲しいのです。私はすべての隠し事、不明瞭なこと、偽善的なことが生涯嫌いであった、と。これは私を称える意味で言って欲しいのではなく、本当のことだからです。

第五。私の墓には花崗岩を望みます。他に次の銘文の金属板をいずれ嵌めて欲しいものです。

永遠ノ中ニ生キル者ニハ、

毀誉褒貶ハナイ、

希望ガ私ノ人生ヲ彩リ、黄泉路ノ伴トナル。

第六。ルビーの縁取りの私の細密画を遺贈するファウルシュティッヒには、カンタータを詩作して頂きたく、そしてニップラーには（謝礼は十ドゥカーテンです）このカンタータを作曲して頂きたく存じます。カンタータは、状況によって、墓場か、あるいはグーゼの教会で、三回目の日曜日、私の葬儀の後、歌われることを望みます。

第七。私の葬儀の後、三日目に、その後は毎年私の命日に学童に料理が振る舞われ、十二人の貧しい人々に新しい服が支給されることを望みます。

第八。この規定の執行を、私の弟ベルント・フォン・フィッツェヴィッツ、先のクノーベルスドルフ軽騎兵連隊の少佐、ホーエン・フィーツの世襲領主に委ねます」。

ザイデントプフは読み終わると、紙片をまた畳んだ。ショルレンマー叔母は手仕事から目を上げずに、思わずつぶやいた。「またファウルシュティッヒさえも名誉なことだわ」。

レーヴィーンは微笑した。彼はすでに節ごとに段々陽気になって来ていて、今や静かに言った。「あなたは天の伯母といつも小さな諍いをしていました。伯母が生きている間は、それで良かったけれども。今は亡くなりました。状況が大いに変わった。思うに結局伯母の思いのままにしなければなりません」。

ショルレンマー叔母は頭を振った。

「あなたは頭を振っているけど」とレーヴィーンは続けた、「しかし納得できませんよ。私どもの気に入らないすべての点に関して、今伯母は別の所で責任を負うことになりましょう。今伯母は私どもよりよく分かっていて、彼岸のことに関するすべての面で、我々の判断は及びません。伯母に関する私どもの意見は、伯母の此岸での生き方にのみ限定されます。これは重みがありました。確かに伯母の弱点は信仰でした。しかしその強みは度胸でした。『私は値切りはしない』とよく言っていました。そして私どもがまさに耳にしたことのすべてが、伯母は最後まで言い負かされず、自分と自分の不信仰に誠実に付き合っていたということを証しています」。

レーヴィーンの青ざめた顔は、話す間に赤くなった。彼が今や黙ったとき、ザイデントプフは全面的に賛同した。このような不信仰の勇気ある告白、死の顔を見るまでのすべての我慢には拍手をせざるを得ません、私にとっては、大事で、例えばペーレマン男爵の心配症キリスト教世界よりはるかに好ましいものです、男爵は痛風の発作のたびに、聖書に頼りますが、発作が治まるとまた閉じるものです、と。

このような意見をザイデントプフの口から聞いても誰も驚かなかった。ショルレンマー叔母も驚かなかった。しかし驚かなくても、叔母は了解していたわけではなかった。

「我慢ですって」と勢いよく叔母は繰り返した、「我慢なら結構でしたでしょうに。しかしいとも尊い牧師様、我慢なんかではありません。死ぬまで我慢するなんて有り得ません。私は伯母を存じていました。その心を読んでいました。嫌だったでしょうが。不信仰の勇敢な告白ですって。貴方は誤解なさっています。伯母がそれを書いたのは、勇敢だったからではなく、心の虚栄心からです。こうしたことすべてが死後どんなにびっくりした目で読まれるだろうかと想像して書いたのです。バメやクラハ、ひょっとしたら背の高い大尉のびっくりした目で。しかし死はまだ来ていなかったのです。死が来ていたら、死に直面していたら、伯母はこれらの行を書かなかったことでしょう。それは保証します。伯母は勇敢でした。しかし生きるのに勇敢であっただけで、死ぬのに勇敢ではなかったのです」。

イエーツェが入って来て、会話が中断した。彼は盆を持って入って来た。その盆には小さな絵の描かれた小皿と古風な銀製の果物籠があった。誰も、暖炉の所で席を空けようとしなかったので、その盆は丸いトゥーラ象眼細工の小卓に置かれて、この小卓が半円の中に押し込まれた。手が空いていたマリーが賄い方を務めて、果物を剥いた。

皿が手から手へと渡って行く間に次第に会話が再開された。しかし講和は誰もが承知していたように難しかったので、話しの対象が変わって行った。

勿論ザイデントプフが言葉を発した。彼は、ドロッセルシュタイン伯爵の許への滞在は言うまでもなく、グーゼの葬儀の後、直接丸一日キュストリーンへ行っていて、この一日の間の多くのことを見、それ以上に耳にしてきていた。特別な関心を引いたのは日に日に増えている脱走兵についての知らせであった。これは勿論ザイデントプフが付言していたように驚く必要はないものだそうであった。駐屯の半分が老兵のフュルグラーフ将軍の指揮下のヴェストファーレン人でありまして、この将軍自身、市民の間で良く知られていますように、ドイツ人の心とフランス人への誓いの間の葛藤で始末に負えなくなっているのです。彼の部下達もそのことを承知していまして、それ故全部隊が放棄して逃げているのです。差し当たりまだ持ち堪えている他の部下達は、将軍について一つの詩をドアに貼り

まして、こういう内容です。

御身はフュルグラーフ[満たす伯爵]か。誓って、
敵の隊列を満たすなかれ。
我々を導き給え。フォルグラーフ[満点伯爵]となり給え。

老フュルグラーフ自身は、不満に共感しているかのような嫌疑を個人的に受けたくなくて、上司のフルニエ将軍にこの出来事を知らせて、調査を求めました。しかし調査は何の成果もなく、逃亡がただ増えるばかりだったのです。最後の部隊は十七人だったのですが、キルヒ・ゲーリッツ方面へ逃亡しました。それが三日前です。ホーエン・カヴァリーア[キュストリーンの要塞]では勿論警報の大砲を放ったそうです。しかし何になりましょう。市民達は笑っていました。フランス人もです。フランス人も耳にするのは、「国民武装」のことばかりで、勿論十分に賢くて、今蜂起を計画している同じ百姓が、獄吏を演じ、逃亡兵を捕まえて、引き渡す気があろう筈はないと分かっているからです。

ここでレーヴィーンは牧師を遮って、国民軍組織の状況について問い合わせて、今や詳細に国民武装は先の三週間が経過する間に何という進捗を示したか知った。最初はホーエン・フィーツが先頭を走っていたのですよ。しかしベルントのほぼ一週間の不在がちょっとした障害となっていて、今ではドロッセルシュタインが先に出て、とりわけルッツェに勢いがあります。このことはバメ本人から聞きまして、バメとは私は葬儀の夜、グーゼの公園を一緒に散歩したのです。そもそもこの散歩はとても快適でした。この老バメとよく話しができました。バメがグロース・クヴィルルスドルフの教会に行かず、あるいは単に例外的にのみ行くのは、私の同僚のせいなのです。この同僚はバメを紋切り型キリスト教で教会への意欲を萎えさせています。紋切り型キリスト教はペーレマンの心配症キリスト教と五十歩百歩ですから。しかしいずれにしても、私どもは活発な議論をして、大きな楡の並木道を登って行って、括罠の張られている所を抜けて戻って来て、再び白鳥の小亭の前に立ちました。ここからバメは角の窓を見上げて、最後にこう漏らしました。

「いいかい、ザイデントプフ。やはり珍しい女性だった。彼女の言うことはいつも当たっていた。このルッツェの場合もそうだ。百回と言わず、私は彼女に誓ったものだ、ルッツェの分別はハシバミの実に収まるほどの大きさにすぎない、と。しかし彼女は譲らなかった。いつもただこう言っていた。『バメさん、性格が決定的です』と。彼女の言う通りだった。昨日私はプロッツハーゲンの彼の所へ行ったのだ。幸セナ思イガシタ。彼がそこで集めて、演習させて見せたのは、我らの最良の中隊だった。規律の成果だ。地獄から悪魔を追い出せるような奴等だよ」。

このバメの引用がザイデントプフの話しの終わりであった。というのは丁度九時になって、この時刻には彼はいつも自分の住まいに戻ることを好んでいたからである。その上今日彼はレーヴィーンの様子が気に入らなかった。それで彼はマリーと一緒に辞去した。マリーは帰り道が同じであった。

二人が中庭を過ぎて、クリストと庭師が住んでいる低い建物の前部をすでに背にしていたとき、ザイデントプフは言った。「レーヴィーンをどう思った。彼は元気なかったな。三回話したとき、どれもようやく話していた。とてもやつれて疲れているように見えた」。

「余り語らなかったですね」とマリーは言った、「でも不思議なことではありません。今日は無理したことでしょう。昨日は旅だったし。体と心とで困憊した後ですから」。

「何かあったのかい」。

マリーは頷いた。「私が思っていた通りでした。カティンカが去ったのです。でも貴方に話す必要はありませんよね。貴方はグーゼでお聞きになったでしょう」。

「そう、フィッツェヴィッツが私を脇に導いて、そのことを話してくれた。でも彼が黙っていたとしても、老ラダリンスキーの額から読み取れていたことだろう。彼は打ち砕かれた男に見えた」。

「彼女は彼の秘蔵っ子で、皆の人々から愛されていました。ほとんど羨ましく思ったものです」。

「マリー、羨ましく思わなくていいよ」とザイデントプフは彼女と握手して言った。「あなたはもっと良いものを持っている。謙虚さと情緒の安らぎだ。これにのみ幸せがある。それではお休み」。

そう言って、二人は別れた。牧師は家の玄関に入り、すぐその後書斎に入った。ここでは一切が暗かった。しかしまだ鎧戸は閉まっていなかった。外の雪と星々とが丁度彼にとって好ましい明かりを与えていた。彼は小さな革のソファーに腰かけて、冬の風情の庭を眺めた。

「なるようにしか、ならないだろう」と彼は言った、「私はこれを確信している。今ではこれが今まで以上に言える。カティンカが去ったか。これは全く計算になかった。彼女は私の計算問題で大きな予想外だった」。

彼はこのことにもっと没頭していたかった。しかし大きな頭巾の家政婦が物音を立てて現れ、小さな書斎用ランプをベックマンの『マルク・ブランデンブルク選帝侯国の歴史』[1751]の横に置き、鎧戸を閉めた。

第六章
一人の逃亡兵

ザイデントプフと女性達が領主の館でお喋りをしていた同じ時刻、百姓達もホーエン・フィーツの居酒屋でお喋りしていた。それは最初のクリスマスの日以来の我らの馴染みの友の方々であった。キュムリッツ[キュッメリッツ、長年の執筆で変化]に、「クリームポット」、それにクルルとレーツケ。しかしミークライもいた。彼は当時坩堝のシュルツェとシュヴェートの辺境伯についての議論を、遅くに現れて中断させたのであったが、今回はすでにテーブル席に着いていた。老シャルヴェンカはいつものように行き来して、亭主役を務めていて、一方村長のクニーハーゼは窓際に座っていた。そこにはキュストリーンの新報と二つのベルリン新聞が置かれていた。

今日は百姓のレーツケが、いつもはクルルと競って黙っているのに、発言するという事態になっていた。前日キュストリーンへ行ったからで、そこへは要塞の糧食準備のせいで、一フーデル[馬車一台分]のオーダーブルフの干し草を提供することになっていた。彼の報告は牧師の報告よりも二日間新しいものであった。

「それでは奴等は糧食準備なのだな」とクリームポットは言った、「レーツケ、どんな

具合なのか、聞かせておくれ」。

「色々だ」とレーツケは言った、「すべて倉庫は一杯だ。しかし屠殺用家畜は具合が良くない。親愛なる家畜は奴等の許が気に入らず、逃げ出している。一昨夜は百七十頭だ。皆タムゼルとクヴァルチェンの家畜だ」。

「百七十頭か」とキュムリッツは尋ねた。

「そう、キュムリッツ、間違いない。一昨日奴等はタムゼルの家畜を集めて、一昨日の前の日はクヴァルチェンの家畜を集めていた。それらは町から千歩離れていない『ゴリーン』におって、ペアでロープに繋がれていたのだ。囲いもあった。入口があって、見張りもいた。しかし一時が過ぎて、月が落ちた。そしてまた明け方になって、交代となった時、家畜が皆いなくなっているのに気付いたのだ」。

「どうしてまた」。

「囲いに抜け穴があったのだ。それを親愛なる家畜は利用したのだ。最初フランス人は、百姓どもがこっそり連れ戻したと考えた。しかし雪の中に人の足跡はない、蹄の足跡ばかり。それがダムゼルの方へ半分ほどの道のり進んでいた。それ以上フランス人は進む勇気がなかった。ロシア人がすぐ近くまで来ているからな。ブルームベルク近郊ではロシア人は昨日斥候をさらったのだ」。

「親愛なる家畜だ」とキュムリッツは言った、「立派な本能を有していて、フランス人から逃げよる。しかしヴェストファーレン人は残って、老フュルグラーフも残っている。ヴェストファーレン人だけならばなあ。あれは旧マルク地方人で、ザルツヴェーデル一帯の出身、シュテンダールからだろう。俺自身彼らの二，三人と話しをした。何故彼らは逃げないのだ。何故脱走しないのだ」。

「脱走しているよ」とレーツケは言った、「先週は十四人、今週は十七人。しかし一人を奴等はまた捕まえた。ほんの若造だ。私が一フーデルの干し草を持って大きな倉庫の前に立ち止まっていたとき、若造を連れて来た」。

「誰が若造を連れて来たんだ」とシャルヴェンカは尋ねて、一緒にテーブルに座った。「向こうの我らのノイ・マルク人は逃亡兵を捕まえはしないだろう」。

「いや」とレーツケは言った、「フランス人が若造を連れて来た。クランペで捕まえたのだ。昨日朝早く。何も知らないのかい」。

「いや、何も知らない。話してくれ、レーツケ」と何人かが口々に叫んだ。クニーハーゼも手から新聞を置いた。

「それはな」とレーツケは言った、「襲撃を行ったのだ。フランス人は逃げなければならなかった。フランス人は四人の死者を出した」。

「クランペでか」とますます耳を澄ましてきていたクニーハーゼは尋ねた。

「ロシア人がいたのか」。

「いや、キルヒ・ゲーリッツ人です。手袋職人のプファイファー、いつも左足を引きずっていて、すでに一八〇六年の時、ドレーヴィッツの荒野で一人の将軍を処分したとされているが、　ー　誰も証拠を挙げられなかったのだが、　ー　そいつが首領だ。威勢のいい奴で、射撃が上手くて、すでに三回射撃大会の王となっている」。

「キルヒ・ゲーリッツ人か」とキュムリッツは遮った、「思い付かなかったな。手袋職人とかその左足はいいから、知っていることを話せ。細切れに語るな」。

「それでな。十七人はキルヒ・ゲーリッツへ行ったわけだ。そして射的場に入った。するとプファイファーがいた、奴は他にすることがなくて、すぐに同じようにメダルの鎖の付いた射撃兵の制服を着て、彼らを歓迎し、称えたのだ、話しが上手い奴でな。そして彼らがどこから逃亡して来たかとか、毎朝二十人がクランペへ行って、そこで枝垂柳を切って束柴を作らなければならないのだと話した所、プファイファーが言った。『いいかい、皆、襲撃をやろう。シルの軍にもいたことがあるんだ。心得ている。それでは明日早朝決行。一緒に来る者は誰だ』。すると十七人のヴェストファーレン人は皆名乗り出た。そうしなければならなくなったんだ、臆病者と思われたくないからな。キルヒ・ゲーリッツの射撃手が更に十一人名乗り出た。そしてプファイファーは第二十九番目の男というわけだ。まさにそのように見えたのだ」。

百姓達は笑った。皆が彼のことを知っていたからである。

「それで翌朝となった。昨日の朝のことだ。彼らは一緒にオーダー河畔に沿って忍んで行った。まずは鴨罠、それから火薬製造所の側を通り過ぎた。そしてフランス人が枝垂柳を伐採する所まで来た。枝垂柳は高くて密で、互いに見分けられないほどだった。しかしある箇所に通路があって、次々に侵入して行った。そこで、万歳と叫び、プファイファーは古いピストルをぶっ放した。十一人のゲーリッツの射撃手は一斉射撃を群れに放った。早速四人が倒れ、他の者達は要塞に遁走した。今やヴェストファーレン人も追って逃げた。しかし凍ってつるつるだ。最前列のヴァストファーレン人が、すぐその前に二人遁走者がいたんだが、足を滑らせて、転んで、すぐに起き上がれなかった。そこで二人が彼の方に向きを変えて、彼を捕らえ、一緒に引っ張って行った。それが若造で、私が十時に連れて来られるのを目撃した男だったのだ。それで私は自分に言った、好奇心が湧いたからな。『レーツケよ』と私は言った、『マンシュノーを経由して行くな。キルヒ・ゲーリッツを経由して行け』と。それでキルヒ・ゲーリッツを経由して行ったのだ。しかし何とまあ。今や乱痴気騒ぎだ。プファイファーが彼らをポンスと演説で全く狂喜させていた。プファイファーは今やシルとブリュヒャー[Blücher(1742-1819)]を兼ねた英雄気取りだ」。

「そんな所があるな」とキュムリッツは言った、「大法螺吹きで、危険な所と危険でない所は前もっていつも正確に心得ている。若造が割を食ったのは残念だ。しかしいつもそんなものだ。この足萎えのプファイファーは名声を得て、哀れなヴェストファーレンの若造は頭に銃弾を食らう」。

彼らはあれこれ話して、クリームポットがまさにこの逃亡兵が足を滑らせた瞬間、ひょっとしたらまだ助けられる可能性がなかったものか、様々に述べていたとき、若シャルヴェンカが入って来た。彼も今日同様に干し草や麦藁の供出にキュストリーンへ出掛けていたのであった。彼はまだ丈のある長靴と粗ラシャの上着と毛皮の帽子を着用していた、一人一人に挨拶したが、明らかに大いに興奮していた。

「腰かけな。ヴェンツラフ」と老父は言った、「何の知らせだ。良いニュースのようには見えないな」。

若シャルヴェンカは額に手を持って行き、それから言った。「奴等は彼を射殺したんだ。三十歩も離れていなかった。誰にでも見えるようにしたかったのだ」。

「逃亡兵のことか」と皆が尋ねた。

「もうそのことを知っているんですかい」。

「いや、我々が知っているのは、奴等が昨日一人の逃亡兵を連れて行ったということだけだ。レーツケがたった今それについて話したところだ。しかしどんなだった」。

若シャルヴェンカはクルルとレーツケの間に割り込んで、それから言った。「丁度渡し終わったのだけど、領収がまだだった。老フュルグラーフが調子よくなかった。それでまだどれ程かかるか倉庫で尋ねたら、検査官が四時には良くなるだろう、あるいはもっとかかるかもしれないと言った。その時城の時計が丁度十二時を打った。しかし何をしようかとなって、マティスに言った。『マティス、どうしようもないな。気楽に考えることにしよう。キーツのケルコーの所に寄って、会うことにしよう。あそこへはどうせ行かなくちゃなんねえのだから。すぐ行くから、先に行ってくれ』と。つまりメンケンとまだチェリー酒樽のことで会う必要があった。それから橋を渡った。更に十分ほどゆっくりと老ケルコーとその門前に立って話しをして、鶏どもが餌を突いていた。すると太鼓が聞こえて来た。その太鼓の音が、生涯まだ聞いたことのないような叩き方だった」。

「それはな、ヴェンツラフ」とキュムリッツが言った、「おまえが兵士の経験がないからだな。俺は知っている。連打があって、それから静まり返る。それからまた連打だ。余り良いことじゃないのだが」。

若シェルヴェンカは頷いて、続けた。「それからほどなくして、奴等が通りをやって来た。最初は五人の鼓手とそれと同数の笛吹きが。しかし笛吹きは吹かない。それから若者が来た。何という姿だったことか。不安そうとか悲しそうとかではないのだけれども、心が痛む風情だった。私が立っているのを見、私が同情の目で見ているのを察したのだろうか、彼は小さな帽子を取って、私に挨拶した」。

百姓達は皆寄って来た。居酒屋では紙が一枚落ちても聞こえたであろう。

「それから老フュルグラーフがやって来た。対の副官を脇に従えて、そして最後に全大隊が来た。若いヴェストファーレン人が逃亡することになった当の大隊だ。しかし勢力はわずかなもので、四百人はいなかった。そのとき老ケルコーが言った。『若シャルヴェンカ、行こう。一緒に見てみよう』と。それで一緒に行った」。

「それでもこういう言葉がある、『汝みだりに好奇心を起こして、大口開けて見ているなかれ』と」。

「いいのだ、ミークライよ」とキュムリッツが口を挿んだ、「いいのだ。そのようなものは見る必要がある。印象に残るのだ。用心するようになるか、敵に対する憎しみが得られるからな。そのどちらも結構なものだ」。

「それで進んで行った」と若シャルヴェンカは続けた、「相変わらず太鼓の連打で最後の家々の所まで続き、そしてラー布職人のギュンツェルの所で左手の野原に折れた。綱製造所のある所だ。『止まれ』と老フュルグラーフが指揮した。それから方陣が作られた。ただ四番目の側面は空いていた。ここに墓があった。私は並木の間にケルコーと立っていて、雪の上に新たに掻き出された砂を見ていた。心臓に震えが来た。五人の男と一人の軍曹が今や方陣から出て来て、彼の目を彼のハンカチで結んだ。古い青色のハンカチで白い点々が付いていた。彼は跪くことになった。しかし突然またそのハンカチを取って、十歩と離れていない将軍に歩み寄って、何か言った。私には聞こえなかった。しかし老フュルグラーフは頷いて、手を目の上に持って行くのが見えた。あたかもこの青年の心が軽くなったかのように見えて、青年は真っ直ぐに立っていて、長く天を見つめていた。一分間ほ

どだっただろうか。それが終わると、左手で、その手にまだ青いハンカチを握っていたが、自分の胸を叩いて、叫んだ。「ここだ、戦友、ここにプロイセンの心臓がある、撃て」。そして一斉射撃となった。次の瞬間にはすべてが終わっていた。しかし老フュルグラーフは馬で近寄って、銃殺執行隊に言った。『ハンカチを渡してくれ』。しかしこの死者は固く握っていて、苦労していた。それからまた方陣が解かれて、部隊ごとに我らの側を通り過ぎて行った。今や笛吹きも演奏していた。何か陽気なもののはずだと気付いた。しかし付いて行きながら、とても陽気な気分にはなれなかった。これがようやく一時のことで、六時にようやく領収書を得た。この領収書が五時間だったのだ」。

そう言って、彼は老フュルグラーフの署名した領収書をテーブルに置いた。百姓の一人一人が紙片を取って、署名を見た。それからクリームポットが言った。「何故まさに当の大隊でなければならなかったんだ。フランス人は十分いるだろうに。これがフランス人の策略だな。いつも何か変わっている。それに残酷だ」。

「静かにしろ、クリームポット」とキュムリッツはうんざりして言った、「誰もが牛乳鉢に落ちるわけではない。おまえさんの分別で物言うな。変わっているだと。詰まらぬことを。逃亡兵は射殺されるのだ。世界中でそうだ。ピルマゼンス近郊の戦い[一七九三年プロイセン勝利]のとき我々もやはり可愛い若造を捕まえた。しかしどうしようもない。戦争は戦争だ」。

ミークライはクリームポットに賛同しようとした。しかしキュムリッツは興奮していて、彼に話しをさせず、ただこう言った。「ミークライ、話しは聞きたくない。おまえさんは宗教論文にはまっている。これは最悪だ。ウーレンホルストは戦争を廃しようとしているが、しかし戦争の方がウーレンホルストを廃することになろう。我らが戦争となってみろ。彼の話しは空の席が相手だ。今にもそうなろう。言っておくが、戦争になりつつある。そうなったらまた話し合おう。グロース・クヴィルルスドルフの老公[バメ]は何か計画している。老公のことは知っているが、手に負える人ではない。ウーレンホルストも変えられはしない。国民軍にしろ、そうではないにしろ、彼がおまえさん達に戦時条項を読み上げる。旗の下に立たない者は、軍事法廷行きだ。これが何かはおまえさん達は承知していよう」。

クリームポットとミークライは頭を振った。

「頭を振るがいい。いいかい、本気になって来ているのだ。何か見聞していよう。ここら辺りが最悪だ。これは古い予言から分かっている。それが何と言っているか、承知しているか。天を真っ赤な騎士達が行くことになろう。人間達はまばらになろう、五七年に大きな嵐が来てコウノトリがまばらになって、五マイルごとにただ一羽となったようになろう。当時神がその神の鳥を打ちのめしたように、神は人間を打ちのめすことだろう。しかし和平がコリーンヘン村で結ばれることだろう、と」

「その通り」とクルルは言った、「それはキュストリーンの新報で先の日曜日に読んだ。それは最終頁にあった。小話や謎々と一緒にあった」。

「今日はその返事も載っている」とクニーハーゼが言って、窓際から中央テーブルの所へ来た。「聞きたいかい」。

「聞きたい」と皆が叫んだ。

「それでは、新報第五号の嘆きの予言者への返事」。

「何と書いてある」。

「一八一二年には雪が積もって、モスクワが大火災となろう」。

「それは安直なものだ」と老シャルヴェンカは不平を言った、「過去を予言している」。

「しかし一八一三年は」とクニーハーゼは読み続けた、「この地上でまだ見られなかった時代が来るだろう。老人達は喧嘩しなくなるだろう。若い娘達は好奇心を起こさなくなるだろう。ドクトル達は作り話をしなくなるだろう。裁判官はただ夜にだけ眠るだろう。ワインはただ秋にだけ作られるだろう。金持ちは人間的になり、乞食は勤勉になるだろう。同じ身分のすべての人々が互いに愛し合うようになるだろう」。

百姓達は笑った。キュムリッツは言った。「それも予言者か。一人は嘆いて、もう一人は冗談を言っている。しかしどちらが正しいか」。

「いつも真面目に見ている方が正しい」とミークライは述べた。

「違う、ミークライ」とクニーハーゼは言った、「いつも陽気に見る方だ。世界は没落しない、我々もそうだ」。

皆がクニーハーゼが正しいと一致した。そうでないと人生は消滅してしまう、と。

何人かの百姓は自分の妻や娘のために「新しい予言」を書き写した。しかしクリームポットは若シャルヴェンカを脇に連れて行って、更に逃亡兵のことについて話して貰っていた。というのは、彼は仲間内で神経が最も弱くて、最もロマンチックな欲求を有する者だったからである。

それから人々は別れた。

第七章
フーレン夫人の手紙

翌朝兄妹は二人っきりで朝食のテーブルに着いていた。ベルントはまだ戻って来ていなかった。ショルレンマー叔母は家事で忙しかった。レーヴィーンは明らかに回復していた。しかし余り語らず、それでホッペンマリーケンが車寄せの下に現れるのを見て、喜んだ。ホッペンマリーケンはいつものように鉤状杖を持ち上げて、手紙を持参していることを暗示しようとしていた。すぐその後実際彼女がショルレンマー叔母と一緒に入って来て、手紙と新聞とをテーブルの上に置いた。「一つはファウルシュティッヒから」と彼女は言った。彼女は文字を読めないので、封印か他の外的印から読み取ったに相違なかった。その通りであった。ファウルシュティッヒは何度か言及されたカンタータを送っていて、グーゼ宛にはもはや毒舌の手紙を送れないので、この機会を利用して、手袋職人のプファイファーの下のキルヒ・ゲーリッツ人の戦勝を皮肉に華麗な報告の中で賛美していた。「クランペでの戦い」[1813 年 4 月 16 日、プファイファーの活躍の史実がある]というタイトルの下、若干の詩節が書かれていた。その中にこうあった。

彼らがダンツィヒの火酒によって
勇気を鼓舞して、
赤い枝垂柳を切り倒したとき、
勇者は二十九人。

ゲーリッツとその鳥グリフィン[鷲と獅子の合体]は、
戦闘の怒りに燃えた。
そして我らの手袋職人プファイファー[笛吹き]が
横笛大王[スコットランドの伯爵]とならせられた。

ホッペンマリーケンはこの詩まで聞いていて、その際賛美歌であるかのように両手を組み合わせていたが、しかし最後にプファイファーの名前を聞くと、合点が行って、言った。「何だ、あのプファイファーか。小さな足萎えのあやつはいつも悪戯をしでかす。唖然としているわけだがね」。

そう言って彼女は背負籠を背負って、また部屋からドシンドシンと出て行った。

レーヴィーンは余り快適に心動かされない手紙を押しやった。「全くファウルシュティッヒらしい。いつも滑稽なことに目が行き、それ以上ではない。彼自身驚くことがない。結局のところ、手袋職人プファイファーの方に心が向く。別の手紙は何だろう。

この手紙は小さな四角形で、背面には信仰・愛・希望の印章で封印されていて、宛書きはかなり長く続くアドレスが記されており、正書法は何ら優れたたものとは言えなかった。「レーヴィーン・フォン・フィッツェヴィッツ御尊台、目下キュストリーン近郊のホーエン・フィーツ宛、郵便前納」。レーヴィーンはこの文字をよく見た記憶があったが、どこでだったか分からなかった。興味深くなって彼は封を破って、署名を見た。「老フーレン夫人からだ」。

「まあ、読んで」とレナーテは言った。ショルレンマー叔母は付け加えた。「その方がもっと気に入るかも」。

「どうかな」とレーヴィーンは言った。しかしその声から同じことを思っていて、この件はかなり大丈夫ということが窺われた。そして彼は読んだ。

「親愛なる恵み深い若様、

今は本当に厳しい時です。レナーテお嬢様が私宛にボールスドルフから仰有っている通りで、このお手紙で貴方がどこにいらっしゃるか私は教えて頂きました。お嬢様の御親切に感謝します。

まさに厳しい時で、私はそれについて話したくありません。でも貴方に老婆としてそれは何でもないと言わなければなりません。私はすぐに見抜きました。彼女は確かに雀蜂のように痩せているけれども、刺しもすると。そうなったら痛みが去るように土を乗せなければなりません。刺された所が心臓なら、ひどいものです。いや、若様、貴方も土の下に眠る運命だったことでしょう。でも神様はそう欲せられずに、死なないで済む救助をなさいました。そして本当の幸せへと救い上げられました」。ここまでレーヴィーンは読んだが、今や目から力が失せて、彼は手紙を持っていた手を垂らした。

レナーテが彼の代わりに読むべく、その手紙を手に取った。そして小声で繰り返した。「本当の幸せへと救い上げられました」、そして続けた、「そのことは全く確かなことと思っております。そのことは貴方が私の所で部屋を借りて、すぐこう仰有った同じ日に察していました、『フーレンさん、それは少なすぎる』と。そして私に自発的に追加されたのです。貧しい民にそのようなお心を持っている方、そのような方は神様もお分かりにな

って、見放されないのです。私どもが先の日曜日にまた歌ったことでも、お分かり頂けましょう。

御身はしばしば私を癒やされた、

天国のパンを賜れた、

十分に慰めて言祝がれた。［Paul Gerhardt より］

いや、親愛なる若様、これは本当に慰めの言葉です。まことに貧しい民のために書かれています。結局私どもは皆貧しいのです、金持ちであっても。貴方は何故か、きっと御存じでしょう。

このことすべてを私は貴方のために書こうと思ったのです。親愛なる若様、貴方を老婆としてそのようにお呼びしてよければ。また元気になられたら、どうぞまた老フーレンの許に住みたいと思ってください。お嬢様もそのご意向でしょう。このような住まいは二度とありませんよ。すべて都合がいいのですから。「緑樹」亭に、歌時計、それにクロスター教会。でもこれについてはもう話さないことにしましょう。とてもカトリック的に見えますから。

どうぞお嬢様によろしく。とても良い方で、老婆のことを思い出してくださいました。それでは謹んでかしこ。貴方のヴィルヘルミーネ・フーレン、旧姓ペーターマン」。

レーヴィーンは手紙を取り戻そうとした。しかしレナーテは言った。「まだ駄目よ、まだ長い追伸がある」。そして読み続けた、「若様、まだ告げなくてはなりません。フォン・ユルガス騎兵隊長が去られました。こちらにお見えになって、貴方のことを尋ねられました。冗談好きな小さな大尉も御一緒です。二人ともブレスラウへ行きます。ブレスラウへは皆が行きます。老レーヴェスの言う通りになりました。プロイセンは復活するぞ、と。明日新聞に載るそうです。でも人々は待とうとはしません。もう戦争であるかのような往来や太鼓です。年取っているか、虚弱な者は、自分の持ち物や収集物を出しています。ポツダムの幼年学校生徒は四十ターラー集めました」。

レナーテは笑った。というのはこの第一の追伸に続いて、縁の方に密に書き散らして、第二の追伸が更にあったからである。「若様、いいですか、隣室の足の悪い貯蔵室手伝いの少年も一緒に行こうとしています。国王は誰でも必要とされているだろう、と。一昨日はベルクのホールで『モスクワの大火災』［Schinkel （1781-1841）作］を見ました。何という燃え方でしょう。私どもは皆すべて焼き払わなければならないと思いました。署名同上」。

ショルレンマー叔母は一種敬虔にこの手紙のお喋りに耳を傾けていた。「立派な女性ですね」と彼女は今や言って、付け加えた、「夫人に何か贈り物をしましょう。　ー　そうしない、レナートヘン」。こう言って、叔母は部屋を去り、兄妹二人だけにした。

このことで二人の願い、殊に、レナートの願いがかなった。レナートはしばらく後で兄の手を握って、小声で尋ねた。「レーヴィーン、あなたと話していい」。レーヴィーンは頷いた。

「フーレン夫人の言うとおりね」とレナーテは始めた、「素朴な心で言い当てていますね。それで話しを聞いて。あなたはこちらに来て、二日になる。一緒にこれまで折り入って話せず、いつも、私どもの心に重くのしかかっていることをただ心配して避けて来ました。『私ども』と言うと、あなたは驚くでしょう。でもそうなのです。私もあなた同様重苦しい気持ち」。

彼女は黙っていて、カティンカについて話そうとした。しかしその名前が唇から出て来そうになかった。それで彼女は続けた。「私は彼女をとても愛してきました。姉妹以上に。彼女はとてもすがすがしい高貴な人柄で、私やあなた、それに皆を魅了して来ました。あなた方二人が、あなたとトゥーバルがキルヒ・ゲーリッツへ行った日の朝のことを思い出さずにはおれません。窓際に鳩が来て、私が閂を外して開けた途端、彼女の許に愛くるしく鳩が迫って行ったのです。あのときは嫌だった。でも私の間違い。彼女の許には何でも飛んで行くのです。マリーも彼女に夢中で、称賛して憔悴し、そう憔悴していました。彼女の心も血を流したのです」。

レーヴィーンは一言も聞き逃さず、微笑して言った。「我々の失ったものの称賛を聞いて、我々は喜んでいる。奇妙なことだ、喪失の感情が高まるにつれ、それが慰めとなるのは。レナーテよ、おまえは非難していいのだ、私が悲しむとか心配せずに、非難していい。私は心が軽くなった。それは自らの力によるものではなく、ほとんど自らの意志によるものではない。しかし一昨日、明るい冬の日にこちらに帰って来たとき、古い人生が私から脱落し、新しい人生が開始されるのを感じた。まだ余韻は残っている。微かに痛々しく、しかし私はそれでも回復途上にある」。

「あなたのように私も語れたらいいけど」とレナーテが言った、「あなたにとっては悲しい日々は過ぎたのね、でも私の悲しい日々はこれから。その悲しい日々を経験しなかったら、それはやはり辛いことで、もっと辛いことを経験しなかっただけのこと。そのようになることが私には分かっている。私の気持ちの中で予感として感ずるの」。

レーヴィーンは答えようとした。しかしレナーテは次第に興奮して続けた、「あるのは暗い家。自分自身有しないもの、これは誰も与えることができない。明かりと幸せね。いつもその運命は、愛を呼び起こすけれども、信頼を呼び起こせない。信頼、これは『すべての愛の母であり、その子である』[フォンターネ自身の詩]と。そう一度私は読んだことがある。その時には深い感銘を受けました。でもそれから別なことを体験しました。信頼のない愛もある、と。私はこのような愛を抱いています。誰に対してかはあなたには分かるでしょう。私はその愛を心から引き離せない。だから私は幸せになるつもりはないのです」。

「いや、レナーテ、幸せになればいい。私より幸せに」。

彼女は頭を振った。

「トゥーバルは、...」。

「...彼の妹の兄」とレナーテは痛々しく動揺して彼を遮った。「カティンカの兄なのよ」。

第八章
司令部ホーエン・フィーツ

二人の会話は一台の馬車が入って来て、中断された。レナーテは、窓から眺めが自在で、叫んだ。「父上だ」。父親であった。そして速やかに立ち上がっている兄妹に対し、すでに玄関から入って来た。出会いは和やかなものだった。彼はレナーテの額に接吻し、それから両手でレーヴィーンを捉え、同時に窓の壁龕[ニッチ]へ連れて行った。

「どんな具合だ」と彼は言って、彼を頭から足先まで鋭い目で観察した。「まあ、良い

知らせだな。おまえの最初の痛みで、最も辛かろう。しかし治るのも、最も速い。若い日々、短い苦悩。この逆もまたおまえは知ることになろう。それでそのことは終わりだ。腰かけることにしよう」。

イエーツェが入って来て、二回目の朝食の準備をした。ショルレンマー叔母も現れて、再会の喜びに加わって来た。というのはヘルンフート的に彼女の心は冷静なものであったけれども、別れの日々や週の後、老フィッツェヴィッツの声を初めてまた耳にすると、この冷静さを忘れたからである。ヘクトー[犬]も入って来た。それで皆が一緒となった。

「父上、とても待っていましたよ」とレナーテは言った、「愛からではないけれども、愛なんて聞きたくないでしょうから、でも好奇心から待っていました。何も知らないし、知らないも同然なのです。話してください。どうして伯母は亡くなったの」。

「ザイデントプフ[牧師]はそれについて話さなかったのか」。

「そうとも、そうでないとも言えません。牧師は葬儀については話したけれども、死因については話さなかった。伯母が亡くなったのは恐怖のせいという思いを棄てられないのです」。

「その通りだろう。突然死に襲われたに違いない。私が見た彼女の姿勢は、エーフェがその日の朝発見したときのままであった。彼女は大きなベッドの足許、大きな花柄の背もたれ椅子に座っていて、まだ開けたままの目を据え置き鏡に向けていた。彼女の読んでいた本、ディドロ[Didrot（1713-84）]の一巻本が落ちていて、椅子の横にあった」。

「どんな服だったの」。

「黒服。エーファはその前の晩、伯母から追いやられていた。伯母は自分で夜の身繕いをしたいとのことだった。それが十一時。この時刻に生じたに違いない、あるいは後にしろそれほど後ではないだろう」。

「それで、...」とレナーテは詰まった。

「何を聞きたいかは分かる」とベルントは続けた。「私が寝室に入ったとき、鏡は緑色の覆いが掛けてあった。しかしエーフェは私がそのことを尋ねると赤くなった。そしてあれこれ話しが合わない。哀れな娘だ。私はそれ以上問い詰めなかった。エーフェが前の晩、覆いをかけ忘れたことには確証を抱けただけに、責めなかった」。

「幽霊を育てる人は、幽霊に殺される」とショルレンマー叔母は言った。

「幽霊を育てるべきではなかろうが、出現するとなると、...」。

「幽霊は無視すべきです。すると消えます。幽霊は無視に耐えられません。幽霊はすべての地獄の生き物同様、自惚れが強いから」。

ベルントは微笑して、ショルレンマーと握手して、言った。「我らの昔からの諍いだ。ひょっとしたら、今一度講和を結べるかもしれない。しかしそれは放っておこう。いいかい、更に報告することはもっと良い響きがするぞ。我々は豊かになった。レナーテよ、おまえが鏡を覗いたら、おまえはそこに遺産継承娘を見ることになる」。

「私には分かっていましたよ」とショルレンマー叔母が凱歌を上げた。「私はあなたに予言しましたよね、ドクトル・ライストが最初の往診をした時、ボールスドルフでの夕べに」。

レナーテは赤くなった。というのはそのときショルレンマー叔母が述べた多くの他のことも思い出したからである。しかしベルントは偶発時には注意を払わず、続けた。「遺言

はなかった。グーゼに対するプダグラ家の法的権利は問題にならない。自由所有地だから。それでそれは私の手に落ちる。最も近い相続人に。私は差し当たりプダグラ家の利害を代表する者としてラダリンスキーを頼み、彼とこの件について話し合った。彼は、私が幸せに思うように、自分にとって間近な家の願いや要求、とりわけ彼自身の願望をどのように調整していいか、分かっている。それは伯母の昔からの計画に触れるものだ。分かっているだろう。我が忠実なレナーテよ、おまえが選択する気になった時から、グーゼはおまえのものだ。私は単に用益権者、管理人にすぎない。ちなみにこの言葉は何もおまえに決定を迫るものではない。おまえの選択は自由なのだ」。

兄妹は黙っていた。ショルレンマー叔母でさえ、自分の心の中で思うことを表現するような警句を述べなかった。ベルントは満足げに見えた。彼は習慣通りに、自分の横に座っているヘクトーに、自分本人の分であった肉付きのパンの切片を投げ与えながら、続けた。「すると我々は金持ちになろう。この極貧の日々に金持ちになるのだ。神様も御存じのように、私は現世の利益を求めて迫ったことは確かになかった。しかし今この所有が嬉しいことは確かだ。私はより自由になっていると感ずる。というのは告白すると、この時代の困窮、逼迫が重く私にのしかかっているのだ。おまえ達には気付かれたくないほどに重くな。焼け落ちた納屋は、...」。

「...それはまた再建しましょう、父上」。

「ホールの建築部分は、...」。

「...それはしません」とレナーテは笑った、「それには遺産継承娘として、必要な資産を断ります。それより、明るく楽しんで、庭園を窓の前まで持って来ましょう。そっくり向こうのホーエン・ツィエーザルのように。伯爵[ドロッセルシュタイン]自身きっと手伝いをしてくれましょう。それが彼の情熱ですから。私はモクセイソウやアラセイトウが好き。でもそれらは花壇の縁取りとして。花壇の中心にはゼニアオイを植えましょう。肉桂色のものとか繻子系の類いが私は最も好き。二台のデルフィリンガーの大砲はグーゼからこちらに運びましょう。ただ牧羊神は置いておいて。築堤には日時計を起きましょう。もっと良いのは大きな黒いガラス球。そこに村の通りが映るようにして、ホッペンマリーケンが通り掛かるとき、見るの」。

「それは良い考えだ、レナーテ。すぐにより良い日々に適応しているように見えるな。ただおまえ自身の城からは、グーゼを差し当たりそう見なしているが、古いホーエン・フィーツのために何も持って来ないようにしておくれ。たとえ単なる二台のデルフリンガーの大砲といえどもな。そのうちの何が残るか分かったものじゃない。差し当たりフランス人が向こうにおって、気に入ったものを持って行くのだ。少なくとも気を付けて見張っておかなくてはならない。レーヴィーン、ちょっと来い。それについて話そう」。

ベルントは立ち上がって、レーヴィーンが続いた。彼らは窓一つの部屋に行った。そこで我らの物語の冒頭、父親と息子が民衆の蜂起と敵支配の最終的潰滅について最初の会話をしたのであった。何も変わっていなかった。こちらにソファーが、向こうに絵があり、広い窓の鎧戸にはロシアの地図が様々な色の針と共にあった。すべては最初のクリスマスの日と同じようであった。

老フィッツェヴィッツは腰かけて、足をいつもの習慣通りに、自分の仕事机の前にある

足台に置いて言った。「腰かけなさい、レーヴィーン。他のことについて語る前に、おまえのことについて一言。女性達の前では語りたくなかったのだ。女性達には余りそのことを聞かせてはならん。すぐに自惚れるからな。女性達は皆支配したがる。女達は我々男に影響力があることを喜ぶのだ。その点女性は皆同じだ。永遠に我ら男性に静かな共謀をしている」。

レーヴィーンはぼんやりと宙を見ていた。ベルントは彼の手を取って、続けた。「我々自身をもはや苦しめない、ひょっとしたら苦しめたことのない心苦しいものについて、語るのは簡単なことだ。そんなものだ。レーヴィーンよ。おまえを苦しめているもの、私はそんな目に遭わずに済んだ。いや、違う、違う。私は承知している。経験もしている。人生とは、克服することを学ぶことだ。動揺し易い性質、おまえのような性質の者には、神がこのような戦いを最も容易なものにしてくれておる。おまえは克服するであろうと分かっておった。更に欠けているものは、時間だ。我らの時は、他のどんな時よりも速いぞ。皆が行動を求めているからな。行動が確かに最良のものだ。物思いは最悪だ。この時代の日々がおまえを自由にしよう」。

「その通りです、父上。父上が帰って来る前、私はレナーテとそのことについて話しました。それは済んだことです。私に尚欠けているもの、それは単に肉体的なものです。辛い病気の日々でした。まだ余韻があります。それ以上ではありません。しかしグーゼの件は何です。それについて話したかったのでしょう」。

「そうだ、聞いておくれ。昨日の午後、丁度教会から戻ったところだった。教会ではニップラーがカンタータのための作曲を差し当たりオルガンで演奏して聞かせてくれたのだが、村中こういう噂だった。フランス人が来るぞ、と。その通りだった。十五分後、百人がやって来て、城の前で止まった。ウディノ[Oudinot(1767-1847)]軍の様々な連隊からの者達で、軍用金を携帯しておった。彼らに私が近付くと、その指揮官、黒ずんだイタリア人が私に挨拶した。コンテ[伯爵]ディ・ロムベロと名乗った。その地位は隊長だな。彼は私を震え上がらすために、明日到着するであろう「主要軍」について話し、宿営を要求した。私は早速迎合して（こんな鴨が通過する筈はなかったので）、彼を城に入れて、城のどの部屋も使っていいと言った。彼は鏡の部屋を選んだ。ちょっと変わった趣味だ。彼は可愛い奴で、自分の姿を見たいのであろう。軍用金はホールに置かれ、差し当たり金の保管のために一種の番所に変えられておった。その隣の各部屋に三十名が泊まって、私は同数の者を古いデルフリンガーの兵舎に泊め、残りは百姓の許に泊めさせた」。

「それで父上の計画は」。

「部隊は早朝、更に進んで行く。そこでなされるべきことは、迅速でなければならない。バメはそれについて承知している。しかし私はただ伝えるだけにしておいた。我々はここ手許にいる者達で済ませることにする。マンシュノーとゴルガストの者達も計算に入れて、それで百名だ。それでやっつける。彼らは蠅のように疲れている。志気はとうに消えている。それに夜で奇襲だ。間違いはない。百姓の許に泊まっている個々人は、命からがら逃げて喜ぶだろう。それでただ城だけが問題だ。スフィンクスの橋の前には二重の哨所が置かれている。そのままにしておこう。その代わり白鳥の小亭がある溝を進んで行き、背後から攻め入ることにする。クニーハーゼが指揮を取る。私自身はコンテ[伯爵]を捕らえる。おまえとヴェンツラフが一緒だ。上手くやれば、一人も失わずに済むだろう。軍用金は我

々が手許に取っておく。これはつまり当面だ。国王が布告した日に、軍用金はベルリンへ送る。ベルリンは入用だろう。金がプロイセンの国では最も欠けているからな」。

「それで捕虜はどうします」。

「捕虜は傷付けてはならぬ。私は冷静になっている。おまえに手紙で書いたことを覚えているだろう。『我々は正当な戦争を望む』と。それで捕虜はロシア人の許に送る。ちなみにそこで良いベッドを貰えるかは分からない。それでクニーハーゼの許へ行こう。細かいことすべてを彼と打ち合わせよう。九時には行軍の用意が出来て、真夜中にはグーゼに着かなければならない」。

そう言って、二人は帽子と杖を取って、中庭を越えて、村の路地へ進んで行った。

一時間後ベルントとレーヴィーンは村長の屋敷から戻って来た。そこで彼らはクニーハーゼと共に、「襲撃」について今一度語り尽くし、実行に必要な段取りを打ち合わせた。彼らはイエーツェが大いに興奮しているのを見た。それでベルントは問い質した。「また小股で急いでいる、イエーツェ、何があった」。

「将軍殿がいらしています」。

「バメか」。

「そうです、フォン・バメ将軍。旦那様が行かれて十五分もしないうちに、その小さなシェットランド島のポニーに乗って来られました。旦那様は御存じでしょう。黒い鬣の灰黄色のポニーです。クリストと私はそれをポニーの許へ連れて行きました」。

「シェットランド島のポニーか。しかし将軍はどこだ」。

「上です。すぐに暖房をしなければならなかったのです。かじかんで寒いですから。執務室に座っています。灰色の外套を着て、毛皮の帽子を被っています」。

フィッツェヴィッツ父子は今や階段を上がって、将軍が正確にイエーツェが描写している通りであるのを見た。彼の前には、かなり中央に置かれている仕事机の上に、大きな、インク壺と紙切り鋏で固定されたバルニムとレブースの特性地図が広げられていて、その小さな、上体を前のめりにした男が苦労して理解しようとしていた。自分が吸っている厚い煙草の煙で必ずしも楽になっているとは言えない試みであった。

「今日は、将軍」。

「今日は、フィッツェヴィッツ。私はこちらに連絡もせず、問い合わせもせず、やって来た。いつもの私の流儀ではないのだが。しかし今は『将軍』バメということを考慮して、お許し願いたい。私の古いグロース・クヴィルルスドルフは世間から遠く離れている。有り体に言うと、私はホーエン・フィーツを私の司令部にしようと考えている。最初は、我らの伯爵のホーエン・ツィエーザルを優先しようか、迷ったのだ。しかしホーエン・フィーツの方がいい。ここは大きな通りがある。キュストリーンから西へ行こうとする者は貴方の窓前を通り過ぎなければならない」。

「将軍、貴方の選択がまさにここであったことを喜びとします」。

「本当のことを言うとな」とバメは続けた、「単に地勢のせいだけではない。私がここを宿営とし、ホーエン・ツィエーザルをそうしなかったのは、フィッツェヴィッツよ、貴方のせいだ。貴方はとにかくこの件の真髄だ。すべてを計画し、専門だし、地域を知っている。これが肝要だ。いいかい私はここに地図を広げて、私の平坦部総長を演じている。

しかし無様なものだ。この三十分間三十回以上キュストリーンとベルリンの間を行ったり来たりしているが、ほんの三つの立派な狼罠を仕掛けられなかったのだ」。

「狼罠ですか」とベルントは尋ねて、老公の顔をびっくりして見た。一方レーヴィーンは椅子をテーブルの背に持って行き、少なくとも上の方からバメの前に広げられている地図を見ようとした。

「そう、狼罠だ、あるいは狐罠でも、何でもいい。いいかい、聞いてくれ。何か生じなければならない。この一点に関して、我々は一致している。そしてまさにその時であるという点に関しても一致している。元帥達や軍指揮官達が去って行く。皆大層な名前だ。しかし小者達もまだ数百名がヴィスワ川とオーダー川の間にいる。こいつらを我々は捕まえなければならない。つまり『拉致』、あるいは強盗、追い剥ぎ、何でもいい。言葉に驚く必要はない。少なくとも我々はな。我々の先祖の血や専門の若干がまだ我々には残っていよう。我々の計画していることで感謝されるか、我々が上手くやれるか、どうか。これは勿論問題だ。私はほとんど懐疑的だ。貴方はこれについての私の見解を承知していよう。『独力でやること』これはこの国ではいつも『疑ワシク』思われてきた。そう姉君の伯爵夫人は仰有ったことだろう。我々は上層部に好かれていない。その点奴等は正しい、ニュルンベルクの殿方達はな[プロイセンのホーエンツォレルン王家、バイエルンの出自]。始まるのは分かっても、終わりは見通せないからな」。

バメは「ホーエンツォレルン[プロイセンの新興勢力]対クヴィッツォーや同志[プロイセンの旧来勢力]の問題となるといつも迷宮的な余談に外れてしまうもので、今日もまた話しの糸を見失ってしまっていた。それ故フィッツェヴィッツは即座に宙に浮いた問題に戻した。「それで狼罠です」。

バメは笑った。そして話しの間に消えていた小さな火口にまた点火して、言った。「そう、狼罠、フィッツェヴィッツ、あるいは大層な言葉がもう発されたが、強盗兵站地、将軍罠だ。中隊長も捕らえる。すべて中に落ちる者は結構。選ぶことはない。それで貴方の仕事だ。しかしフィッツェヴィッツよ、私がこの十マイルで、ほんの三つのそのような将軍罠を見つけ出せたと思うかい。誓って。一つもないのだ。何故できないか。私がハーフェルラント出身で、恥ずかしいことにこう言わなければならないのだ。丸十七年いて、バルニムやレブースはさっぱり分からないと。ラーテノーやハーフェルベルク、これには詳しく道や小道を知っている。しかしここで何を知っているか、ホーエン・フィーツとホーエン・ツィエーザルで」。

「グーゼは」。

「そう、グーゼだ。このような罠の筈だった。しかし奴等は去った」。

「誰が、何です」とベルントは叫んだ。

「皆だ、百人とコンテ[伯爵]と軍用金で。軍用金は最悪だ。二時間前、村の前三百歩も離れていない所で、全部隊が過ぎて行った。金の箱は縦隊の真ん中に置いてな。利口な奴等だ。嗅ぎつけたのであろう。ちなみにこのコンテ[伯爵]は面白い黒ずんだ奴だ。よく喋る、早口でな。伯母様に紹介したかった。悪しからず、フィッツェヴィッツ」。ベルントは地団駄踏んだ。伯母のためではなく、襲撃が頓挫したためであった。

「いつも中途半端だ」と彼は叫んだ、「いつも取り逃がし、いつも延期だ。バメ、そうだろう。我々が鹿の後を忍んで行こうとした瞬間、がさがさ音がして、鹿は遠くへ逃げて

しまう」。

「奴は放っておけ、フィッツェヴィッツ。日々変わる。一枚のカルタは負けても、次の一枚で勝つ。ちなみに、シャトー・ディケム[ワイン]六本を[けちな]クラハ家のシャトー一本に賭けていいが、コンテ[伯爵]は、素晴らしい目をしていようとも、三マイルも先に進めない、と。将軍罠は確かにまだ出来上がっていない。しかしそのうち自ずと出来上がる。金に関しては、軍隊が零落するにつれ、軍用金も零落すると考えると諦めがつく。この哀れなウディノ[元帥]は元来費用を払わなければならないのだ。それで終わりにしよう」。

「そうしなければならない」とベルントは言った、「レーヴィーン、行って、クニーハーゼに言うのだ。隊員は現地解散、とりわけ、マンシュノーとゴルガストの人々にはそう伝えろ。彼らを無用にあちこち動員して無駄なことをさせてはならない、さもないと肝心なとき使えない」。

こうした点が決められ、新しくなすべきことにかまけて、グーゼでの失敗を半ばすでにまた忘れかけていたとき、イエーツェが入って来て、正餐の準備が出来たと知らせた。

第九章
高級副官

バメを歓迎して、ホールで食事の準備がなされていた。大きな暖炉の火が燃え、外では雪片が舞い落ち、昔のフィッツェヴィッツ家の人々が額縁からびっくりして、小さな、カラス声の男を見下ろしていた。この男は再三「将軍殿」と呼ばれていた。彼らの時代、将軍は別な風に見えていた。ちなみにひょっとしたら彼らの驚きは、何よりももっと豊かな、全く格別な食卓準備に向けられていたかもしれない。というのは今日は重々しい、四本腕の銀製燭台が燃えていたばかりでなく、これらの燭台に混じって、不似合いに大きな、ドナウ川をそのすべての支流と共に描いているロココ調のセンターピースが置かれていたからである。その最先端には女帝マリア・テレジアが王座にあった。これは鬘をした老フィッツェヴィッツの人々は丸三十年間見たことがなかったし、我らのベルントでさえ、ホールに入って来たとき、一瞬当惑していたのである。しかしレナーテは、この視線を見たとき、自分自身に人差し指を向けて、父親に悪戯っぽく言った、「父上、私がしたのです。グーゼの遺産継承娘として」。

すぐその後皆が席に着いた。バメはベルントとレナーテの間に座り、レーヴィーンとショルレンマー叔母が彼らに向かい合った。置かれた椅子の一つが空いたままであった。丁度招待されたザイデントプフが最後の三十分前に断ってきたのであった。つまり小百姓の老マルトゥーシュが昨夜から臨終となっていて、聖餐を欲したのであった。この断りの理由が告げられると、バメの側から直接聖餐や午餐についてのとりとめのない言葉がつぶやかれたが、しかし不分明で、きまり悪く感じながらであったので、彼はこのようなことを聞き逃さないショルレンマー叔母によってさえ、叱責を買うことはなかった。

小百姓老マルトゥーシュは、我らの友イエーゼリヒ・クーバルケより大して若くなく、村から四十五分ほど離れたホーエン・ツィエーザルとのすぐ境に住んでいて、そこは本来すでにドロッセルシュタインの境界田畑の一種陸の岬にあった。そのため数分間、マルト

ゥーシュ・ザイデントプフ・クーバルケの領域に関し若干述べられた後、伯爵領地のことに移り、伯爵領地から伯爵本人に話題が及んだ。皆が一致して彼を称えた。レナーテは格別温かく話し、ショルレンマー叔母さえ、彼の「自らに隠された」キリスト教精神を称えた。「伯爵が別の交際をしていたら」と彼女は言った、「堕落の時代の代わりに、啓発の時代に生きていたら、伯爵は『私どもの伯爵[ツィンツェンドルフ]』のような男性になっていたことでしょう」。

「有り難いことに」とバメは答えた、「彼は自然や状況が彼を育て上げたままの本人である。私はラウジッツの伯爵に何の異存もない。いとも尊き貴女が『私どもの伯爵』と好んで形容する方に対して。しかし私は我々のドロッセルシュタインを、彼は立派な有徳な方であるが、いずれにせよ、極めて風変わりな人には数え上げられないのに、ツィンツェンドルフ二世として想像すると驚いてしまう。誰もが自分自身の脚で立つことは気持ちがいい。これらの脚はどんな種類のものであれ構わない。我々には我々の脚があり、ツィンツェンドルフには自分用の脚があった。私が『我々の』と言うとき、私はお許しを請わなければならない。私は良く承知しているが、私の正当な虚栄心はまさしくこちらの[ツィンツェンドルフ]の面に従って探してはならないからである。ちなみにいつも変わらぬ真理は、『コピーほど悲しいものはない』だ。ハインリヒ王子は何故挫折したのか。向こうの[グーゼの]伯爵夫人は亡くなられた。それで友情を毀損する恐れなしにこの問いに対する答えを述べられるかもしれない。彼が挫折したのは単純に彼が結局は『ほとんど自分の兄[フリードリヒ大王]』に他ならなかったという事実のせいなのだ。それで私は老フェルディナント[大王の末弟]を称える。貴方が、フィッツェヴィッツよ、最近ヨハネ騎士修道会の宮殿に訪問した方だ。神は御承知だが、彼は大したものではなかった。しかし彼は少なくとも彼自身であったのだ。いや、いとも立派な叔母さん、我らのホーエン・ツィエーザルの伯爵は、あるがままの彼にしておきましょう。それが彼にとって、そして我々にとって最良です。彼にはまさにただ欠点が一つあります」。

「それは何だろう」とベルントは尋ねた。

「彼はプレーゲル川[東プロイセン]の水を手放そうとしない。あるいは同じことを言おうとするなら、彼は余りに深く東プロイセンの偏見に染まっている。彼が政治的事柄について話すときには、注意されたい。殊に今の日々はそうだ、今日々、彼の正直な確信によれば、向こうの上層部ではまた、世界史を築こう、自由と秩序にバランスをもたらそうと躍起になっているのだ。私は彼のことは良く分かっている。東プロイセンでは男らしさが、ケーニヒスベルク[カントで有名]では英知が住みついている。そのことは揺るがせない。第一の条項だ。他の地方で見られる一切がこの尺度で測られる。我々マルク地方人もただ上の尺度で見られるのだ。彼は我々を重んじている。しかし単に素材としてだ。我々は、奉公に、軍や管理に振り分けられる。しかし我々自身の価値は無であり、何も意味しない。我々は自由ではなく、道具で、宮廷の奴隷、ホーエンツォレルン家の終身従者だ」。

ベルントは微笑した。

「その通り、将軍」と彼は言った。彼は左手の指で軽くテーブルクロスを叩いた、「明るい所で見てみますと、その通りではありませんか」。

「違うのだ、フィッツェヴィッツ、違う。勿論例外はある、二，三の例外は、何なら沢山あるでもいい。しかし腹が立ってならないのは、人々がペーレマンや、メーデヴィッツ、

ルッツェ達にかまけて、奴等は玩具時計や痛風、愚かしさしか有しないが、これらにかまけて、フィッツェヴィッツ達やバメ達のことを忘れているということだ。宮廷貴族か、バーカ。フォン・オッターシュテット狩猟貴族は一本調子の歌『ヨアヒム[Joachim Ⅱ.(1505-71)]よ、ヨアヒムよ、用心しろよ』をその主君の寝室のドアに書き付けたのだが、彼も宮廷におった。終身従者か。阿呆な。我々は横槍派[フロンド派]だ。皆そうだ、あるいは我らの最良の者達はそうだ。退位させたり、王座に就けたり、これが我々の情熱で、少なくとも私の情熱だ。バメ家は宮廷におったことがあったか。ない。フィッツェヴィッツ家も多くはない。我々は九十五年には尋ねはしなかった。今もまた我々は尋ねない。都合が良い間は一緒に行くのだ。片手ハ片手ヲ洗ウ。気分が良くなると私はいつもラテン語だ。合法性、忠誠、バーカ。すべては調子、取り決め、互いの利点だ」。

「それに宣誓」とショルレンマー叔母は言った。

バメは両肩をすくめた。

「善良なる叔母さん」と軽く見なして、彼は続けた（彼はショルレンマー叔母に好かれていないことを知っていたからで)、「宣誓が問題ということになると、ツィンツェンドルフが世間を支配しますよ。我々に勝ち目はないでしょう。有徳な世界史を考えてみて下さい。少なくとも私はその本を読もうとは思いません。宣誓は法と同じです。それがあるのは、破られるためです。少なくとも政治的なものはそうです。愛の宣誓は勿論例外ですな」。

同時に彼は自分の横に座っているレナーテの方を向いて、彼女の手に接吻をした。

「御冗談を仰有っているのですよね」。

「いや、恵み深いお嬢さん」とバメは続けた。彼はレナーテに対して彼流の崇拝を有していた、「冗談ではありません。ただ昔からの欠点で、隣にいる方の耳を正しく計算していなかったのです。今まで述べたことは、伯母の伯爵夫人用で、美しい姪御さん用ではなかったのです。今この時までグーゼにおりまして、ホーエン・フィーツにはいなかったのです。失礼」。

すでにこの最後の言葉が話されているときに、村の路地から速やかに登って来る鈴の音が聞こえて来た。そしてすぐその後橇が家の平地の前に止まった。

「普通に考えればドロッセルシュタインに違いない」とバメは言って、半ば椅子から起き上がって、前の敷地をもっと鋭く眺めようとした。しかしドロッセルシュタインではなく、むしろレーヴィーンが少なからず驚いたことに、ヒルシュフェルト、グレル、トゥーバルが入って来て、トゥーバルがまず、同行の二人を紹介し、皆が何の連絡もせず突然現れたことを詫びている間に、マフラーを外し、外套を脱いでいた。

ベルントは、もてなし好きで、気晴らしを求めていて、思いがけぬ訪問に対する喜びの言葉を、　ー　これは容易に察せられるように、「いつも新しい血」を求めているバメによっても共有されたもので、　ー　極めて活発に述べていた。それにもかかわらず、ある小さな当惑が残っていたが、これはレーヴィーンとレナーテとそれ以上にトゥーバルの許で見られて、絶えず問いかけがあれこれとなされながら、それに迅速に答える最中、隠されようとしていたものであった。いやショルレンマー叔母自身いつもの冷静さを失っていた。その間、椅子が用意された。食事の最初の準備の際に、ザイデントプフ用の席の他に、更に横の両脇が空いていたので、皿の手配は遅滞なく順調に進められた。コース料理の若

干を速やかに今一度提供する話しが生じたが、しかし新規に来た者達は、極めて明確に断り、途中存分な量の食事を摂って来たと述べるばかりでなく、また見たとおり、ホーエン・フィーツへの自分達の到着は考える限り最良の時、デザートの時に遭遇したと述べた。これに力を込めてバメは賛同した。バメは丁度黒パンにビスケットの各片に新鮮なバターを塗りつけていて、再三誓った。すべての時代の美食家達が、ルクルス[Lucullus(紀元前117-57)]からフリードリヒ大王に至るまで、本来の午餐をいつも単に、三人の偉大なデザートの神々、バッカス[ワインの神]、モムス[諷刺の神]、ポモナ[果実の女神]の土台と考えていたのだ、と。

このように老公は誇っていた。最初の時のあれこれの質問が自在な談話に席を譲り始めた点に、主に老公の上機嫌の理由があった。誰もが結局この会話に加わって来た。殊にトゥーバルがそうで、彼の口からとりわけ彼らの本来の旅の目的も明らかになった。我々は、と彼は請け合った。ブレスラウへの途上です。そこでユルガス、ブムケによって示された例に倣い、当地で設立される志願兵の軍に加入するつもりなのです。すべての世間が話題にしている布告はまだ発せられていませんが、布告されるであろうことを疑う者はいません（「今すぐにでもだ」とベルントが口を挿んだ)、そして昨日ユルガスから届いた手紙ではすでに新しく目覚めた生活像が描かれています。それでとりわけシュレージエンの国民軍も設立中です。十八歳から六十歳までのすべての男子は、まだ武器を取っていないかぎり、加入すべきことになっています。この国民軍の目的は、敵が弱い臨時編成部隊と分かったら、この敵に襲いかかり、将軍達を捕らえること（バメは平手でテーブルを叩いた)、そして略奪兵、落伍兵に簡易裁判を行うことです。シャルンホルスト[Scharnhorst (1755-1813)]が全体を指揮します。ブリュヒャー[Blücher (1742-1819)]が到着しました。しかし最も重要なことは、国王自身が、これまで力強い愛国主義的高揚に疑念を抱かれていたのですが、今では自ら確信を抱かれているというのです。この新しい信仰は揺るぎないものでしょう。というのはこの精神はどこでも変わらないからです。四方八方から寄贈品が流入して来ます。金に武器に支度品です。誰もが自分の持ち物を供出します。何も持たない者は自らを提供します。以上はユルガスの手紙の伝えるところです。私自身が更に付言すべきとすれば、明日以降すでに九千人の志願兵がベルリンからブレスラウへ出発するであろうということです。

この告知は、歓呼をもって受け入れられ、当惑の最後の残余を、そもそもまだそんなものがあった場合、逃走させた。主にベルントの場合で、ベルントはいずれにせよ、最初からラダリンスキー家での事件を必ずしも極めて悲劇的なものとは考えていなかった。結局のところ何であったか。老枢密顧問官の痛手となったのは、名誉よりも我意の方であった。ブニンスキーは伯爵で、金持ちであり、レーヴィーンは、　一　若かった。ハンガリーワインは、バメだけでなく、食卓の一同全員の口に合い始めて、同様に上機嫌にさせ始め、ベルントは、客人達の参加と滞在があれば、実行に際してただ利点のみが引き出される諸計画に没頭し、結局トゥーバルに問いを発した。「いつまでいるのだ」。

「明日まで」。

これは勿論自分が聞きたいと思っていた返事ではなかった。

「貴方らは滞在してくれ」と彼は叫んだ、「我々を助けてくれ。グーゼの襲撃は未遂に終わった。このコンテ[伯爵]は私が思っていたよりも賢くて、自分の頭をあっさり素早く

罠から外した。しかし次の機会には何か仕留めるぞ。たとえ真っ直ぐに『ブランデンブルク稜堡』や『ホーエン・カヴァリーア』[キュストリーンの要塞]に攻め込む定めとなろうとも。バメと私とはここらでは先陣を切って、オーダー川の向こうでは誰も手を上げないときに、もう演習をしていたのだ。それがいまでは向こう側の奴等が然るべく小さな戦争を開始していて、我々の方は相変わらず、午後の説教のときの救貧院の女達のように座っているばかりだ」。

ショルレンマー叔母の咎めるような視線が彼に刺さった。ベルントはヘルンフート派の老女性の厳格な気分に弱くて、注意深く、早速訂正して、最後の文を別な形で繰り返しながら、言った。「我々が相変わらず腰を上げずに、懐手でいるばかりの時にな。しかしこれは変えなければならない。どこでも我々は先を越されている。ゾルディーンでも、ドリーゼンでも、ランツベルクでも。これでもかとばかりに、ここから一時間と離れていない地で、あれらのキルヒ・ゲーリッツ人はクランペの戦いを決行して、我々が気付かぬうちに、ファウルシュティッヒ博士はプール・ル・メリット[プロイセンの勲章]を得ようとしている。我々は手袋職人のプファイファーに降参するために、こうしているのか。真っ先に鳴いた我々が、最初に、最も声高に声を上げた我々が。我々は単に演じただけ、演習や太鼓叩きで神様の時間を盗んだだけと言われっぱなしでいいか。いや私が最も嫌うのはこうした兵隊ごっこだ。何故か。私は兵士であったからであり、この事を真面目に見ているからだ。一人の市民、一人の百姓は武器を取るよう束縛はされていない。しかし一度武器を取ったら、それを使わなければならない。さもないと阿呆か法螺吹きだ」。

「ハンガリーワインには独得のものがあるなあ」とバメはほくそ笑んで、口髭をひねった、「例えば役割を交代させてくれる。それで貴方は、フィッツェヴィッツよ、バメのように語っている。それでは私はフィッツェヴィッツのように語らなければならない。つまり平静に分別を持ってだ。いや、諸君、諸君は行き過ぎだ。とりわけ自分自身に対して行き過ぎている。諍うには二人必要と諺に言う。戦いでも同じこと。まずは敵を有しなければならない、敵を」。

「いや」とベルントは遮った、「この命題を隠れ蓑にしてはならない。敵はどこにでもいる。立派な意志がありさえすればいい。すると出会う。『求めよ、さらば与えられん』[マタイ、7,7]だ。ある諺は別の諺にもなる。私の諺はその上聖書の言葉でもある。グーゼでの百人のような、このような部隊は、今やどの通りでも見られる。我々は捕らえるぞと宣言するのだ。それ以上必要ない。あたかもムッシュヴィッツやローゼングレーターを捜査するような、私の当時の『フランス人の略奪兵』を探査するような遠征だ（トゥーバルよ、そなたもあの時はいたな)。危険は何もない、我々の名声のために願わしいほどのものは、とてもない。しかし局面は変わり得る。副王[Eugen　Beauharnais（1781-1824）]の新しい連隊が旧連隊に混じっている。どんな状況であれ、ともかくそなたは残れ、そなたとそなたの友人は」。

トゥーバルはヒルシュフェルトと同意の視線を交わした。

「それでは残りましょう」と両人は叫んだ。ヒルシュフェルトはベルントに対してお辞儀して、付け加えた。「布告はまだ出ていません。志願兵部隊の設立はようやく始まったばかりです。さほど遅れは取りますまい。いずれにせよ、ホーエン・フィーツはシュレージエンへの途上にあります。三日でブレスラウに着くし、遅くても四日です。私としまし

てはここで御奉公します。私どもの友グレルは、戦いの意欲に取り憑かれていますが、ヘルダーリンについての会話を、ここはその絶好の機会となりましょうし、時間の無駄とは考えないでしょう。私は将軍殿に、私を使って頂くよう願い出ます」。

「よっしゃ、ヒルシュフェルト」と将軍は言った、「戦利品と呼ぼう。貴方は貴方が思っているよりも私には歓迎だ。老ツィーテン［Zieten（1699-1786）］人、単に騎乗が出来て、目を開けることが出来るだけの老人にとって、地図や策略が分かり、書記能力を有する高級副官を獲得するのは小さなことではない。三文文士がいなければ世間は全く回っていかないからな。それでは立派な戦友を祝して」。

そして各グラスが打ち合わされた。

十五分後、皆が食卓から立ち上がった。そして二人のレディーは、一行の残りが角の部屋へ移った際、上の階に上がって、ここで客人達の部屋割りの手配をした。ヘルダーリンに夢中のグレルはレーヴィーンの許に、トゥーバルとヒルシュフェルトはその隣室に泊めることで二人は一致した。こうしたことすべては速やかに決定された。ただバメの寝室は難しかった。「どこに寝かそうか」とショルレンマーは言った、「私は私どもの通路のある所には泊めたくない、いかがわしいし、ぞっとする」。

「私もそんな感じ」とレナーテは答えた、「少しばかりだけど」。

「あなたが恐れることはいいことよ。私もそう。嫌いが恐れならばね。彼を上へ泊めてはいけない。私やあなたの部屋から十歩となってしまう。ひょっとしたら彼は呼び鈴を鳴らす。きっと鳴らすわ。するとマリーネが水を一杯持って行かなければならなくなる」。

「それで」。

「それでって」とショルレンマー叔母は繰り返した、「レナーテ、どうしてそんなことを尋ねるの。あなたを余りに敬虔に育ててしまったわね。バメのような人間は水を飲まないの。いつも呼び鈴を鳴らして、それであれこれのことを考えているの」。

「でも、ショルレンマー叔母さん、...」。

「私はアンゲコクの人々と暮らしてきました」と叔母は続けた、「グリーンランド人は、やはり小さくて、丁度バメのように小さいけれども、皆肉欲が強かった。愛しいレナーテ、確かに、悪魔を壁に描くべきではありません。でも同様に確かなことは、子供が井戸に落ちてから、井戸に蓋をしても遅いのです。そしてマリーネは子供です。賢そうに見えて子供なのです。賢さのお蔭のものが、虚栄心で台無しにされます。彼は見栄っ張りをいつも手玉に取るのです。誰のことか分かるでしょう。悪漢を家に入れているような気がするわ」。

「あなたは実際よりもひどく思っていますよ」とレナーテは言った、「彼は評判が良いとは言えません。でも人々は誇張しているのです。結局のところ、彼は老人です。七十歳かその上です。伯母が彼についてこう言っていたのを思い出します。『我々が罪から逃げなくても、罪が結局我々から去って行くのよ』［ラ・ロシュフコー］と。伯母はそれをフランス語で言ったけど、でもあなたは聞きたくないでしょう」。

そのように上の廊下では会話がなされた。その会話の間に、このすべての倫理的不安の対象本人は、個人的快適さの海の中でくつろいでいたばかりでなく、自身の快適さを周囲に伝える術も心得ていた。彼はいつものように愛想が良くて、辛辣であった。ヒルシュフ

ェルトの滞在を率直に喜んでおり、勿体ぶって将軍を演ずることを諦めていた。目立った権威の損傷なしに、自らの存在感を示すことを心得ていたからである。損傷があっても、失われたものをいつでも取り返せる男であった。ハンゼン・グレルは、若干聞き慣れない二重の姓で紹介されて、最初一部にはこの名前のせいで、一部には彼の奇異に浮き出た目のせいで、調子よく話しを進めることが出来なかったが、直に彼に慣れて、タロック[絵札遊び]の際、　一　これは我らのガンツァーの楽長の息子[グレル]がモルトケ伯爵家で遊び相手として完璧に習得したものであって、再三グロース・クヴィルルスドルフの牧師職を彼に約束した。今「現在の」牧師を死ぬほど立腹させるか、ベルリンへのご栄転への追放を行った暁にはな、と。自分はそれほどに待っており、それほどに尽力しなければならない。牧師と牧師保護者は、まさに関心の同等性の場合にのみ共同して互いにやって行ける、最良の結合剤はタロックにあることに間違いない、あるいはそもそもカルタだ、と。

速やかに夜が過ぎた。やがて九時となった後、遊びは終わりとなった。皆が退出した。若い男達は客間へ階段を上がって行き、将軍は一階の部屋に行った。その部屋へは呼び鈴が鳴っても、家の女中の誰一人侵入しないよう厳格に命令がなされていた。

三十分後すべてが静かになった。ただ上の廊下のある部屋の一室ではまだ明かりがあって、レナーテとマリーがこの日の出来事についてお喋りしていた。バメについて、ショルレンマー叔母の滑稽な不安について、グレルとその畏怖を覚える醜さについて、ヒルシュフェルトとその斬られた痕の顔について。

「傷跡はとても美しいものね」とマリーは請け合った。

そして今や会話はトゥーバルへ移って行った。彼の名前は特別にこれまで呼ばれて来なかったものであった。

「話してよ」とマリーは言った、「どんなだったの」。

「とらわれていて、私と目を合わすことを避けていた。その際、よく喋って、急いでいた。でも、自分と私どもとをこの再会の痛々しさから何とかしようとただ務めていることだけは感じられたわ。ちょっと感動した優しさね。でもとてもラダリンスキー風なやり方で。彼らは皆、他人よりは自分を責める高貴な点があるわね。控え目に言って、彼らは生じたことの責任を分け合っているという感じ。それ故トゥーバルもグーゼの葬儀には来なかったのです。老枢密顧問官が、私どもがボールスドルフで出会ったとき、そう告白していました」。

マリーは頭を振った。

「私は別な風に見ている」と彼女は言った、「あなたが優しさと呼んでいるのは彼らの良心よ。自分達がこっそりと咎めている共同責任は、現実のものなのよ。彼らは皆同じ。その瞬間のことしか知らないのよ。彼はあなたを愛しているけど、自分自身の愛に確信がない。自分自身に一杯不信感を抱いていて、あなたに会うのが恐いのよ。ひょっとしたらそのことを彼は率直にあなたに告白するかもしれないけど、それは少なくとも自分自身に対して支えを、何か正当化に似ているものを得たかったからなのよ」。

「あなた達はいつも仲が悪かったわね」とレナーテは言った、「私がそのことをもっと良く知らなかったら、あなたは彼のことを愛していると思うことでしょう」。

こう言って二人の女友達は別れた。マリーネがやって来て、マリーを家まで送った。

この会話の最後の言葉は笑いながら話された。しかしレナーテはまた一人っきりになったとき、もはや笑っていなかった。これは彼女自身が初めて今朝率直に、しかし論駁を期待してレーヴィーンに表明したのと同じ恐れではなかっただろうか。そして今や自分が予感として、自らの心が重苦しく感じていたことのすべての証明に他ならぬものを聞かなかっただろうか。マリーが正しかったのか。それともそれ以上に悪いことに、彼女自身が正しかったのだろうか。

彼女は更にもっと問い続けて、詮索していたかっただろうが、ショルレンマー叔母が入って来た。叔母は自分の寵児に「お休み」を言うためにやって来た。「おや、遺産継承娘さん」と叔母は結論付けた、「まもなく結婚式の行列だわね」。

「まあ、ショルレンマー叔母さん」とレナーテは答えた、「あなた達ヘルンフート派の人々は変わっている。あなた方は敬虔だけど、予言者ではありませんよ」。

「レナーテ、そんなことを言ってはいけません。正しい信仰を持つ人は、正しいことを見るものです」。

「正しいけど、でもそれがいつも正解とは限らない。事象の現実にあなた達は途方に暮れますよ」。

ショルレンマー叔母は機嫌良く思わず笑った。

「それは新しいレーヴィーン的教理問答の命題ですね」と彼女は言った、「レナートヘン、もうそのことは止めましょう。今日はお休みなさい。それが正しいことであり、正解でもありましょう」。

第十章
ヴェルメリンにて

レーヴィーンとグレルは最も早く起きていたが、しかし他の者達の出現を待つことに決めていた。これは長くかからなかった。数分すると早速、皆がホールに集まって来た。今日はここで客人達のために朝食が摂られることになっていた。ただレディー達はまだ欠けていた。レナーテは差し当たり失礼を伝えていたが、ショルレンマーは、老将軍への本能的嫌悪から単純に姿を見せずにいて、自分が欠けても、誰にも、ひょっとしたらベルントは気付くかもしれないが、気付かれないであろうと、自ら納得していた。ベルントは理由を察知していた。イエーツェはちょこまかと忙しく動いていた。新たなバメのいかがわしい科白のたびに、軽く忍び笑いをして、静かに自分の心の中でこうつぶやいていた、先週黒いゲートルを身に着けたとき、このように陽気なホーエン・フィーツの日々が来ようとは思ってもいなかった、と。

「ホッペンマリーケンはもう来たのか」とベルントは尋ねた。

イエーツェは否認した。しかし老将軍は、本人は秘かに絶えず彼女と比較されていたのだが、これまでこの小人の女性について耳にしたことはなく、好奇心を起こして、尋ねた。「ホッペンマリーケンて、誰のことだい」。

「貴方に自ら返事をすることだろう」とベルントが言った、「たった今彼女が中庭をやって来るのを目にしたから」。

その通りであった。更に引き続き質問がなされないうちに、 ー グレルとヒルシュフェルトも興味を示していたからであるが、 ー 皆の関心の対象がガラスのドアの内側に現れて、少なからず驚いていた。いつもは壁から亡きフィッツェヴィッツ家の人々が下に語りかけている丁度その箇所で、存命の者達の陽気な一行に出会ったからである。

「将軍、こちらがホッペンマリーケン」とベルントは言った。

そしてレーヴィーンが付け加えた。「私の女友達だよね、マリーケン」。

「ホ、ホ、ホ」と小人の女性は笑って、背負籠を降ろして、その中を探し始めた。彼女が探しているものは、すべて上にあったけれども。

「手紙かい」とベルントは尋ねた。

「うんにゃ、旦那様、ただベルリン新聞だがね。でも今日はあれが載っている」。そう言って、彼女はベルントに新聞を渡した。

「そうか、布告か」。[一八一三年二月三日、フリードリヒ・ヴィルヘルム三世は志願猟兵の設立を布告した。しかし後の頁から判断すると三月十七日の有名なヒッペル起草の『私の国民へ』の布告と思われる]。

「そうでしょうとも。郵便局の人もそう言っていた。キュストリーンの者の一人がこう言いやした。『ホッペンマリーケン、いよいよだぞ』と。まあ結構なことで。小さなフランス人ともお別れだがね。それははっきりしている。どこでも片付けていて、老将軍は、...」。

「フュルグラーフか」。

「うんにゃ、別な人、トップだがね」。

「おや、フルニエ将軍か。それで奴が何をした」。

「昨日ハンス辺境伯[1513-1571]の墓所に行ったがね。本人と五、六人の将軍や将校と一緒に。皆、下の納骨室へ行った」。

「それで奴等は二十四ヴィスペルのドイト[銀貨、4866048 ターラー]を探したのか。辺境伯が一緒に墓に埋葬したとされるドイトを」。

ホッペンマリーケンは頷いた。

「誰がそなたに語った」。

「パン屋のメーヴェス老公」。

「その他には何を」。

「そんなに多くはねえ。最初は良く分からなかった。しかしそれからメーヴェスは笑い出して言いやした。『おまえさんはそんな阿呆じゃねえよな。ホッペンマリーケン。よく注意しろよ。ロシア人が来ているんだ。コサック兵と一緒にな。皆大きなおもちゃの鉄砲をクヴァルチェンとタムゼルで持っていてな。それで小さなフランス人もそのことを知って、片付けにかかっているんだ。手当たり次第何でも持って行くぞ。それでな、昨日ハンス辺境伯の地下納骨所に行ったのだ。しかし何も見つかりはしなかった』と」。

「そうだろうな」とバメは言った、それからフィッツェヴィッツの方を向いて、付言した、「ハンス辺境伯はホーエンツォレルンの出でな。奴等は良く分かっているのだ。奴等は一ポンドも埋めない。二十四ヴィスペルのドイトなんて有り得ない。ホーエンツォレルン家は利子を欲しがる。キュストリーンの将軍にはそう伝えておけば良かったんだが。しかし勿論私の言うことは信じて貰えないだろう」。

ホッペンマリーケンはこうしたことの一言も理解しなかったが、それでも高笑いして、老将軍に親しげに頷いて、それからホールを去った。敬礼しながら、いつもの訳の分からぬ言葉をつぶやきながら。

「立派な見本だな」とバメは言った、「私が小さな侯爵の宮廷を有していたら、彼女のホークス・ポークス[奇術]を教え込むのだが。秘薬や予言を」。

「そんな金や苦労は必要ない」とベルントは答えた、「いずれにせよ、もう心得ている」。

「なら一層結構。しかし『布告』だ。フィッツェヴィッツ、聞かせておくれ」。ベルントは読み始めた。

最初の十行の間、皆の注意が傾けられていた。しかしこの注意は散漫になり、散漫にならざるを得なかった。色々な曖昧の点が見られ、全体はなはだ失望感を味わう十分な理由があったからである。この感情はとても強くて、村長クニーハーゼが登場しても、彼はまだ朗読が終わらないうちにやって来たが、ほとんど障害と感じられなかった。

「掛けなさい、クニーハーゼ」とベルントは言った、「何のことです」。

「良い知らせです、旦那様。彼を捕らえました」。

「誰を、副王か」。

「いや、そんな偉い者ではありません。しかしイタリアの伯爵です。丁度トレーブニッツの管理人が私の許に来ました。彼は教会に百人全員を捕らえているそうです。伯爵はゼーローに送られました。頭に切り傷を受けているからです」。

「話しておくれ」。

「そうですね。昨日の正午頃に相違なかったでしょうか、彼らがアルト・ローゼンタールを通って来ました。すぐ奥ではトレーブニッツの荒野が始まります。右手には高い木、しかし左手は松苗床です。この松苗床には、彼らは渋っていたと管理人は言いました。しかし仕様がなく、突っ切って行かざるを得ない。暗くならないうちに更にヤンスフェルデを目指していましたから。そこで彼らは密集して、いつも真ん中に軍用金を置いて行軍して行き、小さな湖の所まで来ました。この湖は松苗床の間にあって、本来はただの沼で、ローゼンタール人やトレーブニッツ人は『ヴェルメリン』と呼んでいるものです。そこで彼らはお仕舞いです。前後まさに囲まれていて、どこからも万歳の声がして、フランス人がモスクワ以来耳にして来なかったものです。そこで彼らは武器を投げ出して、捕虜となったのです」。

「全員か」。

「伯爵を除いてです。伯爵は武器の一つをまた取って、一人を鞍から射落としました。しかしテッテンボルン[Tettenborn(1778-1845)]が脇から来て、彼の頭に切りつけ、落としたのです」。

「テッテンボルンて」と皆が聞いた。

「そうです、二十人のコサック兵を率いたテッテンボルン大佐です。彼は同日の朝ツェリン近郊でオーダー川を渡りました。今彼はゼーローにいます。伯爵をそこへ引き連れて行ったのです。伯爵にその刀を返しています。伯爵が勇敢な将校で、名誉ある男であることを証明したと言って」。

バメがまず気を取り直した。彼は、ベルントや他の皆同様に、話しの始まる際に、バルニム・レブース武装隊のことを聞くものと思っていて、テッテンボルンの名前が出たとき、

夢に見ていた国民軍壮挙の全体が新たなコサック兵の仕事へと消えてしまうのを目の当たりにして、一瞬本当に不機嫌になっていた。しかし老将軍は、何らかの不快に二分以上拘泥するような男ではなかった。むしろ逆に、どんな不快なことに対しても、すぐにまた良い面を考える明白な才能を有していた。

「フィッツェヴィッツ、合算してみよう。我らは三つの理由からおめでとうと言うべきだぞ。第一に私の言う通りだった（これは私の目ではいつも一つの肝要なことなのだ)、第二に、コンテ[伯爵]をその百人と共に捕らえている、そして第三に、我々はコサック兵を、ともかくその前衛をオーダー川のこちら側に有しているのだ。面白くない、と貴方は考えよう。しかし事態に応じて、どんな風をも利用して、帆かけて行くしかない。このテッテンボルンの風袋野郎であってもな。だからフィッツェヴィッツよ、がっかりする必要はない。まだ我々の仕事として残っている分があろう。ただの副王であろうが、その名を貴方はクニーハーゼに真っ先に尋ねていたがな」。

これは効いた。ベルントはまた上機嫌になった。そしてホーエン・ツィエーザルへ出掛けることが決められた。このホーエン・ツィエーザルをバメは、何年もドロッセルシュタインと交際があるのに、まだ知らずにいたのであった。老フィッツェヴィッツは前もって文書で知らせることにして、執務室へ行って、必要な文を書いた。

他の者達も立ち上がった。グレルとヒルシュフェルトは、レーヴィーンの案内で、村と教会を視察した。老将軍はザイデントプフを訪問することにした。「先祖馴染みで、一度彼の陶器破片を見ておかなくては。ひょっとしたらそのコインもな。トラヤヌスにハドリアヌス、アントニヌス・ピウスか。それ以上は知らない。いつもこの名前で終わるのは奇妙だ」。

ただトゥーバルだけが残っていた。そして角の部屋へ行った。レディー達に、少なくとも自分の従姉妹に会えるかもしれないと思っていた。案の上であった。レナーテが真珠の刺繍に取りかかっていて、窓の近くに座り、目の前に置かれた手本の針目を数えていた。

「お邪魔かな」。

「いいえ、でも殿方は村に、それに教会にお出掛けと思っていました。それともあなたは、老将軍のように教会が嫌いですか」。

「私は残ることにしたのです。腰かけていいですか、レナーテ」。

彼女は同意して頷いた。

「我々の時間は限られています」と彼は続けた、「ヒルシュフェルトは苛々しています。足の下の地面が燃えている感じです。私があなたに語るべきことは、猶予ならないものです」。

レナーテは、老ラダリンスキーとボールスドルフの教会で話したときの会話を思い出した。彼女にとって、どのような釈明をも聞きたくない思いであった。少なくとも今この時にはその気になれなかった。それで自分が不安に思っている質問を避けるために、自ら質問を発することにした。

「手紙を貰っていますか」と彼女は言った、「カティンカからの手紙のことです」。

「手紙は貰っていない、短いメモは貰っています。一昨日受け取った。旅立ちの前日です」。

「どこからです」。

「ミスロヴィッツからで、国境の小都市です。伯爵の荘園が近くにあるのです」。

「何と書いてあるか、聞いていいですか」。

「レナーテ、秘密はありません。秘密があったら、あなたとそれを共有できたら、幸せと思いますよ」。

「私は秘密を欲しないけど、でもカティンカについては是非聞きたい。読んでください」。

そしてトゥーバルは読んだ。

「ミスロヴィッツ、二月四日。

親愛なるトゥーバル

私どもは明日、ミエホヴィッツとノヴァ・ゴラを経て、ブニンスキーの荘園へ行きます。一人のカトリックの聖職者がお伴をします。私は（ブニンスキーの願いで）私どもの昔の教会へ戻るつもりでいます。ローマ教会[カトリック]がヴィッテンベルク教会[プロテスタント]よりも私の気に入っています。私に便りをください。あなた達のこと、皆のことを知りたいのです。毎時間父上のことを考えています。今ではよく母上のことも考えています。分かるでしょう。ブニンスキーはパリへ行く気です。彼は私が考えていた通りの人です。私は幸せです。申し分なく幸せです。勿論疑問符が付きます。これは私どもの運命でしょうか、それとも人間一般の運命でしょうか

あなたのカティンカ」。

休止が生じた。

それからレナーテが言った。「この文をあなたは携えているのですか。愛らしい言葉を携えているのは素敵だけど。でもこのような言葉は。とても悲しく、寂しく響きます」。

「レナーテよ、私はもっと慰めの多い言葉を貰えたらと思うよ。私が聞きたい言葉を御存じだろう」。

彼女は黙っていた。

しかしトゥーバルは続けた。「何故あなたが黙っているかは分かるよ。人間の心として我々には何か欠けている。それが我々の定めだ。私の父はその定めに遭った。そして父の人生は消耗した。そして今や私がその定めに遭っている。我々は何かを台無しにしたような感じだ。一瞬別の風になる筈だと思えた時があった。しかし今やこれが我々の人生に襲って来た。そしてまた消えた。古いことと新しいこと、これが我々の邪魔をしている。私が聞きたいと切望している諾の言葉があなたの唇から漏れて来ない。

これはマリーが昨夜予言していた「自己告白」であった。彼女の言葉の軽い嘲笑の響きが痛々しくレナーテの中に残っていた。しかしほんの一瞬で、それは克服され、かつてトゥーバルへの好意として彼女の心の中で育てられていた一切がまた戻って来て、彼の言葉が呼び起こした深い共感の影響の下、好意は倍加された。そして彼女の人となりの魅力を形成するかの率直さと快活さを伴って、彼女は言った。「お聞きなさい、トゥーバル、何も黙っていようとは思いません。レーヴィーンと私は、そのことをしばしばお互いに話し合って来ました。昨日もまたようやく話しました。あなた方の運命は必ずしも最悪ではありません。一つの心は届かなかった。もう一つは届けられています。そしてこのもう一つの心は、...」。

彼女は黙った。

しかし彼は、彼女の手を握って叫んだ。手に接吻をしながら、「このあなたの手を、私

は生涯手にしていいのでしょうか、ずっと、ずっと」。

「この手を他のどなたにも渡さないでしょう。しかし今この時、これ以上要求なさらないでください。あなたは決めてはなりません。私の方は決まっています」。

「レナーテ、私を愛していると言っておくれ、それを言っておくれ。この言葉にかかっている」。

「いえ、今は駄目です。今は決定や婚約の時ではありません。私どもにとってその時ではありません。でも別な時になれば。あなたが御自分の心を確かめられて、私の心に信頼の術を教えられたその時には、その時となります」。

第十一章
ホーエン・ツィエーザル

ドロッセルシュタインの許への遠出は二時と確定された。すでにその前にベルントとバメは打ち合わせて、彼らはその道を馬で行こうと決めていた。老将軍はシェトランド島のポニーである。二人にトゥーバルが加わった。彼は、午前の会話の後、自分でも不分明な臆した気分になって、レナーテの側に座って行く気になれなかった。どんな調子になっていいのか自信がない風に見えた。それともまた別な理由があったのであろうか。

騎乗者達が先駆けであった。しかし彼らがミークライの水車屋前の石を通り過ぎたかと思うと、すぐに橇の馬車が近寄って来た。兄妹をグレルとヒルシュフェルトと一緒にホーエン・ツェーザルに連れて行く予定のものであった。イエーツェが幌とクッションを用意していた。レーヴィーンが手綱を取ったかと思うと、栗毛の馬達は引き始め、静かな村の路地を駆け上がって行った。小さな鐘の音が我らの友人達の陽気さに混じって聞こえた。レーヴィーンは御者席に座っていたが、単なる板の上に乗せられているグレルは自分の後部座席は快適だと何度も請け合いながら、絶えず左右に揺さぶられて落ち着いておれなかった。レナーテが最もお喋りであった。彼女は久しく覚えがないほどに幸せな思いでいた。トゥーバルには当惑の余韻を残した同じ会話が、彼女にとっては予想以上に慰めの源泉となっていた。彼女がボールスドルフの教会で老枢密顧問官に言った言葉、「あなたは正しいドアをノックしていません」、これは当時もこれまでのずっと彼女の心の思いであった。彼女はトゥーバルを愛しながら、自分の愛が彼から報われるものか、疑念を抱いてもいた。そしてこの疑念が、他の何にもまして苦しいこの疑念が、今や取り除かれたのであった。彼は彼女を愛していた。これに比べれば、彼の気持ちの持続性への疑念、忠誠への疑念はどれほどのものであろう。これと比較すると、単なる未来の疑問、「幸せになれるだろうか、不幸せになるだろうか」は何ほどのものか。今や彼女は幸せであった。彼女をこっそり見守って来た不安の残滓は、今やかの瞬間の高揚を高めるに過ぎなかった。彼女は、あたかも深みから暗く、不安に神秘的に響く森の中を歩んで行くような気分であった。しかしその近くで見られたものは、明かりと陽光と小鳥のさえずりであった。より明るい日々を語ってくれたレーヴィーンは正しかった、ただ結婚式の行列のみを語ってくれたショルレンマー叔母は正しかった。マリーは未来を黒く見ていた。彼女自身もマリーと一緒だった。しかしこれは過去のものとなった。過去の自分であった。

この幸福な気分は会話の屈託のなさにも窺われた。会話はやがて伯爵に関するものにな

り始めた。

「彼は東プロイセンのドロッセルシュタイン家と親戚ですか」とヒルシュフェルトが尋ねた。

「きっとそうです。その一員です」とレナーテは答えた、「それでも私どもの田舎に彼を有するのは運の良い偶然です。結婚した最初の数年にホーエン・ツィエーザルを継承して、宮廷の近くに住むために越して来たのです。若い夫人に対する思いやりからでした」。

「それでは結婚しているのですか」と更にヒルシュフェルトは尋ねた。

「結婚していました。伯爵夫人は亡くなりました。最初は肺病で、最後は大出血となり、致命傷となりました。彼女は美しくて、旧姓リーヴェン伯爵令嬢[当時 von Lieven (1774-1839、ロシア大使が有名]。彼女が亡くなると、伯爵は世間に顔を出さなくなりました。ただ時折ドレスデンに現れて、カトリックに改宗されるだろうと噂されました」。

「普通はドロッセルシュタイン家は最も堅固なプロテスタント教徒の一家に数えられていますよ」。

「伯爵もそうだったことでしょう。しかし　ー　この発言の責任は伯母にありますが、伯母が言うには、プロテスタントでは駄目で、カトリックの方がより心が落ち着く状況というものがあったのです」。

「そのような状況に伯爵はあったのですか」。

「そう言われています。レーヴィーンが詳しいでしょう。ロマンチックなお話しで、ロマンチックなお話しはレーヴィーンの十八番ですから。ちなみに全体に、私は噂話を信じています。伯爵夫人の絵を御覧になるでしょう。御自分で判断されたらよろしい。応接室にあります。薄青色のローブ[盛装用ドレス]に、白い薔薇が付いています。ただすぐベルトの上にある薔薇は深紅です。その絵は彼女の死の二年前に描かれたものです」。

「不思議な話しだ」とグレルは言った。彼はその間後部座席でくつろいでいた。

「そうですね。でもホーエン・ツィエーザルではそれほど驚く話しではありません。城は珍しいものが一杯です。その中にはヘルクラネウムやポンペイからの発掘物もあります。ピンセットやブローチ、それに爪切り鋏もありますよ。伯爵は長くそこに滞在して、こうした物すべてを収集されたのです」。

「見てみたいな」とグレルは応じた、「でも予言的に描かれた赤い薔薇を真っ先に見てみたい」。

「その通りです」とレナーテは答えた、「話題を私は逸らしてしまったですね。ポンペイの鋏で話しの糸が切れてしまった。何の話しでしたっけ。そう、ホーエン・ツィエーザルの不思議な絵のことですね。それは一杯沢山あります。例えば『白い女性』の絵とか」。

「白い女性」とグレルとヒルシュフェルトはレナーテの口調で、あたかもこの白い女性がすでに出現したかのように勢い良く叫んだ。それからヒルシュフェルトは付け加えた。「でもいつからこれらの幽霊は絵になっているのです」[レニーンでは僧侶を愛した若い娘の幽霊伝説があった]。

「違います」とレナーテは言った、「そんな風変わりなものが勿論見られるのではありません。それはブランデンブルク大選帝侯[1620-1688]の晩年の統治時代の一人の美しい宮廷女官の肖像画です。ヴァンゲリーネ・フォン・ブルクスドルフです。彼女は若くして亡くなって、自分の咎を死んで償うために『白い女性』として幽霊にならざるを得ないの

です。勿論愛の咎です」。

ヒルシュフェルトは微笑した。しかしグレルは、すべてを若干衒学的に考え、「ヴァンゲリーネ・フォン・ブルクスドルフ」の名前を繰り返して、それから付け加えた。

「私の見解では、それはフォン・オルラミュンデ伯爵夫人[十四世紀]ですよ。プラッセンブルクの出自で、私の間違いでなければ、バイロイトの城にもいました。子供のとき、『四つの目』[夫となる筈の人に四つの目（両親）が支障と言われた夫人が、自分の連れ子二人を殺したとされる伝説]、それが『支障となっていて』、世の中から片付けられなければならないと読むたびに戦慄を感じたのを今でも思い出します。私は半分しか理解できなかった。でもそれだけに私の空想は刺激されました。それが今や別な名前を聞いている。ヴァンゲリーネ・フォン・ブルクスドルフ」。

「私を試験なさってはいけません」とレナーテは答えた、「もっと知りたかったら、カスタリア誌の会長にお尋ねください。レーヴィーン、どういうことだったの」。

しかしレーヴィーンは情報を与える代わりに、ただ手綱を左手に取って、右手で公園の木々の背後に丁度姿を現している城を指さして、言った。「伯爵自身が答えるかもしれない」。数分後橇は公園を前にした車寄せに止まった。そこでドロッセルシュタインが若い女友達レナーテをすでに待っていて、彼女が降りる際腕を差し出した。そして二人は二重ドアを通じて応接室へ入って行った。ヒルシュフェルトとグレルが続いた。

応接室は、大きな平方形の、ほとんど家の全奥行きを占拠しているホールで、その奥にはただ狭い廊下があった。その廊下は中庭を望み、応接室は庭園と公園を望んでいた。このホールを一瞥すると、ホーエン・ツィエーザルの所有者は、豊かで、旅慣れていて、造型芸術の面で立派な趣味を有するに違いない、と分かった。一方の壁には大きな絵画が掛けられていた。半ば建築物で、半ば風景、ドロッセルシュタイン家の古い東プロイセンの城を表現していた。この絵画の向かい側に亡き若い伯爵夫人の絵があった。グレルは赤い薔薇を探して、見つけた。彼は薔薇をもっと赤く、伯爵夫人自身をもっと美しく思い描いていて、二重の失望となったが、夫人の美しさへの失望は多分赤い薔薇への失望の結果に過ぎなかったであろう。すべての窓の壁龕[ニッチ]にはオレンジ栽培用桶や花置き台が見られ、ホールの他の三方には黒い大理石の陳列棚があった。これらの棚にはローマの皇帝が赤く刻印された名前と共にあった。バメはすでに十五分前からそこにいて、二，三の名前を呼んでいた。ゲタ、カラカラ、アレクサンデル・セウェルス、それから「一度に沢山はよくない」とつぶやきながら、陳列棚から離れた。多分ザイデントプフの許でのそれに近い古銭学的午前の研究に関連したかなり判然としない見解であった。

会話は表面的質問に関するものをほとんど越えるものではなかったが、すぐにドロッセルシュタインがレナーテに腕を差し出して、レナーテを食卓へ案内した。ドアの二重カーテンを押し退けると、隣接する食堂への通路となっていた。　ー　カーテンは閉まっていた。　ー　二台の八本枝の可愛い高燭台が十分に明るく輝いていて、部屋の隅々まで照らしていた。工芸壁には古代のモザイク画が嵌め込まれていて、野獣や鳥類、魚が描かれていた。一方天井にはジュリオ・ロマーノ[Giulio Romano(1499-1546)]のマントヴァのパラッツォ・デル・テの同名のフレスコ画の「プシュケーの結婚式」が我らの当時の美術状況にとっては注目すべき立派な模写となっていた。バメはこうしたものは一切何も見なかった。それだけに一層グレルは見ていた。彼のこうしたものへの生来のセンスはモルトケ家の宮

殿で磨かれたものであった。

レナーテはドロッセルシュタインとバメの間に座った。バメはひょっとしたら若い時からかもしれないが、悪口がすべての単なる談話準備の手掛かりとして最良の手段であると固く信じていて、今日はザイデントプフ襲撃を行った。ザイデントプフを彼はすでに数時間前から、ホーエン・フィーツの牧師館で「オーディンの馬車」を見せられてから、間もなく始まる午餐の会話の犠牲者に選んでいたのであった。勿論結局成果は上がらなかった。上がらなかったのは、一目瞭然であったように、またしても迷い込んだからであり、あるいは彼自身の言葉を借りれば、「またしても隣にいる方の耳を正しく計算していなくて」話したからであった。つまりドロッセルシュタインは余りに高貴で、そもそも余り高笑いはしなかったからであり、レーヴィーンとレナーテは、まさにこのテーマに関して法律顧問官によって更にもっと面白く詳述され、空想化されるのを聞いていたからであり、ベルントは、　ー　いつもは極めて真面目な性情故に冗談とか陽気さに対しては最も有り難い聞き手であったのであるが、　ー　今日に限っては丁度深く自分の計画に没頭していて、六羽の所謂オーディンの鳥についてのバメの脱線に興ずることができなかったのである。むしろ彼はちょっとの間を利用して、短く「ところでザイデントプフに関してだが」と、自分の向かい側に座っているドロッセルシュタインにこう伝えたのであった。自分は教会保護者として「布告」の朗読を来たる日曜日の説教の際に準備するよう命じてある、と。

そこで「オーディンの馬車」の代わりに、布告のテーマが十五分ほど平和裡に食卓の話題として転がって行き、最後にドロッセルシュタインの側から多かれ少なかれ挑発的見解が述べられることになった。つまり私は、布告には東プロイセン的なものが欠けていると思う。自分はこのようなことを言っても、ある種党派性という非難は受けないと思うが、しかし地方地方の精神はともかく異なっているものである。自分は傷付けるつもりはないが、マルク地方の貴族の姿勢は、いずれにせよ個人的関係で縛られていると感ずる。こういうことは自分の故郷の地方では感じない。「貴方らの誇りは」と彼はフィッツェヴィッツとバメに軽くお辞儀をして、「忠誠、思慮分別、慎みである。我らの誇りは自由である。ドーナ[Dohna-Schlobitten (1771-1831)]とかシェーン[Schön (1773-1856)、アウヤースヴァルト[von Auerswald (1757-1833)]の手によるものならば、この布告は別な形になっていたかもしれない。この布告の徳は用心であり、宮廷の性格を帯びている。これに欠けているのは率直さと男らしさの物言いである」と結んだ。

バメは鋭く答えようとしたが、しかし自重して、何も反論しないようにして、ただ言った。「奇妙なことだ。北東に行けば行くほど、今や責務を感ずるようになっている。我々は東プロイセンには大恩がある。しかしそれ以上に我々はコサック兵に恩義があるように見える。コサック兵はすでにオーダー川のこちら側にいる。アルト・ローゼンタールとトレーブニッツの間での襲撃について貴方は聞かれましたかな。百人を捕らえたのです。派手なことです」。

伯爵はまだ知らなかった。彼は話して貰い、明らかに関心を示して、若干強いバメ調のタッチの描写を聞いていて、結局驚いたことに早速「自今共同作戦招致」に要請されているのに気付くことになった。テッテンボルンとではなく、チェルニッチェフ[Tschernitscheff (1779-1857)]本人とである。

「司令部へ行かなければなりませんよ。ドロッセルシュタイン」とバメは決議した、「そ

れも明日早速です。我々自身の本部は、今この瞬間が一週間後よりましなのです。今私は更に高級副官を有しています。しかし彼がいつまでいてくれるか。今にもこの場を去りそうですから。ですから速やかにです。かなり大がかりな襲撃がなされなければなりません。私は計画を立てています。しかしその為にはロシア人が必要です。貴方はチェルニッチェフと面識がありましょうし、彼に関する一切を貴方のペテルスブルクの時代から御存じでしょう」。

バメは、当時流布されていた噂を耳にしていたに違いなかったが、それでも伯爵の良き思い出かのように「ペテルスブルクの時代」について語り、そして更にこの若干難しい対象にもっと深く踏み込んだかもしれないが、しかしドロッセルシュタインが速やかにこの仕事を受け入れて、一切を片付け、更にもう任せておけと、レナーテに向かってこう質問した。「どこでコーヒーを飲みましょうか」。

「勿論画廊で」。

「あそこは寒すぎないかな」。

「構いませんよ。殿方は鍛錬の義務があり、私はマフと外套を使います」。

ドロッセルシュタインに異存はなかった。彼はすぐその後、彼の椅子の背後に立っている従者に若干言葉をかけて、会話をファウルシュティッヒとニップラーに持って行った。二人の共同のカンタータの作品が会話の無難な話題と見なされたのであった。バメはまずニップラーの 「埋もれた天才」の称号の妥当性について調査して、賛否が同等であることを確認した後、 ー この機会にこう希望を述べた。テキストの短いことが作曲によってまた問題とならないよう願っている、と。

この鋭い言葉は、立派な締めの言葉となった。ドロッセルシュタインは立ち上がった。そして客人達を更に数分応接室に足止めさせていた後、レナーテ嬢のご意向通りに、コーヒーを画廊で飲んで頂きたいと述べた。

第十二章
白い女性

この画廊は、北の方にあって、城の左側の翼全体を形成していた。この画廊は三つの広間から成り立っていて、最前列の広間は家族の絵を含んでいた。そのうちの若干は立派な歴史的点景と共にあった。カーテンはここでも閉じられていた。暖炉の火が燃えていて、コーヒー卓は広間の中央に置かれていた。こうしたことすべてよりも入場者の注目を受けたのは、二つの、高い三脚の上にある銀の皿で、これらは、暖炉の両側にあって、その薄青い酒精の炎を二本の細く震える柱として上昇させていた。伯爵はこの用意を指示していた。冷たい部屋を一層早く温めるためであったが、ひょっとしたらむしろ絵画的空想的効果のためだったかもしれない。この効果は達成されていた。祝福の言葉も欠けていなかった。

大きな半円を描いて腰かけられた。コーヒーが順に渡される間に、レナーテは、今やグレルとヒルシュフェルトの間に座っていたが､直接眼前にある全身の像を指し示していた。その絵は両側の青い炎の輝きの中、霊的生命を得ているように見えた。

「これが彼女よ」。

グレルは椅子を後に引いて、もっと良く見ようとして、それから言った。

「美しい頭部だ、しかし不気味」。

「思うに」とヒルシュフェルトは付け加えた、「この目の不気味な表情から伝説そのものが生じたのではないかな。この目を見ているとこう仮定せざるを得ない。普通の目のように死で閉ざされる運命ではありません、と。目覚めていて、果てしなく見つめていなければならないかのような雰囲気がある」。

「昔からどの画廊にもこのような絵がある」とベルントは言った、「奇妙なことに、いつも女性だ。それも若くて美しい女性だ」。

「とても教訓に富むヒントだ」とバメは言った、「しかしこのヒントは注目されることがあるまい、他の多くのヒント同様に。ところで手短であれ、詳述であれ、これは何のことか教えて貰ったら有り難い。我々の中で、レナーテ嬢と同行する幸運を得た者達は、一つの秘密結社に入っているように見えるぞ。推測が許されるなら、私の推測ではこれは、ヴァンゲリーネ・フォン・ブルクスドルフだな」。

ドロッセルシュタインは頷いた。

「そうだと思った」とバメは続けた、「ファウルシュティッヒ博士が何年も前にこれについて話してくれた。しかし彼は仄めかすだけであった。もっと知りたいものだ。外では窓ガラスでブラインドの輪がカタカタ鳴っている。風が強くなったのに違いない。幽霊話しにはふさわしい調子だ。十二時までいるわけに行かないから、六時で満足しなければならない。それでテーマは、ヴァンゲリーネ。ドロッセルシュタインよ、彼女は貴方の大叔母だったに違いない。何が彼女に起こったのだい」。

「短い話しだ」とドロッセルシュタインは言った、「ヴァンゲリーネ・フォン・ブルクスドルフは宮廷女官であって、妃殿下[大選帝侯の二度目の妃で、先妻の皇太子毒殺を企んだとされた]に仕えていた。妃殿下は無鉄砲に野心を起こして、先妻の出自の世継ぎの王子に周知の『毒入りオレンジ』を用意したのだが、差し当たりただ病に倒れるように計った。しかし突然後悔して、この女官に、病気の王子の部屋へ急いで戻り、まだそもそも救出可能ならば、救出するよう命じた。そして廊下を今や飛ぶようにしてヴァンゲリーネの少し正体を隠した姿が向かって行った。すると突然向こうから騎士がやって来て、彼女が心から慕う騎士で、彼女の素早い歩行がほんの少し遅くなった。ただほんの少しだったが、しかし王子に死をもたらすに十分な長さであった。彼女は来るのが遅すぎた。それで呪いがかけられて、生きているときに怠った言葉を死んで話さなければならなくなった。それで幽霊となって、警告しているのだ」。

これらの短い注釈は、飛躍や不分明な箇所があったけれども、あるいはひょっとしたらまさにこのせいで、出席者の大多数にある感銘を残した。ただバメは史的批判校訂的に頭を振って、手からカップを置きながら、こう言った。「ドロッセルシュタインよ、抗弁して済まない。しかし少なくとも軽率に言っているわけではない。御承知のように私には若干の嗜好品がある。以前は若い女達であったが、今では白い女性だ。ペーター・ゴルトシュミットによる『地獄のモルフェウス[眠りの神]』[1698]からレンチュの『ブランデンブルクのヒマラヤ杉の杜』[1670 頃]に至るまでの白い女性達について書かれたものすべてに私は目を通した。するとそれはオルラミュンデ夫人に他ならないのだ。私は貴方の縁者、ブルクスドルフ一家が単に怨恨から新たな白い女性を造りだしたという疑いを抑えきれな

い。この一族の一人が、それも他ならぬかの有名なコンラート・フォン・ブルクスドルフ[1595-1652]が、当時の大選帝侯の寵児だが、現実の白い女性（我がオルラミュンデ夫人）によってベルリンの宮殿の階段から蹴り落とされたからなのだ。このようなことは我らのマルク地方の家系が決して忘れるものではない（これらの家系は『率直さと男らしさ』が欠如していて、当然皆奸佞で、復讐心が強い）、かくてブルクスドルフ一族は、一人の王位僭望女性[白い女性]を立てることによって仕返しをし、古くから確立されている幽霊に倍返しをしようと試みたのだ」。

ドロッセルシュタインは唇を引き締めて、いつもの言い方に似合わず、気分を害して言った。「そうか、将軍、貴方が『地獄のモルフェウス』を読んだのであれば、それに疑念は抱かないし、貴方の意見を論駁することは断念しよう」。

バメはこの苛立ちを聞き取ったが、しかし何事もなかったかのようにお辞儀をして、同じ調子で続けた。「それは私が申しているように、家系の怨恨から来る王位僭望なのだ。ドロッセルシュタインよ、それでも私が貴方のヴァンゲリーネのために何か出来るとしたら、それは任せて貰いたい。第一に私はそもそもすべての転覆、廃嫡が好きなのだ。これは私が世界史を読み通せるようにしてくれる唯一のものだ。第二に、これが最も肝要だが、私は貴方に認めざるを得ない。私の昔からの女友達、オルラミュンデ夫人は、彼女としてはやりすぎだ、と。彼女は廃嫡に値する。何故か。法を守っていないからだ。このせいでどの王朝も没落する。幽霊の世界でもそうだ」。

レナーテは笑って、それから言った。「でも将軍、それでは貴方は、自分御自身ととても矛盾した状況になりますよ。貴方はまず、すべての転覆、廃嫡への偏愛を宣言なさって、制定された法に対する一切の反逆に賛成すると仰有っています。そして同時に貴方は哀れなオルラミュンデ夫人に『幽霊の世界』で法を守らなかったと、それを有害、欠点として挙げています。どのように説明されますか」。

「面倒な状況だな」とバメは弁明した、「その点は認めざるを得ない。御令嬢。しかし少なくともこのジレンマから抜け出すよう試みてみましょう。私はこの冬、イギリスの悲劇『リチャード三世』の上演を見ました。とても興味深い人物で、勇敢で、無鉄砲で、これが肝要ですが、悪魔的に陽気です。そこで私はこう申してよろしいでしょうが、彼が自分の兄弟や卿達を押し退けて、王位に就くのを見るのは楽しいことだった、と。しかしこの作品の結末で、彼が半ダースの大好きな殺害のせいで引き込まれた彼の致命的状況に少しも驚くことはなかったと言えるのです。別の言葉で言いますと、私は転覆や廃嫡を好んで読みますし、この趣味を有すると言えます。しかし他面では、この転覆者、廃嫡者が、結局自分がその番になるのを見ることを普通のことと思うのです。　一　その上更に自分の楽しみが高揚もするのです。非合法は面白く、ある観点からはそれどころか快適で、やってみたくなります。しかし結局はそのこと自身に他ならないわけで、つまり遅かれ早かれつけを払わなければならない代物です。人間であれ、幽霊であれ、違いはないのです」。

「それでは『非合法』とか貴方の哀れなオルラミュンデ夫人の不服従は何ですか。それ]は貴方自身が協力して転覆[いかんものと]しようとなさるものですが」。

「いかんのが二種類。御令嬢。まず第一に、この白い女性は家を守らない。むしろ遍歴の幽霊だ。全く許されない類いだ。これはあちこちに幽霊となってすべての新旧のホーエンツォレルン家の城を旅している。プラッセンブルク、バイロイト、ベルリンだ。

［Plassenburg,1486, Bayreuth,1677, 1812（ナポレオンに対して）、Berlin,1598, 1619, 1667, 1688, (1840,1850)］。これは些細なことに見えるが、重大な犯罪だ。巡回牧師は考えられるが、巡回幽霊は考えられん。これは慣習に反する」。

「慣習に反するかもしれないけど」とレナーテは答えた、「でも可愛いし、それだけに一層私には気に入っています。猫より犬が好きなようなものです。私は家に対する忠誠よりも主君に対する忠誠を高く評価します」。

「それは難しい博士問題だ」とバメは答えた、「すぐにはどう答えていいか分からん」。

「分かりました。でも貴方は二種類いかんと仰有っている。次は何です。白い女性に対する二つ目の難点は何ですか」。

「残念ながら貴女の同意を更に得られそうにないことだ。服装問題でな」。

「話せることでしょう」。

「全く問題ない。ザイデントプフ牧師ならこれについて説教できよう」。

「ではどうぞ」。

「ではな。私の幽霊達に地域問題で要求している同じこだわりを、身繕い問題でも要求している。しかし実際どういうことか。同じだらしなさだ。三百年間我々は簡素な『白い女性』を有してきた。尼僧のようなヴェールと修道服でな。これが普通であった。するとどうなるか。いいかな。ある日全く唐突に、白い女性が高貴化して、フリルを付けることになる。これはいかんが、しかし結局まだまだ白いレディーだ。ところが突然前代未聞のことが起こって、自分自身や我々をからかおうとするかのように、全身黒い服で現れるとする。アストラカンのマフやそれと同じ毛皮を着てな。すると今や『黒い白い女性』を得ることになる。これは差し当たりの最終段階で、少なくともバイロイトではそうだ。ベルリンではどんな具合か、次に登場してみて分かることになろう」。

「それで貴方はこうしたこと一切をどうお考えですか。本当の幽霊ですか、それとも錯覚やペテンですか」。

「大道芸人や幽霊話しの語り部は、御令嬢、すべての解明を拒んで良いことになっている。しかしそれでも私は申し上げよう。月光やひらひら舞うハンカチは度外視して、四回のうち三回はうんざりした城代で、四回のうち一回は可愛く小さな宮廷女官で、若い娘,...」。

この瞬間法律顧問官の名が告げられた。

「歓迎だ」とドロッセルシュタインが言って、紹介された者が入って来た。

第十三章
フランクフルトへの計画

「白い女性をどう思われます」とレナーテは入って来た法律顧問官に呼びかけた。彼自身は悠然として、質問をしたレナーテに軽く挨拶して答えた。「結構ですね、美しい友の女性の方、私はすべての女性を結構と思います」。

「白い女性でも」。

「白い女性でもそうです」とトゥルガニーは繰り返した、「しかしバイロイトの白い女性は格別気に入っています。昨年の夏また大いに話題となりました。勿論新聞紙上でですが。二回偉大な皇帝［ナポレオン］をその城から幽霊となって面倒かけて以来、私は彼女を

この国の愛国的女性と見なしています。「忌々シイ城ダ」というのが陛下御自身の言葉でした。しかしそれは先に延ばしましょう。私はまず、レナーテ嬢の隣の両紳士と面識を得たいと存じます」。

ドロッセルシュタインはグレルとヒルシュフェルトを紹介した。直に二人は、短い飛び飛びに交わされた会話の後、この法律顧問官が先のカスタリア誌会合の隅々まで詳しく知っていることに驚かされた。彼らが驚いたと述べていると、トゥルガニーは言った、「皆さんは、法律家はいつでも目や耳を緊張させておく義務があることをお忘れですよ。殊に今のような時代ではですね。たった今カルカルやザイドリッツの拍車について述べて、びっくりされたことでしょうが、しかし別の、歴史的に確かな拍車について、つまりオドネル将軍によって、タラゴナの中央大聖堂に掛けられた拍車について述べましたら、何と仰有いますでしょうか」。

このような仄めかしが更に続いた。皆が好奇心を起こして、結局謎が解けた。ヒンメルリヒが、オテグラーヴェンの年若の学友で、彼と文通をしていて、文学的週ごとの進捗について報告を欠かしていなかったのであった。オテグラーヴェンからトゥルガニーへと伝わっていた。

トゥルガニーは腰かけた。そして彼の卓越した軽妙な話しを続けながら、コーヒーを飲んでいるとき、ドロッセルシュタインが言った。「それで、トゥルガニー、何の用があって、我々はご尊顔を拝しているのだ。何らかの仕事のせいであることは、私も年季が入っていて、貴方の額から読み取れるぞ。機転が素晴らしいのも心配だ。冷や水を浴びるのではあるまいな。何かい。法律的なことか」。

「そうではありません」とトゥルガニーは答えた、「もっと高度なものです。政治的軍事的なことです」。

「やはりそうか」とドロッセルシュタインは言った。ベルントとバメは耳を傾けていたが、まずは本当に真剣なものとは思っていなかった。

しかし法律顧問官は繰り返した。「政治的軍事的なことです。すぐ核心に入らせて下さい。よろしいでしょうか。話しは漏れませんよね」。

ドロッセルシュタインは頷いた。

「それでは」とトゥルガニーは始めた、「私の話すべきことは手短に言うとこうです。三日前から我々の町にフランス人の将軍ジラールが来ています。副王の軍のもので、彼と一緒に二個の弱い連隊です。二千人弱」。[副王が 1813 年 2 月 21 日出発したとき、ジラールの下、2500 の兵と 8 の大砲が留まった]。

「軍用金は」とバメは聞いた。

「それはありません。しかし五十の大砲、青銅の八ポンド砲、十二ポンド砲です。これも侮れません。我々がそれらを使用するであろう日が近付いています。正しい方向に使う日です、つまり西の方を向いてです。『布告』はそれについて黙していますが、しかし行間を読む必要があります」。

ベルントとバメは了解の視線を交わした。トゥルガニーは続けた。

「つまり二千の兵と五十の大砲です。この敵の勢力に襲撃を仕掛けるだけの手段があるか問題になります。フランクフルトの市民階級は、あるいはこの市民階級のかなりの部分は、確実に計算に入れられます。この市民階級の名の下に私はここに来ています。トップ

に立っているオテグラーヴェンは、十二名の志願して来た旧兵士と共に、ジラール将軍を捕虜にする決意を固めました。同時に参謀部、副官達を捕らえます。占領軍に関しては、これはダム郊外[現スビツェ]にいます。オーダー川の向こう側です。従って肝要なことは、こちら側とあちら側の結合を阻害することです。川の雪解けはすでに橋の両側で始まっています。この橋自体も状況次第では破壊される必要がありましょう。これが我々の側で提供し得るものです」。法律顧問官は一瞬黙った。それから続けた。「更に二言三言付言させて下さい。私が知る限りで、貴方らの国民軍は多分この企画に十分でしょう。しかしフランクフルトからわずか三マイルの所にいるロシア軍が協力を約束してくれるならば、確実に十分なものとなりましょう。この協力はダム郊外[現スビツェ]への単なる見せかけの攻撃に限定されて、単に、向こう側にいる二千人が川のこちら側へ渡ろうとする試みを妨害する目的に従事することになりましょう。こうした一切を更に仕掛ける為に、我々の間近な隣人、ドロッセルシュタイン伯爵殿にお知らせするよう指令を受けています。しかし幸い偶然に、将軍御本人に（とここでトゥルガニーはバメに対して礼をした）「事態の状況をお知らせすることが出来ました」。

すべてははなはだ真剣なものとなった。そしてカタカタ言うブラインドのリングもヴァンゲリーネ嬢自身も、突然皆を襲った寒気の理由とはもはや見なされなかったであろう。それはむしろ、一挙にある決定の前に立たされているという意識であった。誰もが驚いていた。そしてベルントとバメの心の中でさえ、重たい危険な責任の感情が、今ようやくその時が来たという事態への喜びと争っていた。しばらくしてからバメが言った。

「ヒルシュフェルトよ、貴方は私より多く戦争を体験して来た、我々は何と答えるかな」。

ヒルシュフェルトは軽く両肩をすくめた。そしてこの肩のすくめ方には、同意とも拒絶とも受け取れる手の動きが伴われていた。老将軍はそれでまた上機嫌になって、言った。「私もまさにそうだ。受諾と拒絶の半ばだ。貴方のスペインでの戦争遂行は、私が知る限り（残念ながら十分なものではないが）一連の長い、忍び歩きと奇襲の連続であったろう。貴方はこのようなことを何度も体験した筈だ。従ってこのことに詳しいに違いない。貴方は敵の町への襲撃についてどう思われるか。というのは、法律顧問官殿、申し訳ないが、貴方の誠実な町フランクフルトを敵の占領軍のせいで差し当たり敵の町と見なさなければならないからだが」。

「私が申し上げるべきことは」と今やヒルシュフェルトが言葉を発した、「短いものです。すべては、ロシア側の協力が確実なものと仮定して、まさにこの敵の占領軍の状態にかかっています。上等な部隊であれば、劣等なことになるし、劣等な部隊であれば、上等なことになります」。

「それでは上等なことになろう」と今やフィッツェヴィッツが割って入った、「どんな状況下であれ、我々はこの鳥をまた両手から逃してはならん、それが我々を引っ掻き、我々に噛み付くという危険があっても、ならん。しかし噛み付くことはない。これらの連隊は残り屑だ。グーゼで見た百人のようなものだ。万歳と叫べば、武器を放り投げる。だから勇気を持って進もう。さもないとテッテンボルンと一緒の二十名のコサック兵より我々は低級ということになろう。私個人としてはこの計画を受け入れる。そして無条件の『受諾』を返事する」。

皆が賛同した。レナーテでさえ、一瞬自分の家の戦闘的精神に捉えられた。「賛成、賛

成」と声が行き交った。最後に興奮は収まり、ドロッセルシュタインが、自分の約束を繰り返して、ロシアの司令部への自分の訪問を翌日の午前に行うと確約した後、ベルントとバメは、伯爵の帰還後すぐフランクフルトへ偵察に出掛ける意向であると明らかにした。この偵察の折、オテグラーヴェンと一緒に、速やかな共同行動の為に更なる一切の約束が講じられることになった。ちなみにトゥルガニーは個人的にはこの行動に参加する意向でないと釈明された。

冗談のお喋りの気分は再び見いだされることはなかった。それで比較的早い時間に出発することになった。まず橇が出た。十分後騎乗者達も鞍に乗った。午後の時間の間吹いていた春風は止んでいた。そして東から鋭い風が吹いて来た。天はまた晴れ上がり、星々がまた一段ときらきらと輝いて来た。

バメはベルントとトゥーバルの間を騎行した。並足で進んでいた。そしてシェットランド島のポニーに乗っているバネは､他の二人の騎乗者と歩調を合わせるのに苦労していた。誰もが自分の思いに浸っていた。ようやくバメが言った。「オテグラーヴェンとは誰だ」。

「教頭です」とベルントは答えた、「若干硬直していて、衒学的ですが、精力的で、生来勇気があります。この勇気を有しなくても、自分の熱狂から汲みだしてくるでしょう。名誉ある男です」。

「不思議だな」とバメは言った、「我々の時代、教頭は別様であった。我々は奴等に紙の弁髪を張り付けたり、その背中に落書きしたものだ。名誉ある男と呼ばれるような者は記憶にない」。

老バメは黙っていた。しかし自分の考えを更に推し進めていたように見えて、しばらくしてから続けた。「貴方の姉君、伯爵夫人は、こうした事柄を話すことを好まれた。そしてそれからいつもうんざりしているように見えた、泣いたものか、笑ったものかよく分からなかったからだな。『これは西から吹いて来る風ですよ』。それはフランス語だった。それはそれで結構なことだったのだが、しかしまた平民の躍進となると彼女には面白くなかった。私個人としては平民に含むところは何もない。私には人間が肝要と言うしかない。この全く一般的人間『ホモ』が、ラテン語好きとして発声してよろしいであろうが、哀れな国王[ルイ十六世]を頭一つ分短くして以来、本当に頭一つ分生長したのであれば、この件は高すぎる授業料となったとは思えない。ソレハヤリガイノアルコトダ。これもグーゼの思い出だ。いや、フィッツェヴィッツ、最も愚かなのは偏見だ。ドロッセルシュタインをどう思ったかね。彼は今日もまた東プロイセンの音を鳴らしていたが」。

「それも間違った箇所で」とベルントは笑った、「私はたまたま誰があの布告を起草したか知ったのだ。枢密院顧問官のヒッペル[von Hippel (1775-1843)]だ。生粋の東プロイセン人。しかし私はドロッセルシュタインに恥をかかせたくなかった。我々は自分の弱点が一番敏感だからな。貴方にしろ、私にしろ、誰にしろ。我々には彼がいることを喜ぼう。彼は我らの圏内では比類のない者だ。頭から足先まで貴族だ。大方は単にそう称しているだけだが、しかし彼は本当にそうであるという長所がある」。

バメは賛同した。そう言って会話を終えて、馬を駆けさせた。

ホーエン・フィーツに着くと、皆が休息を欲していて、退出した。最初に退出した者達の中にヒルシュフェルトとトゥーバルがいて、同じ部屋であった。彼らはしばらく喋って

いたが、それからヒルシュフェルトが静かになった。彼は眠った。ただトゥーバルは目覚めていた。

色々な思念が彼の頭を去来した。その思念を彼は制御できなかった。「私は婚約しているのか」と彼はようやく明かりを消したとき、自問した、「思うに、然りだ。...それでは私は幸せに違いない。幸せか。確かにそうだろう。私は幸せだ。...しかし十分に幸せではない。さもなければ歓呼の声を上げて、彼女の声の他は何も聞こえないだろうし、彼女の姿しか見えないだろう。彼女の姿が見えるか。奇妙なことだ。彼女の明確な姿が見えない。ほとんどそもそも姿が見えない。...しかし私は彼女を愛している。『彼女を愛しない人がいましょうか』と伯母は言っていた。...幸せよ、幸せよ、私は幸せを得ているか。まだ私は問うている、...私は忘恩の徒だ」。

そのように彼は思念していた。彼の許を色々な像がますます影のようになって移ろうて行き、やがて彼も眠った。

第十四章
幽閉

次の日、土曜日は準備の日であった。バメは諸計画を練り、地図を見ていた。一方ベルントは早朝に出発して、遠方の部隊に集まるよう命ずることになった。三時過ぎすぐに彼はこの遠出から戻って来た。彼は数分後、老将軍の一階の部屋に入って、将軍がドロッセルシュタインと熱心に会話しているのを目にした。ドロッセルシュタインは丁度ロシアの中枢部隊への自分の派遣について報告していた。チェルニッチェフは彼を丁寧な作法で迎え入れたばかりでなく、このような提案、別な言葉で言えば、共同作戦は、元来当てにしていたものであるとも述べていた。来週見込まれると思う小さな戦争では、この共同作戦があってのみ、望ましい成果を上げられましょう。フランクフルトへの襲撃は、四方八方から時宜を得て攻撃しさえすれば、一見難攻不落に見えるが、造作のないものとなりましょう。フランス人部隊は意気が上がっておりません。しかしどんな状況であれ、このような重要な大砲機材があるのであれば、速やかな機略が必要でしょう。それ故自分は月曜日から火曜日の夜を提案し、ロシア側としてはそれまでの日の間にクーナスドルフ一帯まで侵攻し、そこからもっと詳細に確定されるべき時刻に合わせてダム郊外[現スビツェ]を攻撃させましょう。それも二千人の選抜部隊を投入します。当方の熱意は信じて頂きたい。自分本人が出向いて攻撃を指揮する所存です、と。

以上がドロッセルシュタインの報告で、これをベルントとバメは関心を募らせて聞いていた。両人はこのミッションの立派な結果に、更なる成功の担保を得た思いがして、すでに前もって計画されていた「フランクフルトへの偵察」を次の日の午前に確定させた。同時に二人は、この交渉をまとめた伯爵の外交手腕に感謝して、少なくとも食事の時まで留まっていて欲しいと依頼を述べた。しかしドロッセルシュタインは、仕事を口実に断って、辞去したが、その前に今一度念を押して、「必ずチェルニッチェフの良き意志を疑うことのないよう」、月曜日から火曜日にかけての夜を計画の遂行の時に留意して欲しいと述べた。

夕方にかけてザイデントプフ牧師がやって来て、イエーツェはカルタ台の準備をするよ

う命令されるのを待っていた。しかしタロックの勝負は中止となった。将軍の責務がバメにのしかかり始めた一つの印であった。彼自身このことで冗談を言い、自己中傷とそれからまた自慢とが交互に混じったものとなったが、責務を若干より易くしようとしていた。しかし言い過ぎたものとはならず、ただベルントが日曜日の神聖さについて触れ、ザイデントプフに向かって一度ならず、自分はフランクフルトへの偵察に出掛けるので、教会と説教や布告の朗読とを等閑にしなければならないと遺憾の意を表したとき、昔からの天の邪鬼の精神が生じて、極めて昂ぶった調子で、「私自身としてはそんなに等閑にしているのではないのだ」と鋭く、面と向かって発した。数分後に皆が退出した。その前に翌朝はいつもより三十分早く朝食を摂ることで一致していた。

そして次のこの朝となった。ホーエン・フィーツの塔の鐘が冬の澄んだ大気の中響いた。領主の館では皆が活気があり、動いていた。一方の者達は教会参詣の準備をしていた。他の者達はフランクフルトへ出掛ける準備をしていた。十時にわずか十分前であった。クリストが御者となって（またポニーで)、まずベルントとバメが幌のない馬車に上がり、それからヒルシュフェルトとグレルが上がった。レーヴィーンとトゥーバルだけが残った。ひょっとしたら馬車の座席が十分でなかったかもしれないし、ひょっとしたら今日のような重要な日に領主の内陣席が空席に見えないようにするためであったかもしれない。そして今や三回目の鐘が鳴り始めた。そして出発する者達とまだ挨拶が交わされている間に、二人の残っている友人は、すでに教会参詣の支度の出来ているレディー達に腕を出して、一緒に公園の荒れた通路を歩み、それからリンデンの並木道を通って教会まで上がって行った。小さな側面の入口は閉まっていた。そこで彼らは今日は中央入口を使って、棺架や割れたトルコ鐘の置かれている塔を通って、教会の中へ入って行かざるを得なかった。教会はすでに一杯であった。戦争と平和についての言葉が説教壇から話されることになっていると誰もが承知していたからである。ただ祭壇のすぐ前の少佐の椅子だけはいつものように空であった。

レナーテとショルレンマー叔母は身廊を進んで行って、レーヴィーンとトゥーバルは後に従った。彼らは中程に来ると、右手の横の通路に折れて、まず狭い小さな階段の所へ行き、これを利用して、領主の内陣席へと上がって行った。ここで彼らは古い、赤い背もたれの革の椅子に腰かけて、丁度歌われていた歌に和した。レーヴィーンは一番奥に座っていて、トゥーバルはレナーテとショルレンマー叔母のすぐ後ろに座り、二人の間から大きな記念碑と最前列の並びの二，三列が眺められた。前から二番目のベンチに村長クニーハーゼは妻と娘と一緒に座っていた。マリーはレナーテと軽く挨拶したが、それからは賛美歌の本から目を上げなかった。

素晴らしい一日であった。すべてが明るく見えた。この印象は、我らのザイデントプフの明るい容姿が説教壇に登場した時、更に募った。歌が終わって、ただオルガンの音だけがまだ微かに残っている時、皆が聖職者の手本に倣って、身をかがめて、静かな祈りを発した。さてしかしまた一同に生気が走って、皆の頭が上を向いて、ザイデントプフは、右手で彼の長く白い髪を後ろに撫でながら、始めた[シュライエルマッハーの説教が利用されている]。「敬虔なる教区の皆さん。私どもが待ち望んでいた日がやって来ました。神がロシアの戦場でその御印を与えられた数週間前、数ヵ月前から、高貴で勇敢な将軍達が、

不忠であるという見せかけを恐れずに、我々の国王の真の意味と精神を解して、敢えて行動し、我々にとって耐え難くなっていた軛を投げ出すべく最初の決定的歩みを敢行して以来、すでにその時から、この待ち望まれた日の到来は予感されていました。しかしその時はまだ来ていなかった。それが今や始まったのです。隷属から自由への移行が準備されています。国王は話された。辛抱強く待たれていた言葉、それが発せられました。皆様の誰もがそれを知っています。しかしこの場から今一度告知されるべきものです」。

そこで我らの友は布告を清書してある紙片を広げて、大きな、よく通る声で読み上げた。朗読の熱意が単純極まる文に意義と生命とを与えていて、家で個別に読んだときには誰もが経験したことのないようなある効果が見てとれた。特に祖国愛と、艱難のときにも常に国王に対して最も生き生きと維持されて来た敬慕の念について話された言葉がそうであった。一同は明らかに感動してその言葉を聞いていた。

そして今やザイデントプフが続けた。「我が友の皆さん、以上のように国王は話された。かつて見られなかったような話されようです。国王はまだこれほどまでにはなはだしく国王にとって極めて感動的かつ感激的な感情を抱かれたことがなかったからであります。つまり自分の民の願望と純粋に完全に一致しているという感情です。これから始まるのは神聖な戦いです。内面の解放への希望に満ちた戦争です。それで私は預言者エレミヤの言葉について語ろうと思っています。第十八章にこうあります。『あるとき、わたしは一つの民や王国を断罪して、抜き、壊し、滅ぼすが、もし断罪したその民が、悪を悔いるならば、わたしはその民に災いをくだそうとしたことを思いとどまる』と。いや、皆さん、神は我々をも断罪して、我々の咎や罪のせいで、抜き、壊し、滅ぼすようになさったのです。我々の咎は大きなものでしたから」。

そこで彼は、過去を振り返りながら、教区民に我らの咎のイメージを描き始めた。ある偉大な国王の治世の下、我々は速やかに名声の頂点に達しました。これは我々を高慢にさせ、慢心させ、心地良い思いにさせた名声でした。不正な獲得で、過剰に我らの領土は拡大され、我らの国の半ばが他の民族から構成されるようになり、それで我々はもはやドイツ人であるのか、ないのか分からないような状態でした。そして他の民族は生命の崇高な財産を求めて戦って来たというのに、我々はそれ以来自己正義を主張し、自己中心となって、我々はただ休んでいるだけでも、より強力になり、より怖いものになるであろうと信じて暮らして来ました。かくて我々の国家的青年期の反抗的で高慢な利口さに、小胆な利口さが踵を接して来たのです。そして我らの名声が消えると共に、結局は我らの名誉も次第次第に影絵となって行きました。虚栄心と浪費の洪水がより良き時代の苦労の作品を破壊してしまって、遂には我々の許にまで忍び込んで来て、主は預言者の言葉で語るならば、我々を抜き、壊し、滅ぼそうと思う民として『断罪』なさったのです。まだ私ども皆の記憶に新しい粉微塵にする敗戦が、我々を結局、我々の偽りの高みから奈落に投げ落としたのです。

ここでザイデントプフは間を置いた。しかしそれから屈みながら、高揚された声で続けた。「粉微塵にする敗戦と私は言いました。しかしこの戦争よりひどいものは、これに続く平和でした。私はそれがもたらした外面的困窮については話していません。私はそれが創り上げた無様なことを我慢してしまう悲しい慣習について話しています。この慣習ははなはだしいもので、多くの者達の気持ちの中で（友の皆さん、皆さんは違います）より良

き、より品位ある状態への願望や希望が失われてしまったのです。多くの者達の中でまだ見られる考えはただ、他人の軛にいかに快適に迎合できるかというものでした。しかしまだより良き時代への希望を諦めようとしなかった他の者達は、何で満足したでしょうか、何に救いを求めたでしょうか。嘘とペテンです。彼らの行為は偽善となりました。喫緊の危機を避けるために、彼らは友情を装い、ただ軽蔑し、嫌いになってしまうのが落ちの友情を求めました。生きるためには人生のどんな高貴な目的をも後回しにし、あるいは忘れてしまう、例の破廉恥が生じました。愛する皆さん、以上のようなものが我々の状態でした。我々自身が聖書の言葉によれば、『砂漠の異教徒のような者』だったのです。これが我らの虜囚の過去の日々でした。しかし我々は主に感謝しましょう。新しい日が来たのです」。そして今や彼は教区民に、この「新しい日」の要請、意義を示し始めた。真理への帰還、真理が与える勇気への帰還である。彼はこれを仕上げて、今日読み上げられた布告に宣言されているように、「国民の防衛力」と呼び、より良き時代の[婚礼の]朝の贈り物であり、保証であるとした。兵士の高慢さが、勇気を専ら兵士にのみ権限のあるものと見なしていた過去の数十年とは違って､今や勇気は個々人の義務となっているのであります。この勇気を皆も証すべきでありましょうし、いつ何時呼ばれるかもしれないが、その時が来たら、それにふさわしい振る舞いをすべきでありましょう。

敬虔に教区民は聞き入っていた。レーヴィーンも今日はヨーロッパコマドリに見とれる時間はなかった。ただトゥーバルの注意はやがて散漫になって、大きな墓の記念碑と銀製の十字架像の間を機械的に往復していた。それは奇妙極まる疑問を伴っていた。「この墓の記念碑はどれほどの費用がかかったものか」、「何故この真鍮の燭台はピカピカしているのか」、「どの代のフィッツェヴィッツが十字架像を寄贈したのか」。そして更に新たな疑問が生じたが、結局また先の疑問に戻って行った。どうしてなのか。ザイデントプフの言葉はより深い調子を欠いていたのであろうか。違う。しかし墓の記念碑と十字架造とを絶え間なく往復するとき、彼の視線はマリーに出会っていた。このせいであった。彼女の口許が時々震えた。そして彼女の大きな黒っぽい目は閉じられているように見えた。それほど深く目は彼女の睫毛の影の中にあった。彼は、青白い、繊細に象られた横顔を見ていた。そして自分の内面で、こっそりと自分の視線と共に付いて来る強い非難の声が高まるまで、ただ見とれていた。

その間に説教は終わっていて、ただ後祈りだけが発せられることになった。皆が期待を込めて説教壇を見上げた。マリーもそうであった。彼女は内陣席からの視線があることに勘付いてはいたが、この視線に応じない、あるいは心の中でそれを防ぐ力を有していた。彼女の情緒は純粋で、見せかけや偽りはなかったからである。

ザイデントプフは祈った。「慈悲深い神にして主よ、御身は我々に偉大なことを験され、自由で尊厳ある実在を勝ち取るよう、我々に託された。我々に味方し給え。勝利は御身の計らいによる。我々の行為に対し御身から幸運と祝福を得られるよう信頼して祈念申し上げる。国王を守り給え。将軍達に英知と力を与え給え、武器を取る者に勇気を与え給え、そして皆に、我々にも、忠誠の持久力を与え給え。そして武運がいかに変わろうとも、最後の恵みとして一つだけは恵み給え、即ち自由と平和を恵み給え」。

さてまたオルガンが始まって、最後の詩節が歌われた。そしてゆっくりとホーエン・フ

ィーツの人々は立ち上がって、教会を去った。マリーは残った。レナーテとショルレンマー叔母に挨拶するためであった。それから一緒に中央通路を歩んで降りて行った。トゥーバルとレーヴィーンが後に続いた。

皆が尖塔アーチの壁の入口に達したとき、その側面は塔につながっていたのであるが、マリーは賛美歌の本を多分座席に置き去りにしてきたと気付いた。彼女は戻ろうとした。しかしトゥーバルは制して、中央道路をまた上がって行き、忘れてきた本を取り戻そうとした。マリーは彼を見送り、待っていた。一方他の者達は外の玄関を通って、野外に出た。

本はなかった。トゥーバルは、まずベンチを、それから床をあちこち探して、ようやくまた起き上がり、両腕で、探しても見つからないと言うような合図をした。

マリーは呼びかけた。「それでは私が探します」、そして同じように中廊へ上がって行った。しかしこの瞬間本は棚状の傾面の下の細い板の上に見つかって、トゥーバルが意気揚々と持ち上げ、彼女に差し出した。彼女は感謝して彼の手から受け取って、それから向きを変え、再び出口へ急いだ。しかし彼女が出口に達しないうちに、外から鍵が閉められる音を耳にした。老クーバルケは、オルガンの内陣席から降りて来ながら、まだ誰か中にいるのに気付いていなかったのであった。

マリーは縮み上がった。しかし素早く気を取り直して言った。「閉じ込められてしまった。急いでドアを叩いてください」。

しかしトゥーバルは驚いていた。しかし一緒の女性とは別様の驚きであった。

「何で叩くのかい、マリー」と彼は言った、「老人には聞こえないよ。我々は虜囚者だ」。

「そうですね、でも協会内の虜囚者です。いずれにしても窓は高くないし、...レナーテは私どもがいないのに気付くでしょう」。

「確かに、でも早すぎないように祈ろう」。

マリーは、彼の声が震えるのを耳にした。

「分かったわ」と彼女は言った、「私どもは虜囚ですね。それでは最善を尽くしましょう。そして時間を利用しましょう。学ぶのはいつも甲斐があります。誓って、貴方は私どもの教会を御存じないでしょう。誰もが知りません。誰もが、大きなオランダ製の記念碑を愛でて、老マティアス・フォン・フィッツェヴィッツの名前とか、それどころか彼の貞淑なヴェローニカ・フォン・ベールフェルデの名前をやっと解読すると、十分知った気になるものです。それでホーエン・フィーツの教会は知ったと。でもここには色々ありますよ」。

彼女はこうしたことすべてをほとんど朗らかな調子で言ったが、全く明白に、自分の困惑を隠すためであった。そしてトゥーバルが何の返事もせず、ただますます問い質すように彼女の目を見ていたとき、彼女はもっと素早くもっと急いで付け加えた。「貴方にこうした一切をお見せしなければなりませんね。時間を無駄にしないようにしないと。壊れた洗礼盤、これは千年以上前のものだと人々は言っていますが、これについて話すのは止めましょう。貴方はお信じにならないでしょうから。でもここの右手に聖母マリアの像があります。これは御覧にならなければ。ほら、聖母マリアは幼子イエスを両手から落としてしまっています」。

「ひょっとしたら、また別な求婚を受け入れたかったのだろうか」。

「まあ、そんなことを。罰当たりな言い方です。でもこれは貴方には千年前の洗礼盤同

様に合っていませんね。でもここに、私ども両人にふさわしいものがありますよ」。そう言って、彼女は手で古い、垂直に立っている墓石を示した。それはすぐ聖母像の横で壁の中に埋め込まれていた。

トゥーバルはその石に近寄って、読んだ。「カタリーナ・フォン・ゴルミッツ」。

「そうです、それが彼女の名前です」。

「名前はいいよ」とトゥーバルは言った、「その名前が我々に関係あるかい。死人に何の関係がある」。

「あるのです。彼女については聞いておく必要があります。彼女は当時のフォン・フィッツェヴィッツ嬢の友人だったのです。名前は忘れたけど、レナーテという名だったと仮定しましょう」。

「レナーテはいいよ」。

「いや、レナーテという名だったことにしましょう。そして彼女の女友達、まさにこのカタリーナ・フォン・ゴルミッツは、ここの眼前にその墓石がありますが、ここで亡くなって、ここで埋葬されたのです。でもこの亡きフォン・ゴルミッツ嬢は故郷を憧れて、ここから去ることを願って、この余所の墓からまた出て行ったのです」。

「信じられないな」。

「信じなければいけませんよ。本当の話しですから。こちらの子供は誰でもそのことを知っています。そしてフォン・フィッツェヴィッツ嬢がこの墓石の上を歩くたびに、当時墓石は他の石と共に中央通路にあったのですが、この女友達の声を耳にしたのです。『レナーテ、開けて』と」。

トゥーバルは微笑した。

「それで私どもも今そう叫びましょう、でしょう」。

「私はいい」。

「叫びましょう。貴方も叫ばなければなりません。そのように墓石は警告していますから。私どもに墓石が警告していることすべてを、墓石は黙っていても、私どもはしなければなりません」。

「そうだね。ただ今日はいい。ただ今この瞬間はいい。我々は生きているのだ、マリー」。

「でも、いつまででしょう」とマリーは答えた。

トゥーバルは不意を打たれた。彼女の言葉には彼を我に返らせるものがあった。しかしまたその印象を脇に置いて、ただ彼は言った。「墓石は置いておこう」。

そう言いながら二人はまた教会の中央通路へ戻って行った。

二人がほとんど最前列のベンチにさしかかったとき、トゥーバルは長い沈黙を破って、より柔和な声で言った。「マリーよ、仲良くしようじゃないか。運命が我々をここへ一緒に導いたのだ。お互いが似合っていると言わんばかりではないか」。

「いいえ、私どもは、...でも声が聞こえます」。

「何の声」。

「分かりません」。

「我々の声ではない。マリー、貴女の声ではないか、私の声ではないか」。

「いいえ、いいえ、レナーテの声です」。

彼女はその名前を強調した。彼は何故なのかその理由を確かに感じた。しかし彼は我を

忘れて、今や彼女の手を握って、速やかに性急さを募らせて言った。「レナーテ、再三レナーテだ。何のためだい。お願いだから、今だけはこの名前はいい。その名は聞きたくない。その名前は我々の間に割り込んで来ようとする。来て欲しくない。そうだろう、マリー」。そして彼は跪き、彼女に抱きついた。彼は彼の火照る顔を彼女のドレスに隠した。一瞬彼女は助けを呼ぶべきか、あるいは自分の心の脈打つ不安の中で祭壇の布を掴むべきか迷った。しかし突然別な考えがひらめいて、少佐の椅子に通じている半ば開いたドアをさっと開けて、右手で血の箇所を示した。このことについて知っている者達にとっては戦慄の箇所であった。

何の役にも立たなかった。

「死のうと生きようと一緒だ」と彼は叫んだ、「私はあなたを放さない、マリー。私は本気で、...」。

するとその時本当に外部から物音がして、錠に鍵が回されて、すぐその後、老イエーゼリヒ・クーバルケが現れて、内陣の椅子の間、ゆっくりとタイルの上をやって来た。

「どうか悪しからず、若様。しかし八十一歳になるともう目が悪くなって、貴方らを幽閉し、虜囚にしてしまった。二人の可愛い虜囚、そう言わざるをえない。済まない、マリー」。

二人はこの挨拶の間に平静さを取り戻していた。そして老人に、この時間を利用して、大きな墓石を読んでいたと語った。ゴルミッツ嬢の墓石も。

「ゴルミッツ嬢の墓石もか。それはここにはいたくなかった令嬢で、それは読まなくちゃならん。しかし若者達はそんなことはしない。読んでも、何も考えない。いや、墓石は、...」。

そのようにお喋りしながら彼らはまた教会の出口へ着いた。

「クーバルケ神父」とマリーは言った、「同じ道ですよね」。

「トゥーバルが彼女に近寄って、彼女に手を差し出した。仲直りとしたい印のようであった。「マリー、一つの夢だった。そうだろう」。

彼女は頭を振った。

彼女は老人の腕を取った。老人はこの最後の言葉をほとんど聞いていなかったし、全く注意していなかった。彼女は老人と一緒に、教会の丘から村の中央へ達する狭い小道の一つを降りて行った。

第十五章
偵察行

まさにこの時、ポニーはホーエン・ツィエーザルを経由してフランクフルトへ速歩で向かっていた。

ホーエン・ツィエーザルはかなり街道から外れていた。しかしベルントは三十分の遠回りを敢行した。　ー　前日に怠っていたことであるが、　ー　ドロッセルシュタインをフランクフルトへの偵察の旅へ加わるよう誘うためであった。勿論徒労であった。伯爵は、ホーエン・ツィエーザルをすでに先の時刻に去ったと知らされたからである。恐らくはオーダー川の向こう側へ、ロシアの司令部に対し二回目の訪問を行うためであると思われた。

それは確実なことではなかった。しかし不在という事実は確かで、ベルントとバメはかなり同様に満足してこの不在を受け入れた。両人は心の底では、両人がもっと良く知っている事柄に対し、ただ「より高度の観点から」注文を余り付けられたくなかったからである。

かくて、伯爵によろしくと伝えて、澄んだ冬の風景への旅が更に続けられた。ポニー達は遅れを取り戻そうとしているかに見え、ポーデルツィヒのすぐ手前でまた大きな街道に来たとき、ようやくその鼻息を緩めた。村そのものでは我々の友は、ほとんど三十分前に、前日に集まるよう命令していた大隊の最前列の隊列が到着したと聞かされた。そしてそのすぐ後、国民軍の様々な部隊に気付いた。これらは、老若の男達で、色々な質問をしたり返事をしたりしていた。一瞬ベルントは降りて、人々に話しかけるべきか思案した。しかし中止した。日の短い冬の時間を更に短縮させないことにした。

次の村はクレッシンであった。ここでも不穏と興奮とが明らかに見てとれた。　一　布告がまさに朗読されていた。　一　ただ丁度正午の鐘が鳴ったクリーストーでは一切が静かであった。ここでは雀が百羽車道にいて、飛び上がったものかどうか迷っていた。そして明るく真っ直ぐに食べ物から上がっている陽を受けた煙だけが生活を示していた。

そして今やクリーストーも後にした。道はちょっとした傾斜面になって上がっていた。魅力的な光景が眼前に拡がり始めた。

広大に右手に拡がる高台には数多くの農家の屋敷が点在していて、左手には全く低地にある、ただ剪定柳で縁取られたオーダーの谷が蛇行していた。そしてまさにこの低地に、我らの旅行者から三十分と離れていない所に、今や旅の目的地、町そのものが浮かび上がって来た。オーバー教会の銅板の笠や、多くの黄金の球、タンポポの蕾のように緑色の尖った屋根の周りにあるこの球で、明確に分かった。

「七つの教会があるな」とバメは言った。バメは一種の頑固さでこれまでフランクフルトへ行ったことがなかった。「大きな町に見える。私が思っていたよりも大きい」。

「本来の中心部は小さい」とベルントは答えた、「しかし郊外が広大に拡がっている。向こうにダム郊外[現スビツェ]がある。ほとんどそれ自体一つの町だ。その奥にクーナスドルフがある。血なまぐさい戦闘の思い出の地だ。ここ川の我々のこちら側はもっと平和だ。向こうの下手の長い家々の並びはレブースの郊外だ。しかし早まってこれらの細部を貴方に教えるのは止めよう。先端居酒屋からこうしたことの一切ははるかにもっと明確に見えるし、ゾットマイヤー達の煙突を覗くことになる」。

「ゾットマイヤー達て何だ」とバメは尋ねた。

「ここではそう彼らのことを呼んでいいのだ」。

「何のことだ」。

「巫山戯や反目の一種で、『旧市街』と『新市街』の間ではどこでも見られるようなものだ。合っているかはどうでも良くて、ただ刺激し、邪悪な血を表しさえすればいいのだ。そんな具合だ。一人の老婆がいて、魔女みたいなものが、百年前にこちらの下の郊外全体に火を着けたのだ。彼女はゾッタマイヤー未亡人と言って、共犯の六人か七人と一緒に火刑台に置かれた。火付けに対しては火刑だ。それが当時の裁きだ。それ以来すべてのキーツ人がこの悪評高い老婆従って名付けられ、『ゾットマイヤー』と呼ばれるのだ。奇妙な論理だ。最初は被害があって、それから悪罵だ。論理的であろうとなかろうと、旧市街地人には気に入って、それで古来そうなのだ」。

このように会話しながら彼らは高い麦藁屋根の白く塗られた居酒屋に着いた。これは三本のここで合流する通りの先端にあって、「先端居酒屋」という名前であった。ここが先に言及された見晴らし地点で、それ故やはりフィッツェヴィッツは停止させた。家の前には三本の通りで形成された三角形の庭があった。ここで我らの友は立ったまま、生垣越しに、眼前にレリーフ状に横たわっている像を眺めた。バメは四方八方を見回し、すぐにここは、どんな場合であれ、防衛されなければならない地点であることを見抜いた。

「ここに我々は我々の予備部隊を置こう」と彼は言った、「先端居酒屋を経由して我々は退却する。ここには三本道があるから、自由に選べるし、敵を撹乱できる」。

「何故退却だ」。

バメは笑った。「退却路が確保されると半分勝ったようなものだ。前進しようと思う者は、可能な退却路を頭に入れながら始めなければならない。また出て来られると分かっておれば、悪魔の至聖所にも侵入できるぞ。ヒルシュフェルトに尋ねるといい。彼は戦争を知っている」。

こう言いながら、バメはメモ帳を取って、様々な通りを描き始めた。それが終わると、足許に見える小さな郊外の教会の名前を尋ねて、フィッツェヴィッツに言った。「それで町へ突き出ている、ここの山の鼻先は何と言う」。

「それは絞首台山」。

「そうか、そしてここからその山を越えて走っている通りは」。

「処刑通り、多分町から処刑場に通じているからだろう。まだ桜の木の間に三本の[絞首台の]支柱の残りが見えているだろう」。

「[絞首台]支柱はやめてくれ、フィッツェヴィッツ」とバメは言った、「安全な退却路線は大切だが、しかし出来るものなら、別な場所を通りたいものだ。まずゾットマイヤーに、絞首台山、処刑通りか。これは勿論皆関係している。しかし率直に言うとな、首尾一貫性はいいから、もっと陽気なものがいいなあ。名前ト予兆。私は迷信深くてな、出来れば縁起のいいものがいい。出発しよう。十分勉強した」。

彼らはまた乗り込み、山を下って郊外に入って行き、まず小さな聖ゲオルク教会と同じ名前の救貧院を通り過ぎた。一本の長い通りであった。かくて十分後にはブリュッケンダム[橋築堤]まで来た。これは、旧市街、都心の始まる所で、少なくとも当時はまだ、幅広の、干涸らびてはいるが外濠を通じて、古いレブース門までつながっていた。この門の直接手前でこのブリュッケンダム[橋築堤]は小さな角張った広場となっていた。この広場では、隅に押しやられて、二，三の二輪の、頑丈な荷車があった。その横には鉄製の大砲の筒があった。皆錆びていて、二，三壊れていて、あたかもクーナスドルフの戦い以来、ここに放置されているかのようであった。バメはこうしたすべてを書き留めた。それから彼らはアーチ状の、町建設の時代に由来する門を通り過ぎた。この門の背後には大きな門の衛舎があった。大砲の前の歩哨が行ったり来たりしていて、馬車の通行人を興味深く、親しげに見つめて、軽く手を振って挨拶した。

「明日の晩」とバメが言った、「交代で、この場の歩哨でなければ、奴さんには幸運なんだが。可愛い若者だ。親しげに挨拶している。気の毒なことだ」。

この門も衛舎の奥百歩の所で左手へ小さな道が分岐している。それは川へ通じていて、しかし川に達する前にそれは拡がって、小さな教会広場となっており、そこに灰色で、塔

のない、最古の町の教会がある。これを通り過ぎると、すぐに気付くように、広場は再び狭くなり、再び道路となる。しかしどの側にも、二，三軒の家しかない。すると桟橋である。これらの家の一つにトゥルガニーは住んでいた。ベルントが手綱を取って、案内して来た。それは大きな、古い角の家で、突き出た出窓があり、広場と要塞に対する立派な眺めが得られる家であった。真の眺望の家である。ベルントは、クリストに休憩し、先端居酒屋まで戻るか、少なくとも古い、先ほどのレブース郊外の出口の所にあった旅館まで戻るように命じてから、バメと一緒に、幅広の石段を登って行った。グレルとヒルシュフェルトが後に続いた。

法律顧問官は衷心から出迎えて、オテグラーヴェンを紹介した。彼はトゥルガニーよりも更に落ち着かずに、ホーエン・フィーツの客人達の到着を待ち受けていた。窓の近くに朝食の卓が用意されていて、それに人々は腰かけ、作法上謝意を表した。一方亭主はドロッセンシュタインの不在を残念がっていた。グレルは、いつもの習慣通りに、部屋を観察した。部屋はゴシック様式とルネサンス様式が支配権を争っていた時代からのものであった。出窓はまだゴシック様式であったが、大きな壁の平面、殊にスタッコ装飾はすでにルネサンス様式の確立を示していた。暖炉も同様で、その緑色のガラス状の壁タイルには[聖書のトビト記]トビアの物語が描かれていた。

「味のよいラウエンタールのワインを飲んだら」とバメは言った、「いつか私は筋書き者を語ることだろう。秘密でなければ良いが。しかし仕事に取りかかろう、諸君。一日ノ花ヲ摘メ。フィッツェヴィットよ、また古典の抜け道を使っているとあきれないでくれ。付き合い上でな。若干社交のせいなのだ。しかしオテグラーヴェン、貴方の計画を聞かせて欲しい」。

オテグラーヴェンは若干強張ってお辞儀し、それから言った。「我らの友、トゥルガニーがすでに、貴方らに我らの襲撃計画を提示する栄誉を得ました後では、本質的に残っているのはただこの地方の実地検分と時間に関する確定が主になりましょう。これは勿論将軍殿、貴方の側での変更や新たな提案はないということが前提になります。この変更がないのであれば」、　一　バメは頷いた、　一　「私はすでに御承知のことにかなり目新しいことを付け加えるよりも、むしろ旧知のことを概括することにしたいと存じます」。

「その方が一層結構。髪の房が多いと混乱するだけだ。それでは宿題を繰り返そう」。

「それでは、将軍、出窓に近寄って頂きとう存じます。他の方々もどうぞ。眼前に行動現場が見えます。そもそもまだ話されるべきわずかな事は、開かれた地図を見るごとく、御覧頂けましょう」。

皆が立ち上がった。そして出窓の方へ進んで行った。オテグラーヴェンは左手の方を指した。「将軍殿、広場の三番目の家を御覧頂けますか。最も大きな家で、すぐ教会の側にあります」。

「あれか。枝打ちされたリンデンの木のある家で、その前に哨舎があるな。旅館のように見えるな」。

「その通りです。この旅館にジラール将軍とその参謀部が住んでいます。三，四人の伝令もいます。最初の銃声がした瞬間、我々は教会から、出発します。二十歩ありません。将軍がまだ眠りから覚めないうちに、捕縛します。参謀部や伝令も一緒です」。

「それから」。

「五分後には、こちらの旧市街に個別に、あるいは、二，三人で市民の宿営にいる者達も我々の手で捕縛します。それらの家は分かっており、前もって取り囲みます。これらの事柄の速やかな遂行は保証でき、貴方に貴方のこの現場への入場の後、直接実行についての報告が出来ると存じます。これは第一幕です」。

「それから」とバメは質問を繰り返した。

「それから」と教頭は少し皮肉に答えた、「まさに第二幕が始まります。貴方の幕です、将軍。と申しますのも、我々市民階級は、貴方が入場された瞬間から貴方の指揮下に、すべての点で入る意志があるからです。決意の男の評判が、貴方より先になります。決意が全てです」。

バメは礼をした。彼はこのような忠誠に対して鈍感ではなかった。あれこれの理由で自らを確立する必要があると感じている一団から、この忠誠が発せられるとき、とても無視できるものではなかった。彼は自分に欠けているものを十分に承知していたからである。

オテグラーヴェンは続けた。「この第二幕で肝要なのは、我々が、つまり貴方の国民軍と、私どもの市民階級が共同行動ができて、二千人の軽歩兵や歩兵を防げるかにかかっています。これらは連隊長や大隊長と共に向こうのダム郊外[現スビツェ]にいて、必ずや戦闘開始以来、必死になって、旧市街へ渡河しようと努めるでありましょう。彼らにとって簡単なものにはなりません。橋は犠牲とされますし、奔流の氷を解かすために準備がなされています。キーツ人の漁師が尽力しています。日夜ベッドに寝ていないのです。国王陛下の耳に入れとう存じます。それでも、予断なく判断すれば、我々の計画の帰趨はロシア人が介入するか介入しないかにかかっているように見えます。彼らが約束を守れば、明後日早朝にはフランス人旅団を捕虜にして、五十の大砲を獲得し、そして肝要なことですが、地方全体に一つの合図、一つの例を示すことになりましょう。逆にロシア人が我々を見放すならば、我々は二千人に対して長くは耐えられないでしょう。これらは休息していた兵士達、ロシアへ行かなかった予備隊だからです。伯爵殿のご不在は今一度残念に思われます。しかし伯爵がご不在なのは、チェルニッチェフの司令部への二回目のご訪問で、再度ロシア側の協力を確保するためのご不在と自らを慰めております」。

「とても結構、オテグラーヴェン」とバメは言った、「これは生来の平坦部総長と呼べるものだ。オイゲン公[Prinz　Eugen（1663-1736）]の弟子、あるいは少なくともモンテクッコリ[Montecuculi（1609-1680）]の弟子と言えるな。そうではないかね、ヒルシュフェルト。すべて簡にして要を得ている。従って有り難く受け入れよう。ただ些細なことが欠けている。実行だ。しかしチェルニッチェフがいようといまいと、上手く行くに違いない。少なくとももはや別な考えを抱いてはならない。我々はＡと発した、Ｂと言わなければならない[乗りかかった船だ]。すべて戦争賭博は賽子賭博だ。そして我々は良き品のために賽を振っている。賽ハ投ゲラレタ。私はまたラテン語を述べている。上機嫌なのだ」。

その際彼らは窓からテーブルに戻って、再び席に着いた。しかし誰も朝食を続ける気分にならなかった。それ故トゥルガニーがこう言ったのは的を射ていた。「皆さん、出発することにしましょう。私の計画はこうです。まずこちら側のオーダー桟橋の視察です。それから橋を渡って、ダム郊外[現スビツェ]、レーオポルト公爵[Leopold von Braunschweig（1752-1785）]記念碑、フランス人大砲置き場です。以上が済みますと、徒歩での視察は終了と見なして、私の馬車をその先一切のために用立てましょう。馬車は大砲置き場かその

近くに待たせましょう。それから橋を渡って、クライスト[Ewald von Kleist(1715-1759)]記念碑を見て、私の住まいに戻って来るか、あるいはレブース郊外にしましょう。貴方らはそちらに貴方ら自身の馬車を差し向けたと聞きましたので」。

かくて皆が出発した、偵察を徒歩で行うためであった。

トゥルガニーの住まいから川までは百歩もないほどであった。日曜日の静寂が桟橋に沿って見られた。桟橋は大きな間隔で太古からのクロポプラで占められていた。オーダー川の小舟や大きめの平底船が氷に閉じ込められていた。これらはシュテティーンの町のもので、こちらで冬の時期動けなくなったものであった。右手に橋が川を横切っていた。二十以上の橋桁があって、その桁の間に我らの友は大きな、橋保護のために造られた砕氷柱を目にしていた。すべての仕事が休みであった。オーバー教会の鐘が響き、午後の説教を聞きに急ぐ個々の着飾った夫人達が彼らの側を通り過ぎて行った。

バメは桟橋を観察して、右手の橋桁近くのクロポプラを見上げて、それからベルントに向かって言った。「フィッツェヴィッツよ、あそこが多分我らの戦場だ」。フィッツェヴィッツは、上機嫌で、ほとんど陽気に同意して頷いた。彼は老公よりはるかに落ち着いていた。彼は自分達の計画を、冒険としてではなく、義務、使命と考えていたからである。

かくて彼らは橋までやって来て、ダム郊外へ向かって行った。ここら一帯はほとんどフランス人だけで出来ているように見えた。何人かの者は、外は六月の陽光であるかのように、開けられた窓の横木の上でバランスを取っており、他の者達は馬跳びを楽しんだり、子供や若い娘達と玄関や床でお喋りをしていた。特に大きな旅館「黄金の獅子亭」の前ではそうで、これはすぐ橋の側にあって、大きな兵舎に変わっていた。この旅館の角を通り過ぎて、今や我らの友は左手に折れ、大きなレーオポルト公爵記念碑に対面していた。この記念碑は、トゥルガニーの住まいから川へ向かって歩いていたときからすでに明瞭に視界にあったものである。かの住まいの丁度真向かいにあった。ただ幅広の川が間にあっただけである。

さて彼らはこの記念碑の前に立っていた。その両側に、 ー それもここの製材所の高く積み上げられた棚状の材木、板材の間に、 ー 四十の青銅の大砲が運ばれて来ていた。この光景を見て、各人各様の思いを抱いていた。オテグラーヴェンは板材や厚板を邪魔なものと見て、どのように退けたものか考えていた。一方ベルントとバメは弾薬の荷車がないことに満足感を覚えていた。少なくとも大砲の介入は免れると思っていた。

その間グレルは記念碑そのものに関心を示していた。三人の女性像が星々の冠のある骨壺を持っていた。全体の台座には次のような言葉が記されていた。「隣人愛、堅忍不抜、謙虚さ、 ー この三人の天上的姉妹が、 ー 御身の骨壺を携える、永遠化されたレーオポルトよ。そしてその市民を救おうと御身が急いだ、その町の女神と共に、その波間に御身が没したオーダー川の神と共に、大地は自らの宝石を失ったと嘆いている」。

同様にバメも近寄って、今や骨壺を指し示しながら、言った。「骨壺だと。誰が信じよう。巨大なポンス酒の鉢に見えないか。結局はそうなるだろう。賭けてもいいが、この彫刻家は、 ー 彼の名声に誉れあれ、 ー 悪戯好きで、自分の流儀でお話しを書いたのだ。そうだろう、フィッツェヴィッツ」。

「いや」とフィッツェヴィッツは言った、「そうではないのだ」。

「残念」とバメは続けた、「世界史で最も愛すべき話しはいつも否定され、論駁される。

ピット[William Pitt（1759-1806)、アウステルリッツの敗戦を嘆いた]は一本のブルゴーニュ酒が基で亡くなったのだ。しかしこれは雄弁家には、あるいは弁舌の英雄でもいいが、十分に偉大とは言えないというのだ。だから今ではトラファルガルの戦い[1805]で亡くなったとされる。ルッツェの知ったか振りを信ずれば、ネルソン[Nelson （1758-1805)]と誤解するところだろう。しかしどの本や頁にもそう書かれている。ところでルッツェだが、彼の連隊は素晴らしい。ひょっとしたら最良かもしれない。悪しからず、フィッツェヴィッツ」。

この会話が交わされる間に、フランス人の歩哨が「ムッシュー、ソレハ禁止デス」と熱心にスケッチしているグレルに近寄って来たが、しかし我らのヘルダーリンの友が、彼の喜劇的に不細工に写し取った三人の女神像を見せて、それでこの小さな南フランス人の笑いを誘って、それ以上何も異議を言わないようにさせた。

橋の方から今や彼らに向かってトゥルガニーの馬車がやって来た。彼らは乗り込み、できるだけ楽な姿勢を取って、自分達の計画を、　ー　エーヴァルト・フォン・クライスト記念碑にも数分留まって、　ー　前もって決められていた通りに片付けた。それから彼らは別れて、レブースの郊外にいるクリストとポニー達を探すことにした。彼らの最後の取り決めは、国民軍は月曜日から火曜日の夜一時より前に先端居酒屋に到着することであった。オテグラーヴェンの信頼する男がそこで待機しているとされた。

小さな聖ゲオルク教会が丁度五時を告げたとき、我らの友はレブース郊外の出口の所に達して、ここにある古い旅館の前で、ホーエン・フィーツの軽四輪馬車を認めた。しかしまだ繋がれていなかった。

この旅館のほとんど半ばが途方もなく大きな門道で占められていた、これが旅館のすべての奥行きに達していた。すでに暗くなっていて、アーチ状の入口からは、アーチの高みに馬屋のランタンが揺れていなかったら、黒い穴しか見えなかったことであろう。このランタンのお蔭で、三段に気付いて、この三段が門道から左手の方に、建物の残りの部分を形成する客室へ通じていた。他のものはすべて対角線の建物の中にあった。しかし馬屋の正面では見たところ更に二番目の門道が見えてきた。同様に一つのランタンがあった。しかしもっと注意して見ると、この門道は、門道ではなく、大きな礼拝堂の壁龕であって、その奥には描かれた十字架像が掛かっていた。この十字架像の隣には二人の白く塗られた聖女がいて、請うように差し出された腕には半ダースほどの枯れた花輪が置かれていた。フィッツェヴィッツは中庭へ行って、クリストとポニー達を探した。バメは、グレルとヒルシュフェルトを連れて、外をあちこち巡察し、この二つの「門道」についてもっと詳しいことを聞こうとした。それ故彼は見回して、結局一人の男に気付いた。この男は、低い窓の蛇腹の一つに蹲っていて、鈍く照らされた開口部に影のように座っていた。

「やあ、ゾットマイヤー」。

そう呼びかけられた男は立ち上がって、バメの方へやって来た。今やこの男は下僕、番人、給仕を一身に兼ねる者であることが分かった。彼は緑色のフリーズの前掛けをしていた。彼の一方の目は、もう一方の目よりもはるかに大きく見えて、白い斑点があった。この白い斑点は、絶えず一緒に語る者に対して侵入して来た。その上、剛毛の黒い髪であった。全体醜く、不気味であった。

「やあ、友よ」とバメは言った。「ゾットマイヤー」という言葉を繰り返す気は失せていた。「やあ、友よ。この居酒屋は何と言うのだ」。

「最後の一文亭」。

「それは結構。気に入った。どうしてこの店が出来たか、よく分かる。それで十字架像と二人の尼僧のいる隣の門道、これは何と言う」。

「それも最後の一文堂」。

「何だと、それは気に入らないな。永遠に『最後の一文』か。他にはこの世には何もないかのようだ。ミゼレレ[憐れみ給え]の味がする。グレル、結局は何だろう。絞首台山で我々は始めた。それから最後の一文で終わる。二回最後の一文だ。誓って、もう沢山だな」。

グレルは笑った。「できるだけ最良のものへと解しなければなりませんよ。将軍殿。この二つの『最後の一文』が天国と地獄のように密接しているのは、元来素敵なことです。いつもそうだったのでしょう。一方の者は最後の金を教会で使い、もう一方の者は居酒屋で使う。すべてはカトリックの時代からのものでしょう。しかしそれからはるかに良くなったとは思えません」。

「私も思わん」とバメは言って、それから三段の方へ歩んで行った。これは門道から客室へ通じているものであった。グレルとヒルシュフェルトが従った。一瞬遅れて、ベルントが入って来た。彼はかなり長く暗い馬屋でクリストをあちこち探して、クリストは餌箱の上で完全に寝過ごしていて、やっとのことでポニーを繋がすよう促せたのであった。

客室では何人かのゾットマイヤーがカルタ遊びをしていた。バメはくつろぐ気分になれなかった。それ故、彼は別の奥まった部屋を探した。そこには大きなビリヤードがあった。半ば砕けていたが、しかし覆いの布切れはかがり針で応急に縫い合わされていた。その上には煙を出しながらランプが燃えて掛かっていた。「外の尼僧の絵から持って来たようなランプだ、そう思わないか」と彼はグレルに言って、下僕に向かって付け加えた。「もう一つ明かりを」。

下僕は二つ持って来て、テーブルがなかったので、一つを玉突き棒台の上に、もう一つを暖炉の側にある高い脚の子供用椅子の板の上に置いた。しかしバメは命じた。「そこではない。こちらだ。カロリーネ[ビリヤード遊び]の左右に置いてくれ」、そして明かりをビリヤードの中央に置かせた。

これがなされて、「緑色のフリーズの前掛け」がまた姿を消すと、老公は言った。「賭けてもいいが、彼は留め金を掛けなかった。閉めることにしよう。念には念を[より良いものはより良い]だ。人間を知っている者は、人間を信用してはならん。そもそもいかがわしい酒場の臭いがする。いかがわしい酒場の臭いがする所では、裏切りの臭いがする」。

グレルは閂をした。それからまたバメの横に立った。バメはますます喜劇的になって行く厳かな調子で続けた。

「諸君、馬車に乗り込む前に、明日のための構想をテーブルに描くことにしよう。ヒルシュフェルト、チョーク一本ないかな。すべて偉大な戦いは三つの戦線でもって勝利している。この三つの戦線を私も明日計算している」。

ヒルシュフェルトは、その間、古い玉突き棒台を探して、一本のチョークを見つけた。彼はそれをバメに渡した。バメは早速ビリヤードの覆いに円を描いて、この円を太い川の線で左右に半分に分けた。

「こちら右側は」と彼は始めた、「ダム郊外で、チェルニッチェフの仕事。彼が我々を見放したら、悪魔にさらわれろだ。我々がなすすべては、左手だ、こちら三つの門だ」。

そして今や彼はこの三つの門のそれぞれを短い複縦線で描いた。この線は円の周辺に斜めに横切っていた。

それから彼は熱意を募らせて、続けた。「一時に我々は居酒屋酒場に集まり、三つの通りを三つの門に向かって行軍する。これが前奏だ。それから芝居そのものだ。我々は三つの門を押さえる。策略でも武力でもいい。それから三つの放射線となって教会広場へ侵攻する。それで三つの戦略的戦線というわけだ。教会広場で合流する。そこで物事は決着する、然るべく。一切は勝つと期待して、何も恐れない。それでお仕舞い。合い言葉は『ツィーテン』、老軽騎兵の父上のお恵みがありますようにだ」。

皆の顔に微笑が浮かんだ。老「軽騎兵の父上」を神の如く、彼の聖人の如く呼びかけるのを見たときであった。しかしバメは何も気付かなかった。彼はただ窓を開けて、手に一杯雪を取って、それで彼の三本線の攻撃計画をまた消し去った。

外では今やポニー達が止まっていた。クリストが鞭を入れて、剛毛の下僕が、彼はその間フリーズの前掛けを三角形に止めていたが、バメに近寄って、彼が乗車する際、手助けした。

「フランス人はこちらへ来るのかい」とバメは尋ねた。

「そんなに多くはありません」。

「いい奴か」。

「まあ、そこそこ。人の好み次第です。我々と余り変わらない」。

この会話の間に皆が席に着いて、馬車はゆっくりと丘を上がって行き、先端居酒屋に向かった。

「あやつは死に神の顔だ」とバメは言った、「ゾットマイヤー一家の忘れ形見だな。前も後ろも同時に見えるヴェンド族の血が流れている。申し分ないやぶにらみ王。悪魔にさらわれやがれ。誓って、奴は聞き耳を立てていたぞ」。

「それはないよ」とフィッツェヴィッツは言って、笑った、「あれはドルゲリーンの者だ。父親が鍛冶屋で、火花が目に入ったのだ」。

こう言って速歩でブルフ[湿地]を進んで行った。そしてホーエン・フィーツに向かい、丁度の時に着いた。

第十六章
誰に的中するか

八時であった。　ー　ベルントとそのホーエン・フィーツの客人達はまだ戻っていなかった。　ー　レナーテとトゥーバルとレーヴィーンは、我々にとって馴染みの角の部屋に戻っていた。伺うと言っていたザイデントプフは、来ていなかった。レーヴィーンは放心しているように見えた。トゥーバルは、到着した日よりも更に当惑していた。レナーテと目を合わすのを避けていた。それでレナーテが、途絶えがちな会話を若干活発なものにしようとどんなに努めても、空しく、誰もが馬車が通り過ぎると、ポニーではないかと期待して、安堵の息をした。

「一体どこにいるんでしょう」と今やレナーテが言った、「一日中心配な気持ちが晴れないわ。教会にいるときからそうで、あなた方が、あなたとマリーが閉じ込められていると気付いたときもそうだった。ショルレンマー叔母にも言ったのよ。マリーの立場になってみたら、どんなに不安だったか、分かりますか。真昼だって、幽霊は真夜中同様にいるのだから」。

どの言葉もトゥーバルには応えて、彼は身をかがめて、二，三の樅の球果を暖炉に投げ入れて、当惑して言った。「時間はすぐに経ったよ。墓石を読んでいたんだ」。

「墓石なの」とレナーテは繰り返した、「私にはとてもそんな勇気はなかったと思うわ。でもマリーは、思うに、少佐の椅子に腰かけて、やむを得ないとなって、少佐の恐怖を忘れているのよね。だって本当はマリーも私同様怖いはずだし、ただマリーは自分の怖さを克服する力を私以上に持っているわね」。

置き時計が今や八時を告げた。レナーテの心配はますます募った。「フランス人が」と彼女は言った、彼女は立ち上がり、全く落ち着かずに窓辺に歩み寄っていた、「私どもの計画について知り得ることがあると思いますか。私どもの国民軍は三日前からどの路上にもいるし、相変わらず、報酬や儲けを狙って密告するようないい加減な人達がいることでしょうから」。

「確かに」とレーヴィーンは言った、「しかしこの密告者達も、自分達が知っている以上のことは言えない。彼らの知っていることは、フランス人も知っている。しかし単純に天気が悪いだけだ。ここだけではない、どこでもそうだ」。

「それにこのドロッセルシュタインの手紙は何かしら」とレナーテは続けた。彼女は片方の耳でしか聞いていなかった、「縁起のいいものには思えない。一行一行読んでいるような気がする、拒絶や、懐疑や、何か他の、...」。

この瞬間大いに緊張して待たれていた馬車が、屋敷の敷石を転がって来て、止まった。「今度はそうだ」と皆が叫んだ。そしてレナーテが、それまで部屋の奥に置かれていた無影灯をソファーの前に移し終えないうちに、すでに我らのフルンクフルトの旅行者達が入って来た。ショルレンマー叔母とイエーツェが続いて入った。問い合わせが次々に続いた。夕食は断られ、ただお茶だけとなった。皆が多かれ少なかれ凍えていたので、一致して、ソファーテーブルの許ではなく、暖炉の周りに腰かけることになった。一日の出来事が時間を追って報告される筈であったが、ホーエン・ツィエーザルへの迂回が言及されると、レーヴィーンとレナーテが早速ドロッセルシュタインの手紙を思い出して、報告はそこで止まってしまった。手紙のことは再会を喜んで忘れられていたのであった。

ベルントが封を破って、読んだ。「ただ手短に話す、我が忠実なフィッツェヴィッツよ。丁度オーダー川の向こう側から戻って来て、貴方が将軍と他の二名の方々と一緒にこちらに来られて、私をフランクフルトまで誘うご意向だったと知らされた。貴方らが推察されたと存ずるように、当方はその間チェルニッチェフの許に二回目の訪問をした。彼はすでに行軍していた。彼は今日のうちにフランクフルトまで後二マイルの所まで進む。彼の志操は変わることなく最良のものである。彼は最後にこう述べた、自分は直属の上司兵団長のヴィトゲンシュタイン侯爵[Sayn-Wittgenstein-Ludwigsburg （1769-1843）]に報告した、そして遅くとも明日の正午までに自分がこれまでなした侵攻、あるいは更になされるべき侵攻に対する裁可を待っている、と。貴方ノ全テノ友。ドロッセルシュタイン」。

誰もがこのチェルニッチェフの同意の曖昧さ、場合によっては退却も意味し得る曖昧さを感じ取った。しかし誰もこの思いを口にしなかった。バメは全く口にせず、不吉な気分に終止符を打つために、あらゆる可能なこと、不可能なこと、オテグラーヴェンやゾットマイヤーのこと、二つの『最後の一文』亭、天国と地獄の一文、最後には『煙を出す永遠のランプ』を持った二人の尼僧像について詳述し始めた。最後に彼はこう請け合った。立派に計画された企画だぞ、とりわけ明瞭に立地が良い、三つの戦線が集中的に一点に向けられているから成果は疑いなしだ、と。ロシア人は良い戦友ではないか。彼はここでフィッツェヴィッツに視線を向けて、ベルントがこの言葉を真面目に受け取るか、皮肉に受け取るか探ろうとした。いや、彼らは良い戦友だ。そうに違いない。上手く行くだろう。上手く行かなかったら、世界は一発の銃声の価値もないだろう、神の正義も全てなくなるだろう、いずれにせよ、我が輩は神の正義についてそう思っているのだ、と。

皆が当惑して宙を見つめた。そしてショルレンマー叔母はレナーテに耳打ちした。「どういう意味かしら」。しかしバメ自身は、夙に空になったお茶のカップにバーゼルのチェリー酒で一杯のスプーンを絶えず新たに注ぎながら、今やチェルニッチェフに対する怒りを、　一　これに対しては何も言わないのが得策と思って、　一　怒りの矛先を『貴方ノ全テノ友。ドロッセルシュタイン』に向け始めた。ドロッセルシュタインは少なくとも二つのことはしないで良かったのではないか。第一にロシアの司令部への新たな訪問だ。第二にこの手紙。しかし奴さんは全くもって高貴な紳士ときている。これらの紳士は、他にもっと遣りようがなくて、いつも気取った訪問と気取った手紙を交互に繰り返している。これが作法で外交でございます、と。

この奥の手の後、　一　彼はそれを「立派な引き際」と信じたので、　一　彼は突然立ち上がって、　一　お休みと言い、それから自分の部屋に移った。ベルントは彼の例に倣い、やがて他の者達もそうして、十時になる前に、皆が静かになって、家は暗くなった。

ただ上の階の奥まった部屋ではまだ明かりが燃えていた。ここで友人達はくつろいでいて、丁度一日の最後を今一度喋り尽くすという楽しみを得ていた。その際、明日のことも触れられた。

トゥーバルとヒルシュフェルトは、先に話したように、寝室が一緒であった。彼らの部屋は階段に近くて、若い三人の娘達がかの「押し込みの夜」震え上がる不安に陥ったかの中程の部屋の向かい側にあった。すでに今日以前にある日に、この小さな冒険はホッペンマリーケンの後々の芝居も含めてかなり詳しく話題となっていた。今日それがまた言及された。そして突然トゥーバルが言った。「それで、ヒルシュフェルトよ、話しが飛ぶが、これはホッペンマリーケンからは元々飛躍ではないけれども、バメは気に入っているかい。貴方は今日一日中彼と一緒にいたんだろう。しかし一時間前にも、下の暖炉に一緒にいた。聞いていたろう。彼はドロッセルシュタインを嘲っていた。嘲っていいと思っていた。結局どういうことか。樽の中のディオゲネスで、アレクサンダーに対して怒っている。若干のシニシズムで、若干の悪ふざけだ。私はプロイセン主義を認めている。しかしこのがに股のマルク地方主義、最も好んで軽騎兵の服を着て、いつでも老公ツィーテンを演じようとし、老公の醜さしか有しないこのマルク地方主義には私はむかつく。いや、醜いものだ。この一帯の一人の典型と見なし得るようなこの男を御覧になって、貴方は私の質問に答え

て頂きたいが、一体神の世界全体の中に、キリギス人やカルムイク人を度外視することにして、この『バメのタイプ』に類するものが存在するものだろうか」。

「ひょっとしたらいないかもしれない」とヒルシュフェルトは応えた、「しかし私は腹を立てない。『バメのタイプ』は、いかに多く非難する余地があろうとも、少なくとも正直なものだ。そしてこの国で偽善が多くなされるにつれ、ひょっとしたらこの国の成立、歴史のせいで、偽善はなされなければならないものかもしれないが、それだけに一層快く私には個々人が思える。この個々人は、私の言い回しを斟酌して貰えるなら、国家的卸しの罪過を小売りの正直さで帳消しにしようと考えている人達だ。意識的であろうと無意識的であろうと、関係ない」。

トゥーバルは自分のベッドで起き上がって、びっくりして語り手の方を見つめていた。あたかもブニンスキーの言い方を聞いている気がした。しかしヒルシュフェルトは、自分の指で蠟燭の芯をきれいにし、同じ平静な調子で続けた。「ラダリンスキーよ、私の言い方にはびっくりされよう。私は、古くからのプロイセン人だから。しかしその説明は簡単だ。私は長いこと外部にいた。外部で学んだのだ。戻って来る者は誰でも、何に驚かされるかといって、ここら一帯どこでも見られる素朴な信仰に及ぶものはない。つまりプロイセンの国では一切が最良というものだ。とりわけ最も正直だとも。しかし我らの弱点、最弱点は、まさにこの方面にかけてなのだ。我々は二十年前から何という政治をやって来たか。ペテンに誤魔化しだ。我々はこのせいで破滅しなければならなかった。というのは同じことで、国家であろうと、個人であろうと、揺れてよろよろしている者、信頼出来ず、落ち着かない者、誓約を破る者、一言で言えば、忠誠を守らない者、これは死だからだ。ではさらば。明かりを消そう。そして眠ることにしよう。明日は今より快適には眠れないのだから」。

彼は明かりを消した。そして新旧のことが脳裏に去来した。しかし彼は一つのことを見落としていた。自分の最後の言葉が一緒に眠る者の心に的中したということであった。

その隣の部屋ではレーヴィーンとグレルがお喋りしていた。

「明日のこの時間には我々は行軍している」とレーヴィーンは言った、「心は平静かい」。

「いや」とグレルは応えた、「戦火の経験はないし、だから心配だ。ひょっとしたら、心配そうに見えるという心配かもしれない。予感というものは独得なものだ」。

「予感を信ずるのかい」。

「そうなのだ」とグレルは述べた、「誰もが有するわけではない。しかし我々は母方から受け継いでいる。シュレスヴィッヒ地方ではよく見られる」。

短い間が生じた。それからレーヴィーンが言った。「私は貴方の中に侵入して、貴方がひょっとしたら話したくないと思っているかもしれないことについて話そうとは思わない。でも一つだけは言っていいだろう。印象として、貴方は我々が計画していることを、普通よりも一段階更に真剣に考えようとしているように見える。これは襲撃で、上手く行くか、あるいは行かないかのものだ。それが一切だ。敵の襲撃に成功すれば、敵は掴まるだろう、成功しなければ、あるいはロシア人が我々を見放すならば、我々は引き上げるだろう。どちらの場合にしても、挙げるべき損失はほとんど大したものではないだろう。敵はまさに脅されて、それで我々の攻撃に勝って凌いだとしても、ただ守勢に回らざるを得

ないだろう」。

グレルは微笑した。「フィッツェヴィッツ、貴方は正しいかもしれない。いずれにせよ、そう願っている。しかし春の荒天を知っているだろう。晴天の霹靂、そしてまた過ぎて行く。ただ一撃だ。しかしそのたびに犠牲が出る。誰に分かろう、誰が召されているか、あるいは誰に的中するか」。

両人は黙っていた。そして真面目な思いに耽っていた。それからレーヴィーンが言った。彼は会話を別な方向に導こうと考えていた。「貴方はクライストの記念碑を訪ねたかい。蝶があって、三ヵ国語の銘があって、若干時代遅れの感じがする。しかし私はいつも深い感銘を受けたものだ」。

「そうだね」とグレルは証した、「しかしその前にレーオポルト公爵記念碑から受けた印象がもっと強かった」。

「我々に我々の本来の生命を与えるのはまず死であるという私の好きな命題を更に明瞭に、更に決定的に説いているものだからだ。現世では確かにそうだ。哀れな公爵がただのうのうと最後の日まで自分の人生を生き尽くしていたら、誰がこの公爵のことを覚えていよう。しかし彼は自分の時の進行を打ち切って、自らを犠牲にした。彼は死ぬ術を心得ていたから、ずっと生き続けているわけだ」。

「我々により素敵な人生を保証するのは、我々の行為であって、我々の死ではない」。

「しかしそれが死の中での行為であれば、二重に保証されるな」。

第十七章
観兵式

さてすべてが決せられる日がやって来た。

すでに朝まだき、老将軍はベッドから跳ね起きて、イエーツェを呼び鈴で呼び、ヒルシュフェルトを呼び寄せさせた。ヒルシュフェルトはそれから早速現れて、三十分後には馬で出掛けて、すべての半マイル圏内にいる大隊に日々命令を伝えた。この日々命令では、まさにこの大隊は丁度十二時に観兵式を行うために、ホーエン・フィーツのすぐ近くに入場し、観兵式のすぐ後にはまさにこの村の警報宿営に移り、夜の九時にフランクフルトへの行軍に取りかかるべく準備する手筈になっていた。

この命令のとりまとめにバメは眠りを削った時間を当てていた。今やヒルシュフェルトが向かっていて、老公はより一層落ち着いてきた。もはや引けなかった。あるいは彼自身の言い方では、「劇案内は印刷された、後は芝居を上手であれ下手であれ演じなければならない」。

彼はまた平静さを取り戻していた。しかし勿論快適なわけではなかった。というのは彼の自負は大きなものであったけれども、普通の状況下でも、彼の自己認識も大きかったからである。それが今日の日を迎えていた。彼は自分に割り振られた使命に対し上手く匹敵していないと感じていた。そして正直に告白していた。自分は、自分に才能として恵まれていた分すべてを正しく利用出来なかったし、自分に欠ける分すべてを、急には用立て出来ず、熱意や善良な意志を持ってしても、代替出来なかった、と。

観兵式のために大きな休閑地が選ばれていた。それは樅の小森と街道の間にあって、すぐあの耕作地の隣にあった、つまり三日目か四日目のクリスマスの日に、キルヒ・ゲーリッツの訪問から戻って来る友人二人が競い合ってホッペンマリーケンの救出のために越えて行ったあの耕作地である。しかし十二時までにはまだ長い時間があった。誰もがその時間を潰そうとしていた。トゥーバルとレーヴィーンはライトヴァインへ出掛けて、そこに置かれることになっていた墓の記念碑を眺めに行った。 老フィッツェヴィッツは「あらゆる場合に備えて」若干の指示に当たっていた。グレルは牧師館へ行った。それで実際、あたかもバメが、待機と時間待ちの全苦痛を十全に完全に味わい尽くす運命にあるかのように見えた。しかしクニーハーゼがこの困惑を救ってくれた。近隣の荘園から若干の騎乗馬を「将軍殿とその副官」のために選ぶべく用意してございますと彼に伝えたのであった。居酒屋と村長屋敷の間の消防ポンプ小屋の所に引き連れて来ております、と。

これらの馬の中にドロッセルシュタインが送った栗毛の雌馬があった。立派な動物で、ほとんど炎のような赤色で、老公にはいたく気に入った。それでもこれに決めたものか迷っていた。

「栗毛の雌馬が気に入った」と彼は言った、「しかししっくりこない。貴方も知っている私の小さな灰黄色ので本来はいいのだ。同じ身の丈で良く合っている。クニーハーゼよ、シェットランド島のポニーがいいか、それとも栗毛の雌馬がいいか、貴方はどう思う」。

「将軍殿、畏れながら」とクニーハーゼは言った、「将軍殿がご下問であれば、小さなシェットランド島の馬はなりませぬ。将軍は高く座って頂かなければ、他の者どもより高くなければなりません。旗のように見上げられる必要があります。このこれこそ将軍の馬です」とこう言って、彼は栗毛の雌馬の尻を一回叩いた。

「分かった。クニーハーゼよ、貴方は物わかりがいい。それでは私は栗毛の雌馬だ。しっかりと鞍と鐙を高く結んで、がたがた音がしないようにしてくれ。それにもう一つ、クニーハーゼよ、私は配下に話しかけなければならないか、スピーチをしなければならないだろうか」。

「はい、将軍殿、それはもうしなければなりません。他に仕様はございません。いつも鋭く良心に訴えるもの、それを配下は好んでおります。すると老人どもが言います。『あれは話しが分かる』と。話しが分かる相手、その相手に者どもは従います。たとえ首をへし折ることになろうとも、従います。我らの者どもはそのような者です。立派な見本がすべてで、立派な見本と勇気です」。

バメは頷いた。

「将軍殿」とクニーハーゼは続けた、「畏れながら、もう一つお尋ねします。将軍殿は制服を着用なさいませんか。制服は格別なものです」。

「いや、クニーハーゼよ、制服は制服同士違う。古い軽騎兵の上着はただ仲間うちでは結構なものだ。それで誰もが大目に見る。しかし一人だけでは軽騎兵服は危険だ。だからその名が付いている。外套と毛皮の帽子、それで十分だ。それにここに私の革の鞭がある」。そう言って、彼は太い鯨の骨を、必要に応じて杖とも鞭ともなるものを、空中に振り回した。

こう述べられる間に栗毛の雌馬が側に釣れて来られた。立派な灰色の白馬も一緒で、これはヒルシュフェルトの予備の馬として用意されたものであった。かくて数分が過ぎて、

村長と一緒にあちこち歩いていたバメが言った。「何時だ、クニーハーゼ」。

「十一時半」。

「まだ三十分あるな。その間どうしようか」。

「牧師殿が窓辺にいます。彼の許に寄られますか」。

「いや、クニーハーゼよ、ザイデントプフはいい。昨日髑髏を見たばかりだ。みぞれ模様の天気だな。向こうに居酒屋がある。誰のものだ」。

「シャルヴェンカ一家のものです」。

「そうだ、シャルヴェンカだった。ボヘミアの植民だな」。

「その通りです。将軍殿、しかしどの部屋も一杯です。観兵式のせいです。百姓や下僕達で。将軍殿は村長屋敷へお越しになりませんか」。

「そうだな、クニーハーゼ。それは歓迎だ。フィッツェヴィッツの許で色々聞いているぞ。美しい娘がいるそうではないか。絵に描いたような」。

「養女です、将軍殿」。

「私には同じことだ。向こうのヘルンフート派の叔母さんはな、私を恐がっていつも呪文を称えているが、昨日娘御のことを話しておった。鶏小屋が白鳥を孵したようなものだ、と。老婆のお喋りは余り信用していないが、しかし奇蹟を、若い白鳥の娘を覗きたくなったな」。

こう言いながら、彼らは村長屋敷に達した、そして左手へ折れた。そこではマリーが立派な馬の先導や審査を大いに関心を持って眺めていて、窓際に座っていた。彼女は今や立ち上がって、部屋を去ろうとした。しかし老将軍は、彼女を策略的目で観察しながら、言った。「どうか、そのまま。私を嫌わないで欲しい」。

マリーは留まった。バメは椅子に腰かけて、村長に述べた。「お願いだ、クニーハーゼ、騎兵隊長に外の街道で私を待つように伝えて欲しい。私はここから馬に乗るつもりだ。あの雌馬には更に毛布を掛けるよう手配して頂きたい。あれはドロッセルシュタイン由来だ。だから鍛え方が足らんだろう。娘御にはその間昔の話しを語って貰おう。貴方がすでに御存じの昔の話しだ」。

「私は老いた男だ」と彼は始めた、「それでお喋りが好きだ。一番好きな人間は、他の人と変わっている人間だ。そのときは小夜啼鳥のように詮索好きになる。それで、二，三質問をするのを許されたい。貴女は、ホーエン・フィーツの産ではないのだろう。ブルフ[湿地]生まれではないのだろう」。

「そうです。私はザクセン出身です」とマリーは言った。

「そうか、ザクセンか」とバメは続けた、「ほとんどこう思ったよ、古い歌にある通りだなと[美しい娘達が木になるザクセン生まれ]。それで両親を早くに亡くしたのか」。

「そうです。私の母はほとんど覚えていません。それから父と国を遍歴していました。でも父は病気がちでした」。

「父と遍歴だと、どう理解したらいいのか」。

「私どもはあちこち回って、見世物をしておりました。踊りに、朗詠に手品です。最初は色々な小都市、それから色々な村。そしてここで父は亡くなりました。上の教会墓地に父の墓はあります。老イエーゼリヒ・クーバルケが、私どもの寺男で、可愛いマリーネの父親ですが、父のために墓碑銘を書いて下さいました」。

「それからどうなった」。

「私は心から泣きました、私の困窮のせいではなく、そのことは実感されなかったからですが、でも父をとても愛していたからです。今でも好きで、夢に見ます。将軍様、貴方は私をとても好意的に見つめていらっしゃる、そんな風に他の人を御覧になるとは思いもよらなかったです。それで父について話す勇気が出ました。いや、軽蔑された人間というものは、善良な人間の場合、最良の人間です。私は早くに、見せかけはほとんど意味がないと知りました。私どもをすべて御覧になり、承知しておられる神様の前にまず心は開かれなければなりません」。

彼女はこのことを深く感動して話した。今は彼女は黙して、老人の口許が震えるのを目にした。老人の方では質問を繰り返した。

「それからどうなった」。

「それからは、今御覧の通りです。クニーハーゼ家が私をこの村長屋敷へ引き取りました。クリスマスの前でした。村長が夫人を説得したのです。私は可愛がられました。私は幸せでしたし、幸せすぎるほどでした。でも亡き館の奥方が、それを御覧になって、私が自然児として育ち、私の気分次第に育っているのに気付かれて、それで正しく育てようと配慮なさいました。あるいは正しくではなくても、それでも奥方が正しいものとお思いになる風に育つように、と。奥方は私を領主の館に受け入れて下さって、そこで私どもは、レナーテと私は一緒に教育を受けました。つまり御令嬢と私のことです。私どもは同じ歳で、いつも一緒でした」。

「レーヴィーンとも一緒か」とバメは尋ねた。またからかおうという気に襲われたのであった。

「はい、レーヴィーンとも、彼が町へ行くまでは。私どもは仲が良かったです」。

「今でもそうかな」。

「そう願っています」。

こうした会話の展開のとき、クニーハーゼが入って来て、時間であると知らせた。三個大隊がすでに小森の待ち合わせ場所に入場しており、第四大隊がまもなく加わるでしょう、と。それは都合の良い知らせであった。老将軍は辞去し、外の玄関で軽騎兵の外套を着て、再三こう誓った、無器用な手で襟を付けながら、こんな可愛い妖精が、一人でも育つなら、家に六人の養女を引き受けてもいい、と。これは妖精ではないか、もっとも正しい妖精は青い目でなければならないだろうが、と。その後彼は鞍に乗って、姿勢を正し、窓際に立っているマリーに投げキスをした。にやけているというよりもむしろ好意的なものであった。すぐその後彼は馬を駆けさせた。奇妙な光景であった。小さな男が高い、炎のように赤い馬に乗って、外套と毛皮の帽子で、鐙は高く上に締めてあった。

ちなみに、すべては村長クニーハーゼが述べた通りで、バメが今や観兵式に定められた休閑地の近くに入って来たとき、三個大隊がすでに行軍して規則的に並んでいた。彼らは馬蹄形に、あるいは方陣に立っていて、その前方の面が空いていた。この瞬間ドロッセルシュタインとフィッツェヴィッツがレブース大隊も行軍して来るぞと告げた。同じことをヒルシュフェルトも報じた。そしてこの小さな男はきちんとその高い馬の上で立派な者になった。様々な方面から挨拶を受けて、すべての役務上の告知の中心地となっているのに気付いたのであった。

これらの告知が済んだかと思うと、早速村から太鼓が聞こえて来て、ポプラの間から長く進んで来る縦隊が見えて来た。我らのレブース隊であった。彼らは百五十の歩幅の間隔で行軍していた。今や最前列がはっきりと分かるようになった。リーツェン・ドルゲリーン中隊であった。ある老人が旗を持っていた。その棒は幅広の腹帯に収まっていて、強壮に前進して来た。もっとも右足は若干左足よりも短かった。

「あの老人は誰だ」とバメは隣にいるフィッツェヴィッツに尋ねた。

「出納官のモルハウゼン・フォン・リーツェン。カール辺境伯［Markgraf　Karl (1705-1762)］にも仕えたのだ。クーナスドルフの戦いでは腰に銃を受けた」。

「そう、そうかい。その老人の持っている旗は何だ。赤と白で。まだ生涯見たことないぞ」。

「八尖端のヨハネ騎士修道会の管区旗だ。リーツェンは騎士修道会の荘園だった」。

こう会話しているうちに「リーツェン・ドルゲリーン」はすぐ近くまで来て、右手に旋回して、空いた方陣の一方の翼に進んだ。そのため次に進んで来る中隊が見えた。それはホーエン・ツィエーザルの中隊であった。この中隊は一番多く楽手を有していた。二人の鼓手と二人の笛吹きで、最前列の部隊はすべて、騎乗の隊員から出来ていた。伯爵の様々な荘園や分農場の支配人や管理人であった。伯爵ドロッセンシュタイン本人は自分の配下が近寄って来るのを見ると、その先頭に立って、刀の先を一斉に下げさせながら、老バメの側を率いて行った。

今やホーエン・フィーツの中隊が来た。この中隊は最も声望が高く、他の中隊から古くからの高貴な家系のように扱われていた。歴史的に由緒ある中隊であったからである。リーツェンの八尖端の十字架像の騎士修道会管区旗は大して重きがなかった。彼らの旗は新しくて、三十年も経っていなかったからである。しかしホーエン・フィーツ中隊はフス［Hus（1370 頃-1415）］教徒との戦い以来の栄光の教会旗を含んでおり、とりわけ大きなスウェーデン太鼓があって、これについてはブルフ［湿地］の村々のどの子供も知っていて、この太鼓が今や鈍く、単調にその行軍を連打していた。それを持っているのは鍛冶屋で、幅広の、貝殻の嵌められた革のベルトに結ばれていて、それは橇の鈴用の革紐と余り変わらない幅であった。太鼓の胴は青色で、この胴の黄色の紋章の地に描かれた縮れ毛のモール人の頭部はザイデントプフによって女王クリスティーネ［Königin　Christine(1626-89)］の頭部と認定されていた。

さて、プロッツハーゲン中隊が来た。右翼にフォン・ルッツェ大尉がいて、鼓手の代わりに先頭に一人のホルン奏者がいた。この者は、太った猪首の男で、身分はプロッツハーゲンの牛番であったが、巨大なホルンの渦巻きの中に隠れているようで、このホルンは、貴公子のハンス・フォン・ルッツェが百五十年前に落ちて首を折ることになった当のホルンであるとされていた。それは単に二つの音色を出し、低い音色と高い音色で、低い音色は攻撃用の合図、高い音色は退却用の合図と定められていた。しかし中隊そのものは、以前も以降も最良のもので、全員が槍で武装していた。オイゼービウス・フォン・ルッツェがブダペストの大合戦[1686]の時、槍中隊でトルコの中心部隊を撃破した歴史的事実を踏まえたものであった。その後その曾孫の我らの大尉が、個々人のどんな説得にも応じずに、槍を主張して、バメは、自ら煌めく武器、白兵戦を好み、　一　彼の意志を尊重していた。彼は今やにんまりとしてルッツェを見た。ルッツェは六フィートの短い槍を両手にして、

重々しく彼の側を分列行進して行った。バメはベルントに向かって行った。「プロッツハーゲンの山岳の民の参上だ。御覧なされ、フィッツェヴィッツ、金属の王蛇の怪物を、純然たるウーリのホルンを」[シラー、Wilhelm Tell Ⅱ,2]。

そして同時にルッツェの人々も右手に旋回して行った。

彼らの旋回は、そもそも最後の中隊の旋回のように、戦列を形成していたならば、それまで空けられていた方陣を締め括っていたであろうが、しかし次々と二人と二人ずつ、馬蹄形の左右の翼に行軍して行ったので、その間に幅広の路地が残された。この残された方陣の中に、今やバメが最初に、そして続いてすべての街道に残っていた大隊の司令部が皆、馬で入って来た。

バルニムの大隊は、レブースの大隊とは違って、多くの小さな中隊旗を持参して来ていた。赤いフリーズの布切れで、そこには国民軍を表すかのように、「プロイセンの郭公」が縫い付けられていた。彼らは今やこの旗を降ろしていて、一方すべての太鼓が、大小打ち鳴らされた。老将軍は敬礼をして、正面に馬を進め、それから方陣の中央に位置し、彼の随員や何人かのバルニムの旗手達に囲まれた。今や言葉が発せられなければならない時になっていた。

バメは不安に思っていなかった。話す術は、自分の話しが受けようが受けまいが気にしない者達のように、心得ていた。

「諸君」と彼は始めた、「フランクフルトには五十の大砲があり、ただの二千人のフランス人がいるだけだ。数百人の誤差は関係ない。奴等に奇襲をかけようと思うが、その気があるか」。

「はい、将軍殿」。

「分かった。諸君に臨むのはそれだけだ。老フリッツは何と言ったか。『兵士を見たくなったら』と大王は言った、『イッツェンプリッツの連隊を見るのだ』と。そして別な時にはこう言った。『兵士を見たくなったら、カール辺境伯の連隊を見るのだ』と。いいか、諸君、老フリッツはそう言ったのだ。私の言うことが、分かったか」。

「はい、将軍殿」。

「イッツェンプリッツ連隊、カール辺境伯連隊、これらの地はどこだ」。

「ここです、将軍殿」。

「その通り、ここバルニムとレブースだ。諸君、我らが父祖に遅れを取っていいか。老フリッツが我らを見たとき、目を伏せていいか」。

「いけない、いけない」。

「大した手間ではない。市民どもが助け、ロシア人も助ける。しかし『木を伐採すると、木くずが落ちる』と言う。二，三の代償は払わなければならない。その気があるか」。

「はい」。

「承知した。しかしへこたれるな。意気地なしは頭に弾を食らうぞ。私は冗談が好きだが、しかし真剣になると、冗談は出ない。ただ進めだ。合い言葉は、『ツィーテン』と言ったら、『ホーエン・フィーツ』だ。奴等には真似できない。...奴等をやっつけるのは誰だ。奴等とその皇帝を」。

「はい、我々です」。

「違う、『郭公』がやっつけるのだ」とそう言って、彼は自分の側に立っているバルニ

ムの旗手達の小さな連隊旗を示した。
今やまた旗手達が赤いフリーズの布切れを振った。すべての楽手が合奏を始めた。バメは自分の最後の演説の奥の手が終わりのない万歳を伴っているのを見て満足感を味わっていた。
騒ぎが若干また収まったとき、彼は挨拶しながら方陣から街道へ戻った。大隊は速やかに分隊に散って、太鼓の音の下、村へ彼に従って行った。
「ウーリのホルン」も交互に低音と高音とを響かせていた。

第十八章
出発

午後の時間は予期していたよりも早く過ぎて行った。全ての参謀部が食卓に招待された。そして彼らとの会話で時間が短縮された。バメでさえ、自分の物語や逸話に対して、極めて切迫した状況にもかかわらず、注意深くて有り難がる聞き手に欠けていないと気付いて、案じていた時間を上機嫌でやり過ごすことが出来た。
九時になるずっと以前に大隊は集合し始めて、今や村の中あちこちで立っていた。ミークライの水車小屋の側には前衛が、居酒屋とザイデントプフの間の広い道路上には両バルニムの大隊が、領主の館の前ではレブースの大隊がいた。かなり暗かった。しかし左右から路地にかかってくる明かりの光線の下、槍や武器で合成されるピラミッドが様々はっきりと確認できた。家々の前では国民軍の男達が妻や娘達と会話していた。武器を取れる者は皆、隊伍に加わっていたからである。
バメはミークライの水車小屋の隣で一種の露営篝火を燃やした。これはそこの車道の築堤で点火された。目深に毛皮の帽子を被って、灰色の外套に軽騎兵のサーベルを結び付けて、今や篝火の照り返しを受けて、高い脚の赤い栗毛の雌馬上で、観兵式の騎乗の時よりも更にグロテスクな風貌を呈していた。彼の隣にはヒルシュフェルトがいた。

さて九時になった。最後の鐘の音が響き終わらないうちに、「銃を取れ」の声がした。この司令を耳にした者は誰でも、誰の声か分かった。この鋭いカラス声は一人しかいなかった。最も間近に立っていた大隊の国民軍の男達は瞬時に従って、昔からの兵士の的確さを弁えていた。一方ヒルシュフェルトは村の路地を駆け上がって、大隊から大隊へと命令を伝えた。それからバメは栗毛の雌馬を左手に回らせて、水車小屋の入口の二本の木製支柱の間に位置し、命じた。「大隊、行軍」。鼓手が打ち鳴らして、万歳の声の許、大隊は速歩で老公の側を通り過ぎた。老公は絶えず、新たな大隊が近寄るたびに、毛皮の帽子を浮かせて、少なくとも最前列の隊伍に挨拶をした。今や後衛となるレブースの大隊も来た。スウェーデンの太鼓が轟いた。そしてプロッツハーゲンの牛番は、貴公子ハンスのホルンで、その間に絶えず割って入って、吹き鳴らした。火事の警報のように響いた。
フィッツェヴィッツとドロッセルシュタインは通り過ぎる際捧げ銃をさせた。そして後衛の大隊の最後の男が通り過ぎた時、ようやくバメは二本の支柱の間の自分の席を空けて、縦隊の殿[しんがり]に従った。
三十分後にはまたすべて村の路地は静かになった。ただ明かりは夜深更にまで燃えてい

た。恐れや希望の中、不安と祈りと共に行軍に参加しなかったような住民の家はなかったからである。

牧師館の中でもそうであった。ここにはレナーテとショルレンマー叔母がいて、助言と慰めを求めてやって来ていた。少なくともレナーテについてはそのことが言えた。ショルレンマー叔母は自ら、必要とするものを有していて、自分の避難としてむしろ、自分の歌や格言という非常用貯えの方を好んでいた。これらの格言は彼女にとって、ザイデントプフの持ち出すものすべてよりも治癒力があるように思われていて、それは全く不当なこととは言えなかった。

両人（レナーテとショルレンマー叔母）がやって来てからほどなくしてマリーも村長屋敷から入って来た。皆が衷心から挨拶した。しかしまともな会話にはなかなかならなかった。若干の取るに足りない言葉が交わされた後、皆が黙って宙を見ていた。その日の経過の中で、再三こう請け合わされていた、恐らくは多分、ただちょっとした仕事になることだろうよ、フランス人は志気が上がっていないし、こうした事実を見れば、普通のあるいはそれどころか頑強な抵抗には遭わないだろうよ、と。それにもかかわらずヒルシュフェルトは真剣な表情をしていたし、それ以上にバメのどんな陽気さの中でも隠れもなく生じて来ている落ち着きのなさは、すべての先の楽観的な請け合いよりも明瞭に物語るものがあった。危険はないものと口にはされたが、しかし危険は実在していた。それで各人が各様の陰鬱な考えに陥っていた。マリーが最もそうであった。レーヴィーンに対しては彼女は何の心配もしていなかった。あたかも何らかの炎の楯が彼を守るに違いないと思われた。しかしトゥーバルのことは震えて思っていた。彼女自身の思いに反する、愛着からであったろうか。そうではない。彼女の本性の奥深くに応報を信ずる気持ちがあったのである。咎と罪の神秘が彼女の心には書き込まれていた。そして空想が働いて、黒いイメージを描き出した。場面は色々変わったが、その内容はいつも同じであった。

そのようにして刻々と過ぎて行った。沈黙は耐え難くなった。楽天的なザイデントプフも、彼はその本性上いつも恐れるよりは希望を抱いていたが、この沈黙に加わっていただけに、一層耐え難かった。

ようやくレナーテが言った。「どの道を通るのでしょう。私は父上に尋ねるのを忘れていました。川沿いがより近いけど、丘の道がもっと良くて、陰鬱でもないし荒涼ともしていない」。

「私がバメの話しを聞いていた限りでは」とザイデントプフは応えた、「ライトヴァインの近郊か、あるいは遅くともポーデルツィヒの近郊で縦隊を分けて、二本の道路を使って行かせます。バルニム大隊は下のオーダー川沿いを、我らの大隊とミュンヘベルクの大隊は高台を越えて行きます。先端居酒屋で彼らはまた合流します。ヒルシュフェルトは小さな聖ゲオルク教会を提案しましたが、しかしバメは先端居酒屋を主張しました」。

「そうだと思った」とショルレンマー叔母は言った、「彼はいつも教会より居酒屋が好きなのです。だから私は不安になって、私の希望は消えてしまうのです」。

レナーテは老いた友の女性の手を取って、言った、「何故そんなことを仰有るのか分かりません。あなたはあの人については噂話しか知らないのでしょう」。

「それで十分ですよ。噂話はいつも本当です。世界は嘘で一杯ですけれども。でも嘘は消えてしまいます。それでも残るもの、これは真実です。あなたは向こうの伯爵について

何か邪悪なことが語られるのを耳にしたことがありますか。ないでしょう。何故ないか。彼が純な心を持っているからです。ただ啓発の時に恵まれず、信仰の明かりが点されなかったのです。でもこの嫌なバメに欠けているもの、それは多かれ少なかれ、一切合切ですよ。その代わり彼の持っているものは、煙に煙草よ。彼はいつも煙草を吸っていて（あの嫌な短いパイプから)、そして部屋中を灰と、火付けこよりと火口だらけにしている。床には焦げた穴が一杯できて、誰のせいかとは言わないけれど、五日間宿営となっていたような按配よ。これでどんな良いことがあるでしょう。ありませんよ。レナートヘン。私どもに必要なのは神様の助けです。神様は私どものために戦ってくれる天使達を送ってくれるに違いありません。でも天使達はこの男の側では戦えません。純なものは不純なものに耐えられませんから」。

「ショルレンマーさん」とマリーは言った、「多分彼に対して不当ですよ。実際よりも悪い人に描かれています。彼は今日の午前、私どもの家に来られて、私の側に掛けられて、私と話しをしました。三十分ほどだったでしょうか。ほんの一時も怖いことはなかったし、いずれにせよ、バメではない多くの人達の場合よりも、かなり怖い思いは感じなかったですよ。彼はとても礼儀正しく、親身になって下さり、彼の口から厭わしいものは何も聞かなかったと申し上げなければなりません。ひょっとしたら以前は違ったのかもしれません。彼は賢明で、人間を良く知っています。自分の言って良いことといけないことを良く弁えていると思いますよ」。

「マリーの言う通りだ」とザイデントプフは言った、「それに偉大な徳を持っている。彼は偽善をしないし、実際よりももっと良く見せようとはしない。逆に彼は色々な馬鹿げたことをやりよる。人間の心は虚栄に駆られると不思議なことをする。大方の者は有徳な見せかけで点を稼ごうとする。彼は罪の見せかけが気に入っている。彼に関するすべてを称えたいとは思わない、しかし彼の欠点をすべて列挙するとすれば、虚栄心、迎合心、それに必ずしも確定していない原則、そういうことになるかな」。

「確定していない原則」と今やショルレンマー叔母が立腹した、「それは言い繕いですよ。原則ですか。彼はそもそも原則なんか持っていません。これは最悪です。原則のない人、これは猛獣のようなもの、あるいは猫のようなものです。猫はどうしますか。猫は今のどをごろごろ鳴らしているか、暖炉の隅で温まっているかと思うと、次の瞬間には眠っている子供ののどに飛びかかっています。『猫は鼠と思ったのだよ』と何でも口実を見つけてくれる人々は言います。鼠はあちこち逃げます。小さな罪のない子供は死んでしまうのですよ」。

レナーテとマリーは視線を交わした。しかしショルレンマー叔母は善良な女性であったが、熱中する余りしばしばすべての愛を忘れてしまって、ますます激しく続けた。「そしてこの男と共に人々は堅牢な壁の町へ出兵して行きました。あたかも彼が神の男、選ばれし男であるかのように。彼があのプロッツハーゲンの太った男に、首にルッツェのホルンを担いでいるあの男にいくら吹かせたところで、無駄でしょう。古いルッツェのホルンは聖書のラッパではないし、バメは、神様も御承知のように、ヨシュアではありませんから。[民が角笛の音を聞いて、一斉に鬨の声をあげると城壁が崩れ落ち、...ヨシュア、6,20]。ヨシュアは神様がモーゼに与えた法を持っていて、右手にも左手にも逃げなかったからです。イスラエルではそうだったのです。そして人々が異教徒と混じり合って、異教の神々

に仕えるようになって、不都合のことになると、神様は人々の中に神の男を目覚めさせて、神様はモアブ族やアマレク族、その他の民族を破ったのです。何故破ったのか。神様に選ばれた男が真の神様に仕えて、バール[セム族の太陽神]の神殿を倒したからです。しかしこのバメは、私どもの敵を破るために出兵しましたが、自らが異教徒の民で、毎日バール神のために神殿や祭壇を築こうとしています。彼のバール神は何ですか。賭博に酩酊に肉欲です。それ故私は、ギデオンのようには戻って来ないだろうと言うのです。[こうしてヨアシュの子ギデオンは、ヘレスの坂を通って戦いから帰って来た。士師記、8.13]」。

「でもひょっとしたらエフタのように」とレナーテは冗談を言った、「私は彼が戦に勝って戻って来たら、ティンパニーとシンバルで出迎えることでしょう」。[エフタがミツパにある自分の家に帰ったとき、自分の娘が鼓をうちならし、踊りながら迎えに出て来た。士師記、11,34。(先にエフタは神に犠牲を約束していた)。わたしがアンモンとの戦いから無事に帰るとき、わたしの家の戸口からわたしを迎えに出て来る者を主のものといたします。士師記、11,31]。

ザイデントプフとマリーはこのイメージで一瞬状況の深刻さを忘れた。しかしレナーテ自身は老女の手を取って、宥めながら言い添えた。「ショルレンマーさん、そんなに邪険に見ないでください。でも言い方が良くありませんよ。困難な時にこうしてここに一緒にいるのですから。私どもの最愛の人達が出兵して、国に蜂起の合図を送ろうとしているのです。でもあなたのなさっていることは何ですか。不吉な絵を描いて、この一人の男のせいで皆が没落するに違いないという風ではないですか。それは良くありません。あなたのことがまた分からなくなります。一人の善人がいたら神様は大いに恵みを与えますとあなたは以前私に教えてくださいました。でも神様は一人の科人のせいで百人の無実なものに罰を下さないでしょう。そうでしょう、牧師さん」。

「そう、その通り」とザイデントプフは言った、「我々の心をますます不安に、不吉な思いにさせても何にもなりません。元気よくあるべきときに。叔母さんは熱中しすぎたのでしょう。我々皆が各人に特有の点を有していて、その点に来たら、我々が最も正しいと思っているとき、最も間違っているものです。我々の叔母さんの場合、その点は、バメです。論争や暗い視点はやめましょう。全能の方、神の恵みの言葉を読みましょうか」。

マリーが立ち上がって、神学の部屋から、鉄の締め金の付いた大きなアウクスブルク版を持って来て、締め金を開けた。老ザイデントプフは詩篇の九十番を読んだ。「主よ、あなたは代々にわたしたちの宿るところ。山々が生まれる前から、大地が、人の世が、生み出される前から、代々とこしえに、あなたは神」。

その後ショルレンマー叔母とレナーテが立ち上がって、領主の館へ戻った。彼女らと一緒にマリーも従った。夜を一緒に過ごしたかったからである。

第十九章
襲撃

牧師館でザイデントプフと三人の女性がこのようにお喋りしている間に、中隊はフランクフルトへ向かっていた。個々の星が、生じたかと思うと、同様にまた素早く隠れた。ただ積もっている雪だけは十分に明かりを発していて、道がそれと分かった。黙って、黒々

とした隊列で行軍がなされた。百歩離れた所に立っている者がいたら、長い影の動きと、時折の国民軍の男達の短いパイプからの二，三の火花しか目にしなかったであろう。カラス達が行列を覗いていて、不審に思っていたが、動くことはなく、ただ二，三羽が鳴いて飛び上がって、途中他のカラス達に知らせていた。同時に雲はますます低く垂れ込めてきた。冷たい風が刺してきたが、誰もが蒸し暑く感じた。

かくて彼らはライトヴァインまで来た。ここれはすべてまだ明かりがあった。村民の多くの者が、ここでも大抵は女達であったが、車道まで出て来て、縦隊にいる縁者に挨拶していた。他の女達は玄関に残っていて、白いハンカチを振って合図としており、一帯に見られる暗さの中で不気味な印象を与えていた。

村の背後で道が分かれていた。縦隊の先頭が分岐点に達したとき、バルニムの大隊は、丁度ザイデントプフが推測していた通りに、左手の低地の方に旋回した。一方残りの半分は高台へ向かって更に行軍して行った。この二番目の半分の方に、司令官とその副官の他に、我らのレブース国民軍大隊も加わっていた。

このレブース大隊の先頭、五十歩先を行く最前列の隊伍の所に、ドロッセルシュタインとフィッツェヴィッツは騎乗していた。二人は道、小道を知っていて、バメの表明された願い出により、行軍の引率を引き受けていた。両人はお喋りする気になれなかった。最後のライトヴァインの家々が、すでに小銃の射程を離れて遠ざかると、ドロッセルシュタインが始めた。「将軍の側にヒルシュフェルトがいるのは幸運だ。彼は冷静で、戦争を知っている」。

「そうだな」とフィッツェヴィッツが証した、「老公が自ら自信を失っているだけに尚更幸運だ。彼は自惚れが強くて、我々が申し出た司令権、諸般の事情をすべて考慮して良かれ悪しかれ申し出ざるを得なかった司令権を本当に受けてしまった。しかし今はぐらついている。自分の使命に匹敵していないと感じているから。彼はそのことを誰彼となく話したいところであろう。しかし立派なことに、そのことを断念して、少なくとも配下には黙っているようにしている。彼は平静に熟考する男ではない。ただ人柄が向こう見ずなだけだ。責任の重圧を彼は感じている。今この時間が最も耐え難いことであろう。彼は行動に移ったら、自分を取り戻すことだろう」。

「それでこの行動は、どんなことになるだろう」と伯爵は尋ねた。

「大丈夫だろうが、条件は、...」。

ドロッセルシュタインは問うように見つめた。

「条件は」とフィッツェヴィッツは繰り返した、「ロシア人が我々を見放さないことだ」。

「私はチェルニッチェフの保証を得ているばかりでなく、御承知のように、昨日二回目の保証を得た。彼は猜疑心を抱く男ではない」。

「そうかもしれない」とフィッツェヴィッツは答えた、「しかし私はロシア人を知っている。彼らは気まぐれで、気まぐれを行使する。その際彼らは丁重な社交的な作法を用いて、それが事態を更に悪化させるのだ。彼らは何でも約束するが、前もってその約束は守られないと承知しているのだ。少なくとも良心に縛られるとは思っていない。彼らには二種類欠けている。名誉心と共感心だ。チェルニッチェフも他の者と変わらない。彼が来るのは考えられるし、しかしまた彼が来ないことも考えられないわけではない。これが私が恐れ、心配していることだ」。

ドロッセルシュタインは論駁しようとした。しかし彼の言葉は明瞭に心の奥底でベルントの恐れを共有していることを露呈していた。

次に進んで来る縦隊は以前同様今も皆静かであった。クニーハーゼ村長が第一列を率い、レーヴィーンが第二列を、トゥーバルが第三列を率いていた。第二列と第三列の間にハンネ・ボーグンが進んでいた。バメは、彼の高い栗毛の雌馬に信を置かず、予備の馬を主張して、シャルヴェンカの家畜番が、シェットランド島のポニーを手綱で引いて来るよう選ばれていた。全縦隊の中で彼だけが本当に快適な気持ちでいた唯一の者であった。虚栄心があって、「捜査」が行われた日以降ますます募ってくる自惚れを持て余して、彼は今また抜きん出ようと野心に燃えていた。そしてこの機会が来るであろうと、一瞬も疑っていなかった。すでに彼の服がそれを示していた。彼はいつものようにフリーズの上着と亜麻布のズボンを着ていた。しかし上着の上に広い革のベルトを締めていて、その中に切れ目を付けて、長い、真ん中が研ぎ窪んだナイフを収めていた。この少年の全体は生意気なヤクザ者の姿であった。

静寂で心が重くなったトゥーバルは、二，三歩先に進み、一本腕の男に言った。「ハンネよ、次の村は何と言うのか」。

「ポーデルツィヒ」。

「半マイルだろう」。

「だね、狐の測定ではそうだがね」。

「どうして」。

「狐は尾があるでね。［もっと長くなる］」。

「ポーデルツィヒはフランクフルトまでの中間点だろう」。

ハンネ・ボーグンは頷いた。

「ハンネ、あのな」とトゥーバルは続けた、「あれは何だったけ、葦の中にいた奴等の一人はポーデルツィヒの出ではなかったか」。

「だね。ローゼントレーター」。

「その通り、ムッシュヴィッツ、ローゼントレーター。また思い出したな。ムッシュヴィッツはフランス人の制服と軍帽だった。まだ覚えているかい。奴ともう一人はどうなった」。

「まだ中に入っているがね」。

「可愛い女性がいた。子供を橇の箱の中に連れていた」。

「やはり中だね」。

「哀れな女性だ」。　ー　ハンネはにやりと笑った。

「そんなにひどい待遇じゃねえよ。若旦那。リュッセルマンが暖房を入れて、葦の中州は寒くて堪らねえ。冬の間は中にいたがる。しかし春になると、ちょっと違う。皆また出たいと思うがね」。

トゥーバルは更に先端居酒屋のことを尋ねて、町からどれほど離れているか尋ねた。しかしハンネ・ボーグンはそれについて何も知らなかった。彼はポーデルツィヒから先に行ったことがなかった。

縦隊の殿[しんがり]をバメとヒルシュフェルトが騎乗していた。

「ヒルシュフェルト、どんな具合だい」。

「いいですよ、将軍殿」。

「それは嬉しい。正直に言うとな。私は余り良くない。自分の本調子ではない。私にはすべてが高すぎる脚に思える。殊にこの雌馬はな。このような襲撃は独得なものだ。一頭の馬がいななき、一匹の犬が吠える。するとすべてのチャンスがふいになる。貴方は賭博をするか、ヒルシュフェルト」。

「昔はしました」。

「それでは、ある一日はクラブの七が勝つとすべて順調に分かる日があると御存じだろう。そして別な日は分からない」。

「今日はそんな一日ですか」。

「そうだ、禿鷹に掠われてしまえだ。この上に止まっているカラスが見えるだろう。動こうとすらしない。我らが恐がって何も危害を加えようとしないと承知しているのだ。賢い動物だ。縦隊を見て来たが、皆がすべて忍び足だ、黒く静かで、あたかもこれらの溝は冥界の川のようだ、何と言ったかな」。

「スティックス」。

「その通りスティックス川。純然たる葬列だ。賭けてもいいが、奴等もそんな気分だろう。皆が家の方がいいと思っている」。

ヒルシュフェルトが微笑した。

「いつもそうですよ、将軍殿。最良の部隊は、突撃前はしかめっ面をしています。それに夜ときている。夜は人間の友ではないと諺も言っています。兵士も人間です。しかしここの人達は立派です。槍中隊、あの痩せた老...」。

「ルッツェ」。

「...その槍中隊は手本となりましょう。ホーエン・フィーツの中隊も劣りません。クニーハーゼのような男ときたら、子供のような心と、競技者のような両腕をしています。私は今日観兵式で個々人をじっと観察しました。全体総じて、上手く行くでしょう、前提となるのは、...」。

「それは」。

「いつも前提となるのは、ロシア人が我らを見放さないことです」。

バメは頷いて、それから同意して言った。「私はテッテンボルンを信用していない。法螺吹きだ。新聞に載りたいのだ。ベルリン、ベルリンだ。ここら一帯は取るに足りないのだ。十分に人目を引かない」。

バメが真面目な、ほとんど厳かなチェルニッチェフを若干軽快なテッテンボルン、丸三日前からホーエン・バルニムを、キュストリーンとベルリンの間を動き回っているテッテンボルンと混同していることは明らかであった。ヒルシュフェルトは老公を、畏れながらとこの点について正す気でいたが、バメは休まず続けた。「これらの虚栄心のせいで何とすべてが駄目になって来たのを見てきたことか、貴方には信じられないほどであろう。この虚栄心よりもっとひどいのは競争心だ、この競争心が政治的あるいは国民的外套を着用できるときには、二重、三重にひどい。中でもこれらのロシア人が最悪だ。ロシア人の誰もが我らに痛手を与えるのは賭けてもいい。コサック兵がいなければ機能しないし、いつ

でも救援がなければ、敗北は確実なのだと、世間に、ひょっとしたら自分達自身に思い込ませるのが大事なのだ。彼らは解放者の役割が気に入っている。この役割が目新しいだけに尚更だ」。

このような会話をしながら縦隊の行軍は進んだ。そして夜の間、聞こえて来るのは、ただ国民軍の男達の固く凍った雪の上を歩く重い足どりだけで、時々彼らの槍や武器を一方の肩から別の肩へ移すとき物音がした。十時に彼らはポーデルツィヒを過ぎ、十一時にレブースの羊の牧場を過ぎた。ここから更に一時間半であった。次第に長い影の行列はゆっくりとなり、ようやくオーバー教会から真夜中の鐘の音が聞こえてきた。数分すると皆が先端居酒屋に着いた。両バルニムの大隊はすでに到着しており、道の両側に立っていた。短い休息が不可欠であった。バメは武器をまとめさせた。すぐその後、国民軍の男達は垣根の板や街道の石の上に座って、ハンカチの結び目を解いて、妻達や子供が途中の食用にと渡していたものを取りだした。一言も語られなかった。誰もがこれが最後の晩餐ではないかと静かに自問していた。

バメはこの野営の間、先端居酒屋に入って行った。そこの大きな、しかし低く、照明の乏しい客室に、すでにフランクフルトの市民階級の予期されていた派遣者が見いだされた。彼の報告から分かったことは、ニコライ教会広場の側のすべての家々は市民の武装兵達が占めていて、この古い教会の内部そのものには、最良の隊員が潜んでいるとのことであり、彼らと一緒にオテグラーヴェンはジラール将軍を捕虜としようと考えているとのことであった。こうした知らせはすべて歓迎された。しかし二番目の知らせは、郊外の入口の下に、「最後の一文亭」から百歩も離れていない所に、一人のフランス人歩哨が立っているとのことで、嬉しくないことであり、真剣な困惑を引き起こした。どうしたらいいか、この歩哨の側をどうして過ぎたらいいか。

先端居酒屋の亭主が、今一度見て来ると申し出た。バメはそれを頼み、その間また旅団を集めた。彼自身は、右翼のレブース大隊の正面に位置していた。ほどなくして亭主が戻って来て、一人のフランス人歩哨が聖ゲオルク救貧院の前で見張っていると証した。

「畜生」とバメは言った、「此奴は邪魔だ。奴を忍んで行って、倒さなければならない。志願兵は前に出ろ」。

誰も動かなかった。ただハンネ・ボーグンが隊伍から出て来て、将軍の顔を、決然としかし生意気に憎らしく見た。彼はそれまで脇の革のベルトに掛けていた長いナイフを前方へ持って来て、ナイフを自分の一本の手で握りしめた。

バメは少年に平手打ちをして言った、「ハンネ、おまえの仕事ではない」。するとハンネはにやりと笑って引き下がり、またシェットランド島のポニーの手綱を取った。彼は一瞬このポニーを放していた。

痛々しい間が生じた。

とうとうクニーハーゼの声が右翼からした。「仕方がないのであれば、将軍殿,...」。

この言葉の調子と表現には何か深い印象を残すものがあった。バメは自分もこの印象を受けていて、彼の栗毛の雌馬をこの競技者風の老いた男のすぐ肩の所まで近付けて、それから言った。「分かった、クニーハーゼ、止すことにしよう。その必要はない」。この言葉で皆の心が軽くなった。すでに先に提案されていた考えが再び採用された。そして一致

して長い郊外はすっかり諦めて、むしろ郊外のすぐ横の方を、所謂「ドルニッシュベルク[山]、つまり枝垂柳、藪で出来ている丘の背を隠れ蓑にして、旧市街まで前進すると決められた。ここに来てようやく、市門そのものの所で、どんな犠牲を払っても、戦いが行われることになった。

そして今や早速、退却を確保するための大隊を先端居酒屋に残して、前進のためのすべての必要な司令が出された。両バルニムの大隊は高台を経由して動き始め、更に南の方に位置する門に達することになった。一方レブース大隊は先に述べられた丘の通りを下って行くことになった。「最後の一文亭」のすぐ手前で、大隊は右手に折れて、まず緩い隊形となって行軍し、絶えずドルニッシュベルクの曲折の間を進み、旧市街と郊外の花輪とを分かつ輪状の遊歩場を行った。

ホーエン・フィーツ中隊が先頭であった。中隊が濠の広場に達すると、老兵士達の素早さで、また整列すると、フィッツェヴィッツは配下の先頭に騎乗して来て、抜刀し、ギャロップでダムブリュッケに進んだ。ダムブリュッケは濠を経由して古いレブース門に通じていた。この門は閉ざされていた。上の格子から個々の射撃がなされた。キュムリッツはすでに一七九四年のとき、「弾丸止めの土手」と見なされていたが、擦過弾を得て、すぐその後二発目の擦過弾を得たが、彼の上機嫌、あるいは側にいる者達の上機嫌を阻害することはなかった。しかしその時、老百姓ピューシェルの息子が崩れ落ちた。弾を胸に受けていた。フィッシュヴィッツは、後退しながら、思わずつぶやいた。「最初の戦死者だ」。

皆が止まった。恐怖で途方に暮れた。先に進まなかった。

この瞬間バメが長い縦列を駆け上がって、列の前線に来て、太い鯨の骨で二輪の荷車、これは右手にかけて前日からすでに承知の門の朝顔口に立っていたものであるが、これを示しながら、クニーハーゼに向かって叫んだ。「四人前へ。これらの市門は承知しておる。ビール栓のように虫食いだ。かかれ。がらくたを片付けろ」。

ガタンと言って、市門は崩れた。万歳と言って、今や最前列が旧フランクフルト市街へ入って行った。敵のすべては衛舎へ逃げた。ただ大砲の前の歩哨だけは、先の尖った髭の軽歩兵であったが、まだ抵抗していて、フィッツェヴィッツは、外の格子門の前で倒れた死者への報復で切り倒そうと腕を上げた。そのときハンネ・ボーグンがするすると側を通り過ぎながら、軽歩兵の脇腹を刺した。

「小サナナラズ者メ」とこの致命傷を負った男は叫んで、大地に沈んだ。

大隊の残りは後に従った。そして次の瞬間、皆がブリュッケンダム[橋築堤]と一部はすでに低い門のアーチの所に集まったとき、バメは命令して、ホーエン・フィーツ中隊を、クニーハーゼの指揮の下、今襲撃した市門の警備にまずは守備隊として残るようにし、フィッツェヴィッツェ本人には対しては（その助言をバメは欠かしたくなかったので）、町への更なる侵攻へ同行して欲しいと述べた。同様にハンネ・ボーグンはシェットランド島のポニーを連れて行くことになった。

これらの命令が下されると、すでに長い縦隊は先の方へ動き始めた。ホーエン・ツィエーザル中隊が先頭で、更にリーツェン・ドルゲリーンが続き、それから槍部隊のルッツェが続いた。最後の者が通り過ぎると、バメは栗毛の雌馬の向きを変え、拍車をかけて、ドロッセルシュタインと列を揃えた。ドロッセルシュタインは、その間すでに都心の混乱した路地に達していた。

「左に旋回」と、引率者達は司令を繰り返して、何らの停滞も秩序の乱れも見せずに、三個中隊はすべて荒涼たる教会広場に縦列で進んで行った。広場の一角にトゥルガニーの家はあった。こちら側ではまだ一切が半分暗がりの中にあった。しかし我らの国民軍の男達が教会の両側を過ぎて、広場の外れまで来たかと思うと、視界に全く別の光景が入って来た。切り揃えられたリンデンの木の旅館の前には多くの市民防衛隊が立っていて、どの階にも明るい微光が見られた。そしてバメが一望して確認する時間もないうちに、オテグラーヴェンが将軍ジラールと参謀部を捕虜としており、逃げないと誓約させて部屋に留めていると伝えた。ルーデリウス少佐の下、ただ弱小の部隊が家と捕虜の監視を引き受けているとのことであった。

バメは頷いて、市民達の行動を称えて、それから諸中隊を幅広の、しかし短い通りへと率いて行った。この通りはすでに先の機会の折、紹介されたように、教会広場から川の桟橋へ達するものであった。今やこの桟橋に到達した。皆の驚きの叫び声が上がった。川の向こう側では製材所と厚板置き場が火に包まれていた。そして右手の方では橋が燃えていた。しかし橋の上は、濡れた橋のせいで、燃えるというよりは、くすぶっている状態で、煙や濛気が厚い雲となっていて、その中から時折暗い灼熱が燃え出ていた。

老将軍は司令した。「止まれ」。そしてその右翼、ドロッセルシュタイン中隊を直接橋の出入り口に投入した。彼本人もそこに止まった。しかしこの位置からの視界が十分でないと分かると、彼は橋自体に騎乗して行き、炎の間近に立った。炎が同時に一種の覆いとなっていた。ここで彼は敵と味方の長い戦列を一望できた。

左手にかけて味方がいた。老いたこの兵士の心を喜ばせてくれる光景であった。まずはホーエン・ツィエーザルの騎乗の隊員達、それからリーツェン・ドルゲリーンの騎士修道会管区旗（赤地に八尖端の十字架像）、それから穂先を垂らした短い槍のルッツェ、この背後にはフランクフルトの市民防衛隊の鮮やかな制服、緑色と黄金色の縁のあるもの、一　一切が燃える製材所の明るい炎の反映で目に見えた。しかし長い戦列の前面にはドロッセルシュタインとフィッツェヴィッツが両翼の副官としていた。

同様に克明に向こう側の敵も見えた。十人から二十人の部隊で軽歩兵が岸辺に立っていて、明らかに統率者がいなかった。しかし統率者はほどなくして現れた。馬上の将校達が桟橋をあちこち行き来していた。ダム郊外[現スビツェ]の路地の混乱から鼓手やホルン奏者の音が聞こえて来て、十分もしないうちに、密集した歩兵中隊が現れた。その高い熊革の帽子ではっきりと分かった。そして橋と燃えている製材所の間で整列した。一方軽歩兵達は次第に土手を降りて、氷の上を渡る道を確保しようとしていた。合図に合わせて集まったり、また離れたりしながら、極めて器用に彼らは前進して来た。そして川の真ん中に幅広の溝があるのに気付いて、まず驚いていた。キーツの漁師達が氷の中に通したものであった。溝は幅が広すぎて、飛び越えることは考えられなかった。板きれを持って来るためにまた戻るか、あるいは更に川下に行って、解氷に多分至らず、渡河を試せる所まで行かざるを得なかった。

バメはこの退却の動きを見て、それを喜んだ。しかしこれは差し当たり大した成果であっても、こちら側で計算に入れていた救援がないときには、成果とは言えなかった。ロシア人はダム郊外[現スビツェ]へ侵攻したのであろうか。バルニムの大隊は他の両市門を制圧したであろうか。バメは鋭い耳を澄まして左右を伺った。しかしこの疑問を肯うような

物音はしなかった。チェルニッチェフが不在ならば、この対等ではない戦いは負けざるを得ないと、それが次第に確実なものに思えて来た。

その間に眼前に展開された光景は、この悲しい予感をただ証するものであった。溝の所まで前進して来た軽歩兵達は岸辺に戻ると、フランス人兵士に特有の素早さで状況に適応し、あらゆる救助手段を探し出す術を心得ていた。司令を待たずに、この瞬間に間に合うものを取り寄せて、何人かが手を延ばして、二，三の岸辺にある平底船を土手から降ろして、氷上に運ぶ一方、他の者達はクロポプラの許に立てかけてある船の引き寄せ鉤を手にして、燃えている製材所に駆け付け、厚材、板材置き場に差し入れて、これらを引き出そうとした。これは上手く行った。これらの板の多くはまず燃えだしたばかりで、それらを素早く雪の中に引き入れて、炎を消し止め、それらを今や氷上の川の真ん中まで引きずって行き、同じ瞬間二，三の同様に運ばれて来た平底船も素早く器用に川の溝の中に投げ入れた。十五分もしないうちに平底船の橋が出来上がって、今やこの橋を最前線が進出して来た。一方岸辺ではますます大きな軽歩兵部隊と最後には密集した歩兵中隊が動き始めた。進メ。そしてその間桟橋から氷上にかけトランペットの音が響いた。

こちら側はすべての地の利を奪われて、今やどちらが強いか験されることになった。フランクフルト人達に向けられた最初の突撃は失敗に終わった。しかしこの再度の失敗にも少しもうろたえず、フランス人の縦隊は、ただ更に左手に移った。そこには幾つかの製材用小舟、泥炭用小舟が並んでいて、彼らに恰好の覆いを提供することになった。船体が丁度人の背丈ほどで、攻撃者達はほとんど弾に当たらないだけに、利点があった。

これらの船体越しに今や銃戦が展開された。その最終的結末は、こちら側にいる槍部隊は覆いがないばかりでなく、これ以上に劣悪なことに、敵の銃火に応ずることが出来ないまま耐えなければならないだけに、明白であった。ルッツェ部隊の勇気はここで厳しい試練に立たされた。結局動揺し出した。フィッツェヴィッツは、戦闘が次第に拡大するにつれ、今にも攻撃を受けかねない自分の側のドロッセルシュタインの中隊に援護の準備をしようとして、自らの責任で、市門の衛舎まで戻って、そこで無為に止まっているホーエン・フィーツの中隊を引き連れて来る決心をした。

バメも、自分の橋上の位置から、ルッツェの槍部隊の後退の動きに気付いて、憤激に駆られて、この部隊へ向かって行き、すでに遠くから呼びかけた。「止まれ、右側を攻撃しろ」。すると、彼らは実際に従って、槍を構え、再び半ば土手の所まで進んで行った。しかしまさに今度は左右から弾が飛んで来て、新たに動揺が始まったばかりでなく、動揺が強まり、バメはその瞬間、ルッツェ部隊が他の中隊と戦列を揃えることは不可能であろうと思った。それでも彼は馬を廻らせて、少なくとも退避しようとする者達を背後から前へ追いやろうと試みることにした。この時、彼はプロッツハーゲンのホルン奏者に出会った。彼は他の者達よりも更に不安げに覆いを求めていた。

「悪魔の名にかけて、吹け、ウーリのホルンを」と彼は叫んで、鯨骨で混乱しているホルン奏者を叩いた。このホルン奏者は、司令官の言葉に圧倒されて、自分が何をしているか分からず、古いルッツェのホルンをしっかり持って、吹き始めた。しかし心が不安の余り、攻撃の合図ではなく、退却の合図であった。この瞬間、（このプロッツハーゲンの男にとっては幸運であったが）、バメの赤い栗毛の雌馬は弾を受けて、馬は騎乗者もろとも崩れ落ちた。しかし目にも止まらぬ機敏さで、この老公は再び、シェットランド島のポニ

ーに乗った。ハンネ・ボーグンが用意していたものである。そして次の瞬間には再び鞍の上にしっかりと座っていた。

「さあて」と彼は言った、彼は快適にくつろいで、「将軍の馬」で最初から縛られていたすべての呪縛から自由になって、今ようやく彼は自由を取り戻していた。彼は鯨骨を鞍の下に押し込んで、軽騎兵のサーベルを抜いた。これは彼が「一七九五年」再び抜くことはしないと誓ったものであった。

彼は自らを取り戻したが、しかしもはや何も有していなかった。というのは全状況は、その間に、改善していなかったからである。軽歩兵達は、ますます右手へ展開して行き、川下の、解氷に至らない箇所で渡河を行い、器用にすべての小さな路地に侵入して、我らの全戦列に側面、背後から対峙して来た。こうしたことすべてより、更に悪いことに、こちら側の市民の宿営に止まっていた数少ないフランス人達が、これまでは静かに隠れていたのに、今や再び勇気を得て、その窓から銃を放って来た。この窓からの銃火でひどい目に遭ったのは主にドロッセルシュタインの中隊で、伯爵が思わず、「災難ノ仕上ゲカ」とすぐつぶやいて、向こうの「黄金の獅子亭」に駐留している歩兵部隊が一斉射撃を燃える橋の濛気、煙の中から始めたとき、動揺が全部隊に生じた。

実際、希望はなかった。それでも希望が今一度燃え上がった。丁度この極めて危ない瞬間に教会広場から行軍して近寄って来るホーエン・フィーツ中隊の確かな足どりが聞こえて来たのである。

「万歳、頑張れ」とバメは叫んだ、「スウェーデン太鼓だ」。そして一瞬また立ち止まることになった槍部隊の歓声の下、今や我らの友は最前列へ進んで行った。

ベルントは鞍の上から早速、まさに今、それまで勝利を収めていたフランクフルトの市民防衛隊の周りに巧みに敷かれた罠が閉められつつあると気付いた。そして極めて興奮して、自らの最前列の三個中隊に向かって叫んだ。「進め、..撃つな、銃剣だ」。そして拍車をかけて、自分に付いて来るか来ないのか分からないまま、馬を集団の中へ乗り入れた。そこは、教頭が古い騎士のサーベルで、左右に狂ったように防衛している箇所で、その姿がはっきり見えた。しかし勿論彼が教頭にまだ近付きもしないうちのことで、そのままであれば、彼はきっと馬から落とされ、自分の勇気の、その救助心の犠牲となっていたであろうが、すぐ彼の後をホーエン・フィーツの者達が激しく追って来て、とても密集しており、彼は極度の興奮、混乱の中にもかかわらず、それでも個々人がはっきりと分かるほどであった。彼は、クニーハーゼの額が血を流すのを、グレルが、激しい混同の中、帽子をなくして、フランス人の将校から斬り倒されるのを見た。それから一切が彼の目の前で判然としなくなった。銃声がし、フランス人、ドイツ人の呪いの言葉が発せられ、一分後に彼はまたこの集団から出ていた。そしてすべての自分達の努力は何の甲斐もなかったこと、オテグラーヴェンを救出することは出来なかったことを察せざるを得なかった。グレルの他更に誰が倒れ、捕らえられたか、まだこの時にははっきり見渡せなかった。レーヴィーンの姿が見えなかった。彼は押し込まれ、散らされていた者達の一人かもしれなかった。彼らの中からは、おいおい様々な者達がまた戻って来た。

こうしたこと一切の後では、出来るだけ速やかに、出来るだけ損失を少なくして、フランクフルトの罠からまた抜け出すことだけが問題となり得た。バメはまず戦闘の中止を命じ、それから退却を命じた。槍部隊は、その間、空になり、明かりのなくなった広場を進

んだ。それにホーエン・ツィエーザルが続き、それからリーツェン・ドルゲリーンが続いた。まだ大方の守備固めをしていたホーエン・フィーツ中隊が殿[しんがり]を務めた。この中隊は縦隊の先頭が古いレブース門に到達するまで整然としていた。ここで再び、銃を取ったフランス人衛兵司令の銃撃を受けて、最前列が動揺し、すぐその後混乱が生じ、これがやがて全軍に伝わり、この混乱は郊外を行軍する間、静まるよりも高まった。長い通りは、暗闇にあって、こちらには馬車、あちらには転覆した漁師の小舟があって、通行の邪魔となり、疲れた国民軍の多くが滑ったり、あちこちに見られる溝や穴に転げ落ちた。

「明かりが必要だ」とバメが叫んだ、「忌々しいゾットマイヤー達だ。家々に火を着けて、明かりの代わりとする奴等だ。明かりと私は言っている。さもないと家に放火するぞ」。

そう言って、彼は家々の玄関や鎧戸を鯨骨で叩いた。彼はまた鯨骨を頼りとしていた。これは効いた。個々の明かりが点された。人々は少なくともどこにいるのか分かった。かくて動揺する戦列が果てしなく見える郊外を進んで行き、聖ゲオルク救貧院を通り過ぎ、とうとう「最後の一文亭」で止まった。群れの数が点検された。レーヴィーンは相変わらず欠けていた。

先端居酒屋に残されていた大隊はすでに前もって自由意志で山の麓まで降りて来ていた。

ほっとしたが、唯一の慰めであった。

小さなランプが相変わらず格子のある壁龕で燃えていて、両尼僧は前と代わらず枯れた花輪を十字架に架けられた者に差し出していた。

バメはしばらく壁龕に見入っていたが、それから側に立っているヒルシュフェルトに向かって言った。「ここだ、ヒルシュフェルトよ、ここが我らの場所だ。ここ『最後の一文』堂。ここで計画が練られて、ここで終わった。私はその予感がしたのだ。最後の一文。それを得ているわけだ」。

第二十章
翌朝

夜の間、それに次第に薄明かりとなる朝方に退却軍は進んだ。縦隊は行軍の間、次第に小さくなっていた。すでに先端居酒屋でバルニム大隊は別れ、ライトヴァインでホーエン・ツィエーザル中隊とリーツェン・ドルゲリーン中隊が別れて、ただその残りが、その中にはルッツェの槍部隊も含まれていたが、ホーエン・フィーツに向かった。

七時になったとき、彼らはミークライの水車小屋のすぐ近くまで来ていた。重たい、灰黄色の霧が垂れ込めてきて、ただ最前列の者のみが屋敷を認めることが出来た。その上痛々しい静寂が見られた。空気が澱んで、物音が弱かった。あたかも忍んで行くかのようであった。バメはこれを感じて、これに終止符を打とうとした。「前進だ、ヒルシュフェルト」と彼は叫んだ、「イエニチェリの音楽全体で前進だ。絞首台から真っ直ぐ来たかのように、歌舞音曲なしではいかん。立派な心意気を見せようぞ。少なくともその振りはしなければ」。そして霧の中をホーエン・フィーツの太鼓の連打が聞こえた。ルッツェのホルンの個別の音色も混じっていた。すべては鈍く、陰鬱で、それを耳にする者は、誰にとっても応えた。ようやく彼らは止まった。「武器を外せ」。それは居酒屋と村長屋敷の間の

広場であった。家々には明かりが見られた。しかし通りには誰も姿を見せなかった。ベルントとバメは更に槍部隊の宿のことで短い打ち合わせをした。それから太鼓の合図があって、皆が宿営に移って行った。五分過ぎないうちに、ただ我らの友人のみになったが、黙していて、何をすべきか迷っていた。誰も、また領主の館の敷居を急いでまたぐことはなかった。誰もが、不幸の知らせはいつも早すぎると知っていたからである。ようやくベルントは、村長屋敷を示しながら、「私はクニーハーゼと一言話すことがある。将軍、私の娘に私のことをよろしく。あるいはトゥーバル、そなたでもいい」。

バメはヒルシュフェルトの腕を取った。トゥーバルが続いた。かくて彼らは村の路地を上がって、領主の館まで来た。イエーツェがガラスの戸口に立っていて、びっくりした視線で、主人の父子を問うているように見えた。「まだ村にいる」とバメは言って、半ば声を落として、付け加えた。「ヒルシュフェルト、行こう。私は家庭劇が好きでない。殊に今回はだめだ」。そう言って、彼は自分の部屋に通じている廊下に向かった。ただトゥーバルだけが残った。彼は何をすべきであったか。レナーテの許に行くべきであったろうか。彼は出来なかった。それで彼は古い、暖炉の側にある背もたれ椅子に身を投げた。イエーツェが夜を過ごした椅子であった。

ベルントは村長屋敷へ歩いて行かなかった。彼はただ一人っきりになりたかっただけであった。そして先に向かった者達の後を、ちょっと距離を置いて、付いて行った。彼は動悸がした、ゆっくりとしたもので、あたかも重い荷を背負っているかのようで、まず牧師館の側を過ぎ、それから百姓ピューシェルの大きな屋敷の側を通り過ぎた。ここの中にも悲しみがあった。一人息子が倒れたのであった。

次の屋敷はカリースの屋敷であった。その間にはイボタノキの垣根があった。彼がその側を行くと枯れた小枝の幾つかが彼の顔に触れた。彼は立ち止まって、考え込み、耳を澄まして、それから小枝を握りしめた。自らを支えるためで、倒れかねない気がしたからであった。

「すべて失敗した」と彼は言った、「私の意志だった。一切合切失敗だった。私に対する一つの印だろうか。そうだろう。至高のもののためには最愛のものをも賭けなければならないという印だろう。その他はない。これは平坦な世界ではない。すべては代償を払う。正しいことのために必要であるのであれば、喜んでその代償を払わなければならない」。

そのように彼は自らに語った。しかし気を取り直すべく、こう語りかける間にも、新たな、ますます深い心の不安に襲われた。そして自らの額を叩きながら、彼は今や叫んだ。「ベルントよ、誤魔化すな。自らに嘘を付くな。何だったのか。祖国や神聖なる復讐であったのか。それとも名誉心や虚栄心か。おまえに決定権があったのか。それとも輝きたかったのか。最初の者になりたかったのか。話すがいい。私は知りたい。真実を知りたい」。

彼はしばらく黙っていた。それから支えとしていた小枝を放した。そして言った。「それは分からない。バーカ。いつも過去がそうであったように、いつも現在がそうであるように、そんなものだったのであろう。少しばかりの善で、少しばかりの悪。哀れな人間の性だ。私は自分をもっと偉大で、もっと良いものだと思っていた。いやもっと良いと自惚れていた。そうなのだ。躓く前は高慢だった[旧約、箴言、16,18]。そして何という躓きか。私は罰せられた。今の時、仕返しを受けているのだ」。

こう言って彼は自分の家の中庭まで来た。広間に彼はトゥーバルを見つけた。彼は緊張

で疲れ果てて、イエーツェの背もたれ椅子で眠り込んでいた。彼の側にヘクトーがいた。この犬が自分の主人を見ると、飛びついて来た。体を押し付けた、しかしいつもの喜びの合図を表そうとしなかった。ベルントはこの賢い動物を撫でて、眠っているトゥーバルに静かな嫉妬の視線を送って、それから角の部屋に通ずるドアに向かった。彼は取っ手に手を置いて、今一度逡巡した。しかしやむを得なかった。ただ二人の娘が中にいた。レナーテが彼に飛び込んで来た。「私のひとえに愛しい父上」と彼女は叫んで、彼の首にすがった。それから彼から離れて、彼の良心のように尋ねた。「レーヴィーンはどこにいるの」。

老フィッツェヴィッツは、言葉を探そうと努めた。ようやく、自分自身の心の悲嘆全体が込められている調子で言った。「分からないのだ」。

「捕らえられたの。亡くなったの」。

「いや、死んではいない、まだいない」。

不安と震えにレナーテは襲われた。この瞬間、マリーがよろめいて、生気なく床に崩れ落ちるのを彼女は見た。ベルントはこの光景に茫然としたかのようであった。自分が圧迫されていたものすべての衝動の下、彼は目眩がしていた。ようやく放心から抜け出して、彼は呼び鈴を引いた。イエーツェがやって来た。すぐその後ショルレンマー叔母も来た。皆が走り回った。彼自身は、マリーを再び起こす仕事にかかった。これが上手く行くと、彼女はすぐ左のこめかみの額の傷から出血していることに気付いた。鋭く前に飛び出ている暖炉の縁で傷付いたものであった。ようやく彼女はまた失神から回復しながら、村長屋敷へ連れて行かれることを望んだ。これにはマリーネが同情よりは好奇心から早速その用意があると申し出た。下の村の方が領主の館でよりももっと多くのことが聞けると期待を抱けたからである。領主の館では皆が閉じ籠もっていて、黙っていた。バメでさえ、彼の隠棲は終わっていたけれども、多くは期待出来なかった。

ベルントとレナーテは再び二人っきりになると、ベルントが言った。「マリーはどうしたのか。もっと気丈夫と思っていたが」。

レナーテは黙っていた。

「彼はおまえの兄だ」とベルントは続けた、「おまえは耐えているのに」。

間が生じた。その間レナーテは視線を床に落としていた。ようやく彼女は言った。「彼女は彼を愛しているのです」。

老フィッツェヴィッツは、丁度目で見ていたすべてから察して、このような答えを期待していたかのように見えた。それ故平静に言った。「それで彼は　ー　そのことを知っているのか」。

「知りません」。

「それは確かか」。

「はい、全く確かです。彼女は打ち明けることはしなかった、言葉でも、視線でも。そうしたところで、レーヴィーンにその目はなかったでしょう。カティンカへの愛で盲目になっていたから」。

ベルントは部屋の中をあちこち歩いた。極めて矛盾した感情が彼の胸の中で戦っていた。一瞬、「強壮な男」の子供がフィッツェヴィッツの古い家に入ることになるのかという嘲りが彼の口許で痙攣した。しかしすべての嘲りはまた消え去った。差し迫った困窮がただ彼の心を支配した、一人息子についての困窮である。「どうして彼を救出するのか」。あ

たかも自分自身に対して誓約をするかのようであった。「神様、御身の足許にすべての誇りを捧げます。平伏します。耐えます。何でも、何でも。ただ彼を返し給え」。

レナーテは、ベルントがあちこち歩く間に、彼を目で追っていた。彼女は彼の心の裡で生じていることが良く分かった。それで言った。「父上、何でも話して下さい。彼はどうしたのです。何も隠さないで下さい」。

彼は彼女の手を取った。「何も隠していない。薄暗がりで、不確かなのが一切だ。おまえより詳しいわけではない。しかし一つのことだけは、十分に良く分かっている。何も安心出来ないということだ。何も。今この瞬間神様の陽光が彼の上に輝いているとしても。手に武器を持って捕らえられたら、軍事法廷に連れて行かれるだろう、すると、...」。

「どんな出来事だったの」とレナーテは彼を遮った、「彼のことを聞きたいの。何か勇気付けたいの。義務を果たしたとこ、勇気を示したとか、徒な慰めでしかなくても、聞きたいの」。

「その慰めは保証できるぞ。混み合った白兵戦だった。奴等はオテグラーヴェンを取り巻いていた。我々は彼を解放しようと思った。それで雑踏の中へ入って行ったのだ。我々がまた出て来たとき、レーヴィーンがいなかった。最初はまだ希望を抱いていた。多くの者がいなくなっていたが、次第にまた戻って来たのだ。しかしレーヴィーンは戻って来なかった。明らかに、捕まっている」。

「何をしたらいいの」。

「我々にただ残されているのは、神の慈悲に呼びかけることだ。すべての良き天使が彼の側に付いていますようにと。我々はそれ以上何もできない」。こう言って、彼は部屋を去って、自分の小室へ移って行った。

ここは冷たくて、無愛想であった。イエーツェは暖房することを忘れていた。その上机と椅子には塵があった。しかしベルントはそれを見ず、あるいは無関心に目をその上に滑らせていた。しかし彼はこのような時、我々の心を占めがちな矛盾の気持ちで、自分の感覚を別な、ほとんどもっとどうでも良いような事柄に向けていた。彼は鍵板に鍵が間違って掛かっているのを見た。そしてすべてを番号と順番ごとに整理し始めた。それから窓に向かって歩み寄って、数分間、相変わらずここの広い、折り畳み鎧戸に張り付けられているロシアの地図や計画を見つめた。「ミンスク、スモレンスク、ビアリストック」。そして彼はあちこち歩きながら、その名前を繰り返した。再三再四繰り返した。ようやく彼は自分の仕事机の上に掛かっている絵の前に立ち止まった。彼の目は涙で一杯になった。「愛しい人よ」と彼は思わず言った、「恵み深い神の裁きでこの時間がそなたに除かれたということは有り難いことだ。そなたと入れ替わりたい。安らぎが見られるのはただ死者達の許だけだ」。

彼はソファーに腰を下ろした。そして寒気を感じ始めた。するとそこには外套があった。イエーツェが掛ける代わりに、ただ背もたれに置いていたものであった。これが都合良かった。彼はそれを引き寄せて、身に纏った。「ミンスク、スモレンスク、...」。そして今や彼の意識が消えた。そして彼は眠った。

彼はしっかりと長く眠った。正午を過ぎていた。その時ドアのノックで目が覚めた。すでに三回目であった。「お入り」。イエーツェが、老リュッセルマンが来たと告げた。

「通しなさい、すぐに」。

老リュッセルマンが入って来た。いつものように強張って、垂直で、髪は後ろに梳って、腋に葦の杖を持って、長く、青い立て襟カラーの上着には裁判所廷吏の徽章があった。彼はドアの所に立ったまま、軍人的に挨拶した。彼の側にはイエーツェがいて、部屋を去るのを躊躇っていた。「いなさい」と老人の躊躇いを察知したベルントは言った、「おまえさんも、どんな具合か知りたいだろう。おまえさんも彼を愛しているし、...愛しない者がいようかな」。そう言って、彼はこっそりと秘かに額と目とを拭った。それからようやく裁判所老廷吏に向かって言った。「それで、リュッセルマン、何の知らせだい」。

「法律顧問官殿からの一通の手紙です」。

「良い知らせか」。

老人は黙っていた。はいと言えずに、いいえも唇から出そうになかった。

ベルントは手紙をあれこれ推し量って、開けるのを恐れていたが、今や意を決せざるを得なかった。彼は今一度老人を観察し、二度観察し、最後に、一体全体訃報を持って来ている者には見えないと気付いた。「手紙を読むことにしよう、　ー　しかし一人で、...ところでまだ一つリュッセルマン、そなたは御存じか、...」。

「はい、旦那様、一つだけ承知しています」。

「それで」。

「若旦那は生きています」。

老フィッツェヴィッツの両手から手紙が落ちた。彼の唇は震えた。彼は話すことが出来なかった。彼はまた気を取り直すと、イエーツェに向かって行き、彼の手を老従者の肩に置き、喜びの興奮で彼を揺さぶりながら言った。「聞いたかい、老公。彼は生きているのだ。それではリュッセルマンにもてなしだ。我々に良い知らせを持って来た。またいいものを差し上げろ。いや最良のものを差し上げろ。ここに鍵がある。下の左手、スペインのものがある所だ。一本ワインを彼にな。老イエーツェよ。おまえさんも一緒に飲みなさい。聞いたかい。彼は生きているのだ」。

イエーツェは彼の主人の手に接吻をして、震えながら、あちこち上品ぶった仕草をした。それから出て行った。リュッセルマンが彼の後に従った。ベルントは一人っきりになると、手紙を開封して、ざっと読んだ。老廷吏が述べた通りであった。彼は今や自ら小部屋を出て、角の部屋の女性達の許へ出掛けた。ただレナーテだけがいた。彼女は不安げに問うように彼の許へ急いで来た。「まだ望みがある。いいか、ショルレンマー叔母を呼んで来なさい」。叔母が来ると、ようやく彼らは丸いテーブルの周りに座って、ベルントが読んだ。

「いとも尊敬する貴台にして朋友、

私は悲しい義務で、貴方に戦闘で敵方の手に二人の囚人が陥ったことを述べなければなりません。貴方の御子息と教頭のオテグラーヴェンです。貴方の御子息は午前中のうちに警護の下、キュストリーンへ送られる予定で、教頭のオテグラーヴェンは今日の明け方、鞣し革の庭で射殺されました。この手短な、先のご報告の後では、この勇者の死について申し上げるのみでございます。一時間ほど眠っていたときでしょうか。フランス人の伝令で起こされまして、私にこう伝えたのです。囚人の一人、教頭のオテグラーヴェンが私との話しを望んでいる、と。私は素早く着替えました。若い兵士は私を古いニコライ協会へ案内しました。その出口にはフランス人の二名の歩哨が立っていました。中はすさまじい

ものでした。麦藁束の上に死者達が置かれていました。私が最初に見たのは聖職候補生グレルでした。

祭具室でオテグラーヴェンと会いました。彼は高い背もたれの古い内陣席に座っていました。ドアは開いたままで、彼は自由に説教壇を見るこいとが出来ました。彼はそれを示して言いました。『御覧下さい。トゥルガニー、ここで私は初めて説教しました。私の文は、＜平和を実現する人々は、幸いである＞[マタイ、5,9]でした。それがこれで終わりです。軍事法廷の判決が出ました。ここ一時間のうちに私は終わりです』。私は彼の手を取りました。救助とか恩赦は考えられなかったので、私は彼の遺言を尋ねました。そして別れがつらいか尋ねました。彼はそれを否認して、こう付け加えました。自分はかつて、人生は饗宴に似ていると読んだことがあります。誰もが最後までいたい、しかし饗宴の半ばで呼び出された者も、後でそんなに惜しいことをしたとは感じないと、と。これは本当にそうだと思われます。自分個人としては、ただ太鼓の連打と目隠しが早く終わって欲しいと思うだけです。フランス人とその射撃には信用が置けません、『彼らは何でも雑然としていますから。あのホーファー[Andreas　Hofer(1767-1810)]は虐殺されたようなものでしたから』と。彼はこの思いにしばらく浸っていました。それから、私が更に彼に問いかける前にこう言いました。『私には身よりはありません。私のささやかな収蔵品はザイデントプフに贈ります。その他の一切はこの教会の救貧院に贈ります。それではお別れです、トルガニー。私にとって大事なものとなったこの勇敢な町によろしく伝えて下さい。そして聞きたいと思う者には誰に対しても、私はイエス・キリストを信じて、そして同時に自分の生涯を良き事のために賭けたと固く信じて死んで行くと伝えて下さい。私は＜平和を実現する人々は、幸いである＞と説きました。しかし自らを守り、自分の人生と法のために戦うことも使命です』と。

それから私どもは別れました。永遠の別れです。

一時間後、私はジラール将軍の許に呼ばれました。真のフランス人で、人間的で、高貴な志操の持ち主です。『やむを得ないことだった』と彼は私を迎えました、『我々の背中で反抗が起きて、彼に率いられていた。彼は死ぬ他なかった。戦争の法と我々の安全はそれを欲している。共犯者達のことは問わない。貴方の民衆は今や我々に反抗している。我々はどう切り抜けるか見守って行かなければならない』と。それから彼は明らかに感動して私と別れました。こう言い添えた後です。『副校長ハ』と彼はそう教頭のことを呼びました、『古武士ノヨウニ』亡くなったと。

我々は彼をすぐ教会の側に埋葬しました。古い教会墓地の格子をした地所がまだ残っている所です。彼の側にハンゼン・グレルでした。

御子息のキュストリーンへの移送は彼の恩赦あるいはひょっとしたら解放への第一歩であって欲しいと衷心より願って擱筆致します。

トゥルガニー」。

ベルントが手紙を手から置いたときの最初の感情は深い感謝の思いであった。

レナーテは父親を抱擁し、接吻した。ショルレンマー叔母は、決して泣かず、そのことを誇りにして来たが、萎びた組み合わせた両手に涙を落とした。いつもの格言さえも出なかった。

レーヴィーンはまだ生きていて、従って希望があった。しかしそれでも本当の喜びには

ならなかった。これまではひょっとしたら彼とは永訣したかもしれないという恐れに皆が支配されていたとすれば、今では、この瞬間にも永訣するかもしれないという恐れを抱いていた。

かくて三十分が過ぎた。レナーテは部屋を去って、村長屋敷のマリーの許へ、ショルレンマー叔母は、外で家事を見守った。何が起ころうとも、竈の火は燃え、日常の生活の要求と権利を思い出させるからである。ベルント自身は一人っきりでいた。彼は沈思し、計画し、再び破棄した。置き時計が丁度二時を打ったとき、イエーツェが現れて、食事準備が整ったと知らせた。

家に訪問客が来て以来、いつものように広間で食事となった。バメはフィッツェヴィッツに向かって行き、「良い知らせ」を祝した。しかし冷たく響いた。誰もが、その件そのものではなく、その件の意味に対する疑念を聞き取ることが出来た。人々は席に着いた。ベルントはマリーのこと、クニーハーゼのこと、リュッセルマンのことを尋ねた。しかし直に彼は食事を止めた。食事では、努めていたけれども、わずかしか語られなかった。少なくとも計画を約束しないことには、すべては怠慢なことと彼には思われていた。彼は仕事の小部屋に戻って、十五分後に殿方に対し、彼の所まで来て欲しいと願った。

しかし小部屋ではより親しげな気分になった。火が燃えていた。背もたれにあった古い外套は、今や梁に掛けられていた。まず将軍とヒルシュフェルトが現れた。次いでトゥーバルが来た。三人席に着くことは、部屋の狭さ上容易ではなかったろうが、バメが温かい所を好んで、すぐ暖炉の側へ移った。ここで彼は足を組んで、煙草を吸い、人間というよりは偶像神に似ていた。

イエーツェが来て、コーヒーを渡した。コーヒーを誰もが多かれ少なかれ欲していた。実際カップが空になると、よりましな気分が席を占め始めた。状況は実際そんなに希望のないものであろうか。違う、とベルントは言葉を発して、説明した。フランス人は恐れており、次の予定の見せしめに多分臆しており、これに自分は希望の最良の部分を見ている、と。「ジラールであろうが、フルニエであろうが」と彼は結論付けた、「違いはない。彼らは自分達の日々がこちらでは終わりつつあると承知しており、すでに張っている弦を更に張りすぎることには慎重になることであろう」。

バメはこのような慰めを一切認めようとしなかった。ヒルシュフェルトは直接には反対しなかったが、しかし自立した行動にのみすべての現実的救済を見ていた。括り罠が首にかかっている間は、安心とはとうてい言えないと彼は繰り返した。一つの偶然、一つの気まぐれで、罠は閉じてしまうだろう、と。「トゥルガニーの手紙が信頼出来るものであれば（信頼出来ると思いますが)、キュストリーンの殿方達が集まるのは明日正午か、午後でしょう。賽子が黒と出ても、残念ながらそれは疑い得ないが、明後日の早朝までは案ずる必要はありません。一斉射殺は早朝か朝の仕事なのだから。これは昔からの慣習です。従って我々の側でなすべきことは、今晩に行うか、翌晩になります。今晩は出来ない、我々が味方の協力をその為に必要とするのであれば。最良の者達でもこのような敗北は応えています。従って明日です。明日の晩」。

ベルントとバメは同意した。そして策略を用いようとするのであれば、ホッペンマリーケンの助けを借りるべきだという点でも一致した。ベルントがよく承知しているように、この女性は、キュストリーンの駐屯軍とはとても仲良く暮らしている。誰に対してもとに

かく購入や売春斡旋の仕事をしているのだ。ヴェストファーレン人であろうがフランス人であろうが、その際関係ない。いやフランス人はとりわけ彼女を贔屓にしていて、そのグロテスクで滑稽な姿故に、あるいはひょっとしたら頭が弱いと推測されているせいで、どこへでも構いなく入場できる。ホッペンマリーケン自身は、虚栄心が強くて、冒険好きであるので、自分に頼まれる仕事を引き受けることに躊躇するであろうか、このことは考えられない。勿論本当に彼女が全面的に信頼できるか、別の問いは残る。しかしこのことは今考えないことにしよう。ベルントは森耕地[フォルストアッカー]に人を送って、彼女を連れて来させた。しかし彼女はいつもの日々の行軍からまだ戻っていなかった。かくて彼女との話し合いは翌朝にまで延ばすことに決定された。バメはその際同席する意向であった。この後皆が別れて、自分達の部屋へ戻った。更になすべき事は、クニーハーゼの方が他の誰を相手にするよりもより良く片付けられるのであった。クニーハーゼもやって来て、すべて必要なことを用意し、整えた。そして暗くなった時、また村長屋敷へ戻った。

彼がまた家に戻ったとき、最初に行ったのはマリーの許であった。彼女の許で、彼はその日の大部分を、自らの傷にはほとんど注意を払わず、過ごしたのであった。

彼は今もまた彼女のベッドの側に腰かけて、耳を傾け、尋ねた。彼女はこの衷心からの共感の込められた質問を聞くと、静かな自責の念に駆られた。つまり先の時間ずっとただレーヴィーンのことを思って、ただの一度も彼のことを考えていなかった、今かくも愛情をもって彼女に語りかけ、最初の日からずっと自分に対して善意と思いやりを抱いてきていた父のことを考えていなかった、と。彼女は自分の利己心を責めて、苦い涙を流した。しかし彼は一切問題にしようとせず、ただ何度も繰り返した。「そんなこと、いいよ、それが若さだ」と。すると彼女は落ち着いて、また話しを聞いた。彼女がトゥルガニーの手紙のことを聞いたとき、何と彼女の心はより高く鼓動したことか。オテグラーヴェンは亡くなっていて、レーヴィーンは生きていた。しかしこれがすべてを意味していた。たった今自分に咎めていた同じ利己心がまた生じていた。しかしほとんどこのことに気付いていなかった。

彼女の額には氷が置かれた。傷口からの出血は良い徴候と見なされた。彼女の状態は悪くなかった。バメやルッツェや路上の戦いの間の彼らの態度が言及されると、思わず彼女は微笑した。夕方頃にようやく熱が始まって来た。彼女は今やこっそりと思わず知らず、言い始めた。「オテグラーヴェンがいさえすれば、...私のために、...助けてくれるでしょうに」。それから老フュルグラーフ[将軍]の名前を呼び、それからキュストリーンの老城代の名を呼んだ。彼はキュムリッツ家の従兄弟で、この城代に今や彼女は空想の中で切に頼んでいた。「若様」を彼の城にかくまって欲しい、「大きな広間の中ほどに、誰も探そうとはしないだろうから」。

かくて時間が過ぎて行った。イメージが円を描いて行った。しかし真夜中過ぎ一時間すると熱は治まった。彼女は眠り込んだ。

第二十一章
「それはしなくちゃならねえがね」

まだ翌朝の七時になっていないとき、ホッペンマリーケンが彼女の通常の服装で、村の

路地を上がって来た。領主の館の正面で、彼女は右手に向かって折れて、長くて、暗い窓の列を観察した。ただ二階の二つの角の窓にのみ明かりが見られた。「用意できているがね」と彼女は言って、家のガラスの戸口に向かって行った。

彼女は正しく見ていた。ベルントはすでに一時間前から起きていて、執務室兼審理室に座っていた。彼と一緒にバメがいた。バメは再び、強く暖房されたほとんど白熱している暖炉の間近に腰かけようとまず試みた後、結局窓際へ退避せざるを得なかった。この窓から今や彼はホッペンマリーケンが中庭を越えて来るのを見た。彼の服装は森耕地[フォルストアッカー]の老魔女に劣らず目立つもので、ベルントでさえ一瞬驚いたものであった。ビロードのぴったりとした黒いナイトガウンで、赤いウールのマフラー、それに黄色のフェルトの靴であった。それに短い朝用のパイプを持っていた。

さてノックの音がした。

「お入り」。

老婆が入って来た。しかし、　一　背負籠のままドアの柱に寄りかかって、彼女の「旦那様」を敬して遠ざかっていたが、恐れからというよりは習慣からで、彼女は人々が彼女を必要としていることに多分気付いていた。

「今日は、旦那様」と彼女は低く粗い声で言い、ベルントが彼女の挨拶に答えると、同じ親密さで窓の隅の方へも頷いた。「今日は将軍」。

「私のことを知っているのかい」とバメは尋ねて、心地良さそうに火口から二，三の小煙を吹き出した。

「あらま、我らの小さな将軍を知らないはずがあんめえ。下の観兵式のときに全部見たがね。ルッツェとその槍部隊。火事ホルンを持った太ったプロッツハーゲン男。良かったねえ。それにドロッセルシュタインの赤い栗毛の雌馬、高い脚の。いや、将軍、あれは全然似合ってなかった」。

「その通りだ、ホッペンマリーケン。おまえさんは良い目をしている。次回はおまえさんに尋ねよう」。

彼女は笑った。

「そうしなせえ。小さな将軍さん。いつもあたしが言っているように、阿呆が一番賢いんだがね」。

ベルントは会話を中断させる時が来たと思った。このような親密さがまさに丁度必要な時であった。「マリーケン、背負籠をそこに置いて、このテーブルの所に来なさい。こちらだ、もっとよくおまえさんが見えるように」。

彼女は一瞬安心の姿勢を失った。色々不明瞭な言葉をつぶやきながら、言われたようにした。

「ホッペンマリーケン、知っているだろうが、...」。

「知ってます」。

「それでは奴等の裁判は短いということも承知しておろう。教頭は鞣し革の庭で射殺された。レーヴィーンをまだ生かしておるのは奇蹟だ。しかしいつまでか。奴等はレーヴィーンをキュストリーンへ連れて行った。我らは彼を釈放しなければならない」。

「それはしなくちゃならねえがね。しなくちゃならねえがね」。

「助けて欲しいのだが」。

「しますがね」。

「よろしい、それではこの巻き玉を仕舞って、これをこっそり彼に届けてくれ。彼はブランデンブルク稜堡にいる。メンケが昨夕知らせてくれた。慌てずに、余裕をもってな、正午になっても構わん。しかし巧妙にな。その気になれば出来るように巧妙にな。生死がかかっていることを忘れないでくれ」。

「分かってます、分かってます」。

老フィッツェヴィッツはしばらく黙っていた。その間にホッペンマリーケンは巻き玉を背負籠に入れた。それから彼は続けた。「それではもう一度こちらに来なさい。私がおまえさんに言っておくことを良く注意して聞きなさい」。

ホッペンマリーケンは従った。

「ここ、おまえさんが今立っている所、ここでレーヴィーンがおまえさんのために頼んだのだ。彼がおまえさんのために頼んだから、ただその為におまえさんを逃がしたのだ。さもないと今頃は水とパンの牢獄だぞ。それは美味しくないだろう。良いものを食べたいしな」。

「そうだがね」。

「黙っていなさい。聞きなさい。気を付けろと言っているのだ。おまえさんのことは大目に見て、辛抱してきた。不当なほどに、目を瞑ってきた。しかしまた二股かけたら、お陀仏だぞ。小人よ、踏み潰してやるからな、この両手で絞め殺すぞ」。

彼はこの脅迫を、興奮し切迫して語っていた。しかしホッペンマリーケンに対する効き目はほんのわずかなものであった。彼女は単に頭を振って、ちなみに皆目脅された気はせずに、ただこう繰り返した。「恵み深い、若旦那のことだ」。そして鉤状杖で敬礼した、自分に任せておけという印であった。これは証拠の印に誓いの指を挙げることよりももっと良いことで、もっと意味のあるものであったろう。それから彼女はまた背負籠を取って、彼女に更に与えられた助言、「出来ればヴェストファーレン人を頼れ」を、「うんにゃ、小さなフランス人の所に行く、奴等は見ていないがね」と述べて断り、一瞬にして部屋を去った。

彼女が二本の車寄せの支柱の間に来たとき、今一度軍隊的速やかさで振り返って、角の部屋の方へ挨拶した。老将軍が彼女を見送っているとはっきりと自覚していた。この将軍は果たして笑い、彼の小さな火口を左手に取って、右手で彼女に投げキスをした。

「立派な見本だな、フィッツェヴィッツ」と彼は言った、「このような者がグロース・クヴィルルスドルフでも欲しいものだ」。

ベルントは黙っていて、頭を手に載せていた。しばらくしてから彼は言った。

「バメ、貴方は人間通だ。このゲームをこのカードに賭けることは冒険ではなかったろうか。彼女は信頼できるか」。

「勿論」。

「何故だい。彼女の老魔女の心がレーヴィーンを好いているからか」。

「ひょっとしたら、そのせいもあろう。心は何か拠り所がなければならない。小さい心ほど、しっかりとそれに愛着を示すものだ。そのためには命をかける。良いものであれ悪いものであれ、関係ない」。

ベルントは頷いた。

「しかし」とバメは続けた、「私が彼女を信頼しているのはそのせいではない。私が信頼しているのは、彼女が賢いからだ。彼女が今何を考えているか分かるかい」。

「何だろう」。

「フランス人は永遠にレブースの国にいるわけではないだろう。しかしフィッツェヴィッツ家はまだ長く続く」。

「それで」。

「同盟というものは持続的強国と結ぶものだ。たとえホッペンマリーケンという名前の者でもな」。

第二十二章
白頭台にて

レーヴィーンの虜囚について情報をもたらす手紙がフランクフルトからホーエン・フィーツへ向かっている同じ時間に、レーヴィーン自身はフランクフルトからキュストリーンへの道を行っていた。川幅だけが彼らを隔てていた。老リュッセルマンはもっと鋭く見つめていたら、向こうのノイ・マルク地方の岸辺の通りを進んで行くフランス人の護衛隊を認めることが出来たであろう。それは、古参の、スペイン戦に従軍した軍曹の命令で配置された軽歩兵、精兵であった。このような用心には十分な理由があった。というのはロシア人は、その前日には立派な意志を欠如させて、いずれにせよ約束を守らなかったのであるが、それでも彼らは近くにいて、ノイ・マルク地方を群れて動き、小さな敵の分遣隊を掠うことに、実際使命を見いだしていたからである。これは犠牲が少なくて済み、評判となるものであった。こうした状況を警備の者達も十分に意識して、最悪の場合口利きが貰えるよう、虜囚に対する注意を怠らなかった。いつどの瞬間にも彼ら自身虜囚となるかもしれないという恐れを抱かざるを得なかったからである。

しかしその恐れは生じなかった。レーヴィーンが時々探したコサック兵は道を過ることがなかった。そして正午にキルヒ・ゲーリッツの増築された家々を過ぎ、やがてその後火薬製造所を過ぎた後で、丁度二時に要塞に着いて、虜囚は古いキュストリーンの城の中庭で引き渡された。フルニエ・ダルブ将軍は二，三の質問をした。極めて冷静なものであったが、関心が窺われ、レーヴィーンの痩身を観察して、「白頭台」へ連れて行くよう命令した。

レーヴィーンはこの名前を聞いて、驚いた。

「白頭台」はブランデンブルク稜堡にある円塔で、本来はそのようなものの背丈大の土台のみであって、これについてはカッテ[Hermann von Katte（1704-1730）若き大王の逃亡と関連]処刑の二，三日前カッテのための断頭台として築かれたという伝説があった。こうした一切は勿論、何人かのレブースの専門歴史家によって、その中には我らのザイデントプフもいたが、確かなものではないとして立証されていた。しかし確かであれ無かろうと、この伝説に従ってまさにこの地と結び付いているイメージを思うだけで、軍事法廷に立たされている者の考えをとても陰鬱な方向に導くに十分であった。

そしてこの「白頭台」に今やレーヴィーンは本当に連れて行かれた。一人の一等兵と二人の男が彼を真ん中に置いて連行し、我らの虜囚は今日の残りとひょっとしたら夜も地下

室のような監獄で過ごさなければならないのかと恐れていたとき、近付いて見ると、塔の背丈大の土台の上に更に無愛想には見えない、木骨壁で出来た塔の小屋が立っているのを見て安堵することになった。この小屋に外部から木製の階段がかかっていて、八から十の半ば壊れた段があった。

そしてこれらの階段の前に今や分遣隊は止まった。小さな鉄の金具の付いた上のドアの鍵がなかった。結局城代が城から呼び寄せられて、城代が鍵を開けて、虜囚は中に入れさせられた。この老公は、一等兵がいる間は、寡黙で十分不機嫌であった。しかしレーヴィーンは、人間に通じているとは言えなかったけれども、それでも容易に、この寡黙で不機嫌な人物は単に表面そう装っているにすぎないと分かった。彼は続いて、二人っきりのとき、老公からもっと優しさを期待して良いと気付いた。差し当たり老公はまた閉ざし、余計なことに更に閂をして、それから去って行き看守に従った。

かくて我らの囚人はその塔の部屋で一人っきりになった。

しかしこれは部屋と言えたか。老フーレン夫人のマンサード式屋階は彼を贅沢に慣れさせたとは言えなかったが、それでもこの「白頭台」の二階の部屋と比べたら、宮殿の部屋と言えた。五歩の平方で、彼が身を起こすとフェルトの帽子が天井に触れた。「生きながらの埋葬だ」と彼は言って、窓辺に近寄って、少なくとも新鮮な空気を入れようとした。彼がまず開けた右翼の窓は、ただ上のフックに掛かっているのみで、吹いて来る風のせいですぐにまた閉めなければならなかった。しかし左翼の窓はもっとましで、彼は留め金の棒をかけて、美しい冬の光景となっている川や地方を見上げて行った。この光景の一切を彼は知っていて、すべてが彼には馴染みであった。左手には岸辺に柳の茂みのある平地があって、これはキルヒ・ゲーリッツ人がその戦闘を行ったクランペであった。その奥には松の矮林が分かった。窪道があって、そこを彼はファウルシュティッヒ博士の許からトゥーバルと一緒に半ば黄昏時に通過したのであった。そして右手はブルフ[湿地]に通じているのである。そこでは、ポプラの道で結ばれて、ゴルガストとノイ・マンシュノーの屋敷が広がっていて、その中にあたかもホーエン・フィーツの塔とその上の十字架が、午後の陽光で煌めいて、見えるかのように思われた。長いこと彼はその像を見つめていた。それからまた窓の開き戸を引き寄せて、狭い部屋を計った。

五歩であった。横はもっと短かった。ここにはベッド架があったからである。このベッド架には四，五枚の板があって、足許には一脚の蓙付き椅子があり、深くへこんでいて、個々の、下の方へ垂れた茎があった。他は何もなかった。ただ壁に、二，三の引っ掻いて書かれたハートがあった。その下に四，五の名前があった。フランス人の名前であった。従って、新しいもので、カッテの時代からの古いものではなかった。レーヴィーンは慰めを必要としていて、このような取るに足りない事情も彼の圧迫された心には一つの慰めであった。

一時間過ぎたろうか、また彼は外で足音を耳にして、すぐその後、老公が入って来るのを見た。彼はその間に囚人の名前を聞き出して、この「貴公子」の願いを聞きにやって来たのであった。将軍は何でも許されましたぞ、と彼は誓った。将軍が許されなかったことでも、二人の同郷の者なら話し合えば宜しいだろうがな。「そうだろう、貴公子君。そうだね、火から直接取りだして来たように、熱々というわけには行かないけどな。貴公子君。でも最後の慰めはいつも同じだ。『人間は二度も死ぬことはない、一度で済むだ』」。

「そうです」とレーヴィーンは言った、「でもいつですか」。

「そんなに長くはない。貴公子君。貴方の砂はまだ流れ去っていない。貴方の場合、まず説教から始まるな。それから砂が尽きる。その前は終わりではない」。

レーヴィーンは老公の慰めの言葉に感謝した。そして夜食には、何であれ、スープが一番いいと頼んだ。しかし七時前はいけません。もし本を持っているなら、自分に送って欲しい。実際に、日中の間座って、読書で時間を潰すことにしましょう、と。

老公はすべてを約束した。そしてほどなくして、　一　小さな城の塔の時計が丁度四時を打って、　一　外では声が高くなって、木製サンダルのような物音が階段で聞こえて来た。すぐその後また小さなドアが開いて、肩幅の広い、見たところ巨大な猟歩兵が、　一　束の背後から見えて来た。前屈みになって、幅広の結ばれたその束を狭すぎるドアの入口から押し入れようとしていた。一人の老いた女性が、顔に発疹があって、更に外の階段に立っていて、後から押していた。ようやく束は中に入り、今や猟歩兵が正面に来て、囚人に半ば上機嫌の、半ば嘲笑的調子で、「今日ハ、戦友」と挨拶し、同じ調子で付け加えた、「ココニ、寝具ガアル」と。

レーヴィーンは挨拶に答えて、今や垂直に彼の前に立っている猟歩兵を観察した、全姿勢、身支度から南フランスの伊達男の典型的タイプと見なすことができた。彼の乗馬用上着は広げられたままで、両足は大きな、藁の裏地の木靴を履いていた。明らかに気の良い自慢屋のガスコーニュ人で、何とか非番となるために、城の雑役を引き受けていた者であった。

「コニャック夫人ヨ」と彼は今度はまだ相変わらず階段に立っている老女に向かって言った、「良カッタラ、入って来なさい、マダム、解いて下さい」。レーヴィーンは微笑した。「ソウデショウ、旦那、解いて下さい。コレハ立派ナドイツ語デス。私は上手にドイツ語学びましたね。私ハ、ソウデショウ、マダム」。

老女は頷いた。

「ホラ、御覧ナサイ、旦那。ショドー[ワイン菓子]侯爵夫人ハ頷キマシタヨ」。

この会話の間に実際束は解かれて、猟歩兵とその付き添いの女性は今や一緒に苦労して、囚人の寝床を作り始めた。そして今や出来上がった麦藁袋と海草アマモの枕、それにカワウソ革の襟の付いた、色褪せた外套で、ベッドや毛布は城全体でもはや見いだせなかったので、老城代が自ら衣装棚から提供したものであった。ちなみにこの大きな束の中には三冊の本が見つかった。この本が今や猟歩兵の側から敬意を込めたお辞儀と共に、「城代殿カラ宜シクトノコト」と言われながら渡された。「ソシテ七時ニ夕食デス」。その後でまた外の階段で木靴がガタガタ言い、老夫人との分かりづらい会話が続いて、その会話は次第に、ブランデンブルク稜堡に吹き付ける風の中で消えて行った。

レーヴィーンは窓際に椅子を持って行って、城代が彼に送った三冊の本を覗いて見た。二冊の黒い装丁の、レモン色の小口の本は、推定通り、聖書と賛美歌であった。しかし三冊目は、それは小型本で、厚紙表紙の、大理石紋理の紙で、角が擦り切れていた。読むと、『フォン・カッテ少尉の断頭についてのフォン・シャッカ少佐の報告。一七三〇年十一月六日』であった。これは老公のひどい選択であった。我々の囚人は悪寒に襲われた。彼はその上に聖書を置いて、見えないようにした。

長い、長い時間であった。

彼はまたあちこち歩き出して、数えた。「まずは千歩だ」。ようやく七時になった。今一度あのガスコーニュ人と会うのは不快に思われた。しかし彼の代わりに老城代本人が現れて、夕食を持って来た。パンの外皮と野バラの実からできたスープであった。

「貴公子君、ほら温かいものだよ。パンと、これはフランス人が焼いたもの、それに野バラの実からのものだ。野バラの実は、ハンス辺境伯の自家用菜園から採って来たのだ。私のレーネ、一番末の娘だが、自ら摘んだものだ。今年は本当に良い野バラの実が採れた。いいかい、貴公子君、フランス人にとっても当たり年でな。しかし彼らは芒を採った」。そう言って老公はスープの鍋と小さな蠟燭の端切れが燃えている馬小屋のランプを置いて、すでに半ばドアの所に立ちながら言った。「それではさようなら。貴公子君。なるようにしかならない。すぐに明かりは消しなさい。明かりは許されないのだ。さもないと私が叱られる。すぐ消すのだよ」。

レーヴィーンは腹が減っていた。薬味のある匂いは彼の味覚に合っていた。しかし彼は食べられなかった。かくも苦い味がしたのは鍋のスプーンのせいではなかった。彼の舌に障ったのは死の恐怖であった。彼は鍋を手から置いて、明かりを消し、ベッドに身を投げた。寝ていて、時計の圧迫を感じて、それを取り出して、それを側の蓙付き椅子の上に置いた。それからまず外套に身をくるんで、襟を顎の下にまで引っ張って、枕から星々を見た。星々は小さな窓ガラス越しに彼の許に煌めいていた。「そして星空を歩いて行ける」と彼の魂の中で次第に小声に、次第に遠ざかって響き、その間に彼は眠り込んだ。

彼はしっかりと、何時間も眠った。過度に疲れていた肉体はその権利を要求した。しかし明け方頃彼は夢を見始めた。彼は橇の出発を見、鐘の音を耳にした。そして橇がそれぞれ止まると、古い円形アーチの玄関の前であって、その中を通って、冬らしく外套やマフを着用したカップルが高いアーチの身廊へ入って行った。支柱には長いリボンの付いた干涸らびた花輪が掛かっていて、リボンは風が吹くと揺れていた。そしてこれらの支柱の間を皆が歩んで教会の祭壇へ向かって行った。その中には美しいマトゥーシュカ夫人もいた。人々が祭壇に近付くと、オルガンの演奏が始まった。しかし同じ瞬間にこの絵は変化し、灰色の石の支柱は白く塗られた木の柱となって、その周りには緑色の花飾りが巻き付けられていた。女性達ももはや同じ人物ではなく、他の女性達となって、夏の装いで、髪に花を挿していた。皆が先を行く一組のカップルに従っていた。誰のカップルか分からなかった。彼は後を付いていたからで、そして彼が祭壇に、つまり一つの墓石のある祭壇に達したとき、その場で結ばれるのは自分自身であることが分かった。しかし誰と結ばれるのか分からなかった。花嫁は幾重にも白いヴェールで覆われていたからである。そして白いヴェールから黄金の星々が輝いていた。

しかしオルガンが止み、聖職者が「はい」と誓いますかと尋ねたとき、花嫁はヴェールを後ろに返した。そして彼の口が発しようとしていた「はい」の代わりに、「マリー」の言葉が漏れた。

彼はその言葉を声にして発していて、あたかも消えて行く幽霊を掴もうとするかのように、飛び上がった。彼はどこにいるのか。彼は星々の空を見て、自身の息で湿って冷たくなった外套の襟を感じた。次第に恐ろしい現実全体が彼の前に広がって来た。彼は自分を連れに来る衛兵一行の足音が聞こえないか耳を澄ました。彼は早朝の彼者誰時がこのような情景の時であると承知していたからである。

しかし何時か。彼は時計に手を延ばして、時打ちさせた。五時であった。これはまだ早すぎる。六時前にはないだろう。従ってまだ一時間の命はある。しかしまた一時間後には死だ。そして彼は分刻が過ぎて行くのを願った、確証を得るために。最後のこと、恐ろしいことは、この苦悩に比べれば、それほど恐ろしいことではなかった。彼は飛び上がって、窓を開けて、夜風を熱い思いで吸い込んだ。しかし甲斐はなかった。彼は一切然るべきにしかならないと分かった。そしてもはや神に自分の命乞いはせず、それは去っていた、最後の時の力を願った。「この命からみっともない去り方をしないことだ」。それからまたホーエン・フィーツの方を、一片の大地の方を見やった。そこがとりわけ彼には大事であった。そして手で合図して挨拶した。「御機嫌よう、愛しい皆の方」。

この瞬間東の天を一条の光線が走って、再び消えた。それは朝自身が黄金の馬車で駆け上がる長い前に、この朝が送る最初の使者であった。「私自身に対する一つの合図であろうか」。

そして彼は一層落ち着いた。

六時となった。衛兵一行の足音は外では皆目聞こえなかった。かくて少なくとも今日までは生きているであろうという確信が強まった。そして一日あれば十分である。今日この一日が何とすべてをもたらすことであろうか。彼はまた詩節を思わず口にした。すでにかつて極めて悲しい気分の時に彼を支えてくれたものであった。

待機も、希望も、空しくはない、
時の拍子を数えることだ。
変遷が人生の定め、
見よ、別な一日がやって来る。

いや、待機も、希望も空しくはない。まだ一日がある。丸一日がある。そしてこの一日が彼の前に人生そのもののようにあった。そして彼はこの一日が出来事の世界をもたらすに違いないかのように、この一日に向かい合った。

しかしまずこの一日が遣わしたのは、ただまたあの猟歩兵で、彼のいずれにせよ兵士的でない服装は、左腕に持っている蓋付き籠で更に高められていた。「今日ハ。フォン・フィッツェヴィッツノ旦那。言イ方ガ間違ッテイタラ、御免ヨ。貴方の名前ハ難シイヤ」。

レーヴィーンは認めた。

「ココニ、貴方ノコーヒーガアルヨ。ゴモットモニ立派ナコーヒーダ。ツマリ、キクニガナノ粉ダ。問題ナイヨ。ドイツノコーヒーナノダ」。

あれこれ言いながら、(彼はお喋り屋の一人であったから)、この猟歩兵は蓋付き籠を開けて、褐色のブンツラウのカップを窓枠に置いて、忘れずに、黒パンと二，三の焼き立ての巻きパンを添えた。それから籠の代わりに、前の晩置いてあった大きなランプを腕に取って、半ば嘲笑的に「貴方ノ従者」と言って辞去した。

レーヴィーンは、再び一人っきりになって喜んだ。そして椅子を窓辺に寄せて、朝食を摂った。何とか味がした。そして終えると、背もたれに寄りかかって、深呼吸しながら、新たに活気付いて、燃え上がる太陽球を見た。太陽は丁度彼の前に横たわっているゲーリッツの教会の塔の先端を黄金色に染めていた。

「それでは読書しよう」。かくて彼は聖書を手に取って開けた。

「預言者ダニエル」。微笑が彼の顔を過った。そして彼は思わず言った。「駄目だ。ダニエルではない。私の状況にある者は誰でも、獅子の穴にいると思うだろう」。そして彼は更にマカバイ記までめくり、それからまた戻って、士師記まで来た。「これが素敵な箇所だ。新鮮で、勇気が出る。元気を貰おう」。

彼は読み始めた。

しかし読書がまだ先まで進まないうちに、彼はドシンドシンという足音と咳払いの声を聞いて、起き上がり、ホッペンマリーケンを見つけた。彼女はブランデンブルク稜堡の縁をやって来た。彼女は今や見上げて、左手で杖を持ち上げ、同じ瞬間胸掛けから素早く取りだした巻き玉を彼の窓の中へ投げた。巻き玉と一緒に、二，三のガラスの破片が彼の前に落ちた。彼が驚きから覚めないうちに、老女はすでにまた去っていた。彼は彼女の後ろ姿を追って、今や彼女が更に離れて立っている歩哨と会話を始めたのに気付いた。勿論身振りの言葉であった。彼女は彼に自分の瓶を取りだして勧め、他の者達が次の哨舎から近寄って来て、気まぐれや甲高い笑い声が生じて、結局彼女は杖で敬礼し、城の丘の周りを回って、また町へ歩んで行った。

ようやく今レーヴィーンは巻き玉を取り上げた。それは大きくなかったが、重たくて、従って中身があるに違いなかった。彼はまずベッド架の中にある板きれの一つから破片を取りだして隙間を作り、ただ編物針大の、しかし丈夫な麻の紐を用心して解き始めた。明らかに、不意を襲われたとき、古い玉と新しい玉の双方を素早く隠すことができるようにするためであった。そして今や出来上がった。そして縫い合わされた平たい石を丁寧に両手に持った。その丈夫な革の小穴に一方の麻の先端が固定されていた。しかしこの革の小穴には畳まれた紙片が差し込まれていた。今や彼はこの紙片を広げて読んだ。「十二時が打たれたら（交代は丁度一時だ）この巻き玉を稜堡から投げろ。紐をしっかり持って、落下させる。紐がぴんと張ったら、紐を引き上げろ。それから降りて来い。最悪の場合は飛べ。下は雪が深い。　ー　我々がいる」。

レーヴィーンはその小紙片を隠した。そして引き裂くこと、それは出来なかった。というのは自分がそれを再三再四読むであろうと感じたからである。それから彼は自分が立っている所で、跪き、神に自分の命の救出に感謝した。というのは彼は自分が救出されるであろうことにもはや疑いを抱かなかったからで、仮にすべてが挫折しても、稜堡から飛び出すことを固く決心していたからである。跳躍に失敗しても、少なくとも味方の手の中で死ぬわけで、死刑囚の歩行は、太鼓の連打と目隠しを含めて、これは免除される。彼はこの仕掛けを最も恐れていた。「死は耐えられる。しかし執行は耐え難い」。この言葉が彼には嫌であった。そして粗野で醜いものの一切が、この言葉が単に響いて来るだけで、歪んだ年の市のイメージとなって彼の前に生じて来た。

何が起ころうとも、今や彼はこの醜悪なものから免れた。しかし勿論、彼の心の最初の歓呼が過ぎ去ると、彼は直に、自分はただ暴君を代えただけにすぎない、救出の時を待つことは、死を待つことと同様に悩み多いものであると感じた。彼は狭い空間を再三測定し、窓を開け、閉めて、内容を夙に暗記している紙片をざっと読んだ。十回、それから百回と読んだ。猟歩兵は昼食を持って来た。しかし彼は、すべてをまた持って行くように頼んだ。

彼はただ空気と新鮮な気分を欲していた。そして屋根から長い氷柱がすぐ窓際まで垂れて来ているのに気付くと、その二，三本を折り取って、その涼しさを味わった。それからまた読み、巻き玉を調べて、稜堡の高さを計算した。結論はいつも、大したことではない、三階から飛び出す方がすべてはるかに難しい、であった。それに下は十フィート雪である。上手く行くに違いなかった。そしてこう考えるとき、跳躍はそもそも単なる非常手段であって、最後の手段となる筈のものだということを忘れていた。

かくて正午が過ぎて、ようやく午後も過ぎて行った。太陽が沈んで行き、夕焼けが色褪せて、一日が消えて行った。後わずか六時間、やがてなお五時間となった。彼は分刻を数えた。

七時に老城代がやって来た。「貴公子君、今緑色のテーブルで会議が開かれている。老将軍もいらした。『良イ人』と雑用夫として私に提供されたあののらくら者も言っている」。

「それでは私についての軍法会議ですか」。

「そう貴公子君、私は大広間の暖房をしなければならなかった。バルコニー付きの大広間でな。ハンス辺境伯が暖炉の上に掛かっている。等身大の絵で、黄色の革の長靴と、私の手ほどの長さの拍車を付けている。伯もびっくりされることだろう」。

「そうでしょう」。

「若旦那が、父上に一通の手紙かあるいはメッセージを書きたいのであれば」。

「そんな決まりですか」。

「決まりとは言わんが、決まりでもよろしい。軍法会議は軍法会議だ。いつも絹の糸に身体がぶら下がっているようなものだ。貴公子君よ、いつも最も良いのは、準備しておくことだ」。

「その通りです」とレーヴィーンは機械的に言った。一方彼の魂は今一度その恐怖が反復して来て、二重の力で生命にしがみついた。しかし老公はそれを見ていなかった。彼は猟歩兵が残して行った蓋付き籠を手に取って、「お休み」と言い、囚人を一人っきりにした。

「それでは彼らは上に集まっているのか」とレーヴィーンは言った、「ハンス辺境伯は好きなように覗くがいい。彼は彼らの私の死刑判決に手も足もでまい。今そのことを語っているような気がする。心臓に痛みを感ずる。しかし私は生きよう。神様私を憐れみ給え。私に恵みを与え給え。彼らの言葉を無効にし給え」。そしてまた両手を組み合わせて、彼の熱い額を窓ガラスに押し付けた。

星々が昇った。そして彼は知る限り星座を探した。しかしまた雲で覆われた。「最も長い一日でも時間は流れて行く」[『マクベス』 Ⅰ.3]。そしてようやく十一時となった。

「後一時間」と、そう思わず彼はつぶやいた、「そしたらこの苦悩も終わる。いずれにしろ」。

第二十三章
救出

レーヴィーンがこの言葉を発したこの同じ時、二台の橇がホーエン・フィーツの領主の館の前に止まった。最初のは単なる小型橇で、レーヴィーンがクリスマス・イヴにベルリ

ンからホーエン・フィーツへの帰省に使った幌付き橇に似ていた。ただ籠の壁がより低く、高い幌のアーチは完全に欠けていた。この幌アーチの代わりに一枚の黒い、両側が低く垂れ下がった蠟布が籠の壁に掛かっていて、穴が開けられて、四本のスポークに固定されていた。一対の轅には小さな、もじゃもじゃ毛の百姓馬が繋がれていて、パハリーが手綱を取って、前の台に座っていた。二番目の橇は通常のものであったが、とても大きなもので、この大きさ故に、村長のクニーハーゼから借りたものであった。この橇には六人が座っていた。ベルントとヒルシュフェルトが奥座席で、向かい合ってその後部座席にトゥーバルとクニーハーゼ、前方にはクリストと共に若いシャルヴェンカがいた。クリストが御した。ポニーどもが繋がれていたが、しかし鈴はなかった。

最も驚いたのは、バメの欠如であった。しかしこの欠如は、彼のことをもっと良く知っている人にとっては誰にでも、彼の性格と全く一致していることであった。フランクフルト事件で内面的に彼の勇気が折れたことはなかったし、外面的に臆病になったのでもなかった。しかし全面的に賭博者のイメージに支配されてしまって、彼はそれ以来、自分には「つき」がないと請け合っていた。「自分がいない方が上手く行くだろう」と何度も請け合って、そしてまさに一瞬、垂れた黒い蠟布の橇が近寄って来たとき、この自分の確信に震撼されていた。その際彼と自分の横に立っている高級副官の間で次のような会話が交わされたのであった。

「一体黒い箱は何のためか、ヒルシュフェルト。黒くて、斜めで、その上に覆いがある。純然たる棺だ。誰が中に収まるか、知れたものではない」。

「ひょっとしたら私かも」。

「いや、貴方は違う、ヒルシュフェルト。貴方は厚い肉に跳弾を受けようが、弾を受けようが、大丈夫だ、...。しかしこのパハリーのグズが引っ張って来て、橇の藁の上に積んでいるものは一体何か。見てみろ。『六枚の板に、二枚の小板』だ。それに今度は二本のシャベルに一本の綱だ。何のためか、無論承知している。しかしとんでもないな。シャベルに板、それも六枚。埋葬の匂いがするぞ」。

ヒルシュフェルトはとても冷静であったが、結局このような考察で若干面白くない気分になって、ただ言葉を添えるために、こう言った。「将軍、貴方は迷信的ですよ」。

「そうだ、私はそうだ、ヒルシュフェルト。私はそれに喜びを感じている。私から少しばかりの迷信を取ったら、私は無になって崩れてしまう。ちなみに大方の人間がそんなものだ。そうでない者は一層ひどいことになる。ショルレンマー叔母を見てみろ。彼女は迷信を持っていない。しかしそれでどうなる。英知で一杯の一個の胡桃の殻と一シェッフェル[升]の退屈だ。その上には寝室帽が置かれている」。

バメは鼻下髭をねじって、何かとても気の利いたことを言ったつもりでいた。しかし自家薬籠中の話題全体は、相変わらず「棺」と「埋葬」のイメージにとらわれていたヒルシュフェルトから聞き漏らされてしまって、最後にヒルシュフェルトは言った。「それでは将軍、貴方は、我々がキュストリーンから、フランクフルトからと同様に、帰って来るとお思いですか」。

「いや、そうではない、ヒルシュフェルト。私がいない、これがまず一つ。第二は、奴等が用心していない、つまりフランス人のことだ。だから彼を解放できるだろう。しかし実行すると代償がかかる。一本の脚か、二，三のあばら骨。簡単には手に入らん。ひょっ

としたらもっと高くつくことになるかもしれない。だからこの箱が縁起でもないのだ」。

そのようにバメとヒルシュフェルトの間で会話がなされた。その後すぐにこの作戦に参加する者達は座席に座り、軽快な速歩でキュストリーンの街道を進んで行った。彼らは、二日前にまず観兵式が行われた箇所で、右手に折れて、唐檜の小森を北側の縁に沿って進み、今や鋭く川を目指して行った。道はここらは狭く、大方雪に埋もれていて、歩くスピードで進まざるを得なかった。それでも時間が積もられていた。ベルントとヒルシュフェルトは焦っていた。ようやく彼らは川を目前にし、暗闇でも氷の中で境目のある車道が分かり、用心してまず土手を降り、それから次第に左に折れて、低い赤松の並木道に入って行った。そこでまた速歩となった。しかし時は迫っていた。

まだ一言も発せられていなかった。ベルントは、沈黙が心苦しくなって、向かい側に座っているクニーハーゼに向かって言った。クニーハーゼはまだ傷付いた頭を毛皮の帽子に収めていた。

「万事異常ないか。クニーハーゼ」。

「はい、旦那様」。

「綱に、シャベル、板は」。

「抜かりはありません。私がパハリーの手に、数えて渡しました。小さな梯子も、二束の麦藁も」。

「キュムリッツは」。

「九時にマンシュノーの水車小屋へ出発しました」。

「クルルとレーツケは」。

「向こうの鴨罠と火薬製造所の中間にいます」。

「分かった。後は天に任そう」。

一瞬彼は黙った。彼の唇はただわずかに思わず知らず語っていた。しかしそれから、すべての不安を振り払って言った。「もっと速く、クリスト。遅れるぞ。トゥーバル、見てみろ。すべて灰色だ。天は我らの味方だ。我らを隠してくれる」。

彼らがそう語っている間に、要塞まで五百歩の所まで近付いた。周りの暗闇の中に、更に一層暗い影が浮かび上がった。ブランデンブルク稜堡であった。彼らの接近が、あれこれの歩哨の目に触れたかという点は疑わしい。というのは彼らの乗っている乗り物は低くて、背丈大の、道の両側に積み上げられた雪の壁に隠されて進んだばかりでなく、十歩ごとに立っている赤松のピラミッドの影にも隠されていたからである。このような赤松のピラミッドの一つの影の中に今や橇は止まった。

城の教会からの小さな塔時計が三十分を打った。これは然るべきものであった。計算通りであった。ベルントが最初に橇から出て、こっそりと今や氷の上を要塞まで進んで、丁度「白頭台」の下まで来た。彼が近寄って見ると、稜堡の麓はすべて深く雪が積もっていた。西風がここではすべての雪の山を吹き寄せていた。しかし雪は高く積もっていたけれども、余りにふわふわしていて、深さが十分ではなかった。従って工夫が必要であった。そのために携帯してきた板きれが役立つ筈であった。この板きれを使って、十歩の幅の、半ば堅固な雪の壁を稜堡のすぐ近くまで押し付ける考えであった。それ故彼らは一頭の馬に繋いだ橇に近寄って、バメをこれを短く、ひょっとしたら予感もして、棺の橇と呼んでいたが、まさにこの押し込め用の板きれを取りだそうとした。その時、その上にまとめて

いた麦藁の中で何かが動き、身震いをし始めた。するとすぐその後、ヘクトーが立っていた。　ー　恐らく大胆のことをしましたと承知していて、　ー　当惑して、主人の側で尾を振りながら、当惑しているものの、しかし誇りと喜びの表情も浮かべていて、彼の利口な目はこう言っているように見えた。「見参致しました。私、ヘクトーです。私の友レーヴィーンの友です。容易ならぬことと承知しています。承知していますので、居合わせたいのです」と。

まず気を取り直したのは、ベルントであった。彼はただ背を屈めて、この仕様のない犬に人差し指で脅そうとした。それからまた彼が起き上がると、犬も体を起こして、前足を主人の肩に置いた。そのようにして彼らは立って、互いに見つめ合った。

「しっ、ヘクトー」とベルントは囁いて、忠実な犬を叩き、撫でた。しかし犬はこのような恩赦が得られたのを見ると、情熱的に興奮して、主人の髭や髪の毛をかき回し、頷き、ただ何度も尾を振って、自分はすべて良く分かっていますと示そうとした。それからようやく彼から離れた。

その間に板きれは取り出されて、今や一方の側から押し込まれた。しかしこの押し込みは上手く行きそうになかった。日中に溶けた雪の中は下の方が川の表面と一緒に凍結していた。それでシャベルが取り寄せられて、掘り返して、また氷を分割しなければならなかった。ようやくそれは上手く行き、塊は動き出した。最初はゆっくりであったが、次第により速くなり、遂には柔らかい雪は側面から押し詰められ、稜堡の麓にしっかりと固められた。西風が斜めの壁により高く吹き上げていたものは、今や落下して、雪の壁の上に柔らかなクッションとなった。そこで若いシャルヴェンカが、彼が最も敏捷で器用であって、よじ登り、綱を自らの許に素早く引き寄せた。一方他の四人は壁の両側に蹲った。クリストはヘクトーの首輪を掴んでいた。パハリーは橇の許に残っていた。

皆が期待して、時計の方を見た。まだ五分あった。今にも城の上では時が打たれ始めそうであった。

そして今や本当に時が打たれた。レーヴィーンは窓を開けた。そして十二まで数えた。そしてその瞬間彼は巻き玉を投げた。その結んでない端を彼は左手に巻き付けていて、右手で稜堡の縁を越えて投げた。彼はそれが広がって行くのを耳にした。そして解けて行った。しばらくして、細い麻の紐が張り始めるのを見た。従って綱は下の味方によって、結ばれたに違いなかった。彼は全力で引き始めた。しかし丁度このとき一人のフランス人歩哨が視察に来た、角から角への規定の見回りを行うためであった。歩哨はすぐ近くまで来ていた。歩哨が窓の近くを守ったら、銃剣は網の下を通って行くだろう。しかし歩哨がもっと右手の稜堡の縁側と通ったら、綱に触れるであろう。レーヴィーンは綱を落下させなければならないとほとんど覚悟していた。そうしたら残るのはただ跳躍のみであった。しかし歩哨は鼻歌を歌いながら、白頭台の土台のすぐ近くを通り過ぎた。

歩哨がまだ戻って来なければならない角は、百五十歩離れていた。レーヴィーンは二分かかると計算していた。従って急がなければならない。彼は今や先ほどよりもより速やかに、より性急に引いた。そして今や綱を両手に持った。しかしどこに固定させるか。窓の十字の桟は余りに脆かった。それで綱を、ましなものが無かったので、ベッド架の脚に結んで、このベッド架を、もっと固定するために、窓の支柱の所まで押して来た。そして飛び出しである。外に彼は身を投げ、稜堡の縁まで這って、それから綱を掴んだ。そして更

に短祈祷を行い、それから先へと下って行った。半ばまで来たとき、紐を固定していたベッドの脚が折れたか、あるいはベッドから外れた。しかし後は六エレもなかった。それで彼は雪で覆われた斜面を危険もなく滑り落ちて行った。下降全体がただ数秒速くなっただけであった。

彼は助かった。緩い雪の塊からもがき出ながら、再び得られた生命という至福の思いが湧いて来た。更に見られた危険は、もはや危険ではなかった。夜の中への射撃は左程心配することではなかった。

そして今や実際最初の射撃が行われた。下では万歳の返事があった。皆が帽子を振っていた。ヘクトーは今や動くことを許されて、若い主人に高く飛んで行き、彼の手や顔に舌で愛撫し、喜んで喘いだ。「よせ、よせ」。しかし犬が聞き入れないうちに、上から暗闇の中に一斉射撃が始まって、愛の忠誠で自分の主人を覆っていた犬が崩れ落ちた。レーヴィーンは動かずに立っていて、どうしていいか分からずにいた。ようやくベルントとヒルシュフェルトが彼を連れ去って行った。皆が橇に突進した。ただヘクトーだけが残されて、稜堡の麓にくんくん鳴いて横たわっていた。

「いけない」とトゥーバルは叫んだ、「それはいけない」。そして再び戻って、身を屈め、動くのがままならないでいる忠実な犬を両腕に抱いた。しかし間近の橇に達する余裕もない時に、最初の一斉射撃に続いて、二回目の一斉射撃が生じて、トゥーバルは肩甲骨を射られて、よろめき、倒れた。

「速く、速く」と十本の手[五人]が掴んで、雪の上、彼を運び、引きずりながら、パハリーの橇に達して、重傷人を麦藁束の上に寝かせた。ヘクトーは彼の足許であった。かくて夜の中、黒い松の矮林の間を進んで行った。追跡は考えられなかった。追跡があっても、配置された味方の分遣隊の助けで迎え撃つに十分であったろう。

彼らはゴルガストの高台へ来たとき、その松の並木道から右手に曲がってゆっくりと岸辺の土手を上がった。トゥーバルは激しい渇きを訴えた。人々は彼に雪を与えた。そのようにして更にマンシュノーの水車小屋まで来た。ここで道はますますでこぼこになり、パハリーは負傷者のせいで、歩む速度で進んだ。もう一つの橇は先に速歩で進んだ。

ベルントが手綱を取っていた。彼が車寄せの支柱の間を抜けようとしたとき、ポニーどもが臆していた。彼はホッペンマリーケンが左の縁石の上に座っているのを見た。彼女はいつものように背負籠にもたれかかっていて、鉤状杖を手にしていた。しかし彼女は敬礼をしなかった、　一　彼女は動かなかった。

第二十四章
御頭ヨ、ヨウコソ

十二時間後であった。明るい正午の太陽がホーエン・フィーツにかかっていた。すべての屋根から雪解けが見られた。ミークライの水車小屋の車輪で尖りのなくなった氷も、また透明に水晶のように輝いていた。クニーハーゼの長い納屋の屋根に鳩が止まっていた。すべては明るく、快活であった。最初の春風が自然にそよいでいた。

明るい陽光の中に領主の館もあった。しかし車寄せから前庭と窓の長い列に視線を送る

人がいたならば、喪の家か、それ以上に悪いことに、今にも喪の家になるのではないかという気配を感じたに違いない。築堤から密に麦藁が敷かれていて、窓ガラスの背後には誰も見えなかった。広間のガラスのドアの背後にも誰もいなかった。すべては死滅したかのようであった。ただ雀だけは健気であった。雀どもは群れて、撒かれた麦藁の上にいて、こぼれた穀粒を拾っていた。その囀りが深い静寂の中で聞こえる唯一の音色であった。

十二時間遡ると、ただ一分間だけ一杯の幸福と至高の喜びに人々は包まれていた。その一分間、妹と最初の挨拶の後、歓声と涙に沸く、レーヴィーンとマリーの再会は、同時に二人の婚約を意味していた。人間の目がこれ以上素敵なものは見たことがないような婚約であった。来たるべきであったものが、ただ来たからであった。自然的なもの、原初から定められていたものが、実現した。そしてベルント自身、深く心の中で感動して、二人の幸福な者達の幸福を喜んだ。

しかしそれから何という別の分刻になったことか。しばらくして二台目の橇が到着して、クリストとパハリーが寝台と枕に寝かせられたトゥーバルをゆっくりと小声で、階段を上に、運んで行った。ヘクトーも上に上がろうとした。しかし最初の階段で彼の力は尽きた。ヘクトーは狭い台所の廊下に沿って、自分の蓙の敷物の所まで這って戻った。そこに寝て、竈の背後の温かい壁の所に体を押し付けた。犬は凍えていた。

十一時にライスト博士がレブースから来ていた。彼は二階に上がって、　ー　習慣通りに物音を立てずに、雪靴の音を抑えて、　ー　そして病室へ入って行った。病室では反射して窓に射し込む陽光のせいで、カーテンは密に閉められていた。「明かりがないといけない」と彼は言って、カーテンの一枚を押し退けた。

そこでようやくトゥーバルの姿が見えた。トゥーバルは激しい痛みを味わっていた。しかしぴくともせず彼の傷の点検に耐えていた。ライスト博士が行った診察は、「ちょっと触診」というものではなかったのであるが。

「宜しい、若君、勇敢に耐えましたな」。

「どうなんです」とトゥーバルは尋ねた。

「むごいね。脾臓の穿孔だ。しかし脾臓とは何か。人間が持っている余計なものだ。それを切り離す人もいる。それに若いと何でも乗り越えられる。四週間したら、ここの窓辺に腰かけて、教会の屋根のカラスを数え、煙草を一服吸うことだろう。若君は煙草を吸われるかな」。

トゥーバルは否定した。

「それでは、忍耐か結婚式[カルタ]を楽しむことだろう」。

「忍耐」。

老ライスト先生は重傷者の手をさすった。

「それは結構。いつも前向きで、機嫌良くしていることだ。良い機嫌だと治る。最良の膏薬だ」。

そしてその後彼はまた階段を降りて、下のベルントの仕事部屋で診察の結果について報告することにした。

「ドクトル、どうなんです」とフィッツェヴィッツは尋ねた。

老ライストは両肩をすくめた。「死は必定」。

「助からないのか」。

「助からない。斜めに射られている。これはいつも最悪だ。すべて貫通している。肺に肝臓、余計なことに脾臓までも」。

「いつまで持つかな」。

「良く持って、今夜までだ。今日が彼の最期の日で、明日には終わっている。彼の父親に、枢密顧問官に、まだ知らせたいなら、至急だ。勿論、...しかし手遅れだ。彼にはもはや会えない。たとえ曙光の翼[旧約、詩篇、139,9]を持っていようとも。私が賛美歌を正しく理解しているとすれば、これが最速なのだが」。

「それでは、待つことにしよう。彼も中途半端な知らせよりも、全てを知った方が良いだろう」。

ライストは頷いた。

「いや、ドクトル」とベルントは続けた、「何という日々か。レーヴィーンを救出するために、この代償だ。父親に合わせる顔がない。唯一の息子、いやもはや、...唯一の子供なのだ」。

ベルントは頭を手に抱えた。そしてしばらくしてから言った。「薬は何を処方された」。

「何も」。

「彼が何か欲しがったら、何を与えたらいい」。

「何でも」。

「分かった。それでは貴方はまたいつお出でになる。午後、それとも夕方頃」。

「私は残る」と老人は言って、それからもはや何も言うことがないので、バメの所へ向かった。バメとはグーゼから馴染みであった。これは両人にとって都合が良かった。彼らは直に暖炉の側に腰かけて、数時間煙草を吸っていて、談話に尽きなかった。談話はトゥーバルに始まって、ホッペンマリーケンに終わった。ホッペンマリーケンは、ベルントが座っているのを見た同じ縁石の上で明け方死んで見つかったのであった。凍死したのか、それとも卒中であったのか、パハリーによっては、彼は医療も行うのであったが、確定されなかった。ライストも彼女の死亡の理由を学問的に追究する意欲を見せなかった。彼女は死んでいた。それで十分であった。時々彼は階段を上がって行き、この負傷者が痛みを訴えると、自分の「効き目の強い麻酔薬クロカタ」を渡した。そしてこの機会にその効能を「効き目の弱い麻酔薬シンプレックス」と比べてまた熱くなって称えた。そしてこの阿片を使用して、痛みのない状態を作り出すことにようやく成功すると、　ー　また自分本人も、より自由に振る舞っていい潮時と判断して、コニャック入りコーヒーを一杯所望した。イエーツェが要求のものを持って来て、バメも加わり、そしてますます深刻な表情は浮かべなくなって、両人は結局一致して、全体久しくかくも心地良くお喋りしたことはなかったという風になった。

さて夕方になった。角の部屋に皆が集まっていた。ただレナーテは引き籠もっていた。人々は取るに足りないことを話していた。そのときイエーツェが、彼はレーヴィーンとショルレンマー叔母と一緒に看護を引き受けていたのであるが、入って来て告げた。若君のトゥーバルは騎兵隊長殿を望まれている、と。

ヒルシュフェルトは上がって行った。小さな緑色の笠のランプが燃えていて、乏しい明

かりを放っていた。

「貴方に来て頂いた、ヒルシュフェルト」とトゥーバルは言った、「とても暗いが、しかし一つ椅子が見えるだろう。どうぞこちらへ」。

ヒルシュフェルトは言われたようにして、ベッドの側に腰かけた。

「友よ、私は死ぬ。無常迅速だ」［Cita mors ruit:Wilhelm Tell Ⅳ.3 より］。

ヒルシュフェルトは答えようとした。

「いや、その反対を言わなくてもいい。　ー　私はそう感じている。私がそう感じなくても、老ライスト博士の言葉の節々から聞き取ることができよう。彼は偽装が下手で、その優しい心遣いには、臨終の鐘の響きが混じっている。結局、何のこともない。早晩誰もが死ぬ」。

「貴方は興奮しているのだ、トゥーバル」と騎兵隊長は言った。「老先生は本当のことを話されたと思っている、貴方と我々に」。

病人は頭を振った。

しかしヒルシュフェルトは続けた。「トゥーバル、貴方は生きるべきです。生きる意欲を持つべきです。喜んでこの世から去る人は誰もいません。ただ疲れた人は別ですが」。

「私は疲れている。しかし止めよう。私の時間は限られている。ちょっと飲ませて欲しい、ワインを。そこの。老先生は許された。何でも許された」。

ヒルシュフェルトはワインを渡した。

「それでは私の言うことを聞いて欲しい。二つの願いがあるのだ。出来るだけ速やかに私を教会へ運び上げるよう手配して頂きたい。私は祭壇の前に立ちたいのだ」。

語ることは明らかに応えていた。しかし飲んで、そのグラスをまた脇に置くと、より平静な明るい調子で続けた。「これが一つ。そしてもう一つある。私はここに埋葬されたい。しかし地下墓所ではない。ひょっとしたら私はそこではフォン・ゴルミッツ嬢と同じように落ち着かなくなるかもしれない。そこから出たがった令嬢だ。そこではなく、固く、大地の中だ」。

彼はしばらく黙っていた。それから苦痛の微笑の下、付け加えた。「ヒルシュフェルトよ、私が熱にうなされて語っているかのように私を御覧になっている。いや、私は熱にうなされていない。しかしこれは令嬢に話して貰わなければならない、レナーテかマリーだ。いや、マリーだ。彼女が私に語って聞かせたのだ。だから地下墓所ではいけない。それでは私に医者を呼んで欲しい。今一度慰めて貰いたい。また痛みが来た。彼の阿片が最も良く慰めてくれる」。

ヒルシュフェルトは出て、老ライスト先生を上に送った。医者は病人に彼の「クロカタ」の新しい一服を処方して、詳しく「一七九二年」について、ヴァルミーの連続砲撃について語り、せいぜい六週間したら万事はまた異常なくなるだろうと請け合うばかりでなく、極めて真面目に、ブレスラウへの間近な旅行ではゾーラウよりもザーガンに泊まるようにした方がいいと勧めた。彼はこれをとても上手に巧みに話して、トゥーバルは一瞬自分の本当の状況を錯覚するほどであった。

しかし長くは続かなかった。実際速やかに終わりとなって、老ドクトルが予期していたよりも速やかであった。八時にザイデントプフがやって来た。そして今やショルレンマー叔母が上に行って、病人に「家の昔からの友人」とひょっとして話したい意向があるか尋

ねた。彼女は「聖職者」とは言おうとしなかった。

トゥーバルは微笑して、否定した。慰めの言葉を必要としていて、精神の向上への憧れを本当に感じていたけれども。彼は同時に、ザイデントプフでは自分が欲しているものを与えられないとも感じていた。

三十分後には空想が混入して来た。彼は幼子イエスを落としてしまった聖母について語った。それから太鼓叩きや吹奏を止めて欲しいと頼んだ。最後に彼は起き上がって、言った。「いや、いや、それはいけない。ヘクトーは忠実な動物だ」。

しかし突然あたかもまた明瞭になったかのようであった。彼は飲み物を要求して、すぐその後ショルレンマー叔母に、レナーテを呼んで欲しいと頼んだ。

「お医者さんは」。

「いや、いい。彼の言葉はすべて嘘で、あの薬も嘘だ。もうどちらも欲しくない。レナーテに来て欲しい」。そしてレナーテが来た。

彼女が来ると、彼女と二人っきりになりたいという彼の意向が明らかに見てとれた。ショルレンマー叔母は部屋を去った。

「レナーテ、私の許に腰かけておくれ」と病人は言った、「私はあなたにお別れを言いたい」。

彼女は嗚咽した。そして彼女は跪き、頭を枕に隠した。

「そうしないでおくれ。別れが辛くなる。どんなに辛いか分からないだろう。その辛さは分かって欲しくない。いや決して望まない。レナーテよ、別れは思っていたよりも辛いものだ。ただ一つだけ慰めがある。私はまともではなかった。私はあなたを幸せには出来なかったであろうという慰めだ」。

彼女は返事をしようとした。しかし遮るように彼は続けた。「何も言わないで欲しい。そうではない、と言わないで。私はもっと良く分かっている。というのは幸せは我らや他の人達に何を与えるか。しっかりしていること、揺るがないこと、揺るがなく善を続けることなのだ。我々はいつも落ち着かなかった。我々は皆。私の父もそうだった。国、信仰、友人、これを彼は棄ててしまった。何故か。一つの思い付きに憑かれたのだ。我々はこれで何も善なるものを持てなかった」。

「愛しい方、自分を責めないで。トゥーバル。あなたは今何のせいで死ぬの。愛と忠誠のせいですよ。そうなんです。最初はレーヴィーンに向けられていた。それから彼が助かったら、哀れな動物が可哀想になった。置き去りにされて、苦痛と嘆きでくんくん鳴いている動物が。あなたは忠実な動物を憐れんだから、亡くなるのですよ」。

「そうだ、同情をしたのだ。私はいつも同情してきた。同情と憐れみだ。ひょっとしたら、私の憐れみのせいで、私を憐れみが待ち受けているのかもしれない。私はその憐れみを大事にしよう。誰でもできよう。最後の時には、何かこの安心できる点を有することは気分がいい。...私は老いた宗教局評定官長[新教]の許で説教の時間に覚えなければならなかった長い歌を思い出している。私はそのセンスがなかったのであるが、ある一つの詩節が気に入っていた。素敵だった」。

「何、それを言ってください。あるいは私に言って欲しいの」。

「それは何か、死と別れ、臨終のときのキリストの救援についてのものだ」。

レナーテは彼の手を取って、今や更に尋ねることはなく、小声で、しかししっかりした

声で思わず語った。

「私がいつか身罷るとき、
私と共にあり給え。
私が死の苦しみに遭うとき、
私のために歩み寄り給え。
私の心が不安の余り、
打ち震えるとき、
御身の贖いし不安と苦痛とで、
私の騒ぐ不安を取り除き給え」［Paul Gerhardt（1607-76）］。

トゥーバルは身を起こしていた。
「そう、それだ」。
彼はまだ更に語りたいかのように見えた。しかしますます血の気が失せて、枕にまた沈んで、そして臨終の者達がするように、落ち着きがなく、掛け布団をあちこち抓み始めた。その際彼は思い出を探しているように見えた。
ようやくそれを思い出して、切れ切れの言葉で続けた。「随分以前のことだ、随分以前の。我々はまだ昔の教会にいた。すると助任司祭［カトリック］が私にラテン語の歌を歌ってくれた。復活祭になったとき、私は私の父と私の母と、ミークシュ伯爵［母の浮気相手］の前でそれを言わなければならなかった。私の母は笑った。ラテン語を解しなかったから。しかし私の父は真剣になった。ミークシュ伯爵もそうだった」。
彼はしばらく黙った。レナーテは不安げに彼を見守った。
「もう二十年になる」と彼は続けた、「あるいはもっとそれ以上。私は忘れていた。しかしまた思い出した。

「苦シメラレタ御頭ヨ、ヨウコソ。
スッカリ茨ノ冠ヲ被セラレテ、
虐ゲラレ、傷付ケラレタ御身、
顔ニ唾キサレタ御身、...」［12 世紀頃］。

彼は新しい行のたびに、次第に体を起こして、何かを見ているかのような表情で、彼のベッドの足許の柱形を見つめていた。痛みと救済とが互いに戦っているような微笑が、今や彼の顔を神々しくした。
「カティンカの言う通りだった。...しかし今は遅すぎる。...苦シメラレタ頭ヨ、ヨウコソ、...」。それが彼の最期の言葉であった。
彼は枕にまた沈んだ。彼の目は永遠に閉ざされた。

第二十五章
プラー近郊の時のように

同じ時、ベルリンへ騎乗の使者が送られた。ベルントの数行の手紙を持って、父親に息子の死の知らせを伝えるためであった。遅滞はなされなかった。それでも老枢密顧問官の到着は次の晩より前には予期できなかった。

朝にはいつものように家の者はすべて角の部屋に集まっていた。ただレナーテは姿を見せなかった。ヒルシュフェルトはこの機会に、トゥーバルが彼に「遺言」として彼に語ったことすべてをベルントに知らせた。ベルントは死者の教会への搬送を出来るだけ急がせることに同意した。しかし葬儀に関しては、老ラダリンスキーが定めることであろうと述べた。その後人々は別れた。ヒルシュフェルトとバメは、一時間ドロッセルシュタインの所へ馬で出掛けた。レーヴィーンは牧師館へ行って、この場所で自分の喜びと苦しみのすべてを打ち明けることにした。ここでは一切そのことに理解を示してくれるので、一切を語ってよいと知っていたからである。それ以上に、自ら安らぎを有するが故に、安らぎを与えられる静かな心の持ち主という点があった。この安らぎに彼の心は憧れた。

午後二時に大きな干し草馬車が村へ向かっていた。収穫時に高く穀物の束を積み、その上に「木」を置いて、前も奥も開けられた納屋の門に入って行くのが見られる類いの馬車であった。それはキュストリーンから来ていた。ホーエン・フィーツ人なら、それとどこで出会おうと、それはクニーハーゼ家の馬であって、御しているのはクニーハーゼ家の下僕であると知っていたことであろう。この下僕は若干突き出た板の上に座っていて、両足を轅に置いていた。この同じ板の上に、彼のすぐ後ろの方に、二つの棺があった。一つは黒く、白い留め金が付いていた。もう一つは黄色で、醜く青い飾りがあった。黄色の棺ははるかに小さかった。黒い棺に下僕は凭れかかっていて、煙草を吸っていた。

「へい」と言って、馬に鞭を入れた。馬が車寄せの所まで来たとき、すでに待っていたクリストとパハリーが出て来て、前面の棺を下ろした。クニーハーゼ家の下僕は彼らの加勢をした。

「何時に彼を上げるんか」と下僕は、クリストが棺の上の取っ手を掴んだのを見たとき、尋ねた。

「今日のうちに、すぐにだ」。

「祭壇の前か」。

「そうだ、そう言われている」。

「何で祭壇の前か。我らの流儀じゃねえなあ」。

「わしは知らん。彼はポーランド人で、あちらではそうなんかもしらん」。

それでクニーハーゼの下僕は落ち着いて、黄色の棺と共に更に村の通りを上がって、村長屋敷を通り過ぎて行った。ミークライの水車小屋の側まで来ると、森耕地[フォルストアッカー]へ折れて、ようやくホッペンマリーケンの家の前で止まった。ここで老いた女達が立っていて、黄色の醜い棺を受け取った。

「御覧よ」と一人の女が言った、「黄色と青だ。ホッペンマリーケンに合っているがね」。

「子供の棺みてえに小さいな」。

「子供より大きいんじゃなかったから」。

「んだ。悪魔も時々小さいんだと。でも彼女のしたことは盗品故買じゃなかったか。それが上に運ばれて、皆と一緒に埋葬されるんだ。ザイデントプフ老公が賛成したんだと」。

「んだ、老公はそうする。自分は何でも出来ると思っているがね」。

こう言って、会話は終わった。

領主の館では、その間、活発な営みがあちこちで見られた。しかし急がれて、一言も語られなかった。四時に死者は棺の中に安置されて、一時間後には六人の運び手が上の階から、ゆっくりと階段を下ろして行った。彼らが最後の段を丁度過ぎたとき、家の従僕が立っている裏玄関を通って、広間へ行こうとしたとき、彼らは止められた。というのはヘクトーがその途中に座っていたからである。ヘクトーは自分の蓙の敷物からこの箇所までよろよろ這って来て、起き上がろうと努めていた。しかし出来ないでいた。犬はただくんくん鳴いていた。それまで堪えていたベルントの目から涙が溢れて来た。かくて彼らは家と中庭を通って、最後にしばしば言及されて来た、教会へ上がって行く丘の道へ折れた。彼らがすぐ近くまで来たとき、地平線はまさに沈んで行く太陽の反射を受けて、輝いた。老クーバルケが錠を開けた。そしてしばらくすると、死者は祭壇の前に立つことになった。

丁度九時に軽馬車が領主の館の前に止まった。その到着は麦藁がまだ敷かれていたので、誰からも気付かれなかった。いずれにせよ、耳の悪いイエーツェによって聞かれることはなかった。ようやく窓辺が明るくなって、すぐその後レーヴィーンが現れて、馬車の扉に寄って、他ならぬ老ラダリンスキーの降車の手伝いをした。枢密顧問官の外見は余り変わっていないように見えた。彼の姿勢は垂直で真っ直ぐで、衣服と髪は調っていた。彼は姿を見せていないレナーテのことを尋ねた。それからベルントに従って、角の部屋へ行った。そこでは高く暖炉の火が燃えていて、茶のテーブルは客人の好きなロシア式作法で用意されていた。バメとヒルシュフェルトは引き下がろうとした。しかし残るよう要請された。ショルレンマー叔母も同様であった。皆が席に着いた。茶が渡されて、旅立ちのことが話題になった。ベルリンを正午前に出ることはかなわなかったのです。勿論色々な準備で旅立ちの時が遅れてしまいました、と。

このような会話の下、枢密顧問官がこちらに来ることになった出来事について言及されることなく、時間が過ぎて行った。彼は二杯目のお茶を所望し、これを空にしてようやく、自分は更なる旅立ちを出来るだけ早く行えるようにしたいという願いを述べた。それでベルントが言った。

「何と仰有いましたか、更なる旅立ちですか」。

枢密顧問官は頷いた。

「直接ベルリンへ戻る御意向ではないのですか」。

「そうではありません。私はすぐここから私の息子の亡骸をビヤラノヴォへ運んで行く考えです。ラダリンスキー家は皆そこです。人生にはすべきことがありますが、死もまたそうです。私の息子の考えに従って行動するつもりです。息子は故郷へ引かれていたと私はよく承知しています」。

ヒルシュフェルトは訂正しようとした。しかしベルントは、ラダリンスキーの頑固さを承知しており、不快な知らせはこの客人の心情を害するばかりで、彼の決心を変えさせるに至らないと幾多の以前からの経験で知っていて、それ故騎兵隊長の代わりに、言葉を発して、速やかに、躊躇いもなく自分の同意を述べた。ヒルシュフェルトはその意図を察して、かくて朝九時に更なる旅立ちがなされ、また亡骸を運ぶために一台の橇が、最も良い

のは一台の幌付き橇が簡素に、一頭立てで用意されることに確定した。万事速やかに手短に計画された。そして枢密顧問官が立ち上がりながら、ようやく言った。

「息子に会いたいと思うのだが」。

「御子息は上の教会にいます」とベルントは述べた、「祭壇の前です。それが遺言でした」。

「それでは上がって行こう。しかし一人がいい、フィッツェヴィッツ。ただ貴方の寺男の案内をお願いする。年寄りだといいが」。

年寄りであることは肯われた。そしてその他は滞りがちであった会話が、今や特に好まれて、入念に、オーダーブルフ全体で、ホーエン・フィーツほど人々が高齢になる村はないであろうという事情に向けられて行った。いつも新たな事例が見つかるのであった。まずは老[村長]ヴェンデリーン・ピュテルケで、それからザイデントプフ牧師の前任者のこと、彼はダイヤモンド婚式[結婚六十年]を祝って、三日後にはやしゃご[玄孫]に洗礼を施したのであった。弱っていたので、勿論、洗礼の言葉を座ったままで言わなければならなかったですね、と。この前任者と彼のやしゃごに関しては、　ー　ちなみにやしゃごの存在は、あたかも不適切なことを言っているかのように、ショルレンマー叔母によって論駁されたのであるが、　ー　しばらく会話が続き、老クーバルケが到着して、外で待っていますとイエーツェが伝えたときにもまだ話されていた。

皆が彼を出迎えに行った。彼は広間に立っていて、教会の鍵を持ち、大きなランタンを左手に持っていた。右手で彼はビロードの帽子を取って挨拶した。

「神父さん、もう遅い時です」とラダリンスキーは言った、「教会へ行く時というよりは就寝の時です。しかし貴方は御存じで、...」。

こう言って両人は玄関を出て、色々な灌木の植えられた公園の通路へ入って行った。レーヴィーンとヒルシュフェルトは中庭の戸口まで従った。「プラー近郊の時のようです」とレーヴィーンは言って、しばらく間を置いてから付け加えた。「しかしこの通路がもっと辛い」。

ヒルシュフェルトは静かに頷いた。そして両人は角の部屋へ戻った。

その間両老人は丘を登って行った。クーバルケが、二，三歩先を行った。より良く照らすためで、輝いている星々はただわずかで、そこでは途中根が育っていたからである。半ば登ったとき、彼は枢密顧問官が近付くまで待っていて、言った。「注意してください。旦那様、ここはつるつるの氷です」。それから低地ドイツ語に移った。彼は学校教師であったが、老齢と注意力減退のせいでよく生じがちで、こう自分の文を結んだ。「詰まらねえ若けえ衆が滑走路を作りよるがね。一つだけじゃねえ。他に多くの人がここを通ることに思いが至れねえ。わしを含め多くの人が」。

「我々はそれほど年の差はないのでしょう」とラダリンスキーは言った。老人の話しぶりが耳に心地良く響いていた。

「いや離れています」と老人は答えた。そして同様に気付かずに高地ドイツ語をまた採用しながら、続けた。「今の旦那様の年齢の頃、六十歳の半ばかその頃、私のマリーネはまだ十ヵ月でした。旦那様も　ー　向こうのグーゼで、御存じのエーフェは、今彼女はまた私の許にいますが、甘ったれ子で、　ー　いやこのエーフェルヘンはまだ全く生まれていなかったのです」。

「それでは貴方は八十歳を越えていますか、神父さん」。

「八十三歳です、つまり次の八月十三日にそうです」。

「...それでは結婚が遅かったのですね」。

「そうです、旦那様、そうなります。つまり二番目の妻なのです。私が最初嫁探しをしていたとき、それは我々がロシア兵をこちらに有したときより三年前でした。私は村に来たばかりでした。...いやもう着きましたよ」。

この時彼は深く彫り込まれた表玄関の石段に立っていて、大きな教会のドアを開けた。これは内側の方へ開いた。彼らはまず木の切り株と古いカトリック時代の祭壇の人形の間にある塔を過ぎ、人形はまとめられて角にあったが、それから内陣席を過ぎ、それから幅広の中央通路を上がって、祭壇と説教壇の方へ歩んで行った。

彼らが最前列の椅子の並びに来ると、枢密顧問官は左手に入って行き、一瞬座ろうとした。彼は落ち着く必要があったからである。しかし老クーバルケが彼をまた急いで引き上げて、言った。「そこはいけません、旦那様、そこは少佐の席です」。

枢密顧問官は彼をびっくりして見つめた。

「そこはいけません、旦那様」と老人は繰り返した、「いけません。それは一七五九年でした。私はまだ今日のことのように覚えています。少佐をクーナスドルフからイッツェンプリッツ連隊の歩兵が連れて来ました。ここに寝かせたのです。ここのベンチに。しかし彼は人生に疲れていました。『皆聞け、私は死ぬつもりだ』」。とそう彼は言って、包帯を取り去ったのです。それで彼は出血死してしまいました。それは八月十二日で、私の誕生日の前日でした」。

こう言いながら老クーバルケは枢密顧問官を別な側へ案内して行った。最前列の内陣席の列は勿論閉ざされていた。しかしその前面に狭いベンチがあった。そこには堅信礼のとき、祝福を受ける子供達が座る席であった。このベンチに今や二人の老人は腰かけて、棺をすぐ前に、三歩もない所に見ていた。

二人がしばらく休むと、ラダリンスキーが言った。「それでは蓋を外しましょうか」。

「まだです、旦那様。貴方は若君の御子息を少なくとも御覧にならなければなりません。まだ暗いままです。好もしい若君でした。先の日曜日のこと、私は若君をマリー・クニーハーゼと一緒に閉じ込めてしまいました。もう目が弱っていますから。十五分後に再び戻って来たとき、彼はここに立っていて、赤い顔をしていました。すぐ少佐の席の隣です。しかしマリーの方がもっと赤かった。私がまずは明かりを点しましょう、旦那様」。

こう言って彼は祭壇へ向かって行き、大きな真鍮の燭台から蠟燭を取って、それに点火した。最初はまた消えようとしたが、最後には燃えだして、老人は、今や棺掛けを取り除き、祭壇の段に置きながら、静かに言った。

「それでは、良ければ、旦那様」。

ラダリンスキーは身を起こして、棺の短い側に立った。

「私は頭の方に立っているのか、足許の方なのか」と彼は尋ねた。

「頭の方です」。

「私は足許に立ちたい」。

そこで両人は位置を交替して、蓋を開けた。老枢密顧問官は目を閉ざしていたが、目が痙攣しているようであった。

そして今ようやく彼は息子を見た。じっと、長く、そして自分の心が次第に落ち着くのを感じて、自ら驚いていた。結局何であったのか。彼は死んだ。彼は魂の奥底で、それは何も恐ろしいことではないと感じた。いや、恐ろしいものではない、自由と救済だ。生は彼にはとても貧しく、死はとても豊かに見えた。そしてただ一つの感情に襲われた。私がこの死者の代わりでありたい、と。

彼は彼のためと、自分自身のために祈った。それから一切が夢のように彼の周りで波動している時、一分間更に立っていて、それから言った。「それでは神父さん、また閉めましょう」。

寺男はその用意があった。彼らは棺の上にまた棺掛けを置いた。それは単に棺の取っ手の所にまで届く、褪めた色のウール生地であった。すると古いカトリックの感情が、最初まずカティンカに、それから最後にはトゥーバルにも生じたように、今や同様にまた老ラダリンスキーの心の中にも蘇って来た。彼は棺と貧しい覆いを指さして言った。

「とても寂しい感じがする。十字架像を取って、それを上に置きたいのだが。作法に反すると思われますか」。

「そうは思いません。旦那様。それは十字架像にふさわしいことです。そのために十字架像があります。死者のためです。死者は必要としています。ここ下界ではまだそんなものです。でも、向こうで、向こうで始まります」。

かくて両人は十字架像を祭壇から取って、棺掛けの上に置いて、そして再び腰かけた。しかし老クーバルケは親しげな調子で続けた。「まだ七年も経たない以前に、私も十字架像を祭壇から取りだしました。匙付帽部隊がこちらに来て、略奪兵がいたからです。銀製器があると他の者達も信用できません。そこで私の妻に言ったのです。『おい、どこに隠そうか』、『ベッドの袋の中に隠したらどう』と妻は言いました。しかし私はその気にならず、私の枕の中に隠しました。そして横になり、その上で寝ようとしました。しかしそれは正しいことではなかった。私は安まれず、私の主の傷口を押さえていて、主に痛みを与えているようにいつも思われました。そこで私は立ち上がって、それをまた取り出して、窓間壁の所に掛けました。『お母さん』と私は言いました、『隠すなんて必要ない。フランス人が我らの教会へ侵入しても、哀れな寺男の家には侵入して来ないだろう。何も見つからないだろう。それでもやって来たら、主は自らを守り、救い給うことだろう。だってここら一帯で経験しているから、主は嘲られない、と。その像も嘲られることはない』と」。

枢密顧問官は感動した心で聞き入っていた。いや、この語り方の何と心地良かったことか。それにこの子供らしい信仰心。彼は同行者の手を取って、言った。「それではまた出ましょう」。

両人は立ち上がった。老人は明かりを消して、教会の椅子の間を二人はまた出口へ向かって行った。塔の所を通り過ぎるとき、十時が打たれた。すぐ彼らの上の鐘の響きは老ラダリンスキーの心を慰めて、彼らは再び野外に出た。

更に暗くなっていた。最後の星々が消え、クーバルケはまた先を行った。そして途中の滑走路の箇所へ来た。

「注意してくださいよ、旦那様。ここらはつるつる氷です」、と老人は上がりながら言って、また「詰まらねえ若けえ衆」について話したそうに見えた。しかしラダリンスキーが機先を制して、中断された会話を蒸し返しながら言った。「神父さんは、二度結婚なさ

ったのですか。そうですか」。
「そうです、旦那様」。
「先妻との間に子供もありましたか」。
「娘が一人」。
「まだ存命ですか」。
「いや、旦那様、夙に亡くなっています。亡くなった罰当たり者です。母親の血を受け継いでいた」。
老ラダリンスキーは問うように見つめた。
「そう、母親です。きれいな女でした。男達は皆追っかけていた。聖職候補者もこちらに来ていました。ある日曜日、老牧師のレッダーホーゼが、百歳の年になっていましたが、足を挫いて、そこで聖職候補生殿が説教壇に立って、説教しました。ヴェンデリーン・ピュテルケは、当時我らの村長でしたが、私にこう言いました。『クーバルケ、奴は物分かりがいい』。実際物分かりが良かった。しかし何の物分かりか。夕方両人は駆け落ちしました。ポンメルン地方へ、その後、カミーンかコルベルクへ。そこで彼は塩検査官になった。しかし長く続かず、残念な最後を迎えた」。
「それで娘さんは」。
「娘は残っていました。十七歳のときまで。それから娘も飛び出ました。皆が同じようなものです。蒔いた種は刈らねばならない。しかし今は草が育っています[時が経った]」。
この言葉のとき彼らは再び領主の館の裏側へ来ていた。そして老クーバルケは中庭のドアを開けた。鈍い明かりの裏玄関で彼らはイエーツェに出会った。
「神父さん、お休み」とラダリンスキーは言った、「色々体験なさったのですね」。
「それでは、旦那様。草はどこにでも生えるものです」。

第二十六章
二つの葬儀

朝九時にラダリンスキーはビヤラノヴォへの旅を続けようと思っていた。そしてこの時が来たとき、彼は館を辞去して、今や冬の装いの寒々として胡桃の木の並木道を上がって、祭壇にある棺を迎えに行った。彼と一緒だったのは、ベルントとレーヴィーンだけであった。彼らの隣ではバネの上の軽馬車が揺れていた。一方ただ一頭の馬で引かれた幌付き橇は十歩から二十歩先を進んでいた。それは「ブランデンブルク稜堡」への遠征を一緒にした橇と同じで、バメが予感して「棺の橇」と名付けていたものであった。パハリーがまた轅台に座っていて、すべては三日前と同じであったが、ただ馬の高い首輪には、古い金属の鐙に掛けられて、ただ一個の橇の小鐘が左右に揺れていた。
さて上に着いた。幌付き橇は直接玄関の段まで達していた。一方軽馬車は若干離れて止まっていた。教会は開けられた。パハリーも一緒に入った。そして一瞬遅れてラダリンスキーの従者達も現れた。彼らは中央通路を上がって祭壇まで歩んで行った。ベルントは十字架像に気付いて、誰がそこに置いたのか十分に察した。人々は棺の両側に立った。一言の言葉も発せられなかった。最後に枢密顧問官が言った。「それでは外に運んでおくれ」。そしてその際十字架像を取って、また自分が取って来た祭壇に戻そうとした。しかし老フ

ィッツェヴィッツが先手を打って、言った。「よくない、ラダリンスキー、それはよくない。これは貴方のだ。私の祖父がそれをこの教会に奉納した。私は新しいのを奉納しよう。持って行って欲しい。そうお願いする。貴方は、望もうと、望むまいと、貴方の御子息を私に託された。そして貴方にお返しできる一切のものは、この十字架だ。私もその十字架を担ったのだ」。

ラダリンスキーの唇は震えた。彼は話せなかった、あるいは話そうとしなかった。それから喜びで感動して、棺掛けから一本の細長い条を切り取って、この条を棺の中央に飾り帯のように置いて、この黒い飾り帯の結び目の中に十字架像を押し込んだ。そうしないと止めるものがなかったであろうからである。その後彼は脇に退いて、パハリーと従者が今や取っ手を掴んで、死者を運び出した。

十五分後橇は、それまでゆっくりと高台を進んでいたが、左手に折れて、山腹を無事下ってから、川沿いの柳の間をフランクフルトへと向かった。軽馬車が後に続いた。幌付きのクッションの座席がでこぼこ道で前後左右に揺れる間に、老ラダリンスキーの心の中では思い出が蘇って来た。彼は、ずっとはるか昔、同じような雪道をビヤラノヴォを目指して行ったときのかの旅を思い出さないわけに行かなかった。しかし当時は何と異なっていたことか。新婚旅行であった。女性達の中で最も魅力的な女性が、　ー　まさにようやく彼の妻となって、　ー　大胆な笑い声の下、彼の側に寄り添っていた。雪が舞い、馬は飛ぶように行き、新たな休憩の場のたびに、新たな花と新たな忠誠が捧げられた。彼は愛そのものがそうであるように、創意に富んでいた。そして今や彼は、岸辺の柳に触れながら、ゆっくりと墓所に向かって進む橇しか目にするものはなかった。その墓所はもはや彼のものではなくなっていて、その扉に死者のために客人としての滞在を頼まなければならなかった。これは耐えられそうにないことであった。小鐘の音が鋭くこっそりと響いた、そして鋭く、こっそりと彼の涙が落ちた。

老枢密顧問官が、ベルントとレーヴィーンに伴われて、教会へと上って行った同じ時刻に、バメも自分の軽騎兵の上着を直用して、領主の館から出て行った。しかしほとんど反対の方向へ赴いた。彼にとって、午前中に行われる予定のホッペンマリーケンの葬儀に出席することが肝要であった。この折、更に自分が格別関心を抱くこの対象観察に期待を抱いていた。彼が小家の周りの生垣の近くへ来たとき、道の両側で色々な賤民が格子垣を形成していると気付いた。一部は昨日クニーハーゼ家の下僕が棺を下ろす際、手伝った同じ老婆達であった。バメは挨拶して、自分の背後でこう囁かれるのを聞いて、満更でもなかった。「あの人だよ。おかしな恰好だがね」。その後で開け放たれた家へ入って行った。強い一陣の風が吹いてきた。しかしこの風にもかかわらず、温かかった。暖炉が息をしていて、玄関の竈では大きな薪が燃えていた。奇妙な具合に幾つかの料理の鍋が置かれていた。森耕地の人々が用意したもので、ホッペンマリーケンの費用で立派な一日にしたいのであった。相続人はいなかった。クニーハーゼは大目に見ていた。

バメは若干心待ちにしていた。しかし自分の期待以上のものを見いだした。二脚の椅子の上に、旅行トランクの流儀で、開いた棺が置かれていて、棺の縁に黒い鳥が止まっていた。カラスに似ていたが、ただはるかにより小さかった。この小鳥は侵入者に気付くと、一つの縁から別の縁へぴょんと飛び移って、この縁から棺の蓋へ移った。この蓋は真っ青

な留め金が付いていて、別の二脚の椅子に置かれていた。この場所移動はあたかもバメに対する敬意から行われたかのような印象を与えた。バメはそう解して、鳥に近寄り、鳥を称えた。「健気な奴だ。作法を弁えておる」。しかしその後すぐに彼は自分の本来の目的を思い出して、壁柱に接して置かれているテーブル、つまり中に賛美歌本とカルタの収まっているテーブルを押し退けて、自分の席を確保して、死者を快適に、立派な照明の下で観察することにした。この死者は盛装していて、ホッペンマリーケンに特有なものは何も忘れられていなかった。白髪は黒い頭巾の下に結ばれていた。スカーフの先端は上に高く立っていて、彼女の対の太い雨靴は半分靴底が棺から出ていた。右手に彼女は鉤状杖を手にしていたが、それは長すぎるので、半分に折られていて、下の半分はその横にあった。彼女の顔の表情はほとんど変わっていなかった。策謀的なものは死で消え去っていた。しかし反抗的なものは残っていた。バメはうっとりとした。彼は鉤状杖を少しばかり脇に寄せて、それから思わず言った。「小人の司教」、立派な聞き手が欠けているために、これは差し当たり自賛した見解であった。それからアルコーヴを覗き込んだ。そこには大きなカキドオシの束が左右に揺れていた。そしてここでもすべてが「華麗」であると思った。

彼がまた前面の部屋に入ったとき、黒い鳥が棺の縁へ飛んで戻った。バメは小鳥が何を欲しているか不思議に思い、好奇心を起こして、近寄って、小鳥が死者からまったく本当に餌を貰っていると知った。つまり近隣の女達がナナカマドの実と小麦の穀粒を彼女の開けた左の手のひらに置いていたのである。これは森耕地のポエジーと言えるものであった。

バメは頷いて、また観察の位置に戻ろうと思った。しかしこの魔法の時は終わろうとしているとやがて確信しなければならなかった。

格子棒の間から彼と彼の赤い軽騎兵の上着を見下ろしていたホッペンマリーケンの小鳥達の好奇心、それにはひょっとしたら耐えられたかもしれない。しかし外に立っている老婆や子供達のぽかんと見つめている様は、不快に、煩わしいものになり始めていた。とても煩わしいもので、結局運び手達の登場が告げられると彼は嬉しく思った。この運び手達は実際すぐその後入って来て、棺を閉めて、教会墓地へ動き始めた。運び手の一人はハンネ・ボーグンで、彼は左手の前の取っ手を握っており、その右手には萎えた鋏研ぎ師がいた。この研ぎ師の下の脚の恰好は二等辺三角形であった。「これは気に入った」とバメは言って、自分の師匠を見いだして喜び、最初の喪中の家の者として葬列に加わった。一方全「森耕地」人が自ら従っていた。皆が陽気であった。子供達は雪投げをしていて、クニーハーゼの鳩が行列の上を飛んだ。あたかも白雪姫かどこかのメルヘンの王女の葬儀のようであった。

そのようにして彼らは教会墓地の正面まで来た。運び手達は、疲れて、ここでその位置を交替した。ただハンネ・ボーグンは、ただ右手した有しなかったので、棺の左側に立ったままであった。さて墓の間をまた行列は進み始めて、教会墓地の別の端で止まった。ここの荒石壁のすぐ側に一つの墓が掘られた。そこは夏には薊やノコギリソウが繁茂する所で、よく山羊が草を食む所であった。墓の横ではザイデントプフとクニーハーゼが立っていて、両者の向かい側にはベルントとレーヴィーンが立っていた。二人は行列が近付いて来るのに気付いて、ラダリンスキーと別れた後すぐ教会の丘に残っていたのであった。村人の中では、二，三人の小百姓や小屋住まいの者を除いて、ただミークライだけが来ていた。彼は他の皆と同様に、「名誉ある葬儀」に確かに反対であったのであるが、この反対

を表明しない二つの理由があったのである。それは第一に、「何かが生じた場合」、　ー
　これに彼は疑念を抱いていなかったが、　ー　彼自身としては遅滞したくなかったのであり、第二に、これが最も肝要であったが、水車小屋に正午と夕方に参上すると伝えられていたウーレンホルストに対し、新たな「ザイデントプフ流儀」の話題を提供するためであった。
　運び手達はその荷を置いた。そして棺を下に下ろした。そしてすべての森耕地の子供達が興味深く墓を取り囲んでいるとき、ザイデントプフは澄んだ声で言った。「我々は彼女の魂を神に委ねましょう。彼女の生活はキリスト教徒の生活ではなかった。しかし彼女の最後の日は、多くを帳消しにしてくれるものであったと願っています。彼女は誰も好きではなかった。一人を除いて。そしてこの一人、今彼女の墓の許に立っている一人を彼女は救ったのです。あるいは救助の手助けをしたのです。彼女の策謀は、いつもは邪悪なものでしたが、ここでは善なるものとなりました。この善なるものが十分に物を言うものでなくても、神様の慈悲が加わりますよう、そしてまだ欠けているものを恵んでくだいますよう願います。彼女のために祈りましょう」。そう言って、彼は帽子を取り、主の祈りを捧げた。二人の脇に立っている森耕地の女達がくすくす笑っていた。
　「何だね。我らの老ザイデントプフは、どうしたのかね。誰に対しても祈るのかい。誰でも救ってやりたいのかい」。
　「そうかも。でも彼の祈りではホッペンマリーケンは救われまい」。

　二時間後ウーレンホルストとミークライは食卓に座っていた。カリースのクリームポットも招待されていた。すでに三本目のグラーヴ・ワインが貯蔵庫から取り寄せられていた。皆が「立派なワイン」を飲みたがっていて、ウーレンホルストは刻々と上機嫌になっていた。もっともなことであった。豊かな鋸引きの水車屋が今日は丸太を挽くばかりでなく、ザイデントプフも真っ二つに挽き切っていたからである。彼が最後にホッペンマリーケンの住まいへのバメの訪問について述べたとき、ウーレンホルストは重々しく、前屈みになって言った。「それほど自然なことはない。二人は兄と妹だ」。
　ミークライは、この聖職候補生が口にする奇蹟のご託宣には慣れていたけれども、若干驚いていた。しかしウーレンホルスト自身は同じ調子で続けた。「この世のことではない。しかし二人は同じ父親を有している。そして両人とも同じ所で生まれたのだ。どこか。それを言う必要はないだろう」。
　クリームポットは耳をそばだてた。（それは若干居酒屋向きであった）。そして五分と経たないうちに、二人の百姓は確信した。彼らの聖職候補生は今度もまた予言者の目を有していたし、図星であった、と。「私は間違っているかもしれない」とウーレンホルストは言った、謙虚な調子に移りながら、「しかし間違いの可能性は少ない」。
　そう言って会話は終わった。

　午後の始めに、領主の館の前に軽四輪馬車が止まった。ポニーが繋がれていた。バメはまた自分の荘園に戻りたがっていて、正義を気にしていた。「牧師のせいなのだ。フィッツェヴィッツ」とベルントがもう数日滞在するよう要請したとき、彼の最後の言葉を発していた、「牧師に領主を恐れるようしなければならない。さもないと奴は高慢になって、

説教壇からグロース・クヴィルルスドルフの人々にこう言うのだ。ホッペンマリーケンは私への愛から自殺した、と。勿論皆、暗黙裡にだ。いつも聖書を引用して。意志がありさえすれば、旧約聖書に、結局必要な箇所がすべて見つかる」。こう言って、老公は手綱を取ると、凶暴な猟師のように中庭から下って行った。最初は平野を過ぎ、それから唐檜の小森の側を過ぎて、絶えずキュストリーンの方向へ向かった。

それは三時のことであった。すでに、暗くならないうちに、カリース・クリームポットが居酒屋に現れた。差し当たり、亭主のシャルヴェンカを相手にせざるを得なかった。まだ他の百姓達は誰もいなかったからである。

「さて将軍も去って行ったな」とクリームポットは言って、また「坩堝のシュルツェ」とシュヴェートの辺境伯について話したいかのような意味深な表情をしていた。「今日の午後炎のように赤い栗毛の雌馬に乗ってフランクフルトへ行くのを見た。森耕地を越えて行ったぞ。鐘が四つの時」。

「それは違う、クリームポット」とシャルヴェンカは答えた。

「どうして違うのだ」。

「第一に栗毛の雌馬は亡くなっている。私はそれが倒れるのを見た。ポプラから十歩と離れていなかった。後に教頭が射殺された所だ。第二に彼は今日の午後（将軍のことだが）我らの領主の軽四輪馬車で私の側を通り過ぎて行った。鐘が三つの時だ。ポニーが繋がれていた。シェットランド島のポニーは換え馬として進んでいた」。

カリースは頭を振った。「それは誤解だ、シャルヴェンカ。私が言いたいのはまさにそのことだ。キュストリーンへは軽四輪馬車で、フランクフルトへは栗毛の雌馬だった。雌馬が倒れるのを見たのか、分かった。死んでいるにせよ、そうでないにせよ、相違はない。そんな事はよくある。しかし彼について知って欲しいのはな。ウーレンホルストが、...」。

ここで会話は中断された。他の百姓達が入って来たからである。その中にはクニーハーゼもいた。カリースは彼を恐れていた。自分がウーレンホルストの羽根飾りで飾って、色々な悪ふざけの秘密集会の幻想を触れ回そうと思っているときは、殊に恐れていた。

第二十七章
「すると一人の王女が家にやって来て」

一週間が過ぎ去った。家の前に置かれていた麦藁束は取り除かれた。しかしあたかも支障となるような人がまだいるかのように、万事が小声でなされた。レナーテは、我々が彼女を最後に見かけたかの晩以来、二階から去ることはなくて、彼女のために、家の調子は静かに保たれていた。ベルントは旺盛に仕事をした。一階では、ショルレンマー叔母の格別の命令で、二，三の窓が開け放たれ、バメ的なものを再び一掃していた。そしてホッペンマリーケンの代わりに、　ー　彼女については三晩彼女の姿が墓地で目撃されたと村で噂になっていたが、　ー　クリストとハンネ・ボーグンが交替で現れて、手紙や新聞をテーブルに届けていた。まことにイエーツェ的時で、万事が静かで、灰色で、黒いゲートルを巻いていた。しかし老イエーツェ本人は、ほとんどもはや仕事をしていず、三十分蔓の敷物の横に座って、ヘクトーとお喋りをしていた。

かくて日々が過ぎて行った。マリーはよくもう午前にはやって来て、レナーテの所に上がって行き、彼女に朗読したり、語ったりした。ただトゥーバルについては彼女は語らなかった。その後で彼女を待っている角の部屋のレーヴィーンの許に赴いた。二人はそれから暖炉の側や、奥行きのある窓の壁龕[ニッチ]に腰かけ、過ぎた静かな日々を偲んだ。最も好んだのは、この前のクリスマスの祝いの時のかの素敵なお喋りの時で、二人は高いクリスマス・ツリーを間に、その高い先端越しに、黄金の胡桃を投げたり、捕ったりした時のことであった。自分達の幸せについては、二人は黙っていた。その幸せが名付けられたら、逃げ去ってしまうかもしれないと案じていたのである。偶然ただ一度だけそれに至った。ボールスドルフの牧師が、仕事の用で、ホーエン・フィーツの同僚の許に立ち寄って、同時に村長屋敷へも訪問して来た日のことであった。マリーがそのことを語ると、レーヴィーンが言った。「マリー、おまえは知らないだろうが、この古いボールスドルフとその教会に私は大変お世話になっているのだ。とりわけおまえを得たのだ。そこで私は癒え始めた。まだ自分が病気だと気付く以前にな。何と私は盲目で、何と利己的であったことか。でもそこで目が見え始めて、おまえと、私の幸せを得たのだ、私の黄金の星の王女を」。

この言葉の直後、ベルントが部屋に入って来て、マリーの赤面に気付いて、彼女に微笑しながら、父親らしい優しさで額に接吻した。彼女は下の方を見て、感動して震えていた。この瞬間が何を意味しているか感じたからである。すぐその後彼女は去って、父親と息子だけにした。

彼女が去ると、ベルントが言った。「私は、レーヴィーン、おまえ達の幸せが嬉しい。外の広間に掛かっているすべてのフィッツェヴィッツ家の先祖に何と言って良いか、まだ分からないけれどもな。早晩、先祖のいる別の場に行ったときのことだ。しかしまだ先祖の前で幾多の別のことで責任がある。不忠誠と反抗は実際家訓にはない。思うに一つ一つは関連し合っており、小さなものは大きなものの中に巻き込まれている。これ以上このことは話すまい。星々の中に別な運命が記されているのであれば、フランス人の弾が決することだろう。それは御免だが。しかし我々がおまえをまた無事得たら、結婚式を挙げることになろう。一つのことは承知している。彼女は系統樹の支障にはなろうが、評判の支障にはならない。評判も志操も妨げない。そしてこの二つのことが、貴族の有する最良のものだ」。

更に数日経った。レナーテはその孤独な時間に、自分の魂の陽気さは取り戻していなかったが、明澄さを取り戻していて、再び自分の家族の中に溶け込んで座っていた。翌朝レーヴィーンとヒルシュフェルトはブレスラウへ出発する予定であった。彼らはその旅行の準備をしていて、丁度旅行カバンを詰めていたとき、角の窓から、車寄せの支柱の間に、突然一人の騎乗者に気付いた。シェットランド島のポニーに載って中庭へ乗り入れて来た。つまりバメであった。皆が窓際に走って来た。ショルレンマー叔母本人も一瞬自分の嫌悪を忘れていた。というのは彼女は論争好きで、今や新たな諍いの展望が出来たからである。最も喜んだのはベルントであった。ベルントはこの老公の奇想や虚栄心にあきれることを止めて久しかったのであった。

「それでは、バメよ」とバメが腰かけて、リキュール酒の盆を次々と済ましたとき、ベルントは始めた、「グロース・クヴィルルスドルフの状況はどうだった。村や牧師館や説

教壇は」。

「良かったよ、フィッツェヴィッツ、思ったより良かった。彼はまさに私と講和を結んだ。すぐ翌日が教会だった。そこで様子が分かるに違いない。好奇心を起こして、私は三回目の鐘さえ待たずに、出掛けた。すると勿論罰を受けたよ。オルガン演奏が終わろうとせずに、数回も、賛美歌集をすべて歌い尽くしたような気がしたからな。しかしようやく彼が現れた、彼が何について説教したと思うかい。サウルとダヴィデについて説教した。再三こう言われたのだ。『サウルは千回打ち負かした、しかしダヴィデは一万回打ち負かした』と。それで、フィッツェヴィッツよ、我々は我々の評判にはまだ本来この一万回が欠けていることを最も良く承知しておろう。しかし結局、永遠に小さなダヴィデ、この者に最後何が出来ようか。最初は抗ったよ、しかし遂には折れた。それで、レディーの方々よ、御存じのように、特に大事と思っている貴女が、親愛なるショルレンマー叔母さん、御存じのように、貴方の屋根の下に滞在している者は何者かという次第。年を取りさえすれば、百戦錬磨という古い命題の新しい証明だ」。

お喋りは更に続いた。正午になる前に、　ー　正餐は四時前にはなされないと決められていて、　ー　バメは、ドロッセルシュタインの許に出掛けて、「東プロイセンの心意気を徹底的に試そう」と提案した。

ベルントはその気になった。そして数分後に馬が準備された。

彼らがミークライの水車小屋を通り過ぎるとき、ベルントが言った。

「貴方に話そうと思っていたが、バメよ、我々の家には婚約者がいる」。

「そうか、ショルレンマー叔母か」。

「違う」。

「叔母さんは祈ってザイデントプフを狙っていると思っていた。脂身があれば、鼠は捕らえられる。寡夫で骨壺収集者は、鶉のように罠に掛かりやすい。このザイデントプフときたら。彼の記念祭の戸棚を見てみろ。亡き奥方に贈られた物をすべて後生大事に保っている。このようなカルトはいつも危険だ」。

ベルントは笑った。

「バメよ、いつものように想像を逞しくしているなあ。しかし事実は容赦ない。それではない。ザイデントプフではない」。

「では誰なのだ」。

「レーヴィーン」。

「おめでとう。しかしそれは新郎で、片割れだ。もう一人は」。

「レーヴィーンとマリー・クニーハーゼ。村長クニーハーゼの養女だ」。

バメはシェットランド島のポニーを回して、フィッツェヴィッツと垂直になるようにした。そして小さな目で極めて率直な驚きを表明して見つめていた。

「驚いているのかい」とフィッツェヴィッツは言った。

「そうだ」。

「それで反対か」。

「いや、フィッツェヴィッツよ、その真逆だ。私は十年来、第二十九号の報知紙とクララ家の大窃盗を除いて、これほど嬉しい知らせはない。あの娘はとても魅力的な娘だ。私はこの方面では、自ら大したものを有しない人々皆と同様に一家言ある。もう一度おめで

とうだ。何だと、フィッツェヴィッツ、良い品種が出来るぞ」。
ベルントは答えようとした。しかし老公は、思わず、好きなテーマにぶつかって、言葉をまた手放す気はほとんどなかった。
「新鮮な血だ」と彼は続けた、「新鮮な血、フィッツェヴィッツよ。これが肝心だ。私の見解は昨日今日のものではない。貴方も御存じだろう。私は従兄弟主義、従姉妹主義を毛嫌いしている。特に、結婚や遺伝ということになると最もそうだ。貴方の姉君、伯爵夫人もそのような考えで、私は一度ならず彼女の基本方針の吐露を聞いたことがある。私自身感銘を受けた。有り難い思い出だ。素晴らしい女性だった。いや、フィッツェヴィッツよ、我々は旧弊を廃しなければならない。それはお仕舞い。これまではどんなだったか。ツィーテン家の男は、バメ家の嫁を、バメ家の男はツィーテン家の嫁をだった。それで結局どうなったか。ここの私だ」。そう言って、彼は鯨骨杖で自分の高い靴の筒を叩いた。「そう、ここの私だ。フィッツェヴィッツよ、私は自分を人類の素晴らしい見本と思うほど、そんな阿呆ではない」。
ベルントは黙っていた。もっと聞きたいと思ったからである。しかしバメは長く待たせはしなかった。
「フィッツェヴィッツよ、我々は二人っきりだ」と彼は続けた、「それで我らの心情を吐露しても危険ではない。我々は瘋癲病院で育ったかのような気がすることがある。二種類の家系からでは何にもならない。少なくとも一つのことだけは我々が独占していると思っていた。勇気だ。しかしあの白子のグレルがやって来て、手にサーベルを持って、英雄のように死んだ。教頭については言うまでもない。このような死を前にしては古い兵士[古武士]も畏れ入るものだ。こうしたことすべてはどこから来たか。貴方は御存じだろう。向こうからだ。西風だ。フランス人の風袋野郎は大したものには思えない。しかし奴等の詰まらぬ話しにはいつも一片の真理がある。彼らの友愛は大したものにならないだろう。自由もそうだ。しかし彼らがその間に置いたもの[平等]には、何か大したものがある。だって、結局は、人間は人間であるに他ならないのだから。私はそう話して良いだろう、フィッツェヴィッツよ。というのはバメ家は私で死に絶えるからだ。神殿のカーテンが引き裂かれる[イエスの死、マタイ 27,51]ことはない出来事だ。同姓の者すらいないのだ。その身分意識を侮辱したり、その意識に損害を与えることが出来そうな同姓の者すら。ここだけの話しだが、侮辱というのは我々の許ではいつも[相続]損害で始まるからな」。
こう言いながら、彼らは公園の壁の所まで来ていて、数分後にはドロッセルシュタインの庭園の広間の前で止まった。

ホーエン・ツィエーザルへの途上、このような会話がなされる間に、レナーテとマリーもお喋りしていた。二人は部屋の奥に引き込んで、大きな花柄模様のソファーに腰かけていた。レーヴィーンもやって来た。しかし明らかに放心していて、数分間彼女らの間に座っていたが、マリーの手を握らず、彼女に視線を向けないでいた。
マリー自身は、彼女の全本性のまま屈託がなく、要求がましくなく、それに気付いていないように見えた。しかしレナーテが言った。
「奇妙なカップルね。互いに優しくすることさえないのね」。
「あきれないでね」とマリーは笑った。レーヴィーンが付け加えた。「長いこと兄妹の

ようだったしな。そのうち上手く行くよ。そうだろう、マリー」。
彼女の頬を染めた赤色が、他のどの返事にも勝っていた。

この後、 ー それはまた土曜日であったが、 ー レーヴィーンとヒルシュフェルトは牧師館へ行って、ザイデントプフに別れを告げた。彼はベックマンに取りかかっていた[『マルク・ブランデンブルクの選帝侯国の歴史』1751]。そして彼の凱旋門の戸棚のドアが開け放たれているばかりでなく、中央の板も引き出されていた。その上には収集の三つの主要作が席を占めていて、クリスマスの二日目からはオーディンの馬車もあった。ザイデントプフの週の予定を知っている人ならば、この光景を見てびっくりしなかったことであろう。つまり彼はすでに金曜日に自分の説教を仕上げていて、その間の日[土曜日]は自分の魂の保養に回すことが出来る賢い説教者達の一人であったのである。そのために適しているのは「セムノネス族の最終手段」の他に何があろうか。このような保養過程の邪魔をすることは一般的には許されないことであった。しかし今日は、レーヴィーンとヒルシュフェルトは、彼に別れを言うために来たのであって、このような邪魔は問題にならなかった。会話の流れの中で、朝九時に自分達はフランクフルトへ出発します。そこで正午にはもうベルリンの友人達と合流する予定ですと話された。こうしたこと一切は単に軽く言い添えられた。しかしザイデントプフはこの正確な時間の告知によって、ただ教会への彼らの不参詣への弁明がなされていると多分に感じた。それは少しばかり彼の気分を害した。彼はすべての牧師達の自負を有していたのである。しかしすぐにまた気を取り直して、彼はレーヴィーンに衷心から達者でと願いを述べた。それから騎兵隊長に向かって、「これまで一緒に過ごした日々」について話した。
「嵐のような日々でした」と彼は結んだ。
「それでも嵐の前の日々ですよ」とヒルシュフェルトは答えた。

さて朝の九時になった。ヘクトーは苦労して、砂岩の段の所までよろよろと来て、そしてこの本では最後にポニーどもが繋がれた。ポニーどもの鈴が明るく響いた。そしてクリストの古い記章の付いた古い帽子には今長い緑色のリボンがはためいていた。彼の妻は赤色を選ぼうとした。しかし彼は緑色を主張した。
さてもう別れは済んでいた。
森耕地を越えて、レーヴィーンとヒルシュフェルトの座っている橇は、ホッペンマリーケンの家の側を過ぎて、飛んで行った。橇がすぐその後また丘を下り、川岸に沿って進んで行くとき、突然鈍い雷のような音が転がって来て、遠くへ木霊した。
「氷が割れた」とヒルシュフェルトが言った、「我らの遠征には幸先良い兆候だ」。
この瞬間ホーエン・フィーツの鐘も鳴り始めた。両友人は思わず今一度振り返った。
「この響きの意味は何だろう」とレーヴィーンは尋ねた。
「色々な事象の世界だ。戦争と平和と最後にはまた結婚式の。結婚式は最も幸せな結婚式の一つだ。そして私はその客人達の一人だ」。
「貴方は、ヒルシュフェルトよ、良く分かっているように話している」とレーヴィーンは感動した心で答えた。
「そうフィッツェヴィッツよ、私には分かっている。私には未来が見える」。

同じ日曜日の午後、女性達も角の部屋に座っていた。よく我々が出会った所である。彼女達の涙は乾いていた。ショルレンマー叔母は別れや感動についての力強い格言で助け船を出していた。ただマリーの長く、黒い睫毛にはまだ個々の滴が残っていた。

レナーテは彼女に接吻して言った。「よしなさい、マリー。私の信じている三つのことを教えてあげるから」。

「皆理性的人間はそうしますよ」とショルレンマー叔母は言った、「つまりキリスト教徒は皆です」。

「まず私が信じているのは」とレナーテが続けた、「百年暦、二番目が火事避け呪文、三番目が格言に民衆の歌よ。それで私が最も信じているのは何だと思う」。

「何」。

「すると一人の王女が家にやって来て」。

マリーが微笑した。

しかしショルレンマー叔母が言った。「馬鹿ね。私がもっと良い格言を教えましょう」。

「何」。

「神を愛する者には、なべて丸く収まる[ローマの信徒への手紙 8,28]」。

第二十八章
レナーテの日記から

物語は婚約あるいは結婚式で終わるものである。しかし今日までホーエン・フィーツの領主の館に残っていて、当地の貴重な遺産として保管されている日記を見ると、更なる未来を覗くことが出来る。それはレナーテの筆記による日記で、その中から次のことを書き写すことにする。

「レーヴィーンが戻って来た。私はただこの日を待っていた。長いこと望んでいたように、一つの日記を書き始めるためである。額の上に残るサーベルの傷は彼に良く似合っている。彼が有していた柔和な面影はない。マリーもそう思っている。彼女は何と幸せだったことか。でも彼女は幸福であると共に平静でもあった。これが私にはとても嬉しかった。騒ぎは私には疎ましいから。感情の騒ぎときたら堪らない。レーヴィーンの到着の一時間前に、グレル用に決められていた墓石の荷を解いていたのは、奇妙なことだった。小さな大理石。名前と日付とヘルダーリンの詩行を読んだときには、心動かされた。イエーツェは墓石を隠そうとした。しかしマリーネは言った。「いいえ、それは幸運を意味するのよ」と。勿論善良なショルレンマー叔母はヴェンド族の迷信が消えていないことにかっとなって怒っていた。(レーヴィーンはグーゼを引き受ける。そこに二人は若いカップルとして住む予定。それが最善)」。

「昨日結婚式だった。ボールスドルフで。レーヴィーンがそれを主張した。彼の人生が決定付けられた所で彼は結婚式を挙げたいのであった。私どもは三台の馬車で向こうへ行った。私どもと一緒なのはドロッセルシュタインとヒルシュフェルト、(腕を一本なくし

ていた、残念ながら右腕を)。バメは秘密めいて、『自分の花嫁への贈り物は差し当たり埋葬した』と釈明した。しかし復活の日が来るでありましょう、と。ショルレンマー叔母はこの表現に怒っていた。しかし私ども他の者達は好奇心を示した。ザイデントプフが式辞を述べた。彼がこれほど上手く語ったことはなかった。心が弁士を作るというのはやはり本当だ。彼は聖書のテキストを用いた。しかし本来語ったのは『そして星空を歩いて行ける』の詩行についてであった。結婚式の後、行政官の屋敷で軽食を摂った。若い夫人は更に可愛くなっていた。またカティンカを思い出させた。帰路は幌のない馬車。うっとりした。浮遊する夏の蜘蛛の糸が飛んで来て、マリーの緑の花輪に掛かった。二番目の花嫁のヴェールのようであった。バメはただこの糸の大衆的名前だけを知っていて、『今年の九月の無愛想』と息巻いていたけれども、この糸は『マリアの糸』とも言うと私が言ったら、落ち着いていた。ちなみにレンマーヒルトとザイデントプフは兄弟の盃を交わした。そして文通を望んでいる。レンマーヒルトも髑髏を集めていて、ゲルマン派である。従って反トゥルガニー」。

「今日は私どもの愛するザイデントプフを終の墓地へ送った。レーヴィーンとマリーもグーゼからやって来た。三人の大きくなった子供達も。彼らは今年グーゼで立派に育ったライラックの花輪も持って来た。ドルゲリーンのツァーベル牧師が弔辞を述べた。心の籠もった普通の弔辞。父上はそう見なそうとしない。父上はいつも独自の見解を添える。トゥルガニーも来た。とても動揺していた。私どもが帰るとき、彼が私を案内した。そしていつもの流儀で言った。これで私はこの国土を論駁されることなくヴェンド族のものと宣言できましょう、しかしそれは遠慮しよう、と」。

「カティンカからの手紙（パリから)。共感を示しているけれども、とても高貴。私どもは小さな人々になってしまった。彼女が知っているのはただ二つのこと。ポーランドと『教会』」。

「私ども、父上とショルレンマー叔母と私は、昨日向こうのグーゼに行ってきた。食卓に着いていると、ゼーローの領主裁判所長がおいでになった。自ら当地の裁判所で起草された記録を手渡された。宛先は『マリー・フォン・フィッツェヴィッツ夫人宛。私の死去後に宛先の夫人の許へ。バメ。陸軍少将』。私どもは開けて読んだ。彼はマリーに自分の全財産を遺贈していた。すべてバメ風な表現であった。最後にこうあった。『私は早くに、見せかけはほとんど意味がないと知りました』。マリーは同じようなことを彼に対して述べたことがあると思い出した。皆がおめでとうと言った。ただショルレンマー叔母は突き返すことを要求した。『これには何の恵みもない』と。しかしマリーは言った。『私はそれほど敬虔ではありません』と。これには皆が心から笑った。最後にショルレンマー叔母も笑った」。

「そして私は今や一人っきりになる。全く一人っきりに。明日レーヴィーンがグーゼを去って、古いホーエン・フィーツに戻って来る。私と彼にとって大事な家に。これまで同様彼は祝福されて欲しい。祝福されることだろう。立派な天使を連れているのだから。私

の大事なマリーを。マリーは最も辛い試練に耐えて来た。そして幸運は彼女を本来の彼女のままに育てて来た。謙虚で、真実で、簡素であるようにと。だから私は彼らと一緒にこのまま暮らせることだろう。でも私は彼らの家のショルレンマー叔母になりたくない。それに私には歌や格言が欠けている。それで私は私どもの古い尼僧院『リンドー修道院』へ行くことにする。そこが私にふさわしい。私は自分自身と語っていたいし、慈善の静かな仕事に憧れる。私が更に憧れているのはただ一つだけである。神々しい世界がある。私の心がそう語っている。心が私をその世界に導いて行く」。

ここで日記は終わっている。

二つのマルク地方の湖の間の狭い岬に、貴族のリンドー修道院[Gudelack 湖畔]がある。それは古くからの修道院の建物で、教会と食堂があるが、すべて廃墟となっていて、その廃墟な周りに静かな公園があり、埋葬地となっている。あるいはまた公園となった埋葬地である。花壇や墓石、ライラックの茂み、それに墓石の間で遊ぶ町から来た子供達が見られる。

そしてこれらの墓石の一つに私は立っていて、沈む夕陽を見ていた。夕陽はすぐ私の前の修道院と静かな湖面を金色に染めていた。何と素敵なことか。それは光と平和の眺めであった。

離れるときようやく私はその石に記されている名前を読んだ。

レナーテ・フォン・フィッツェヴィッツ

解説

恒吉法海

本書はドイツの作家テーオドール・フォンターネ（一八一九－一八九八）の最初の長編小説『嵐の前』（一八七八年）の翻訳である。訳者の本棚に dtv 版で一九八三年来置かれていたが、読まれることなく、三十七年間放置されていた。長年従事してきたジャン・パウル（一七六三－一八二五）関係の翻訳が一段落し、次の翻訳をと物色していたところ、ジャン・パウルの伝記作者ギュンター・デ・ブロインが一八〇〇年代初頭のベルリン史に精力的に取り組んでいるのを知った。デ・ブロインの仕事の紹介も考えたが、版権等を考えると、すでに古典となっている作家の本、ジャン・パウルの晩年の時代に関連する本を翻訳する方が出版社に負担が少なく、本とならない場合は大学のリポジトリで紹介すればいいと考えて翻訳することにした。二〇二〇年に始めた試訳は二月四日から七月六日までの五ヵ月要し、紙に訳してワープロにその都度収めて行った。フォンターネを読むのは、ほとんど初めてで、『嵐の前』も初めて訳しながら読んだ。感想は、傑作、生きているうちに読めて良かった。閻魔様に会ったら、私はドイツ文学を専攻した、閻魔様は『嵐の前』を読みましたか、と尋ねようという感想を得た。

そんなわけで、フォンターネの文献は何も知らないので、安易であるが、まずはネットの情報を紹介し、後若干手持ちの情報で補足することにしたい。

あるドイツの出版社の宣伝文（Insel-Taschenbücher）

「『嵐の前』、一八七八年出版、フォンターネの最初の長編小説である。この長編小説はその普遍性で、トルストイの『戦争と平和』に迫るものである。トルストイが当時の全ロシアを描写しているとすれば、フォンターネでは当時の全プロイセンが出現している。解放戦争前夜の歴史的状況、宮廷生活、ベルリンの生活、田舎での生活が描写されている。歴代の城ホーエン・フィーツが地域的な枠を形成しており、中心人物はレーヴィーン・フォン・フィッツェヴィッツであり、フォンターネはこの人物に Friedrich August Ludwig von der Marwitz の面影を与えた。

プロイセンは不安と不決断の状況にあり、フランスとの同盟を強いられたまま、フォン・シュタイン男爵はナポレオンによって追放されていた。ナポレオン下の全同盟軍は最後の遠征を行い、モスクワは焼け、ナポレオンは戦闘に敗れ、逃げなければならなかった。こうした背景の下、フォンターネは当時のプロイセンとヨーロッパの政治的状況の包括的な描写を行っている」。

眼目はトルストイの『戦争と平和』に匹敵する作品ということにあろう。英訳本も（オックスフォード大学出版会）、そのスケールは「トルストイが凌ぐのみ」と評価している。

次に若干正確さに不安もあるが、ドイツのウィキペディアからの紹介。少し変更。

「『嵐の前』はフォンターネの最初の長編小説で、解放戦争時代におけるすべての身分（市民、百姓、貴族）のプロイセン社会の描写である。筋の中心にいるのは、貴族の学生レーヴィーン・フォン・フィッツェヴィッツで、その個人的運命の中に歴史的時代の出来事が映し出されている。長編小説の舞台はホーエン・フィーツの城とグーゼの城であり、オーダー河畔のフランクフルトとベルリンである。

オーダーブルフの一八一二年から一八一三年の冬のこと。ホーエン・フィーツの村と領主の館では人々がナポレオンの進駐軍に対する国民的反撃への国王の合図を待っていた。

家父長のベルント・フォン・フィッツェヴィッツは　ー　史実の Friedrich August Ludwig von der Marwitz の像に従って描かれているが、　ー　すでに性急に国民軍を設立し、国王やその大臣達の認可がなくても反撃する決意である。国王に対する忠誠心よりも自分の国への忠誠心を大事にしているからである。彼は近隣の荘園の貴族達の同意を得ている。そして実際国民軍連隊の編制を始めた。計画されているのは、ロシア遠征に失敗して戻って来るフランスの連隊への襲撃である。ベルントの息子レーヴィーンは最初この計画に躊躇っている。プロイセンはまだナポレオンと同盟を結んでいるからである。クリスマスと大晦日の日々、家族は親しい仲間の間にいて、一八一三年の戦争を見据えての会話を行う。希望と不安が相半ばしている。

広範な民衆に愛国的熱狂が見られる中、レーヴィーンは恋していたポーランドの[義理の]従姉妹、カティンカ・フォン・ラダリンスキーがポーランド出身の貴族と駆け落ちして、傷心のうちにまたホーエン・フィーツに戻って来る。ホーエン・フィーツではバメ陸軍少将の下、国民軍の司令部が置かれている。レーヴィーンもこの国民軍に参加する。国民軍はフランクフルトの駐留フランス人部隊を襲撃するが､ロシアの部隊が約束を守らず、襲撃に失敗する。レーヴィーンは虜囚となる。レーヴィーンを救出する作戦が立てられ、この救出は成功するが、この際、カティンカの兄、従兄弟のトゥーバル・フォン・ラダリンスキーが一斉射撃を受けて、負傷し、その翌日の夜、亡くなる。レーヴィーンの妹、レナーテ・フォン・フィッツェヴィッツはトゥーバルを愛しており、彼女の伯母アメリー伯爵夫人の心積もりでは結婚する予定であったが、結婚しないままに終わる。

しかしレーヴィーンはマリー・クニーハーゼと結婚する。俳優の娘で、孤児となったとき､村長に育てられ､フィッツェヴィッツ家で兄妹と一緒に教育を受けていたのであった。古い予言によれば、やがて一人の王女がやって来て、家の呪いが解けるというものであった。身分の違う結婚であるが、父のベルント・フォン・フィッツェヴィッツはこう言う。『彼女は系統樹の支障にはなろうが、評判の支障にはならない。評判も志操も妨げない。そしてこの二つのことが、貴族の有する最良のものだ』」。

先の紹介では Friedrich August Ludwig von der Marwitz（1777-1837）は息子レーヴィーンに、ウィキペディアでは父のベルントに擬されている。父の方がマルヴィッツで言われる「国王との葛藤」やハルデンベルクとの交渉、簡素な大王行幸の印象、屋敷の火事の体験という点では近いかもしれない。しかし作品中ではレーヴィーンの学友としてマールヴィッツの名前が言及されているし、[Vgl. Theodor Fontane:Vor dem Sturm Roman aus dem Winter 1812 auf 13. Deutscher Taschenbuch Verlag. 2.Auflage 1983. S.442.　以下引用はこの版]、また囚人という点では息子にも近い[注１]。しかし更に dtv 版の S.442 の注をよく見ると、この学友のマルヴィッツは弟の Alexander von der Marwitz（1787-1814）のことのようで、モデル問題は執筆中に力点が兄から弟に移り、それと共に社会小説[Gesellschaftsroman.S.731]の性格を帯びるようになったらしい。以上は話しの筋である。文学作品の筋は観点次第で全く別様になるが、骨格を示せと言えば以上のようなことになろう。

次に問題点とおぼしきものを述べ、最後に面白いと思った点を述べよう。

一.　問題点

英訳者は解説でこう述べている。「一九四四年七月二〇日のクーデターの失敗はドイツの将校達に見られる上官への反抗の極端な難しさに最終的に起因するものである、それがアドルフ・ヒトラーであろうと。反抗は何か彼らの本能が反抗する何ものかである。反抗に賛同する何の訓練も受けていない」[注 2]。主人公の父ベルントは国王の認可、同意がなくてもプロイセンのために立ち上がろうとしているが、そのような例として、英訳者が強調しているのは次の三例である

一.1　一八〇七年六月のティルジットの和平後、シルは一八〇九年五月三十一日、国王の許可を得ずに、決死的蜂起を行い、オランダ軍、デンマーク軍の反撃に遭い戦死した。『嵐の前』では「シル」の肖像画は『居酒屋』にある(S.54)他、次のような説明が見られる。「しかしシル[1776-1809]がデンマークの軍隊に囲まれて、シュトラールズントの通りで全滅したとき、このシルの登場で彼の愛国主義が輝き出したのだが、彼の中でグレルの名前が強く意識されるようになって,..」(S.189)。「シルの軍も国王の意志とは敵対して行動し、それでも『国王陛下万歳』と叫びながら死にました。従わないでいながら、そうして初めて誠そのものとなる誠があるのです」(S.220)。

一.2　一八一二年三月ロシア遠征に対し、プロイセンの将校達が辞任し、ロシア側についた。その中には、Clausewitz、Boyen、Gneisenau がいた。従ってプロイセン人にしてみれば、敵味方に分かれて同胞が戦う事態になっていた。

『嵐の前』ではフリードリヒ大王の末弟がこう述べている。「軍隊でさえそうだ。お尋ねするが、私の尊い兄の存命時に三百人の将校達の辞任が有り得たことであろうか、あるいは考えられることでさえあったろうか。彼らの大元帥や君主の政治への公然たる抗議ではないか」(S.304f.)。

一.3　York von Wartenburg(1759-1830)が、一八一二年十二月三十日、ロシアの将軍に自ら部隊の中立を申し入れたという事件である。

作品中では以下のように扱われている。まずラダリンスキー家の舞踏会のとき、報告が入っている。＜「ヨルクは降伏した。マクドナル[ド]の副官がフランスの大使に知らせた。宰相は丁度国王の許に向かっている」＞(S.363)。

主人公レーヴィーンが受講しているフィヒテの授業で、フィヒテはこう論評している。「ヨルク将軍は降伏しました。この言葉は普通劣等な響きです。しかしそれ自体で良いもの、悪いものは何もありません。我々は将軍を知っており、それ故どのような精神で我々は彼の行為を解すべきか承知しています。私自身と致しましては、これはまず第一歩で、この第一歩は我々を貶めるように見えるが、この貶められた地点から我々を高みへ導く第一歩であると確信しています」(S.371)。

その後主人公達の会話がある。主人公はただの学生であるが、機密情報が入る立場にあることが分かる。

＜「皆芝居だろう。有り得ない。ヨルクを知っているが、正直な奴だが、ずる賢くもある。指示を受けていたのだろう」。

「そうは思わない。指示する時代じゃない。指示したら、受ける方ばかりでなく、与える方も束縛される。第三者を関与させたら、最悪だ。今最良なのは、その日暮らしだ。誰もが黙って受け取る唯一の指示は、自分で良いと思うことをしろ、結果は自己責任、ということだ」＞(S.372)。

この作品では、二月三日に国王の布告があったことになっている(Vgl.S.565)。歴史的にはこれは志願兵による猟兵軍編成の布告らしい。しかしこの作品ではこの二月の初頭にヒッペル起草の『私の国民へ』の布告[一八一三年三月十七日]があったとされており、若干曖昧ながらも、いよいよ国王が決断した布告とされている[S.588]。また注釈によると作中のザイデントプフの二月初頭の説教はシュライエルマッハーの三月二十八日の説教を参考にしているらしい。これらは作者がやはり国王の同意を襲撃の名聞として必要と判断したためか、そして失敗に導くオーダー川の凍結状態を計算にいれていたためか、それとも情勢としては大差ないと判断したためか判然としない。主人公達が急がなくても歴史的には大した違いはなかったのである。

「三月四日フランス人はベルリンを去った。国王が最後までためらって、しぶしぶ承知した『解放戦争』への熱狂は途方もないものであった。(フリードリヒ・ヴィルヘルム三世が署名したくなかった)志願兵の申し出への呼びかけに全ての教室が従った」[注 3]。

また「国王との葛藤」に関しては、プロイセン貴族には独自のプライドがあったことが窺える。歴史的にはヒトラーの時代までには、このプライドが次第に減少したのかもしれない。「つまりバメはかの絶対主義の下で育った軍事上の貴族のグループに属していて、このグループでは枢密の命令に基づくものは何でも行いかねず、国王の秘密指令の下、ようやく本格的に機能するような者達であったのである。そのような風にベルントは将軍を理解していた。しかし彼は二つの点を見過ごしていた。一つは彼の強力に刻印された郷土愛で、この愛は、傷付けられるといつでも我らの貴族にとってはいずれにせよ馴染みの文、『我らはホーエンツォレルン家[プロイセンの王家、マルク地方は 1411 年以来]より古い』に高揚し得るものであったし、次にそもそも大胆な行為、冒険への彼の嗜好があったのである」(S.287)。

ともあれ『嵐の前』の後ではプロイセンは順調にヨーロッパでその位置を確保し、第二次世界大戦では過去を忘れ、ナポレオンの真似をしてロシアを攻め、ナポレオンと同じ目に遭っている。かつての貴族のプライドが周囲の将軍達には低下したのか、ヒトラー暗殺には失敗している。ここまでは英訳者の状況である。しかし二〇二〇年日本語訳を訳者が訳す段階では、ドイツ統一(一九九〇年)がなっている。これは様々な要因があろうが、最大の要因は、旧東ドイツの最上位の権力者に立ち向かう、国王よりも郷土愛のプロイセン魂が死に絶えていなかったことを示すものであろう。ベルリンの壁崩落(一九八九年)後のブランデンブルク門の感激は、国王フリードリヒ・ヴィルヘルム三世の一八一四年の凱旋に劣るものではない。

歴史的に見ればこのプロイセンの不撓不屈の活躍に明治政府が感銘を受け、伝統的に日本ではドイツ語教育が高等教育の場で行われて来た。それで訳者のように自在にドイツ語を話せない者でも、ドイツ語文法で学生を眠らせながら、どちらかと言うと反戦を称えて、無事教職を退き、年金生活に落ち着く事態も生じている。この小説を読んで、自分がなぜそのような生活が出来たのか、説明がある程度できるようになって、先にも記したように閻魔様を余り畏れなくなった。閻魔様がガムを噛みながら、日本の参謀本部制は元来どこのものかドイツ語で口頭試問されても大丈夫であろう。

二.　次に面白かった面について述べる。

二.1　プロイセンの情報

この作品はまずプロイセンのそもそもの歴史的由来が分かるという点貴重である。勿論三十年戦争のことは皇帝軍、諸侯軍とあって複雑で良く分からない。しかしそれも手際よく述べられている。しかし特に面白いと思ったのは、作中の牧師ザイデントプフとその論争相手法律顧問官トゥルガニーとの考古学的論争、ゲルマン主義対スラブ派と言おうかヴェンド族尊重の論争である。ブランデンブルクにスラブ語由来とおぼしき名前の村がある理由も納得でき、カントで有名なケーニヒスベルク等を含め、ポーランドの何とも難しい歴史的立場、また更にロシアの立場が記されていて、島国の日本とは違って地続きなだけに、歴史的緊張は大変なものであろうと想像できた。考古学論争では、一八〇〇年当時偽物の考古学遺品を捏造する者もいたようで、すでにそのような問題が存在することを面白く思った。大国ロシアはナポレオンに攻め込まれたとき、モスクワに火を放って、フランス軍の冬の宿営を困難にしたというから、構想が雄大である。今までは知識としては知っていたかもしれないが、訳してみると、実際にモスクワ大炎上を間近に見た気分である。

プロイセンについては、一応国王の名前を復習しておこう。この『嵐の前』で大王につながる系譜で大事なのは大選帝侯[1620-1688]らしい。次代がプロイセンの王となったらしく、フリードリヒ一世[1657-1713]、その次が大王の父フリードリヒ・ヴィルヘルム一世[1688-1740]。それから誰もが知っている、フリードリヒ二世、即ち大王(1712-1786)、次が素人には紛らわしい、フリードリヒ・ウィルヘルム二世(1744,王位 1786-1797)、そして『嵐の前』の王はフリードリヒ・ヴィルヘルム三世(1770,王位 1797-1840)である。三世の妻はルイーゼ王妃(1776-1810)で、とても人気があったことは訳者も知っていた。ジャン・パウルがルイーゼ王妃の四人の姉妹に『巨人』の献呈の辞を書いているからである。しかし没年を計算すると随分若くして亡くなっている。大王はそもそも一般的に人気があって、その飾り気のない人柄は作中でも描写されているが、それでもやはり人間の世の中、不満に思う貴族もあったらしい。その貴族に慕われていたのがハインリヒ王子で、作中ベルントのグーゼの姉はその宮廷に出入りしている。この作品で初めて知ったこの王子の評価はバメの言が適切であろう。

「ちなみにいつも変わらぬ真理は、『コピーほど悲しいものはない』だ。ハインリヒ王子は何故挫折したのか。向こうの[グーゼの]伯爵夫人は亡くなられた。それで友情を毀損する恐れなしにこの問いに対する答えを述べられるかもしれない。彼が挫折したのは単純に彼が結局は『ほとんど自分の兄[フリードリヒ大王]』に他ならなかったという事実のせいなのだ。それで私は老フェルディナント[大王の末弟]を称える。貴方が、フィッツェヴィッツよ、最近ヨハネ騎士修道会の宮殿に訪問した方だ。神は御承知だが、彼は大したものではなかった。しかし彼は少なくとも彼自身であったのだ」(S.555)。

大王自身のエピソードでは、若い頃逃亡事件を引き起こして、友を処刑されている(Vgl.S.662, S.189)。

二.2　様々な身分

この小説の魅力は単に貴族の生活が描かれているだけではない、という点である。視点が社会の乱数表に従っているかのように、底辺から上辺、中辺へと変わって行く。

まず底辺の代表者はホッペンマリーケンであろう。『ブリキの太鼓』の主人公が成長を

止めた子供と記されているが、それと同じようにホッペンマリーケンは成長を止めた女性で、占い師の魔女風に描かれており、ホーエン・フィーツのいわばスラムの森耕地に住んでいる。彼女の生業は郵便配達であるが、裏で盗品故買もしている。それで裁きを受けることになるが、主人公レーヴィーンが大目に見るよう弁護している。そしてこのマリーケンが、主人公が虜囚となったとき、脱出用の巻き玉を届けるのである。彼女は情報と売買を絡ませている点で現代社会の先取りである。

次に百姓達の生活も描写されている。

「今日も、一八一二年のクリスマス、何人かの百姓の名士達が、皆五十代半ば、あるいはそれ以上の男達であったが、[居酒屋の]客室に集まっていた。四人であった。一フーフェ百姓[七から十五ヘクタール所有]のキュメリッツ、一・五フーフェ百姓のカリース、一フーフェ百姓のレーツケ、一フーフェ百姓のクルルで、皆真のホーエン・フィーツ人で、思い描けないような古い時代からこの地に居住していて、フィッツェヴィッツ家の人々と共に昔のヘーエンドルフ[高台村]に住んでいて、そこを去り、その上また彼らと一緒に良き時代、悪しき時代を過ごして来たのであった」(S.55)。一フーフェ百姓というのは辞書を頼りに訳したが、辞書通りだとすると、日本人の感覚では大変広い耕地所有者ではなかろうか。明らかに「小百姓や小屋住まい」(S.699)とは違うと思われる。作中では何度か「百姓の誇り」(bauernstolz S.183,S.508)という表現を見たが、宜なるかなである。

また村には百姓の畑の他には水車小屋があるくらいであるが、この水車小屋に関して面白いエピソードも紹介されている。ベルリンの市民のパーティーでの発言の一例。「しかし我々は復活しなければならないのです。何故か。我々は正義を有するからです。これが肝心です。正義ハ帝国ノ基本ナリ。全古代史、全近代史の中でサン・スーシの水車小屋や、粉屋アルノルトの裁判のような例を示して頂きたい[フリードリヒ大王は宮殿近くの水車小屋を停止させようとしたり、直訴した粉屋に便宜を図ろうとしたが裁判官に抵抗された]。最高裁判所です、皆さん。『ベルリンにはまだ裁判官がいる』と我々の敵でさえ認めました」(S.347)。往時のベルリンの裁判官は大王に忖度しなかったわけである。

次に市民について

貴族のバメは勇気が貴族の専売特許ではなくなっていると認めている。「少なくとも一つのことだけは我々が独占していると思っていた。勇気だ。しかしあの白子のグレルがやって来て、手にサーベルを持って、英雄のように死んだ。教頭については言うまでもない。このような死を前にしては古い兵士[古武士]も畏れ入るものだ。こうしたことすべてはどこから来たか。貴方は御存じだろう。向こうからだ。西風だ。フランス人の風袋野郎は大したものには思えない。しかし奴等の詰まらぬ話しにはいつも一片の真理がある。彼らの友愛は大したものにならないだろう。自由もそうだ。しかし彼らがその間に置いたもの[平等]には、何か大したものがある。だって、結局は、人間は人間であるに他ならないのだから」(S.706)。[向こうからだ]には dtv 版の注釈があり、「フランス革命は軍における身分的偏見を廃止した。ナポレオンの下で貴族でない者も勇敢さや実績に基づいて最高の将校職に就けるようになった」と記されている。『嵐の前』ではベルントの部隊は、村長、レーヴィーン、トゥーバルが百姓達を率いている。その中には強者キュメリッツもいるのである。シラーの『群盗』でも貴族のカールは自分で首魁に収まっている。

司馬遼太郎氏は明治憲法制定の経緯についてこう感想を述べている。「憲法をという機

運は明治十年代からあり、さまざまな検討がおこなわれたが、結局はドイツの後進性への親近感が勝った。

フランス憲法については”過激”すぎるという印象だったし、英国については、わずかに大隈重信がかの国を参考にせよといったぐらいだった。

ドイツについては、ひいきというよりも、安堵感だったろう。ヨーロッパにもあんな田舎くさい　ー　市民精神の未成熟な　ー　国があったのか、とおどろき、いわばわが身にひきよせて共感した」[『この国のかたち』三、ドイツへの傾斜、26 頁以下。文春文庫]。

二.3　文学論

主人公のレーヴィーンは文学青年である。同人誌「カスタリア」誌の会長役[S.574]のようで、先の会員にはド・ラ・モト・フケー[S.378 Freiherr de la Motte Fouqué(1777-1843)]がいたということになっている。『嵐の前』では文学論は段々と深まっているようである。

まず序盤では村の牧師宅で基本的文学の基礎が提示される。地方詩人の狭隘さが指摘されている。左程文学素養はまだないが、センスの良いマリーによってこう指摘される。「やってみましょう。詩人というものは万物の鏡であるべきです。でもシュミットは何も写していません。彼はただ自然そのものを差し出します」(S.113)。

次は若干高度になって、レーヴィーン本人が付き合いのある文学者ファウルシュティヒに対して批判の目を向けている。

「それにファウルシュティッヒは山の奥に隠れていない。彼は率直に自分の享楽主義を認めている。最も軟弱な快適志向で、これは義務の遂行とか定言的命令とは全く別物だ。彼はただ自分自身を知っているだけだ。すべての偉大な行為は、単に詩的素材として、彼の興味を引くにすぎない。詩的衣装として最も好まれているにすぎない。アルノルト・フォン・ヴィンケルリート[一三八六年自らを犠牲にしてスイスのために戦った]のバラードには彼は涙を流すほどに感動することだろう。しかし一緒に銃剣突撃をするかとなると、彼の性情にとっては不快でかつ滑稽なものと見えることだろう」(S.194)。

「カスタリア」誌で合評される詩作はそれぞれ立派なもので、戦役についての日記、記録、「プラー近郊の戦い」、「ボロジノ」は本の中の本という趣向で、トルストイと比較されるべきものとなっている。

ただ文学論として最後に文句なく合格点とされるのは、ヘルダーリンの詩である。ヘルダーリンは二十世紀に再発見されたものという思い込みが訳者にはあって、この作品でヘルダーリン称賛を読んで驚いた。フォンターネに評価される以上ヘルダーリンは十九世紀も詩人の王座にあったわけである。

ハンゼン・グレルはヘルダーリンの『パルカ（運命の女神）に寄せる。(An die Parzen 1798)』を読み、レーヴィーンにこう言う。＜「これはアルカイオスの詩節です。構造、形式、古典的です。それでいて、そこからロマン主義的に響いて来ます。冥界とか、古典性のすべての影の世界、神々の世界にもかかわらず」＞(S.485)。

＜ハンゼン・グレルは立ち上がった。短い藁色の髪と赤みがかった瞼をした彼の不細工な顔が内部からの本当の美しさで変容した。「歌であれ、恋であれ、また自由であれ、祖国であれ、一度神々のように生きて、それから　ー　死ぬことです。やがて死ぬ、思い出の偉大な感情が色褪せぬうちに」＞(S.486)。

ハンゼン・グレルはフランクフルト襲撃の時に、戦死し、後に墓碑が造られる。「レーヴィーンの到着の一時間前に、グレル用に決められていた墓石の荷を解いていたのは、奇妙なことだった。小さな大理石。名前と日付とヘルダーリンの詩行を読んだときには、心動かされた」(S.709)。日本文学で言えば、平家物語の忠度の詩文への執着[生涯の面目に、一首なりとも]を思い出させる。「その身勅勘の人なれば名字をば顕されず故郷の花`といふ題にて詠まれたりける歌一首ぞ詠み人知らずと入れられたる。/　さざ浪や志賀の都はあれにしをむかしながらの山ざくらかな」。

レーヴィーン本人も詩作している。内容は日本語で言えば、「明けぬ夜はない」、「冬来たりなば春遠からじ」程度のものであるが、詩は苦手な訳者でも、記憶し易いものである。

案ずるなかれ、時は速い、/　どんなに苦しい目に遭おうとも、/　最悪のものさえ、長くはない。　別な一日がやって来る。//　永遠の無常迅速の中、/　苦しみもあれば、喜びもある。/　楽しい日々の思い出も、/　いつかおまえの許に戻って来る。//　待機も、希望も、空しくはない、/　時の拍子を数えることだ。/　変遷が人生の定め、/　見よ、別な一日がやって来る。(S.368f.)

二.4　女性論

フォンターネの他の長編小説は、読んでいないので、何とも言えないのであるが、イメージとして恋愛心理が主であるように思われる。訳者には何となく「面倒クサク」思える主題である。ここでは「この作品限定で」窺えるフォンターネの女性観を紹介する。

ヘルンフート派のショルレンマー叔母[家政婦兼家庭教師]はレナーテと次のような会話を行っている。グリーンランド人の話しである。

＜「ちなみにこれらの精霊の中で良き精霊は男性で、悪しき精霊は女性なのです」。

「あらあら。でもそれでは女性に対する優しさに欠けますよね。罵りの言葉や叱る言葉さえ有しないグリーンランド人のような洗練された人々というのに、驚いてしまうわ」。

「レナートヘン、そうなんです。私ども女性は辛抱して受け入れなければなりません。いつでも誘惑して、楽園から追放するのは、イヴですからね」＞(S.256)。

また恋人カティンカに振られた息子レーヴィーンを検分するときの父ベルントの言葉。

「腰かけなさい、レーヴィーン。他のことについて語る前に、おまえのことについて一言。女性達の前では語りたくなかったのだ。女性達には余りそのことを聞かせてはならん。すぐに自惚れるからな。女性達は皆支配したがる。女達は我々男に影響力があることを喜ぶのだ。その点女性は皆同じだ。永遠に我ら男性に静かな共謀をしている」(S.548)。

作品中ではレーヴィーンとレナーテの恋愛が中心となっているのであろうが、それは読者に直接読んで頂くことにして、点景として添えられた恋愛風景をここでは紹介しておきたい。

二人の女性の行動が映像に残る。夫にしてみれば、とんでもない光景であるが、読者にとっては何となく可笑しい。まず貴族ドロッセルシュタインの妻の最後の行為。「忘却の睡魔に襲われながら、同時に病気の妻の行動を妨げてはならないという漠然とした思いを抱いて、彼は自分の背もたれの椅子から動かないでいた。彼は今や、彼女が戸棚から一つの小箱を、そしてその小箱の隠された引き出しから赤い紐で一束に結ばれた何通かの手紙を取り出すのを見た。彼女はまた歩いて戻って来て、彼の側を通り過ぎ、彼の眠っている

のを確信した風で、それから暖炉の方へ向かった。彼女は手紙を唇で触れて、紐を解き、それぞれ一通ずつすべて用心深く、炎が余りに明るく燃え上がらないように、半ば消えていた炎の中へ投じた。すべてが燃え尽きると、彼女は臥所に戻って、掛け布団を被り、不安の重荷から解放されたかのように大きく息をした。それは彼女の最後の行為であった。朝が来る前に彼女は亡くなった」(S.148)。

次はレーヴィーンを子供扱いしたカティンカと、それにレナーテに愛を告白した後で、マリーにもよろめいたトゥーバル、両兄妹の母が夫の許から去る狩の日の行為。「ただフォン・ラダリンスキー夫人は残っていて、ミークシュ伯爵も彼女の側にいた。両人はこの日の栄光の断念を欲しているかのように見えた。しかし間もなくこの図柄が変わった。ますます多くのカップルが最前列から離れて行くにつれ、一時間もしないうちに、伯爵とその連れの夫人のみが、その狩を続行する、あるいは続行するように見える、唯一のカップルとなっていた。残っている者達は、二人を見送りながら、両騎乗者の辛抱に惚れ惚れとしていた。二人の姿は、青い薄明かりの中の小都市に近付くにつれ、ますます小さく、ますます影のようになっていった。最後に二人は全く消えた」(S.326f.)。

二.5　ベルリン大学での授業。

レーヴィーンはベルリン大学の学生である。「すでに学期を重ねていて、秋からは、三学年課程を終えていて、後はただ格別自分に気にいるものとか、自分が自由に使いたい一日の邪魔にならない時間割のものを聴講すれば十分ということになっていた。それで彼はサヴィニー[Karl von Savigny(1779-1861)]とテーア[Thaer(1752-1828)]、フィヒテ[Fichte(1762-1814)]を聴講していた。三人とも皆火曜日と金曜日で、それも経過順に並んだ時間に講義していた」(S.370)。いずれも当時の有名教授である。サヴィニーは法学者であるが、その女性関係でドイツ文学史ではロマン派の項目で触れられる。確か Karoline von Günderrode の初恋の人で、ブレンターノの妹と結婚している。次のテーアは農学者。その著書は九州大学図書館にあり、訳者はその授業の概論を『農学事始』としてリポジトリに登録したことがある。フィヒテは有名な哲学者。ジャン・パウルがその哲学をからかって『フィヒテ哲学の鍵』という小著を書いており、これも訳者は訳したことがある。従ってこの三人の授業科目を訳したときには少々驚いた。大学の側の道はウンター・デン・リンデンで鴎外の『舞姫』で日本人には馴染みである。本書が鴎外によって訳されなかったのが、不思議に思えるほどである。

二.6　一発芸紹介

フォンターネの文章は訳してみて、十分に注意深い、違いの分かる男の文章であることが分かる。例えば次のような何気ない文を書ける人物は少ないというか、ノックにこれほど注意深い日本人は少ないであろう。昔の流儀で言えば、襖の裏に人の気配や殺気を感ずるようなものであろう。＜彼が丁度必要な上書きを記入し始めたとき、外の廊下で丁寧に身繕いをし、すぐその後ドアをノックする音を耳にした。十分に音高くなく、作法にかない、十分に音高く、不安げでなかった。

「お入り」、それは予期されていた人物であった＞(S.213f.)。

違いの分かる男は会話、スピーチの達人である。この本には一杯そのネタ、一発芸が発

揮されているが、解説だけ読んで、本を読まない人も多いと思うので、一例引いて置く。

＜「長かろうと、短かろうと、グレルよ、貴方はいつでも歓迎だ」。

「分かりました。お話しします。我らの尊敬する大尉の目配せ王への偏愛、それにこう表現して良ければ、大尉が国王を紹介された時の対象の具体性というもののお蔭で、一気に陽気な黄金の門が開きました。しかし私は今一度真面目な話しをします。私どもの近世の歴史では、皇帝や国王について語るときは、今や数字が流行です。一世とか二世、三世、それに十四世や十五世。数字が支配して、それと共に、この上ない素っ気ないもの、詩的でないもの、無性格なものが生じています。これに対して私の古代スカンジナビア国王の名前は、響きにしても内容にしても、強調するとこの内容にしても、詩的大地の上にあり、これが私にとっては得難いものとなっています。エピグラム[警句]よりも、エピグラム的です。そして同時にこうした名前の多くは詩のようなもので、それぞれの場合に応じて、感動的もしくは感銘的なものです。御自分で判断してください。私はただ二つの名前を挙げましょう。オーラフ・フンガー[空腹王]とヴァルデマル・アダデーイ[他日王]です。人物とか時代をただ一つの言葉でこれ以上鮮明に克明に描くことができましょうか。二度と忘れられるものではありません。オーラフは立派な国王でした。しかし国は不作と疫病で長患いしました。国王の祈りも、自らを民のために犠牲にするという国王の明白な意志も、この不吉を消すことはできず、恵みに変えることなどできなかったのです。それでこの国王は、デンマーク史を繙けば、呪いの時代、困窮と死の時代を意味します。そしてその幽霊的イメージは、無邪気に恐ろしい署名オーラフ・フンガー[空腹王]を有するのです」。

「我らの朝食に立派な四旬節[断食節]の説教だな。空腹王はもういい、グレル。もう一つの名前はどうなのだ」。

「まさにその反対です」。

「有り難や」。

「彼は美しくて、戦いに勝ち、女達を愛しました」。

「それは良い奴だ」。

「しかしそれ以上なのです。彼は陽気で、善意でした。若い頃は自らの情熱や他人の助言で激しい行為に導かれていました。しかし大人となると、若い頃の性急さを後悔し、もはや今からは苛酷なこと厳格なことは何もしないと誓ったのです。彼の廷臣達がせっついて、素早い宣告を、例えば死刑といったものまで要求しても、頭と手を軽く振って、ただこう言ったのです。『アダデーイ』、すなわち『別の日[またの日]』です。豊かな恵みの宝角がこの一つの言葉から溢れました。アダデーイはデンマークでは今この時まで良い響きとなっています」＞(S.415f.)。

スピーチの極意は「受ける、受けない」に余り頓着しないことらしい。バメの観兵式での訓示である。

＜バメは不安に思っていなかった。話す術は、自分の話しが受けようが受けまいが気にしない者達のように、心得ていた。(S.625.中略)

「承知した。しかしへこたれるな。意気地なしは頭に弾を食らうぞ。私は冗談が好きだが、しかし真剣になると、冗談は出ない。ただ進めだ。合い言葉は、『ツィーテン』と言ったら、『ホーエン・フィーツ』だ。奴等には真似できない。...奴等をやっつけるのは誰

だ。奴等とその皇帝を」。

「はい、我々です」。

「違う、『郭公』がやっつけるのだ」とそう言って、彼は自分の側に立っているバルニムの旗手達の小さな連隊旗を示した＞(S.626)。

二.7　トイレの欠如

『嵐の前』では建物の描写は丁寧になされていて、間取りが大体わかるようになっている。しかしバス・トイレがないのである。バスは冬の間のことであるし、余り問題にならないとしても、トイレの欠如は不思議でならない。ホーエン・フィーツやグーゼの城にしろ、ホッペンマリーケンのいわばスラムにしろ、トイレがない。レーヴィーンが虜囚となったときも、コーヒーまがいは出ても、この塔の「白頭台」にはトイレがない。トイレは例えばジャン・パウルの場合、『匿名の場』と呼ばれたりして存在し、気球船に乗るジャンノッツォは気球船から小便をしている。『ヘスペルス』の侯爵の主要な関心事はお通じであり、薬店主は浣腸の機会を心待ちにしているのである。トイレの問題はテーアの『農学事始』でも触れたことがある。テーアは牛糞や馬糞の活用を計算に入れているのであるが、人糞は考慮の他で、人糞については、「日本的肥料」として別の書で言及されるのみである。ベルサイユ宮殿にトイレがなかったらしいのは有名な話しである。フォンターネは詩的リアリズムと呼ばれるが、トイレの欠如をもって詩的、トイレの存在をもって自然主義と考えているのであれば、余り学問的ではない。

トイレで最後が終わるのは何なので、トイレを必要とする原因になるものを挙げておこう。主に飲まれているのを挙げる。最近は日本のスーパーで手に入るものもあり、ワインに関しては日本産のものも美味しく、隔世の感がある。「シェリー酒、 ポート・ワイン、ハンガリー・ワイン[Ruster Ausbruch]、チェリー酒[マラスキーノ]、ライン・ワイン、モーゼル・ワイン、ラウエンタール・ワイン、リープフラウミルヒ、シャンパーニュ[ヴーヴ・クリコ]、シャブリ、シャトー・ディケム、グラーヴ・ワイン」。

注

1) Günter der Bruyn:Die Zeit der schweren Not. Schicksale aus dem Kulturleben Berlins 1807 bis 1815. Fischer.2013. die Konflikte mit dem König (S.214), Hardenberg, (S.209), Festungshaft (S.204).

大王の簡素な行幸については Günter der Bruyn: Als Poesie gut. Fischer. 2009. S.55f.

屋敷の火事の体験については dtv. S.403 の注参照。

2) Translated by R.J.Hollingdale:Theodor Fontane:Befor the Storm
A Novel of the Winter of 1812-13. Oxford Unversity Press. 1985

3) Ursula Naumann: Schillers Königin. Insel tschenbuch 2006. S.312

あとがき

本書の訳出の経緯は解説に書いた通りである。翻訳に当たっては英訳本を参照したほか、校正のとき、『ノルデン』に、1999 から年から 2002 年にかけて掲載された渋谷壽一訳の『嵐の前』を参照した。大変参考になった。また最後に、フォンターネ協会を通じて、『嵐の前』の最新版の編集責任者の Christine　Hehle 博士を紹介して頂き、10 ほどの質問を行い、明快な解答を頂いた。いずれも感謝申し上げる。

本にしたかったが、諸般の事情で難しいと分かった。リポジトリに発表できるだけでも、幸せと考えるべきであろう。

校正が面倒な年になって、色々至らぬ点があろうかと思う。次の翻訳でも、「あとがき」を書ければ、幸せと思う。

2020 年 9 月中旬　　恒吉法海